熊本県文化財調査報告　第102集

# 山田城跡

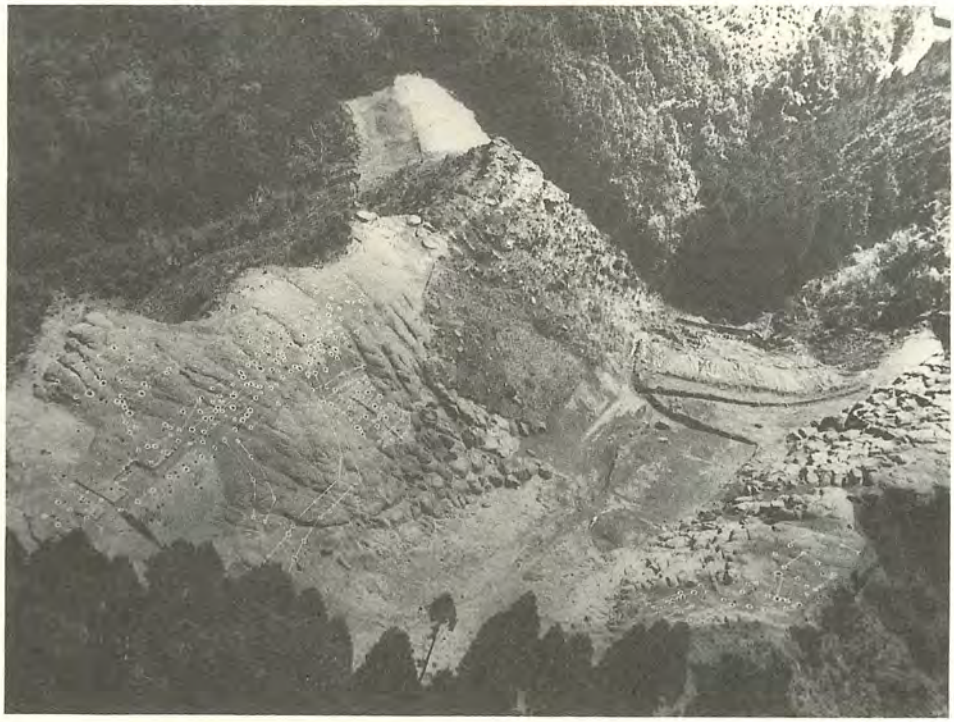
九州縦貫自動車道（八代～人吉間）建設に伴う埋蔵文化財調査

一九八九年　熊本県教育委員会

熊本県文化財調査報告　第102集

# 山田城跡

―― 熊本県球磨郡山江村大字山田字大王谷所在の中世城 ――



1989年3月31日

熊本県教育委員会

# 序　　文

熊本県教育委員会では、日本道路公団の九州縦貫自動車道（八代人吉間）建設に伴い、昭和57年11月から路線予定地内の埋蔵文化財の発掘調査と整理を進めて参りました。

ここに報告する熊本県球磨郡山江村大字山田字大王谷所在の中世城跡『山田城跡』は、昭和60年度末から61年度中旬にかけて発掘調査を実施し、昭和63年度に報告書作成を行ったものであります。

調査の結果、調査区山中の迫地から２期の整地層と一枚の文化層が検出され、東西両尾根の岩場（凝灰岩）からも、岩盤を掘り込む建築址が検出される等、大きな成果を得ました。主な出土遺物は中国産の青磁・白磁をはじめとして、備前・常滑焼の大甕、瓦質擂鉢、武具類の鉄器等があり、最終的に山田城跡は考古学的な所見から南北朝時代の山城である事が判明し、文献史料（中世文書）との一致を見ました。

この報告書が、埋蔵文化財の保護に対する認識を深め、学術・研究上の一助に成れば幸いです。

発掘調査に際しましては、多方面で日本道路公団福岡建設局人吉工事事務所から御配慮を賜り、感謝致しております。さらに、城跡所在地の球磨郡山江村では、村長・教育委員会・地元の方々からの多大な御協力があり、専門調査員の先生方からは適切な御指導がありました。

ここに心から厚くお礼を申し述べます。

平成元年３月３１日

熊本県教育長　松　村　敏　人

# 「九州縦貫自動車道」人吉工事について

人吉工事の施工区間は、「九州縦貫自動車道　八代～人吉間（42.9km）」の終点側で、人吉盆地の西方に位置する球磨郡山江村山田地区の丘陵地から人吉市に入り、球磨川を挟む堆積丘陵台地を南下し、人吉市郊外の国道219号線までの約8.3kmのうち実延長約5.5kmの区間である。

工事の概要としては、八代～山江村山田のトンネル・橋梁等を主体とした山岳地帯の区間とは異なり、山江サービスエリア・人吉インターチェンジを含み、約200万$m^3$の土を動かす純土工工事である。

地質的には、起点側の山田地区は、礫岩・砂岩・泥岩より構成される半固結状の新第三紀層の人吉層及び新第四紀の高熔結凝灰岩（加久藤火砕流堆積物）から形成されている。また人吉インターチェンジから国道219号線までは火山灰土（シラス）で形成されている。

八代～人吉間の埋蔵文化財分布９箇所のうち８箇所が当工事区間内に分布している。今回の『山田城跡』は山江サービスエリアから約1.2km人吉インターチェンジ寄りに位置しており、前記のごとく、人吉層の上に高熔結凝灰岩が形成されている山田城跡の東側尾根と西側尾根及び迫地（文化財発掘調査地）を深さ20ｍ～40ｍ掘削し、人吉インターチェンジ側に搬出する区間である。

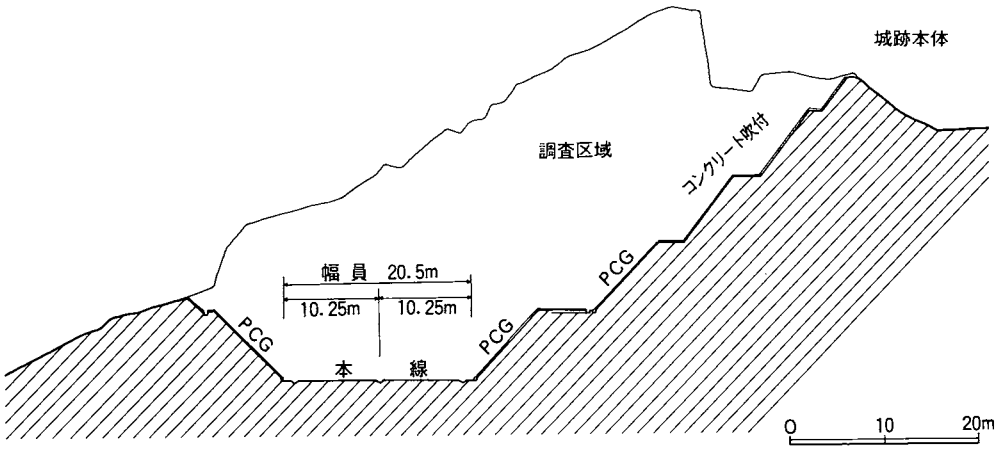
最後に、県文化課の適切なる発掘調査計画の基に工事工程との調整を行い、支障なく工事を遂行でき、進捗率も約97％に達しており、現在、一部工区の工事を残すのみである。

平成元年３月３１日

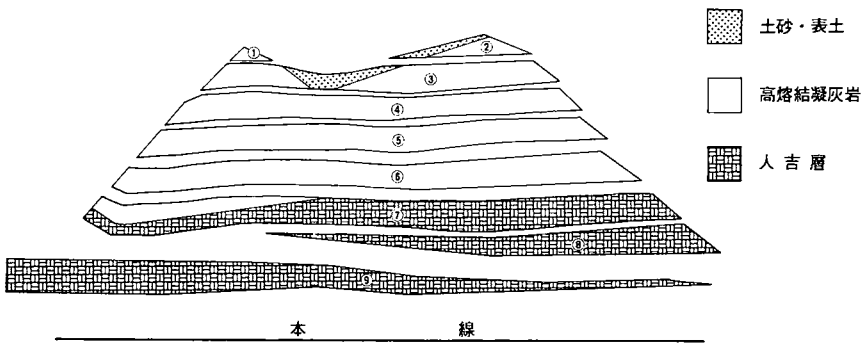
日本道路公団福岡建設局
人吉工事事務所人吉工事長　安　岡　東　一

| 項　　目 | 設　　計　　基　　準 |
|---|---|
| 規　　格 | 第１種３級・Ｂ規格 |
| 設 計 速 度 | ８０Ｋｍ／時 |
| 本 線 幅 員 | ２０．５ｍ（用地４車線，工事２車線・工事４車線） |
| 平 面 線 形 | 最小曲線半径　Ｒ＝７００ｍ |
| 縦 断 線 形 | 最急縦断勾配　ｉ＝３．０％ |

【 構 造 及 び 線 形 】




【ＳＴＡ354＋60地点横断図】




【山田城跡付近土層図】

① 高熔結凝灰岩で構成された法面で、柱状節理はそれほど発達していないが、一部、表離している部分も見え、落石している。また法面上部には表土も見える。

② 高熔結凝灰岩で構成された法面で、柱状節理はそれほど発達していない。

③ 高熔結凝灰岩で構成された法面で、柱状節理が発達しており地層走向も有る。また、法面中央部には土砂が有る。

④ 高熔結凝灰岩で構成された法面で、柱状節理及び地層走向ともに発達している。

⑤ 高熔結凝灰岩で構成された法面で、柱状節理が発達しキレツも多い。

⑥ 高熔結凝灰岩で構成された法面で、柱状節理が発達しキレツも多い。

⑦ この法面は、上部に高熔結凝灰岩、下部に人吉層で構成されている。高熔結凝灰岩は柱状節理が発達し、キレツも多く小岩塊～大塊にブロック化している。また人吉層は礫岩・砂岩・泥岩の互層で単斜構造となっている。

⑧ 人吉層で構成された法面で、礫岩・砂岩・泥岩の互層で単斜構造となっている。

⑨ 人吉層で構成された法面で、礫岩・砂岩・泥岩の互層で単斜構造となっている。

# 例　　言

1．本書は、日本道路公団の九州縦貫自動車道（八代～人吉間）建設工事に伴い、事前に実施した埋蔵文化財調査の報告書である。

2．発掘調査を実施した遺跡は、熊本県球磨郡山江村大字山田字大王谷・下城子に所在する中世城跡「山田城跡」で、日本道路公団福岡建設局からの委託を受けて、熊本県教育庁文化課が行った。

3．発掘調査は昭和60年度末から昭和61年度の中旬に実施し、整理・報告書作成は昭和63年度（一部は昭和62年度）に行った。出土遺物・資料は熊本県教育庁文化課で保管している。

4．発掘調査は、大田幸博（文化財保護主事）・黒田裕司・菖蒲和弘・松舟博満（嘱託）・永田　満（臨時職員）がその任にあたった。

5．発掘調査過程の写真撮影は大田・黒田が行い、整理後の出土遺物写真撮影は横山高明氏（熊本光画会員）が行った。

6．出土遺物の実測は、大田が担当したが、石製品と縄文時代の石器は松舟が担当し、縄文時代の土器及び歴史時代の遺物は松尾葉子(嘱託)・網田龍生・岩崎充宏・吉内素子・山下志保・森久直（昭和62年度熊本大学文学部考古学研究室）の協力を得た。遺構及び遺物の製図は、石工みゆきと溝口真由美（臨時職員）が行った。

7．本書の執筆は、大田がこれにあたったが、第Ⅱ章第1節と、巻末の「鎌倉・南北朝期の山田村」・「山田城跡」史料編は菖蒲が担当した。

8．「九州縦貫自動車道」人吉工事についての概要文は、日本道路公団人吉工事事務所人吉工事長の安岡東一氏の執筆によるものである。

9．山田城跡の路線外の遺構地形測量は、日本道路公団から御理解をいただき、主として菖蒲が昭和63年度に迫田洋子と尾方信子を測量補助員として実施した。なお一部について大田と永田が補測した。

10. 本書に使用した地形図・字図は、日本道路公団人吉工事事務所と山江村教育委員会・山江村役場経済課・総務課からの提供によるものである。

11. 題字は田村俊明山江村長による。

12. 出土遺物については、大三輪龍彦・三島　格の山田城跡専門調査員の先生方や矢部良明氏（東京国立博物館陶磁室長）から御教示を得た。

13. 城跡出土の$^{14}$C年代測定は京都産業大学理学部の山田　治教授に依頼した。

14. 出土遺物の整理は、仮設の熊本県文化課人吉調査事務所で行い、事務所敷地については、熊本県衛生部と人吉保健所の協力を得た。

15. 本書の編集は、大田が行い、溝口・石工の協力を得た。

# 本 文 目 次


第Ⅰ章　調査の概要…… 1

第１節　調査の組織……1

第２節　調査に至る経緯……2

第３節　調査の方法と経過…… 3

第４節　遺跡の位置と地理的環境…… 4

第Ⅱ章　遺跡の概要…… 8

第１節　山田城跡の歴史的環境…… 8

第２節　山田城跡の概要…… 12

第Ⅲ章　調査の成果…… 14

第１節　遺構の概要…… 14

第２節　第Ⅰ期整地層の調査結果…… 19

第３節　第Ⅱ期整地層の調査結果…… 41

第４節　第Ⅲ期文化層の調査結果…… 60

第５節　東側尾根の調査結果…… 71

第６節　西側尾根の調査結果…… 96

第７節　南東側張り出し尾根の調査結果……104

第８節　調査区の土層断面……112

第Ⅳ章　出土遺物……125

第１節　第Ⅰ期整地層出土の遺物……125

第２節　第Ⅱ期整地層出土の遺物……155

第３節　第Ⅲ期文化層出土の遺物……200

第４節　東側尾根及び西側尾根出土の遺物……215

第５節　南東側張り出し尾根出土の遺物……215

第６節　縄文時代の遺物……220

第Ⅴ章　路線外城域および周辺の調査……223

第１節　路線外の城域について……223

第２節　山田城跡周辺の社寺堂宇について……231

第Ⅵ章　総括……235


# 挿 図 目 次


第１図　山田城跡位置図…… 5

第２図　人吉盆地地形図…… 6

第３図　山田城跡周辺地形図…… 7

第４図　山田城跡周辺遺跡分布図…… 9

第５図　山田城跡周辺の地形図と字図……11

第６－１図　山田城跡・縄張り基本図……13

第６－２図　大王谷・下城子地籍図……13

第７図　山田城跡・調査区域図……15

第８図　山田城跡調査区全体遺構図…… 17
第９図　第Ⅰ期整地層遺構実測図…… 22
第10図　Ｖ１－ＳＢ０１実測図…… 25
第11図　Ｖ１－ＳＢ０２実測図…… 26
第12図　Ｖ１－ＳＢ０３実測図…… 27
第13図　Ｖ１－ＳＢ０４実測図…… 28
第14図　Ｖ１－ＳＢ０５実測図…… 29
第15図　Ｖ１－ＳＢ０６実測図…… 30
第16図　Ｖ１－ＳＢ０７実測図…… 31
第17図　Ｖ１－ＳＢ０８実測図…… 32
第18図　Ｖ１－ＳＢ０９実測図…… 33
第19図　Ｖ１－ＳＢ１０実測図…… 34
第20図　Ｖ１－ＳＢ１１実測図…… 35
第21図　Ｖ１－ＳＢ１２実測図…… 36
第22図　Ｖ１－ＳＢ１３実測図…… 37
第23図　Ｖ１－ＳＢ１４実測図…… 38
第24図　Ｖ１－ＳＢ１５実測図…… 39
第25図　集石１実測図…… 40
第26図　集石２実測図…… 40
第27図　第Ⅱ期整地層遺構実測図…… 42
第28図　Ｖ２－ＳＢ１６実測図…… 46
第29図　Ｖ２－ＳＢ１７実測図…… 47
第30図　Ｖ２－ＳＢ１８実測図…… 48
第31図　Ｖ２－ＳＢ１９実測図…… 49
第32図　Ｖ２－ＳＢ２０実測図…… 50
第33図　Ｖ２－ＳＢ２１実測図…… 51
第34図　Ｖ２－ＳＢ２２実測図…… 52
第35図　Ｖ２－ＳＢ２３実測図…… 53
第36図　Ｖ２－ＳＢ２４実測図…… 54
第37図　土器溜め１実測図…… 55
第38図　土器溜め２実測図…… 56
第39図　野鍛冶跡実測図 …… 57
第40図　野鍛冶跡実測図及び断面図…… 59
第41図　ＳＫ０１実測図…… 59
第42図　野鍛冶跡断面図…… 60
第43図　第Ⅲ期文化層遺構実測図…… 62
第44図　Ｖ３－ＳＢ２５実測図…… 65
第45図　Ｖ３－ＳＢ２６実測図…… 66
第46図　Ｖ３－ＳＢ２７実測図…… 67
第47図　Ｖ３－ＳＢ２８実測図…… 68
第48図　Ｖ３－ＳＢ２９実測図…… 69
第49図　Ｖ３－ＳＢ３０実測図…… 70
第50図　東側尾根遺構実測図…… 74
第51図　Ｅ－ＳＢ３１実測図…… 77
第52図　Ｅ－ＳＢ３２実測図…… 78
第53図　Ｅ－ＳＢ３３実測図…… 79
第54図　Ｅ－ＳＢ３４実測図…… 80
第55図　Ｅ－ＳＢ３５実測図…… 81
第56図　Ｅ－ＳＢ３６実測図…… 82
第57図　Ｅ－ＳＢ３７実測図…… 83
第58図　Ｅ－ＳＢ３８実測図…… 84
第59図　Ｅ－ＳＢ３９実測図…… 85
第60図　Ｅ－ＳＢ４０実測図…… 86
第61図　Ｅ－ＳＢ４１実測図…… 87
第62図　Ｅ－ＳＢ４２実測図…… 88
第63図　Ｅ－ＳＢ４３実測図…… 89
第64図　Ｅ－ＳＢ４４実測図…… 90
第65図　Ｅ－ＳＢ４５実測図…… 91
第66図　Ｅ－ＳＢ４６実測図…… 92
第67図　Ｅ－ＳＢ４７実測図…… 93
第68図　Ｅ－ＳＢ４８実測図…… 94
第69図　柱列実測図…… 95
第70図　西側尾根遺構実測図…… 97
第71図　Ｗ－ＳＢ４９実測図…… 99
第72図　Ｗ－ＳＢ５０実測図…… 100
第73図　Ｗ－ＳＢ５１実測図…… 101

第74図　W－ＳＢ５２実測図…… 102
第75図　W－ＳＢ５３実測図…… 103
第76図　南東側張り出し尾根遺構実測図 105
第77図　ＳＥ－ＳＢ５４実測図…… 106
第78図　ＳＥ－ＳＢ５５実測図…… 107
第79図　ＳＥ－ＳＢ５６実測図…… 108
第80図　ＳＥ－ＳＢ５７実測図…… 109
第81図　ＳＥ－ＳＢ５８実測図…… 110
第82図　ＳＥ－ＳＢ５９実測図…… 111
第83図　第Ⅰ期土層断面位置図…… 116
（東側尾根・西側尾根・南東側尾根）
第84図　第Ⅱ期土層断面位置図…… 117
第85図　第Ⅲ期土層断面位置図…… 117
第86図　Ｐ－１土層断面図①…… 118
第87図　Ｐ－１土層断面図②…… 118
第88図　Ｐ－１土層断面図③…… 119
第89図　Ｐ－１土層断面図④…… 119
第90図　Ｐ－３土層断面図…… 120
第91図　Ｐ－４土層断面図…… 120
第92図　Ｐ－５土層断面図…… 120
第93図　Ｐ－２土層断面図…… 121
第94図　Ｐ－６土層断面図…… 121
第95図　Ｐ－７土層断面図…… 121
第96図　Ｐ－８土層断面図…… 123
第97図　Ｐ－９土層断面図…… 123
第98図　Ｐ－10土層断面図…… 123
第99図　第Ⅰ期出土遺物の実測図①…… 130
第 100図　第Ⅰ期出土遺物の実測図②… 132
第 101図　第Ⅰ期出土遺物の実測図③… 136
第 102図　第Ⅰ期出土遺物の実測図④… 139
第 103図　第Ⅰ期出土遺物の実測図⑤… 140
第 104図　第Ⅰ期出土遺物の実測図⑥… 143
第 105図　第Ⅰ期出土遺物の実測図⑦… 145
第 106図　第Ⅰ期出土遺物の実測図⑧…… 148
第 107図　第Ⅰ期出土遺物の実測図⑨…… 149
第 108図　第Ⅰ期出土遺物の実測図⑩…… 152
第 109図　第Ⅰ期出土遺物の実測図⑪…… 153
第 110図　第Ⅱ期出土遺物の実測図①…… 164
第 111図　第Ⅱ期出土遺物の実測図②…… 166
第 112図　第Ⅱ期出土遺物の実測図③…… 169
第 113図　第Ⅱ期出土遺物の実測図④…… 170
第 114図　第Ⅱ期出土遺物の実測図⑤…… 172
第 115図　第Ⅱ期出土遺物の実測図⑥…… 174
第 116図　第Ⅱ期出土遺物の実測図⑦…… 177
第 117図　第Ⅱ期出土遺物の実測図⑧…… 179
第 118図　第Ⅱ期出土遺物の実測図⑨…… 180
第 119図　第Ⅱ期出土遺物の実測図⑩…… 182
第 120図　第Ⅱ期出土遺物の実測図⑪…… 184
第 121図　第Ⅱ期出土遺物の実測図⑫…… 185
第 122図　第Ⅱ期出土遺物の実測図⑬…… 187
第 123図　第Ⅱ期出土遺物の実測図⑭…… 188
第 124図　第Ⅱ期出土遺物の実測図⑮…… 190
第 125図　第Ⅱ期出土遺物の実測図⑯…… 191
第 126図　第Ⅱ期出土遺物の実測図⑰…… 192
第 127図　第Ⅱ期出土遺物の実測図⑱…… 193
第 128図　第Ⅱ期出土遺物の実測図⑲…… 194
第 129図　第Ⅱ期出土遺物の実測図⑳…… 195
第 130図　第Ⅱ期出土遺物の実測図㉑…… 197
第 131図　第Ⅱ期出土遺物の実測図㉒…… 199
第 132図　第Ⅲ期出土遺物の実測図①…… 203
第 133図　第Ⅲ期出土遺物の実測図②…… 206
第 134図　第Ⅲ期出土遺物の実測図③…… 208
第 135図　第Ⅲ期出土遺物の実測図④…… 210
第 136図　第Ⅲ期出土遺物の実測図⑤…… 212
第 137図　第Ⅲ期出土遺物の実測図⑥…… 213
第 138図　東・西側尾根出土遺物の実測図 216

第 139図　南東側張り出し尾根
出土遺物の実測図…… 217
第 140図　縄文時代遺物の実測図①…… 220
第 141図　縄文時代遺物の実測図②…… 221
第 142図　路線外城域実測図 (1)…… 224
第 143図　路線外城域実測図 (2)…… 226
第 144図　路線外城域実測図 (3)…… 228
第 145図　路線外城域実測図 (4)…… 230
第 146図　山田城跡周辺の
社寺堂宇・地名分布図…… 234
第 147図　山田城跡と水の手位置図…… 248

# 表　目　次

第１表　山田城跡周辺遺跡一覧表…… 9
第２表　第Ⅰ期検出の建築址一覧表①… 20
第３表　第Ⅰ期検出の建築址一覧表②… 21
第４表　Ｖ１－ＳＢ０１計測表…… 25
第５表　Ｖ１－ＳＢ０２計測表…… 26
第６表　Ｖ１－ＳＢ０３計測表…… 27
第７表　Ｖ１－ＳＢ０４計測表…… 28
第８表　Ｖ１－ＳＢ０５計測表…… 29
第９表　Ｖ１－ＳＢ０６計測表…… 30
第10表　Ｖ１－ＳＢ０７計測表…… 31
第11表　Ｖ１－ＳＢ０８計測表…… 32
第12表　Ｖ１－ＳＢ０９計測表…… 33
第13表　Ｖ１－ＳＢ１０計測表…… 34
第14表　Ｖ１－ＳＢ１１計測表…… 35
第15表　Ｖ１－ＳＢ１２計測表…… 36
第16表　Ｖ１－ＳＢ１３計測表…… 37
第17表　Ｖ１－ＳＢ１４計測表…… 38
第18表　Ｖ１－ＳＢ１５計測表…… 39
第19表　第Ⅱ期検出の建築跡一覧表…… 45
第20表　Ｖ２－ＳＢ１６計測表…… 46
第21表　Ｖ２－ＳＢ１７計測表…… 47
第22表　Ｖ２－ＳＢ１８計測表…… 48
第23表　Ｖ２－ＳＢ１９計測表…… 49
第24表　Ｖ２－ＳＢ２０計測表…… 50
第25表　Ｖ２－ＳＢ２１計測表…… 51
第26表　Ｖ２－ＳＢ２２計測表…… 52
第27表　Ｖ２－ＳＢ２３計測表…… 53
第28表　Ｖ２－ＳＢ２４計測表…… 54
第29表　野鍛冶跡土層観察表 (1)…… 59
第30表　野鍛冶跡土層観察表 (2)…… 60
第31表　第Ⅲ期検出の建築址一覧表…… 61
第32表　Ｖ３－ＳＢ２５計測表…… 65
第33表　Ｖ３－ＳＢ２６計測表…… 66
第34表　Ｖ３－ＳＢ２７計測表…… 67
第35表　Ｖ３－ＳＢ２８計測表…… 68
第36表　Ｖ３－ＳＢ２９計測表…… 69
第37表　Ｖ３－ＳＢ３０計測表…… 70
第38表　東側尾根検出の建築址一覧表① 72
第39表　東側尾根検出の建築址一覧表② 73
第40表　Ｅ－ＳＢ３１計測表…… 77
第41表　Ｅ－ＳＢ３２計測表…… 78
第42表　Ｅ－ＳＢ３３計測表…… 79
第43表　Ｅ－ＳＢ３４計測表…… 80
第44表　Ｅ－ＳＢ３５計測表…… 81
第45表　Ｅ－ＳＢ３６計測表…… 82
第46表　Ｅ－ＳＢ３７計測表…… 83
第47表　Ｅ－ＳＢ３８計測表…… 84
第48表　Ｅ－ＳＢ３９計測表…… 85
第49表　Ｅ－ＳＢ４０計測表…… 86
第50表　Ｅ－ＳＢ４１計測表…… 87

第51表　E－ＳＢ４２計測表…… 88
第52表　E－ＳＢ４３計測表…… 89
第53表　E－ＳＢ４４計測表…… 90
第54表　E－ＳＢ４５計測表…… 91
第55表　E－ＳＢ４６計測表…… 92
第56表　E－ＳＢ４７計測表…… 93
第57表　E－ＳＢ４８計測表…… 94
第58表　東側尾根検出の柱列計測表…… 95
第59表　西側尾根検出の建築址一覧表… 96
第60表　W－ＳＢ４９計測表…… 99
第61表　W－ＳＢ５０計測表…… 100
第62表　W－ＳＢ５１計測表…… 101
第63表　W－ＳＢ５２計測表…… 102
第64表　W－ＳＢ５３計測表…… 103
第65表　南東側尾根検出の建築址一覧表 104
第66表　ＳＥ－ＳＢ５４計測表…… 106
第67表　ＳＥ－ＳＢ５５計測表…… 107
第68表　ＳＥ－ＳＢ５６計測表…… 108
第69表　ＳＥ－ＳＢ５７計測表…… 109
第70表　ＳＥ－ＳＢ５８計測表…… 110
第71表　ＳＥ－ＳＢ５９計測表…… 111
第72表　Ｐ－１土層観察表①…… 118
第73表　Ｐ－１土層観察表②…… 118
第74表　Ｐ－１土層観察表③…… 119
第75表　Ｐ－３土層観察表…… 120
第76表　Ｐ－４土層観察表…… 120
第77表　Ｐ－５土層観察表…… 120
第78表　Ｐ－２土層観察表…… 122
第79表　Ｐ－６土層観察表…… 122
第80表　Ｐ－７土層観察表…… 122
第81表　Ｐ－８土層観察表…… 124
第82表　Ｐ－９土層観察表…… 124
第83表　Ｐ－10土層観察表…… 124
第84表　第Ⅰ期出土遺物の観察表①…… 131
第85表　第Ⅰ期出土遺物の観察表②…… 133
第86表　第Ⅰ期出土遺物の観察表③…… 134
第87表　第Ⅰ期出土遺物の観察表④…… 135
第88表　第Ⅰ期出土遺物の観察表⑤…… 137
第89表　第Ⅰ期出土遺物の観察表⑥…… 138
第90表　第Ⅰ期出土遺物の観察表⑦…… 139
第91表　第Ⅰ期出土遺物の観察表⑧…… 141
第92表　第Ⅰ期出土遺物の観察表⑨…… 142
第93表　第Ⅰ期出土遺物の観察表⑩…… 144
第94表　第Ⅰ期出土遺物の観察表⑪…… 146
第95表　第Ⅰ期出土遺物の観察表⑫…… 147
第96表　第Ⅰ期出土遺物の観察表⑬…… 150
第97表　第Ⅰ期出土遺物の観察表⑭…… 151
第98表　第Ⅰ期出土遺物の観察表⑮…… 154
第99表　第Ⅱ期出土遺物の観察表①…… 163
第 100表　第Ⅱ期出土遺物の観察表②… 165
第 101表　第Ⅱ期出土遺物の観察表③… 167
第 102表　第Ⅱ期出土遺物の観察表④… 168
第 103表　第Ⅱ期出土遺物の観察表⑤… 171
第 104表　第Ⅱ期出土遺物の観察表⑥… 173
第 105表　第Ⅱ期出土遺物の観察表⑦… 175
第 106表　第Ⅱ期出土遺物の観察表⑧… 176
第 107表　第Ⅱ期出土遺物の観察表⑨… 178
第 108表　第Ⅱ期出土遺物の観察表⑩… 181
第 109表　第Ⅱ期出土遺物の観察表⑪… 183
第 110表　第Ⅱ期出土遺物の観察表⑫… 186
第 111表　第Ⅱ期出土遺物の観察表⑬… 189
第 112表　第Ⅱ期出土遺物の観察表⑭… 196
第 113表　第Ⅱ期出土遺物の観察表⑮… 198
第 114表　第Ⅱ期出土遺物の観察表⑯… 199
第 115表　第Ⅲ期出土遺物の観察表①… 204
第 116表　第Ⅲ期出土遺物の観察表②… 205

第 117表　第Ⅲ期出土遺物の観察表③… 207
第 118表　第Ⅲ期出土遺物の観察表④… 209
第 119表　第Ⅲ期出土遺物の観察表⑤… 211
第 120表　第Ⅲ期出土遺物の観察表⑥… 214
第 121表　第Ⅲ期出土遺物の観察表⑦… 215
第 122表　東・西側尾根出土遺物の観察表… 218
第 123表　南東側張り出し尾根
出土遺物の観察表①… 218
第 124表　南東側張り出し尾根
出土遺物の観察表②… 219
第 125表　縄文時代石器計測表…… 222
第 126表　縄文時代遺物観察表…… 222
第 127表　山田城跡周辺の社寺堂宇
地名一覧表…… 234
第 128表　第Ⅰ期整地層遺物一覧表…… 236
第 129表　第Ⅱ期整地層遺物一覧表…… 238
第 130表　第Ⅲ期文化層遺物一覧表…… 241
第 131表　山田城跡出土の土師器一覧表 242
第 132表　建築址　桁行方向一覧表…… 244
（Ⅰ期・Ⅱ期）
第 133表　建築址　桁行方向一覧表…… 245
（Ⅲ期・東尾根）
第 134表　建築址　桁行方向一覧表…… 246
（西尾根・南東側張り出し尾根）

# 写真図版目次

図版 1　山田城跡航空写真(1)
図版 2　山田城跡航空写真(2)(3)
図版 3　山田城跡遠望　山田城跡迫地(1)　山田城跡迫地(2)
図版 4　山田城跡の迫地と東西尾根　山田城跡の東側尾根とその西側斜面
山頂より南東側張り出し尾根を眺む
図版 5　山田城跡路線外（第 1 堀切）（第 2 堀切）（第 3 堀切）
図版 6　第Ⅰ期整地層検出状況(1)(2)(3)
図版 7　第Ⅱ期整地層検出状況(1)(2)(3)
図版 8　第Ⅱ期整地層出土の水甕片(1)(2)(3)
図版 9　第Ⅱ期整地層検出の野鍛冶跡(1)(2)(3)
図版10　第Ⅱ期整地層検出の野鍛冶跡(4)(5)(6)
図版11　第Ⅲ期文化層の検出状況(1)(2)(3)
図版12　東側尾根の遺構検出状況(1)(2)(3)
図版13　西側尾根の遺構検出状況(1)(2)(3)
図版14　迫地上段における土層断面　南東側張り出し尾根の堀切土層断面
第Ⅰ期整地層出土の集石遺構
図版15　第Ⅰ期整地層出土遺物　(1)
図版16　第Ⅰ期整地層出土遺物　(2)
図版17　第Ⅰ期整地層出土遺物　(3)
図版18　第Ⅰ期整地層出土遺物　(4)
図版19　第Ⅱ期整地層出土遺物　(1)
図版20　第Ⅱ期整地層出土遺物　(2)
図版21　第Ⅱ期整地層出土遺物　(3)
図版22　第Ⅱ期整地層出土遺物　(4)
図版23　第Ⅱ期整地層出土遺物　(5)
図版24　第Ⅱ期整地層出土遺物　(6)
図版25　第Ⅲ期文化層出土遺物　(1)
図版26　第Ⅲ期文化層出土遺物　(2)
図版27　第Ⅲ期文化層出土遺物　(3)
東・西・南東側尾根出土遺物
図版28　縄文時代遺物

# 第Ⅰ章　調査の概要

## 第1節　調査の組織

調査主体　熊本県教育委員会

調査責任者　森　一則（昭和59・60年度文化課長：試掘・本調査）　丸木保賢（昭和61年度文化課長：本調査）　江崎　正（昭和63年度文化課長：整理）

調査総括　隈　昭志（文化財調査係長・文化課主幹・課長補佐）

整理総括　桑原憲彰（文化財調査第2係長）

発掘調査　大田幸博（文化財保護主事：試掘・本調査）　黒田裕司（嘱託：試掘・本調査）
菖蒲和弘・松舟博満（嘱託：本調査）　永田　満（臨時職員：本調査）

報告書　大田幸博（文化財保護主事）　菖蒲和弘・松舟博満（嘱託）
石工みゆき・溝口真由美（臨時職員）　永田　満・宮崎敬子（臨時職員）
西住欣一郎（文化財保護主事：報告書協力）

専門調査員　賀川光夫（別府大学教授）　白木原和美（熊本大学教授）　石井　進（東京大学教授）　工藤敬一（熊本大学教授）　橘　昌信（別府大学教授）
大三輪龍彦（鶴見女子大学教授）　甲元眞之（熊本大学助教授）
三島　格（肥後考古学会会長）　田辺哲夫（日本考古学協会員）
服部英雄（文化庁天然記念物課調査官）　阿蘇品保夫（熊本県立美術館主幹）

協力者　山江村役場：田村俊明（山江村長）
山江村教育委員会：前村源治（教育長）　内山賢治（社会教育主事）

調査事務局　課長補佐：佐々木正則（昭和59・60年度）　林田敏嗣（昭和61～63年度）
主幹経理係長：柴田和馬（昭和59～61年度）
主幹兼係長：松崎厚生（昭和62・63年度）
参事：花田隆三（昭和59年度）　森　貴史（昭和60・61年度）
主任主事：谷　喜美子（昭和59年～62年度）
主事：上村祐司・泉野順子（昭和63年度）

日本道路公団人吉工事事務所
発掘調査時：坂巻持千男（所長）永渕善吾（副所長）村田文敏（工務課長）
古賀文雄（庶務課長）　豊永盛喜（工務課）
報告書作成時：近藤俊一（現所長）小原　明（前副所長）
信国興勝（現副所長）
岩永一男（現庶務課長）石丸　裕（庶務課）

発掘作業員　中村正好（第１班長）・田頭一義（第２班長）・岡本　実・田口力松・井川静香
石工タツト・上村伸子・岡田ヒトム・尾方信子・尾園スソエ・勝原カノエ
勝山タツ・勝山ミサ子・勝山良子・加村キミ子・久保田ミヤ子・久保山トミ子
迫田初子・迫田チフ・迫田洋子・田口アサ子・田口サツキ・西　和子・西　徳子
西川久美子・福川シマエ・宮原立代・村坂利子・米良和子・山田剛士

樹木伐採作業員　森田洋介（森田林業代表）

整理作業員　〔人吉調査事務所〕　緒方千代・村山清子・中島典子・林　枝三
〔熊本県文化財収蔵庫〕　笠間いつ子・吉長都美子・渕上慶子・永広絹代
塩田喜美子・重永照代・水本寿美子

## 第２節　調査に至る経緯

昭和52年３月29日付けで、日本道路公団福岡建設局（局長：大城金夫）から、熊本県教育委員会（教育長：林田正恒）に対して、九州縦貫自動車道（八代～えびの間）の分布調査依頼があり、熊本県教育委員会では、同年８月４～６日、８月10～12日の２回に渡り調査を実施した。

その結果、路線予定地内に18遺跡の存在が予想された。これを昭和52年９月９日付けで日本道路公団福岡建設局に回答したところ、昭和53年４月８日付けで日本道路公団から文化庁あての協議書が提出された。文化庁からは、昭和53年６月12日付けで「熊本県教育委員会と協議の上、事前に発掘調査を実施すること。なお調査の結果、重要な遺構等が発見されたときは、設計変更等による、その保存に配慮すること」と言う通知があり、昭和53年６月20日付けで、日本道路公団あて通知した。

昭和57年度から熊本県教育委員会は、日本道路公団の調査依頼を受け、各遺跡の発掘調査を行った。

山田城跡については、途中で遺跡の存在が明らかになり、道路公団と協議の上、調査を追加したものである。昭和59年９月に試掘調査を行い、昭和60年12月から昭和61年９月まで本調査を実施した。試掘・本調査とも文化財保護主事大田幸博と嘱託黒田裕司が担当した。

## 第３節　調査の方法と経過

「九州縦貫自動車道（八代～人吉間）」は、山田城跡の南側部分を西方向から北東方向へ横断した。最終的に発掘調査の対象となったのは、迫地部分と、これを挟む凝灰岩の東西尾根である。

### （１）調査の方法と手順

昭和59年９月に５日間の試掘調査を行い、遺構の存在が明らかになったので、昭和60年12月

下旬から昭和61年９月中旬まで発掘調査を実施した。まず、調査予定地の竹や草木を全面的に伐採し環境整備を行った後に、迫地～東側尾根～西側尾根～迫地の順に調査を進めた。この間、作業用道路に利用するため、採石用道路（廃道）を再整備し、西側尾根岩場には進入口を設けた。この進入口よりバック・フォーを搬入し、作業能率を上げた。さらに排土運搬のために不整地走行車（キャリア・ダンプ）を常駐させ、これにあたらせた。

調査の結果、迫地と東西尾根から多数の臨時的な建築址をはじめとして、野鍛冶跡や集石遺構が検出され、青磁などの中世遺物に混じって縄文後晩期の土器や石器類が出土した。但し遺構を伴うものではなく、持ち込みによるものと考えられる。

なお、発掘調査終了後、整理作業の一貫として昭和63年４月から、山田城跡の路線外を測量調査し、詳細な城跡遺構の実測図面を作成した。

**（２）発掘調査日誌抄**

昭和59年９月　試掘調査を行う。背の丈を越す竹や草木を伐採後、迫地に調査グリッド（２ｍ×３ｍ）を入れる。計５箇所のすべてのグリッドから、土師器片や備前等の水甕片が出土。内、１箇所を地山まで深掘し、Ⅲ期に及ぶ文化層の存在を確認する。東西両尾根は凝灰岩の岩場である事から、調査の対象外とした。

調査中は蜂やダニに悩まされた。５日に、はぐれ野猿が現場に出現、あけびの実を手に、藪から現れた猿を人と間違え、大田が声をかける。仁王立ちの猿と大田が数ｍの近距離で対面、お互いに（？）腰を抜かす（？）。作業員一同、爆笑。

昭和60年12月下旬　調査第１陣が現場に入り、調査区全域の草木伐採を開始。

昭和61年１月中旬　登山時間短縮（麓から調査現場まで15分）と現場へ重機等を搬入するため、廃道化した採石道路（西側尾根下）を重機で再掘し整備する。

さらに、大型ブレーカーで西側尾根の岩山を掘削し、迫地への進入口を作る。

迫地へ重機を搬入し、樹根と表土を撤去する。排土運搬に際しては、不整地走行車（キャリア・ダンプ）を常駐させ、迫地下部の排土場へ運ぶ。排土場の確保に際し、森田林業の協力を得て、迫地を矢板で仕切る。

下旬　調査第２陣が合流し調査体制が整う。第Ⅰ期整地層の調査を開始。

２月上旬　出土遺物の青磁は南北朝期のもので、昭和59年度調査の高城跡のものより、はるかに上質である。文献史料との一致から調査に期待が膨らむ。

2月下旬　建築址の実測のため、迫地に尺取り虫形の遣形を組む。関数電卓が必需品となる。

3月上旬　第Ⅱ期整地層の調査を開始。備前・常滑の水甕が多量に出土する。

下旬　たまたま作業工程の中で実測との兼ね合いから2時間程の空白時間が出来る。松舟調査員が「東側尾根でも清掃しましょうか」、2時間後、「先生、おおごと（大変）凝灰岩の岩場に柱穴の並んどる（並んでいる）。」再び、大田、腰を抜かす。作業工程の見直しに迫られる。

4月上旬　東側尾根の調査開始、多数の柱穴を検出。

下旬　東側尾根より18棟の建築址と、迫地を結ぶ渡り廊下を検出。壮観な現場となる。

5月上旬　西側尾根の調査開始、風の強い日、尾根の先端からゲラ・カイトをあげる。風に乗って用意した200ｍの糸が伸びきり、最後は風圧で糸が切れる。

中旬　再び迫地調査に戻る。第Ⅱ期整地層の調査を再開する。

6月上旬　第Ⅱ期整地層の最上段に焼土箇所を確認。スラッグと鞴の羽口が出土。後に野鍛冶跡と判明、この分につき調査を後日にまわす。

中旬　第Ⅲ期の文化層の調査を開始。

7月下旬　一応の調査を終了する。調査の主力部隊が次の現場へ移動する。

8月上旬　残留部隊で遺構全体の写真撮影のため清掃作業におわれる。

中旬　野鍛冶跡の調査開始。数名を残し、残留部隊も次の現場へ向かう。

9月中旬　調査終了。東側尾根の先端より爆竹をあげて調査の終了を祝う。北側谷向かいの城山では着々と次の発掘調査が進行中である。

## 第4節　遺跡の位置と地理的環境

### （1）　位　　置

山田城跡は、熊本県球磨郡山江村大字山田字大王谷地内の山稜末端部に所在する。標高238ｍ前後の山で、南側麓の寺下集落との比高は約110ｍである。

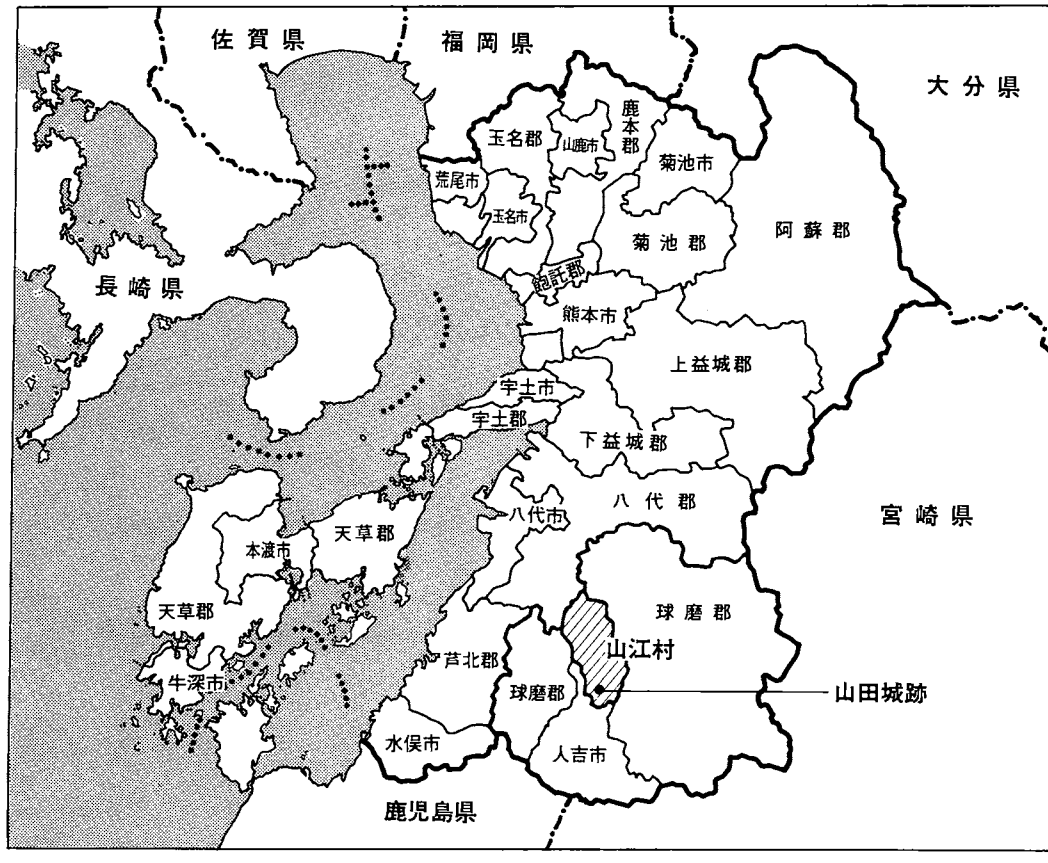
国土地理院発行の5万分の1地形図「人吉」に位置を求むれば、図幅南から18.3㎝、西から2.9㎝の所にある。

山田地区には、山付きの北方向から、盆地側の南方向へ帯状に開口する長さ約４km、幅約0.5kmの開析谷があり、これが谷底平野を形成している。この地を山田川が蛇行しながら南下しており、中流域は今日、開田されて肥沃な水田地帯となっている。下流域は人吉盆地の平野部と接する。谷底平野の中程に山江役場の建物があるが、この役場の北西方向の裏山が山田城跡地となる。

すなわち、谷底平野の西岸域を構成する標高200ｍ～260ｍクラスの低山稜地帯（麓との比高は約100ｍ程）の一隅に城跡が所在する事になる。

山田城跡の同一、山稜地帯には、隣接の尾根に「下城子（昭和60年調査）」と「城山（昭和62年～昭和63年調査）」の字名を残す中世城跡があり、さらに谷底平野を挟んだ南側対岸の丘陵地にはこれ又、中世城跡の高城跡（昭和59年～昭和60年調査）が位置している。山田城跡より遠望すれば、ほぼ真南の方位に高城跡があり、両城跡の直線距離は２km足らずである。結果として同一山田地内に４城跡が相い隣接する事となる。

山田城跡の麓には寺下集落が開けており、中世からの寺歴を持つ高寺院が現存する。




第１図　山田城跡位置図

（2）人吉盆地

熊本県の南東部に位置し、周囲を市房山などの九州山地に囲まれ、山地内で帯状に大きく開口した標高100～200ｍの断層盆地である。日本三急流の１つである球磨川は東方向の市房山の山麓より流れ出て、盆地の中央部を横断し、西方向の八代海へ注いでいる。

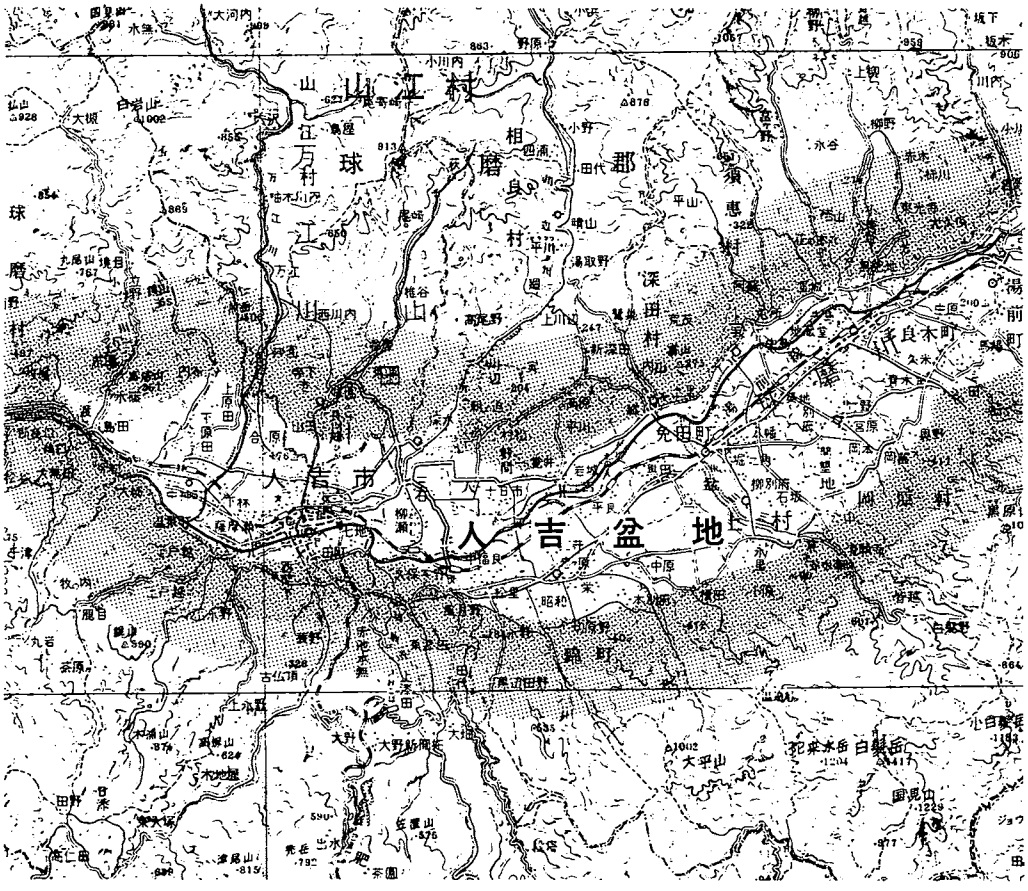
球磨川の北岸には、川辺川によって形成された広大な扇状地と、阿蘇溶結凝灰岩や入戸火砕流を基盤とする丘陵地がひろがっている。

（3）球磨郡山江村

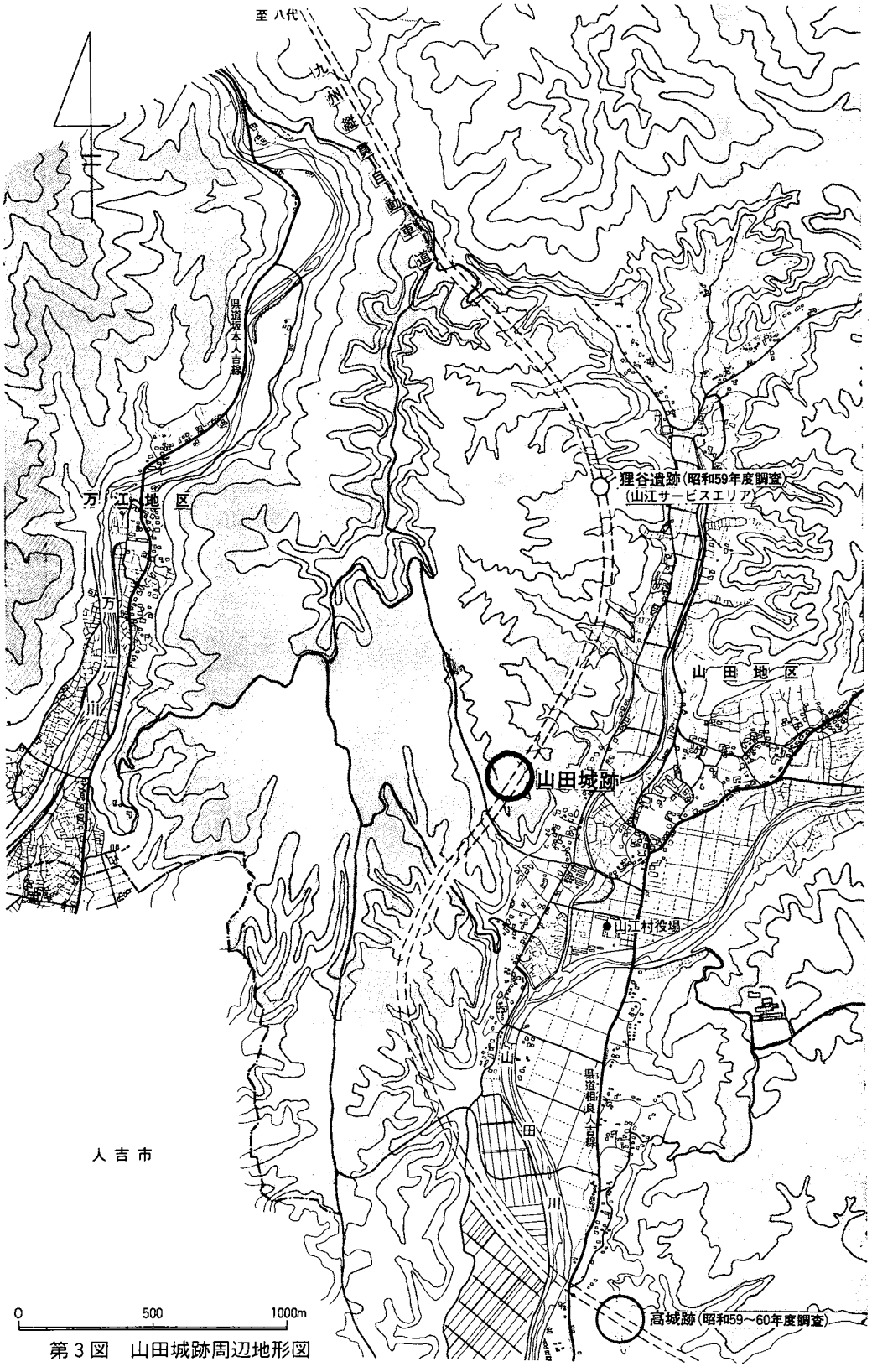
人吉盆地の西寄りにあって、北を五木村、東を相良村、南を人吉市、西を球磨村に囲まれている。村内の東西両側には、北方向から南方向へ、２つの大きな開析谷が開口しており、村を二分する格好となっている。東に山田地区、西に万江地区が開けている。

明治22年４月に、山田村と万江村の２村が合併して今日の山江村となり、平成元年の今年、村政100周年を迎えた。121.08㎢、人口4,500人前後（昭和63年現在）の山村である。

村内には先土器時代から中世に至る数多くの遺跡が残っている。




第２図　人吉盆地地形図




第３図　山田城跡周辺地形図

# 第Ⅱ章　遺跡の概要

## 第１節　山田城跡の歴史的環境

### （１）先土器時代

球磨・人吉地方では32箇所の遺跡が確認されているが、それらの遺跡の殆どは山江村や人吉市を中心とした地域で、河川に近い標高150ｍ前後の台地・丘陵地からである。その中で、昭和57年から昭和63年にかけて県文化課の「九州縦貫自動車道（八代～人吉間）」建設に伴う発掘調査が行われ、先土器時代の遺跡としては、高城跡、大丸・藤ノ迫遺跡、狸谷遺跡、鼓ケ峰遺跡、天道ケ尾遺跡が調査対象地となった。一方、昭和60年には人吉市教育委員会によって宅地造成に伴う村山闇谷遺跡の発掘調査が実施された。

これらの遺跡には、姶良カルデラを起源とする入戸火砕流（シラス・ＡＴ）が見られ、遺物はシラスの上層から出土したが、狸谷遺跡では、シラスの下層からも出土している。

### （２）縄文時代

早期の遺跡として、狸谷遺跡、高城跡、大丸・藤ノ迫遺跡、村山遺跡、岩清水遺跡、射場ノ本遺跡などがあり、これまでに押型文系の楕円文・山形文土器、塞ノ神土器、手向山式土器、曽畑式土器が出土した。

前期以降の遺跡では、鼓ケ峰遺跡があげられ、曽畑式土器・船元式土器・並木式土器が出土している。

後期の遺跡は、矢黒神社前遺跡があり、国道219号矢黒バイパス工事時に、後期後半の遺物や石刀の柄部が出土している。晩期の遺跡は、球磨川沿岸の七地水田遺跡や丘陵上の村山闇谷遺跡、アンモン山遺跡がある。

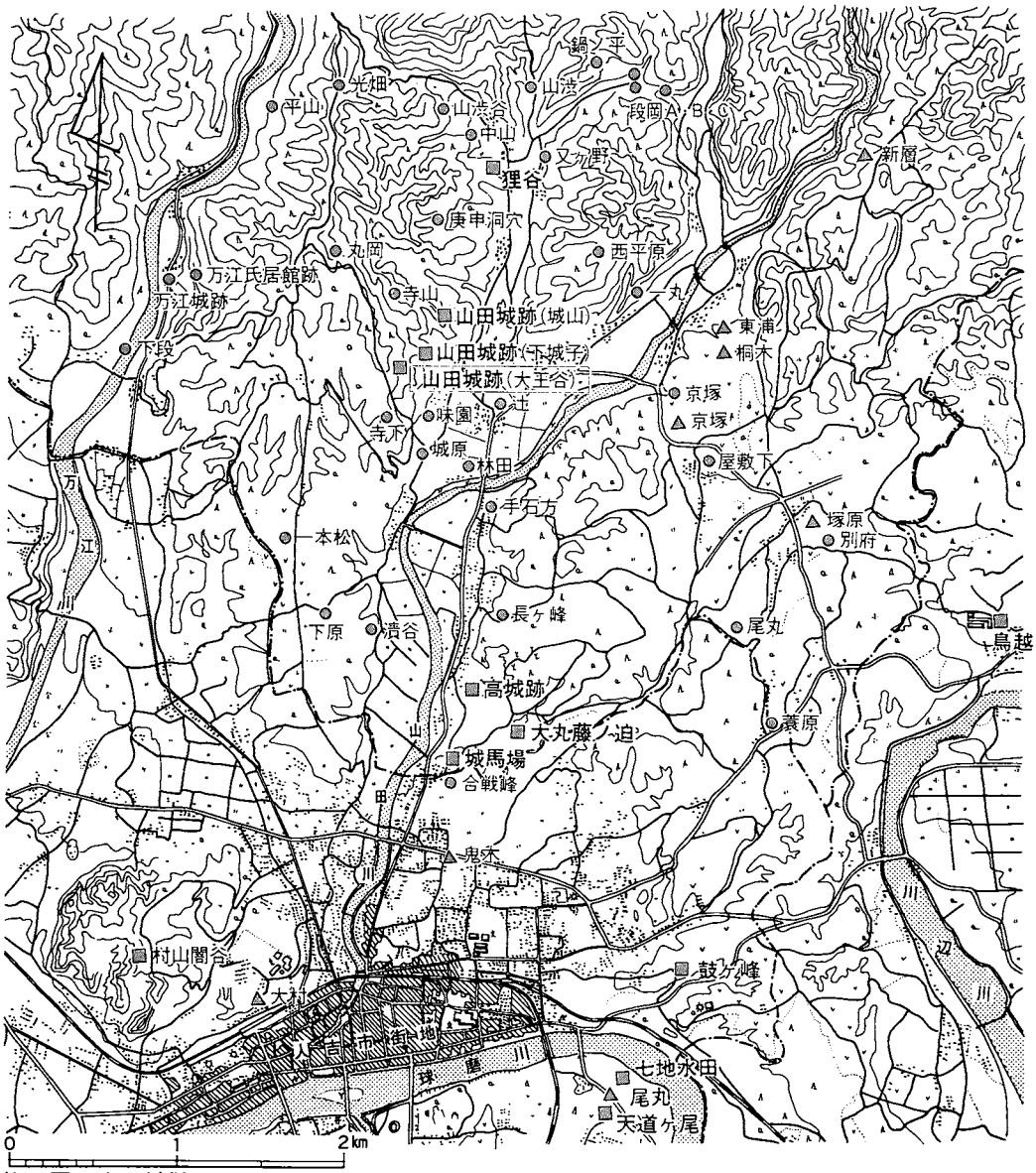
### （３）弥生時代

球磨・人吉地方の弥生時代は後期に特徴があり、免田式土器が多く出土している。遺跡は30箇所を数え、人吉盆地の中央部に集中する。分布域の周辺部にあたる大丸・藤ノ迫遺跡からは、免田式土器を伴う10基の住居址が検出されている。

### （４）古墳時代

古墳時代になると球磨・人吉地方では広範囲に横穴・高塚古墳が見られ、中でも人吉市の大村、錦町の京ケ峰、相良村の陣内などの装飾横穴古墳群が広く知られている。また前方後円墳では分布の南限とされる錦町の亀塚古墳群あり、大型円墳では免田町の四塚・才園四塚古墳群、須恵村の鬼ノ釜古墳、多良木町の夫婦塚古墳などがあげられる。これらは人吉盆地の中央に位置するもので、その周辺にも横穴古墳群や小規模な古墳群が点在する。

天道ケ尾遺跡からは地下式横穴が発見され、鉄鏃９本が出土した。また、深田村の新深田と




第４図　山田城跡周辺遺跡分布図　　■ 調査された遺跡　● その他の遺跡　△ 古墳

| 遺跡名 | 時代 | 遺跡名 | 時代 | 遺跡名 | 時代 |
|---|---|---|---|---|---|
| 狸谷遺跡 | 先土器～縄文時代 | 寺下遺跡 | 縄文時代 | 七地水田遺跡 | 縄文・歴史時代 |
| 大丸・藤ノ迫遺跡 | 先土器～縄文時代 | 城原遺跡 | 縄文時代 | 天道ケ尾遺跡 | 先土器～歴史時代 |
| 高城跡 | 先土器～歴史時代 | 林田遺跡 | 縄文時代 | 村山闇谷遺跡 | 縄文・歴史時代 |
| 中山遺跡 | 先土器～歴史時代 | 手石方遺跡 | 縄文時代 | 新層古墳群 | 縄文～古墳時代 |
| 山渋谷遺跡 | 先土器～歴史時代 | 一本松遺跡 | 縄文時代 | 東浦古墳群 | 縄文～古墳時代 |
| 平山遺跡 | 縄文時代 | 下原遺跡 | 縄文時代 | 桐木古墳群 | 縄文～古墳時代 |
| 光畑遺跡 | 縄文時代 | 資谷遺跡 | 縄文時代 | 塚原古墳群 | 縄文～古墳時代 |
| 下段遺跡 | 縄文時代 | 城馬場遺跡 | 縄文～歴史時代 | 城下古墳 | 縄文～古墳時代 |
| 庚申・洞穴遺跡 | 縄文時代（洞穴） | 長ケ峰遺跡 | 縄文～歴史時代 | 京塚古墳 | 縄文～古墳時代 |
| 山渋遺跡 | 縄文時代 | 蓑原遺跡 | 縄文時代 | 鬼木古墳 | 古墳時代 |
| 鍋ノ平遺跡 | 縄文時代 | 尾丸遺跡 | 縄文時代 | 大村横穴群 | 古墳時代 |
| 段岡ＡＢＣ遺跡 | 縄文時代 | 別府遺跡 | 縄文時代 | 尾丸横穴群 | 古墳時代 |
| 又ケ野遺跡 | 縄文時代 | 屋敷下遺跡 | 縄文時代 | 山田城跡（大王谷） | 歴史時代 |
| 丸岡遺跡 | 縄文時代 | 一丸遺跡 | 縄文時代 | 山田城跡（下城子） | 歴史時代 |
| 寺山遺跡 | 縄文～歴史時代 | 西平原遺跡 | 縄文時代 | 山田城跡（城山） | 歴史時代 |
| 内角遺跡 | 縄文時代 | 合戦峰遺跡 | 縄文～歴史時代 | 万江城跡 | 歴史時代 |
| 辻遺跡 | 縄文～歴史時代 | 鳥越遺跡 | 縄文時代 | 万江氏居館跡 | 歴史時代 |
| 味園遺跡 | 縄文～歴史時代 | 鼓ケ峰遺跡 | 先土器～歴史時代 | | |

第１表　山田城跡周辺遺跡一覧表

荒毛・尾園遺跡から、地下式板石積石室墓と共に免田式土器が出土している。アンモン山遺跡では成川式土器と須恵器が共伴し、住居跡が検出された。最近では、相良村の小園遺跡から成川式土器を伴う古墳時代の住居跡が16基検出されている。

**（5）歴史時代**

古代の球磨郡は『古事記』『日本書紀』の中で熊襲征伐の「熊縣」に比定されている。この時期の遺跡に、須恵器の下り山窯跡、瓦の梼木窯跡・久鹿遺跡・寺田遺跡があり、周辺の廻り迫遺跡を初めとする4遺跡で蔵骨器が出土している。また、黒田平城跡の周辺からは銅板墓誌が出土している。

「球磨郡」の文字は、平安時代の中頃に編集された『和名類聚抄』が初見である。同書によれば球磨郡に「人吉・西村・東村・久米・球玖・千脱」の6郷があったことがわかる。しかし今日、郷の比定と郡衙の所在地については諸説があり、確定までには至っていない。

鎌倉時代は、球磨郡の田数と領主を書き上げた建久八年(1197)の『肥後国球磨郡図田帳写』があり、球磨郡は人吉・須恵・永吉庄の3つの庄園にわかれ、公田として豊富・豊永郷があり、領主は在地の久米・須恵・人吉・平河氏などであったことがわかる。

山田村が歴史上に登場するのは鎌倉時代からで、『平河文書』『相良家文書』によると球磨郡永吉庄に含まれ、開発領主の平河氏が地頭であったことがわかる。

この頃の地頭館は、旧山江村役場付近の「辻岡」の微高地辺りが有力とされる。周辺の水田は「前田」「門田」などと呼ばれ、地名からして地頭直営地の門田として可能性が強い。場所的にも東浦川と西川内川の旧合流地点で、氾濫源であり、水田耕作に適した後背湿地帯である。

南北朝時代は、多良木の上相良氏（経頼）と人吉の下相良氏（定頼・前頼）が敵対し、これに球磨郡国人の平河・須恵・岡本・永里・宮原・橘氏などが加わって、激しい内乱となる。

北朝方の山田城は、大宰少弐氏から幾度か攻められ、暦応三年（1340）には大宰弐頼尚の命で相良孫二郎定長が「山田已下所領域部警固」をしている。この時期に山田城が「相良家文書」に頻繁に所見する。

この様な状況の中で、人吉の下相良前頼・氏頼兄弟が「ながとみとの」宛へ契状を出すなど、庶子の勢力も大きいものであったことが窺える。

そして、ここに登場した「ながとみとの」が、後世、山田城主と伝えられる永留氏に外ならない。

しかし、永和三年（1377）10月28日に日向・薩摩・大隅・肥後四ケ国の国人61人が参加して作成した一揆契状神水案文には、球磨郡からが最も多く、十人が名前を連ねているが、この中に前述の「ながとみとの（永留殿）」は見えない。一般に知られている山田城主永留氏説は、後世の相良家編纂物によるもので史料的根拠は何もない。

ただ関連文書から、人吉庄永留名の地頭職を得ていた一族と思われ、家臣団の名字は人吉庄

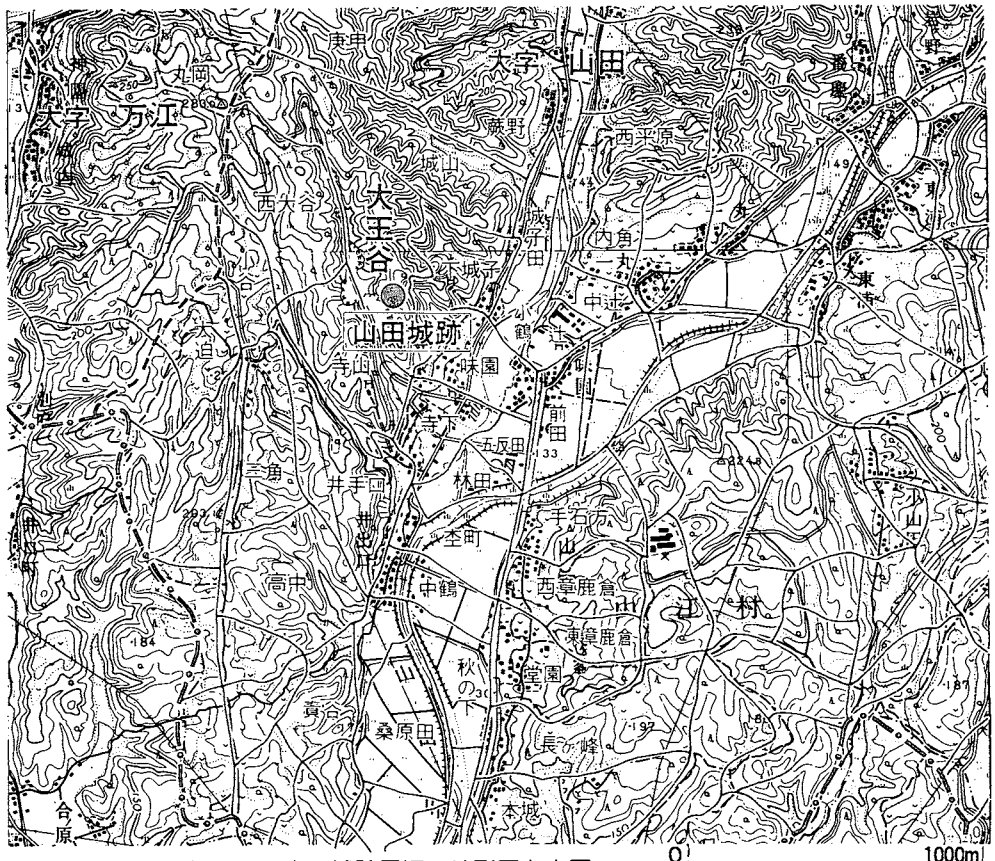
永留名付近の地名が多い。

永留氏が相良氏や山田の地と明白な関連を有したのは、永留実重が相良頼廣の娘を室とし、親戚関係を結んでからと思われる。この時期が山田村への進出であり、永留氏は堂園に御位牌所「増大寺」を建立し、大王神社と高寺院毘沙門堂を相次いで再興している。

文安五年（1448)、相良前続の死去後に内部分裂が起こり、郡内の国人は人吉の相良尭頼支持側と、山田の永留長続支持側、多良木の上相良頼観・頼仙支持側に三分されてしまった。

結果として、永留氏は下相良氏を追放し、次いで上相良氏を滅ぼし、加担した久米・平河・須恵・岡本・永里氏などの有力国人を滅ぼして、郡内を統一していった。

新たに人吉城主となった永留氏は、相良姓を名乗り、薩摩と肥後国芦北・八代郡へと勢力を伸ばした。長続の時代には球磨・芦北・八代三郷を支配下に置くなど版図拡大し、戦国大名として活躍する。




第５図　山田城跡周辺の地形図と字図

## 第２節　山田城跡の概要

①　山田城跡は、一般的に、人吉相良氏の庶流永留氏の居城であったとされ、地元では、寺下集落の北側山（標高238.394ｍ、麓よりの比高約110ｍの山）を城跡地として伝えてきた。

城跡に関する古い踏査の記録は、昭和16年に発刊された『球磨郡誌』の第二編人文界にあり、「・・・山田城跡がある。現在は村有の杉の植林地として周囲の山地と一区割をなしている。急傾斜の崖は自然の城壁で、石垣の跡を見ない。城の主な建物の在ったと思われる峯には礎石等はないが、五箇所の堀切りによって区切られた一つ一つの地域は大きな建造物のあった場所とも思はれぬ。中央部と思われる辺に古井戸の半ば以上埋もれたるもの一つ。巨木の切株数個、他に遺跡らしきものなし。」との記述があり、城歴では永留頼明を築城者にあてている。

昭和50年に熊本日々新聞社より発刊された「熊本の城」（『熊本の風土とこころ』シリーズ10）では、城跡の写真が掲載され、城歴が述べられている。

昭和50年度から３ケ年にわたり、熊本県教育委員会は県内の中世城跡の悉皆調査を実施した。昭和53年度に調査報告書が刊行されており、その中で、山田城跡は同村の谷川　強調査協力員の踏査記録に基づいて遺構の説明がなされている。

これによると尾根筋に２条の空掘と二重の堀切によって仕切られた３区画の平場地があり、（伝）井戸跡の立穴も残ると説明されている。但し、城跡所在地の字名は字図により、山田城跡の北側谷向いの「城山」があてられている。

昭和54年10月に出版された『日本城郭大系18』の福岡・熊本・鹿児島編に山田城跡の説明があり、編集者の阿蘇品保夫氏が、城歴を中世文書によって解説している。

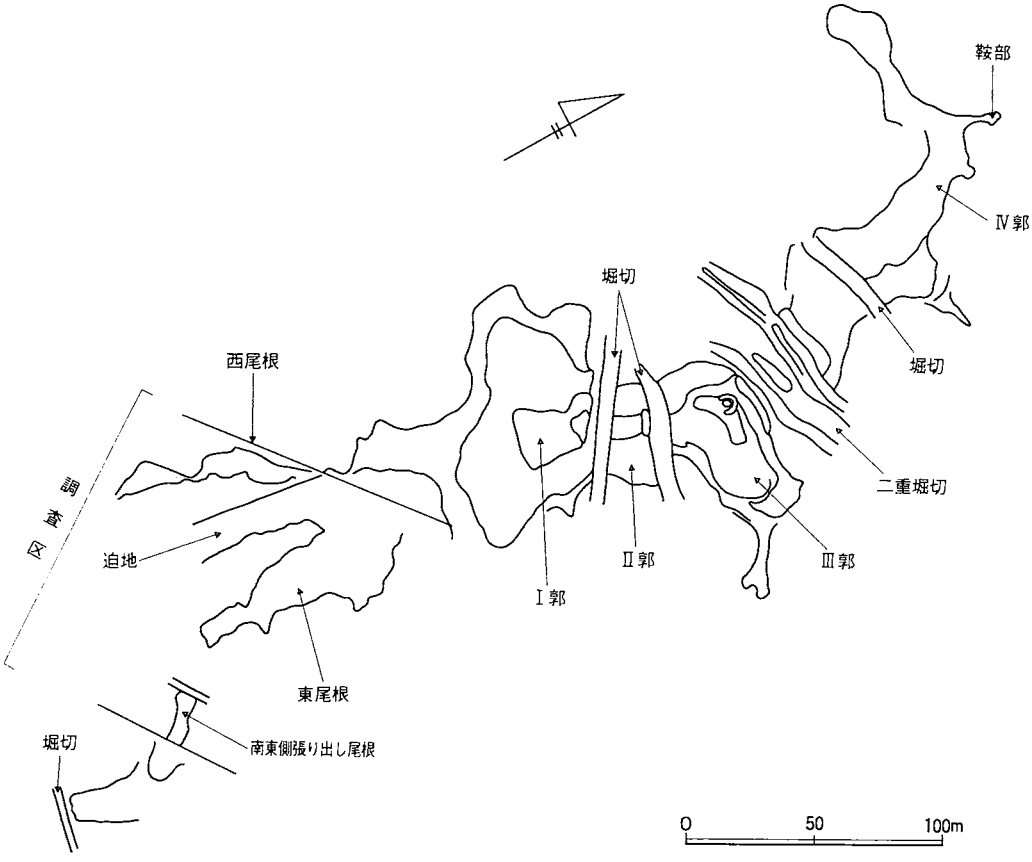
②　城跡地の本体尾根筋には「大王谷」という字名が残る。「大王」とは鎌倉時代に山田の地頭職にあった平河氏に対する尊号であるとされている。調査区域は本体尾根筋の南側に派生した二股の尾根とその間の迫地で、「下城子」という字名が残っている。

本体尾根筋の主軸ライン方向はＮ10°Ｗで、大体南北方向と考えてよい。鞍部までの長さは約214ｍで、４条の大規模堀切が刻まれ、これらの堀切によって仕切られた４つの郭がある。

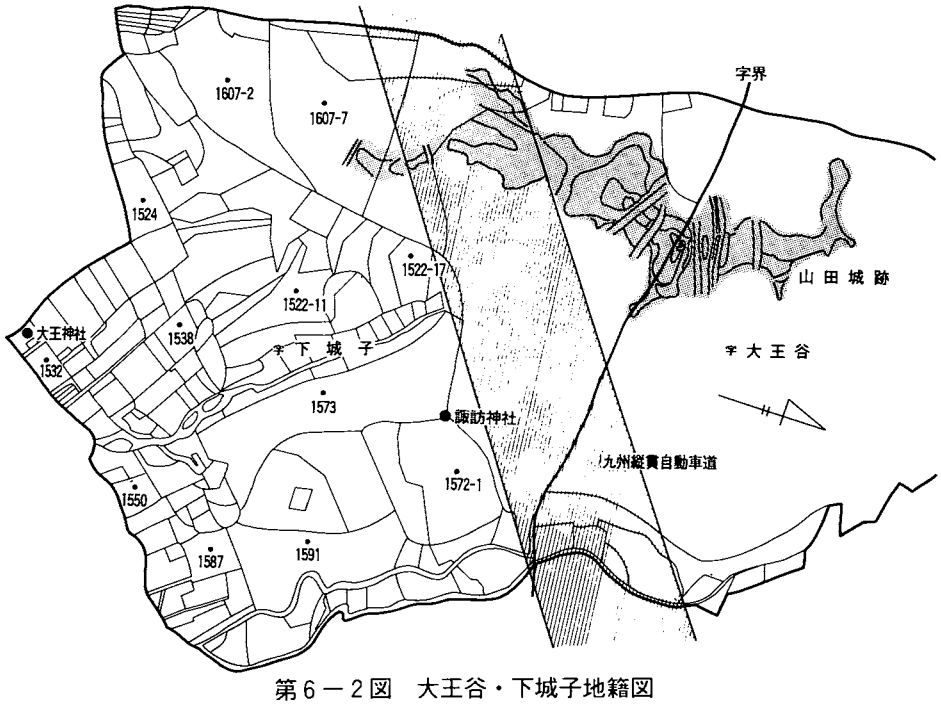
調査区は、城跡南側の東西二股に分かれた派生尾根と、間の迫地及びその下位南東方向に張り出した山腹中の尾根である。長さは東側尾根82ｍ、西側尾根60ｍ、迫地70ｍ、南東方向の張り出し尾根が25ｍである。

したがって城域規模は南北約304ｍで、東西幅はそれぞれの尾根筋の平面的な広がりとなる。

人吉・球磨地方に残る70城跡（文献上は82城）の中世城跡で、最大規模の山城である。




第６－１図　山田城跡・縄張り基本図




第６－２図　大王谷・下城子地籍図

# 第Ⅲ章　調査の成果

## 第1節　遺構の概要

**調査の取り組み方**

山田城跡は比高約110ｍの山に築かれた大規模造りの山城である。主軸ライン（城跡本体）の尾根筋は、Ｎ10°Ｗの方向を示し、全長約214ｍを測る。尾根筋には、大小合わせて５本の堀切が刻まれており、尾根筋の上面を４区画に分割しているが、南側部分において尾根筋は東西両側へ二股に分かれ、主に凝灰岩の岩山となっている。東側尾根は長さ82ｍ、西側尾根は60ｍで、ほぼ南北の主軸方向を示す。東側尾根については、南東方向の下位に長さ25ｍの張り出し尾根（主軸方向はＳ28°Ｅ）が付随する。さらに東西両尾根に挟まれた迫地は、緩やかな傾斜地で、幅10～20ｍ、直線距離の長さ70ｍを測る。

今回、調査の対象となったのは、主軸尾根の南側部分において派生した東西両尾根と間の迫地及び南東方向の張り出し尾根である。

調査に際し、調査予定地の環境整備（草木伐採）を行った後に、迫地に磁北の方位で基準ラインを設け、これから東西両尾根と南東張り出し尾根へ基準線を延長し、最終的に路線外の主軸尾根へと繋いだ。

遺構の実測にあたっては、基準ラインを基に方形地割りを行い、迫地と南東張り出し尾根では尺取り虫形の遣形を互い違いに組んだ。岩山の東西両尾根は、ポイント設定に工事用のコンクリート打ち込み釘を使用し、斜面部については関数計算によって直線距離を割り出してメッシュを組んだ。

路線外城域についても、尾根筋に基準ラインを設け、これを元に方形地割りを行った。

**遺構の概要**

〔１〕迫　　地

２時期の整地層と、さらにそれらの下部に１枚の文化層があった。そこで調査では上層から下層へⅠ期～Ⅲ期という様に分けた。

**〔第Ⅰ期〕**　範囲は、南北の長さ56ｍ（直線距離）、東西幅が11～18ｍで、15棟の建築址が検出された。迫地の上段から下段までの高低差は15.5ｍで、整地面は大きく４段に分かれている。

検出された建築址の中では、Ｖ１－ＳＢ０７が5.7ｍ(19尺)×2.9ｍ(10尺)で最大規模で、Ｖ１－ＳＢ０８が3.6ｍ(12尺)×2.3ｍ(８尺)で最小規模であった。平均値は4.5ｍ(15尺)×2.7ｍ(９尺)で、第Ⅰ期については２回の建て替えが行われている。

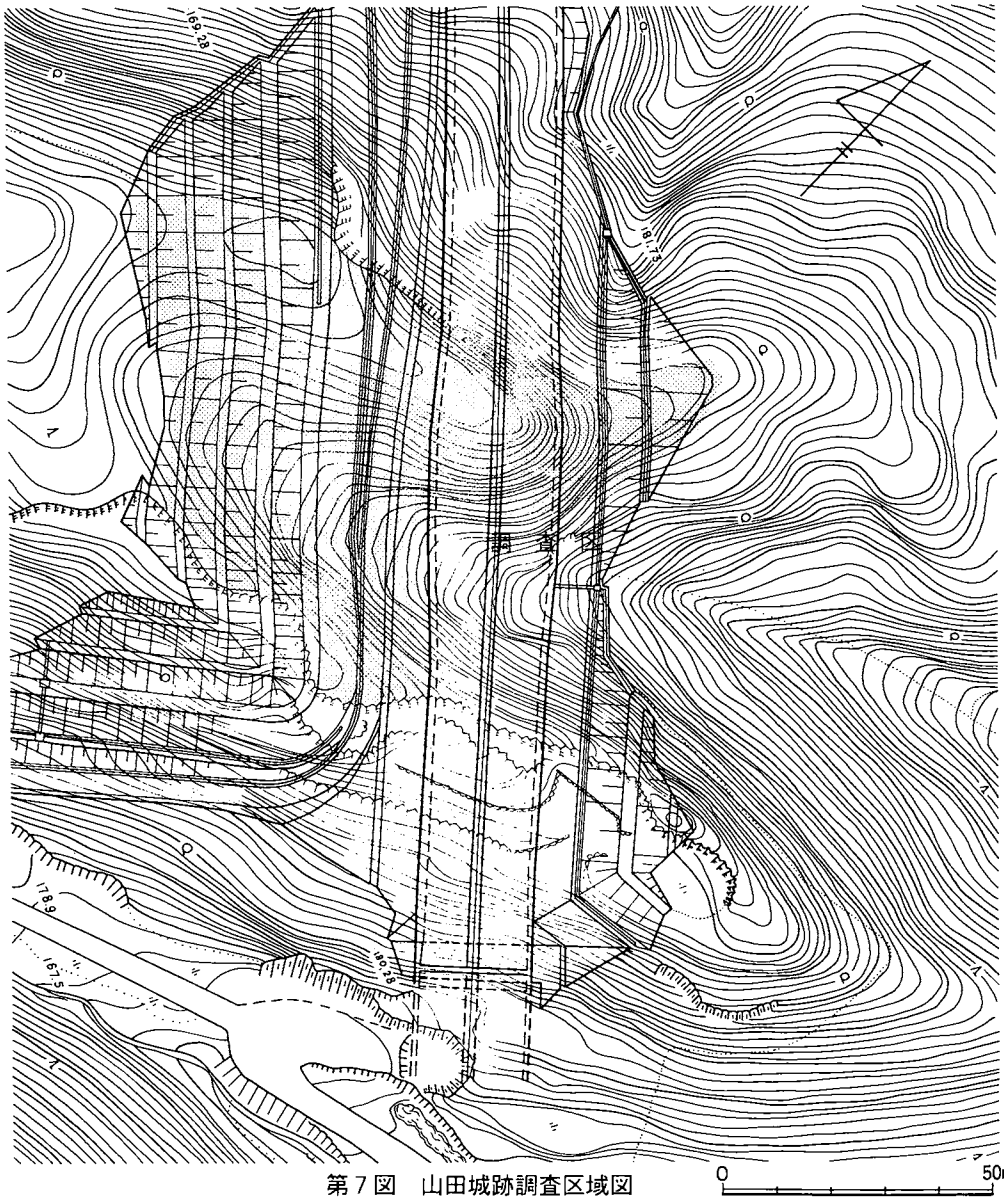
**（集石１・２）**　迫地近くの標高218.0ｍラインから（集石１）と迫地中段の標高215.0ｍラインから（集石２）検出された。いずれも積み石で、中には一抱えもある様な大石があった。石

質は砂岩、凝灰岩、チャートで、何の目的で寄せ集められたかは不明である。

**〔第Ⅱ期〕**　範囲は、南北の長さ35ｍ（直線距離）、東西幅11ｍで、９棟の建築址が検出された。迫地の上段から下段までの高低差は11ｍで、整地面は大きく７段に分かれている。

検出された建築址の中では、Ｖ２－ＳＢ２２が4.5ｍ(14尺)×2.2ｍ(８尺)で最大規模で、Ｖ２－ＳＢ１７が2.6ｍ(９尺)×1.9ｍ(６尺)で最小規模であった。平均値は3.5ｍ(12尺)×2.1ｍ(７尺)で、第Ⅱ期については建築址に重なり合いがなく、同時期に並列したものと思われる。

**（土器溜め）**　迫地上段の標高218～219ｍラインから検出されたもので、主に備前と常滑の大ガメ片がまとまって出土した。




第７図　山田城跡調査区域図

**（野鍛冶跡）** 迫地最上段の標高222.9ｍ～222.4ｍのラインから検出された。多量の炭化物やスラッグ・鉄器の類をはじめとして周辺域から、鞴の羽口が出土した。これらの事により、野鍛冶跡と思われる。

**〔第Ⅲ期〕** 範囲は、南北の長さ23ｍ（直線距離）、東西幅６～14ｍで、６棟の建築址が検出された。迫地の上段から下段までの高低差は６ｍで、遺構確認面は大きく３段に分かれている。

検出された建築址の中では、Ｖ３－ＳＢ２９が4.2ｍ(14尺)×2.4ｍ(８尺)で最大規模で、Ｖ３－ＳＢ２８が3.2ｍ(11尺)×2.0ｍ(７尺)で最小規模であった。平均値は3.9ｍ(13尺)×2.6ｍ(９尺)で、第Ⅲ期は２回の建て替えが行われている。

**〔２〕東側尾根**

東尾根は南北の長さ82ｍ、東西幅５～19ｍで、大半が凝灰岩の岩場である。

尾根の北側基底部より南側へ45ｍの範囲で18棟の建築址が検出されたが、その中では、Ｅ－ＳＢ４５が4.6ｍ(15尺)×3.0ｍ(10尺)で最大規模で、Ｅ－ＳＢ３２が3.3ｍ(11尺)×2.4ｍ(８尺)で最小規模であった。平均値は3.7ｍ(12尺)×2.4ｍ(８尺)で、東側尾根は、最大３回の建て替えが行われている。

なお、東側尾根の西側斜面より迫地に下る柱列があり、渡り廊下の類ではないかと思われる。

**〔３〕西側尾根**

明治期までの採石工事により、西側部分を大方削り取られているが、南北の長さ60ｍ、東西幅10ｍの範囲で、５棟の建築址が検出された。

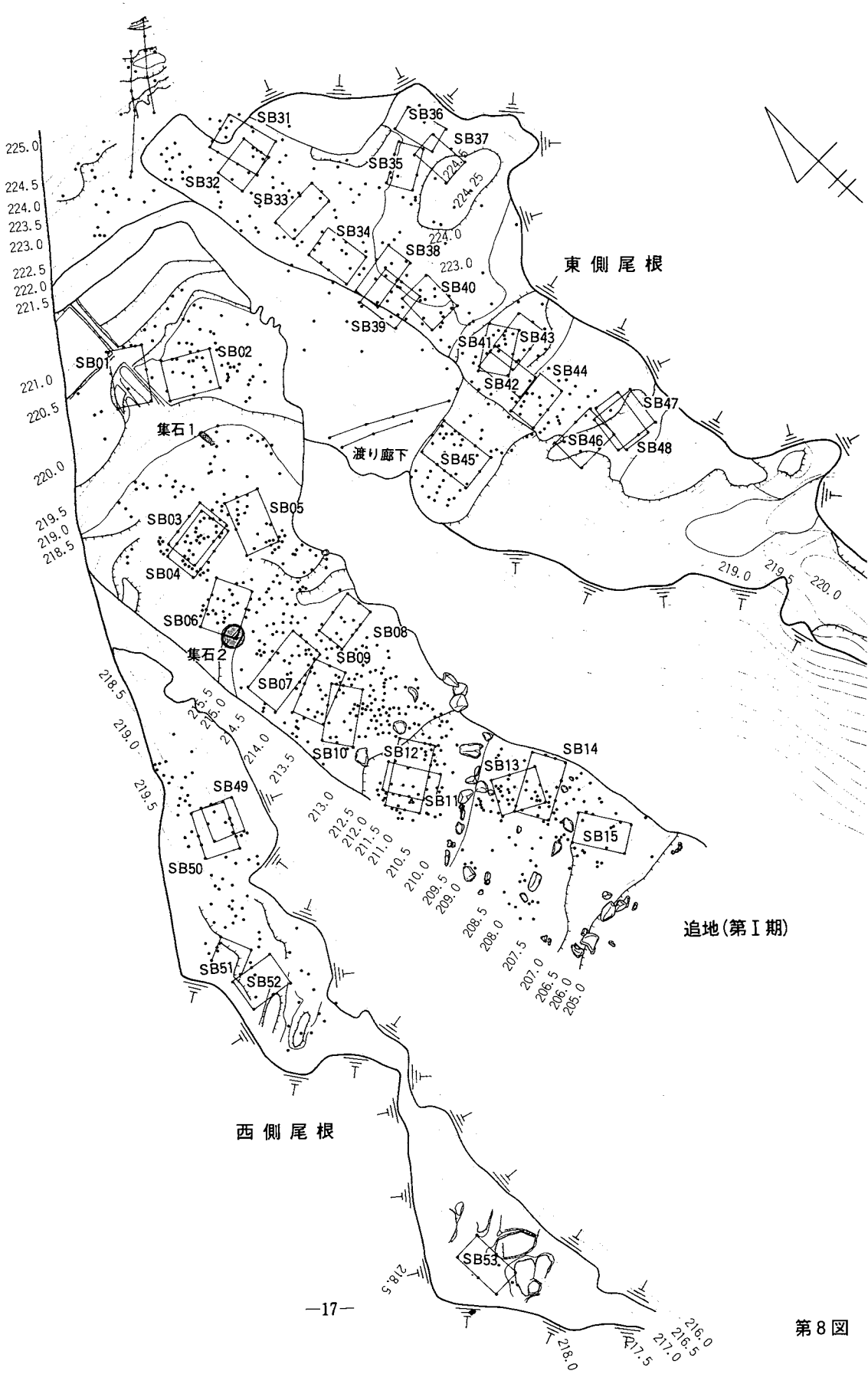
検出された建築址の中では、Ｗ－ＳＢ５０が3.9ｍ(13尺)×2.8ｍ(９尺)で最大規模で、Ｗ－ＳＢ４９・５３が2.8ｍ(14尺)×2.6ｍ(８尺)で最小規模であった。平均値は3.3ｍ(11尺)×2.7ｍ(９尺)で、西側尾根については２回の建て替えがあったものと思われる。

**〔４〕南東側張出し尾根**

東側尾根の南東側15ｍ下に張り出した尾根である。

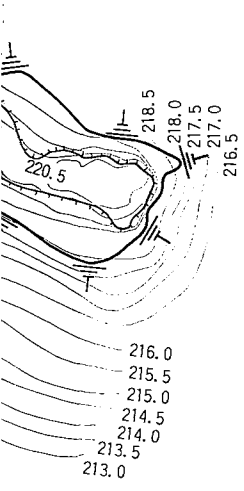
この尾根から計６棟の建築址が密に重なり合って検出されたが、その中ではＳＥ－ＳＢ５４が4.8ｍ(16尺)×1.7ｍ(６尺)で最大規模で、ＳＥ－ＳＢ５５が3.7ｍ(12尺)×1.9ｍ(６尺)で最小規模であった。平均値は4.2ｍ(14尺)×2.2ｍ(７尺)で、南東側張り出し尾根は３回の建て替えがあったものと思われる。

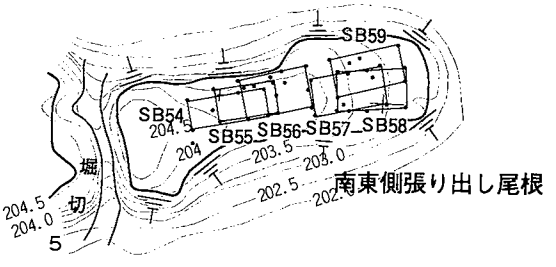
尾根の北側基底部から小規模な堀切５が検出された。堀切の埋土から多くの土師器坏や瓦質擂鉢が出土している。

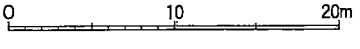

SB31
SB36
SB37
SB35
SB32
SB33
SB34
SB38
SB40
SB39
東側尾根
SB41
SB43
SB44
SB42
SB47
SB46
SB48
SB45
渡り廊下
SB01
SB02
集石1
SB03
SB05
SB04
SB06
集石2
SB08
SB09
SB07
SB10
SB12
SB13
SB14
SB11
SB15
SB49
SB50
追地(第Ⅰ期)
SB51
SB52
西側尾根
SB53



第8図






1田城跡調査区全体遺構図

## 第２節　第Ⅰ期整地層の調査結果

迫地部分から検出された第Ⅰ期の平面的な整地層範囲は、南北の長さ56ｍ、東西幅が11～18ｍである。ここから15棟の建築址が検出された。上段から下段までの高低差は15ｍあり、整地面は大きく４段に分かれるので、第９図中に示した様にこれらをⅠ－①～Ⅰ－④段（第Ⅰ期の１～４段という意味である）と呼称する。

Ⅰ－①段は最上段で、標高221.5ｍ～218.5ｍの範囲にある。以下、Ⅰ－②段は標高218.5ｍ～215ｍ、Ⅰ－③段は標高215ｍ～212ｍ、Ⅰ－④段は標高212ｍ～205.5ｍの範囲にある。

**第Ⅰ期整地層より検出の建築址**

〔Ⅰ－①段〕　ＳＢ０１・ＳＢ０２の２棟が検出された。２棟は桁行の方位が、Ｎ33°Ｅ（ＳＢ０１）とＮ58°Ｗ（ＳＢ０２）で、ほぼ直交しており並列関係にあると思われる。建築址はＳＢ０１が２間×２間の4.5ｍ(15尺)×2.8ｍ(９尺)の規模で、ＳＢ０２が２間×１間の4.0ｍ(13尺)×3.1ｍ(10尺)を測り、ほぼ似かよった大きさである。ＳＢ０２の柱穴Ｐ13から角釘〔207〕が出土している。２棟は同時期のものと考えてよい。

〔Ⅰ－②段〕　ＳＢ０３～ＳＢ０６の４棟が検出された。この中で、ＳＢ０３とＳＢ０４は重なり合っているが、２棟の桁行方向は同一で、規模もＳＢ０３が4.2ｍ(14尺)×2.7ｍ(９尺)、ＳＢ０３が4.5ｍ(15尺)×2.7ｍ(９尺)とほぼ同一である。この事から２棟は連続して、同一の目的で建て替えられている事が明らかである。ＳＢ０４の柱穴Ｐ28から土師器坏〔95〕が出土している。

ＳＢ０５は、4.4ｍ(15尺)×2.7ｍ(９尺)の規模と、桁行方向のＮ20°Ｅから、Ⅰ－①段のＳＢ０１に関連する建築址と同時期の建築址であろう。

ＳＢ０６はⅠ－②段の南端から検出されたもので、4.0ｍ(13尺)×3.0ｍ(10尺)の規模である。桁行方向はＮ74°ＷでＳＢ０５と異なるが、規模はＳＢ０５の数値に近く、同時期のものと考えられる。ＳＢ０６の柱穴P41から瓦質擂鉢〔131〕が出土している。

Ⅰ－②から検出された４棟については、ＳＢ０３及びＳＢ０４がＳＢ０５と隣接するきらいがあるが、一応ここではＳＢ０３とＳＢ０４の建て替えを考えて、ＳＢ０３・ＳＢ０５・ＳＢ０６が並列する時期と、ＳＢ０４・ＳＢ０５・ＳＢ０６の並列する２時期があったものと思われる。

〔Ⅰ－③段〕　ＳＢ０７～ＳＢ１０の４棟が検出された。この内、ＳＢ０７・ＳＢ０９・ＳＢ１０の３棟が切り合っているが、真中のＳＢ０９を抜いて考えれば、ある程度のまとまりはつく。すなわちⅠ－③段ではＳＢ０７・ＳＢ０８・ＳＢ１０が並列する時期とＳＢ０９が単独で存在する２時期のケースと、さらにはⅠ－②段での建物配列を考慮にいれて、ＳＢ０７・ＳＢ１０が並列する時期と、ＳＢ０８とＳＢ０９の並列する２時期に分けるケースである。

しかしながら、いずれにせよⅠ－③段でも建物の配列に関して１回の建て替えがあった事は確実である。

ＳＢ０７・ＳＢ０８は、桁行方向がＳ87°Ｗ（ＳＢ０７）とＳ84°Ｗ（ＳＢ０８）でⅠ－②段のＳＢ０３・ＳＢ０４とほぼ同じである。ＳＢ０９（Ｓ72°Ｗ）とＳＢ０６との関係も同様である。ＳＢ０７の柱穴Ｐ45からは青磁〔15〕、ＳＢ０９の柱穴Ｐ61からは土師器坏〔98〕、ＳＢ１０の柱穴Ｐ70からは白磁〔56〕が出土した。建物の規模はＳＢ０７が5.7ｍ(19尺)×2.9ｍ(10尺)で最大を測り、ＳＢ０８が3.6ｍ(12尺)×2.3ｍ(８尺)で最小である。ＳＢ０９は4.4ｍ(15尺)×2.6ｍ(９尺)の規模で、ＳＢ１０の4.5ｍ(15尺)×2.5ｍ(８尺)とほぼ同一である。

〔Ⅰ－④段〕ＳＢ１１～ＳＢ１５の５棟が検出されたが、ＳＢ１１とＳＢ１２、ＳＢ１３・ＳＢ１４が重なり合っている。建物の桁行方向はＳＢ１２（Ｓ56°Ｗ）とＳＢ１４（Ｓ65°Ｗ）が同一で、ＳＢ１１（Ｎ30°Ｗ）とＳＢ１５（Ｎ31°Ｗ）が、これに直交する桁行方向となる。したがってⅠ－④段の建物は、ＳＢ１１・ＳＢ１３・ＳＢ１５が並列する時期とＳＢ１２・ＳＢ１４の並列する２時期とに分ける事が出来る。ＳＢ１１・ＳＢ１４の桁行方向は、Ⅰ－③段のＳＢ１２と似かよっている。

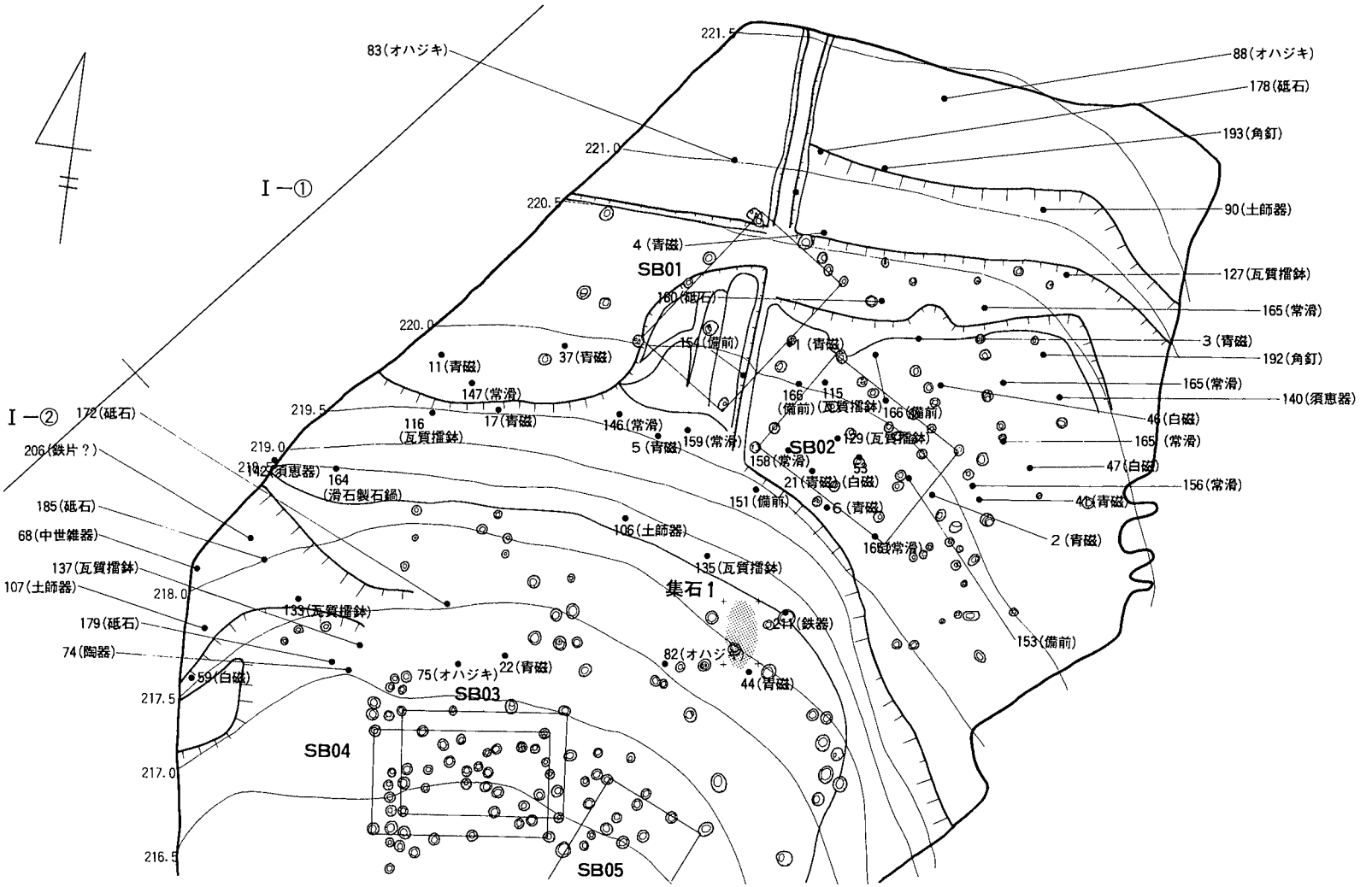
建築址の規模は、ＳＢ１１が4.3ｍ(14尺)×2.3ｍ(８尺)を測り、ＳＢ１５が4.2ｍ(14尺)×2.4ｍ(８尺)で、ほとんど同一である。ＳＢ１２は5.4ｍ(18尺)×2.8ｍ(９尺)で、ＳＢ１４は4.8ｍ(16尺)×2.8ｍ(９尺)を測る。ＳＢ１３はⅠ－④段で唯一、例外の桁行方向（Ｎ57°Ｗ）を示し、規模は3.6ｍ(12尺)×2.9ｍ(10尺)である。ＳＢ１４の柱穴Ｐ154からは備前の甕片〔152〕が出土している。

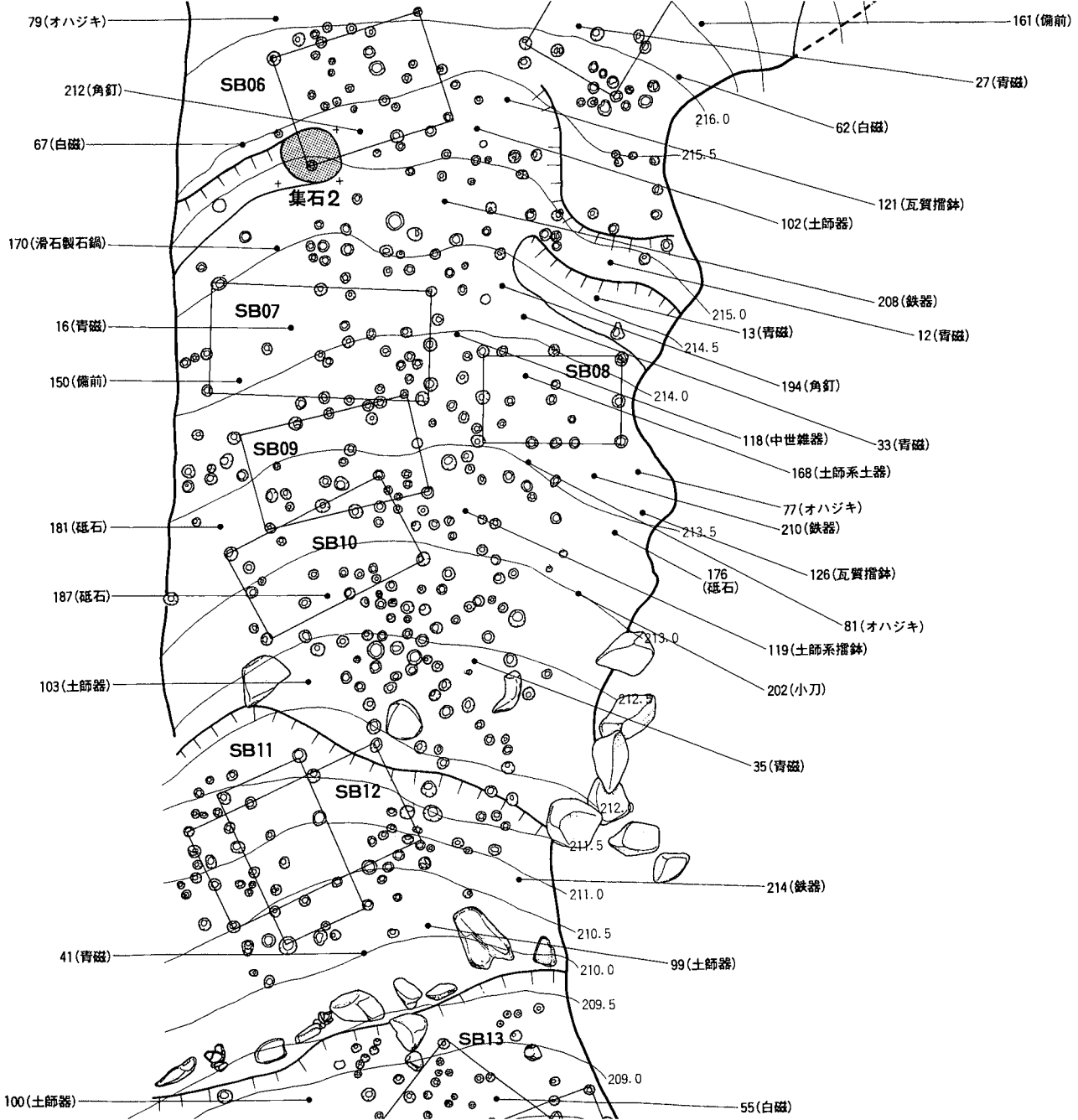
| 建築址ＮＯ. | 規　　模 | 規　格 | 桁行方位 | 備　　考 |
|---|---|---|---|---|
| Ｖ１－ＳＢ０１ | 4.5ｍ×2.8ｍ<br>(15尺×９尺)<br>12.6㎡ | ２間×２間 | Ｎ33°Ｅ | 梁行妻（Ｐ6～Ｐ7）の中央柱が不明。<br>梁行妻の北側と南側では、北側の方が60～70㎝高い。 |
| Ｖ１－ＳＢ０２ | 4.0ｍ×3.1ｍ<br>(13尺×10尺)<br>14.0㎡ | ２間×１間 | Ｎ58°Ｗ | 桁行の北側と南側では北側の方が42～45㎝高い。<br>Ｐ13から鉄器〔207〕が出土している。 |
| Ｖ１－ＳＢ０３ | 4.2ｍ×2.7ｍ<br>(14尺×９尺)<br>11.3㎡ | ２間×２間 | Ｓ82°Ｗ | 桁行（Ｐ14～Ｐ20）の中央柱は２本に分かれる。<br>梁行妻の中央柱は、いずれも片側に寄る。<br>桁行の北側と南側では北側の方が55～60㎝高い。<br>Ｐ17から青磁〔19〕が出土している。 |

第２表　第Ⅰ期検出の建築址一覧表①

| 建築址NO. | 規　　模 | 規　格 | 桁行方位 | 備　　考 |
|---|---|---|---|---|
| V1－SB04 | 4.5m× 2.7m<br>(15尺×9尺)<br>12.2㎡ | 2間×2間 | S85° W | 梁行妻（P28～P29）の中央柱が不明。<br>P28から土師器坏〔95〕が出土している。 |
| V1－SB05 | 4.4m× 2.7m<br>(15尺×9尺)<br>11.9㎡ | 2間×2間 | N20° E | 梁行妻の中央柱は、いずれも片側に寄る。<br>梁行妻の北側と南側では、北側の方が58～63cm高い。 |
| V1－SB06 | 4.0m×3.0m<br>(13尺×10尺)<br>13.2㎡ | 2間×1間 | S74° W | 梁行妻の東側と西側では、東側の方が20～45cm高い。桁行の北側と南側では、北側の方が93～110 cm高い。<br>P41から瓦質擂鉢〔131〕が出土している。 |
| V1－SB07 | 5.7m× 2.9m<br>(19尺×10尺)<br>16.5㎡ | 2間×2間 | S87° W | 梁行妻の東側と西側では一方で、西側の方が34cm高く、片方で中央柱が窪む。<br>桁行の北側と南側では北側の方が50～56cm高い。P45から青磁〔15〕が出土している。 |
| V1－SB08 | 3.6m× 2.3m<br>(12尺×8尺)<br>8.3㎡ | 2間×2間 | S84° W | 梁行妻の西側と東側では、東側の方が40～41cm高い。桁行の北側と南側では、北側の方が40～50cm高い。<br>P52・P55から小石が出土している。 |
| V1－SB09 | 4.4m× 2.6m<br>(15尺×9尺)<br>11.4㎡ | 2間×2間 | S72° W | 桁行の北側と南側では北側の方が52～60cm高い。<br>P61から土師器坏〔98〕が出土した。 |
| V1－SB10 | 4.5m× 2.5m<br>(15尺×8尺)<br>11.3㎡ | 2間×2間 | S57° W | 梁行妻（P68～P69）の中央柱が不明。<br>桁行の北側と南側では、北側の方が50～66cm高い。梁行妻の東側と西側では、東側の方が20～24cm高い。<br>P70から白磁〔56〕が出土した。 |
| V1－SB11 | 4.3m× 2.3m<br>(14尺×8尺)<br>9.9㎡ | 2間×1間 | N30° W | 梁行妻の東側と西側では、西側の方が142～148cm高い。桁行の北側と南側では、北側の方が31cm高い。 |
| V1－SB12 | 5.4m× 2.8m<br>(18尺×9尺)<br>15.1㎡ | 3間×2間 | S56° W | 梁行妻（P99～P102）の中央柱は2本に分かれる。桁行の北側と南側では、北側の方が82～107 cm高い。梁行妻の東側と西側では、東側が80～82cm高い。 |
| V1－SB13 | 3.6m× 2.9m<br>(12尺×10尺)<br>10.4㎡ | 2間×2間 | N57° W | 桁行（P110～P115）の中央柱は2本に分かれる。桁行の北側と南側では、北側が50～70cm高い。梁行妻の東側と西側では、西側の方が57～72cm高い。<br>P93から小石が出土している。 |
| V1－SB14 | 4.8m× 2.8m<br>(16尺×9尺)<br>13.4㎡ | 3間×3間 | S65° W | 桁行の北側と南側では、北側の方が48～76cm高い。梁行妻の東側と西側では、東側の方が44～90cm高い。<br>P104から備前の甕片〔152〕が出土した。 |
| V1－SB15 | 4.2m× 2.4m<br>(14尺×8尺)<br>10.1㎡ | 3間×1間 | N31° W | 桁行（P110～P115）の北側と南側では北側の方が19～39cm高い。<br>梁行妻の東側と西側では、西側の方が75～88cm高い。 |

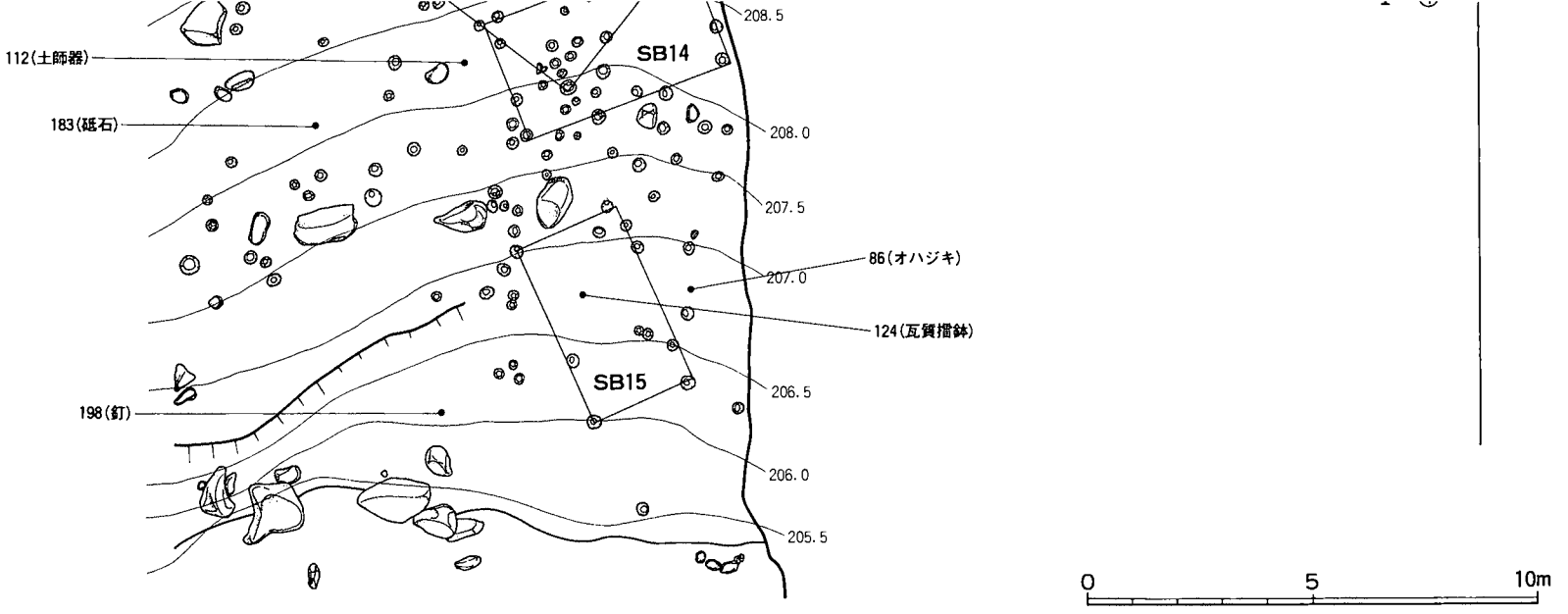
第3表　第Ⅰ期検出の建築址一覧表②


Ⅰ—①
Ⅰ—②
SB01
SB02
SB03
SB04
SB05
集石1
221.5
221.0
220.5
220.0
219.5
219.0
218.5
218.0
217.5
217.0
216.5
83(オハジキ)
88(オハジキ)
178(砥石)
193(角釘)
90(土師器)
4(青磁)
127(瓦質擂鉢)
160(砥石)
165(常滑)
154(備前)
3(青磁)
192(角釘)
11(青磁)
37(青磁)
147(常滑)
166(備前)
115(瓦質擂鉢)
166(備前)
165(常滑)
140(須恵器)
116(瓦質擂鉢)
17(青磁)
146(常滑)
5(青磁)
159(常滑)
129(瓦質擂鉢)
46(白磁)
165(常滑)
158(常滑)
47(白磁)
21(青磁)
(白磁)
156(常滑)
151(備前)
6(青磁)
40(青磁)
2(青磁)
166(常滑)
172(砥石)
206(鉄片？)
125(須恵器)
164
(滑石製石鍋)
185(砥石)
68(中世雑器)
106(土師器)
137(瓦質擂鉢)
135(瓦質擂鉢)
107(土師器)
133(瓦質擂鉢)
211(鉄器)
179(砥石)
74(陶器)
82(オハジキ)
153(備前)
59(白磁)
75(オハジキ)
22(青磁)
44(青磁)


79(オハジキ)
212(角釘)
67(白磁)
SB06
集石2
170(滑石製石鍋)
SB07
16(青磁)
150(備前)
SB08
SB09
181(砥石)
SB10
187(砥石)
103(土師器)
SB11
SB12
41(青磁)
SB13
100(土師器)
161(備前)
27(青磁)
62(白磁)
121(瓦質擂鉢)
102(土師器)
208(鉄器)
12(青磁)
194(角釘)
33(青磁)
168(土師系土器)
77(オハジキ)
210(鉄器)
126(瓦質擂鉢)
81(オハジキ)
119(土師系擂鉢)
202(小刀)
35(青磁)
214(鉄器)
99(土師器)
55(白磁)
216.0
215.5
215.0
214.5
214.0
213.5
213.0
212.5
212.0
211.5
211.0
210.5
210.0
209.5
209.0
118(中世雑器)
13(青磁)
176
(砥石)

I—②

I—③




第9図　第Ⅰ期整地層遺構実測図

## Ｖ１－ＳＢ０１

桁行4.5ｍ、梁行妻2.8ｍの２間×２間の建物で方位はＮ33°Ｅである。柱間寸法は、桁行Ｐ１～Ｐ４～Ｐ６で1.7ｍ＋2.8ｍ、Ｐ３～Ｐ５～Ｐ７で1.9ｍ＋2.6ｍ、梁行妻Ｐ１～Ｐ２～Ｐ３で1.4ｍ＋1.4ｍとなる。Ｐ６～Ｐ７は中央柱が不明で全長2.8ｍを測る。

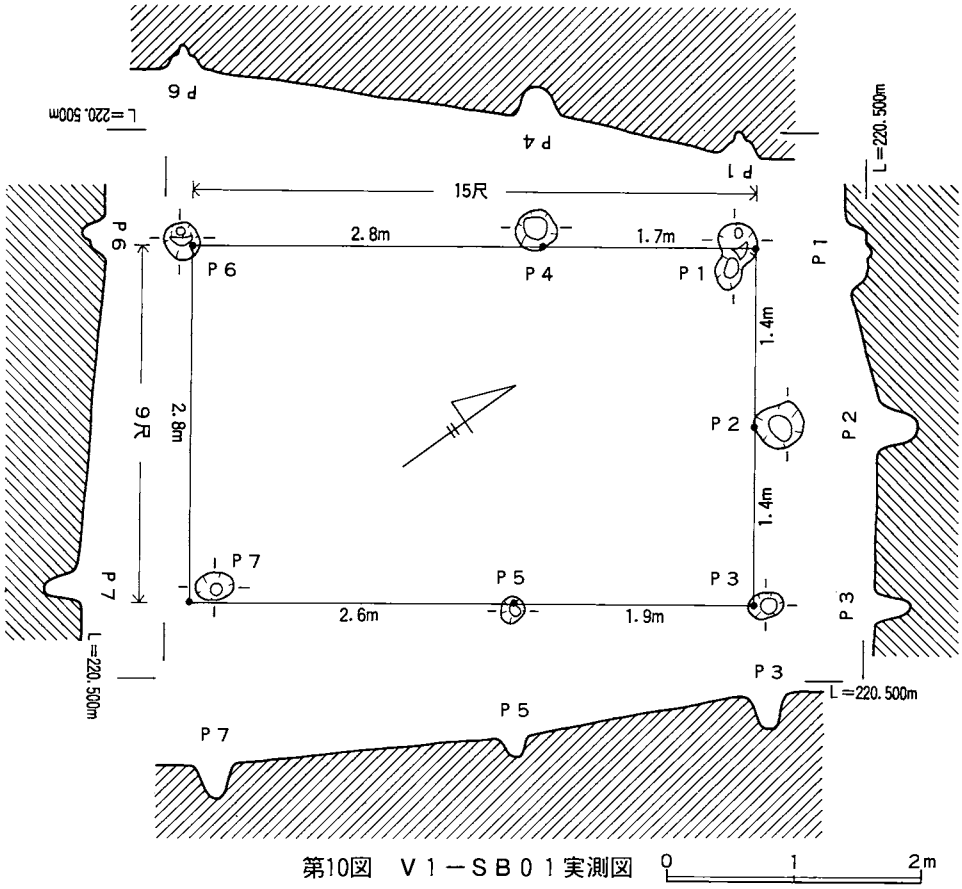
柱穴の大きさはＰ１が最大（52×29cm）、Ｐ５が最小（20×19cm）で平均値は33.1×25.9cmとなる。深さはＰ２が最深（29.5cm）、Ｐ６が最浅（15.2cm）で平均値は35.4cmである。

柱列はすべて千鳥の並びとなる。

梁行妻の西側と東側の高さを比べた場合、柱穴の検出面は北側Ｐ１－Ｐ２－Ｐ３で28cm、南側Ｐ６－Ｐ７で18cm、西側の方が高い。さらに桁行の北側と南側では、Ｐ１－Ｐ４－Ｐ６で70cm、Ｐ３－Ｐ５－Ｐ７で60cm、北側の方が高い。Ｐ１とＰ６は柱穴が二段掘りとなっている。

| PitNO. | 桁行柱間 (m) | 桁行間(m) | PitNO. | 梁間柱間 (m) | 梁間間(m) | PitNO. | 深さ(cm) | 長径(cm) | 短径(cm) |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1～4 | 1.7 | 4.5 | 1～2 | 1.4 | 2.8 | 1 | 22.5 | 52 | 29 |
| 4～6 | 2.8 | | 2～3 | 1.4 | | 2 | 29.5 | 40 | 33 |
| | | | | | | 3 | 27.6 | 28 | 19 |
| 3～5 | 1.9 | 4.5 | 6～7 | 2.8 | 2.8 | 4 | 20.3 | 32 | 30 |
| 5～7 | 2.6 | | | | | 5 | 16.6 | 20 | 19 |
| | | | | | | 6 | 15.2 | 30 | 28 |
| | | | | | | 7 | 28.4 | 30 | 23 |

第４表　Ｖ１－ＳＢ０１計測表




第10図　Ｖ１－ＳＢ０１実測図

## Ｖ１－ＳＢ０２

桁行4.0ｍ、梁行妻3.1ｍの２間×１間の建物で、方位はＮ58° Ｗである。柱間寸法は、桁行Ｐ８～Ｐ10～Ｐ12で1.6ｍ＋2.4ｍ、Ｐ９～Ｐ11～Ｐ13で2.0ｍ＋2.0ｍ、梁行妻Ｐ８～Ｐ９で3.1ｍ、Ｐ12～Ｐ13で3.1ｍを測る。

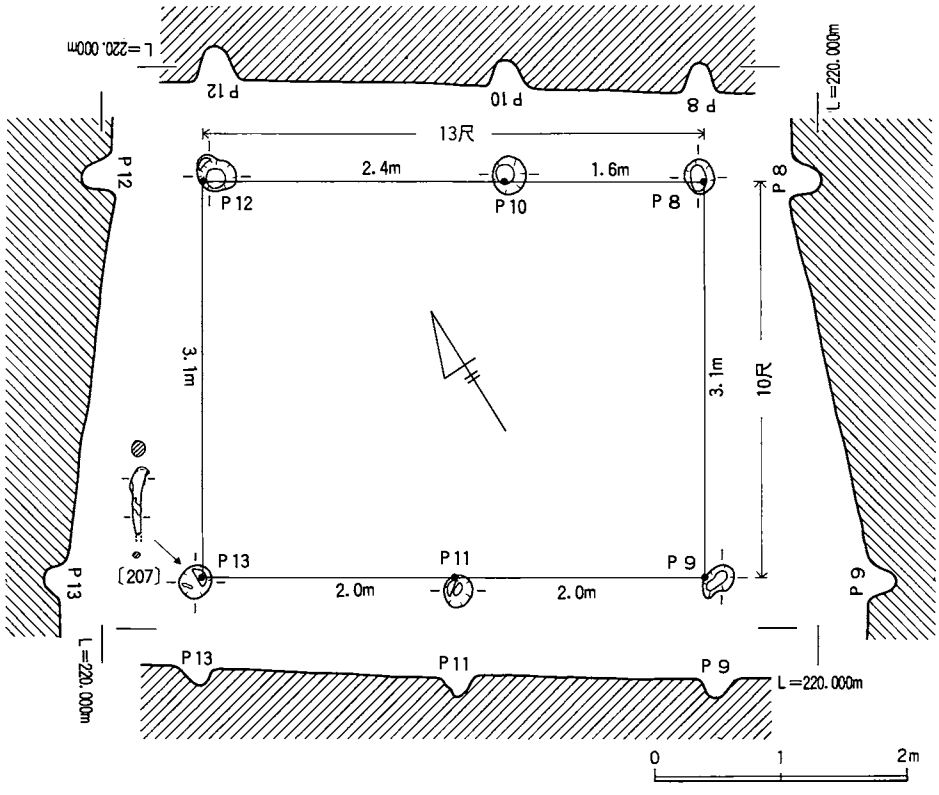
柱穴の大きさはＰ12が最大（33×23cm）、Ｐ11が最小（25×24cm）で平均値は28.3×23.8cmとなる。深さはＰ12が最深（25.3cm）、Ｐ11が最浅（16.8cm）で平均値は20.5cmである。

柱列は桁行Ｐ８～Ｐ10～Ｐ12を除いて、すべて千鳥の並びとなる。

桁行の北側と南側の高さを比べた場合、柱穴の検出面は東側Ｐ８－Ｐ９で42cm、西側Ｐ12－Ｐ13で45cm、北側の方が高い。Ｐ13の埋土から鉄器〔207〕が出土している。

| PitNO. | 桁行柱間 (m) | 桁行間(m) | PitNO. | 梁間柱間 (m) | 梁間間(m) | PitNO. | 深さ(cm) | 長径(cm) | 短径(cm) |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 8～10 | 1.6 | 4.0 | 8～9 | 3.1 | 3.1 | 8 | 23.1 | 27 | 24 |
| 10～12 | 2.4 | | | | | 9 | 18.2 | 30 | 19 |
| | | | | | | 10 | 21.3 | 29 | 27 |
| 9～11 | 2.0 | 4.0 | 12～13 | 3.1 | 3.1 | 11 | 16.8 | 25 | 24 |
| 11～13 | 2.0 | | | | | 12 | 25.3 | 33 | 23 |
| | | | | | | 13 | 18.0 | 26 | 26 |

第５表　Ｖ１－ＳＢ０２計測表




第11図　Ｖ１－ＳＢ０２実測図

## Ｖ１－ＳＢ０３

桁行4.2ｍ、梁行妻2.7ｍの２間×２間の建物で、方位はＳ82°Ｗである。柱間寸法は、桁行Ｐ14～Ｐ20で中央柱が２本に分かれ、Ｐ14～Ｐ17～Ｐ19～Ｐ20で1.3ｍ＋1.5ｍ＋1.4ｍ、Ｐ16～Ｐ18～Ｐ22は1.8ｍ＋2.4ｍとなり、梁行妻はＰ14～Ｐ15～Ｐ16で2.0ｍ＋0.7ｍ、Ｐ20～Ｐ21～Ｐ22で2.0ｍ＋0.7ｍを測る。

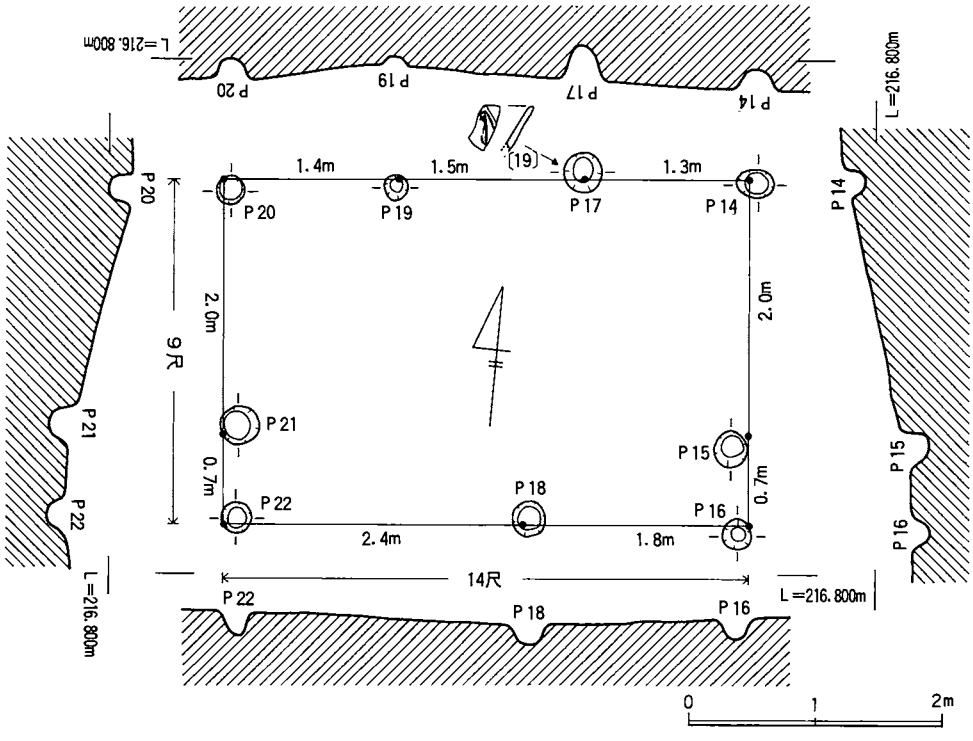
柱穴の大きさはＰ17が最大（32×32cm）、Ｐ19が最小（21×20cm）で平均値は27.1×24.8cmとなる。深さはＰ17が最深（32cm）、Ｐ19が最浅（10.9cm）で平均値は18.8cmである。

柱列は梁行妻Ｐ20～Ｐ21～Ｐ22を除いて、すべて千鳥の並びとなる。

桁行の北側と南側の高さを比べた場合、柱穴の検出面は東側Ｐ14－Ｐ15－Ｐ16で60cm、西側Ｐ20－Ｐ21－Ｐ22で55cm、北側の方が高い。Ｐ17から青磁〔19〕が出土している。

| PitNO. | 桁行柱間 (m) | 桁行間(m) | PitNO. | 梁間柱間 (m) | 梁間間(m) | PitNO. | 深さ(cm) | 長径(cm) | 短径(cm) |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 14～17 | 1.3 | | 14～15 | 2.0 | | 14 | 19.4 | 30 | 22 |
| 17～19 | 1.5 | 4.2 | 15～16 | 0.7 | 2.7 | 15 | 23.0 | 28 | 26 |
| 19～20 | 1.4 | | | | | 16 | 15.0 | 25 | 22 |
| | | | | | | 17 | 28.9 | 32 | 32 |
| 16～18 | 1.8 | 4.2 | 20～21 | 2.0 | 2.7 | 18 | 16.4 | 29 | 26 |
| 18～21 | 2.4 | | 21～22 | 0.7 | | 19 | 10.9 | 21 | 20 |
| | | | | | | 20 | 17.5 | 23 | 23 |
| | | | | | | 21 | 21.0 | 31 | 29 |
| | | | | | | 22 | 17.0 | 25 | 23 |

第６表　Ｖ１－ＳＢ０３計測表




第12図　Ｖ１－ＳＢ０３実測図

## Ｖ１－ＳＢ０４

桁行 4.5ｍ、梁行妻 2.7ｍの２間×２間の建物で、方位はＳ85°Ｗである。柱間寸法は、桁行Ｐ23～Ｐ27～Ｐ28で3.4ｍ＋1.1ｍ、Ｐ25～Ｐ26～Ｐ29で1.9ｍ＋2.6ｍ、梁行妻Ｐ23～Ｐ24～Ｐ25で1.1ｍ＋1.6ｍとなる。Ｐ28～Ｐ29は中央柱が不明で、全長2.7ｍを測る。

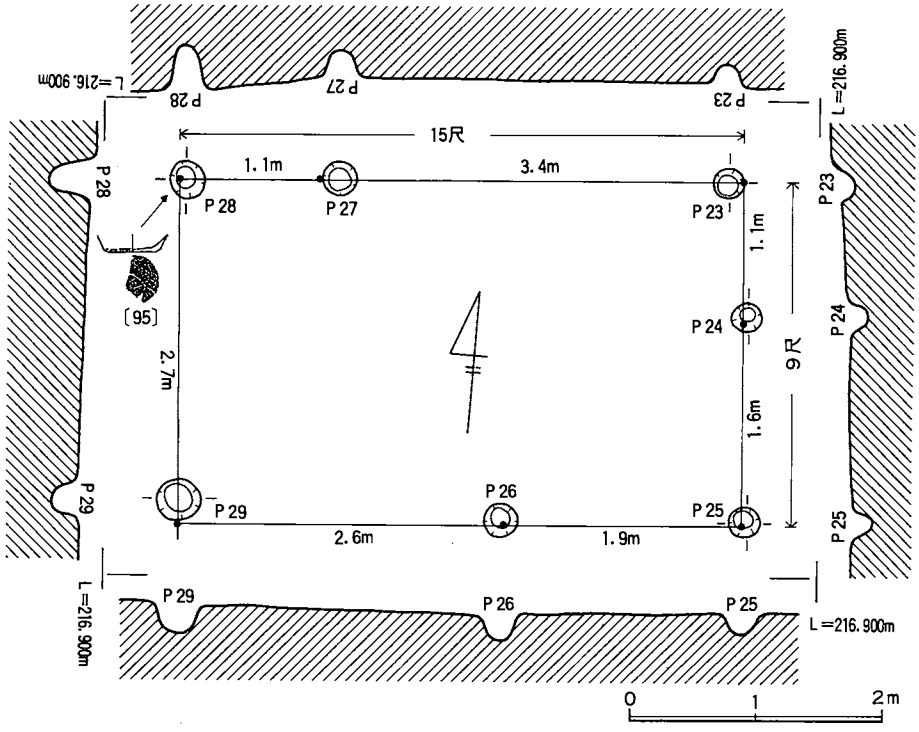
柱穴の大きさは、Ｐ29が最大（36×33cm）、Ｐ24が最小（24×23cm）で平均値は28.1×26.4cmとなる。深さはＰ28が最深（36.1cm）、Ｐ24が最浅（14.4cm）で、平均値は26.1cmである。

柱列は桁行Ｐ23～Ｐ27～Ｐ28を除いて千鳥の並びとなる。

Ｐ28から土師器坏〔95〕が出土している。

| PitNO. | 桁行柱間（m） | 桁行間(m) | PitNO. | 梁間柱間（m） | 梁間間(m) | PitNO. | 深さ(cm) | 長径(cm) | 短径(cm) |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 23～27 | 3.4 | } 4.5 | 23～24 | 1.1 | } 2.7 | 23 | 16.4 | 26 | 24 |
| 27～28 | 1.1 | | 24～25 | 1.6 | | 24 | 14.4 | 24 | 23 |
| | | | | | | 25 | 16.0 | 26 | 24 |
| 25～26 | 1.9 | } 4.5 | 28～29 | 2.7 | 2.7 | 26 | 22.0 | 28 | 26 |
| 26～29 | 2.6 | | | | | 27 | 22.5 | 27 | 27 |
| | | | | | | 28 | 36.1 | 30 | 29 |
| | | | | | | 29 | 24.0 | 36 | 32 |

第７表　Ｖ１－ＳＢ０４計測表




第13図　Ｖ１－ＳＢ０４実測図

## Ｖ１－ＳＢ０５

桁行4.4ｍ、梁行妻2.7ｍの２間×２間の建物で、方位はＮ20° Ｅである。柱間寸法は桁行Ｐ30～Ｐ33～Ｐ35で2.1＋2.3cm、Ｐ32～Ｐ34～Ｐ37で2.9ｍ＋1.5ｍ、梁行妻Ｐ30～Ｐ31～Ｐ32で1.9ｍ＋0.8ｍ、Ｐ35～Ｐ36～Ｐ37で1.9ｍ＋0.8ｍを測る。

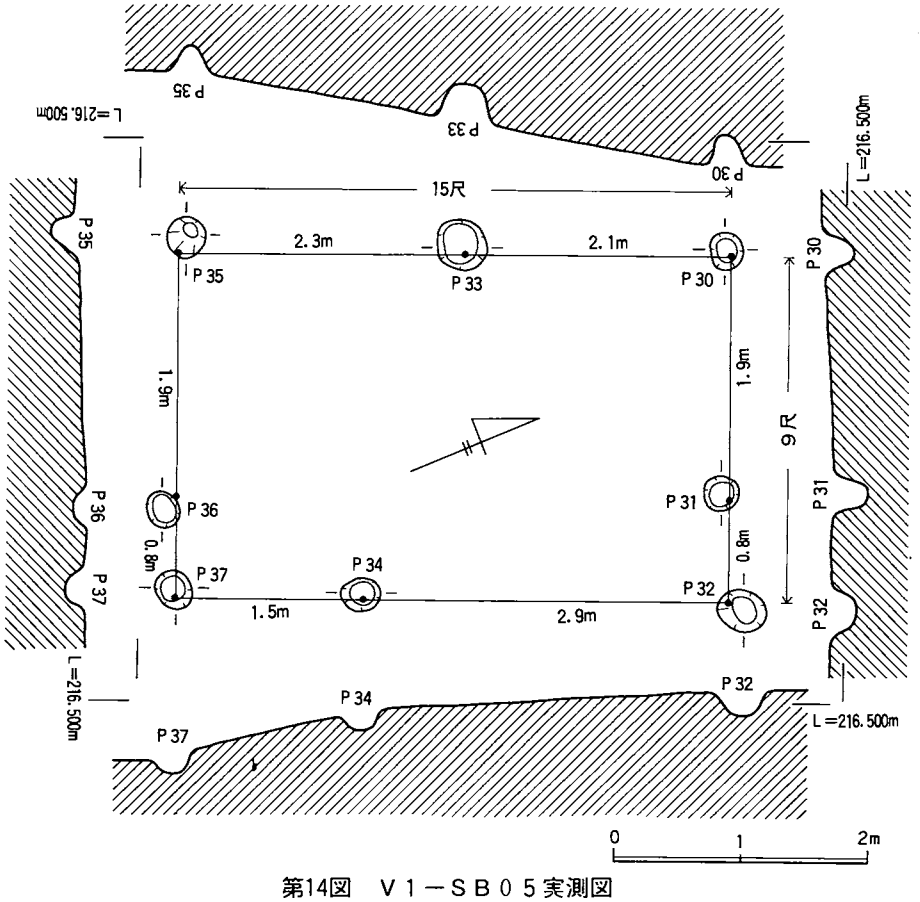
柱穴の大きさは、Ｐ33が最大（40×38cm）、Ｐ31が最小（28×26cm）で平均値は32.9×28.8cmとなる。深さはＰ33が最深（32.2cm）、Ｐ36が最浅（10.3cm）で平均値は21.7cmである。

柱列は桁行Ｐ30～Ｐ33～Ｐ35を除いて、すべて千鳥の並びとなる。

梁行妻の北側と南側の高さを比べた場合、柱穴の検出面は西側Ｐ30－Ｐ33－Ｐ35で63cm、東側Ｐ32－Ｐ34－Ｐ37で58cm、北側の方が高い。

| PitNO. | 桁行柱間 (m) | 桁行間(m) | PitNO. | 梁間柱間 (m) | 梁間間(m) | PitNO. | 深さ(cm) | 長径(cm) | 短径(cm) |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 30～33 | 2.1 | 4.4 | 30～31 | 1.9 | 2.7 | 30 | 25.0 | 29 | 26 |
| 33～35 | 2.3 | | 31～32 | 0.8 | | 31 | 27.0 | 28 | 26 |
| | | | | | | 32 | 21.0 | 38 | 30 |
| 32～34 | 2.9 | 4.4 | 35～36 | 1.9 | 2.7 | 33 | 32.2 | 40 | 38 |
| 34～37 | 1.5 | | 36～37 | 0.8 | | 34 | 17.4 | 32 | 27 |
| | | | | | | 35 | 22.8 | 35 | 30 |
| | | | | | | 36 | 10.3 | 30 | 26 |
| | | | | | | 37 | 18.0 | 31 | 27 |

第８表　Ｖ１－ＳＢ０５計測表




第14図　Ｖ１－ＳＢ０５実測図

## Ｖ１－ＳＢ０６

桁行4.0ｍ、梁行妻3.0ｍの２間×１間の建物で、方位はＳ74°Ｗである。柱間寸法は、桁行Ｐ38～Ｐ40～Ｐ42で1.4ｍ＋2.6ｍ、Ｐ39～Ｐ41～Ｐ43で1.4ｍ＋2.6ｍ、梁行妻Ｐ38～Ｐ39で3.0ｍ、Ｐ42～Ｐ43で3.0ｍを測る。

柱穴の大きさはＰ42が最大（34×33cm）、Ｐ39が最小（22×22cm）で平均値は28×27cmとなる。深さはＰ39が最深（28.5cm）、Ｐ38が最浅（14.5cm）で平均値は21.9cmである。

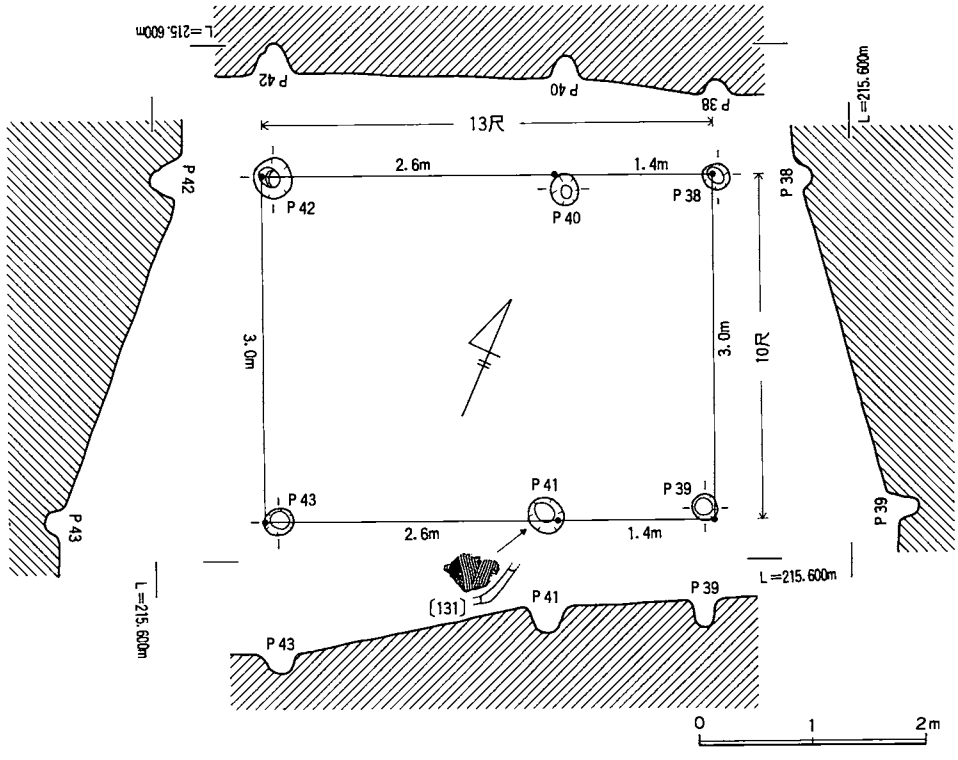
柱列は梁行妻Ｐ42～Ｐ43を除いて、すべて千鳥の並びとなる。

梁行妻の東側と西側の高さを比べた場合、柱穴の検出面は北側Ｐ38－Ｐ40－Ｐ42で20cm、南側Ｐ39－Ｐ41－Ｐ43で45cm、東側の方が高い。さらに桁行の北側と南側では、東側Ｐ38－Ｐ39で93cm、西側Ｐ42－Ｐ43で110cm、北側の方が高い。Ｐ42は二段掘りとなる。

Ｐ41から瓦質擂鉢〔131〕が出土している。

| PitNO. | 桁行柱間 (m) | 桁行間(m) | PitNO. | 梁間柱間 (m) | 梁間間(m) | PitNO. | 深さ(cm) | 長径(cm) | 短径(cm) |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 38～40 | 1.4 | 4.0 | 38～39 | 3.0 | 3.0 | 38 | 14.5 | 24 | 22 |
| 40～42 | 2.6 | | | | | 39 | 28.5 | 22 | 22 |
| | | | | | | 40 | 19.0 | 27 | 25 |
| 39～41 | 1.4 | 4.0 | 42～43 | 3.0 | 3.0 | 41 | 26.0 | 34 | 31 |
| 41～43 | 2.6 | | | | | 42 | 27.5 | 34 | 33 |
| | | | | | | 43 | 15.8 | 27 | 29 |

第９表　Ｖ１－ＳＢ０６計測表




第15図　Ｖ１－ＳＢ０６実測図

## Ｖ１－ＳＢ０７

桁行5.7cm、梁行妻2.9ｍの２間×２間の建物で、方位はＳ87°Ｗである。柱間寸法は桁行Ｐ44～Ｐ47～Ｐ49で2.7ｍ＋3.0ｍ、Ｐ46～Ｐ48～Ｐ51で2.7ｍ＋3.0ｍ、梁行妻Ｐ44～Ｐ45～Ｐ46で1.45ｍ＋1.45ｍ、Ｐ49～Ｐ50～Ｐ51で1.9ｍ＋1.0ｍを測る。

柱穴の大きさは、Ｐ49が最大（39×33cm）、Ｐ44が最小（25×23cm）で平均値は31.5×29.4cmとなる。深さはＰ46が最深（28.2cm）、Ｐ47が最浅（7.4cm）で平均値は16.7cmである。

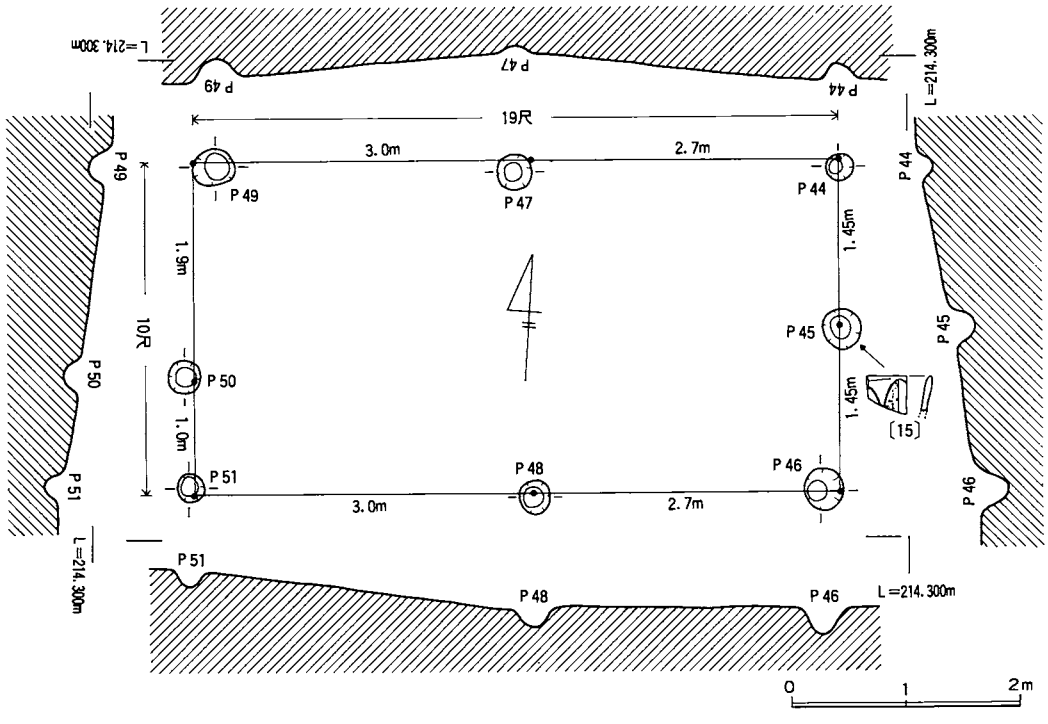
柱列は両梁行妻を除き千鳥の並びとなる。

梁行妻の東側と西側の高さを比べた場合、柱穴の検出面は南側Ｐ46－Ｐ48－Ｐ51で34cm、西側の方が高く、北側Ｐ44－Ｐ47－Ｐ49では中央部のＰ47でやや窪む。さらに桁行の北側と南側では、東側Ｐ44－Ｐ45－Ｐ46で56cm、西側Ｐ49－Ｐ50－Ｐ51で50cm、北側の方が高い。

Ｐ45から青磁〔15〕が出土している。

| PitNO. | 桁行柱間 (m) | 桁行間(m) | PitNO. | 梁間柱間 (m) | 梁間間(m) | PitNO. | 深さ(cm) | 長径(cm) | 短径(cm) |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 44～47 | 2.7 | 5.7 | 44～45 | 1.45 | 2.9 | 44 | 13.5 | 25 | 23 |
| 47～49 | 3.0 | | 45～46 | 1.45 | | 45 | 22.0 | 36 | 34 |
| | | | | | | 46 | 28.2 | 35 | 34 |
| 46～48 | 2.7 | 5.7 | 49～50 | 1.9 | 2.9 | 47 | 7.4 | 32 | 31 |
| 48～51 | 3.0 | | 50～51 | 1.0 | | 48 | 14.8 | 31 | 28 |
| | | | | | | 49 | 21.2 | 39 | 33 |
| | | | | | | 50 | 11.0 | 29 | 28 |
| | | | | | | 51 | 15.4 | 25 | 24 |

第10表　Ｖ１－ＳＢ０７計測表




第16図　Ｖ１－ＳＢ０７実測図

## Ｖ１－ＳＢ０８

桁行3.6ｍ、梁行妻2.3ｍの２間×２間の建物で、方位はＳ84°Ｗである。柱間寸法は、桁行Ｐ52～Ｐ55～Ｐ57で1.8ｍ＋1.8ｍ、Ｐ54～Ｐ56～Ｐ59で1.8ｍ＋1.8ｍ、梁行妻Ｐ52～Ｐ53～Ｐ54で1.15ｍ＋1.15ｍ、Ｐ57～Ｐ58～Ｐ59で1.15ｍ＋1.15ｍを測る。

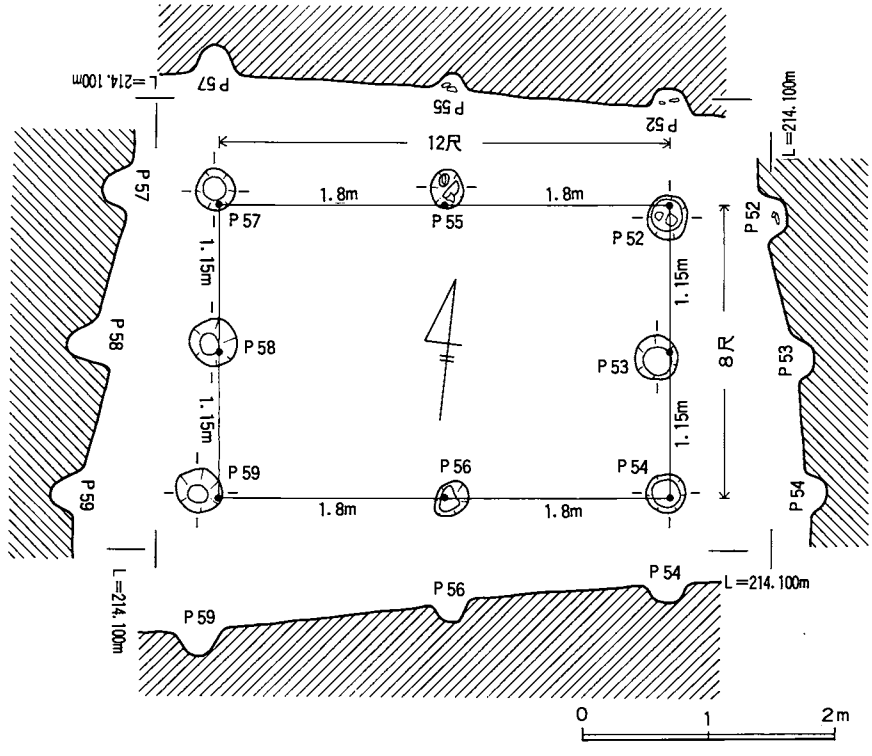
柱穴の大きさは、Ｐ58が最大（36×36cm）、Ｐ55が最小（30×26cm）で平均値は33.4×31.0cmとなる。深さはＰ58が最深（33cm）、Ｐ55が最浅（13.8cm）で平均値は33.7cmである。

梁行妻の西側と東側の高さを比べた場合、柱穴の検出面は北側Ｐ52－Ｐ55－Ｐ57で40cm、南側Ｐ54－Ｐ56－Ｐ59で41cmで東側の方が高い。さらに桁行の北側と南側では、東側Ｐ52－Ｐ53－Ｐ54で40cm、西側Ｐ57－Ｐ58－Ｐ59で50cm、北側の方が高い。

Ｐ52とＰ55からは小石が出土した。

| PitNO. | 桁行柱間 (m) | 桁行間(m) | PitNO. | 梁間柱間 (m) | 梁間間(m) | PitNO. | 深さ(cm) | 長径(cm) | 短径(cm) |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 52～55 | 1.8 | 3.6 | 52～53 | 1.15 | 2.3 | 52 | 22.0 | 36 | 31 |
| 55～57 | 1.8 | | 53～54 | 1.15 | | 53 | 16.8 | 34 | 33 |
| | | | | | | 54 | 15.3 | 30 | 30 |
| 54～56 | 1.8 | 3.6 | 57～58 | 1.15 | 2.3 | 55 | 13.8 | 30 | 26 |
| 56～59 | 1.8 | | 58～59 | 1.15 | | 56 | 17.8 | 31 | 27 |
| | | | | | | 57 | 27.0 | 33 | 31 |
| | | | | | | 58 | 33.0 | 36 | 36 |
| | | | | | | 59 | 25.7 | 37 | 34 |

第11表　Ｖ１－ＳＢ０８計測表




第17図　Ｖ１－ＳＢ０８実測図

## Ｖ１－ＳＢ０９

桁行4.4ｍ、梁行妻2.6ｍの２間×２間の建物で、方位はＳ72°Ｗである。柱間寸法は、桁行Ｐ60～Ｐ63～Ｐ65で2.0ｍ＋2.4ｍ、Ｐ62～Ｐ64～Ｐ67で2.0ｍ＋2.4ｍ、梁行妻Ｐ60～Ｐ61～Ｐ62で1.3ｍ＋1.3ｍ、Ｐ65～Ｐ66～Ｐ67で1.0ｍ＋1.6ｍを測る。

柱穴の大きさは、Ｐ65が最大（40×35cm）、Ｐ60が最小（22×19cm）で平均値は32.8×28.8cmとなる。深さはＰ65が最深（27.6cm）、Ｐ62が最浅（11.2cm）で平均値は18.8cmである。

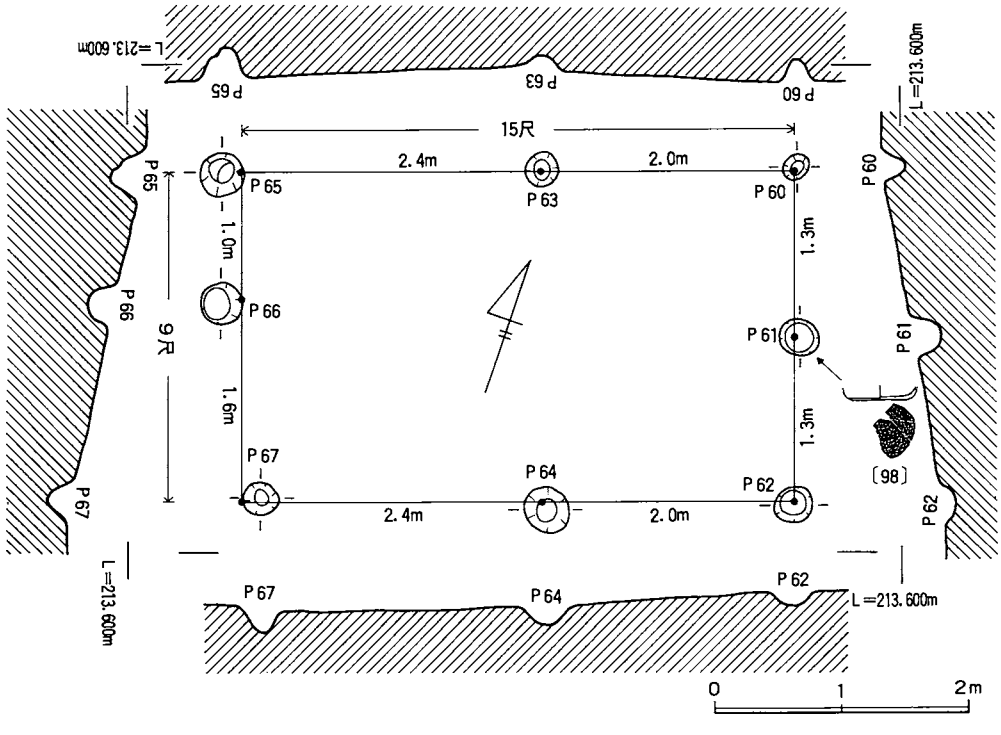
柱列は梁行妻Ｐ65～Ｐ66～Ｐ67のみが千鳥の並びとなる。

桁行の北側と南側の高さを比べた場合、柱穴の検出面は東側Ｐ60－Ｐ61－Ｐ62で52cm、西側Ｐ65－Ｐ66－Ｐ67で60cm、北側の方が高い。Ｐ65は西側が二段掘りとなっている。

Ｐ61から土師器坏〔98〕が出土した。

| PitNO. | 桁行柱間 (m) | 桁行間(m) | PitNO. | 梁間柱間 (m) | 梁間間(m) | PitNO. | 深さ(cm) | 長径(cm) | 短径(cm) |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 60～63 | 2.0 | } 4.4 | 60～61 | 1.3 | } 2.6 | 60 | 17.4 | 22 | 19 |
| 63～65 | 2.4 | | 61～62 | 1.3 | | 61 | 23.0 | 32 | 28 |
| | | | | | | 62 | 11.2 | 31 | 29 |
| 62～64 | 2.0 | } 4.4 | 65～66 | 1.0 | } 2.6 | 63 | 12.5 | 36 | 26 |
| 64～67 | 2.4 | | 66～67 | 1.6 | | 64 | 17.0 | 37 | 34 |
| | | | | | | 65 | 27.6 | 40 | 35 |
| | | | | | | 66 | 20.7 | 34 | 32 |
| | | | | | | 67 | 21.0 | 30 | 27 |

第12表　Ｖ１－ＳＢ０９計測表




第18図　Ｖ１－ＳＢ０９実測図

## Ｖ１－ＳＢ１０

桁行4.5ｍ、梁行妻2.5ｍの２間×２間の建物で、方向はＳ57°Ｗである。柱間寸法は、桁行Ｐ68～Ｐ70～Ｐ72で1.7ｍ＋2.8ｍ、Ｐ69～Ｐ71～Ｐ74で2.1ｍ＋2.4ｍ、梁行妻Ｐ72～Ｐ73～Ｐ74で1.25ｍ＋1.25ｍとなる。Ｐ68～Ｐ69は中央柱が不明で、全長2.5ｍを測る。

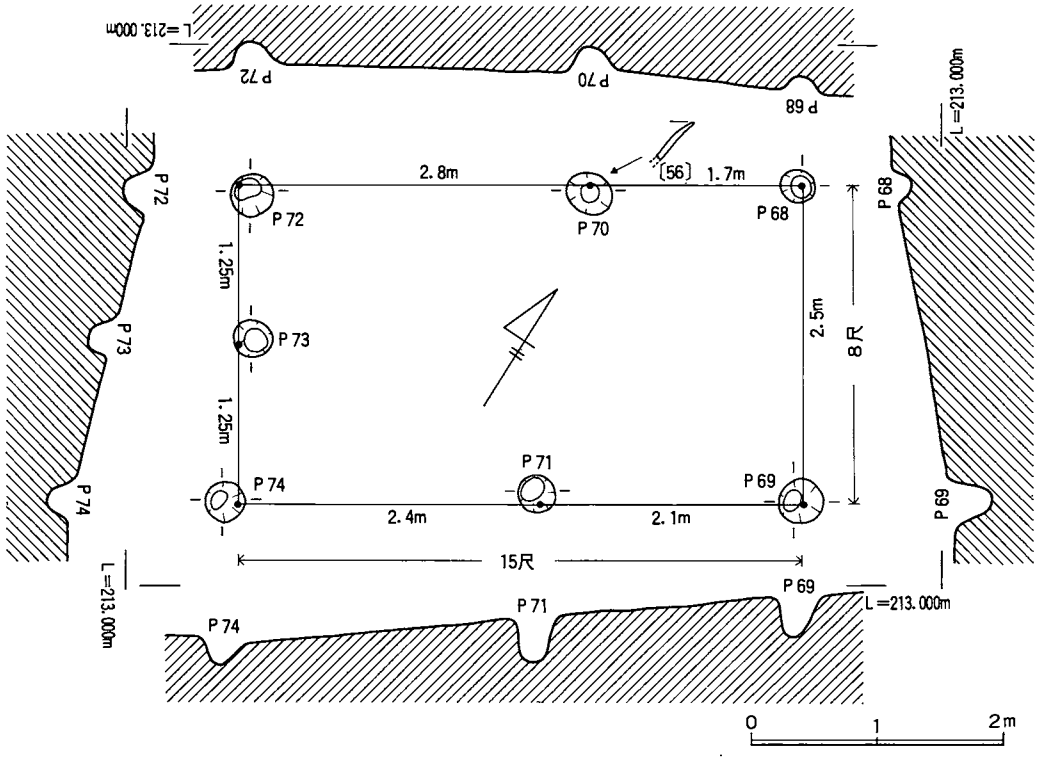
柱穴の大きさは、Ｐ70が最大（38×32cm）、Ｐ68が最小（29×24cm）で平均値は32.9×30.4cmとなる。深さはＰ71が最深（38.5cm）、Ｐ68が最浅（15.2cm）で平均値は25.5cmである。

柱列は梁行妻Ｐ72～Ｐ73～Ｐ74のみが千鳥の並びとなる。

桁行の北側と南側の高さを比べた場合、柱穴の検出面は東側Ｐ68－Ｐ69で50cm、西側Ｐ72－Ｐ73－Ｐ74で66cm、北側の方が高い。さらに梁行妻の東側と西側では、北側Ｐ68－Ｐ70－Ｐ72で20cm、南側Ｐ69－Ｐ71－Ｐ74で24cm、東側の方が高い。Ｐ70から白磁〔56〕が出土した。

| PitNO. | 桁行柱間 (m) | 桁行間(m) | PitNO. | 梁間柱間 (m) | 梁間間(m) | PitNO. | 深さ(cm) | 長径(cm) | 短径(cm) |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 68～70 | 1.7 | } 4.5 | 68～69 | 2.5 | 2.5 | 68 | 15.2 | 29 | 24 |
| 70～72 | 2.8 | | | | | 69 | 33.8 | 35 | 24 |
| | | | | | | 70 | 23.0 | 38 | 32 |
| 69～71 | 2.1 | } 4.5 | 72～73 | 1.25 | } 2.5 | 71 | 38.5 | 30 | 30 |
| 71～74 | 2.4 | | 73～74 | 1.25 | | 72 | 22.0 | 34 | 34 |
| | | | | | | 73 | 23.0 | 32 | 28 |
| | | | | | | 74 | 23.0 | 32 | 31 |

第13表　Ｖ１－ＳＢ１０計測表




第19図　Ｖ１－ＳＢ１０実測図

## Ｖ１－ＳＢ１１

桁行4.3ｍ、梁行妻2.3ｍの２間×１間の建物で、方位はＮ30°Ｗである。柱間寸法は、桁行Ｐ75～Ｐ77～Ｐ79で2.7ｍ＋1.6ｍ、Ｐ76～Ｐ78～Ｐ80で2.7ｍ＋1.6ｍ、梁行妻Ｐ75～Ｐ76で2.3ｍ、Ｐ79～Ｐ80で2.3ｍを測る。

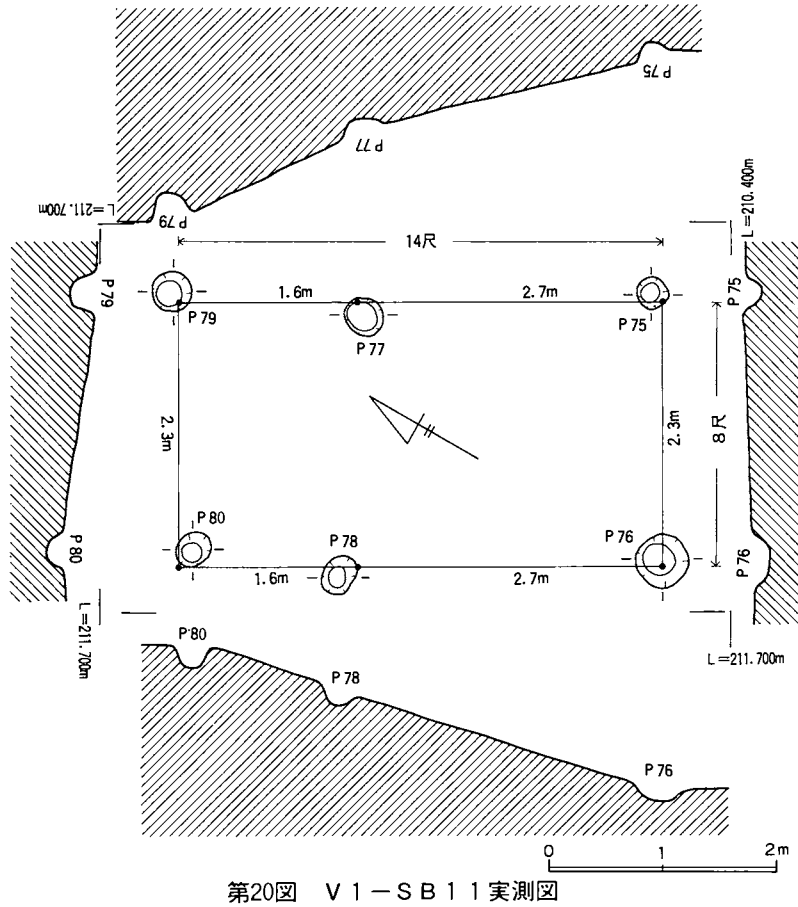
柱穴の大きさは、Ｐ76が最大（48×46cm）、Ｐ75が最小（27×27cm）で平均値は35.3×32.8cmとなる。深さはＰ79が最深（24.7cm）、Ｐ77が最浅（15.5cm）で平均値は19.4cmである。

柱列はすべて千鳥の並びとなる。

梁行妻の東側と西側の高さを比べた場合、柱穴の検出面は北側Ｐ75－Ｐ77－Ｐ79で148cm、南側Ｐ76－Ｐ78－Ｐ80で142cm、西側の方が高い。さらに桁行の北側と南側では、西側Ｐ79－Ｐ80で31cm、北側の方が高い。

| PitNO. | 桁行柱間 (m) | 桁行間(m) | PitNO. | 梁間柱間 (m) | 梁間間(m) | PitNO. | 深さ(cm) | 長径(cm) | 短径(cm) |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 75～77 | 2.7 | 4.3 | 75～76 | 2.3 | 2.3 | 75 | 19.0 | 27 | 27 |
| 77～79 | 1.6 | | | | | 76 | 18.0 | 48 | 46 |
| | | | | | | 77 | 15.5 | 36 | 33 |
| 76～78 | 2.7 | 4.3 | 79～80 | 2.3 | 2.3 | 78 | 19.7 | 36 | 27 |
| 78～80 | 1.6 | | | | | 79 | 24.7 | 35 | 34 |
| | | | | | | 80 | 19.3 | 30 | 30 |

第14表　Ｖ１－ＳＢ１１計測表




第20図　Ｖ１－ＳＢ１１実測図

## Ｖ１－ＳＢ１２

桁行5.4ｍ、梁行妻2.8ｍの３間×２間の建物で、方位はＳ56°Ｗである。柱間寸法は、桁行Ｐ81～Ｐ84～Ｐ86～Ｐ88で1.6ｍ＋1.9ｍ＋1.9ｍ、Ｐ83～Ｐ85～Ｐ87～Ｐ90で1.6ｍ＋1.9ｍ＋1.9ｍ、梁行妻Ｐ81～Ｐ82～Ｐ83で2.1ｍ＋0.7ｍ、Ｐ88～Ｐ89～Ｐ90で1.6ｍ＋1.2ｍを測る。

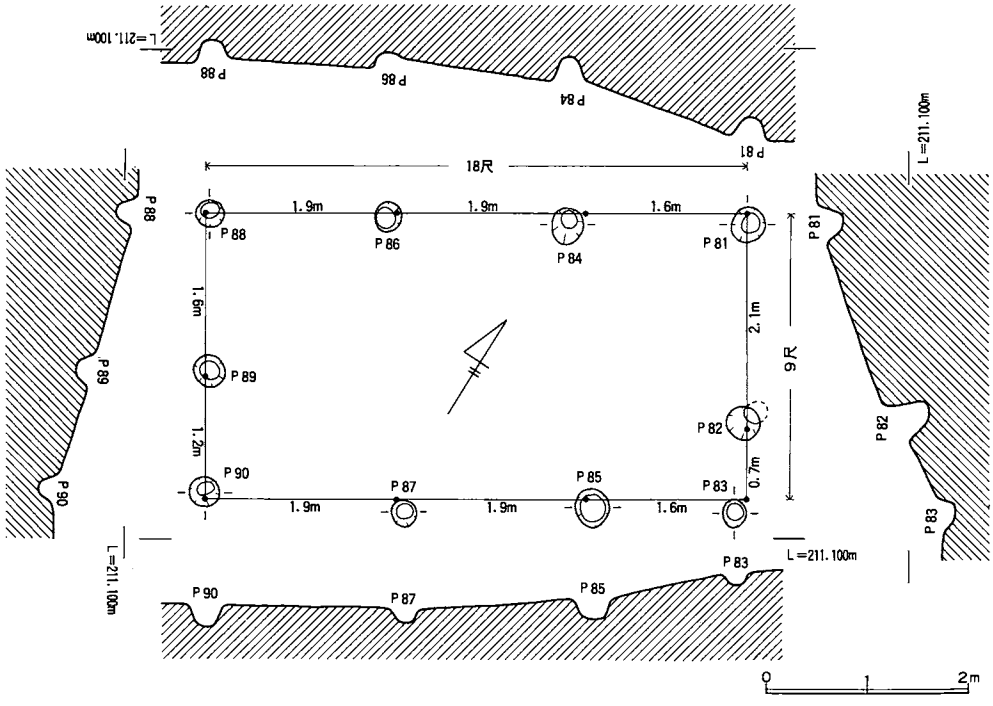
柱穴の大きさは、Ｐ85が最大（38×35cm）、Ｐ83・Ｐ87が最小（27×24cm）で平均値は31.9×29cmとなる。深さはＰ82が最深（43.7cm）、Ｐ86が最浅（15.9cm）で平均値は23.7cmである。

柱列は桁行Ｐ83～Ｐ85～Ｐ87～Ｐ90が千鳥の並びとなる。

桁行の北側と南側の高さを比べた場合、柱穴の検出面は東側Ｐ81－Ｐ82－Ｐ83で107cm、西側Ｐ88－Ｐ89－Ｐ90で82cm、北側の方が高い。さらに梁行妻の東側と西側では、北側Ｐ81－Ｐ84－Ｐ86－Ｐ88で80cm、南側Ｐ83－Ｐ85－Ｐ87－Ｐ90で32cm、東側が高い。

| PitNO. | 桁行柱間 (m) | 桁行間(m) | PitNO. | 梁間柱間 (m) | 梁間間(m) | PitNO. | 深さ(cm) | 長径(cm) | 短径(cm) |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 81～84 | 1.6 | | 81～82 | 2.1 | | 81 | 23.4 | 36 | 31 |
| 84～86 | 1.9 | } 5.4 | 82～83 | 0.7 | } 2.8 | 82 | 43.7 | 35 | 33 |
| 86～88 | 1.9 | | | | | 83 | 17.0 | 27 | 24 |
| | | | | | | 84 | 30.2 | 35 | 32 |
| 83～85 | 1.6 | | 88～89 | 1.6 | | 85 | 24.7 | 38 | 35 |
| 85～87 | 1.9 | } 5.4 | 89～90 | 1.2 | } 2.8 | 86 | 15.9 | 28 | 27 |
| 87～90 | 1.9 | | | | | 87 | 17.0 | 27 | 24 |
| | | | | | | 88 | 21.0 | 28 | 25 |
| | | | | | | 89 | 18.4 | 34 | 30 |
| | | | | | | 90 | 26.0 | 31 | 29 |

第15表　Ｖ１－ＳＢ１２計測表




第21図　Ｖ１－ＳＢ１２実測図

## Ｖ１－ＳＢ１３

桁行3.6ｍ、梁行妻2.9ｍの２間×２間の建物で、方位はＮ57°Ｗである。柱間寸法は、桁行Ｐ91～Ｐ94～Ｐ96で2.0ｍ＋1.6ｍ、Ｐ93～Ｐ95～Ｐ98で2.0ｍ＋1.6ｍ、梁行妻Ｐ91～Ｐ92～Ｐ93で1.3ｍ＋1.6ｍ、Ｐ96～Ｐ97～Ｐ98で1.6ｍ＋1.3ｍを測る。

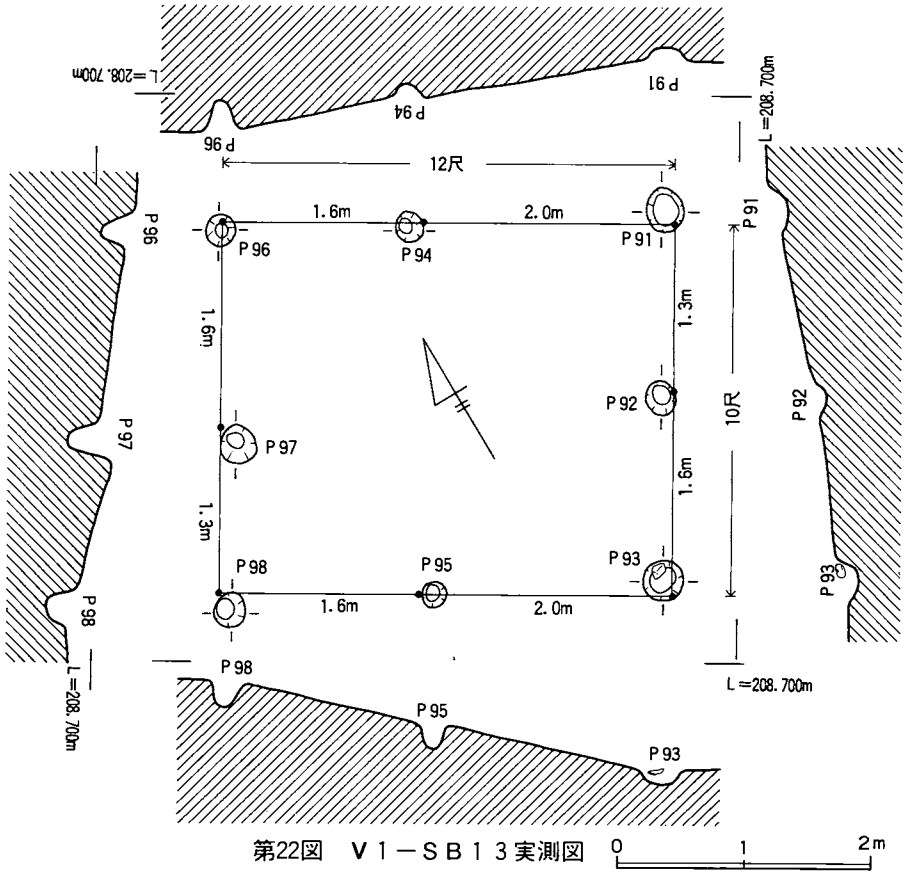
柱穴の大きさは、Ｐ91が最大（34×30cm）、Ｐ95が最小（22×19cm）で平均値は28×26.5cmとなる。深さはＰ96が最深（25.5cm）、Ｐ92が最浅（10cm）で平均値は18.1cmである。

柱列は梁行妻Ｐ91～Ｐ92～Ｐ93を除いて、千鳥の並びとなる。

桁行の北側と南側の高さを比べた場合、柱穴の検出面は東側Ｐ91－Ｐ92－Ｐ93で70cm、西側Ｐ96－Ｐ97－Ｐ98で50cm、北側の方が高い。さらに梁行妻の東側と西側では、北側Ｐ91－Ｐ94－Ｐ96で57cm、南側Ｐ93－Ｐ95－Ｐ98で72cm、西側の方が高い。Ｐ93から小石が出土している。

| PitNO. | 桁行柱間 (m) | 桁行間(m) | PitNO. | 梁間柱間 (m) | 梁間間(m) | PitNO. | 深さ(cm) | 長径(cm) | 短径(cm) |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 91～94 | 2.0 | 3.6 | 91～92 | 1.3 | 2.9 | 91 | 14.0 | 34 | 30 |
| 94～96 | 1.6 | | 92～93 | 1.6 | | 92 | 10.0 | 26 | 24 |
| | | | | | | 93 | 16.0 | 33 | 31 |
| 93～95 | 2.0 | 3.6 | 96～97 | 1.6 | 2.9 | 94 | 13.4 | 24 | 23 |
| 95～98 | 1.6 | | 97～98 | 1.3 | | 95 | 17.0 | 22 | 19 |
| | | | | | | 96 | 25.5 | 27 | 24 |
| | | | | | | 97 | 25.0 | 30 | 27 |
| | | | | | | 98 | 23.6 | 28 | 24 |

第16表　Ｖ１－ＳＢ１３計測表




第22図　Ｖ１－ＳＢ１３実測図

## Ｖ１－ＳＢ１４

桁行4.8ｍ、梁行妻2.8ｍの３間×３間の建物で、方位はＳ65°Ｗである。柱間寸法は、桁行Ｐ99～Ｐ103～Ｐ105～Ｐ107で1.0ｍ＋1.7ｍ＋2.1ｍ、Ｐ102～Ｐ104～Ｐ106～Ｐ109で1.6ｍ＋1.6ｍ＋1.6ｍ、梁行妻Ｐ107～Ｐ108～Ｐ109で2.0ｍ＋0.8ｍとなる。東側の梁行妻については補助柱が加わり、Ｐ99～Ｐ100～Ｐ101～Ｐ102で1.0ｍ＋1.0ｍ＋0.8ｍを測る。

柱穴の大きさは、Ｐ106が最大（32×28cm）、Ｐ105が最小（23×21cm）で平均値は27.8×25.3cmとなる。深さはＰ99・Ｐ104が最深（30cm）、Ｐ105が最浅（14cm）で平均値は22.5cmである。

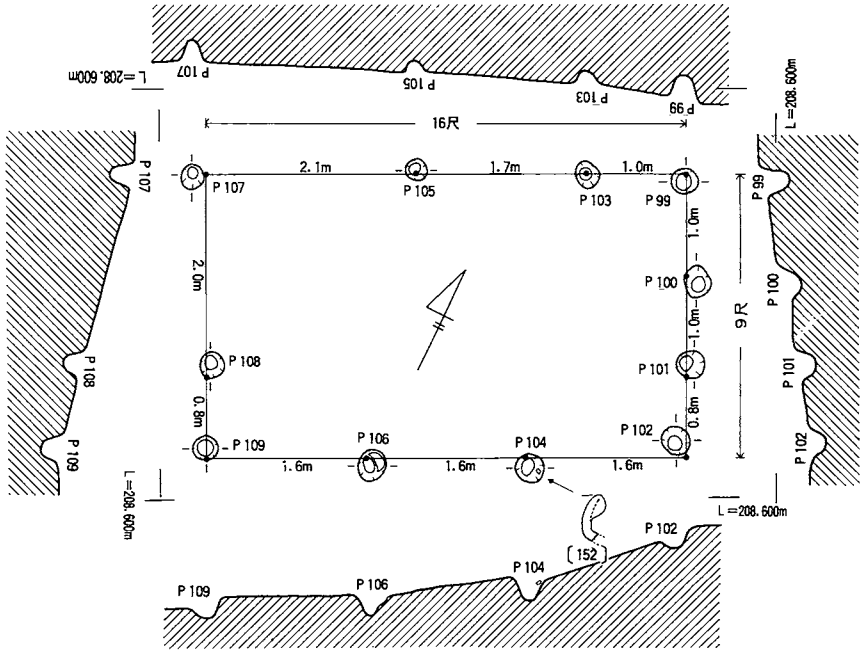
柱列はすべて千鳥の並びとなる。

桁行の北側と南側の高さを比べた場合、柱穴の検出面は東側Ｐ99－Ｐ100－Ｐ101－Ｐ102で48cm、西側Ｐ107－Ｐ108－Ｐ109で76cm、北側の方が高い。さらに梁行妻の東側と西側では、北側Ｐ99－Ｐ103－Ｐ105－Ｐ107で44cm、南側Ｐ102－Ｐ104－Ｐ106－Ｐ109で90cm、東側の方が高い。

Ｐ104から備前の甕片〔152〕が出土している。

| Pit NO. | 桁行柱間 (m) | 桁行間(m) | Pit NO. | 梁間柱間 (m) | 梁間間(m) | PitNO. | 深さ(cm) | 長径(cm) | 短径(cm) |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 99～103 | 1.0 | | 99～100 | 1.0 | | 99 | 30.0 | 29 | 25 |
| 103～105 | 1.7 | } 4.8 | 100～101 | 1.0 | } 2.8 | 100 | 23.0 | 30 | 27 |
| 105～107 | 2.1 | | 101～102 | 0.8 | | 101 | 20.0 | 29 | 28 |
| | | | | | | 102 | 21.0 | 31 | 28 |
| 102～104 | 1.6 | | 107～108 | 2.0 | } 2.8 | 103 | 17.0 | 27 | 25 |
| 104～106 | 1.6 | } 4.8 | 108～109 | 0.8 | | 104 | 30.0 | 29 | 28 |
| 106～109 | 1.6 | | | | | 105 | 14.0 | 23 | 21 |
| | | | | | | 106 | 23.5 | 32 | 28 |
| | | | | | | 107 | 23.0 | 24 | 21 |
| | | | | | | 108 | 22.0 | 26 | 24 |
| | | | | | | 109 | 23.5 | 26 | 24 |

第17表　Ｖ１－ＳＢ１４計測表




第23図　Ｖ１－ＳＢ１４実測図

## Ｖ１－ＳＢ１５

桁行4.2ｍ、梁行妻2.4ｍの３間×１間の建物で、方位はＮ31°Ｗである。柱間寸法は、桁行Ｐ111～Ｐ113～Ｐ116で1.4ｍ＋2.8ｍであるが、北側の桁行については補助柱が加わり、Ｐ110～Ｐ112～Ｐ114～Ｐ115で1.0ｍ＋2.2ｍ＋1.0ｍを測る。梁行妻はＰ110～Ｐ111で2.4ｍ、Ｐ115～Ｐ116で2.4ｍである。

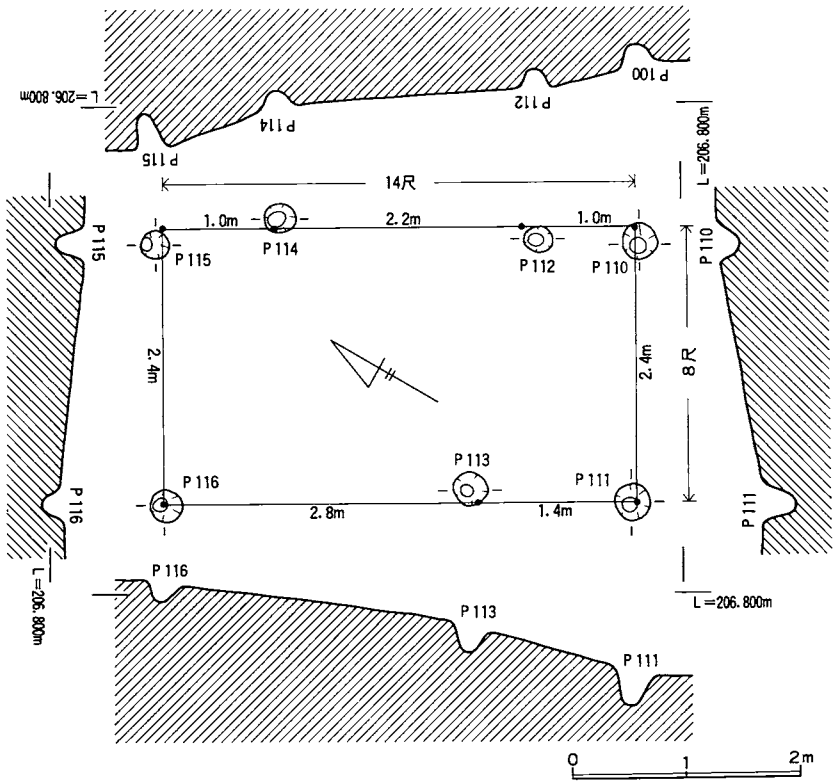
柱穴の大きさは、Ｐ111が最大（32×31cm）、Ｐ112が最小（25×23cm）で平均値は28.6×26.9cmとなる。深さはＰ111が最深（35cm）、Ｐ114が最浅（16.5cm）で平均値は24.6cmである。

柱列は梁行妻Ｐ110～Ｐ111を除いて千鳥の並びとなる。

桁行の北側と南側の高さを比べた場合、柱穴の検出面は東側Ｐ110－Ｐ111で39cm、西側Ｐ115－Ｐ116で19cm、北側の方が高い。さらに梁行妻の東側と西側では、北側Ｐ110－Ｐ112－Ｐ114－Ｐ115で75cm、南側Ｐ111－Ｐ113－Ｐ116で88cm、西側の方が高い。

| Pit NO. | 桁行柱間 (m) | 桁行間(m) | Pit NO. | 梁間柱間 (m) | 梁間間(m) | PitNO. | 深さ(cm) | 長径(cm) | 短径(cm) |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 110～112 | 1.0 | } 4.2 | 110～111 | 2.4 | 2.4 | 110 | 21.0 | 32 | 30 |
| 112～114 | 2.2 | | | | | 111 | 35.0 | 32 | 31 |
| 114～115 | 1.0 | | | | | 112 | 19.0 | 25 | 23 |
| | | | | | | 113 | 29.0 | 30 | 28 |
| 111～113 | 1.4 | } 4.2 | 115～116 | 2.4 | 2.4 | 114 | 16.5 | 28 | 26 |
| 113～116 | 2.8 | | | | | 115 | 31.0 | 25 | 24 |
| | | | | | | 116 | 20.6 | 28 | 26 |

第18表　Ｖ１－ＳＢ１５計測表



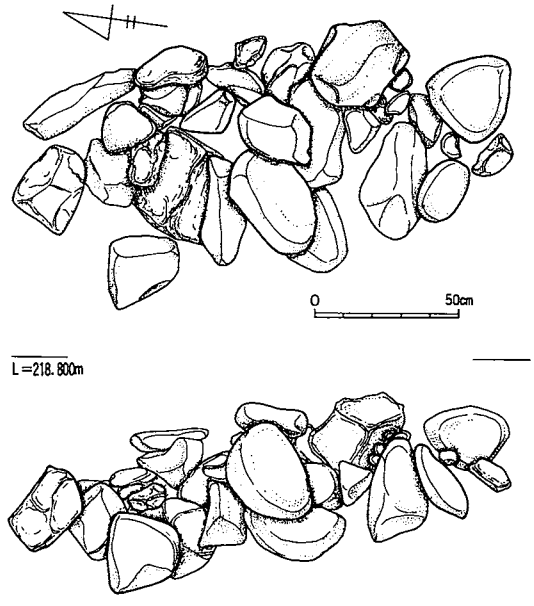

第24図　Ｖ１－ＳＢ１５実測図

## 集　石　1

迫地、上段近くの標高218.0ｍラインから検出された。長さ1.7ｍ（主軸方位はＳ72°W)、最大幅0.85ｍ、高さ0.55ｍに積み上げられており、平面的には楕円形状を呈する。個々の石は、一抱えもあるもの（長さ35cm・幅25cm・高さ20～25cm・重さ13.5kg）から、こぶし大の礫まで大小さまざまである。大石13個、小石８個、中間の石７個を数えた。石質は砂岩と地山産の凝灰岩で、砂岩は川原石で持ち込みによるものである。大石は、ほとんど砂岩である。凝灰岩は、割り石のものが多かった。

石は東側から西側への緩傾斜地に積まれており、石下に土坑の類はなかった。何かに使用されていた物が破棄後に積まれたものか、戦闘用の投げ石の類が意図的に積まれたものかは不明である。

隣接地の高城跡からも同種の集石が検出されているがこの場合、土坑内からの出土であった。

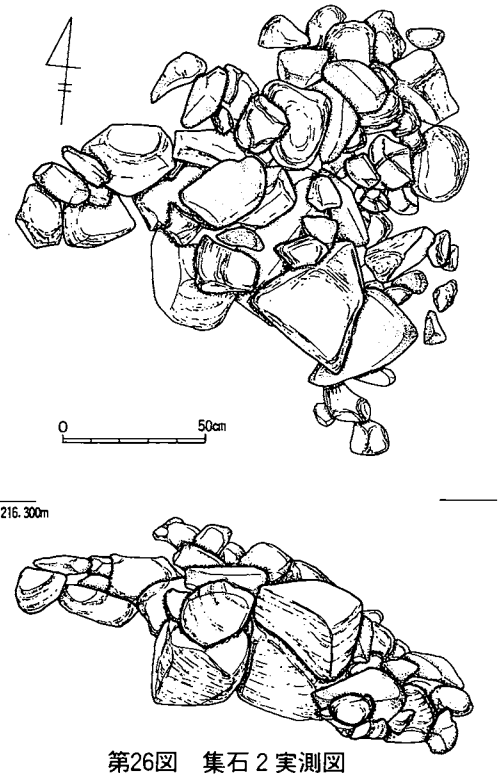



第25図　集石１実測図

## 集　石　2

迫地中段の標高215.0ｍラインから検出された。平面的には三角形を呈し、長さ1.3ｍ（主軸方位はＮ９°Ｗ)、下辺の南側は幅1.55ｍ、高さ0.62ｍの規模で、西側から東側への緩傾斜地に積まれていた。

大石は集石１よりも大きく、最大のものは長さ40cm・幅45cm・高さ20cm・重さ20.8kgを測り、大岩10個、小石34個、中間の石21個を数えた。石質は、砂岩、凝灰岩、チャートである。




第26図　集石２実測図

## 第３節　第Ⅱ期整地層の調査結果

迫地部分から検出された第Ⅱ期の平面的な整地層範囲は、南北の長さ35ｍ、東西幅11ｍである。

上段から下段までの高低差は11ｍで、整地面は大きく７段に分かれるので、第Ⅰ期分と同様に、第27図中に示した如く、これらをⅡ－①～Ⅱ－⑦段と呼称する。Ⅱ期分の建築址は総数９棟でⅡ－③段～Ⅱ－⑦段の範囲で検出された。

Ⅱ－①段は標高223～221.5ｍの範囲で、野鍛冶跡が検出されている。以下、Ⅱ－②段は標高221.5～220.5ｍ、Ⅱ－③段は標高220.5～218ｍの範囲で、南側斜面から備前と常滑の水甕破片が多量に出土した。Ⅱ－④段は標高218～217ｍ、Ⅱ－⑤段は標高217～216ｍ、Ⅱ－⑥段は標高215.5～214.5ｍ、Ⅱ－⑦段は標高214.5～211ｍの範囲にある。

**第Ⅱ期整地層より検出の建築址**

〔Ⅱ－③段〕　ＳＢ１６の１棟が検出された。規模は3.5ｍ(12尺)×1.7ｍ(６尺)で、桁行方向はＳ83°Ｗである。柱穴Ｐ122から青磁〔218〕が出土している。

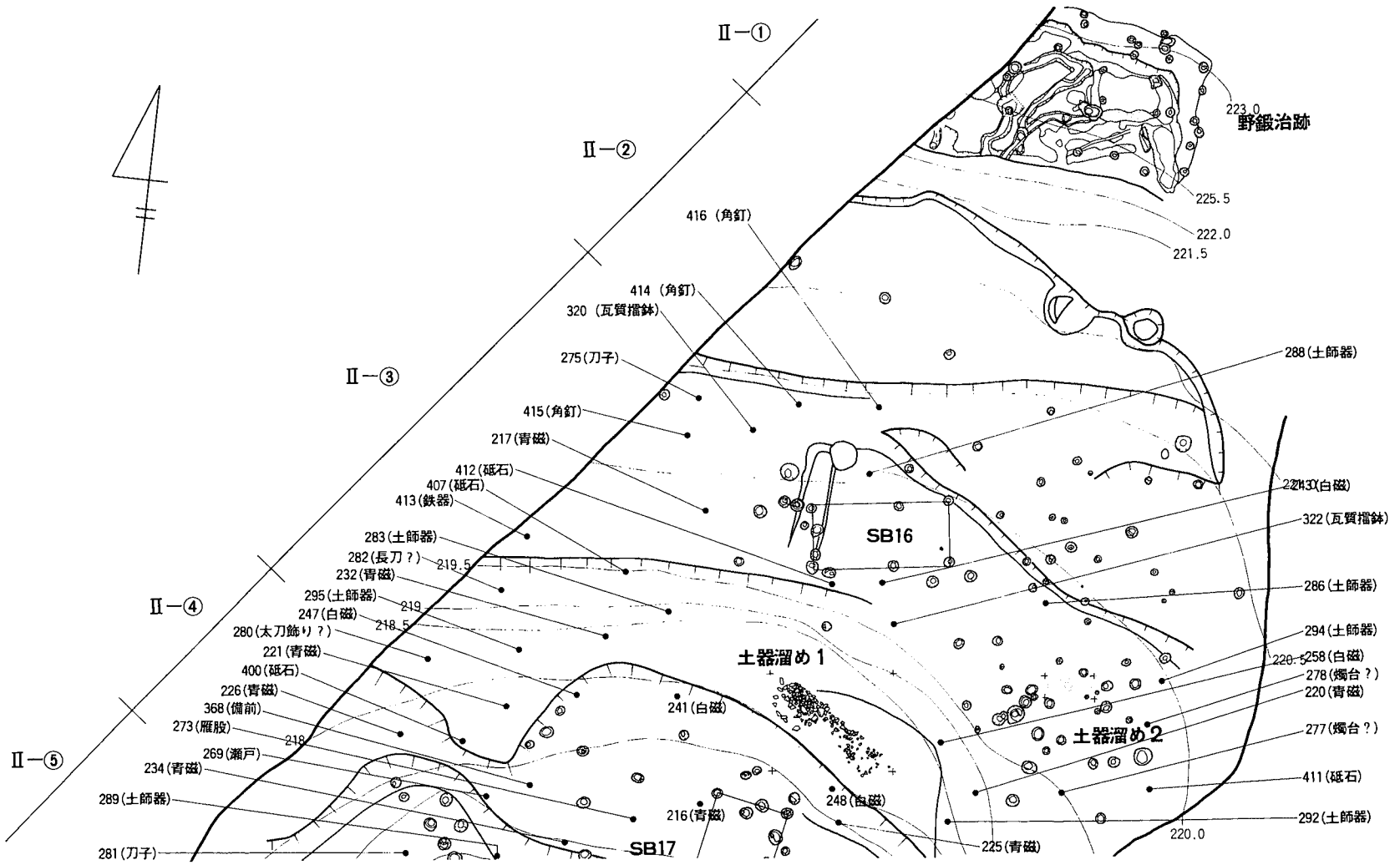
〔Ⅱ－④段〕　ＳＢ１７の１棟が検出された。規模は2.6ｍ(９尺)×1.9ｍ(６尺)で桁行方向はＮ10°Ｅである。

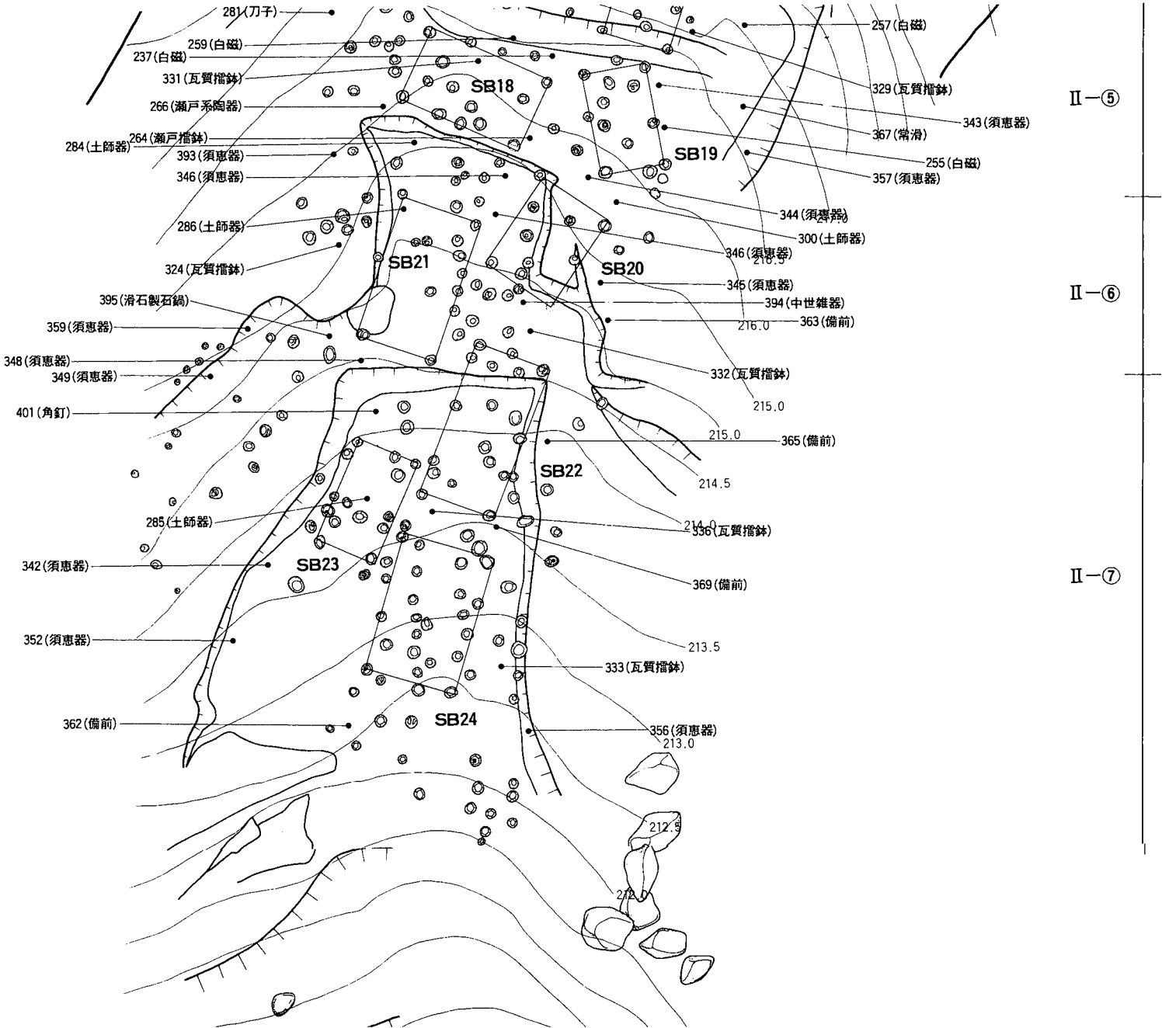
〔Ⅱ－⑤段〕　ＳＢ１８・ＳＢ１９の２棟が検出された。ＳＢ１８の規模は3.6ｍ(12尺)×2.2ｍ(７尺)で、桁行方位はＮ71°Ｗである。柱穴Ｐ129から小刀〔274〕が出土している。ＳＢ１９の規模は2.9ｍ(10尺)×1.8ｍ(６尺)で、桁行方位はＮ17°Ｗである。

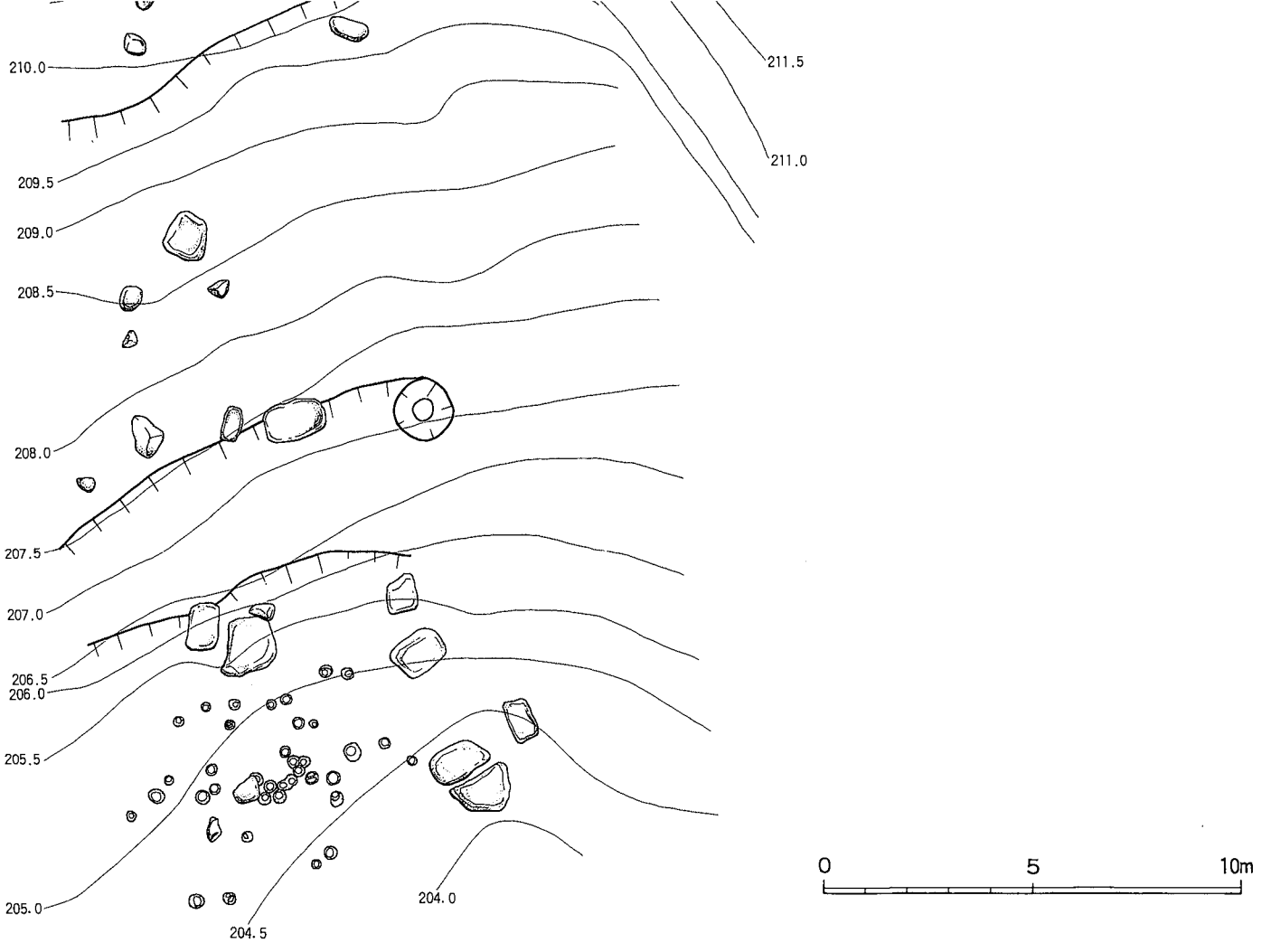
〔Ⅱ－⑥段〕　ＳＢ２０とＳＢ２１の２棟が検出された。ＳＢ２０の規模は2.9ｍ(10尺)×2.2ｍ(７尺)で、桁行方位はＮ29°Ｅである。建築址はⅡ－⑤段とⅡ－⑥段を跨ぐ格好となる。柱穴Ｐ145から青磁〔222〕が出土している。ＳＢ２１は4.1ｍ(14尺)×2.3ｍ(８尺)の規模で、桁行方位はＮ14°Ｅである。

〔Ⅱ－⑦段〕　ＳＢ２２～ＳＢ２４の３棟が検出された。ＳＢ２２（Ｎ15°Ｅ）とＳＢ２３（Ｎ17°Ｅ）、ＳＢ２４（Ｎ10°Ｅ）は、ほぼ似かよった桁行の方位を示す。規模はＳＢ２２が4.5ｍ(15尺)×2.2ｍ(７尺)、ＳＢ２３が3.1ｍ(10尺)×1.8ｍ(６尺)、ＳＢ２４が4.0ｍ(13尺)×2.6ｍ(９尺)である。ＳＢ２２の柱穴Ｐ155から角釘〔402〕、Ｐ157から土師器坏〔292〕が出土している。同じくＳＢ２３の柱穴P161から白磁〔251〕が、ＳＢ２４の柱穴P167からは瓦質擂鉢〔325〕の出土を見た。

総じて、第Ⅱ期の整地層から検出された９棟の建築址は重なり合いもなく、同時期に並列したものと思われる。


Ⅱ—①
Ⅱ—②
Ⅱ—③
Ⅱ—④
Ⅱ—⑤
野鍛治跡
223.0
225.5
222.0
221.5
416（角釘）
414（角釘）
320（瓦質擂鉢）
275(刀子)
415(角釘)
217(青磁)
412(砥石)
407(砥石)
413(鉄器)
283(土師器)
282(長刀？)
219.5
232(青磁)
295(土師器)
219
247(白磁)
218.5
280(太刀飾り？)
221(青磁)
400(砥石)
226(青磁)
368(備前)
273(雁股)
218
269(瀬戸)
234(青磁)
289(土師器)
281(刀子)
SB17
SB16
土器溜め1
241(白磁)
216(青磁)
248(白磁)
225(青磁)
土器溜め2
288(土師器)
224.0
322(瓦質擂鉢)
286(土師器)
294(土師器)
220.5
258(白磁)
278(燭台？)
220(青磁)
277(燭台？)
411(砥石)
292(土師器)
220.0


281(刀子)
259(白磁)
237(白磁)
331(瓦質擂鉢)
266(瀬戸系陶器)
284(土師器)
264(瀬戸擂鉢)
393(須恵器)
346(須恵器)
286(土師器)
324(瓦質擂鉢)
395(滑石製石鍋)
359(須恵器)
348(須恵器)
349(須恵器)
401(角釘)
285(土師器)
342(須恵器)
352(須恵器)
362(備前)
SB18
SB19
SB20
SB21
SB22
SB23
SB24
257(白磁)
329(瓦質擂鉢)
343(須恵器)
367(常滑)
255(白磁)
357(須恵器)
344(須恵器)
300(土師器)
346(須恵器)
345(須恵器)
394(中世雑器)
363(備前)
332(瓦質擂鉢)
365(備前)
336(瓦質擂鉢)
369(備前)
333(瓦質擂鉢)
356(須恵器)
216.5
216.0
215.0
215.0
214.5
214.0
213.5
213.0
212.5
Ⅱ—⑤
Ⅱ—⑥
Ⅱ—⑦




第27図　第Ⅱ期整地層遺構実測図

| 建築址NO. | 規　模 | 規　格 | 桁行方位 | 備　　考 |
|---|---|---|---|---|
| V2－SB16 | 3.5m×1.7m<br>(12尺×6尺)<br>6.0㎡ | 2間×1間 | S83° W | P122から青磁〔218〕が出土している。 |
| V2－SB17 | 2.6m×1.9m<br>(9尺×6尺)<br>4.9㎡ | 2間×2間 | N10° E | 梁行妻（P123～P124）の中央柱が不明。<br>桁行の東側と西側では、西側の方が66cm高い。梁行妻の北側と南側では北側の方が65～92cm高い。 |
| V2－SB18 | 3.6m×2.2m<br>(12尺×7尺)<br>7.9㎡ | 2間×1間 | N71° W | 桁行の中央柱は、いずれも西側に片寄る。<br>桁行の北側と南側では、北側のほうが43～48cm高い。<br>P129から小刀〔274〕が出土している。 |
| V2－SB19 | 2.9m×1.8m<br>(10尺×6尺)<br>5.2㎡ | 2間×1間 | N17° W | 梁行妻の北側と南側では、北側の方が48cm高い。 |
| V2－SB20 | 2.9m×2.2m<br>(10尺×7尺)<br>6.4㎡ | 2間×2間 | N29° E | 梁行妻（P145～P146）の中央柱が不明。<br>桁行の東側と西側では、東側が30cm高い。<br>梁行妻の北側と南側では、北側の方が65～97cm高い。<br>P145から青磁〔222〕が出土している。 |
| V2－SB21 | 4.1m×2.3m<br>(14尺×8尺)<br>9.4㎡ | 2間×1間 | N14° E | 梁行妻の北側と南側では、北側の方が53～67cm高い。 |
| V2－SB22 | 4.5m×2.2m<br>(15尺×7尺)<br>9.9㎡ | 2間×2間 | N15° E | 梁行妻（P157～P159）の中央柱が不明。<br>桁行の東側と西側では、西側の方が23～29cm高い。梁行妻の北側と南側では、北側の方が 114～ 117cm高い。<br>P155から角釘〔402〕と小石が出土している。<br>P157からは土師器坏〔292〕が出土している。 |
| V2－SB23 | 3.1m×1.8m<br>(10尺×6尺)<br>5.6㎡ | 2間×1間 | N17° E | 桁行の東側と西側では、西側のほうが22cm高い。梁行妻の北側と南側では、北側の方が37～40cm高い。<br>P161から白磁〔251〕が出土している。 |
| V2－SB24 | 4.0m×2.6m<br>(13尺×9尺)<br>10.4㎡ | 2間×1間 | N10° E | 桁行の東側と西側で、西側の方が33～37cm高い。梁行妻の北側と南側では、北側の方が82～93cm高い。<br>P167から瓦質擂鉢〔325〕が出土している。 |

第19表　第Ⅱ期検出の建築跡一覧表

## Ｖ２－ＳＢ１６

桁行3.5ｍ、梁行妻1.7ｍの２間×１間の建物で、方向はＳ83°Ｗである。柱間寸法は、桁行Ｐ117～Ｐ119～Ｐ121で1.4ｍ＋2.1ｍ、Ｐ118～Ｐ120～Ｐ122で1.4ｍ＋2.1ｍ、梁行妻Ｐ117～Ｐ118で1.7ｍ、Ｐ121～Ｐ122で1.7ｍを測る。

柱穴の大きさは、Ｐ122が最大（32×32cm）、Ｐ119が最小（23×23cm）で平均値は27.0×24.7cmとなる。深さはＰ122が最深（43cm）、Ｐ117が最浅（12cm）で平均値は23.3cmである。

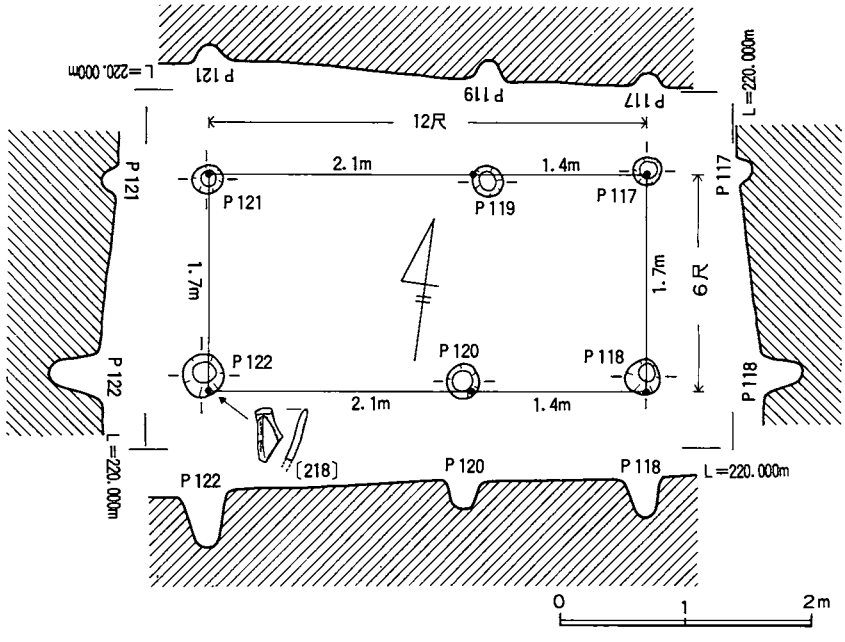
柱列はいずれもほぼ整列する。

桁行の北側と南側の高さを比べた場合、柱穴の検出面は東側Ｐ117－Ｐ118で23cm、西側Ｐ121－Ｐ122で14cm、北側の方が高い。さらに梁行妻の東側と西側では、北側Ｐ117－Ｐ119－Ｐ121で16cm、南側Ｐ118－Ｐ120－Ｐ122で14cm、東側の方が高い。

Ｐ122から青磁〔218〕が出土している。

| Pit NO. | 桁行柱間 (m) | 桁行間(m) | Pit NO. | 梁間柱間 (m) | 梁間間(m) | PitNO. | 深さ(cm) | 長径(cm) | 短径(cm) |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 117～119 | 1.4 | 3.5 | 117～118 | 1.7 | 1.7 | 117 | 12.0 | 24 | 21 |
| 119～121 | 2.1 | | | | | 118 | 32.0 | 28 | 26 |
| | | | | | | 119 | 17.0 | 23 | 23 |
| 118～120 | 1.4 | 3.5 | 121～122 | 1.7 | 1.7 | 120 | 23.0 | 29 | 26 |
| 120～122 | 2.1 | | | | | 121 | 12.8 | 26 | 20 |
| | | | | | | 122 | 43.0 | 32 | 32 |

第20表　Ｖ２－ＳＢ１６計測表




第28図　Ｖ２－ＳＢ１６実測図

## Ｖ２－ＳＢ１７

桁行2.6ｍ、梁行妻1.9ｍの２間×２間の建物で、方位はＮ10°Ｅである。柱間寸法は、桁行Ｐ123～Ｐ125～Ｐ126で1.2ｍ＋1.4ｍとなる。Ｐ124～Ｐ128は中央柱が不明で全長2.6ｍを測る。

梁行妻はＰ126～Ｐ127～Ｐ128で0.6ｍ＋1.3ｍとなるが、Ｐ123～Ｐ124は桁行と同じく中央柱が不明で全長1.9ｍを測る。

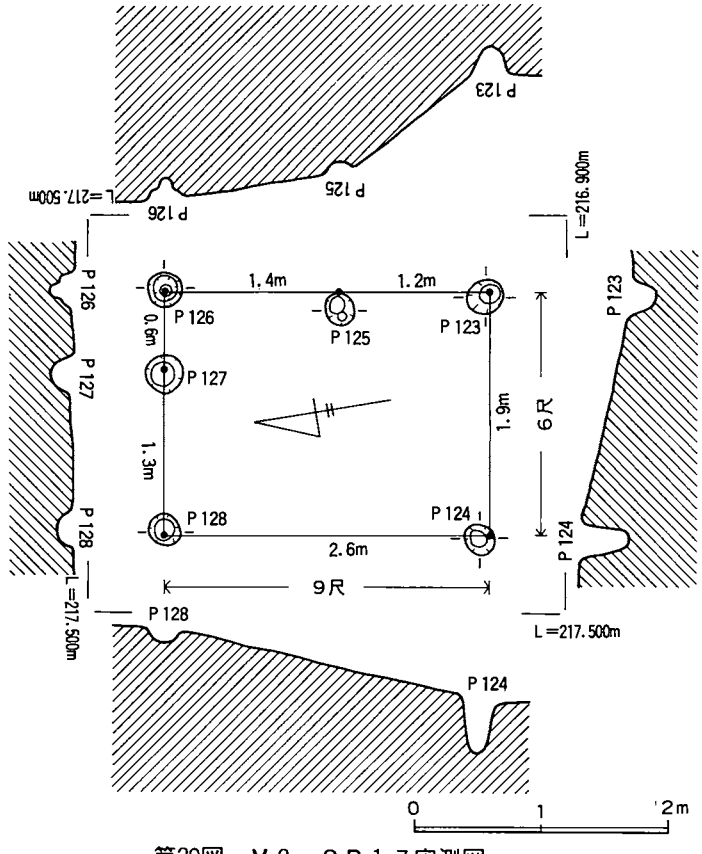
柱穴の大きさは、Ｐ127が最大（29×29cm）、Ｐ125が最小（26×22cm）で平均値は27.3×25.2cmとなる。深さはＰ124が最深（44.5cm）、Ｐ128が最浅（9.8cm）で平均値は22.6cmである。

柱列は桁行Ｐ123～Ｐ125～Ｐ126が千鳥の並びとなる。

桁行の東側と西側の高さを比べた場合、柱穴の検出面は南側Ｐ123－Ｐ124で66cm西側の方が高い。さらに梁行妻の北側と南側では、東側Ｐ123－Ｐ125－Ｐ126で92cm、西側Ｐ124－Ｐ128で65cm、北側の方が高い。Ｐ126は二段掘りとなっている。

| Pit NO. | 桁行柱間 (m) | 桁行間(m) | Pit NO. | 梁間柱間 (m) | 梁間間(m) | PitNO. | 深さ(cm) | 長径(cm) | 短径(cm) |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 123～125 | 1.2 | 2.6 | 123～124 | 1.9 | 1.9 | 123 | 24.5 | 29 | 27 |
| 125～126 | 1.4 | | | | | 124 | 44.5 | 27 | 22 |
| | | | | | | 125 | 18.0 | 26 | 22 |
| 124～128 | 2.6 | 2.6 | 126～127 | 0.6 | 1.9 | 126 | 20.0 | 27 | 27 |
| | | | 127～128 | 1.3 | | 127 | 18.5 | 29 | 29 |
| | | | | | | 128 | 9.8 | 26 | 24 |

第21表　Ｖ２－ＳＢ１７計測表




第29図　Ｖ２－ＳＢ１７実測図

## Ｖ２－ＳＢ１８

桁行3.6ｍ、梁行妻2.2ｍの２間×１間の建物で、方位はＮ71°Ｗである。柱間寸法は、桁行Ｐ129～Ｐ131～Ｐ133で2.4ｍ＋1.2ｍ、Ｐ130～Ｐ132～Ｐ134で2.4ｍ＋1.2ｍ、梁行妻Ｐ129～Ｐ130で2.2ｍ、Ｐ133～Ｐ134で2.2ｍを測る。

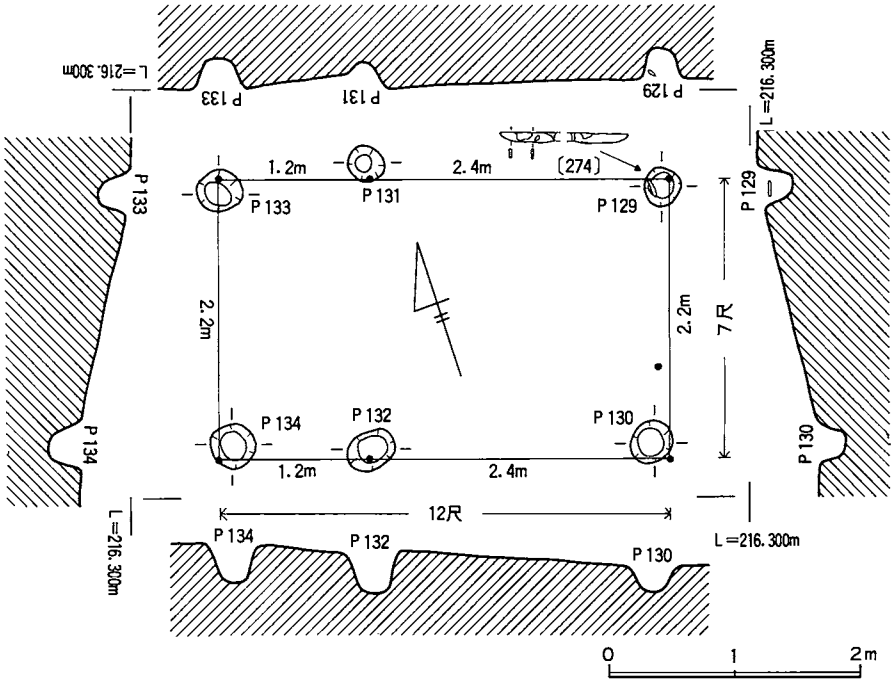
柱穴の大きさは、Ｐ132が最大（40×28cm）、Ｐ131が最小（30×27cm）で平均値は34.8×30.1cmとなる。深さはＰ129・Ｐ134が最深（27.5cm）、Ｐ131が最浅（20cm）で平均値は24.7cmである。

柱列は桁行Ｐ130～Ｐ132～Ｐ134を除いて千鳥の並びとなる。

桁行の北側と南側の高さを比べた場合、柱穴の検出面は東側Ｐ129－Ｐ130で48cm、西側Ｐ133－Ｐ134で43cm、北側の方が高い。さらに梁行妻の東側と西側では、北側Ｐ129－Ｐ131－Ｐ133で11cm、南側Ｐ130－Ｐ132－Ｐ134で23cm、西側が高い。Ｐ129の埋土からは小刀〔274〕が出土している。

| Pit NO. | 桁行柱間 (m) | 桁行間(m) | Pit NO. | 梁間柱間 (m) | 梁間間(m) | PitNO. | 深さ(cm) | 長径(cm) | 短径(cm) |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 129～131 | 2.4 | } 3.6 | 129～130 | 2.2 | 2.2 | 129 | 27.5 | 30 | 29 |
| 131～133 | 1.2 | | | | | 130 | 22.3 | 36 | 33 |
| | | | | | | 131 | 20.0 | 30 | 27 |
| 130～132 | 2.4 | } 3.6 | 133～134 | 2.2 | 2.2 | 132 | 24.1 | 40 | 28 |
| 132～134 | 1.2 | | | | | 133 | 27.0 | 37 | 31 |
| | | | | | | 134 | 27.5 | 36 | 36 |

第22表　Ｖ２－ＳＢ１８計測表




第30図　Ｖ２－ＳＢ１８実測図

## Ｖ２－ＳＢ１９

桁行2.9ｍ、梁行妻1.8ｍの２間×１間の建物で、方位はＮ17°Ｗである。柱間寸法は、桁行Ｐ135～Ｐ137～Ｐ139で1.1ｍ＋1.8ｍ、Ｐ136～Ｐ138～Ｐ140で1.8ｍ＋1.1ｍ、梁行妻Ｐ135～P136で1.8ｍ、Ｐ139～Ｐ140で1.8ｍを測る。

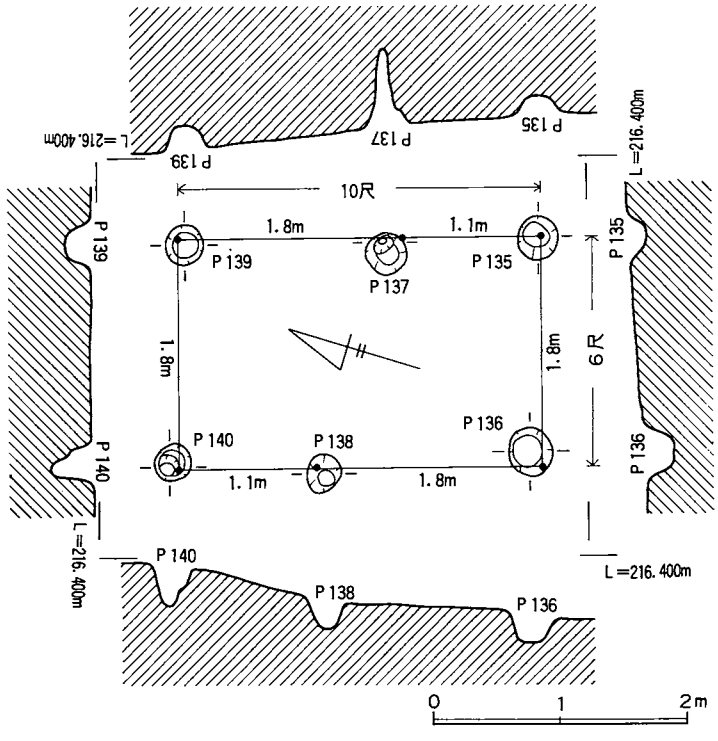
柱穴の大きさは、Ｐ136が最大（39×34cm）、Ｐ138が最小（29×26cm）で平均値は32.8×30.3cmとなる。深さはＰ137が58.8cmと極めて深く、Ｐ135が最浅（14cm）である。平均値は28.9cmである。

柱列はすべて千鳥の並びとなる。

桁行の東側と西側の高さを比べた場合、柱穴の検出面は東側Ｐ135－Ｐ136で18cm、東側の方が高い。さらに梁行妻の北側と南側では、東側Ｐ135－Ｐ137－Ｐ139で32cm、西側Ｐ136－Ｐ138－Ｐ140で48cm北側の方が高い。

| Pit NO. | 桁行柱間 (m) | 桁行間(m) | Pit NO. | 梁間柱間 (m) | 梁間間(m) | PitNO. | 深さ(cm) | 長径(cm) | 短径(cm) |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 135～137 | 1.1 | 2.9 | 135～136 | 1.8 | 1.8 | 135 | 14.0 | 34 | 32 |
| 137～139 | 1.8 | | | | | 136 | 24.5 | 39 | 34 |
| | | | | | | 137 | 58.8 | 34 | 32 |
| 136～138 | 1.8 | 2.9 | 139～140 | 1.8 | 1.8 | 138 | 24.0 | 29 | 26 |
| 138～140 | 1.1 | | | | | 139 | 19.0 | 32 | 29 |
| | | | | | | 140 | 33.0 | 29 | 29 |

第23表　Ｖ２－ＳＢ１９計測表




第31図　Ｖ２－ＳＢ１９実測図

## Ｖ２－ＳＢ２０

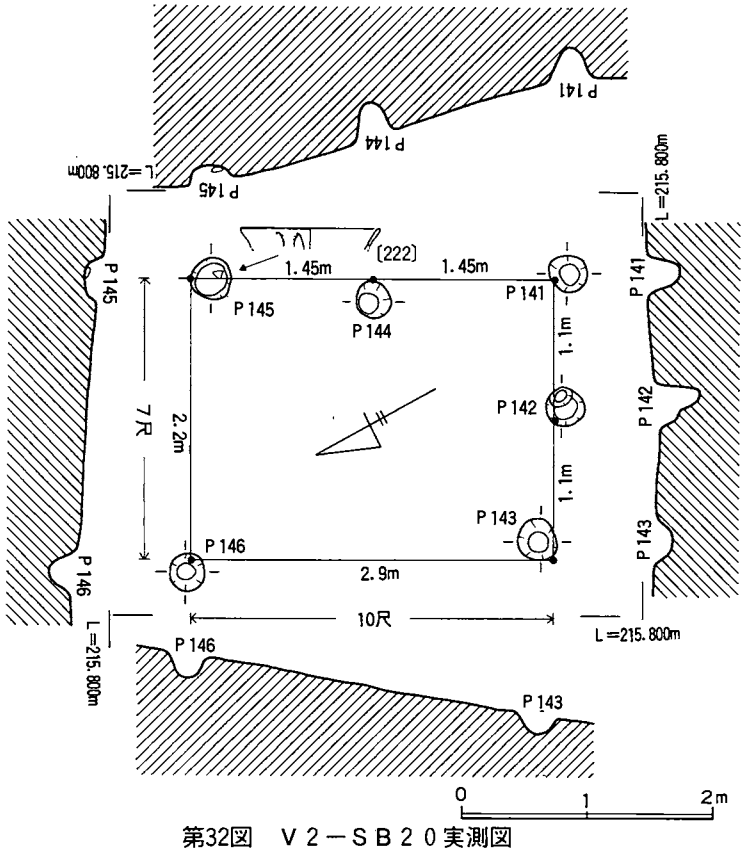
桁行2.9ｍ、梁行妻2.2ｍの２間×２間の建物で、方位はＮ29°Ｅである。柱間寸法は、桁行Ｐ141～Ｐ144～Ｐ145で1.45ｍ＋1.45ｍとなる。Ｐ143～Ｐ146は中央柱が不明で全長2.9ｍを測る。梁行妻はＰ141～Ｐ142～Ｐ143で1.1ｍ＋1.1ｍとなるが、Ｐ145～Ｐ146は桁行と同じく中央柱が不明で、全長2.2ｍを測る。

柱穴の大きさは、Ｐ143・Ｐ145が最大（34×30cm）、Ｐ144が最小（31×28ｍ）で平均値は32.3×29.2cmとなる。深さはＰ144が最深（34.5cm）、Ｐ145が最浅（14.2cm）で平均値は21.6cmである。柱列はすべて千鳥の並びとなる。

桁行の東側と西側の高さを比べた場合、柱穴の検出面は、北側Ｐ145－Ｐ146で30cm程、東側が高い。さらに梁行妻の北側と南側では、西側Ｐ141－Ｐ144－Ｐ145で97cm、東側Ｐ143－Ｐ146で65cm、北側の方が高い。Ｐ142は二段掘りとなっており、Ｐ145からは青磁片〔222〕が出土している。

| Pit NO. | 桁行柱間 (m) | 桁行間(m) | Pit NO. | 梁間柱間 (m) | 梁間間(m) | PitNO. | 深さ(cm) | 長径(cm) | 短径(cm) |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 141～144 | 1.45 | 2.9 | 141～142 | 1.1 | 2.2 | 141 | 25.0 | 31 | 30 |
| 144～146 | 1.45 | | 142～143 | 1.1 | | 142 | 17.5 | 32 | 29 |
| | | | | | | 143 | 15.7 | 34 | 30 |
| 143～146 | 2.9 | 2.9 | 145～146 | 2.2 | 2.2 | 144 | 34.5 | 31 | 28 |
| | | | | | | 145 | 14.2 | 34 | 30 |
| | | | | | | 146 | 22.5 | 32 | 28 |

第24表　Ｖ２－ＳＢ２０計測表




第32図　Ｖ２－ＳＢ２０実測図

## Ｖ２－ＳＢ２１

桁行4.1ｍ、梁行妻2.3ｍの２間×１間の建物で、方位はＮ14°Ｅである。柱間寸法は、桁行Ｐ147～Ｐ149～Ｐ151で2.2ｍ＋1.9ｍ、Ｐ148～Ｐ150～Ｐ152で2.2ｍ＋1.9ｍ、梁行妻Ｐ147～Ｐ148で2.3ｍ、Ｐ151～Ｐ152で2.3ｍを測る。

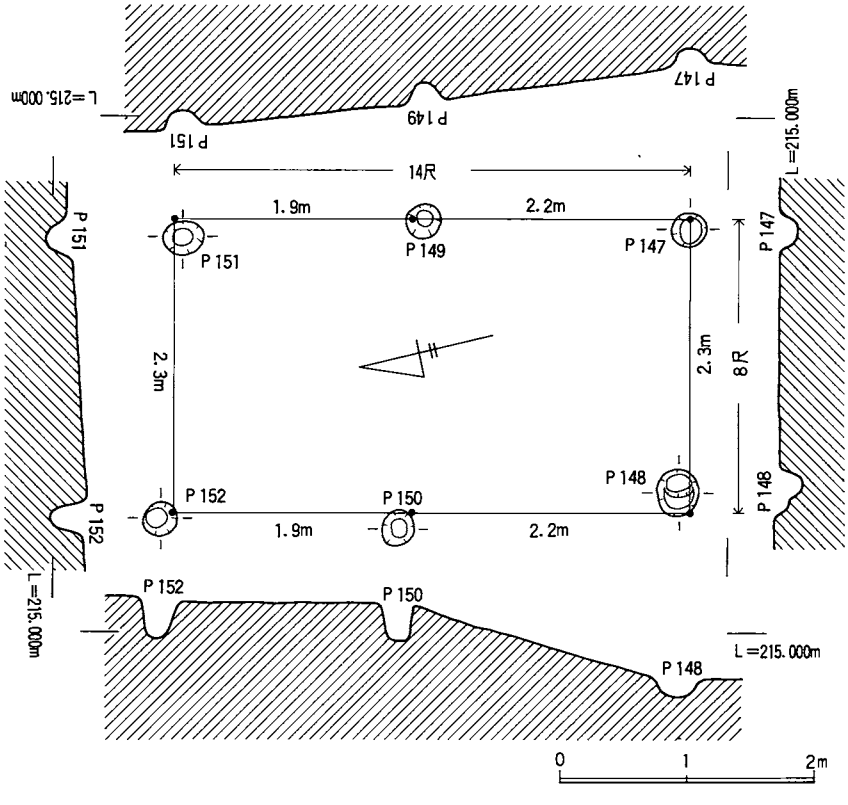
柱穴の大きさは、Ｐ148が最大（37×34cm）、Ｐ152が最小（28×25cm）で平均値は30.7×27.2cmとなる。深さはＰ152が最深（35.5cm）、Ｐ147が最浅（16.2cm）で平均値は24.5cmである。

柱列はすべて千鳥の並びとなる。

梁行妻の北側と南側の高さを比べた場合、柱穴の検出面は東側Ｐ147－Ｐ149－Ｐ151で53cm、西側Ｐ148－Ｐ150－Ｐ152で67cm、北側の方が高い。

| Pit NO. | 桁行柱間 (m) | 桁行間(m) | Pit NO. | 梁間柱間 (m) | 梁間間(m) | PitNO. | 深さ(cm) | 長径(cm) | 短径(cm) |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 147～149 | 2.2 | 4.1 | 147～148 | 2.3 | 2.3 | 147 | 16.2 | 28 | 27 |
| 149～151 | 1.9 | | | | | 148 | 22.0 | 37 | 34 |
| | | | | | | 149 | 18.0 | 30 | 25 |
| 148～150 | 2.2 | 4.1 | 151～152 | 2.3 | 2.3 | 150 | 35.0 | 31 | 25 |
| 150～152 | 1.9 | | | | | 151 | 20.0 | 30 | 27 |
| | | | | | | 152 | 35.5 | 28 | 25 |

第25表　Ｖ２－ＳＢ２１計測表




第33図　Ｖ２－ＳＢ２１実測図

## Ｖ２－ＳＢ２２

桁行4.5ｍ、梁行妻2.2ｍの２間×２間の建物で、方位はＮ15°Ｅである。柱間寸法は、桁行Ｐ153～Ｐ155～Ｐ157で2.6ｍ＋1.9ｍ、Ｐ154～Ｐ156～Ｐ159で2.6ｍ＋1.9ｍ、梁行妻Ｐ157～Ｐ158～Ｐ159で1.1ｍ＋1.1ｍとなる。Ｐ153～Ｐ154は中央柱が不明で全長2.2ｍを測る。

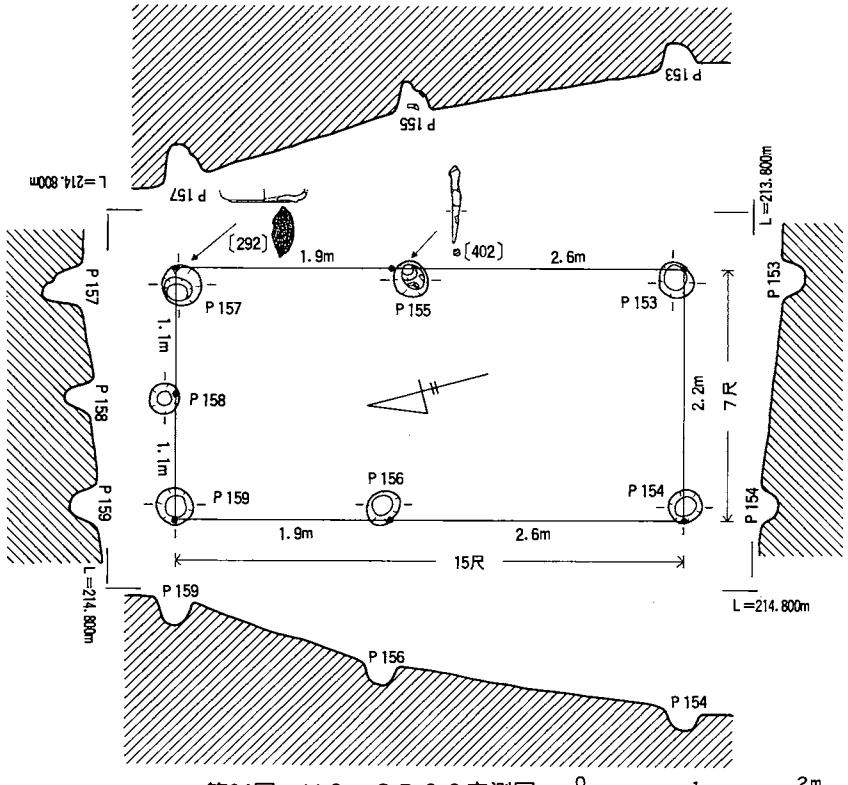
柱穴の大きさは、Ｐ157が最大（36×34cm）、Ｐ158が最小（27×27cm）で平均値は32.4×29.4cmとなる。深さはＰ157が最深（35.5cm）、Ｐ154が最浅（17.5cm）で平均値は25.3cmである。

柱列は両梁行妻が千鳥の並びとなる。

桁行の東側と西側の高さを比べた場合、柱穴の検出面は南側Ｐ153－Ｐ154で29cm、北側Ｐ157－Ｐ158－Ｐ159で23cm、西側の方が高い。さらに梁行妻の北側と南側では、東側Ｐ153－Ｐ155－Ｐ157で117cm、西側Ｐ154－Ｐ156－Ｐ159で114cm、北側の方が高い。Ｐ155は二段掘りで、埋土から角釘〔402〕と小石（２個）が出土している。Ｐ157からは土師器坏〔292〕が出土している。

| Pit　NO. | 桁行柱間（m） | 桁行間(m) | Pit　NO. | 梁間柱間（m） | 梁間間(m) | PitNO. | 深さ(cm) | 長径(cm) | 短径(cm) |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 153～155 | 2.6 | 4.5 | 153～154 | 2.2 | 2.2 | 153 | 24.0 | 34 | 29 |
| 155～157 | 1.9 | | | | | 154 | 17.5 | 31 | 30 |
| | | | | | | 155 | 29.2 | 33 | 30 |
| 154～156 | 2.6 | 4.5 | 157～158 | 1.1 | 2.2 | 156 | 19.2 | 33 | 25 |
| 156～159 | 1.9 | | 158～159 | 1.1 | | 157 | 35.5 | 36 | 34 |
| | | | | | | 158 | 26.6 | 27 | 27 |
| | | | | | | 159 | 25.0 | 33 | 31 |

第26表　Ｖ２－ＳＢ２２計測表




第34図　Ｖ２－ＳＢ２２実測図　0　1　2m

## Ｖ２－ＳＢ２３

桁行3.1ｍ、梁行妻1.8ｍの２間×１間の建物で、方位はＮ17°Ｅである。柱間寸法は、桁行Ｐ160～Ｐ162～Ｐ164で1.4ｍ＋1.7ｍ、Ｐ161～Ｐ163～Ｐ165で1.4ｍ＋1.7ｍ、梁行妻Ｐ160～Ｐ161で1.8ｍ、Ｐ164～Ｐ165で1.8ｍを測る。

柱穴の大きさは、Ｐ160が最大（35×29cm）、Ｐ163が最小（25×23cm）で平均値は30.3×26.8cmとなる。深さはＰ161が最深（41.6cm）、Ｐ163が最浅（14.8cm）で平均値は22.8cmである。

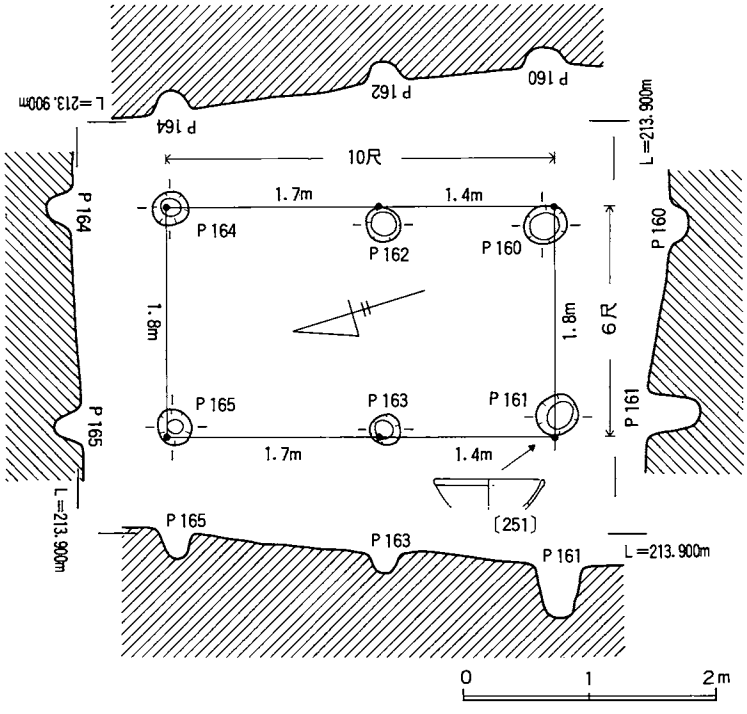
柱列は梁行妻Ｐ164～Ｐ165を除いて千鳥の並びとなる。

桁行の東側と西側の高さを比べた場合、柱穴の検出面は南側Ｐ160－Ｐ161で22cm、西側の方が高い。さらに梁行妻の北側と南側では、東側Ｐ160－Ｐ162－Ｐ164で40cm、西側Ｐ161－Ｐ163－Ｐ165で37cm、北側の方が高い。

Ｐ161から白磁〔251〕が出土している。

| Pit NO. | 桁行柱間 (m) | 桁行間(m) | Pit NO. | 梁間柱間 (m) | 梁間間(m) | PitNO. | 深さ(cm) | 長径(cm) | 短径(cm) |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 160～162 | 1.4 | 3.1 | 160～161 | 1.8 | 1.8 | 160 | 16.4 | 35 | 29 |
| 162～164 | 1.7 | | | | | 161 | 41.6 | 32 | 30 |
| | | | | | | 162 | 17.5 | 30 | 26 |
| 161～163 | 1.4 | 3.1 | 164～165 | 1.8 | 1.8 | 163 | 14.8 | 25 | 23 |
| 163～165 | 1.7 | | | | | 164 | 20.9 | 30 | 27 |
| | | | | | | 165 | 25.5 | 30 | 26 |

第27表　Ｖ２－ＳＢ２３計測表




第35図　Ｖ２－ＳＢ２３実測図

## Ｖ２－ＳＢ２４

桁行4.0ｍ、梁行妻2.6ｍの２間×１間の建物で、方位はＮ10°Ｅである。柱間寸法は、桁行Ｐ166～Ｐ168～Ｐ170で1.6ｍ＋2.4ｍ、Ｐ167～Ｐ169～Ｐ171で1.6ｍ＋2.4ｍ、梁行妻Ｐ166～Ｐ167で2.6ｍ、Ｐ170～Ｐ171で2.6ｍを測る。

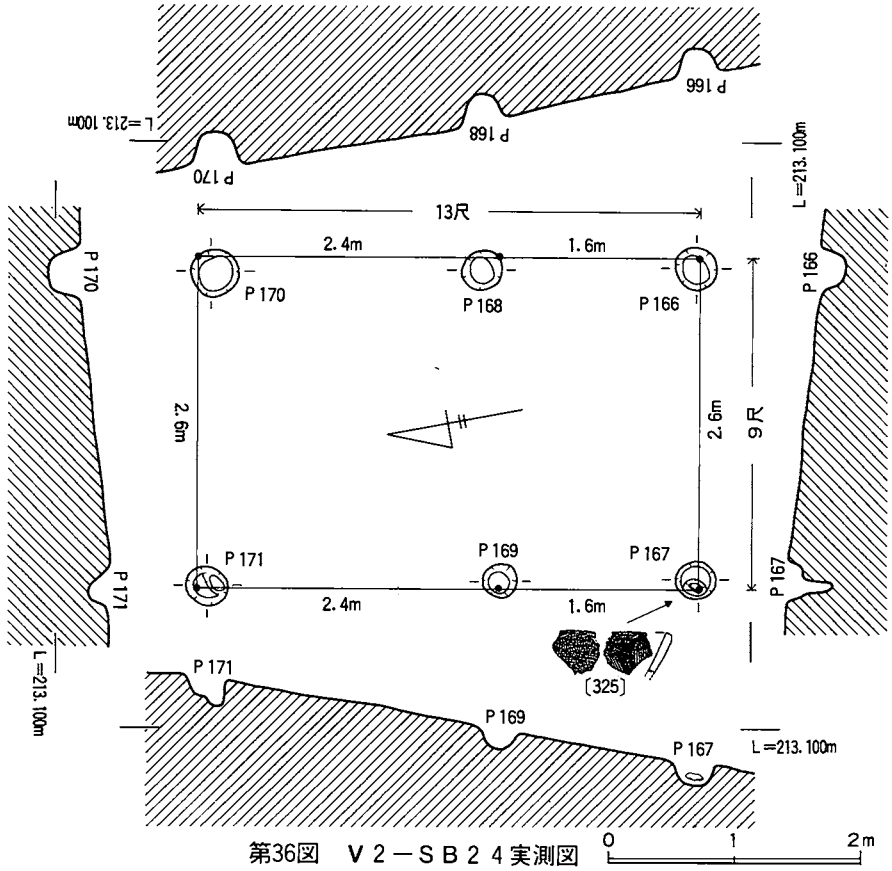
柱穴の大きさは、Ｐ170が最大（38×37cm）、Ｐ169が最小（29×27cm）で平均値は33.3×29.7cmとなる。深さはＰ167が最深（40cm）、Ｐ169が最浅（17.5cm）で平均値は27.5cmである。

柱列は整列する。

桁行で東側と西側の高さを比べた場合、柱穴の検出面は南側Ｐ166－Ｐ167で37cm、北側Ｐ170－Ｐ171で33cm、西側の方が高い。さらに梁行妻の北側と南側では、東側Ｐ166－Ｐ168－Ｐ170で93cm、西側Ｐ167－Ｐ169－Ｐ171で82cm、北側の方が高い。Ｐ167の埋土から瓦質擂鉢〔325〕が出土している。

| Pit NO. | 桁行柱間 (m) | 桁行間(m) | Pit NO. | 梁間柱間 (m) | 梁間間(m) | PitNO. | 深さ(cm) | 長径(cm) | 短径(cm) |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 166～168 | 1.6 | 4.0 | 166～167 | 2.6 | 2.6 | 166 | 23.2 | 36 | 32 |
| 168～170 | 2.4 | | | | | 167 | 40.0 | 32 | 30 |
| | | | | | | 168 | 27.5 | 33 | 30 |
| 167～169 | 1.6 | 4.0 | 170～171 | 2.6 | 2.6 | 169 | 17.5 | 29 | 27 |
| 169～171 | 2.4 | | | | | 170 | 29.3 | 38 | 37 |
| | | | | | | 171 | 27.5 | 32 | 30 |

第28表　Ｖ２－ＳＢ２４計測表




第36図　Ｖ２－ＳＢ２４実測図

**土器溜め　1**

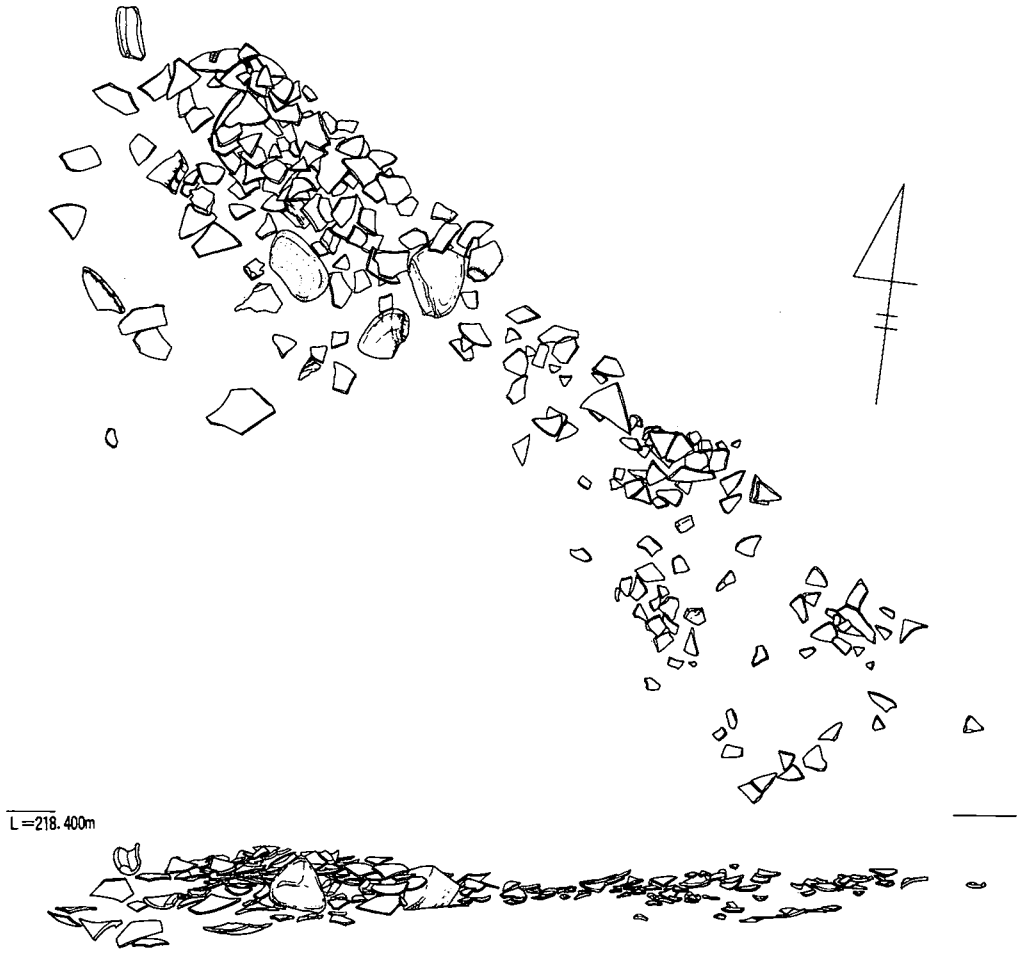
迫地上段の標高218～219ｍラインから、検出されたものである。Ⅱ－③段の南側斜面にあたり、備前と常滑の大甕片がまとまって出土した。

長さ3.5ｍ（主軸方向はＮ56°Ｗ）、最大幅1.0ｍで、平面的には帯状を呈する。甕片は５～30cmの厚さにギッシリと堆積していた。特に、土器溜めの西側部分に集中点が見られた。

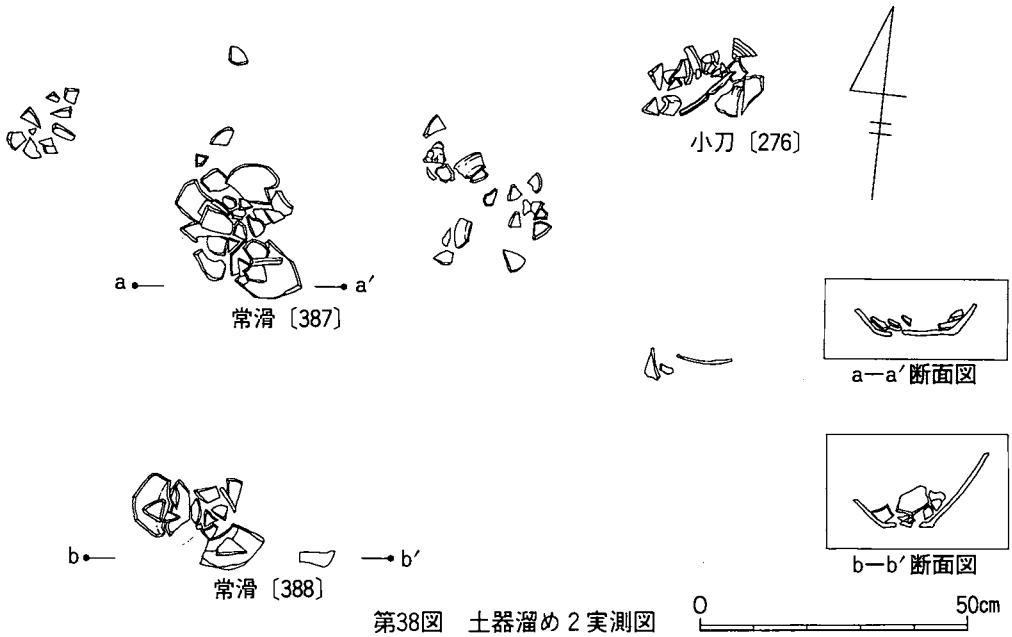
本文中に掲載した出土遺物の実測図では、373～392の内、大半が、この土器溜めから出土している。

固体数は、低く見積っても15個を下らないものと思われる。出土状況から、一時的に一括して破棄されている事がわかる。第Ⅱ期整地層から検出された８棟の建築址との関連性が伺われる。これらの大甕は主として水甕に使用されたものであろう。

なお、この土器溜めからは、甕片以外に滑石製の石鍋〔396〕・白磁〔396〕・須恵器片〔350・353〕が出土している。




第37図　土器溜め１実測図　　0　1m




第38図　土器溜め２実測図

**土器溜め　2**

迫地上段の標高219ｍラインから検出された。迫地の東寄りにあたり、Ｖ２－ＳＢ１６のＰ118よりＮ30°Ｅの方位、約4.5ｍの付近である。出土遺物は、常滑〔387〕と備前〔388〕の大甕片で、いずれも底部を中心とした破損部であるが、一部については出土状況から、使用時において人為的に土中へ埋め込まれたものと思われる。

両者間に接合資料はなかったが、土器溜め１とは、５～６ｍの近距離にあり、出土遺物も同一の備前や常滑を主体としたものである所から、同一性格のものと考えてよい。

**野鍛冶跡**

迫地最上段の標高222.9ｍ～222.4ｍのラインから検出された。西側の一部が路線外で未調査であるが、遺構の検出プランは台形状を呈し、長軸方向は地形に沿った東西方向にある。規模は北側幅で4.2ｍ、南側幅で6.0ｍ、南北幅で4.0ｍを測る。

当初、第Ⅱ整地層に、焼土の広がりのある事を確認し、炉跡の類ではないかという事で掘り下げていった所、第39図中に、スクリーン・トーンで示したように、焼土及び炭化物混じりの、粘土塊域を検出した。

粘土塊の中には、竹や細長い棒状のものが、混入していた痕が認められ、これらのものを骨組みとした壁土状のものが塗り込められていた事を示していた。そこでこの粘土塊の一部は、壁土状のものが崩れ落ちた堆積物であるという結論に達し、これらを慎重に除去した所、第40図に見る様に、多量の炭化物が堆積し、赤色に熱変した床面を有する長方形状の窪地（ＳＫ０１）と、これより西側と西南西側へ下る３本の溝（ＳＤ０１～０３）が検出された。さらにＳＫ０１の南西隅には、南側に長軸方向を持つ、やや細長い長方形状の窪地（ＳＫ０２）がＳＫ

０１と直交する形で検出された。この際、スラッグや鉄器の類が10数個出土している。

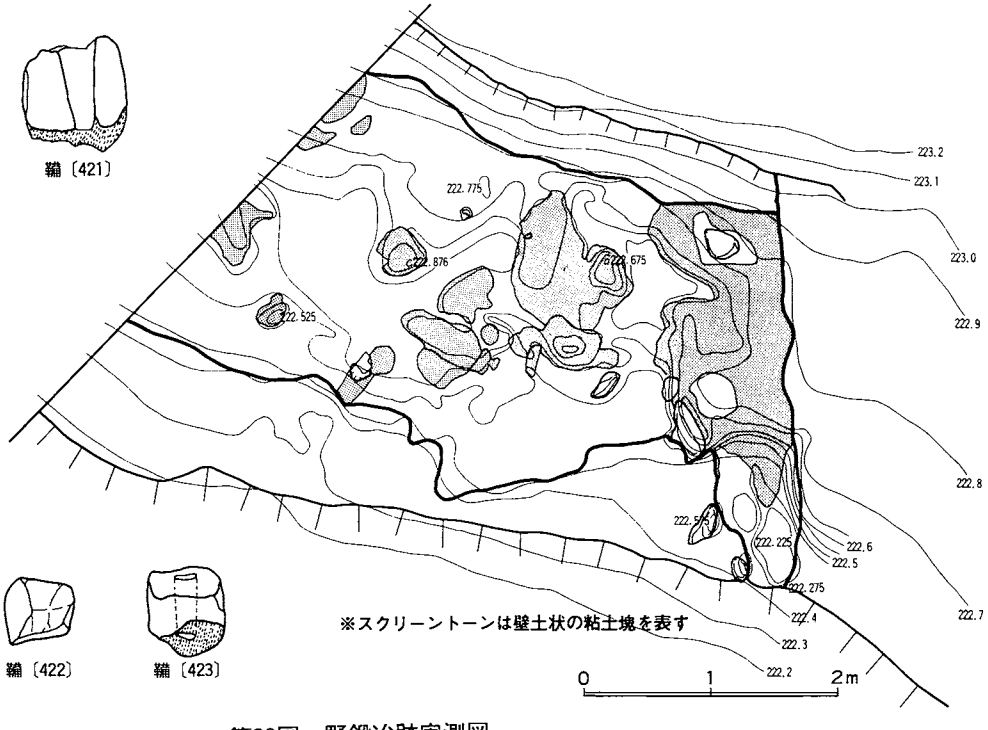
ＳＫ０１は、台形状プランの北東側にあって、東西方向に長軸の向きを示し、長方形状を呈するが、西側半分がやや幅広となる。地山の粘土層を掘り込んでおり、規模は東西の長さ2.2ｍ、東側幅0.85ｍ、西側幅1.1ｍを測り、深さは約15cmである。床面は東側から西側へのわずかな傾斜地である（比高差は５cm前後）。炭化物と焼土の堆積状況については第40図に示した。

ＳＫ０１の埋土からは、瓦質擂鉢(420：復元作業により完形品となる。）の破片と、切り石（幅・高さ0.2～0.3ｍ前後）が床面に接する形で出土している。

ＳＫ０２は南北の長さ1.7ｍ、東西幅0.85～0.55ｍで、深さは0.25ｍを測る。この埋土にも第40図の土層断面図に見るように炭化物と焼土が混入していた。床面は部分的に熱を受け赤色化していたが、ＳＫ０１に見る様な炭化物の堆積は無かった。

ＳＤ０１～ＳＤ０３はＳＫ０１からの流物を排出するための溝と思われる。溝は断面Ｕ字形で、規模はＳＤ０１が幅22cm・深さ19cm・長さ2.0ｍで、ＳＤ０２が幅17cm・深さ15cm、ＳＤ０３は幅23cm・深さ18cmを測り、ＳＤ０２とＳＤ０３は中途で一本の溝となる。合流地点までの長さはＳＤ０２が2.2ｍ、ＳＤ０３が1.2ｍで、一本化された溝は、この箇所より１ｍ程、南西方向へ下ってⅡ－①段の南端部で消滅している。

一方、台形状の区域からは周縁部に25個前後の小柱穴（幅20cm前後、深さ20～30cm）が検出




第39図　野鍛冶跡実測図

された。ＳＫ０１を中心とした遺構の覆屋に関連する柱穴と思われる。内、大きめの柱穴（Ｐ－ａ）から白磁片〔424〕が出土している。

この外、台形状区域の周辺から鞴の羽口が３個〔421・422・423〕出土した。上記のスラッグと鉄器類の出土と考え合わせて、この遺構を野鍛冶跡と推定した。

**$^{14}$Ｃ年代測定について**

野鍛冶跡の床土直上と第Ⅰ期整地層の柱穴（Ｖ１－ＳＢ０５のＰ34）から炭化物が出土したので、$^{14}$Ｃ年代測定を京都産業大学理学部の山田　治教授に依頼した。測定結果は下記の通りで、いずれも同一年代の可能性があり、時期的には15Ｃ初頭から中葉頃という結果がでている。

液体シンチレーション$^{14}$Ｃ年代測定結果報告

京都産業大学　理学部　　山　田　　治

| 測　定　番　号 | 試 料 名・採 取 地 | Ｃ年代測定値（ＢＰ） |
|---|---|---|
| ＫＳＵ－１７９１ | 山田城（大王谷）<br>野鍛冶跡 | ４９０±５０ＢＰ |
| ＫＳＵ－１７９２ | 山田城（大王谷）<br>Ｖ１－ＳＢ０５・Ｐ34<br>（第Ⅰ期整地層） | ５４０±２５ＢＰ |

（註）$^{14}$Ｃ年代測定値の表現法は、次のごとき国際的約束に基づいています。

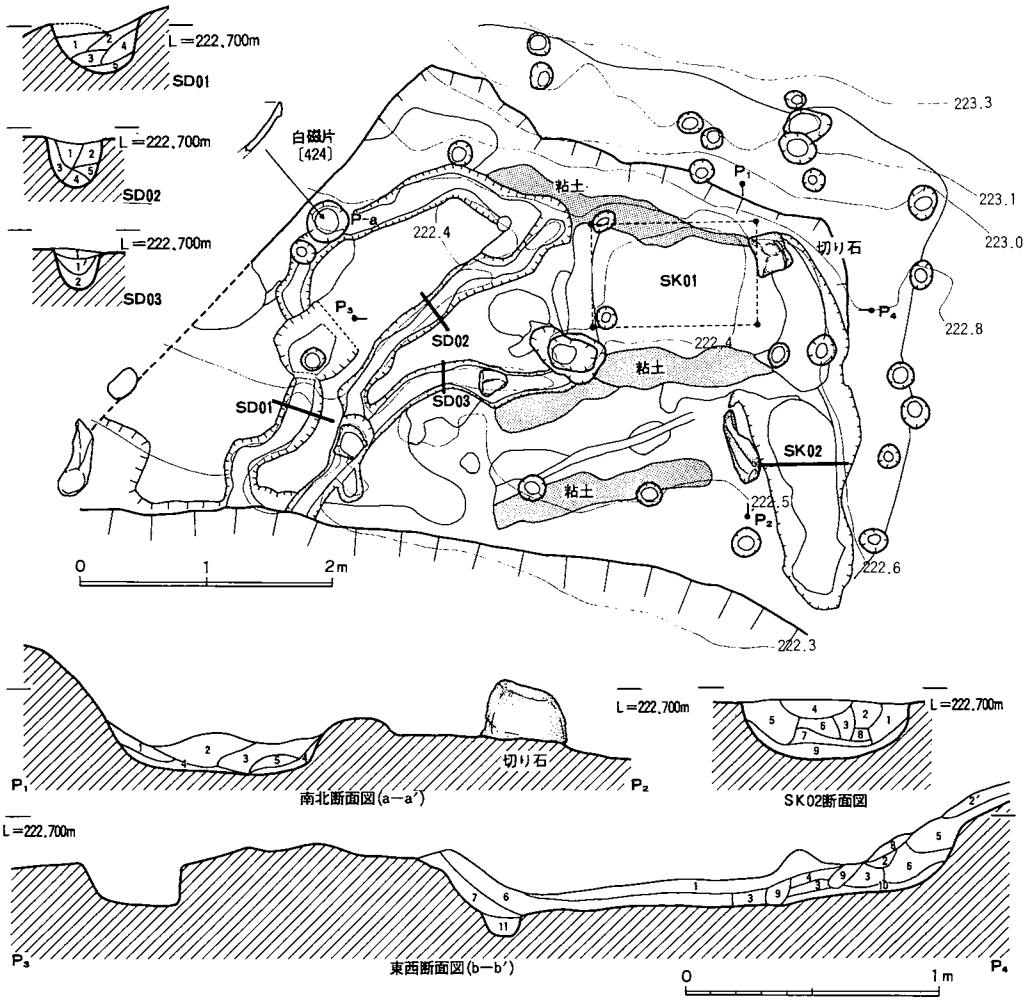
(1) 14の半減期は５５６８年とします。

現在知られている最も確からしい$^{14}$Ｃの半減期は５７３０±３０（年）ですが、まだ完全ではありません。今までずっとＬｉｂｂｙの採用した半減期５５６８年が用いられてきているので、確実な半減期が得られるまで変更しないほうが世界全体のデータの比較のために便利です。

(2) ＢＰはＢｅｆｏｒｅＰｒｅｓｅｎｔの略で、ＰｒｅｓｅｎｔはＡＤ１９５０年に固定しています。例えば、５００ＢＰということはＡＤ１９５０年から５００年前であることを意味します。

(3) 測定誤差は１標準偏差です。なお、真の値が１標準偏差の中にはいる確率は68％、標準偏差の２倍幅の中には95％、３倍幅の中には99.7％が入ります。

(4) 測定値には測定機関記号（京都産業大学の場合はＫＳＵ）と測定番号をつけることになっています。索引やデータの確認になくてはならないものですから、記録や引用の際には必ずこの記号と番号をつけておいて下さい。

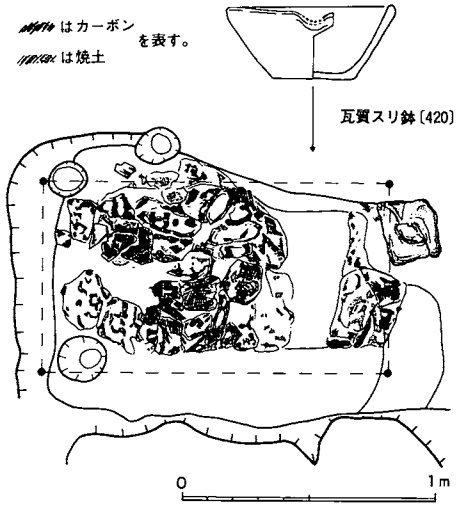



第40図　野鍛冶跡実測図及び断面図

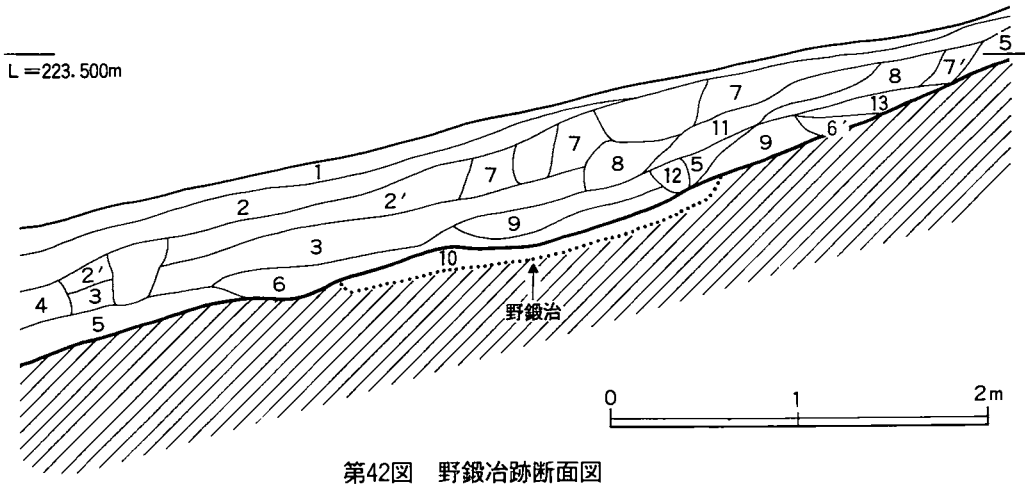
| | | |
|---|---|---|
| SD01 | 1 | 焼土～炭化物 |
| | 2 | 焼土＞炭化物 |
| | 3 | 褐灰色土（粘） |
| | 4 | 褐灰色土（極・硬） |
| | 5 | 褐灰色土～鉄分土 |
| SD02 | 1 | 白粘土ブロック＞褐灰分土 |
| | 2 | 褐灰色土＞白粘土ブロック |
| | 3 | 褐灰色土＞白粘土ブロック |
| | 4 | 褐灰色土＞鉄分土 |
| | 5 | 褐灰色土＞炭化物 |
| SD03 | 1 | 灰褐色土＞野鍛冶土壁ブロック |
| | 1′ | 灰褐色土＞野鍛冶土壁ブロック（硬） |
| | 2 | 炭化物＞鉄分土 |
| SK02 | 1～4 | 焼土（小ブロック） |
| | 5 | 焼土＞炭化物 |
| | 6 | 褐色土＞焼土 |
| | 7 | 炭化物＞焼土 |
| | 8 | 焼土＞褐灰色土 |
| | 9 | 灰褐色土（軟） |

| | | |
|---|---|---|
| P1～P2 | 1 | 焼土＞炭化物 |
| | 2 | 野鍛冶土壁ブロック |
| | 3 | 焼土＞野鍛冶土壁ブロック |
| | 4 | 灰褐色土 |
| | 5 | 灰褐色土＞焼土 |
| P3～P4 | 1 | 野鍛冶土壁ブロック＞焼土 |
| | 2 | 褐灰色土 |
| | 2 | 褐灰色土（硬土） |
| | 3 | 褐灰色土＞灰色土 |
| | 4 | 焼土（硬土） |
| | 5 | 灰黒色土＞褐灰色土 |
| | 6 | 黒灰色土＞褐灰色土 |
| | 7 | 茶褐色土 |
| | 8 | 褐灰色土＞焼土 |
| | 9 | 焼土＞炭化物 |
| | 10 | 灰褐色土 |
| | 11 | 灰褐色土＞焼土（柱穴） |

第29表　野鍛冶跡土層観察表（1）




第41図　ＳＫ０１実測図




第42図　野鍛冶跡断面図

| | | | |
|---|---|---|---|
| 1 | 表土 | 7 | 灰褐色土 |
| 2 | 黒褐色土（ボロボロ） | 7′ | 灰褐色土（ボロボロ） |
| 2′ | 黒褐色土（引き締まる） | 8 | 肌色粘土≫灰褐色土＋焼土 |
| 3 | 肌色粘土＝灰褐色土（粘） | 9 | 野鍛冶（上層堆積土） |
| 4 | 肌色粘土＞灰褐色土（ボロボロ） | 10 | 灰白褐色土≫極小礫 |
| 5 | 肌色粘土（硬） | 11 | 柱穴（灰褐色土）肌色粘土 |
| 6 | 褐色土 | 12 | 灰色土 |
| 6′ | 褐色土（焼土・炭化物が混入） | 13 | 肌色粘土～灰褐色土 |

第30表　野鍛冶跡土層観察表（2）

# 第４節　第Ⅲ期文化層の調査結果

迫地部分から検出された第Ⅲ期の遺構面の範囲は南北の長さ23ｍ、東西幅６～14ｍで、これに道路遺構が加わる。ここから６棟の建築址が検出された。建築址の検出範囲における上段から下段までの高低差は６ｍで、遺構面は３段に分かれる。したがって第43図中示した様にⅢ－①～Ⅲ－③段と呼称する。

Ⅲ－①段は標高221.5～219.5ｍの範囲にある。以下、Ⅲ－②段は標高219.5～218.5ｍで、Ⅲ－③段は標高218.5～216ｍの範囲にある。

**第Ⅲ期文化層より検出の建築社**

〔Ⅲ－①段〕　ＳＢ２５の１棟が検出された。ＳＢ２５の規模は4.1ｍ(14尺)×2.3ｍ(８尺)で桁行の方位はＮ87°Ｗである。柱穴Ｐ173から土師器坏〔457〕が出土している。

〔Ⅲ－③段〕　ＳＢ２６～ＳＢ３０の５棟が検出された。ＳＢ２６とＳＢ２７、及びＳＢ２８とＳＢ２９が重なり合っているが、桁行方向からＳＢ２７（Ｓ79°Ｗ）とＳＢ２８（Ｎ87°Ｗ）が同じで、ＳＢ２６（Ｎ67°Ｗ）とＳＢ２９（Ｎ19°Ｅ）とが、ほぼ直交の並びにある事がわかる。両者は桁行方向で、明らかにセット関係にあるものと思われる。なおＳＢ３０（Ｎ64°

W）はＳＢ２６と桁行方位が同じで、ＳＢ２９と直交する。

建築址の規模はＳＢ２７が4.2m（14尺）×2.1m（７尺）で、ＳＢ２９が4.2m（14尺）×2.4m（８尺）、ＳＢ３０が4.3m（14尺）×2.1m（７尺）で、３棟ともほぼ同一の大きさである。これは規模の点でⅢ－①段のＳＢ２５を含めて一つのセット関係にある事を示している。

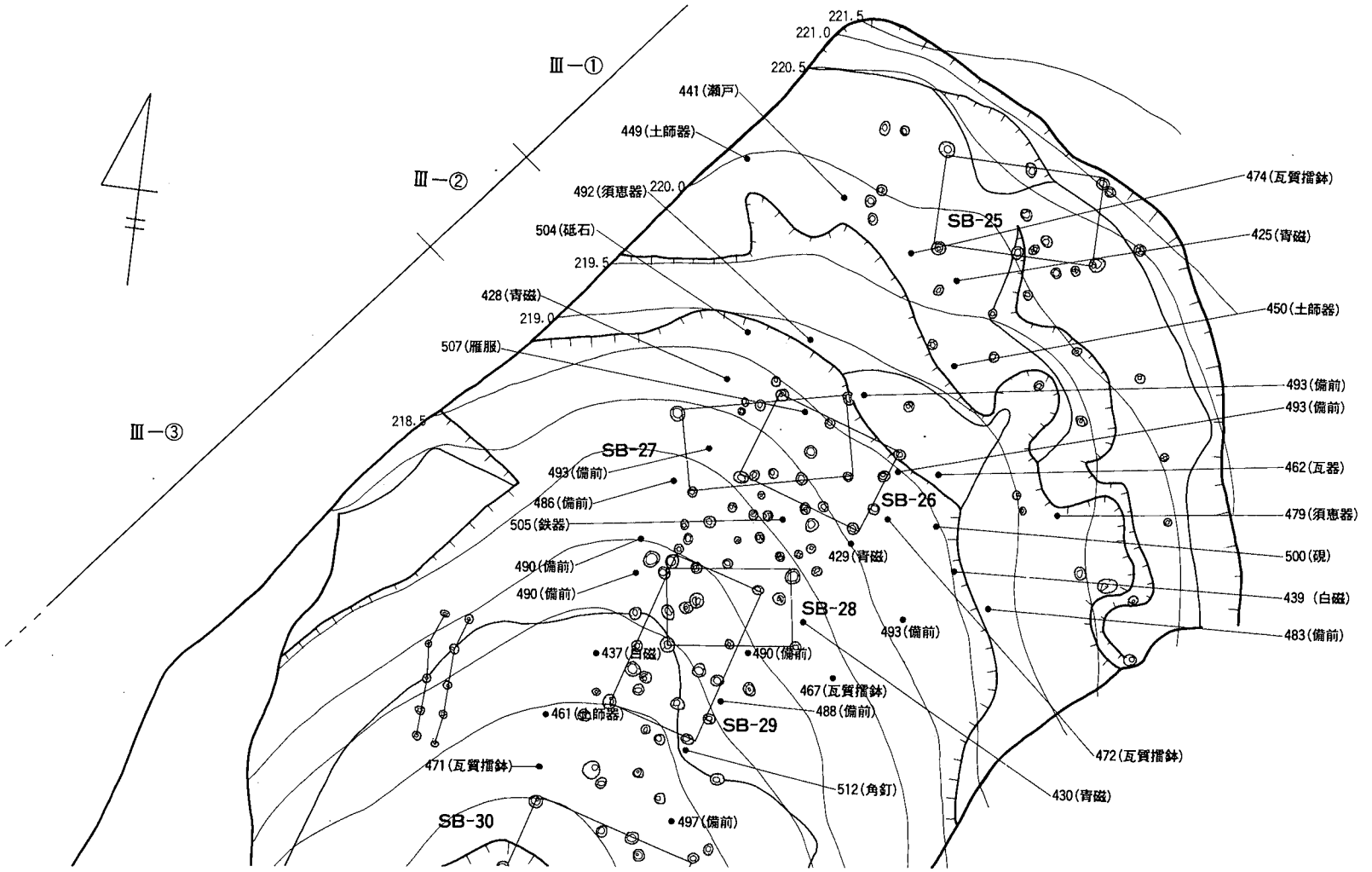
一方で、ＳＢ２６は3.4m（11尺）×2.3m（８尺）で、ＳＢ２８の3.2m（11尺）×2.0m（７尺）に似かよっており、別のまとまりをなす事がわかる。

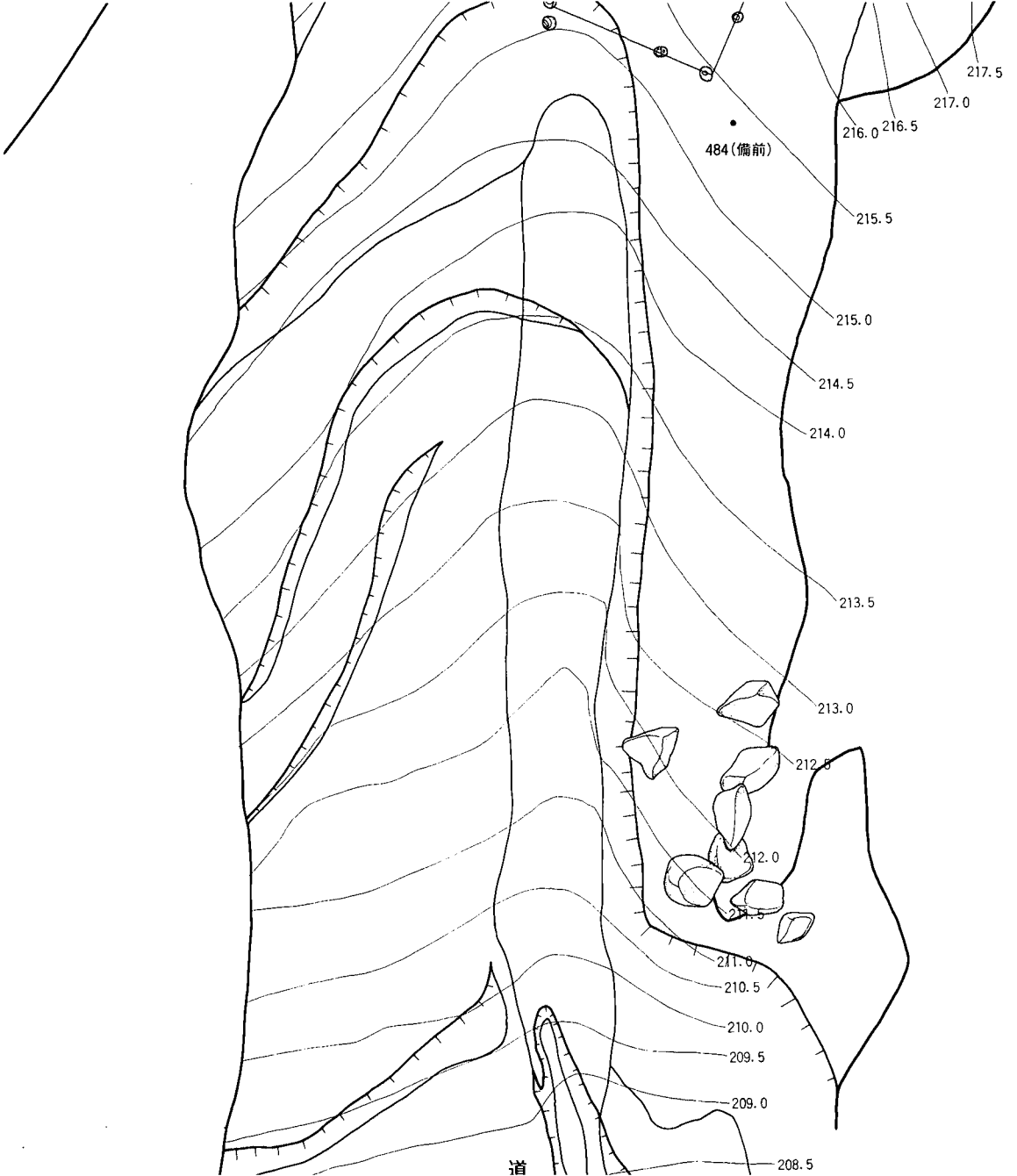
ＳＢ２６の柱穴Ｐ179から土師器坏〔454〕と、ＳＢ２７の柱穴Ｐ189から、角釘〔506〕が出土している。さらに青磁がＳＢ２９の柱穴Ｐ201と、ＳＢ３０の柱穴Ｐ206から出土している。青磁の実測図はＳＢ２９が〔427〕・ＳＢ３０が〔426〕である。

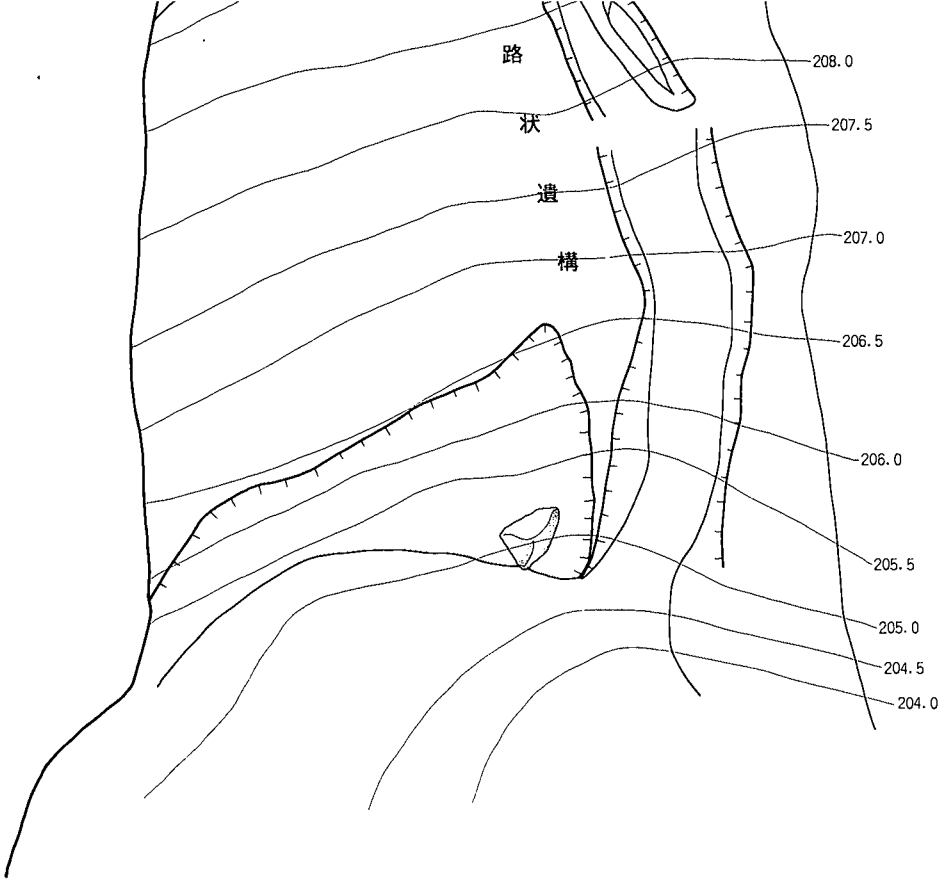
第Ⅲ期の遺構面から検出された６棟の建築址は、桁行方向と規模の点から、２時期に分かれ、１回の建て替えがあったものと思われる。

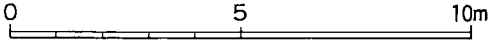
| 建築址ＮＯ. | 規　模 | 規　格 | 桁行方位 | 備　　考 |
|---|---|---|---|---|
| Ｖ３－ＳＢ２５ | 4.1m×2.3m<br>（14尺×８尺）<br>9.4m² | ２間×１間 | Ｎ87°Ｗ | 桁行の北側と南側では、北側の方が36～47cm高い。梁行妻の東側と西側では、東側の方が28～32cm高い。<br>Ｐ173から土師器坏〔457〕が出土している。 |
| Ｖ３－ＳＢ２６ | 3.4m×2.3m<br>（11尺×８尺）<br>7.8m² | ２間×２間 | Ｎ67°Ｗ | 梁行妻（Ｐ183～Ｐ184）の中央柱が不明。<br>桁行の北側と南側では、北側の方が58～68cm高い。Ｐ179からは土師器坏〔454〕と小石が出土している。 |
| Ｖ３－ＳＢ２７ | 4.2m×2.1m<br>（14尺×７尺）<br>8.8m² | ２間×１間 | Ｓ79°Ｗ | 桁行の北側と南側では、北側の方が65～82cm高い。Ｐ189からは角釘〔506〕が出土している。 |
| Ｖ３－ＳＢ２８ | 3.2m×2.0m<br>（11尺×７尺）<br>6.4m² | ２間×１間 | Ｎ87°Ｗ | 桁行（Ｐ191～Ｐ196）の中央柱は、２本に分かれる。<br>梁行妻（Ｐ191～Ｐ192）の中央柱が不明。<br>桁行の北側と南側では、北側の方が53～54cm高い。Ｐ196からは土師器坏〔455〕が出土している。 |
| Ｖ３－ＳＢ２９ | 4.2m×2.4m<br>（14尺×８尺）<br>10.1m² | ２間×１間 | Ｎ19°Ｅ | 桁行の東側と西側では、西側の方が47cm高い。梁行妻の北側と南側では、北側の方が70～98cm高い。Ｐ201から青磁〔427〕が出土している。 |
| Ｖ３－ＳＢ３０ | 4.3m×2.1m<br>（14尺×７尺）<br>9.0m² | ２間×２間 | Ｎ64°Ｗ | 梁行妻（Ｐ210～Ｐ211）の中央柱が不明。<br>桁行の北側と南側では、北側の方が17～62cm高い。梁行妻の東側と西側では、西側の方が50～95cm高い。Ｐ206から青磁〔426〕が出土している。 |

第31表　第Ⅲ期検出の建築址一覧表


Ⅲ－①
Ⅲ－②
Ⅲ－③
221.5
221.0
220.5
220.0
219.5
219.0
218.5
441(瀬戸)
449(土師器)
492(須恵器)
504(砥石)
428(青磁)
507(雁服)
SB-25
SB-26
SB-27
SB-28
SB-29
SB-30
474(瓦質擂鉢)
425(青磁)
450(土師器)
493(備前)
493(備前)
462(瓦器)
479(須恵器)
500(硯)
439 (白磁)
483(備前)
493(備前)
493(備前)
486(備前)
505(鉄器)
429(青磁)
490(備前)
490(備前)
437(白磁)
490(備前)
467(瓦質擂鉢)
488(備前)
461(土師器)
471(瓦質擂鉢)
512(角釘)
497(備前)
472(瓦質擂鉢)
430(青磁)


217.5
217.0
216.5
216.0
484(備前)
215.5
215.0
214.5
214.0
213.5
213.0
212.5
212.0
211.5
211.0
210.5
210.0
209.5
209.0
208.5
道




第43図　第Ⅲ期遺構実測図

## Ｖ３－ＳＢ２５

桁行4.1ｍ、梁行妻2.3ｍの２間×１間の建物で、方位はＮ87°Ｗである。柱間寸法は、桁行Ｐ172～Ｐ174～Ｐ176で2.05ｍ＋2.05ｍ、Ｐ173～Ｐ175～Ｐ177で2.05ｍ＋2.05ｍ、梁行妻Ｐ172～Ｐ173で2.3ｍ、Ｐ176～Ｐ177で2.3ｍを測る。

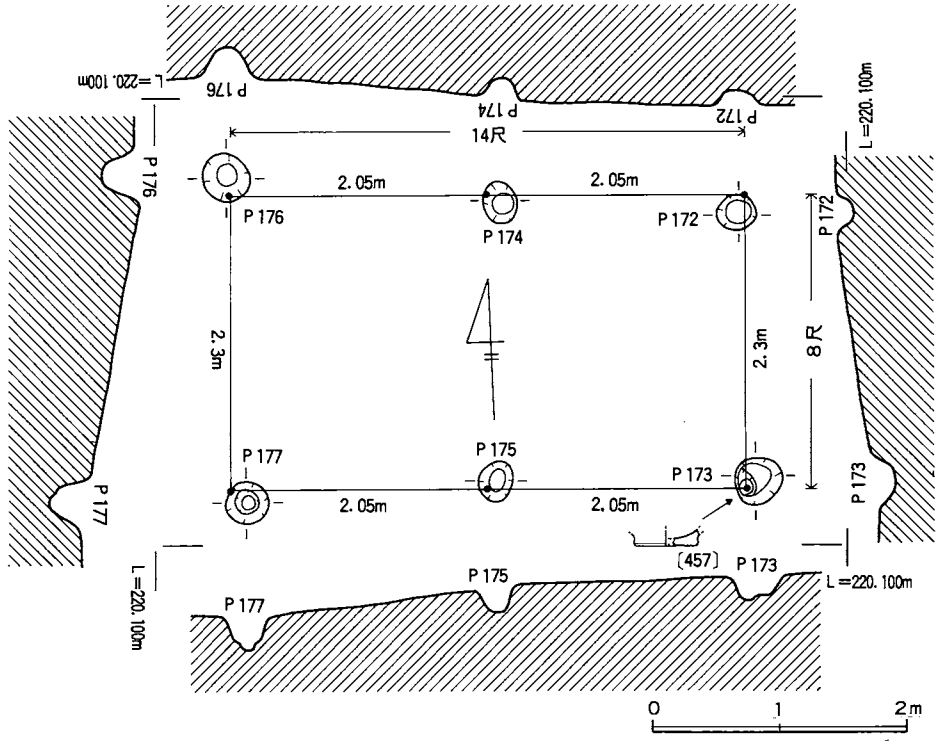
柱穴の大きさは、Ｐ176が最大（39×36cm）、Ｐ172・Ｐ175が最小（32×28cm）で平均値は35.1×31.2cmとなる。深さはＰ177が最深（33.1cm）、Ｐ172が最浅（15.7cm）で平均値は22.8cmである。柱列はすべて千鳥の並びとなる。

桁行の北側と南側の高さを比べた場合、柱穴の検出面は東側Ｐ172－Ｐ173で36cm、西側Ｐ176－Ｐ177で47cm、北側の方が高い。さらに梁行妻の東側と西側では、北側Ｐ172－Ｐ174－Ｐ176で28cm、南側Ｐ173－Ｐ175－Ｐ177で32cm、東側の方が高い。

Ｐ177は二段掘りとなっている。Ｐ173から土師器〔457〕が出土している。

| Pit NO. | 桁行柱間 (m) | 桁行間(m) | Pit NO. | 梁間柱間 (m) | 梁間間(m) | PitNO. | 深さ(cm) | 長径(cm) | 短径(cm) |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 172～174 | 2.05 | 4.1 | 172～173 | 2.3 | 2.3 | 172 | 15.7 | 32 | 28 |
| 174～176 | 2.05 | | | | | 173 | 24.9 | 38 | 36 |
| | | | | | | 174 | 18.3 | 34 | 27 |
| 173～175 | 2.05 | 4.1 | 176～177 | 2.3 | 2.3 | 175 | 20.8 | 32 | 28 |
| 175～177 | 2.05 | | | | | 176 | 23.7 | 39 | 36 |
| | | | | | | 177 | 33.1 | 35 | 32 |

第32表　Ｖ３－ＳＢ２５計測表




第44図　Ｖ３－ＳＢ２５実測図

## Ｖ３－ＳＢ２６

桁行3.4ｍ、梁行妻2.3ｍの２間×２間の建物で、方位はＮ67°Ｗである。柱間寸法は、桁行Ｐ178～Ｐ182～Ｐ183で2.0ｍ＋1.4ｍ、Ｐ180～Ｐ181～Ｐ184で1.4ｍ＋2.0ｍ、梁行妻Ｐ178～Ｐ179～Ｐ180で1.5ｍ＋0.8ｍとなる。Ｐ183～Ｐ184は中央柱が不明で、全長2.3ｍを測る。

柱穴の大きさは、Ｐ184が最大（36×30cm）、Ｐ182が最小（24×24cm）で平均値は29.6×26.1cmとなる。深さはＰ179が最深（38.2cm）、Ｐ182が最浅（17.5cm）で平均値は26.9cmである。

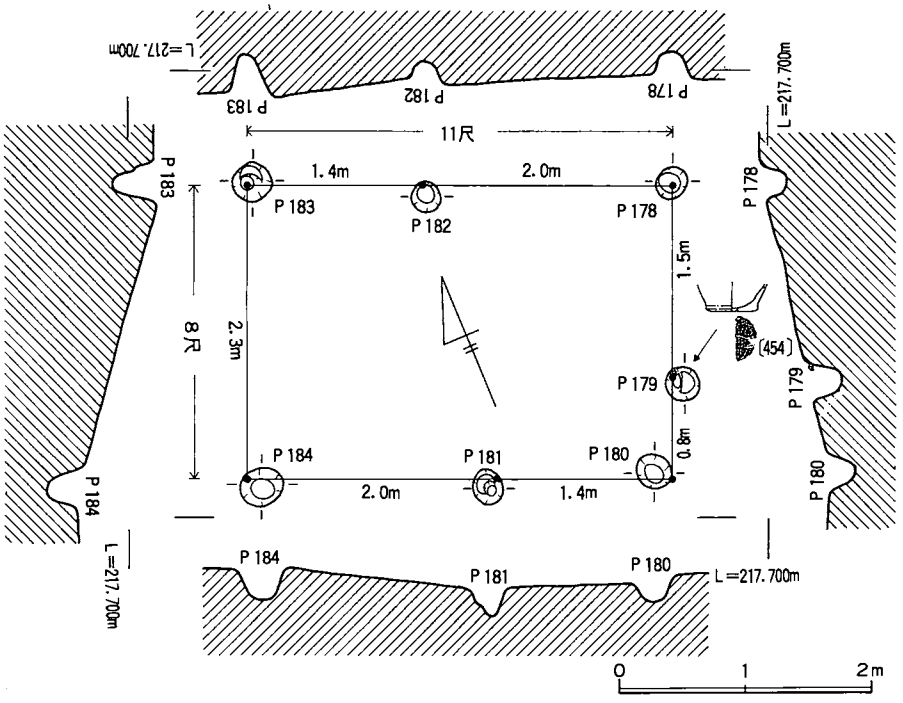
柱列はすべて千鳥の並びとなる。

桁行の北側と南側の高さを比べた場合、柱穴の検出面は東側Ｐ178－Ｐ179－Ｐ180で58cm、西側Ｐ183－Ｐ184で68cm、北側の方が高い。

Ｐ181とＰ183は二段掘りである。Ｐ179からは土師器坏〔454〕と小石が出土している。

| Pit NO. | 桁行柱間 (m) | 桁行間(m) | Pit NO. | 梁間柱間 (m) | 梁間間(m) | PitNO. | 深さ(cm) | 長径(cm) | 短径(cm) |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 178～182 | 2.0 | 3.4 | 178～179 | 1.5 | 2.3 | 178 | 19.1 | 28 | 25 |
| 182～183 | 1.4 | | 179～180 | 0.8 | | 179 | 38.2 | 28 | 26 |
| | | | | | | 180 | 20.6 | 30 | 24 |
| 180～181 | 1.4 | 3.4 | 183～184 | 2.3 | 2.3 | 181 | 26.9 | 28 | 24 |
| 181～184 | 2.0 | | | | | 182 | 17.5 | 24 | 24 |
| | | | | | | 183 | 36.9 | 33 | 30 |
| | | | | | | 184 | 29.1 | 36 | 30 |

第33表　Ｖ３－ＳＢ２６計測表




第45図　Ｖ３－ＳＢ２６実測図

## Ｖ３－ＳＢ２７

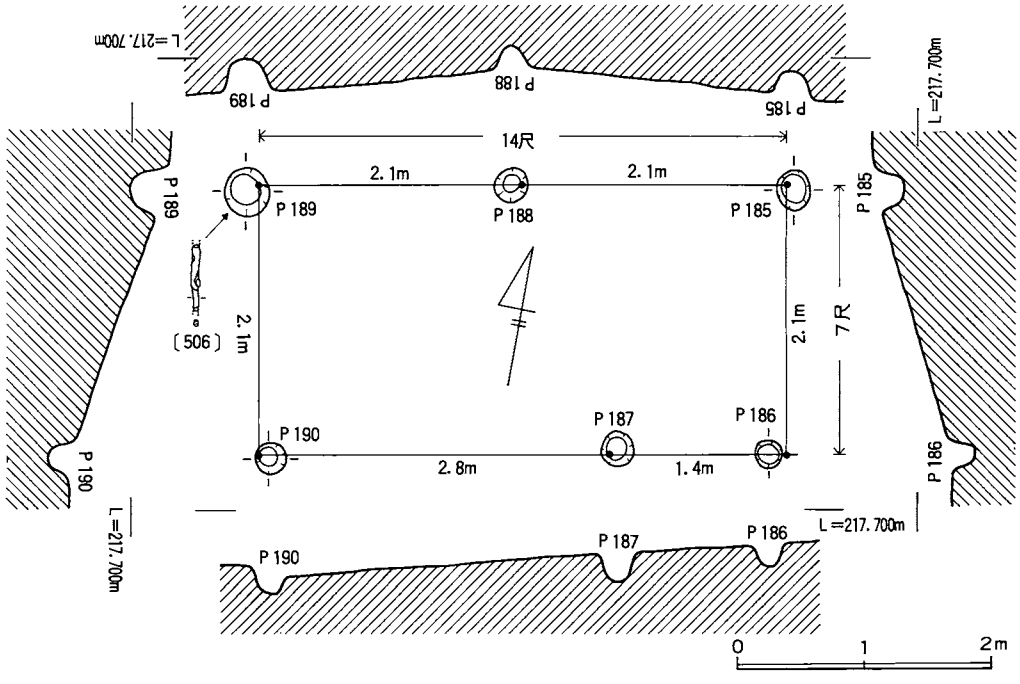
桁行4.2ｍ、梁行妻2.1ｍの２間×１間の建物で、方位はＳ79°Ｗである。柱間寸法は、桁行Ｐ185～Ｐ188～Ｐ189で2.1ｍ＋2.1ｍ、Ｐ186～Ｐ187～Ｐ190で1.4ｍ＋2.8ｍ、梁行妻Ｐ185～Ｐ186で2.1ｍ、Ｐ189～Ｐ190で2.1ｍを測る。

柱穴の大きさは、Ｐ189が最大（37×36cm）、Ｐ186が最小（22×20cm）で平均値は26.8×24.5cmを測る。深さはＰ189が最深（28.4cm）、Ｐ186が最浅（19.5cm）で平均値は23.2cmである。柱列は両梁行妻が千鳥の並びとなる。

桁行の北側と南側の高さを比べた場合、柱穴の検出面は東側Ｐ185－Ｐ186で65cm、西側Ｐ189－Ｐ190で82cm、北側の方が高い。さらに梁行妻の東側と西側では、南側Ｐ186－Ｐ187－Ｐ190で12cm東側の方が高い。Ｐ189からは角釘〔506〕が出土している。

| Pit NO. | 桁行柱間 (m) | 桁行間(m) | Pit NO. | 梁間柱間 (m) | 梁間間(m) | PitNO. | 深さ(cm) | 長径(cm) | 短径(cm) |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 185～188 | 2.1 | 4.2 | 185～186 | 2.1 | 2.1 | 185 | 21.9 | 31 | 17 |
| 188～189 | 2.1 | | | | | 186 | 19.5 | 22 | 20 |
| | | | | | | 187 | 22.3 | 28 | 25 |
| 186～187 | 1.4 | 4.2 | 189～190 | 2.1 | 2.1 | 188 | 25.9 | 27 | 25 |
| 187～190 | 2.8 | | | | | 189 | 28.4 | 37 | 36 |
| | | | | | | 190 | 21.2 | 26 | 24 |

第34表　Ｖ３－ＳＢ２７計測表




第46図　Ｖ３－ＳＢ２７実測図

## Ｖ３－ＳＢ２８

桁行3.2ｍ、梁行妻2.0ｍの２間×１間の建物で、方位はＮ87°Ｗでほぼ東西方向にある。柱間寸法は、桁行Ｐ192～Ｐ194～Ｐ198で1.6ｍ＋1.6ｍ、Ｐ191～Ｐ196はＰ193とＰ196の間に補助柱のＰ195が付き、1.6ｍ＋0.8ｍ＋0.8ｍとなる。梁行妻はＰ196～Ｐ197～Ｐ198で1.2ｍ＋0.8ｍである。Ｐ191～Ｐ192は中央柱が不明で全長2.0ｍを測る。

柱穴の大きさは、Ｐ197が最大（38×30cm）、Ｐ194が最小（24×20cm）で平均値は31×27.5cmとなる。深さはＰ196が最深（81.4cm）、Ｐ194が最浅（14.5cm）で平均値は31cmである。

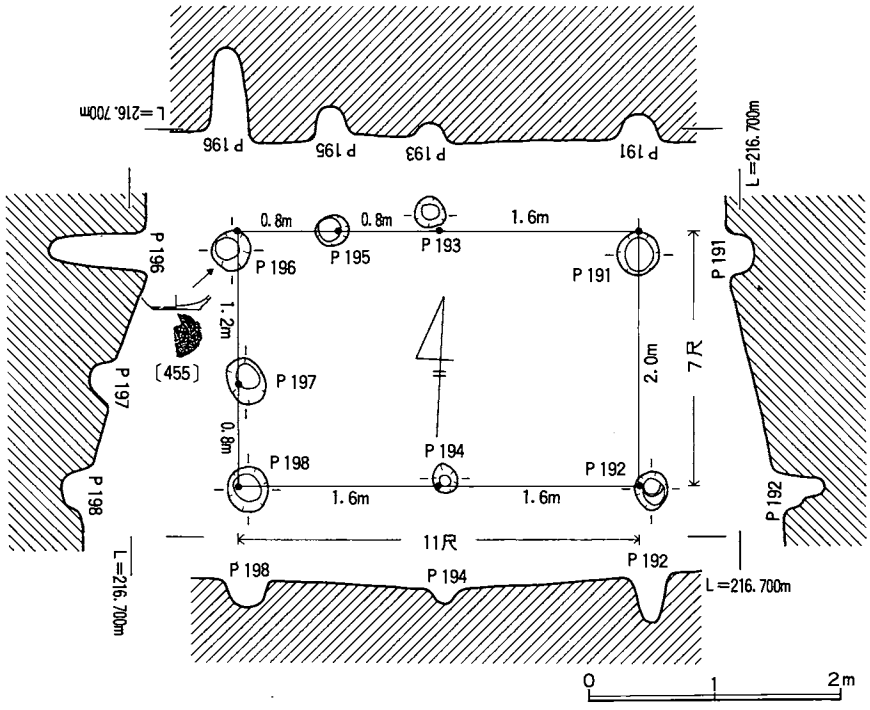
柱列はすべて千鳥の並びとなる。

桁行の北側と南側の高さを比べた場合、柱穴の検出面は東側Ｐ191－Ｐ192で53cm、西側Ｐ196－Ｐ197－Ｐ198で54cm、北側の方が高い。Ｐ192は二段掘りである。

Ｐ196からは土師器坏〔455〕が出土している。

| Pit NO. | 桁行柱間 (m) | 桁行間(m) | Pit NO. | 梁間柱間 (m) | 梁間間(m) | PitNO. | 深さ(cm) | 長径(cm) | 短径(cm) |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 191～193 | 1.6 | } 3.2 | 191～192 | 2.0 | 2.0 | 191 | 22.2 | 34 | 34 |
| 193～195 | 0.8 | | | | | 192 | 41.0 | 31 | 27 |
| 195～196 | 0.8 | | | | | 193 | 16.3 | 26 | 23 |
| | | | | | | 194 | 14.5 | 24 | 20 |
| 192～194 | 1.6 | } 3.2 | 196～197 | 1.2 | } 2.0 | 195 | 27.4 | 28 | 24 |
| 194～198 | 1.6 | | 197～198 | 0.8 | | 196 | 81.4 | 31 | 29 |
| | | | | | | 197 | 20.0 | 38 | 30 |
| | | | | | | 198 | 25.0 | 36 | 33 |

第35表　Ｖ３－ＳＢ２８計測表




第47図　Ｖ３－ＳＢ２８実測図

## Ｖ３－ＳＢ２９

桁行4.2ｍ、梁行妻2.4ｍの２間×１間の建物で、方位はＮ19°Ｅである。柱間寸法は、桁行Ｐ199～Ｐ201～Ｐ203で1.7ｍ＋2.5ｍ、Ｐ200～Ｐ202～Ｐ204で1.7ｍ＋2.5ｍ、梁行妻Ｐ199～Ｐ200で2.4ｍ、Ｐ203～Ｐ204で2.4ｍを測る。

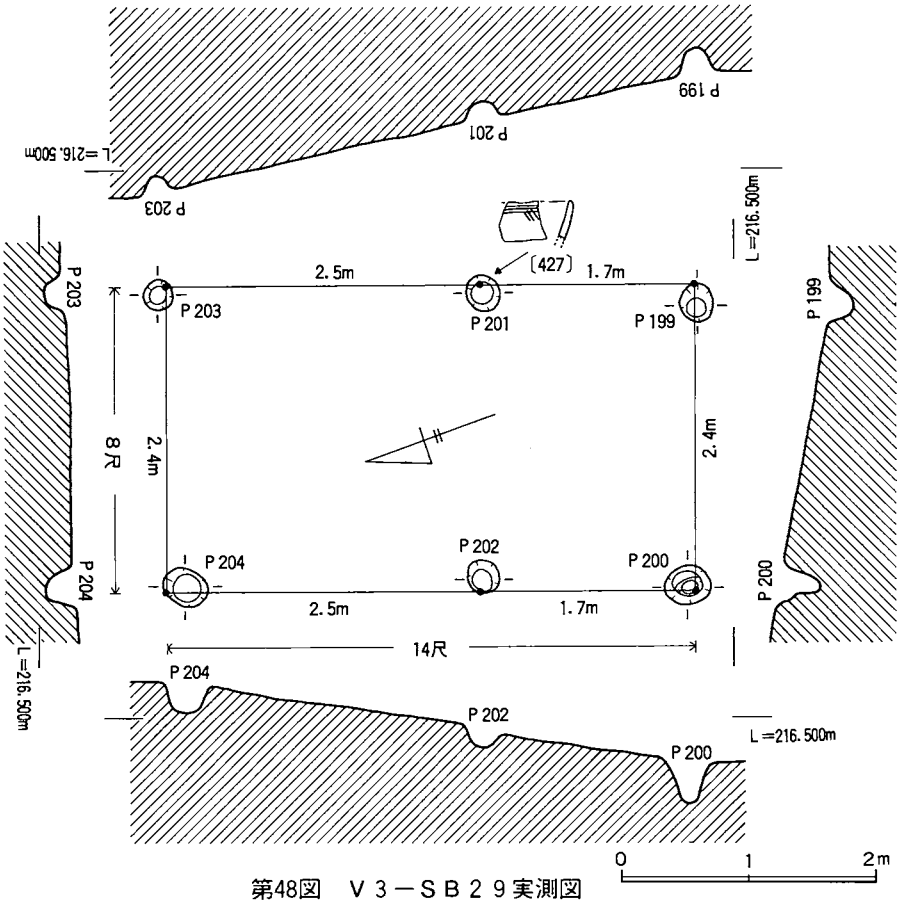
柱穴の大きさは、Ｐ204が最大（38×29cm）、Ｐ203が最小（25×23cm）で平均値は31.3×26.7cmとなる。深さはＰ200が最深（35.4cm）、Ｐ201が最浅（15.5cm）で平均値は21.5cmである。

柱列は梁行妻Ｐ199～Ｐ200を除いて千鳥の並びとなる。

桁行の東側と西側の高さを比べた場合、柱穴の検出面は南側Ｐ199－Ｐ200で47cm、西側の方が高い。さらに梁行妻の北側と南側では、東側Ｐ199－Ｐ201－Ｐ203で98cm、西側Ｐ200－Ｐ202－Ｐ204で70cm、北側の方が高い。Ｐ201から青磁〔427〕が出土している。

| Pit NO. | 桁行柱間 (m) | 桁行間(m) | Pit NO. | 梁間柱間 (m) | 梁間間(m) | PitNO. | 深さ(cm) | 長径(cm) | 短径(cm) |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 199～201 | 1.7 | 4.2 | 199～200 | 2.4 | 2.4 | 199 | 22.0 | 30 | 25 |
| 201～203 | 2.5 | | | | | 200 | 35.4 | 36 | 33 |
| | | | | | | 201 | 15.5 | 31 | 26 |
| 200～202 | 1.7 | 4.2 | 203～204 | 2.4 | 2.4 | 202 | 18.0 | 28 | 24 |
| 202～204 | 2.5 | | | | | 203 | 16.0 | 25 | 23 |
| | | | | | | 204 | 22.0 | 38 | 29 |

第36表　Ｖ３－ＳＢ２９計測表




第48図　Ｖ３－ＳＢ２９実測図

### Ｖ３－ＳＢ３０

桁行4.3ｍ、梁行妻2.1ｍの２間×２間の建物で、方位はＮ64°Ｗである。柱間寸法は、桁行Ｐ205～Ｐ208～Ｐ210で1.5ｍ＋2.8ｍ、Ｐ207～Ｐ209～Ｐ211で1.5ｍ＋2.8ｍ、梁行妻Ｐ205～Ｐ206～Ｐ207で0.6ｍ＋1.5ｍとなる。Ｐ210～Ｐ211は中央柱が不明で全長2.1ｍを測る。

柱穴の大きさは、Ｐ207が最大（36×28cm）、P206が最小（26×22cm）で平均値は31.6×26.1cmとなる。深さはＰ207が最深（67.5cm）、Ｐ205が最浅（17cm）で平均値は24.6cmである。

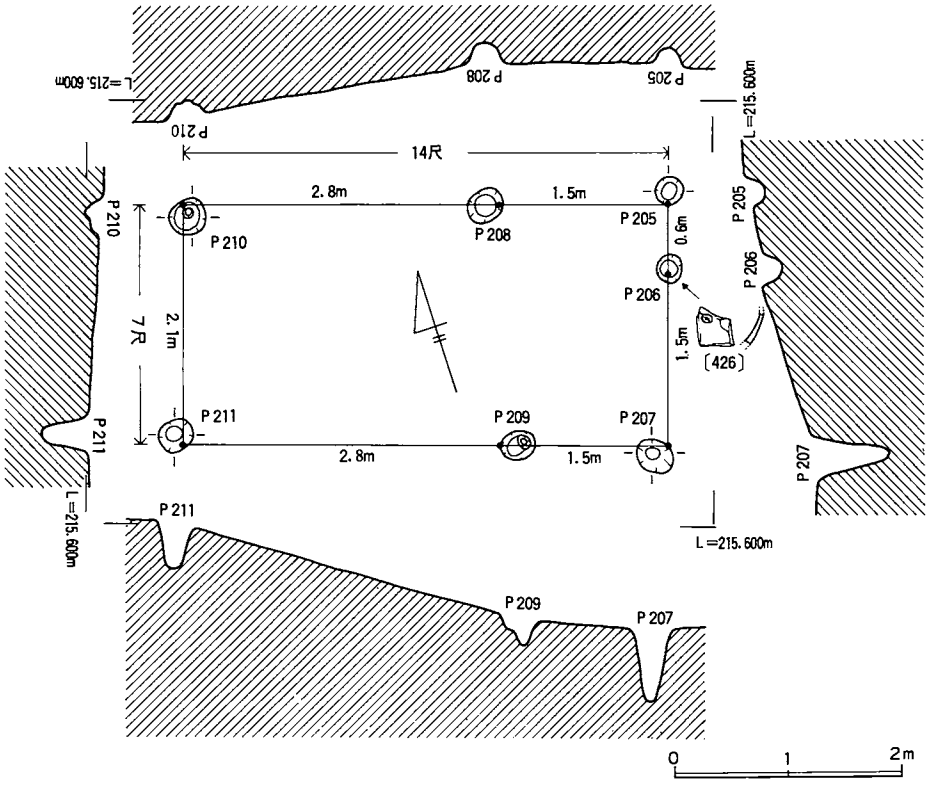
柱列はすべて千鳥の並びとなる。

桁行の北側と南側の高さを比べた場合、柱穴の検出面は、東側Ｐ205－Ｐ206－Ｐ207で62cm、西側Ｐ210－Ｐ211で17cm、北側のほうが高い。さらに梁行妻の東側と西側では、北側Ｐ205－Ｐ208－Ｐ210で50cm、南側Ｐ207－Ｐ209－Ｐ211で95cm、西側が高い。

Ｐ206からは青磁片〔426〕が出土している。

| Pit NO. | 桁行柱間 (m) | 桁行間(m) | Pit NO. | 梁間柱間 (m) | 梁間間(m) | PitNO. | 深さ(cm) | 長径(cm) | 短径(cm) |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 205～208 | 1.5 | 4.3 | 205～206 | 0.6 | 2.1 | 205 | 17.0 | 26 | 24 |
| 208～210 | 2.8 | | 206～207 | 1.5 | | 206 | 18.0 | 26 | 22 |
| | | | | | | 207 | 67.5 | 36 | 28 |
| 207～209 | 1.5 | 4.3 | 210～211 | 2.1 | 2.1 | 208 | 20.0 | 35 | 26 |
| 209～211 | 2.8 | | | | | 209 | 34.0 | 33 | 25 |
| | | | | | | 210 | 22.0 | 33 | 32 |
| | | | | | | 211 | 44.0 | 32 | 26 |

第37表　Ｖ３－ＳＢ３０計測表




第49図　Ｖ３－ＳＢ３０実測図

## 第５節　東側尾根の調査結果

東側尾根は南北の長さ82ｍ、東西幅５～19ｍである。大半が凝灰岩の岩場で、粘土層の範囲は第50図で示したスクリーン・トーンの４箇所のみに限られる。この岩場を中心に東側尾根の南側へ45ｍの範囲で、18棟の建築址が検出された。この内、ＳＢ３２・ＳＢ４５の２棟を除く16棟の建築址が、何らかの形で岩場を掘り込んでいる。

建築址を説明するにあたり第50図に示した様に、東側尾根を６箇所に区分し、それらをＥ－①～Ｅ－⑥区と呼称する。

**東側尾根より検出の建築址**

〔Ｅ－①区〕　粘土層の広がる標高223ｍラインで、東尾根の北側基底部にあたる。ＳＢ３１～ＳＢ３４の４棟が検出されたが、ＳＢ３１とＳＢ３２が切り合っている。桁行方向からＳＢ３１（Ｎ13° Ｗ）・ＳＢ３４（Ｎ10° Ｗ）と、ＳＢ３２（Ｓ77° Ｗ）・ＳＢ３３（Ｓ90° Ｗ）に区分される。規模の面ではＳＢ３１が4.2ｍ(14尺)×3.0ｍ(10尺)で、ＳＢ３３は4.0ｍ(13尺)×2.0ｍ(７尺)を測る。ＳＢ３２とＳＢ３４は、3.3ｍ(11尺)×2.4ｍ(８尺)と3.8ｍ(12尺)×2.6ｍ(９尺)でほぼ同一規模である。ＳＢ３２から青磁〔516〕が出土している。

Ｅ－①区ではＳＢ３１とＳＢ３２の切り合いから１回の建て替えが考えられる。

〔Ｅ－②区〕　東尾根の最高所で、標高224.5ｍ～223.5ｍラインである。凝灰岩の岩場が小山状の高まりをなす所で、ＳＢ３５～ＳＢ３７の３棟が検出された。建築址の規模は3.4ｍ(11尺)×2.1ｍ(７尺)で、全く同一であるが、３棟とも切り合った状態にある。

Ｅ－②区では３棟の切り合いから３回の建て替えが想定される。

〔Ｅ－③区〕　Ｅ－②区の西側にあたり、標高223.5ｍ～222.5ｍラインの岩場である。ＳＢ３８～ＳＢ４０の３棟が検出されたが、ＳＢ３８とＳＢ３９及びＳＢ３９とＳＢ４０が切り合っている。建築址の桁行方向と規模はＳＢ３８がＳ83° Ｗで4.3ｍ(14尺)×2.2ｍ(７尺)、ＳＢ３９がＮ10° Ｗで3.4ｍ(11尺)×3.2ｍ(11.5尺)、ＳＢ４０がＮ４° Ｅで3.4ｍ(11尺)×2.7ｍ(９尺)である。ＳＢ３８の桁行は、東側が西側より高く66～96㎝の比高がある。

ＳＢ４０の柱穴P269から青磁〔518〕が出土している。

Ｅ－③区では、Ｅ－②区と同様に３棟の切り合いから３回の建て替えが想定される。

〔Ｅ－④区〕　東側尾根の北側基底部から南側へ29ｍ～36ｍの所で、標高223ｍ～222ｍラインである。大半は岩場であるが、西側の一部に限り粘土層の広がりを見る。ＳＢ４１～ＳＢ４４の４棟が検出され、この中でＳＢ４１・ＳＢ４２・ＳＢ４３とＳＢ４２・ＳＢ４４が切り合っている。建築址は桁行方向において、ＳＢ４３（Ｎ84° Ｅ）とＳＢ４４（Ｎ６° Ｗ）が同一で、規模もＳＢ４３が3.8ｍ(13尺)×2.4ｍ(８尺)で、ＳＢ４４が3.6ｍ(12尺)×2.2ｍ(７尺)と、似かよっている。ＳＢ４２は、桁行方向がＮ４° ＷでＳＢ４３とＳＢ４４に直交する。規模は

4.0m(13尺)×2.0m(7尺)である。

ＳＢ４１は桁行方向Ｓ56°Ｗで、Ｅ－④区の中では例外的な桁行方向を示しており、これはＥ－②区のＳＢ３５（Ｓ61°Ｗ）と似かよる。規模は3.7m(12尺)×2.4m(8尺)である。

Ｅ－④区では、３棟分と２棟分の切り合いから、３回の建て替え（ＳＢ４１とＳＢ４４が並列・ＳＢ４３とＳＢ４４が並列・ＳＢ４２が単独で存在）が想定される。

〔Ｅ－⑤区〕　Ｅ－④区の西側斜面にあって粘土層の広がる標高221.5m～219mラインである。ＳＢ４５が検出された。桁行方向はＮ3°Ｗで、これはＥ－④区のＳＢ４２と同一方向である。ＳＢ４５とＳＢ４２はセット関係にあると思われる。

〔Ｅ－⑥区〕　東側尾根の北側基底部から南側へ4.5mの所で、同尾根における建築址検出の南限区域にあたる。標高222m～221.5mラインの岩場から、ＳＢ４６～ＳＢ４８の３棟が検出された。３棟とも切り合っているが、建築址の桁行方向は、ＳＢ４６（Ｎ87°Ｗ）とＳＢ４７（Ｎ74°Ｗ）が同一で、これにＳＢ４８（Ｎ12°Ｅ）が直交する形となる。規模はＳＢ４６が3.7m(12尺)×2.8m(9尺)、ＳＢ４７が3.6m(12尺)×2.7m(9尺)、ＳＢ４８が4.0m(10尺)×2.2m(7尺)を測る。

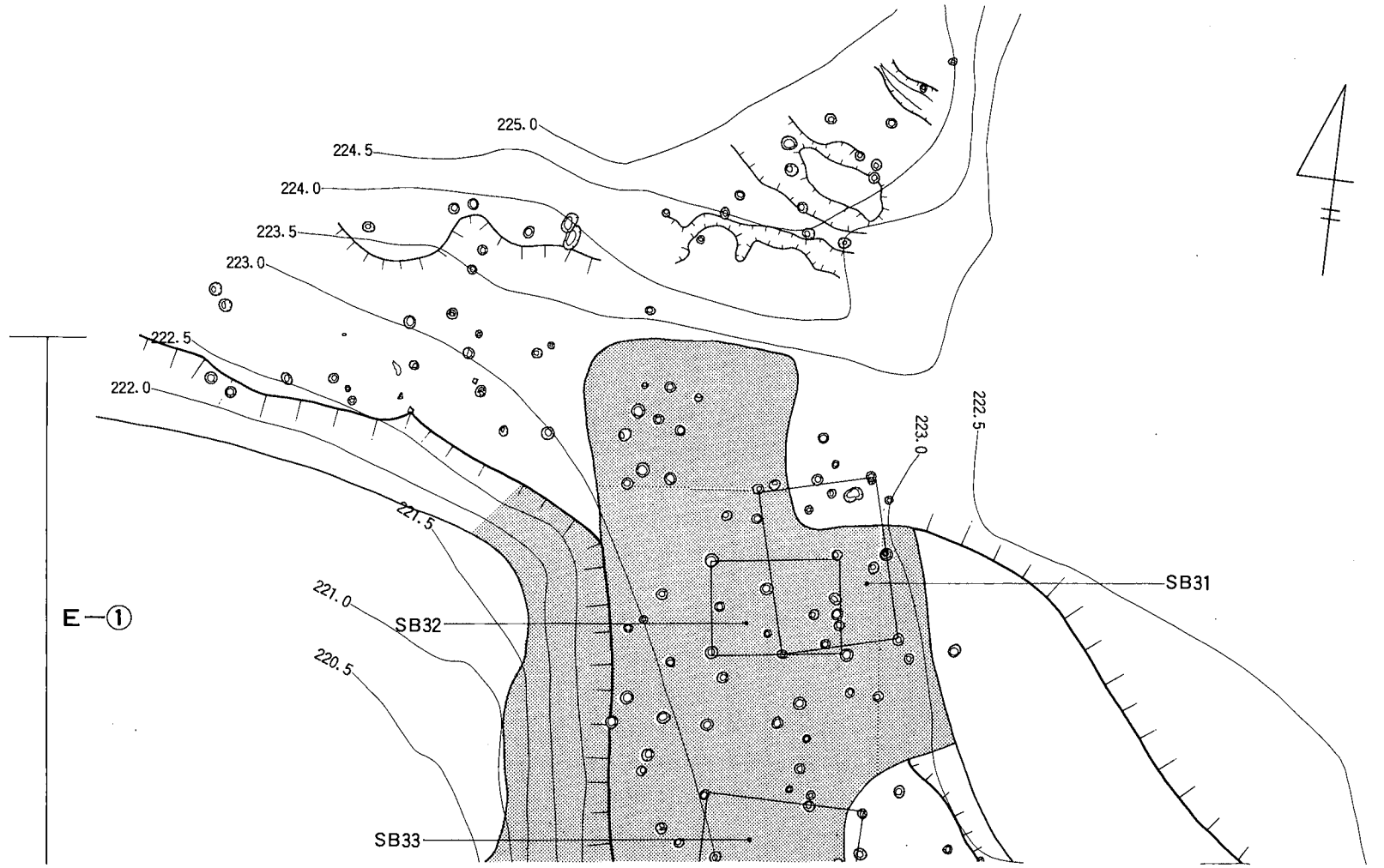
Ｅ－⑥区では、３棟の切り合いから３回の建て替えが想定される。

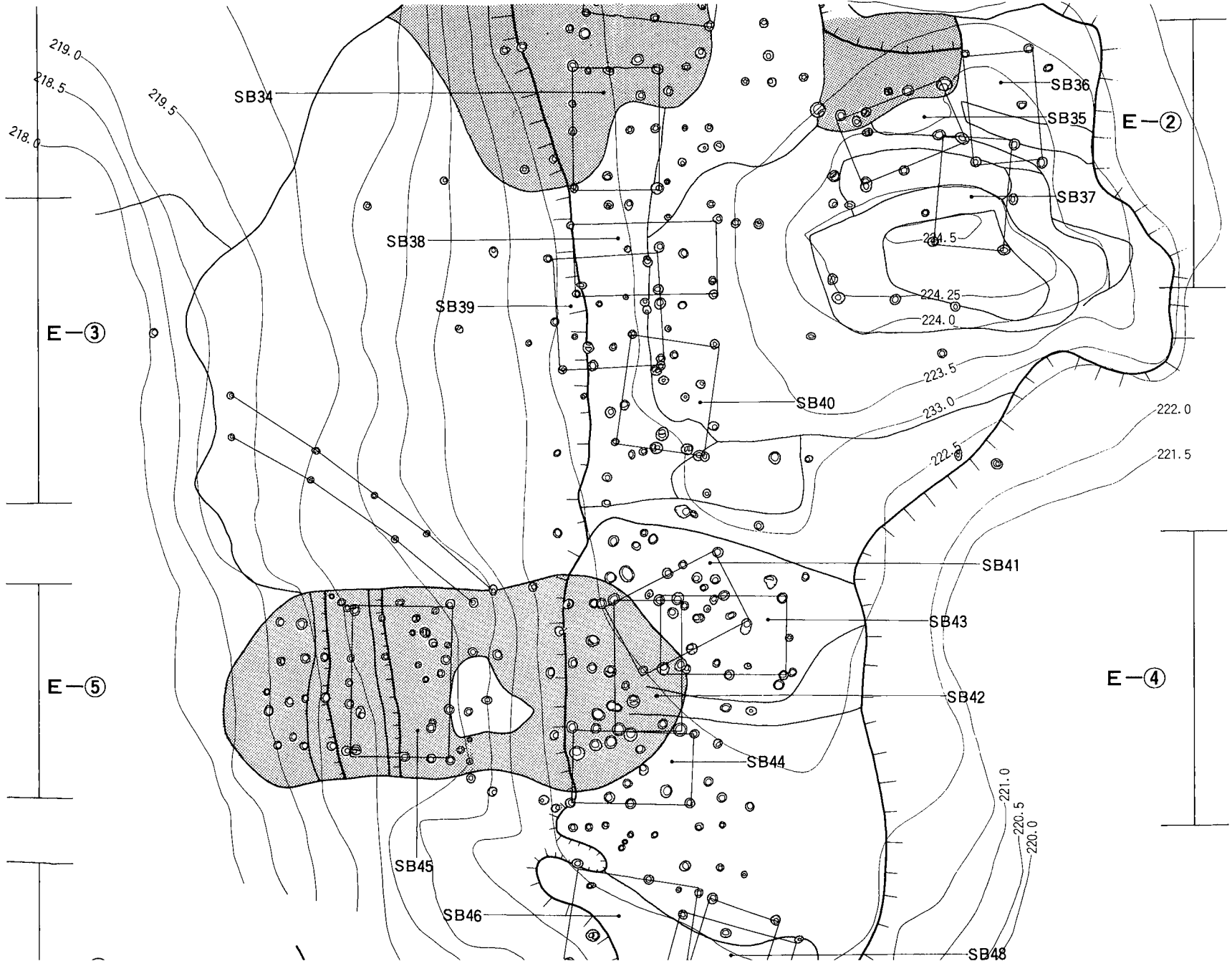
| 建築址ＮＯ. | 規　模 | 規　格 | 桁行方位 | 備　　考 |
|---|---|---|---|---|
| Ｅ－ＳＢ３１ | 4.2m×3.0m<br>(14尺×10尺)<br>12.6㎡ | ２間×２間 | Ｎ13°Ｗ | 梁行妻（P212～P213）の中央柱が不明。<br>梁行妻の北側と南側では、北側の方が30cm高い。P215から青磁〔517〕が出土している。 |
| Ｅ－ＳＢ３２ | 3.3m×2.4m<br>(11尺×８尺)<br>7.9㎡ | １間×２間 | Ｓ77°Ｗ | 梁行妻（P222～P223）の中央柱が不明。<br>P222から青磁〔516〕が出土している。 |
| Ｅ－ＳＢ３３ | 4.0m×2.0m<br>(13尺×７尺)<br>8.0㎡ | ２間×２間 | Ｓ90°Ｗ | 梁行妻（P229～P230）の中央柱が不明。<br>梁行妻の東側と西側では、東側の方が20～22cm高い。P226から青磁〔518〕が出土している。 |
| Ｅ－ＳＢ３４ | 3.8m×2.6m<br>(12尺×９尺)<br>8.8㎡ | ２間×１間 | Ｎ10°Ｗ | 桁行の東側と西側では、東側の方が19～52cm高い。梁行妻の北側と南側では、北側の方が26cm高い。 |
| Ｅ－ＳＢ３５ | 3.4m×2.1m<br>(11尺×７尺)<br>7.1㎡ | ３間×１間 | Ｓ61°Ｗ | 桁行（P237～P242）の中央柱は２本に分かれる。桁行の北側と南側では、北側の方が48～56cm高い。<br>南側の桁行では中央柱が両端の柱穴よりも高い位置で掘り込まれている。 |

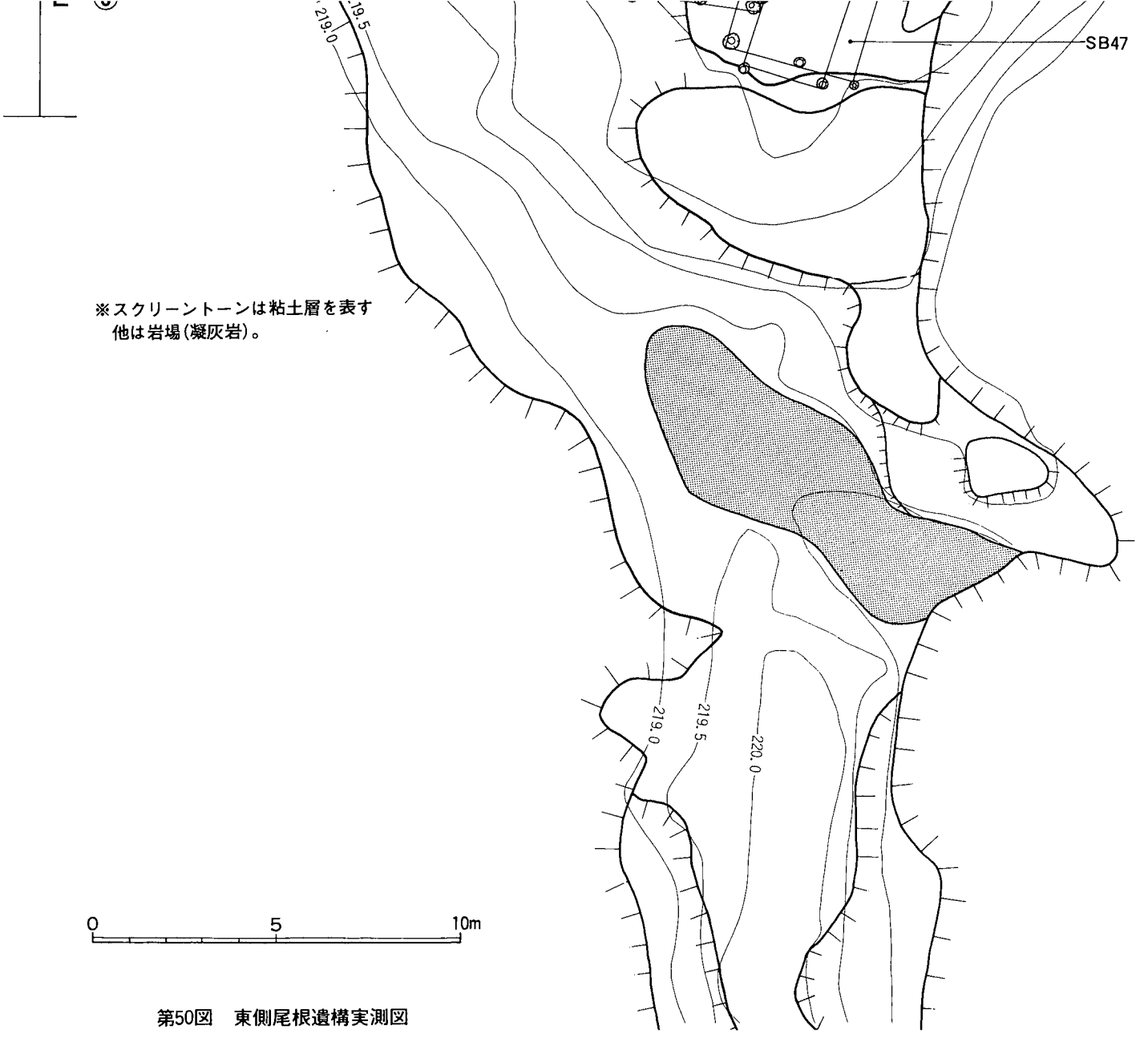
第38表　東側尾根検出の建築址一覧表①

| 建築址NO. | 規　模 | 規　格 | 桁行方位 | 備　　考 |
|---|---|---|---|---|
| E－SB36 | 3.4m×2.1m<br>(11尺×7尺)<br>7.1㎡ | 1間×1間 | N12°W | 桁行の東側と西側では、西側の方が25～35cm高い。梁行妻の北側と南側では、南側の方が55～72cm高い。 |
| E－SB37 | 3.4m×2.1m<br>(11尺×7尺)<br>7.1㎡ | 2間×1間 | N2°W | 桁行（P249～P252）の中央柱が不明。<br>桁行の東側と西側では、東側の方が32～59cm高い。 |
| E－SB38 | 4.3m×2.2m<br>(14尺×7尺)<br>9.5㎡ | 2間×1間 | S83°W | 梁行妻の東側と西側では、東側の方が66～96cm高い。桁行の北側と南側では、北側の方が22cm高い。 |
| E－SB39 | 3.4m×3.2m<br>(11尺×11尺)<br>10.9㎡ | 2間×1間 | N10°W | 桁行の東側と西側では、東側の方が67～88cm高い。梁行妻の北側と南側では、南側の方が20cm高い。 |
| E－SB40 | 3.4m×2.7m<br>(11尺×9尺)<br>9.2㎡ | 2間×1間 | N1°W | 桁行の東側と西側では、東側の方が35～38cm高い。梁行妻の北側と南側では、北側の方が25～27cm高い。 |
| E－SB41 | 3.7m×2.4m<br>(12尺×8尺)<br>8.9㎡ | 2間×1間 | S56°W | 梁行妻の東側と西側を比べた場合、東側の方が40～42cm高い。 |
| E－SB42 | 4.0m×2.0m<br>(13尺×7尺)<br>8.0㎡ | 2間×1間 | N4°W | 桁行の東側と西側では、東側の方が26cm高い。梁行妻の北側と南側では37cm北側の方が高い。 |
| E－SB43 | 3.8m×2.4m<br>(13尺×8尺)<br>9.1㎡ | 2間×2間 | N84°E | 梁行妻（P288～P289）の中央柱が不明。<br>桁行の北側と南側では、北側の方が23cm高い。梁行妻の東側と西側では、東側の方が22～24cm高い。 |
| E－SB44 | 3.6m×2.2m<br>(12尺×7尺)<br>7.9㎡ | 2間×1間 | N6°W | 桁行の北側と南側では、北側の方が22cm高い。梁行妻の東側と西側では、東側の方が46cm高い。P292から青磁〔519〕が出土している。 |
| E－SB45 | 4.6m×3.0m<br>(15尺×10尺)<br>13.8㎡ | 3間×2間 | N3°W | 桁行の東側と西側では、東側の方が38～58cm高い。梁行妻の北側と南側では、北側の方が71cm高い。 |
| E－SB46 | 3.7m×2.8m<br>(12尺×9尺)<br>10.4㎡ | 2間×1間 | N87°W | 桁行の北側と南側では、北側の方が49～89cm高い。梁行妻の東側と西側では、東側の方が52cm高い。 |
| E－SB47 | 3.6m×3.1m<br>(12尺×9尺)<br>9.7㎡ | 2間×1間 | N74°W | 桁行（P312～P315）の中央柱が不明。<br>桁行の北側と南側では、北側の方が36～61cm高い。南側桁行では中央柱のP314が、両端の柱穴と比べて、やや高い所から掘り込まれている。P312からは、土師器片〔522〕が出土している。 |
| E－SB48 | 4.0m×2.2m<br>(13尺×7尺)<br>8.8㎡ | 1間×1間 | N12°E | 梁行妻の北側と南側では、北側の方が39～48cm高い。 |

第39表　東側尾根検出の建築址一覧表②


225.0
224.5
224.0
223.5
223.0
222.5
222.0
221.5
221.0
220.5
223.0
222.5
SB31
SB32
SB33
E—①


219.0
218.5
218.0
219.5
SB34
SB36
SB35
E—②
SB37
SB38
224.5
224.25
224.0
SB39
E—③
223.5
233.0
SB40
222.0
222.5
221.5
SB41
SB43
E—⑤
E—④
SB42
SB44
221.0
220.5
220.0
SB45
SB46
SB48




第50図　東側尾根遺構実測図

## E－SB３１

桁行4.2m、梁行妻3.0mの２間×２間の建物で、方位はN13°Wである。柱間寸法は、桁行P212～P214～P216で2.1m＋2.1m、P213～P215～P218で1.6m＋2.6m、梁行妻P216～P217～P218で1.6m＋1.4mとなる。P212～P213は中央柱が不明で、全長3.0mを測る。

柱穴の大きさは、P215が最大（32×26cm）、P213が最小（24×18cm）で平均値は27.9×24.1cmとなる。深さはP218が最深（30cm）、P216が最浅（11cm）で平均値は17.6cmである。

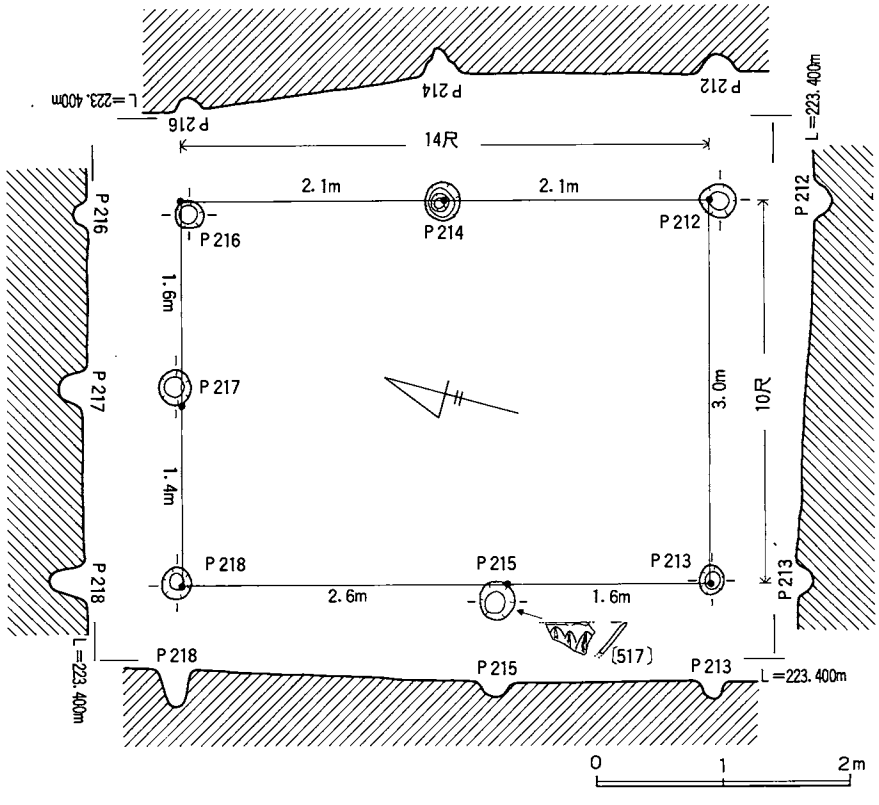
柱列は梁行妻P216－P217－P218と桁行P213－P215－P218で千鳥の並びとなる。

桁行の東側と西側の高さを比べた場合、柱穴の検出面は南側P212－P213で16cm、西側の方が高い。さらに梁行妻の北側と南側では、東側P212－P214－P216で30cm北側の方が高い。

P215から青磁片〔517〕が出土している。

| Pit NO. | 桁行柱間 (m) | 桁行間(m) | Pit NO. | 梁間柱間 (m) | 梁間間(m) | PitNO. | 深さ(cm) | 長径(cm) | 短径(cm) |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 212～214 | 2.1 | } 4.2 | 212～213 | 3.0 | 3.0 | 212 | 13.0 | 30 | 27 |
| 214～216 | 2.1 | | | | | 213 | 13.0 | 24 | 18 |
| | | | | | | 214 | 22.0 | 31 | 28 |
| 213～215 | 1.6 | } 4.2 | 216～217 | 1.6 | } 3.0 | 215 | 12.0 | 32 | 26 |
| 215～218 | 2.6 | | 217～218 | 1.4 | | 216 | 11.0 | 24 | 20 |
| | | | | | | 217 | 22.0 | 28 | 26 |
| | | | | | | 218 | 30.0 | 26 | 24 |

第40表　E－SB３１計測表




第51図　E－SB３１実測図

## E－SB32

桁行3.3m、梁行妻2.4mの1間×2間の建物で、方位はS77°Wである。柱間寸法は、桁行P219～P222で3.3m、P221～P223で3.3m、梁行妻はP219～P220～P221で1.5m＋0.9mを測り、P222～P223では中央柱が不明で全長2.4mを測る。

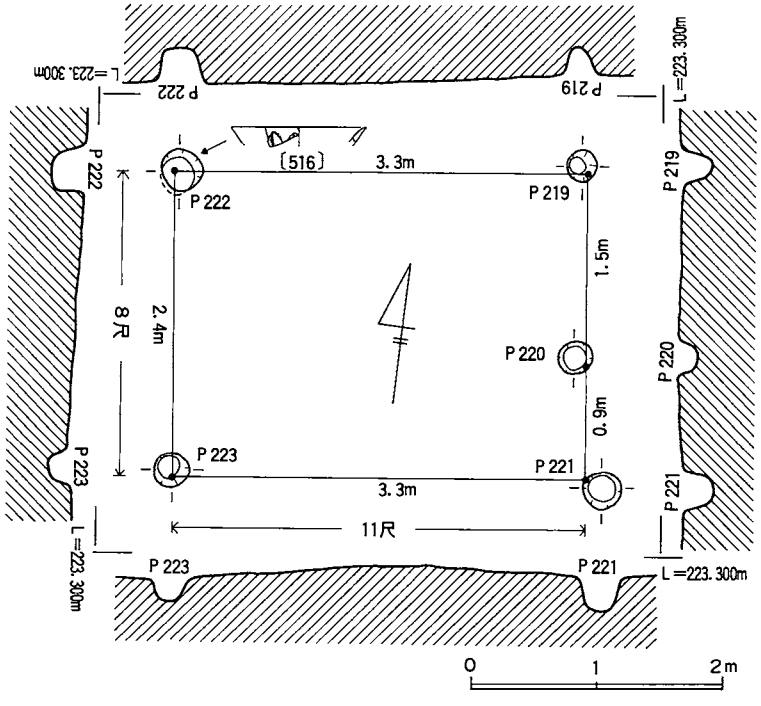
柱穴の大きさは、P222が最大（33×32cm）、P219が最小（25×22cm）で平均値は29.6×27.4cmとなる。深さはP222が最深（25cm）、P220が最浅（13cm）で平均値は19.8cmである。

柱列は梁行妻P222－P223を除いて千鳥の並びとなる。

P222から青磁〔516〕が出土している。

| Pit NO. | 桁行柱間 (m) | 桁行間(m) | Pit NO. | 梁間柱間 (m) | 梁間間(m) | PitNO. | 深さ(cm) | 長径(cm) | 短径(cm) |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 219～222 | 3.3 | 3.3 | 219～220 | 1.5 | 2.4 | 219 | 24.0 | 25 | 22 |
| | | | 220～221 | 0.9 | | 220 | 13.0 | 28 | 26 |
| | | | | | | 221 | 25.0 | 32 | 29 |
| 221～223 | 3.3 | 3.3 | 222～223 | 2.4 | 2.4 | 222 | 27.0 | 33 | 32 |
| | | | | | | 223 | 17.0 | 30 | 28 |

第41表　E－SB32計測表




第52図　E－SB32実測図

## E－SB33

桁行4.0m、梁行妻2.0mの2間×2間の建物で、方位はS90°Wである。柱間寸法は、桁行P224～P227～P229で1.4m＋2.6m、P226～P228～P230で1.8m＋2.2m、梁行妻P224～P225～P226で1.0m＋1.0mとなる。P229～P230は中央柱が不明で全長2.0mを測る。

柱穴の大きさは、P226が最大（30×27cm）、P224が最小（22×18cm）で平均値は25.4×23.3cmとなる。深さはP225が最深（34.3cm）、P229が最浅（10cm）で平均値は20.4cmである。

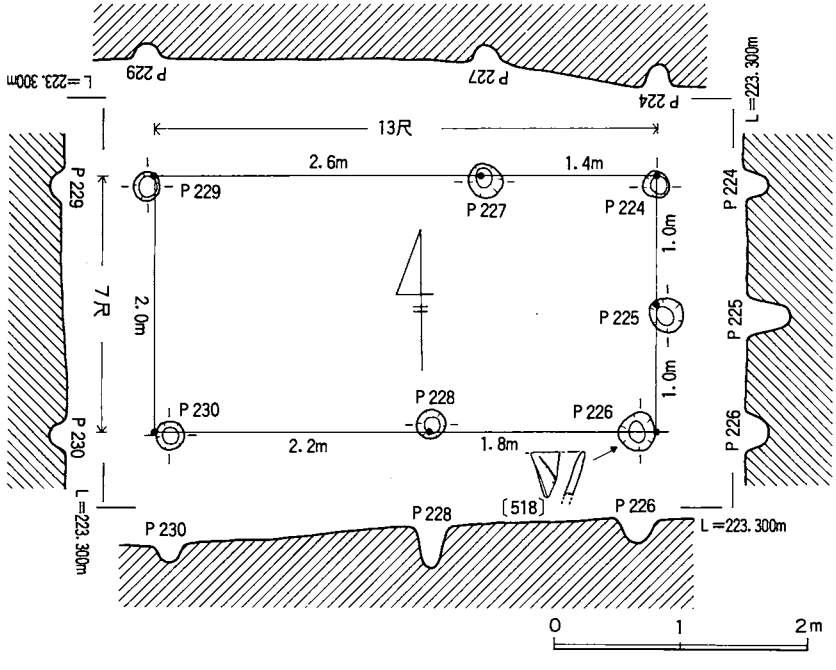
柱列はすべて千鳥の並びとなる。

梁行妻の東側と西側の高さを比べた場合、柱穴の検出面は北側P224－P227－P229で22cm、南側P226－P228－P230で20cm、東側の方が高い。

P226の埋土から青磁〔518〕が出土している。

| Pit NO. | 桁行柱間 (m) | 桁行間(m) | Pit NO. | 梁間柱間 (m) | 梁間間(m) | PitNO. | 深さ(cm) | 長径(cm) | 短径(cm) |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 224～227 | 1.4 | } 4.0 | 224～225 | 1.0 | } 2.0 | 224 | 17.4 | 22 | 18 |
| 227～229 | 2.6 | | 225～226 | 1.0 | | 225 | 34.3 | 29 | 27 |
| | | | | | | 226 | 19.4 | 30 | 27 |
| 226～228 | 1.8 | } 4.0 | 229～230 | 2.0 | 2.0 | 227 | 14.5 | 27 | 25 |
| 228～230 | 2.2 | | | | | 228 | 33.4 | 24 | 22 |
| | | | | | | 229 | 10.0 | 23 | 21 |
| | | | | | | 230 | 13.5 | 23 | 23 |

第42表　E－SB33計測表




第53図　E－SB33実測図

## E－SB34

桁行3.8m、梁行妻2.6mの2間×1間の建物で、方位はN10° Wである。柱間寸法は、桁行P231～P233～P235で1.9m＋1.9m、P232～P234～P236で1.9m＋1.9m、梁行妻P231～P232で2.6m、P235～P236で2.6mを測る。

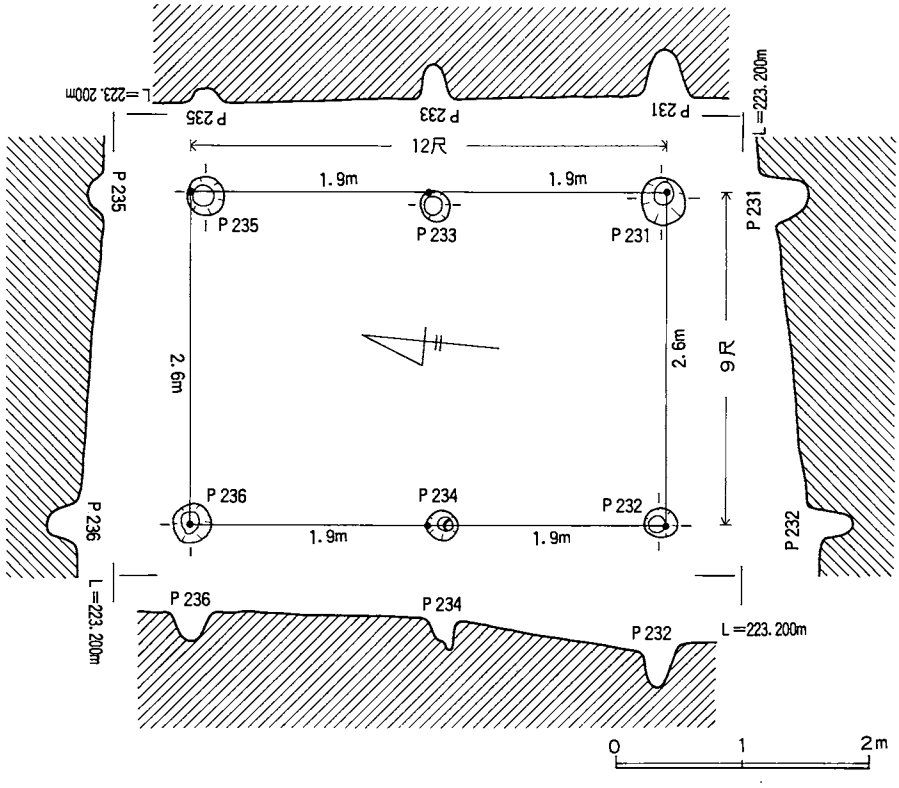
柱穴の大きさは、P231が最大（38×35cm）、P234が最小（24×24cm）で平均値は29.8×27cmとなる。深さはP231が最深（38cm）、P235が最浅（10cm）で平均値は26.8cmである。

柱列は桁行P231～P233～P235と、梁行妻P235～P236が千鳥の並びとなる。

桁行の東側と西側の高さを比べた場合、柱穴の検出面は南側P231－P232で52cm、北側P235－P236で19cm、東側の方が高い。さらに梁行妻の北側と南側では、西側P232－P234－P236で26cm、北側の方が高い。

| Pit NO. | 桁行柱間 (m) | 桁行間(m) | Pit NO. | 梁間柱間 (m) | 梁間間(m) | PitNO. | 深さ(cm) | 長径(cm) | 短径(cm) |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 231～233 | 1.9 | 3.8 | 231～232 | 2.6 | 2.6 | 231 | 38.0 | 38 | 35 |
| 233～235 | 1.9 | | | | | 232 | 35.5 | 26 | 23 |
| | | | | | | 233 | 27.0 | 26 | 23 |
| 232～234 | 1.9 | 3.8 | 235～236 | 2.6 | 2.6 | 234 | 26.7 | 24 | 24 |
| 234～236 | 1.9 | | | | | 235 | 10.0 | 31 | 27 |
| | | | | | | 236 | 23.5 | 34 | 30 |

第43表　E－SB34計測表




第54図　E－SB34実測図

## E－SB35

桁行3.4m、梁行妻2.1mの3間×1間の建物で、方位はS61°Wである。柱間寸法は、桁行P237～P239～P241～P242で1.1m＋1.4m＋0.9mであるが、P238～P240～P243の場合、P238～P240の補助柱が不明で、2.1m＋1.3mとなる。梁行妻はP237～P238で2.1m、P242～P243で2.1mを測る。

柱穴の大きさは、P237が最大（46×42cm）、P240が最小（28×27cm）で平均値は36×30.9cmとなる。深さはP239が最深（65cm）、P241が最浅（24cm）で平均値は38.2cmである。

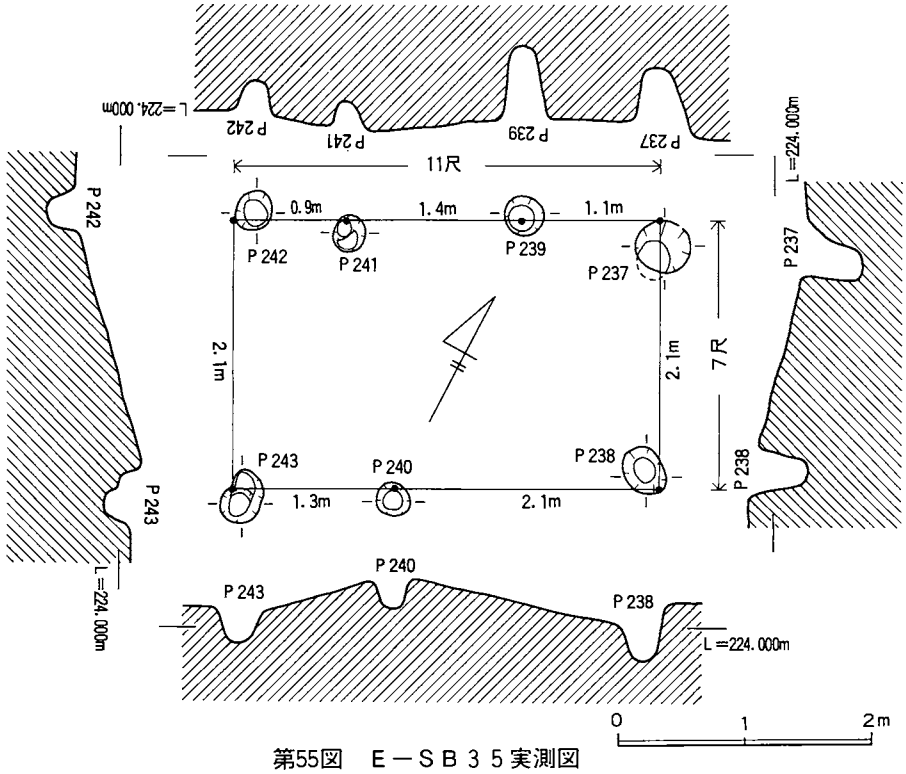
柱列はすべて千鳥の並びとなる。

桁行の北側と南側の高さを比べた場合、柱穴の検出面は東側P237－P238で48cm、西側P242－P243で56cm、南側の方が高い。さらに南側のP238－P240－P243では、中央柱のP240が両端の柱穴よりも高い位置に掘り込まれている。比高差はP238で38cm、P243で29cmである。

P237はやや外側へ斜めに掘り込まれており、P243は二段掘りとなっている。

| Pit NO. | 桁行柱間 (m) | 桁行間(m) | Pit NO. | 梁間柱間 (m) | 梁間間(m) | PitNO. | 深さ(cm) | 長径(cm) | 短径(cm) |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 237～239 | 1.1 | | 237～238 | 2.1 | 2.1 | 237 | 47.0 | 46 | 42 |
| 239～241 | 1.4 | 3.4 | | | | 238 | 45.0 | 41 | 31 |
| 241～242 | 0.9 | | | | | 239 | 65.0 | 32 | 31 |
| | | | | | | 240 | 28.0 | 28 | 27 |
| 238～240 | 2.1 | 3.4 | 242～243 | 2.1 | 2.1 | 241 | 24.0 | 29 | 26 |
| 240～243 | 1.3 | | | | | 242 | 27.3 | 32 | 29 |
| | | | | | | 243 | 31.0 | 44 | 30 |

第44表　E－SB35計測表




第55図　E－SB35実測図

## E－S B 3 6

桁行3.4ｍ、梁行妻2.1ｍの１間×１間の建物で、方位はＮ12° Ｗである。柱間寸法は、桁行Ｐ244～Ｐ246で3.4ｍ、Ｐ245～Ｐ247で3.4ｍ、梁行妻Ｐ244～Ｐ245で2.1ｍ、Ｐ246～Ｐ247で2.1ｍを測る。

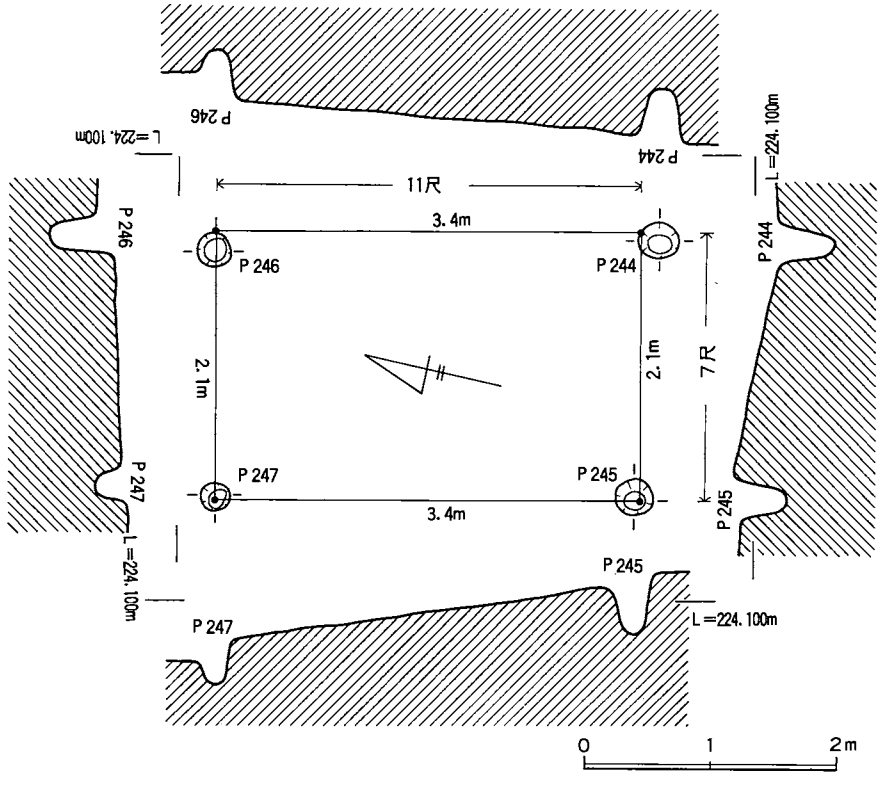
柱穴の大きさは、Ｐ244が最大（32×28cm）、Ｐ247が最小（24×23cm）で平均値は28.3×26.5cmとなる。深さはＰ244が最深（43cm）、Ｐ246が最浅（30cm）で平均値は37.3cmである。

柱列は桁行Ｐ244～Ｐ246と、梁行妻Ｐ244～Ｐ245が千鳥の並びとなる。

桁行の東側と西側の高さを比べた場合、柱穴の検出面は南側Ｐ244－Ｐ245で35cm、北側Ｐ246－Ｐ247で25cm、西側の方が高い。さらに梁行妻の北側と南側では、東側Ｐ244－Ｐ246で55cm、西側Ｐ245－Ｐ247で72cm、南側の方が高い。

| Pit NO. | 桁行柱間 (m) | 桁行間(m) | Pit NO. | 梁間柱間 (m) | 梁間間(m) | PitNO. | 深さ(cm) | 長径(cm) | 短径(cm) |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 244－246 | 3.4 | 3.4 | 244－245 | 2.1 | 2.1 | 244 | 43 | 32 | 28 |
| | | | | | | 245 | 42 | 30 | 30 |
| 245－247 | 3.4 | 3.4 | 246－247 | 2.1 | 2.1 | 246 | 30 | 27 | 25 |
| | | | | | | 247 | 34 | 24 | 23 |

第45表　Ｅ－Ｓ Ｂ ３ ６計測表




第56図　Ｅ－Ｓ Ｂ ３ ６実測図

## E－SB37

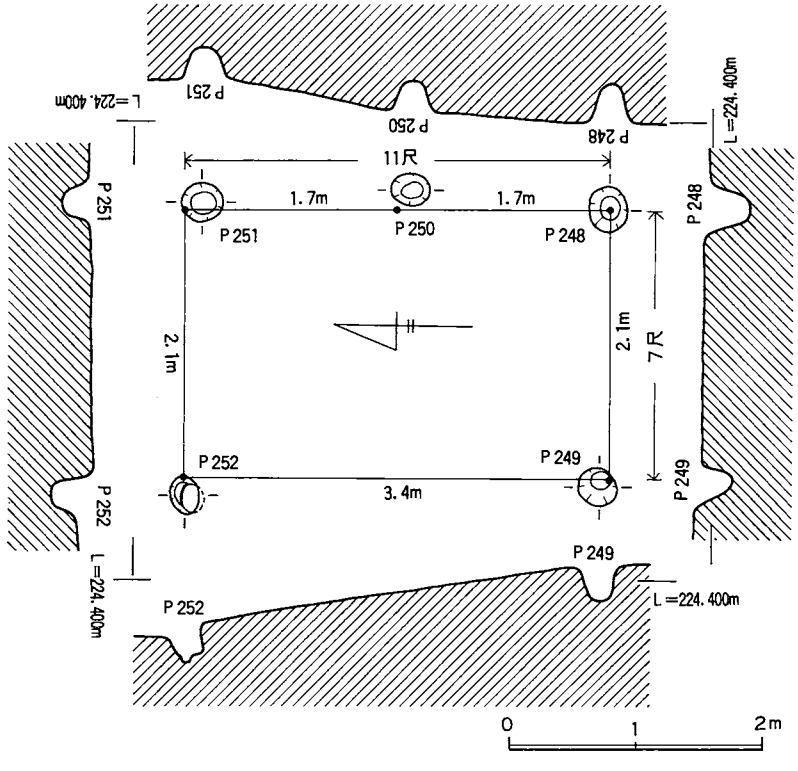
桁行3.4m、梁行妻2.1mの2間×1間の建物で、方位はN2°Wでほぼ南北方向にある。柱間寸法は、桁行P248～P250～P251で1.7m＋1.7mであるが、P249～P252は中央柱が不明で全長3.4mを測る。梁行妻はP248～P249で2.1m、P251～P252で2.1mを測る。

柱穴の大きさは、P248が最大（37×29cm）、P252が最小（30×25cm）で平均値は32.2×27.6cmとなる。深さはP248が最深（37cm）、P250・P251が最浅（24cm）で平均値は29.4cmである。柱列はすべて千鳥の並びとなる。

梁行妻の北側と南側の高さを比べた場合、柱穴の検出面は東側P248－P250－P251で32cm、西側P249－P252で59cm、南側の方が高い。P252は二段掘りとなっている。

| Pit NO. | 桁行柱間 (m) | 桁行間(m) | Pit NO. | 梁間柱間 (m) | 梁間間(m) | PitNO. | 深さ(cm) | 長径(cm) | 短径(cm) |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 248～250 | 1.7 | 3.4 | 248～249 | 2.1 | 2.1 | 248 | 37 | 37 | 29 |
| 250～251 | 1.7 | | | | | 249 | 29 | 32 | 29 |
| | | | 251～252 | 2.1 | 2.1 | 250 | 24 | 30 | 26 |
| 249～252 | 3.4 | 3.4 | | | | 251 | 24 | 32 | 29 |
| | | | | | | 252 | 33 | 30 | 25 |

第46表　E－SB37計測表




第57図　E－SB37実測図

## E－SB38

桁行4.3m、梁行妻2.2mの2間×1間の建物で、方位はS83°Wである。柱間寸法は、桁行P253～P255～P257で1.4m＋2.9m、P254～P256～P258で1.8m＋2.5m、梁行妻P253～P254で2.2m、P257～P258で2.2mを測る。

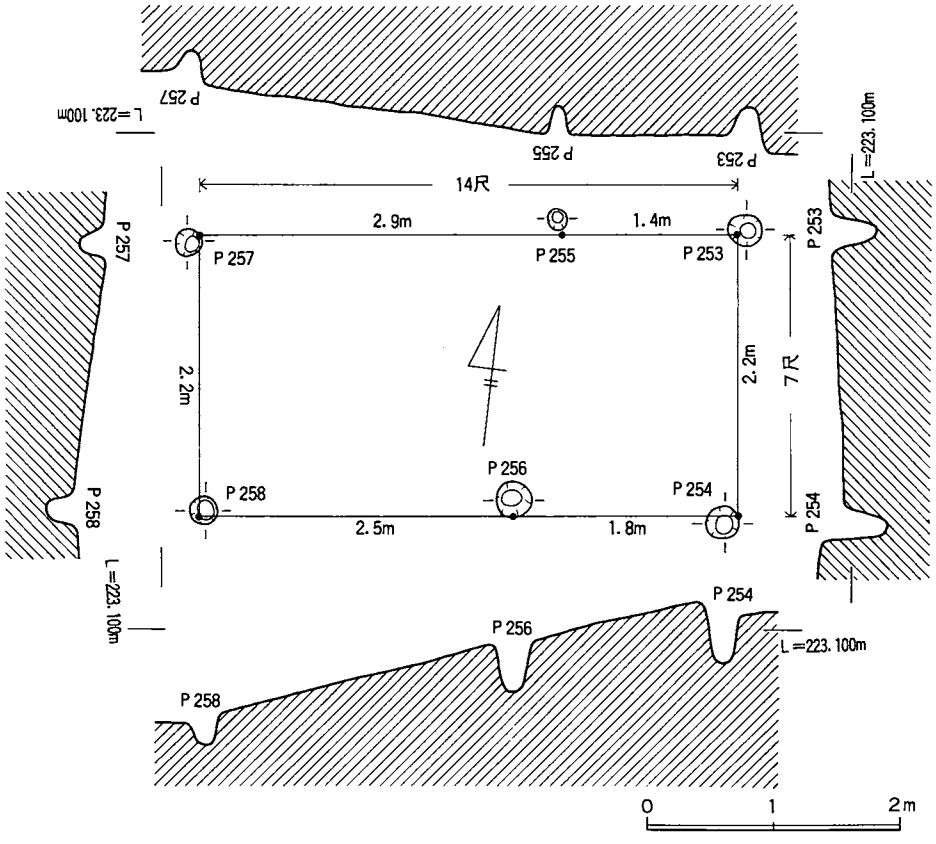
柱穴の大きさは、P256が最大（30×26cm）、P255が最小（16×14cm）で平均値は23.8×22cmとなる。深さはP254が最深（51cm）P255が最浅（13cm）で平均値は30.3cmである。

柱列はすべて千鳥の並びとなる。

梁行妻の東側と西側の高さを比べた場合、柱穴の検出面は北側P253－P255－P257で66cm、南側P254－P256－P258で96cm、東側の方が高い。さらに桁行の北側と南側では、西側P257－P258で22cm、北側の方が高い。

| Pit NO. | 桁行柱間 (m) | 桁行間(m) | Pit NO. | 梁間柱間 (m) | 梁間間(m) | PitNO. | 深さ(cm) | 長径(cm) | 短径(cm) |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 253～255 | 1.4 | 4.3 | 253～254 | 2.2 | 2.2 | 253 | 36 | 28 | 25 |
| 255～257 | 2.9 | | | | | 254 | 51 | 25 | 25 |
| | | | 257～258 | 2.2 | 2.2 | 255 | 13 | 16 | 14 |
| 254～256 | 1.8 | 4.3 | | | | 256 | 39 | 30 | 26 |
| 256～258 | 2.5 | | | | | 257 | 28 | 22 | 21 |
| | | | | | | 258 | 15 | 22 | 21 |

第47表　E－SB38計測表




第58図　E－SB38実測図

## E－SB39

桁行3.4m、梁行妻3.2mの2間×1間の正方形に近い建物で、方位はN10°Wである。柱間寸法は、桁行P259～P261～P263で1.9m＋1.5m、P260～P262～P264で1.5m＋1.9m、梁行妻P259～P260で3.2m、P263～P264で3.2mを測る。

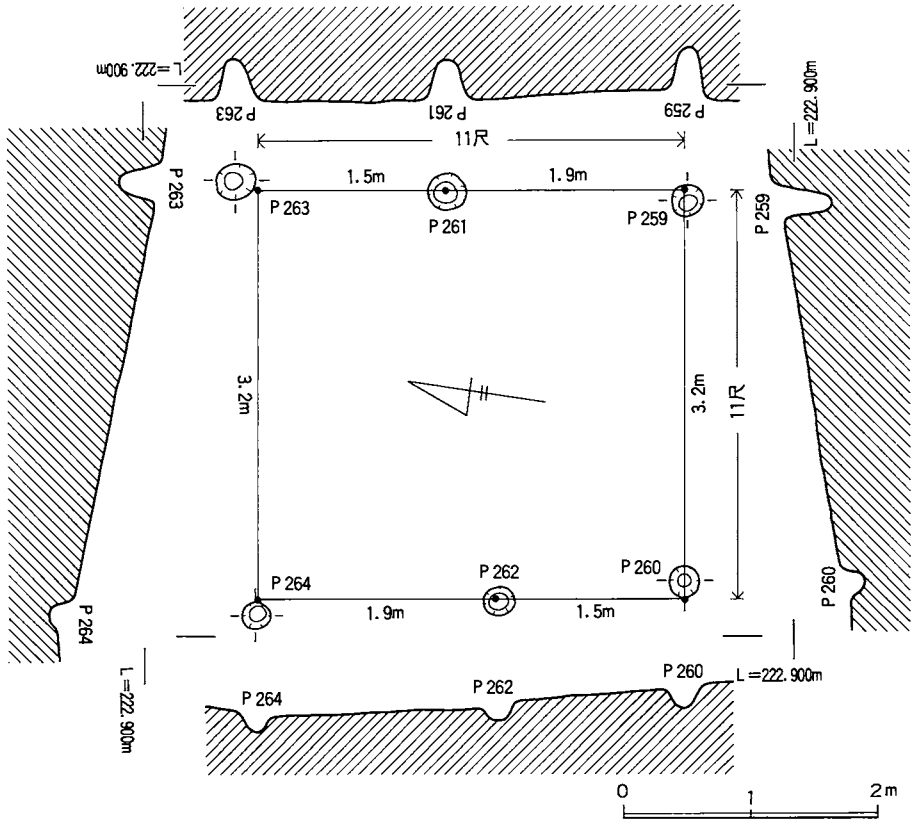
柱穴の大きさは、P263が最大（32×28cm）、P264が最小（23×20cm）で平均値は26.7×24.5cmとなる。深さはP261が最深（47cm）、P262が最浅（18cm）で平均値は30cmである。

柱列はすべて千鳥の並びとなる。

桁行の東側と西側の高さを比べた場合、柱穴の検出面は南側P259－P260で67cm、北側P263－P264で88cm、東側の方が高い。さらに梁行妻の北側と南側では、西側P260－P262－P264で20cm、南側の方が高い。

| Pit NO. | 桁行柱間 (m) | 桁行間(m) | Pit NO. | 梁間柱間 (m) | 梁間間(m) | PitNO. | 深さ(cm) | 長径(cm) | 短径(cm) |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 259～261 | 1.9 | 3.4 | 259～260 | 3.2 | 3.2 | 259 | 40 | 27 | 24 |
| 261～263 | 1.5 | | | | | 260 | 20 | 23 | 23 |
| | | | 263～264 | 3.2 | 3.2 | 261 | 47 | 30 | 29 |
| 260～262 | 1.5 | 3.4 | | | | 262 | 18 | 25 | 23 |
| 262～264 | 1.9 | | | | | 263 | 36 | 32 | 28 |
| | | | | | | 264 | 19 | 23 | 20 |

第48表　E－SB39計測表




第59図　E－SB39実測図

## E－SB40

桁行3.4m、梁行妻2.7mの2間×1間の建物で、方位はN1°Wである。柱間寸法は、桁行P265～P267～P269で0.9m＋2.5m、P266～P268～P270で1.2m＋2.2m、梁行妻P265～P266で2.7m、P269～P270で2.7mを測る。

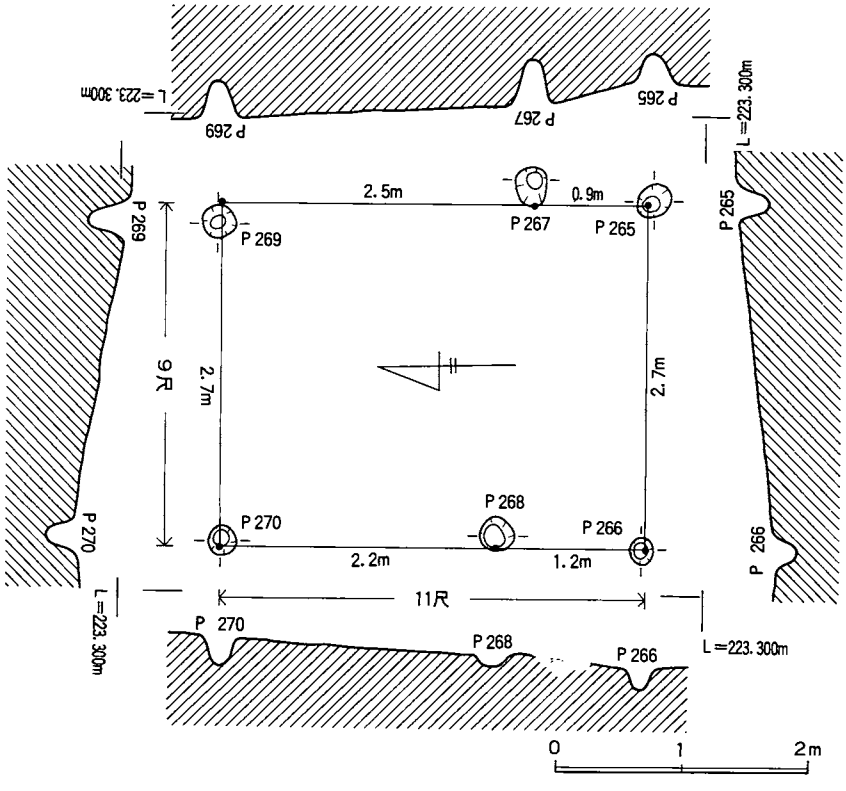
柱穴の大きさは、P268が最大（29×26cm）、P266が最小（21×20cm）で平均値は27×24cmとなる。深さはP269が最深（32.3cm）、P268が最浅（11.5cm）で平均値は23cmである。

柱列はP269～P270を除いて千鳥の並びとなる。

桁行の東側と西側の高さを比べた場合、柱穴の検出面は南側P265－P266で35cm、北側P269－P270で38cm、東側の方が高い。さらに梁行妻の北側と南側では、東側P265－P267－P269で27cm、西側P266－P268－P270で25cm、北側の方が高い。

| Pit NO. | 桁行柱間 (m) | 桁行間(m) | Pit NO. | 梁間柱間 (m) | 梁間間(m) | PitNO. | 深さ(cm) | 長径(cm) | 短径(cm) |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 265～267 | 0.9 | 3.4 | 265～266 | 2.7 | 2.7 | 265 | 24.5 | 29 | 25 |
| 267～269 | 2.5 | | | | | 266 | 16.0 | 21 | 20 |
| | | | 269～270 | 2.7 | 2.7 | 267 | 29.0 | 31 | 24 |
| 266～268 | 1.2 | 3.4 | | | | 268 | 11.5 | 29 | 26 |
| 268～270 | 2.2 | | | | | 269 | 32.3 | 28 | 26 |
| | | | | | | 270 | 24.8 | 24 | 23 |

第49表　E－SB40計測表




第60図　E－SB40実測図

## E－SB41

桁行3.7m、梁行妻2.4mの2間×1間の建物で、方位はS56°Wである。柱間寸法は、桁行P271～P273～P275で1.7m＋2.0m、P272～P274～P276で2.0m＋1.7m、梁行妻P271～P272で2.4m、P275～P276で2.4mを測る。

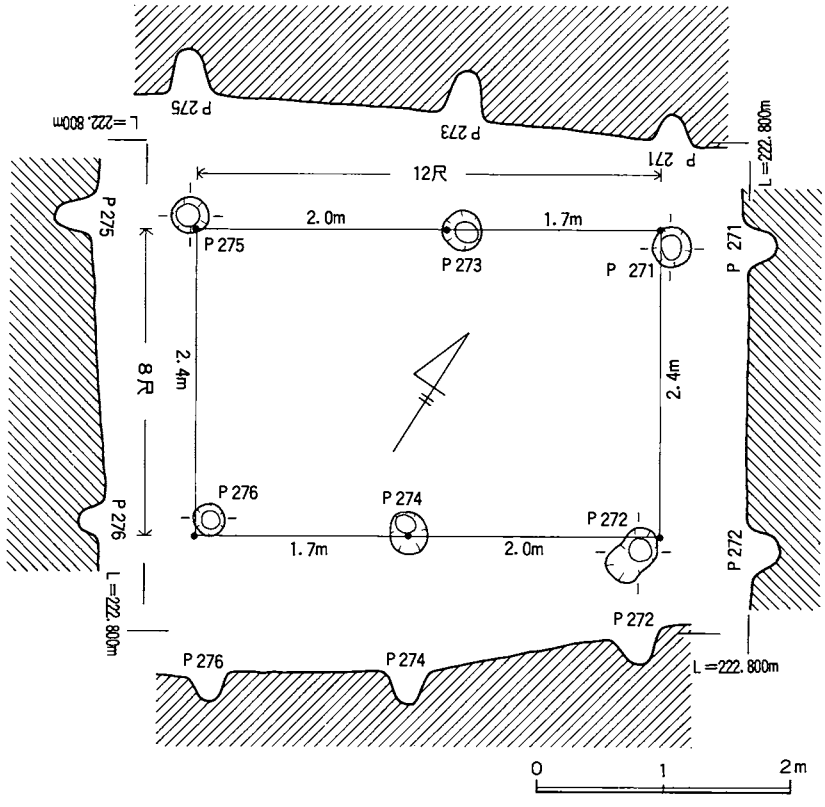
柱穴の大きさは、P272が最大（46×26cm）、P276が最小（28×24cm）で平均値は33.7×28.3cmとなる。深さはP273が最深（39cm）、P276が最浅（22cm）で平均値は28.7cmである。

柱列はすべて千鳥の並びとなる。

梁行妻の東側と西側の高さを比べた場合、柱穴の検出面は北側P271－P273－P275で42cm、南側P272－P274－P276で40cm、東側の方が高い。

| Pit NO. | 桁行柱間 (m) | 桁行間(m) | Pit NO. | 梁間柱間 (m) | 梁間間(m) | PitNO. | 深さ(cm) | 長径(cm) | 短径(cm) |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 271～273 | 1.7 | 3.7 | 271～272 | 2.4 | 2.4 | 271 | 24.5 | 32 | 30 |
| 273～275 | 2.0 | | | | | 272 | 26.5 | 46 | 26 |
| | | | 275～276 | 2.4 | 2.4 | 273 | 39.0 | 32 | 31 |
| 272～274 | 2.0 | 3.7 | | | | 274 | 25.5 | 34 | 30 |
| 274～276 | 1.7 | | | | | 275 | 34.8 | 30 | 29 |
| | | | | | | 276 | 22.0 | 28 | 24 |

第50表　E－SB41計測表




第61図　E－SB41実測図

## E－SB42

桁行4.0m、梁行妻2.0mの2間×1間の建物で、方位はN4°Wである。柱間寸法は、桁行P277～P279～P281で1.9m＋2.1m、P278～P280～P282で1.9m＋2.1m、梁行妻P277～P278で2.0m、P281～P282で2.0mを測る。

柱穴の大きさは、P277が最大（39×39cm）、P281が最小（33×30cm）で平均値は36.3×33.2cmとなる。深さはP281が最深（33.5cm）、P280が最浅（20.2cm）で平均値は26cmである。

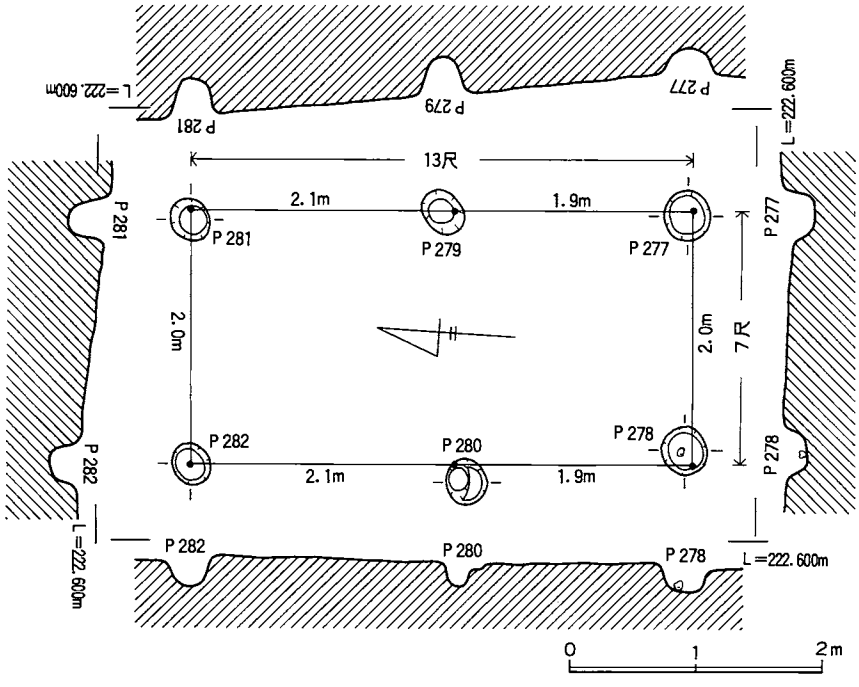
柱列は桁行P278～P280～P282が千鳥の並びとなる。

桁行の東側と西側の高さを比べた場合、柱穴の検出面は北側P281－P282で26cm、東側の方が高い。さらに梁行妻の北側と南側では、東側P277－P279－P281で37cm、北側の方が高い。

P280は二段掘りで、P278の埋土からは小石が出土している。

| Pit NO. | 桁行柱間 (m) | 桁行間(m) | Pit NO. | 梁間柱間 (m) | 梁間間(m) | PitNO. | 深さ(cm) | 長径(cm) | 短径(cm) |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 277～279 | 1.9 | 4.0 | 277～278 | 2.0 | 2.0 | 277 | 23.7 | 39 | 39 |
| 279～281 | 2.1 | | | | | 278 | 21.7 | 38 | 36 |
| | | | | | | 279 | 32.5 | 37 | 31 |
| 278～280 | 1.9 | 4.0 | 281～282 | 2.0 | 2.0 | 280 | 20.2 | 36 | 34 |
| 280～282 | 2.1 | | | | | 281 | 33.5 | 33 | 30 |
| | | | | | | 282 | 24.1 | 35 | 29 |

第51表　E－SB42計測表




第62図　E－SB42実測図

## E－SB43

桁行3.8m、梁行妻2.4mの2間×2間の建物で、方位はN83°Eでほぼ東西方向にある。柱間寸法は、桁行P283～P286～P288で1.9m＋1.9m、P285～P287～P289で1.9m＋1.9m、梁行妻P283～P284～P285で1.2m＋1.2mとなる。P288～P289は中央柱が不明で全長2.4mを測る。

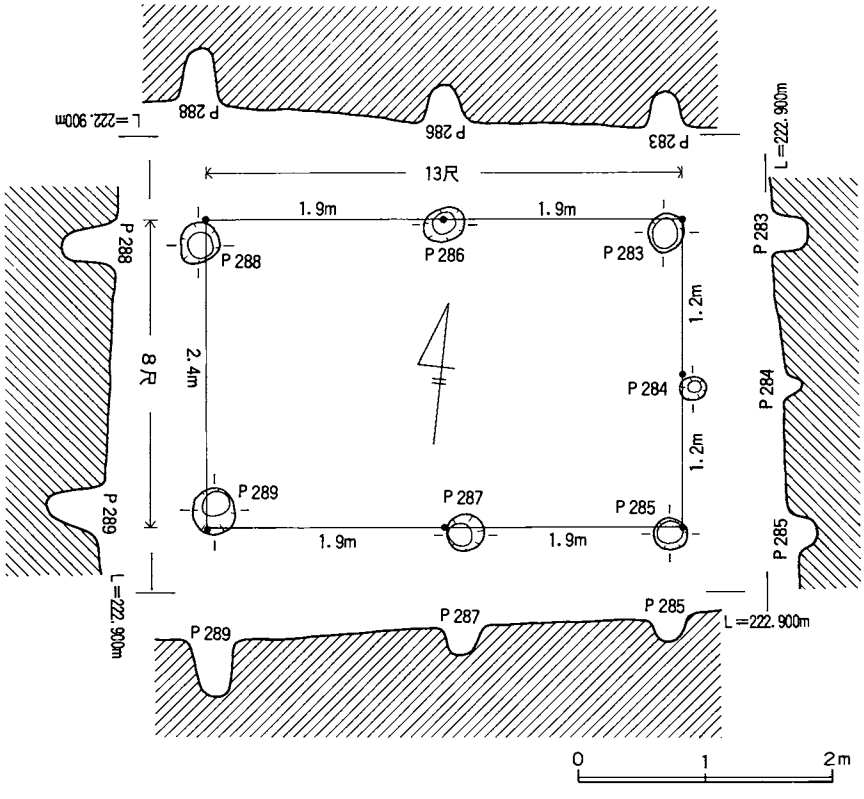
柱穴の大きさは、P288が最大（35×31cm）、P284が最小（21×18cm）で平均値は30.9×27cmとなる。深さはP289が最深（45.0cm）、P284が最浅（16.8cm）で平均値は29.8cmである。

柱列はすべて千鳥の並びとなる。

桁行の北側と南側の高さを比べた場合、柱穴の検出面は東側P283－P284－P285で23cm、西側P288－P289で16cm、北側の方が高い。さらに梁行妻の東側と西側では北側P283－P286－P288で24cm、南側P285－P287－P289で22cm、東側の方が高い。

| Pit NO. | 桁行柱間 (m) | 桁行間(m) | Pit NO. | 梁間柱間 (m) | 梁間間(m) | PitNO. | 深さ(cm) | 長径(cm) | 短径(cm) |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 283～286 | 1.9 | 3.8 | 283～284 | 1.2 | 2.4 | 283 | 27.5 | 32 | 27 |
| 286～288 | 1.9 | | 284～285 | 1.2 | | 284 | 16.8 | 21 | 18 |
| | | | | | | 285 | 23.6 | 27 | 26 |
| 285～287 | 1.9 | 3.8 | 288～289 | 2.4 | 2.4 | 286 | 29.3 | 34 | 27 |
| 287～289 | 1.9 | | | | | 287 | 23.2 | 30 | 27 |
| | | | | | | 288 | 43.2 | 35 | 31 |
| | | | | | | 289 | 45.0 | 37 | 33 |

第52表　E－SB43計測表




第63図　E－SB43実測図

## E－SB44

桁行3.6m、梁行妻2.2mの2間×1間の建物で、方位はN6°Wである。柱間寸法は、桁行P290～P292～P294で1.8m＋1.8m、P291～P293～P295で1.8m＋1.8m、梁行妻P290～P291で2.2m、P294～P295で2.2mを測る。

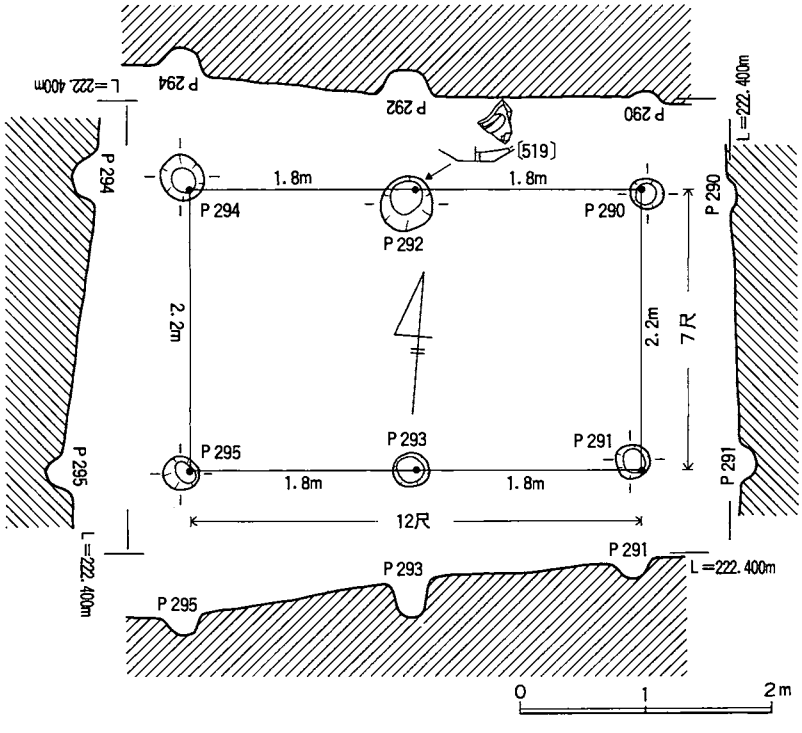
柱穴の大きさは、P292が最大（44×40cm）、P290が最小（27×24cm）で平均値は32.5×29.5cmとなる。深さはP294が最深（23.7cm）、P290が最浅（8.6cm）で平均値は16.6cmである。

柱列は桁行P290～P292～P294と梁行妻P290～P291が千鳥の並びとなる。

桁行の北側と南側を比べた場合、柱穴の検出面は西側P294－P295で22cm、北側の方が高い。さらに梁行妻の東側と西側では、北側P290－P292－P294で34cm、南側P291－P293－P295で46cm、東側の方が高い。P292からは青磁片〔519〕が出土している。

| Pit NO. | 桁行柱間 (m) | 桁行間(m) | Pit NO. | 梁間柱間 (m) | 梁間間(m) | PitNO. | 深さ(cm) | 長径(cm) | 短径(cm) |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 290～292 | 1.8 | 3.6 | 290～291 | 2.2 | 2.2 | 290 | 8.6 | 27 | 24 |
| 292～294 | 1.8 | | | | | 291 | 14.3 | 27 | 28 |
| | | | 294～295 | 2.2 | 2.2 | 292 | 22.7 | 44 | 40 |
| 291～293 | 1.8 | 3.6 | | | | 293 | 11.4 | 30 | 28 |
| 293～295 | 1.8 | | | | | 294 | 23.7 | 37 | 31 |
| | | | | | | 295 | 19.0 | 30 | 26 |

第53表　E－SB44計測表




第64図　E－SB44実測図

## E－SB45

桁行4.6m、梁行妻3.0mの3間×2間の建物で、方位はN3°Wである。柱間寸法は、桁行P296～P299～P301～P303で1.5m＋1.5m＋1.6m、P298～P300～P302～P305で1.5m＋1.5m＋1.6m、梁行妻P296～P297～P298で1.5m＋1.5m、P303～P304～P305で1.5m＋1.5mを測る。

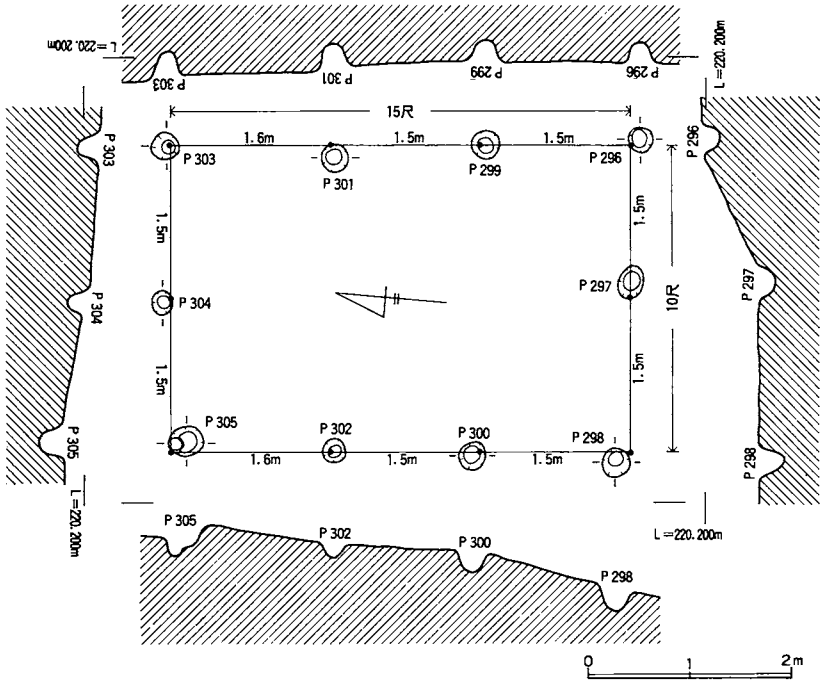
柱穴の大きさは、P305が最大（36×29cm）、P302が最小（23×23cm）で平均値は28.4×25.1cmとなる。深さはP303が最深（28cm）、P297が最浅（16.1cm）で平均値は24.7cmである。

柱列はすべて千鳥の並びとなる。

桁行の東側と西側の高さを比べた場合、柱穴の検出面は南側P296－P297－P298で58cm、北側P303－P304－P305で38cm、東側の方が高い。さらに梁行妻の北側と南側では、西側P298－P300－P302－P305で71cm、北側の方が高い。P305は二段掘りとなっている。

| Pit NO. | 桁行柱間 (m) | 桁行間(m) | Pit NO. | 梁間柱間 (m) | 梁間間(m) | PitNO. | 深さ(cm) | 長径(cm) | 短径(cm) |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 296～299 | 1.5 | | 296～297 | 1.5 | | 296 | 22.4 | 26 | 25 |
| 299～301 | 1.5 | 4.6 | 297～298 | 1.5 | 3.0 | 297 | 16.1 | 34 | 24 |
| 301～303 | 1.6 | | | | | 298 | 25.0 | 29 | 28 |
| | | | 303～304 | 1.5 | | 309 | 25.0 | 29 | 28 |
| 298～300 | 1.5 | | 304～305 | 1.5 | 3.0 | 300 | 26.0 | 28 | 25 |
| 300～302 | 1.5 | 4.6 | | | | 301 | 25.0 | 28 | 27 |
| 302～305 | 1.6 | | | | | 302 | 26.0 | 23 | 23 |
| | | | | | | 303 | 28.0 | 27 | 22 |
| | | | | | | 304 | 22.0 | 24 | 20 |
| | | | | | | 305 | 31.0 | 36 | 29 |

第54表　E－SB45計測表




第65図　E－SB45実測図

## E－SB46

桁行3.7m、梁行妻2.8mの2間×1間の建物で、方位はN87°Wである。柱間寸法は、桁行P306～P308～P310で1.6m＋2.1m、P307～P309～P311で1.6m＋2.1m、梁行妻P306～P307で2.8m、P310～P311で2.8mを測る。

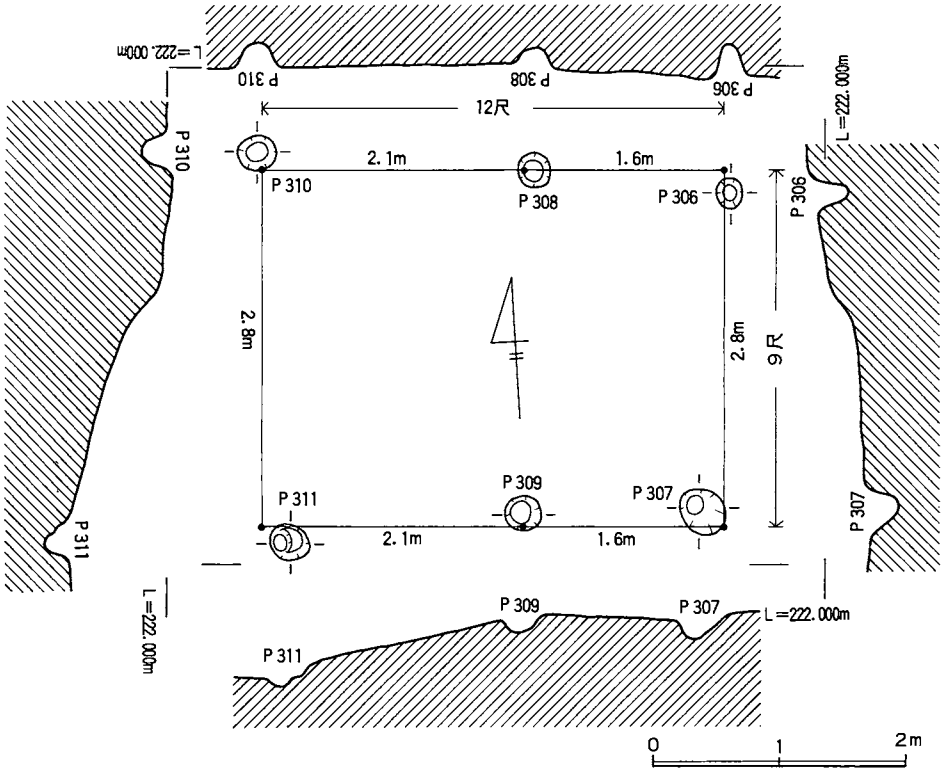
柱穴の大きさは、P307が最大（39×34cm）、P306が最小（24×22cm）で平均値は30.7×27.2cmとなる。深さはP306が最深（29cm）、P308が最浅（16.3cm）で平均値は20.8cmである。

柱列はすべて千鳥の並びとなる。

桁行の北側と南側の高さを比べた場合、柱穴の検出面は東側P306－P307で49cm、西側P310－P311で83cm、北側の方が高い。さらに梁行妻の東側と西側では、南側P307－P309－P311で52cm、東側の方が高い。

| Pit NO. | 桁行柱間 (m) | 桁行間(m) | Pit NO. | 梁間柱間 (m) | 梁間間(m) | PitNO. | 深さ(cm) | 長径(cm) | 短径(cm) |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 306～308 | 1.6 | 3.7 | 306～307 | 2.8 | 2.8 | 306 | 29.0 | 24 | 22 |
| 308～310 | 2.1 | | | | | 307 | 24.3 | 39 | 34 |
| | | | 310～311 | 2.8 | 2.8 | 308 | 16.3 | 27 | 26 |
| 307～309 | 1.6 | 3.7 | | | | 309 | 17.8 | 30 | 27 |
| 309～311 | 2.1 | | | | | 310 | 19.0 | 32 | 26 |
| | | | | | | 311 | 18.3 | 32 | 28 |

第55表　E－SB46計測表




第66図　E－SB46実測図

## E－SB47

桁行3.6m、梁行妻3.1mの2間×1間の建物で、方位はN74°Wである。柱間寸法は、P313～P314～P316で1.5m＋2.1mであるが、P312～P315は中央柱が不明で全長3.6mを測る。梁行妻はP312～P313で3.1m、P315～P316で3.1mを測る。

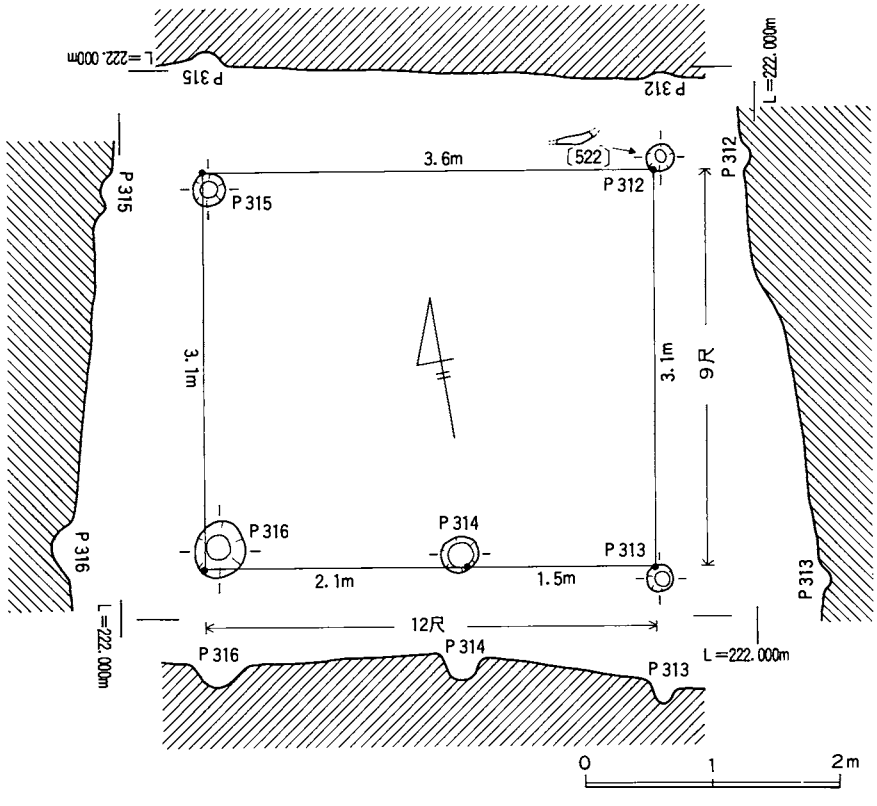
柱穴の大きさは、P316が最大（47×40cm）、P313が最小（22×20cm）で平均値は29.8×26cmとなる。深さはP314が最深（21.7cm）、P312が最浅（4.5cm）で平均値は14.7cmである。

柱列は梁行妻P315～P316を除いて千鳥の並びとなる。

桁行の北側と南側の高さを比べた場合、柱穴の検出面は東側P312－P313で61cm、西側P315－P316で36cm、北側の方が高い。さらに南側P313－P314－P316では、中央柱のP314が両端の柱穴と比べてやや高い所から掘り込まれており、比高差は東側のP313が14cm、西側P316が6cmを測る。P312からは土師器〔522〕が出土している。

| Pit NO. | 桁行柱間 (m) | 桁行間(m) | Pit NO. | 梁間柱間 (m) | 梁間間(m) | PitNO. | 深さ(cm) | 長径(cm) | 短径(cm) |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 312～315 | 3.6 | 3.6 | 312～313 | 3.1 | 3.1 | 312 | 4.5 | 23 | 20 |
| | | | | | | 313 | 21.4 | 22 | 20 |
| 313～314 | 1.5 | 3.6 | 315～316 | 3.1 | 3.1 | 314 | 21.7 | 30 | 26 |
| 314～316 | 2.1 | | | | | 315 | 9.9 | 27 | 24 |
| | | | | | | 316 | 16.0 | 47 | 40 |

第56表　E－SB47計測表




第67図　E－SB47実測図

## E－SB48

桁行4.0m、梁行妻2.2mの1間×1間の建物で、方位はN12°Eである。柱間寸法は、桁行P317～P319で4.0m、P318～P320で4.0m、梁行妻P317～P318で2.2m、P319～P320で2.2mを測る。

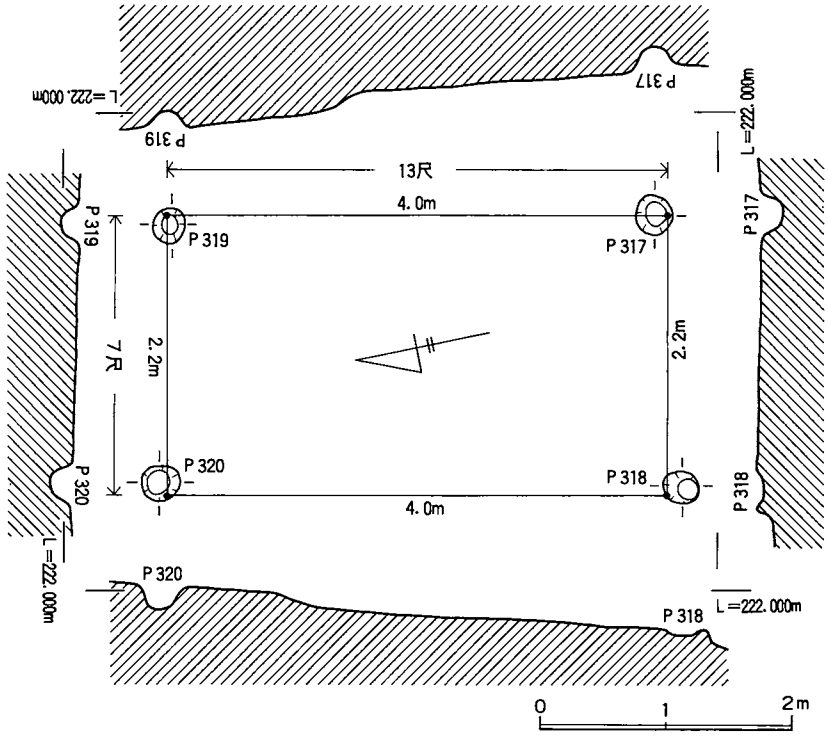
柱穴の大きさは、P317が最大（31×28cm）、P319が最小（28×25cm）で平均値は30×27.5cmとなる。深さはP317が最深（19.3cm）、P318が最浅（2.8 cm）で平均値は13.4cmである。

柱列はすべて千鳥の並びとなる。

梁行妻の北側と南側の高さを比べた場合、柱穴の検出面は東側P317－P319で48cm、西側P318－P320で39cm、北側の方が高い。

| Pit NO. | 桁行柱間 (m) | 桁行間(m) | Pit NO. | 梁間柱間 (m) | 梁間間(m) | PitNO. | 深さ(cm) | 長径(cm) | 短径(cm) |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 317～319 | 4.0 | 4.0 | 317～318 | 2.2 | 2.2 | 317 | 19.3 | 31 | 28 |
| | | | | | | 318 | 2.8 | 30 | 27 |
| 318～320 | 4.0 | 4.0 | 319～320 | 2.2 | 2.2 | 319 | 13.5 | 28 | 25 |
| | | | | | | 320 | 18.0 | 31 | 30 |

第57表　E－SB48計測表




第68図　E－SB48実測図

**東側尾根より迫地に下る柱列（渡り廊下）**

東側尾根の西斜面にあって、Ｅ－⑤区の上位より迫地に下る柱列があり、渡り廊下の類ではないかと思われる。ここで取り上げたもの以外にも、調査時にそれらしき可能性を示すものがあったが、整理の段階で疑問点が生じ、ここでは確実なものだけにしぼった。

柱列は２列で、主軸方位はＮ63°Ｗを示す。北側に５個、南側に４個の柱穴が並列し、北列の長さは9.9ｍ、南列は 8.9ｍを測る。

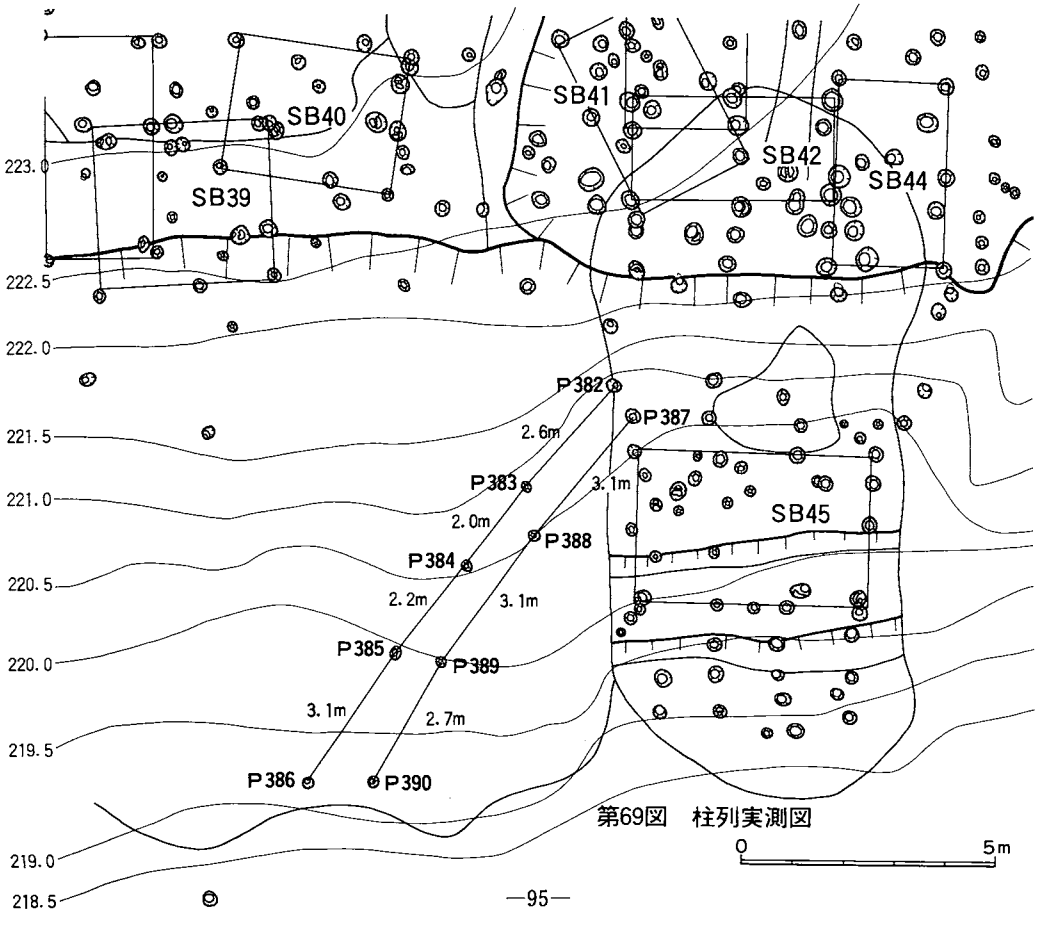
北列の柱間はＰ382～Ｐ383～Ｐ384～Ｐ385～Ｐ386で、2.6ｍ＋2.0ｍ＋2.2ｍ＋3.1ｍを測り、南列の柱間はＰ387～Ｐ388～Ｐ389～Ｐ390で、3.1ｍ＋3.1ｍ＋2.7ｍとなる。

南北柱列の間隔は上段で0.75ｍ、中段で0.8ｍ、下段で1.1ｍを測る。

検出された柱穴の平均値は、深さ22cm、長径22.6cm、短径20.1cmである。

| Pit No. | 深さ（cm） | 直径（cm） | 短径（cm） | Pit No. | 深さ（cm） | 直径（cm） | 短径（cm） |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 382 | 25.0 | 30 | 24 | 387 | 37.4 | 29 | 27 |
| 383 | 19.7 | 20 | 17 | 388 | 21.2 | 22 | 20 |
| 384 | 12.4 | 19 | 17 | 389 | 19.3 | 20 | 18 |
| 385 | 31.2 | 22 | 17 | 390 | 18.0 | 20 | 20 |
| 386 | 13.4 | 21 | 21 | | | | |

第58表　東側尾根検出の柱列計測表




第69図　柱列実測図

## 第６節　西側尾根の調査結果

西側尾根は採石工事により、尾根筋の西側部分を大方削り取られているが、残存尾根の南北60ｍ、東西幅10ｍの範囲で５棟の建築址が検出された。

尾根の北側寄りからＳＢ４９・ＳＢ５０、中央部からＳＢ５１・ＳＢ５２、南側寄りからＳＢ５３が検出されたが、ＳＢ４９・ＳＢ５０及びＳＢ５１・ＳＢ５２は重なり合っていた。

ＳＢ４９・ＳＢ５０は、尾根の東側斜面にかかる標高219ｍから217ｍのラインで検出された。ＳＢ４９の規模は2.8ｍ(９尺)×2.6ｍ(９尺)で、ＳＢ５０は3.8ｍ(12尺)×2.8ｍ(９尺)である。桁行方向はＳＢ４９がＮ24°Ｅで、ＳＢ５０がほぼ同一のＮ29°Ｅを示す。２棟とも傾斜地に建てられているため、桁行の東側と西側では、かなりの比高差となる。ＳＢ４９で117～151cm、ＳＢ５０で146cm程、西側の方が高くなる。

ＳＢ５１・ＳＢ５２は、西側尾根の最高所にあたる標高219.5ｍラインから検出された。いずれも柱穴は凝灰岩の岩肌を掘り抜いている。

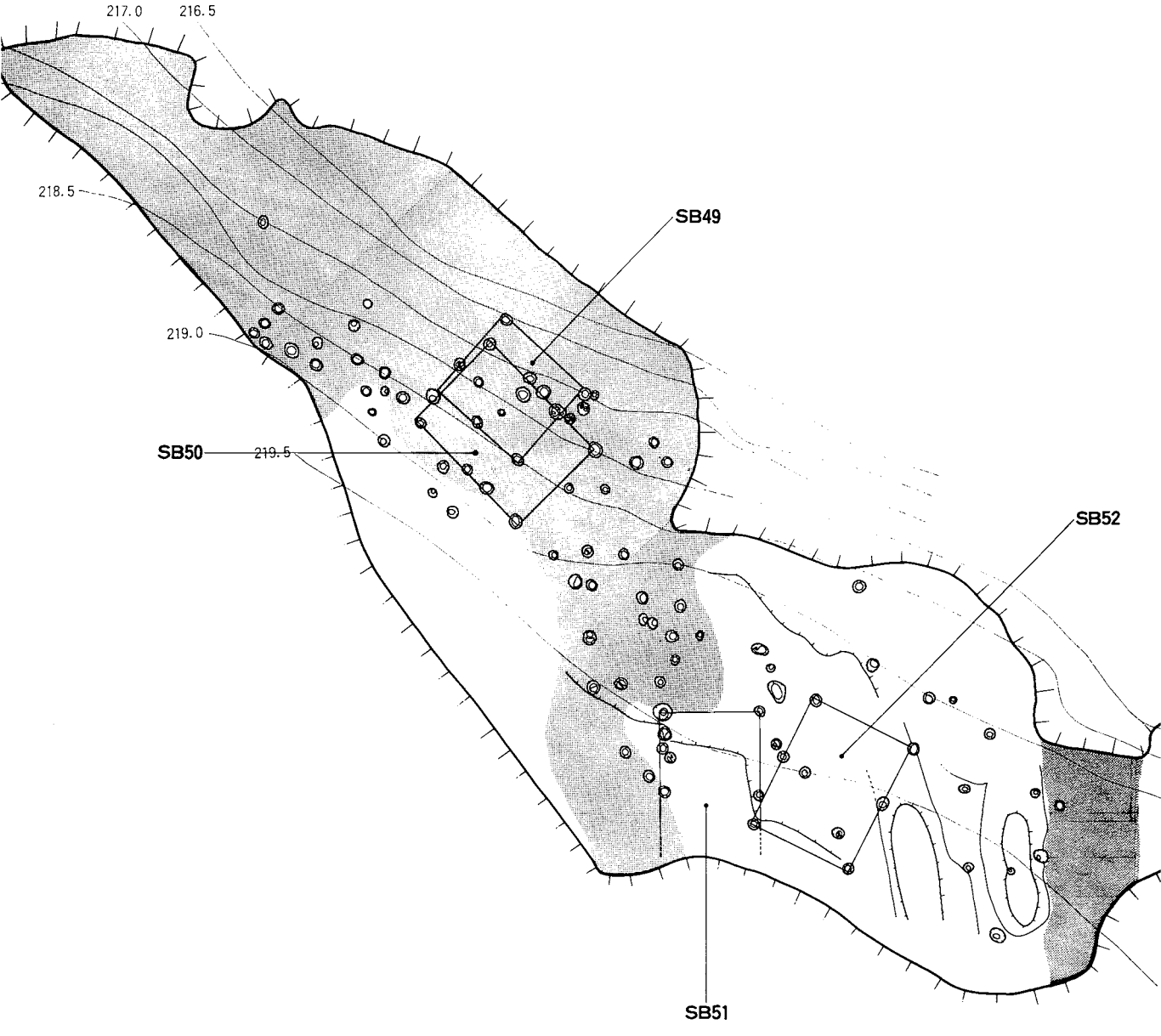
ＳＢ５１は採石工事により桁行の西側部分を欠損しているが、梁行妻2.6ｍ（７尺）を測り、桁行方向はＮ80°Ｗである。ＳＢ５２は3.6ｍ(12尺)×2.8ｍ(９尺)の規模で桁行方向はＮ79°Ｅである。

ＳＢ５３は、標高219ｍラインの凝灰岩と粘土層から検出された。規模は4.2ｍ(14尺)×2.3ｍ(８尺)で、検出面方向はＮ２°Ｗである。柱穴Ｐ343から青磁〔524〕が出土している。

西側尾根は破壊されているため、部分的な発掘に留まったが、調査結果に限って考察すると、建築址が２時期に及ぶ事は確実である。

| 建築址ＮＯ. | 規　模 | 規　格 | 桁行方位 | 備　　考 |
|---|---|---|---|---|
| Ｗ－ＳＢ４９ | 2.8ｍ×2.6ｍ<br>(９尺×９尺)<br>7.3㎡ | １間×２間 | Ｎ24°Ｅ | 桁行（P321～P324）の中央柱が不明。<br>桁行の東側と西側は、西側の方が117～151cm高い。 |
| Ｗ－ＳＢ５０ | 3.8ｍ×2.8ｍ<br>(12尺×９尺)<br>10.9㎡ | ２間×１間 | Ｎ29°Ｅ | 桁行の東側と西側では、西側の方が146cm高い。梁行妻の北側と南側では、南側の方が143cm高い。P328から小礫が出土している。 |
| Ｗ－ＳＢ５１ | ×2.6ｍ<br>(９尺) | ×１間 | Ｎ72°Ｅ | 建築址の西側部分を欠く。 |
| Ｗ－ＳＢ５２ | 3.6ｍ×2.8ｍ<br>(12尺×９尺)<br>10.1㎡ | ２間×１間 | Ｎ80°Ｗ | 梁行妻の東側と西側では、西側の方が46～54cm高い。 |
| Ｗ－ＳＢ５３ | 4.2ｍ×2.3ｍ<br>(14尺×８尺)<br>9.7㎡ | ２間×１間 | Ｎ２°Ｗ | P343から青磁〔524〕が出土している。 |

第59表　西側尾根検出の建築址一覧表

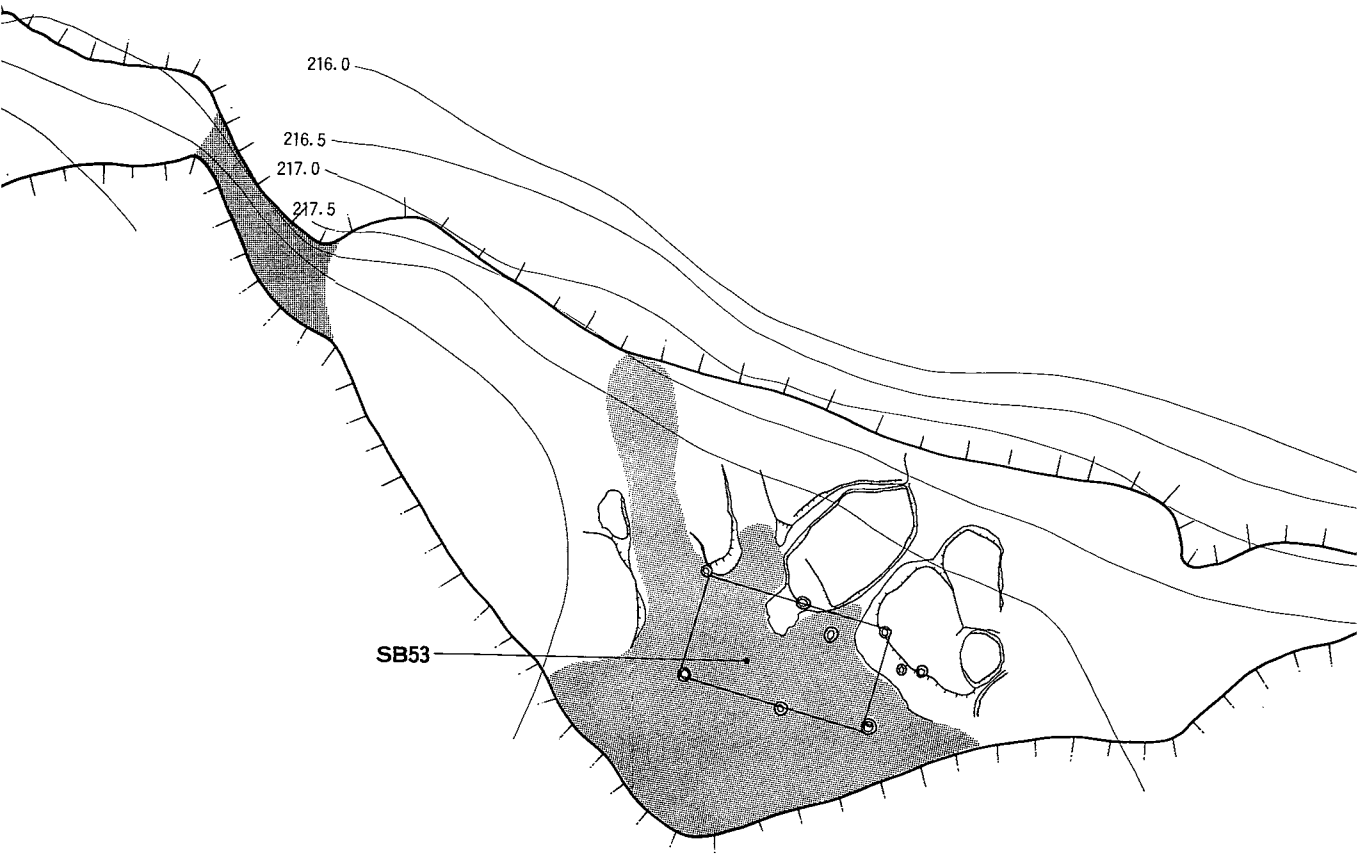



※スクリーントーンは粘土層を表す。他は岩場(凝灰岩)。

0 5 10m



第70図　西側尾根






遺構実測図

## W－S B 4 9

桁行2.8m、梁行妻2.6mの1間×2間の建物で、方位はN24° Eである。柱間寸法は、桁行P322～P323～P326で1.6m＋1.2mであるが、P321～P324は中央柱が不明で全長2.8mを測る。梁行妻はP324～P325～P326で1.6m＋1.0mとなり、P321～P322では桁行P321～P324と同様に中央柱が不明で全長2.6mを測る。

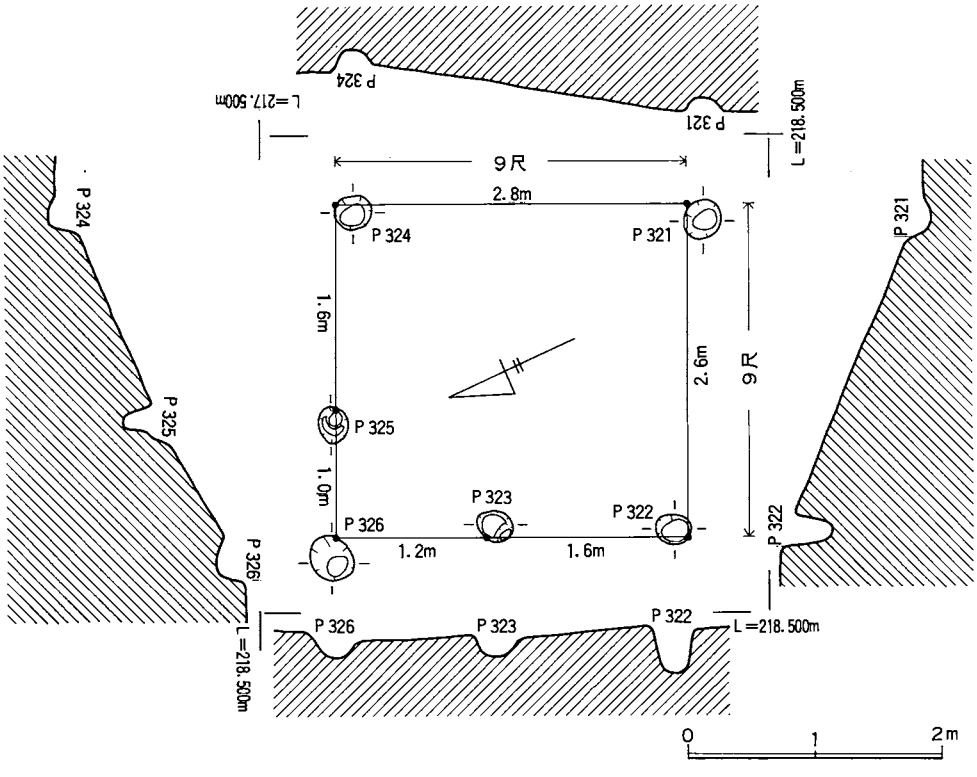
柱穴の大きさは、P326が最大（39×34cm）、P322が最小（29×23cm）で平均値は32.7×27cmとなる。深さはP325が最深（39cm）、P321が最浅（19cm）で平均値は26.5cmである。

柱列は桁行P321～P324を除いて千鳥の並びとなる。

桁行の東側と西側の高さを比べた場合、柱穴の検出面は南側P321－P322で117cm、北側P324－P325－P326で151cm、西側の方が高い。

| Pit NO. | 桁行柱間 (m) | 桁行間(m) | Pit NO. | 梁間柱間 (m) | 梁間間(m) | PitNO. | 深さ(cm) | 長径(cm) | 短径(cm) |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 321～324 | 2.8 | 2.8 | 321～322 | 2.6 | 2.6 | 321 | 19.0 | 34 | 28 |
| | | | | | | 322 | 36.2 | 29 | 23 |
| 322～323 | 1.6 | } 2.8 | 324～325 | 1.6 | } 2.6 | 323 | 20.0 | 32 | 25 |
| 323～326 | 1.2 | | 325～326 | 1.0 | | 324 | 22.5 | 32 | 27 |
| | | | | | | 325 | 39.0 | 30 | 25 |
| | | | | | | 326 | 22.5 | 39 | 34 |

第60表　W－S B 4 9計測表




第71図　W－S B 4 9実測図

## W－ＳＢ５０

桁行3.8ｍ、梁行妻2.8ｍの２間×１間の建物で、方位はＮ29° Ｗである。柱間寸法は、桁行Ｐ327～Ｐ329～Ｐ331で2.0ｍ＋1.8ｍ、Ｐ328～Ｐ330～Ｐ332で2.0ｍ＋1.8ｍ、梁行妻Ｐ327～Ｐ328で2.8ｍ、Ｐ331～Ｐ332で2.8ｍを測る。

柱穴の大きさは、Ｐ329が最大（38×32cm）、Ｐ332が最小（26×22cm）で平均値は32×28.7cmとなる。深さはＰ330が最深（32.5cm）、Ｐ328が最浅（13cm）で平均値は24.7cmである。

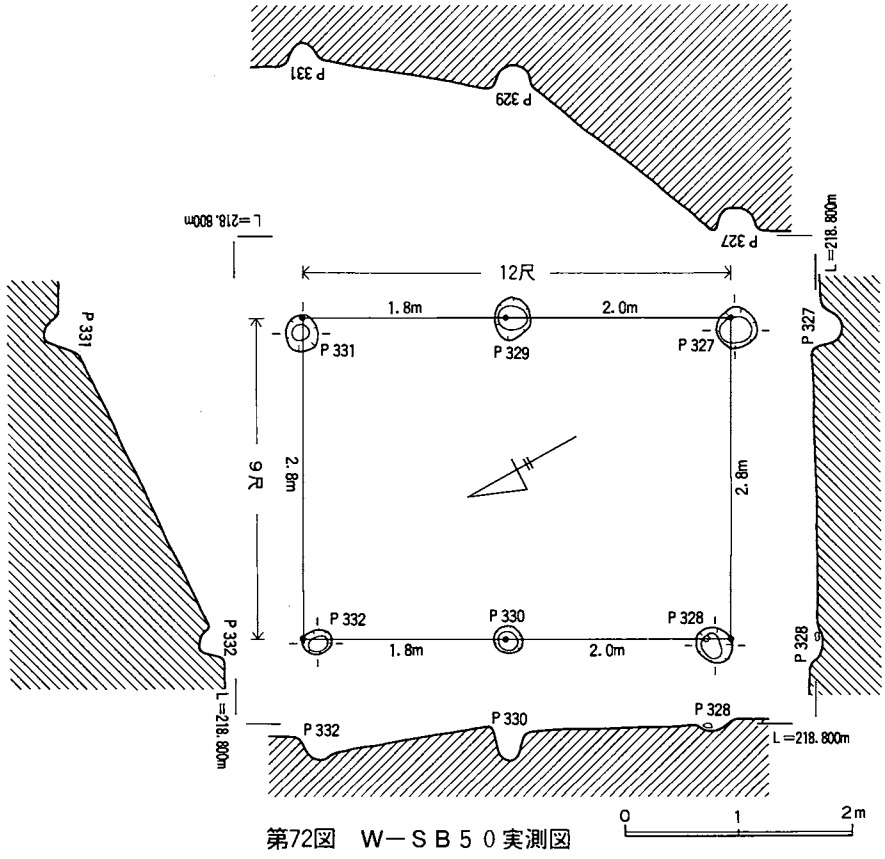
柱列は梁行妻Ｐ327～Ｐ328で千鳥の並びとなる。

桁行の東側と西側の高さを比べた場合、柱穴の検出面は北側Ｐ331－Ｐ332で146cm、西側の方が高い。さらに梁行妻の北側と南側では、東側Ｐ327－Ｐ329－Ｐ331で143cm、南側の方が高い。

Ｐ328の埋土から小礫が出土している。

| Pit NO. | 桁行柱間 (m) | 桁行間(m) | Pit NO. | 梁間柱間 (m) | 梁間間(m) | PitNO. | 深さ(cm) | 長径(cm) | 短径(cm) |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 327～329 | 2.0 | } 3.8 | 327～328 | 2.8 | 2.8 | 327 | 26.5 | 36 | 34 |
| 329～331 | 1.8 | | | | | 328 | 13.0 | 33 | 29 |
| | | | 331～332 | 2.8 | 2.8 | 329 | 24.0 | 38 | 32 |
| 328～330 | 2.0 | } 3.8 | | | | 330 | 32.5 | 27 | 25 |
| 330～332 | 1.8 | | | | | 331 | 31.0 | 32 | 30 |
| | | | | | | 332 | 21.0 | 26 | 22 |

第61表　W－ＳＢ５０計測表




第72図　W－ＳＢ５０実測図

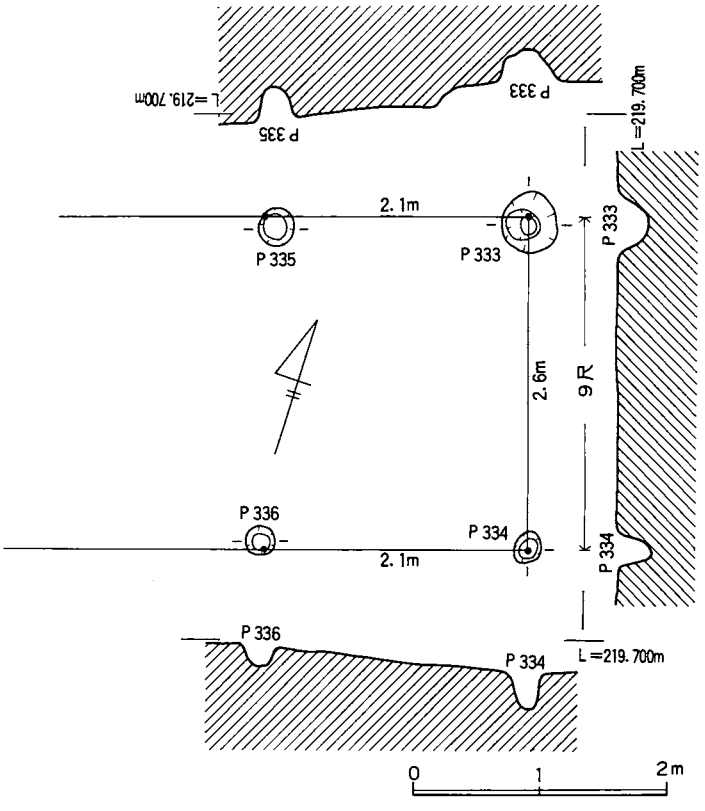
## W－ＳＢ５１

梁行妻は西側部分を欠く。梁行妻2.6ｍの建物で、方位はＮ72°Ｅである。柱間寸法は、梁行妻Ｐ333～Ｐ334で2.6ｍを測る。桁行はＰ333～Ｐ335とＰ334～Ｐ336で2.1ｍを測る。

残存柱穴の大きさはＰ333が最大（48×43cm）、Ｐ334が最小（24×20cm）で平均値は31.8×28.8cmとなる。

| Pit NO. | 桁行柱間 (m) | 桁行間(m) | Pit NO. | 梁間柱間 (m) | 梁間間(m) | PitNO. | 深さ(cm) | 長径(cm) | 短径(cm) |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 333～335 | 2.1 | 2.1 | 333～334 | 2.6 | 2.6 | 333 | 24.2 | 48 | 43 |
| | | | | | | 334 | 28.5 | 24 | 20 |
| 334～336 | 2.1 | 2.1 | | | | 335 | 27.5 | 30 | 28 |
| | | | | | | 336 | 18.0 | 25 | 24 |

第62表　W－ＳＢ５１計測表




第73図　W－ＳＢ５１実測図

## W－ＳＢ５２

桁行3.6ｍ、梁行妻2.8ｍの２間×１間の建物で、方位はＮ80° Ｗである。柱間寸法は、桁行Ｐ337～Ｐ339～Ｐ341で1.8ｍ＋1.8ｍ、Ｐ338～Ｐ340～Ｐ342で1.8ｍ＋1.8ｍ、梁行妻Ｐ337～Ｐ338で2.8ｍ、Ｐ341～Ｐ342で2.8ｍを測る。

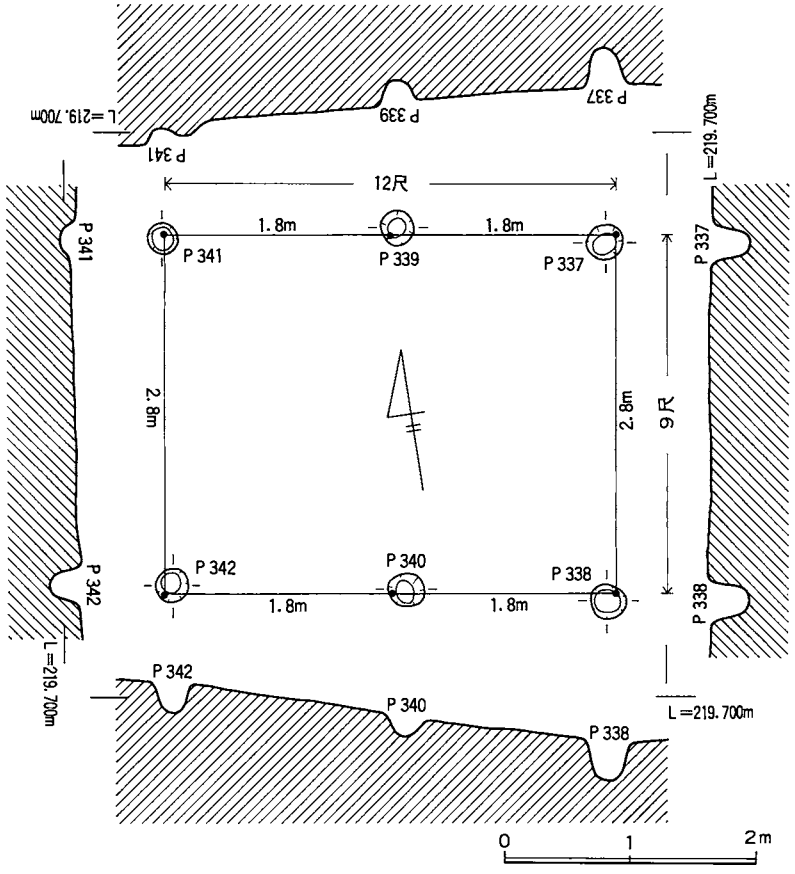
柱穴の大きさは、Ｐ340が最大（32×27cm）、Ｐ342が最小（25×25cm）で平均値は28.5×26.2cmとなる。深さはＰ338が最深（33cm）、Ｐ341が最浅（11.8cm）で平均値は23.7cmである。

柱列はすべて千鳥の並びとなる。

梁行妻の東側と西側の高さを比べた場合、柱穴の検出面は北側Ｐ337－Ｐ339－Ｐ341で46cm、南側Ｐ338－Ｐ340－Ｐ342で54cm、西側の方が高い。

| Pit NO. | 桁行柱間 (m) | 桁行間(m) | Pit NO. | 梁間柱間 (m) | 梁間間(m) | PitNO. | 深さ(cm) | 長径(cm) | 短径(cm) |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 337～339 | 1.8 | } 3.6 | 337～338 | 2.8 | 2.8 | 337 | 31.0 | 30 | 28 |
| 339～320 | 1.8 | | | | | 338 | 33.0 | 31 | 26 |
| | | | 341～342 | 2.8 | 2.8 | 339 | 19.7 | 29 | 27 |
| 338～340 | 1.8 | } 3.6 | | | | 340 | 21.7 | 32 | 27 |
| 340～342 | 1.8 | | | | | 341 | 11.8 | 24 | 24 |
| | | | | | | 342 | 25.0 | 25 | 25 |

第63表　Ｗ－ＳＢ５２計測表




第74図　Ｗ－ＳＢ５２実測図

## W－ＳＢ５３

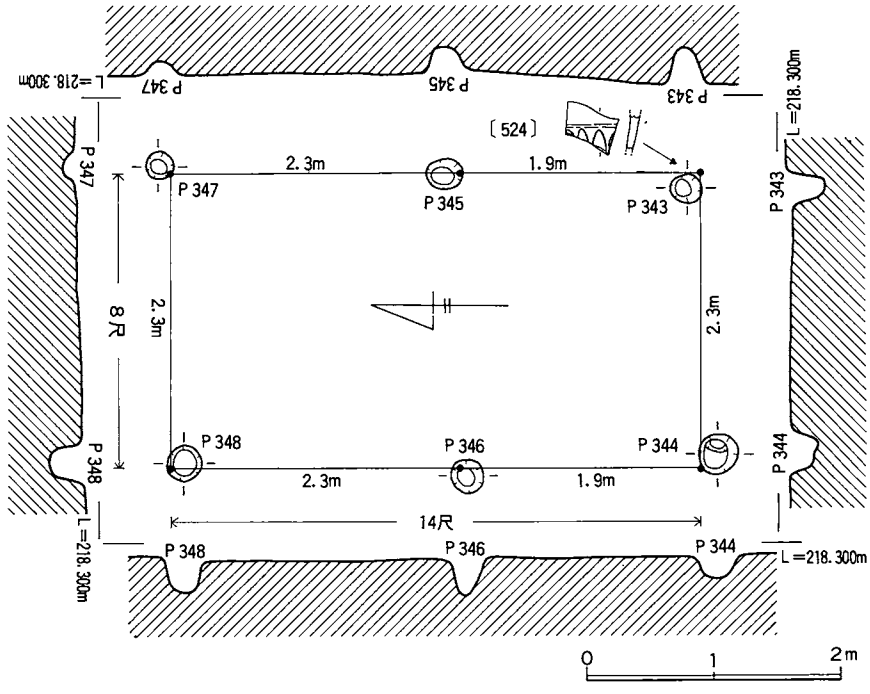
桁行4.2ｍ、梁行妻2.3ｍの２間×１間の建物で、方位はＮ２°Ｗである。柱間寸法は、桁行Ｐ343～Ｐ345～Ｐ347で1.9ｍ＋2.3ｍ、Ｐ344～Ｐ346～Ｐ348で1.9ｍ＋2.3ｍ、梁行妻Ｐ343～Ｐ344で2.3ｍ、Ｐ347～Ｐ348で2.3ｍを測る。

柱穴の大きさは、Ｐ344が最大（31×30cm）、Ｐ347が最小（24×22cm）で平均値は27.8×25.5cmとなる。深さはＰ346が最深（29cm）、Ｐ347が最浅（９cm）で平均値は22.3cmである。

柱列はすべて千鳥の並びとなる。Ｐ343から青磁片〔524〕が出土している。

| Pit NO. | 桁行柱間 (m) | 桁行間(m) | Pit NO. | 梁間柱間 (m) | 梁間間(m) | PitNO. | 深さ(cm) | 長径(cm) | 短径(cm) |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 343～345 | 1.9 | 4.2 | 343～344 | 2.3 | 2.3 | 343 | 28.0 | 26 | 23 |
| 345～347 | 2.3 | | | | | 344 | 21.0 | 31 | 30 |
| | | | 347～348 | 2.3 | 2.3 | 345 | 19.0 | 30 | 25 |
| 344～346 | 1.9 | 4.2 | | | | 346 | 29.0 | 27 | 26 |
| 346～348 | 2.3 | | | | | 347 | 9.0 | 24 | 22 |
| | | | | | | 348 | 27.5 | 29 | 27 |

第64表　Ｗ－ＳＢ５３計測表




第75図　Ｗ－ＳＢ５３実測図

## 第７節　南東側張り出し尾根の調査結果

東側尾根の南東側15ｍ下に小規模の尾根が張り出しており、ここでは南東側張り出し尾根と呼称する。標高204ｍラインで長軸120ｍ、短軸５～７ｍの尾根であるが、計６棟の建築址が密に重なり合って検出された。

これらは、すべて尾根の長軸方向に並列する桁行方向をもち、規模もＳＢ５４とＳＢ５５を除き、４棟ともほとんど同一である。

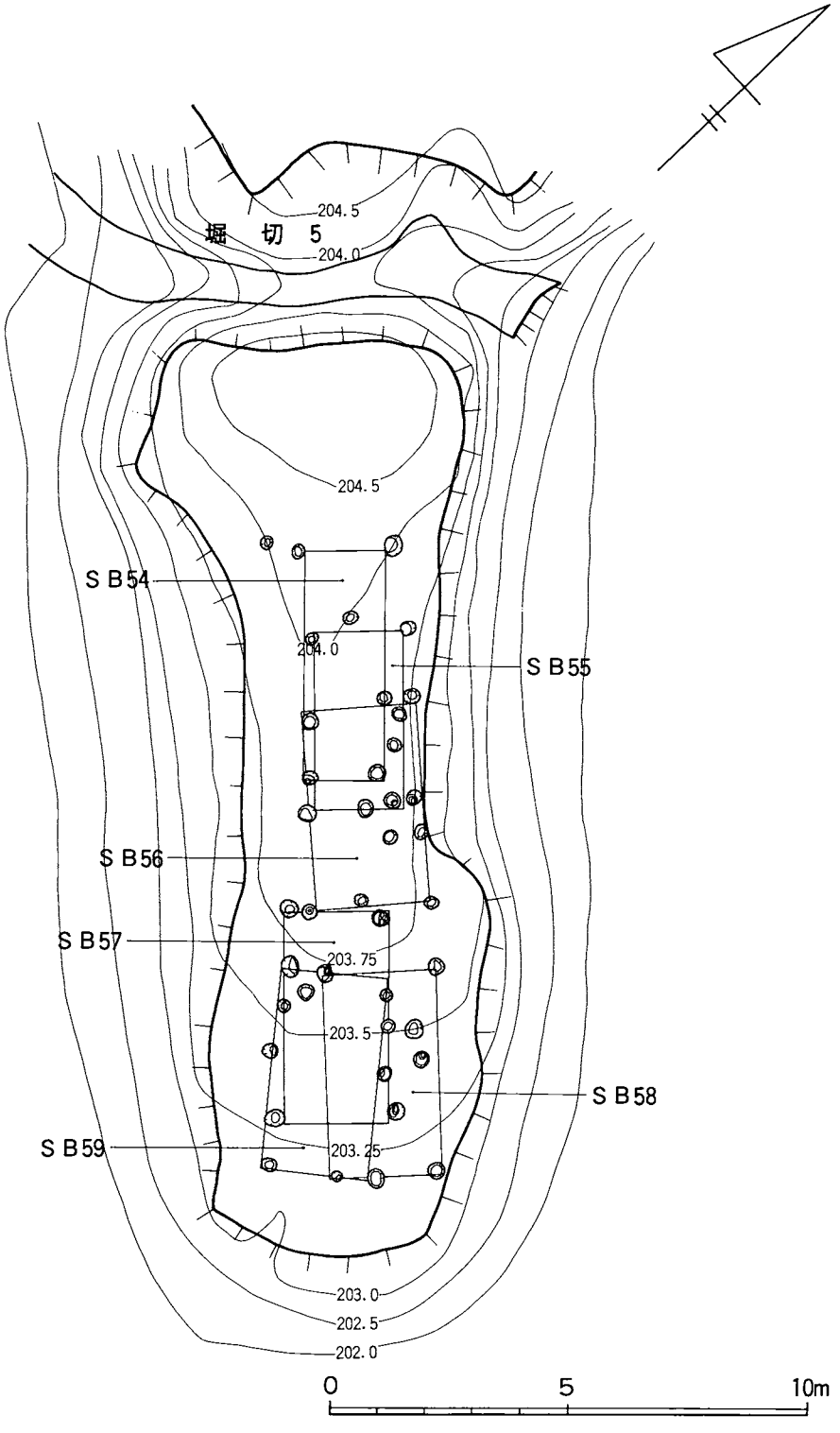
ＳＢ５６は4.1ｍ(14尺)×2.4ｍ(８尺)の規模で、以下、ＳＢ５７が4.4ｍ(14尺)×2.2ｍ(７尺)、ＳＢ５８が4.2ｍ(14尺)×2.3ｍ(８尺)、ＳＢ５９が4.2ｍ(14尺)×2.4ｍ(８尺)を測る。一方、ＳＢ５４は4.8ｍ(16尺)×1.7ｍ(６尺)の規模で、ＳＢ５５は3.7ｍ(12尺)×1.9ｍ(６尺)とやや小規模である。

建築址の間隔から考察すればＳＢ５６とＳＢ５９、ＳＢ５５とＳＢ５７、ＳＢ５４とＳＢ５８あたりがセット関係となろう。

従って、この南東側張り出し尾根の建築址については３回の建て替えが考えられる。

| 建築址ＮＯ. | 規　模 | 規　格 | 桁行方位 | 備　　考 |
|---|---|---|---|---|
| ＳＥ－ＳＢ５４ | 4.8ｍ× 1.7ｍ<br>(16尺×６尺)<br>8.2㎡ | ２間×１間 | Ｎ48° Ｗ | 桁行(P350～P353)で中央柱が不明。 |
| ＳＥ－ＳＢ５５ | 3.7ｍ× 1.9ｍ<br>(12尺×６尺)<br>7.0㎡ | ２間×２間 | Ｎ41° Ｗ | 桁行(P356～P359)と梁行妻(P358～P359)で中央柱が不明。 |
| ＳＥ－ＳＢ５６ | 4.1ｍ× 2.4ｍ<br>(14尺×８尺)<br>9.8㎡ | ２間×２間 | Ｎ50° Ｗ | 桁行(P362～P365)と梁行妻(P364～P365)で中央柱が不明。 |
| ＳＥ－ＳＢ５７ | 4.4ｍ× 2.2ｍ<br>(15尺×７尺)<br>9.7㎡ | ２間×１間 | Ｎ46° Ｗ | 梁行妻の東側と西側では、西側の方が40～50cm高い。 |
| ＳＥ－ＳＢ５８ | 4.2ｍ× 2.3ｍ<br>(14尺×８尺)<br>9.7㎡ | ２間×１間 | Ｎ47° Ｗ | 梁行妻の東側と西側では、西側の方が42～55cm高い。 |
| ＳＥ－ＳＢ５９ | 4.2ｍ× 2.4ｍ<br>(14尺×８尺)<br>10.1㎡ | １間×１間 | Ｎ52° Ｗ | 梁行妻の東側と西側では、西側の方が47～48cm高い。 |

第65表　南東側尾根検出の建築址一覧表




第76図　南東側張り出し尾根遺構実測図

## ＳＥ－ＳＢ５４

桁行4.8ｍ、梁行妻1.7ｍの２間×１間の建物で、方位はＮ48° Ｗである。柱間寸法は、桁行Ｐ349～Ｐ351～Ｐ352で1.7ｍ＋3.1ｍであるが、Ｐ350～Ｐ353は中央柱が不明で全長4.8ｍを測る。梁行妻はＰ349～Ｐ350で1.7ｍ、Ｐ352～Ｐ353で1.7ｍを測る。

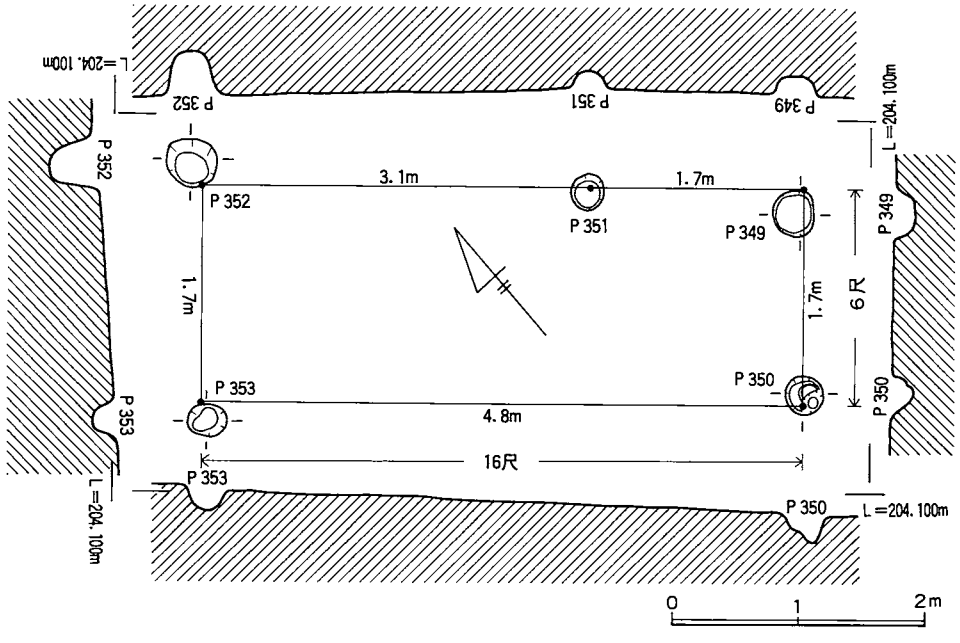
柱穴の大きさは、Ｐ352が最大（43×38cm）、Ｐ351が最小（28×27cm）で平均値は34.2×28.2cmとなる。深さはＰ352が最深（37.7cm）、Ｐ351が最浅（14.4cm）で平均値は21.9cmである。

柱列はすべて千鳥の並びとなる。

桁行の北側と南側の高さを比べた場合、柱穴の検出面は西側Ｐ352－Ｐ353で20cm、南側の方が高い。P350は二段掘りとなっている。

| Pit NO. | 桁行柱間 (m) | 桁行間(m) | Pit NO. | 梁間柱間 (m) | 梁間間(m) | PitNO. | 深さ(cm) | 長径(cm) | 短径(cm) |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 349～351 | 1.7 | 4.8 | 349～350 | 1.7 | 1.7 | 349 | 15.2 | 37 | 32 |
| 351～352 | 3.1 | | | | | 350 | 23.9 | 32 | 30 |
| | | | 352～353 | 1.7 | 1.7 | 351 | 14.4 | 28 | 27 |
| 350～353 | 4.8 | 4.8 | | | | 352 | 37.7 | 43 | 38 |
| | | | | | | 353 | 18.3 | 31 | 24 |

第66表　ＳＥ－ＳＢ５４計測表




第77図　ＳＥ－ＳＢ５４実測図

## ＳＥ－ＳＢ５５

桁行3.7ｍ、梁行妻1.9ｍの２間×２間の建物で、方位はＮ41°Ｗである。柱間寸法は、桁行Ｐ354～Ｐ357～Ｐ358で2.0ｍ＋1.7ｍであるが、Ｐ356～Ｐ359は中央柱が不明で全長3.7ｍを測る。

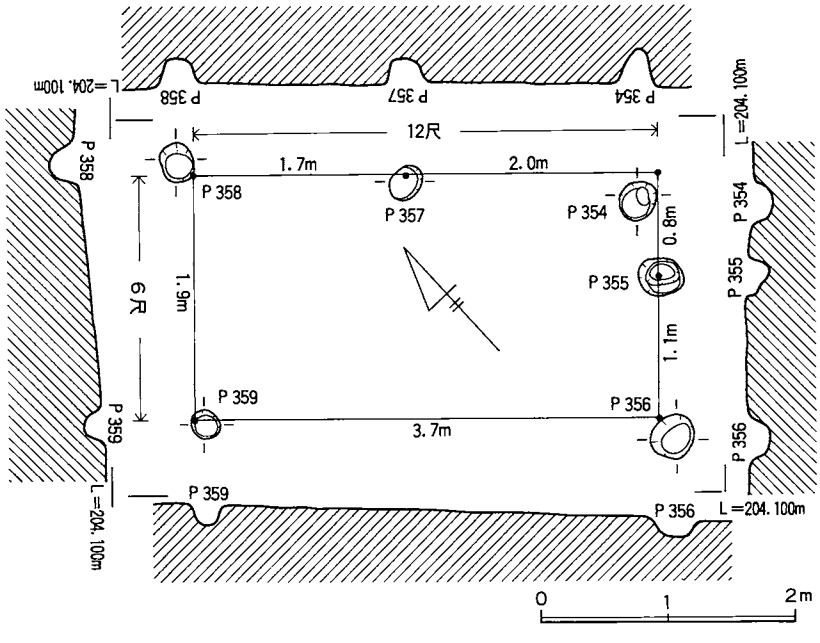
柱穴の大きさは、Ｐ356が最大（36×31cm）、Ｐ359が最小（25×23cm）で平均値は32.2×26.8cmとなる。深さはＰ354が最深（30.2cm）、Ｐ359が最浅（15.2cm）で平均値は20cmである。

柱列はすべて千鳥の並びとなる。

桁行の北側と南側の高さを比べた場合、柱穴の検出面は西側Ｐ358－Ｐ359で29cm、南側の方が高い。さらに梁行妻の東側と西側では、南側Ｐ356－Ｐ359で17cm、西側の方が高い。

| Pit NO. | 桁行柱間 (m) | 桁行間(m) | Pit NO. | 梁間柱間 (m) | 梁間間(m) | PitNO. | 深さ(cm) | 長径(cm) | 短径(cm) |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 354～357 | 2.0 | 3.7 | 354～355 | 0.8 | 1.9 | 354 | 30.2 | 34 | 29 |
| 357～358 | 1.7 | | 355～356 | 1.1 | | 355 | 18.0 | 35 | 28 |
| | | | | | | 356 | 15.4 | 36 | 31 |
| 356～359 | 3.7 | 3.7 | 358～359 | 1.9 | 1.9 | 357 | 19.3 | 31 | 24 |
| | | | | | | 358 | 22.0 | 32 | 26 |
| | | | | | | 359 | 15.2 | 25 | 23 |

第67表　ＳＥ－ＳＢ５５計測表




第78図　ＳＥ－ＳＢ５５実測図

## ＳＥ－ＳＢ５６

桁行4.1ｍ、梁行妻2.4ｍの２間×２間の建物で、方位はＮ50°Ｗである。柱間寸法は、桁行Ｐ360～Ｐ363～Ｐ364で1.5ｍ＋2.6ｍであるが、Ｐ362～Ｐ365は中央柱が不明で全長4.1ｍを測る。梁行妻はＰ360～Ｐ361～Ｐ362で1.3ｍ＋1.1ｍとなり、Ｐ364～Ｐ365では、桁行Ｐ362～Ｐ365と同様に中央柱が不明で全長2.4ｍを測る。

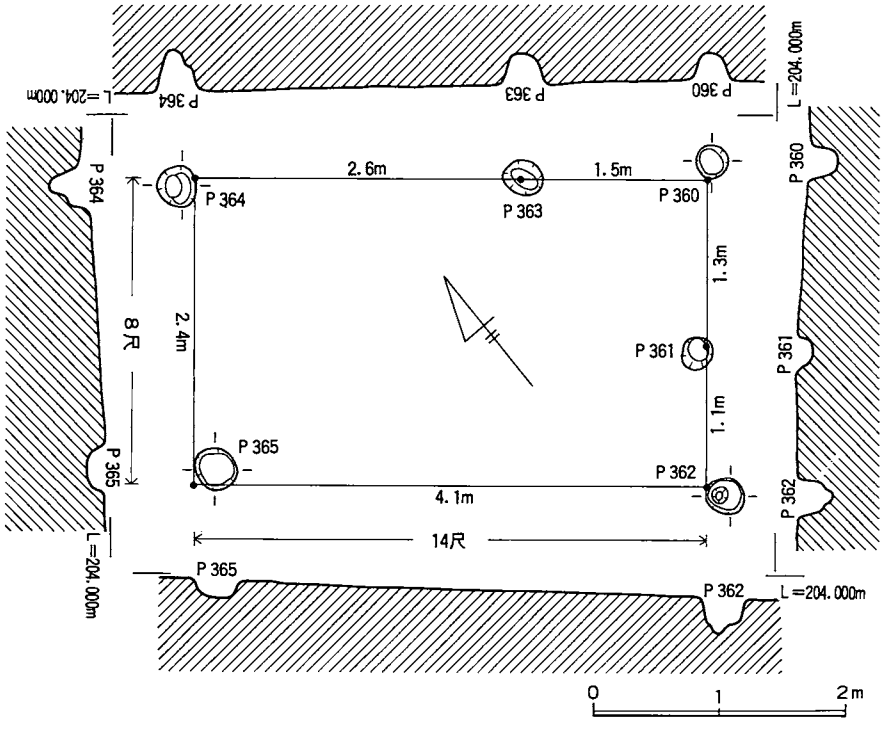
柱穴の大きさは、Ｐ365が最大（37×31cm）、Ｐ361が最小（25×25cm）で平均値は31.5×27.8cmとなる。深さはＰ364が最深（31.5cm）、Ｐ361が最浅（13.3cm）で平均値は23.2cmである。

柱列はすべて千鳥の並びとなる。

桁行の北側と南側の高さを比べた場合、柱穴の検出面は東側Ｐ360－Ｐ361－Ｐ362で13cm、西側Ｐ364－Ｐ365で20cm、南側の方が高い。さらに梁行妻の東側と西側では、南側Ｐ362－Ｐ365で20cm、西側の方が高い。Ｐ362は二段掘りとなっている。

| Pit NO. | 桁行柱間 (m) | 桁行間(m) | Pit NO. | 梁間柱間 (m) | 梁間間(m) | PitNO. | 深さ(cm) | 長径(cm) | 短径(cm) |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 360～363 | 1.5 | 4.1 | 360～361 | 1.3 | 2.4 | 360 | 22.7 | 27 | 25 |
| 363～364 | 2.6 | | 361～362 | 1.1 | | 361 | 13.3 | 25 | 25 |
| | | | | | | 362 | 29.3 | 32 | 29 |
| 362～365 | 4.1 | 4.1 | 364～365 | 2.4 | 2.4 | 363 | 27.1 | 33 | 27 |
| | | | | | | 364 | 31.5 | 35 | 30 |
| | | | | | | 365 | 15.5 | 37 | 31 |

第68表　ＳＥ－ＳＢ５６計測表




第79図　ＳＥ－ＳＢ５６実測図

## ＳＥ－ＳＢ５７

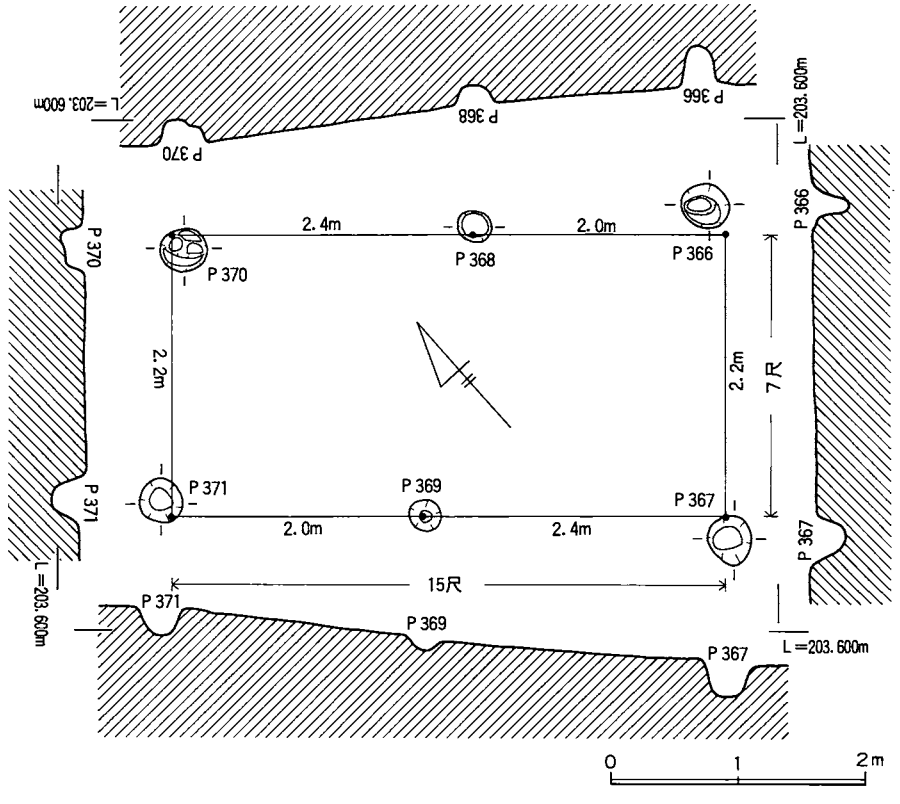
桁行4.4ｍ、梁行妻2.2ｍの２間×１間の建物で、方位はＮ46°Ｗである。柱間寸法は、桁行Ｐ366～Ｐ368～Ｐ370で2.0ｍ＋2.4ｍ、Ｐ367～Ｐ369～Ｐ371で2.4ｍ＋2.0ｍ、梁行妻Ｐ366～Ｐ367で2.2ｍ、Ｐ370～Ｐ371で2.2ｍを測る。

柱穴の大きさは、Ｐ366・367が最大（39×35cm）、Ｐ369が最小（27×26cm）で平均値は34.8×31.3cmとなる。深さはＰ366が最深（30.9cm）、Ｐ369が最浅（11.9cm）で平均値は23.0cmである。柱列はすべて千鳥の並びとなる。

梁行妻の東側と西側の高さを比べた場合、柱穴の検出面は北側Ｐ366－Ｐ368－Ｐ370で40cm、南側Ｐ367－Ｐ369－Ｐ371で50cm、西側の方が高い。Ｐ370は二段掘りとなっている。

| Pit NO. | 桁行柱間 (m) | 桁行間(m) | Pit NO. | 梁間柱間 (m) | 梁間間(m) | PitNO. | 深さ(cm) | 長径(cm) | 短径(cm) |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 366～368 | 2.0 | 4.4 | 366～367 | 2.2 | 2.2 | 366 | 30.9 | 39 | 35 |
| 368～370 | 2.4 | | 370～371 | 2.2 | 2.2 | 367 | 29.9 | 39 | 35 |
| | | | | | | 368 | 13.2 | 29 | 24 |
| 367～369 | 2.4 | 4.4 | | | | 369 | 11.9 | 27 | 26 |
| 369～371 | 2.0 | | | | | 370 | 25.5 | 38 | 34 |
| | | | | | | 371 | 26.4 | 37 | 34 |

第69表　ＳＥ－ＳＢ５７計測表




第80図　ＳＥ－ＳＢ５７実測図

## ＳＥ－ＳＢ５８

桁行4.2ｍ、梁行妻2.3ｍの２間×１間の建物で、方位はＮ47° Ｗである。柱間寸法は、桁行Ｐ372～Ｐ374～Ｐ376で2.4ｍ＋1.8ｍ、Ｐ373～Ｐ375～Ｐ377で2.4ｍ＋1.8ｍ、梁行妻Ｐ372～Ｐ373で2.3ｍ、Ｐ376～Ｐ377で2.3ｍを測る。

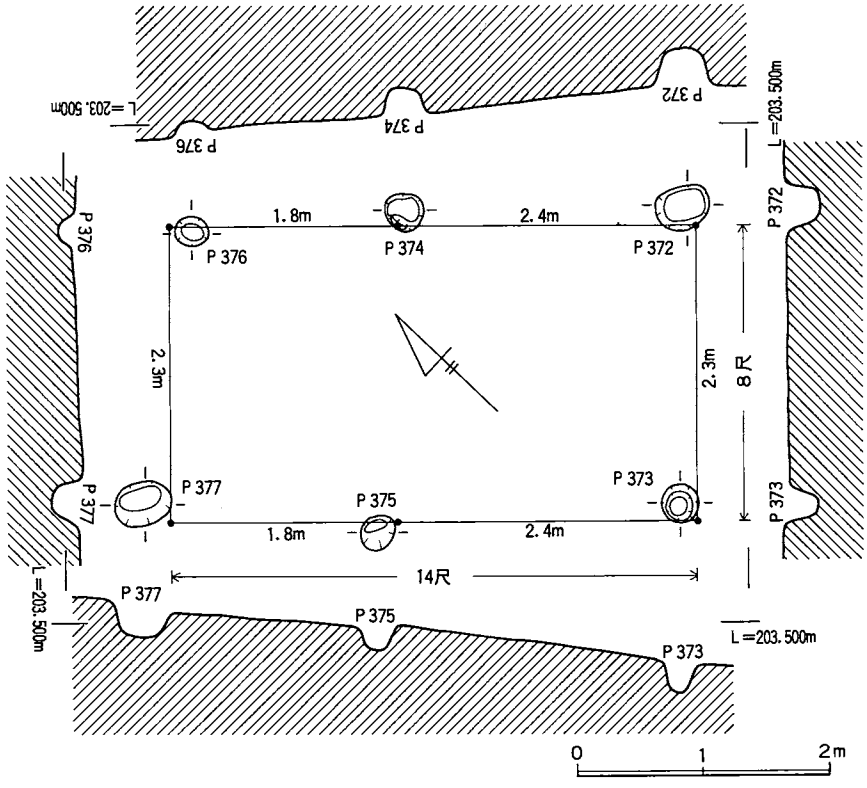
柱穴の大きさは、Ｐ377が最大（47×35cm）、Ｐ376が最小（27×25cm）で平均値は35.3×29.7cmとなる。深さはＰ377が最深（28.7cm）、Ｐ376が最浅（13.1cm）で平均値は22.9cmである。

柱列はすべて千鳥の並びとなる。

梁行妻の東側と西側の高さを比べた場合、柱穴の検出面は北側Ｐ372－Ｐ374－Ｐ376で42cm、南側Ｐ373－Ｐ375－Ｐ377で55cm、西側の方が高い。

| Pit NO. | 桁行柱間 (m) | 桁行間(m) | Pit NO. | 梁間柱間 (m) | 梁間間(m) | PitNO. | 深さ(cm) | 長径(cm) | 短径(cm) |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 372～374 | 2.4 | 4.2 | 372～373 | 2.3 | 2.3 | 372 | 28.4 | 43 | 34 |
| 374～376 | 1.8 | | | | | 373 | 27.5 | 32 | 28 |
| | | | 376～377 | 2.3 | 2.3 | 374 | 21.0 | 32 | 29 |
| 373～375 | 2.4 | 4.2 | | | | 375 | 18.4 | 31 | 27 |
| 375～377 | 1.8 | | | | | 376 | 13.1 | 27 | 25 |
| | | | | | | 377 | 28.7 | 47 | 35 |

第70表　ＳＥ－ＳＢ５８計測表




第81図　ＳＥ－ＳＢ５８実測図

## ＳＥ－ＳＢ５９

桁行4.2ｍ、梁行妻2.4ｍの１間×１間の建物で、方位はＮ52°Ｗである。柱間寸法は、桁行Ｐ378～Ｐ380で4.2ｍ、Ｐ379～Ｐ381で4.2ｍ、梁行妻Ｐ378～Ｐ379で2.4ｍ、Ｐ380～Ｐ381で2.4ｍを測る。

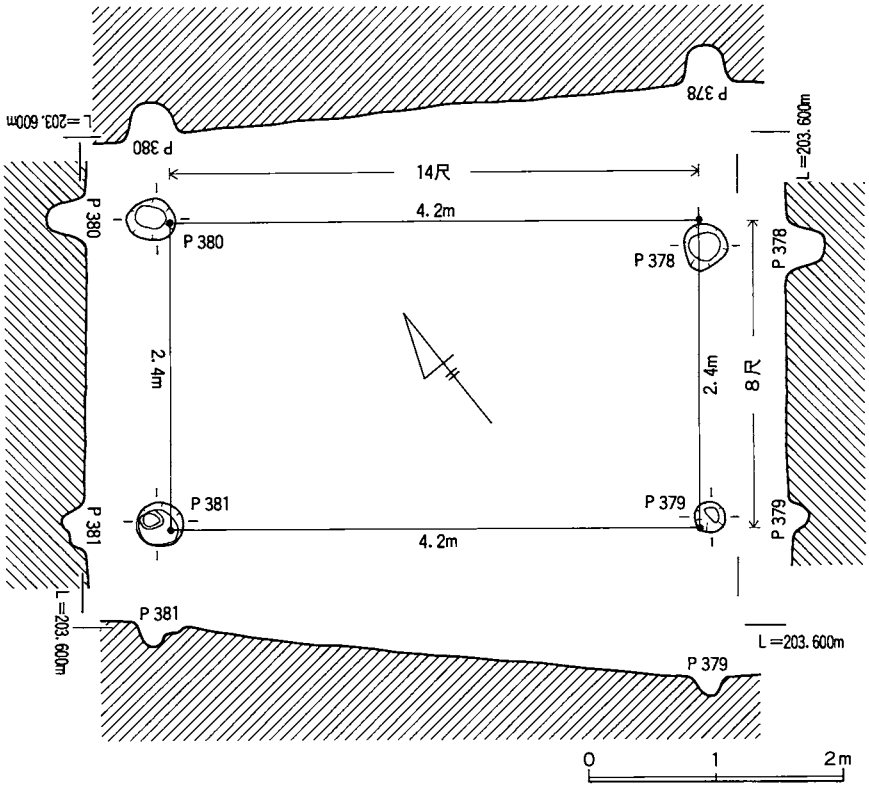
柱穴の大きさは、Ｐ380が最大（41×33cm）、Ｐ379が最小（24×23cm）で平均値は35×31.3cmとなる。深さはＰ378が最深（30.0cm）、Ｐ379が最浅（15.4cm）で平均値は24.6cmである。

柱列は桁行Ｐ378～Ｐ380が千鳥の並びとなる。

梁行妻の東側と西側の高さを比べた場合、柱穴の検出面は北側Ｐ378－Ｐ380で48cm、南側Ｐ379－Ｐ381で47cm、西側の方が高い。

| Pit NO. | 桁行柱間 (m) | 桁行間(m) | Pit NO. | 梁間柱間 (m) | 梁間間(m) | PitNO. | 深さ(cm) | 長径(cm) | 短径(cm) |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 378～380 | 4.2 | 4.2 | 378～379 | 2.4 | 2.4 | 378 | 30.0 | 37 | 34 |
| | | | | | | 379 | 15.4 | 24 | 23 |
| 379～381 | 4.2 | 4.2 | 380～381 | 2.4 | 2.4 | 380 | 29.9 | 41 | 33 |
| | | | | | | 381 | 23.2 | 38 | 35 |

第71表　ＳＥ－ＳＢ５９計測表




第82図　ＳＥ－ＳＢ５９実測図

**堀　切　5**

南東側張り出し尾根の北側基底部（東側尾根の南側斜面部に接する所）から検出された。調査時は、完全に埋没の状態にあり、地表面観察では、存在を確認し得なかった堀切である。

造営に際しては、本体尾根筋に刻まれた大規模造りの堀切と同一の掘り方がなされている。

すなわち、尾根筋の主軸ライン部分を土橋状に、やや浅めに掘り下げた後、東西両端の山腹斜面を竪堀状に掘り下げるやり方である。

堀切は長さ8.5ｍ（主軸方向はＮ55°Ｅ）で、上場幅４ｍ、底部1.1ｍの小規模なものであり、堀底と張り出し尾根上面との比高差は約0.5ｍを測る。

堀切の堆積状況は第92図に示したが、中位層から下位層にかけて小礫（７層～12層）がギッシリと堆積しており、この箇所から土師器坏〔525～531・535～536〕と瓦質の擂鉢〔537・538〕が出土した。なお４層からは近世染付碗（ほぼ完形）の出土を見た。

## 第８節　調査区の土層断面

**Ｐ－１　土層断面図**（第86図～第89図）

迫地・Ⅰ期整地層　Ｐ－１の土層断面より整地状況の一部がわかる。

(1)　Ｐ－１の基準点より６～12ｍの範囲（以下、ＰＴ－６～12ｍという様に表す）では、９層土の下層から整地層を検出した。ＰＴ10ｍにおける地表から整地層までの層厚は0.9ｍである。多くの草木根が土層断面にかかっている。

(2)　ＰＴ－12～16ｍの範囲では、15層～21層土が整地層で層厚67㎝を測る。地表から整地層までの層厚は0.45～0.75ｍである。各土層は、厚さ10㎝程で版築状に積まれており、18層土と19層土を除き、いずれも強く叩き締められている。特に15層～17層土と21層土は非常な硬度である。

15層土は灰褐色土、16層土は灰褐色土と茶色土の混入土、17層土は茶褐色土に灰褐色土が混入していた。

18層土と19層土については、やや引き締まった層土であるが、硬度はそれ程でなく、18層土が褐灰色土、19層土が褐色土であった。

20層土は灰褐色土と黒色土の混入土で、21層土は茶褐色土と明褐色土の混入土であった。

15層土を切り込む５つの柱穴が土層断面にかかっている。

(3)　ＰＴ－18.5～20ｍの範囲に17層土・22層土～24層土の整地層が見え、層厚0.3～0.4ｍを測る。22層土は茶褐色土とアカホヤの混入土で、23層土はアカホヤに茶褐色土と小礫が混じっていた。24層土は灰褐色土と灰色土の混入土である。

(4)　ＰＴ－24～31ｍの範囲では17層土・25層土・26層土が整地層で層厚0.2～0.3ｍを測る。25

層土は褐灰色土にアカホヤが混入している。26層土は灰褐色土で、非常な硬土である。

(5) ＰＴ－31～39ｍ範囲の整地層は、15層～18層土で層厚0.2～0.5ｍを測る。ＰＴ－12～16ｍ範囲の整地層と同様な堆積状況を呈する。

17層土を切り込む８つの柱穴が土層断面にかかっている。遺物は整地層の上面及びそれより若干、土層内部（上面より10㎝内外の深さ）に入り込んだ所から出土した。

**Ｐ－２・３　土層断面図**（第90図・第93図）

東側尾根の北側基底部における南北土層断面（Ｐ－２）と東西土層断面（Ｐ－３）である。東側尾根の北側部分は粘土層が堆積し、中途から南側部分にかけて、主に凝灰岩の露頭する岩場となっている。土層観察地点は粘土層の堆積箇所にあたる。

Ｐ－２は、地表より基盤までの層厚が0.15～0.35ｍである。凝灰岩の上位に肌色粘土・明褐色粘土・乳白色粘土が層厚５～10㎝程度に堆積しており、さらにこれらの上層土として、灰褐色粘土や灰黒色土が見られた。

Ｐ－３は、地表より基盤（凝灰岩）までの層厚が、尾根の背面で0.15～0.2ｍ、西側斜面で最大0.7ｍを測った。

尾根の背面には５層土と７層土が堆積していた。５層土は明褐色粘土に灰黒色土が混入しており、同じく７層土は灰黒色土に肌色粘土が混入していた。西側斜面では１層土～３層土が堆積しており、層厚は１層土・３層土が各々0.15ｍ程で、２層土は最大0.35ｍを測った。１層土は乳白色粘土、２層土は明茶色粘土、３層土は肌色粘土である。

上記の土層中から遺物は出土していない。東側尾根の出土遺物はすべて柱穴からである。

**Ｐ－４　土層断面図**（第91図）

西側尾根の北側半分における南北土層断面である。地表より基盤（凝灰岩）までの層厚は、0.55～0.70ｍを測り、凝灰岩の上位に褐色粘土や茶褐色粘土・灰黒褐色粘土・白褐色粘土が堆積していた。Ｐ－２・３と比較してやや厚い粘土層であるが、これは尾根の背面のみに限った状態で、南側半分の尾根や周辺の山腹は、すべて岩山である。

**Ｐ－５　土層断面図**（第92図）

堀切５の土層断面図である。南東側張り出し尾根の基盤は粘土層で、堀切５はこれを切り込んでいる。埋土は主に凝灰岩の風化土（７層～13層土）で、非常に密な状態で堆積していた。土師器坏などがこの堀切から出土している。張り出し尾根の背面には、層厚0.10ｍ程の薄い表土がのっていた。

**Ｐ－６　土層断面図**（第94図）

迫地・第Ⅱ期整地層の土層断面図である。

(1) ＰＴ－０～４ｍの範囲では３層（１層～３層土）から成る整地層（層厚0.25ｍ）がある。１層土は肌色粘土、２層土は小礫混じりの肌色粘土、３層土は灰オリーブ色土と薄茶色土の混

入土で部分的に肌色粘土の混じりが見られた。

(2) ＰＴ－４～７ｍの範囲は、４層～９層土が、ややブロック状に積まれていた。層厚0.55～0.70ｍで、４層土は褐灰色土に肌色粘土とアカホヤが混入しており、５層土には灰オリーブ色土に肌色粘土が混じっていた。６層土は非常な硬土で、褐灰色土とチョコレート色土の混入土である。７層土は薄茶色土とチョコレート色土の混入土で、８層土は肌色粘土に灰オリーブ色土が混入していた。９層土は肌色粘土に小礫の混じりが見られた。

(3) ＰＴ－７～12ｍの範囲は、４層・５層・７層・10層～26層土がきっちりと積み上げられており、極めてしっかりとした整地層となっている。土層の堆積状態はＰＴ７～10ｍがブロック状で、ＰＴ11・12ｍが版築状であった。層厚は1.1～1.0ｍを測り、上位層の４層土と10層土を切り込む４つの柱穴が土層断面にかかっている。土層は10層～14層土と19層土・12層～22層土が肌色粘土をベースにしており、これに10層・11層・13層・22層土では炭化物が混入していた。14層土は非常な硬土で、21層土はガチガチのブロック土であった。15層土と16層土はアカホヤがベースで、15層土には茶褐色土が混入しており、16層土は褐灰色土との混入土であった。

17層土と18層土は灰色土と灰オリーブ色土をベースとし、これに肌色粘土とアカホヤの混入が見られた。24層土は褐色土と肌色粘土の混入土である。

25層土と26層は茶褐色土に灰黒色土とアカホヤが混入していた。

**Ｐ－７　土層断面図**（第95図）

迫地・第Ⅱ期整地層の土層断面図である。

(1) ＰＴ－０～３ｍの範囲は、１層～13層土が、やや粗い版築の状態で積まれていた。個々の層厚は、７層土と９層土が最大の層厚0.2ｍを測り、全体の層厚は0.8ｍである。

１層土は鼠色粘土と薄茶色土の混入土で硬度である。２層土・４層土・９層～11層土・13層土は肌色粘土がベースで、これに薄茶色土や、赤褐色鉄分土・灰オリーブ色土が混入していた。10層土は肌色粘土が硬いブロック土になっている。

３層土・５層～８層土・12層土は、灰オリーブ色土をはじめとして、灰白色土・茶褐色土・薄茶色土に肌色粘土が混じっていた。８層土は薄茶色土がベースで硬度であり、土層はまだら模様を呈する。

柱穴１個が土層断面にかかっている。

(2) ＰＴ－４～６ｍの範囲は、１層土・３層土・９層土・13層～25層から版築状に積まれ、層厚0.6～0.9ｍを測る。

14層土・16層土・20層土は肌色粘土がベースになっており、これに薄茶色土や赤褐色鉄分土・茶褐色土・灰オリーブ色土が混じる。

15層土・18層土・21層土・22層土・24層土・25層土は灰色土と灰オリーブ色土がベースで、肌色粘土・薄茶色土・茶褐色土の混入を見る。

17層土は茶褐色土に赤褐色鉄分土が混入し、19層土は灰白黄色土に灰オリーブ色土と薄茶色土が混入する。

柱穴2個が土層断面にかかっている。

(3) ＰＴ－６～９ｍの範囲は１層～３層土・10層土・12層土・15層土・21層土・25層～31層土がブロック状に積まれており、29層土は肌色粘土と薄茶色土の混入土で小礫が混じる。

27層土・28層土・30層土・31層土は灰オリーブ色土をベースとする。28層土・29層土は薄茶色土との混入土で28層土はブロック状を呈し、29層土は小礫も混じる。30層土・31層土は、白灰色土と肌色粘土が混入する。

(4) ＰＴ－９～14ｍの範囲は、Ｐ－６の南側部分と同様にきっちりとした版築による整地がなされている。

全体的な層厚は1.1～1.65ｍを測り、大規模な造成工事のあとが伺われる。

１層～３層土・10層土・21層土・32層～42層土が版築状に積まれている。32層～35層土・42層土は肌色粘土をベースとし、薄茶色土・灰黒色土・灰白色土の混入が見られた。36層土は褐色土に灰黒色土が混入し、37層土は茶褐色土である。38層土は茶褐色土に灰黒色土が混入する。39層土は灰オリーブ色土に肌色粘土と茶褐色土が混入しており、40層土は薄チョコレート色土である。41層土は灰褐色土と灰黒色土の混入である。

**Ｐ－８断面図**（第96図）

迫地・第Ⅲ期文化層の土層断面図である。

Ⅲ期土層からは、道路跡が検出された。埋土は灰オリーブ色土がベースで、これに灰褐色土・灰色土・赤褐色鉄分土・褐色土・茶褐色土の混入が見られた。いずれも踏み固められて硬土となっている。

なお、１層～３層土は第Ⅱ期整地層の残土である。

**Ｐ－９　土層断面図**（第97図）

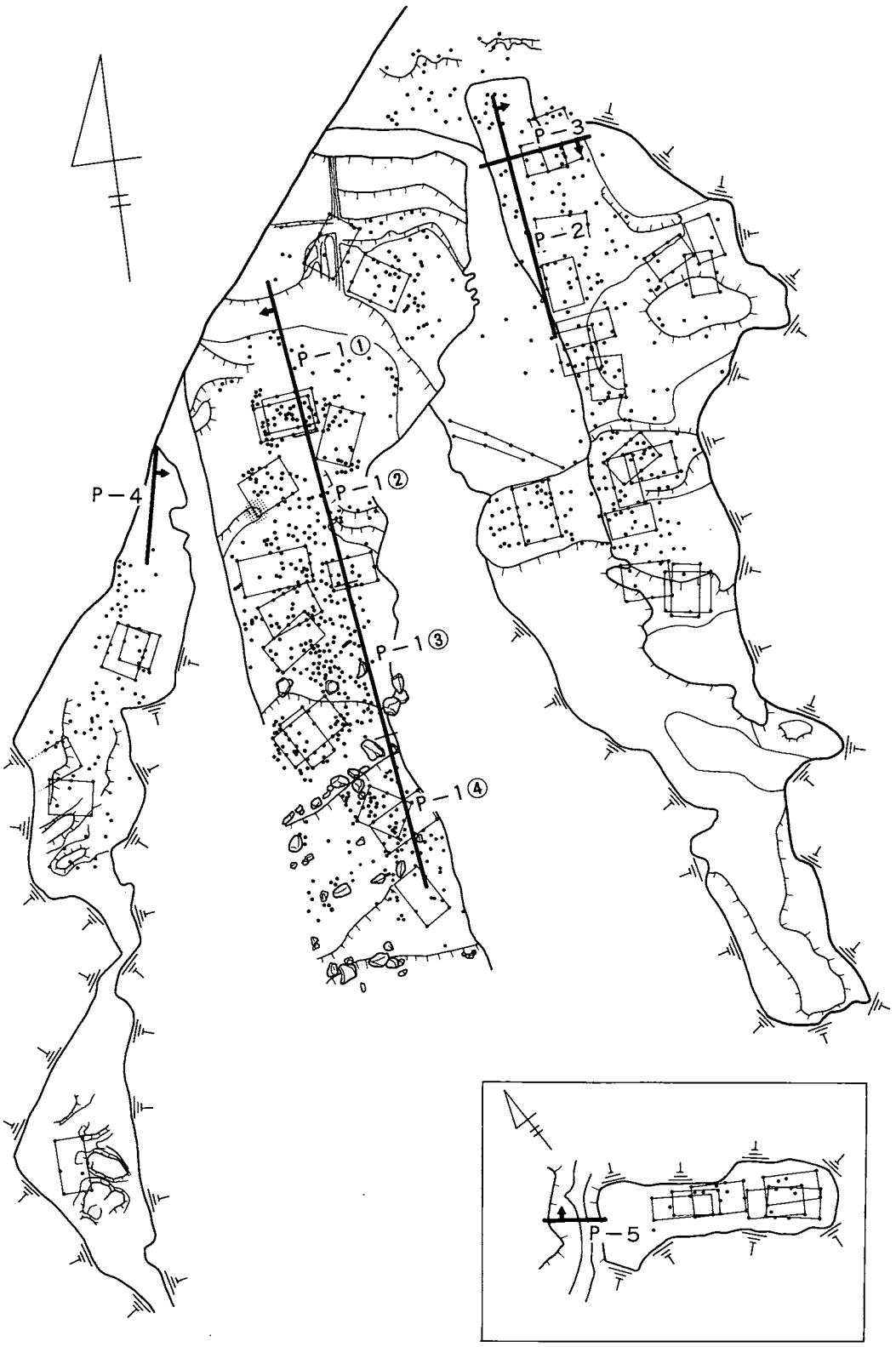
迫地・西壁整地層の土層断面図である。

迫地の上段西壁に設けた土層断面で、これにより、Ⅰ期とⅡ期の整地層の状況が一枚図面でわかる。図中、太い実線が引かれているが、これより上位は第Ⅰ期整地層で、下位が第Ⅱ期整地層と考えられる。

すなわち、整地層を２分する太い実線ラインは土層の不整合面で、いずれの土層も灰黒色土に近く、うす汚れた土層ラインを呈するものであった。

整地層の状況は、Ｐ－９を見る限りにおいて第Ⅱ期整地層の方が、Ⅰ期より細かな整地作業が行われたものと思われる。

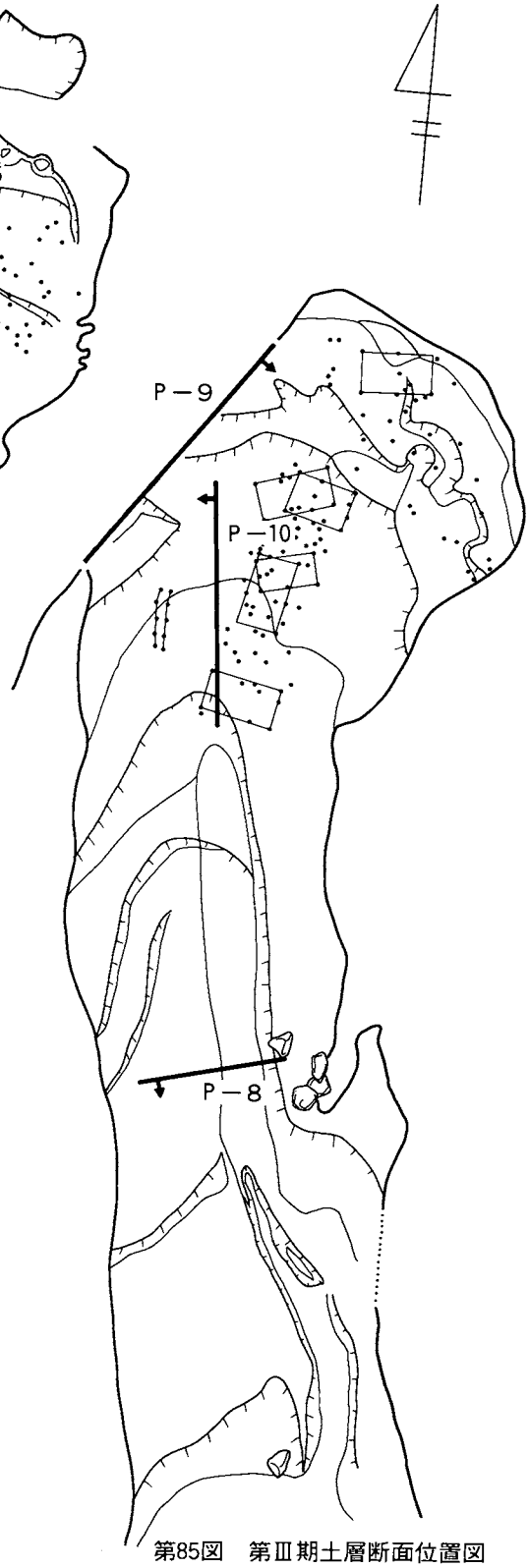
なお図中、土層の上位において自然堆積土と考えられる部分は薄色のスクリーン・トーンで整地層と区別した。



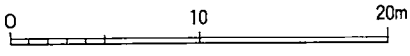

第83図　第Ⅰ期土層断面位置図

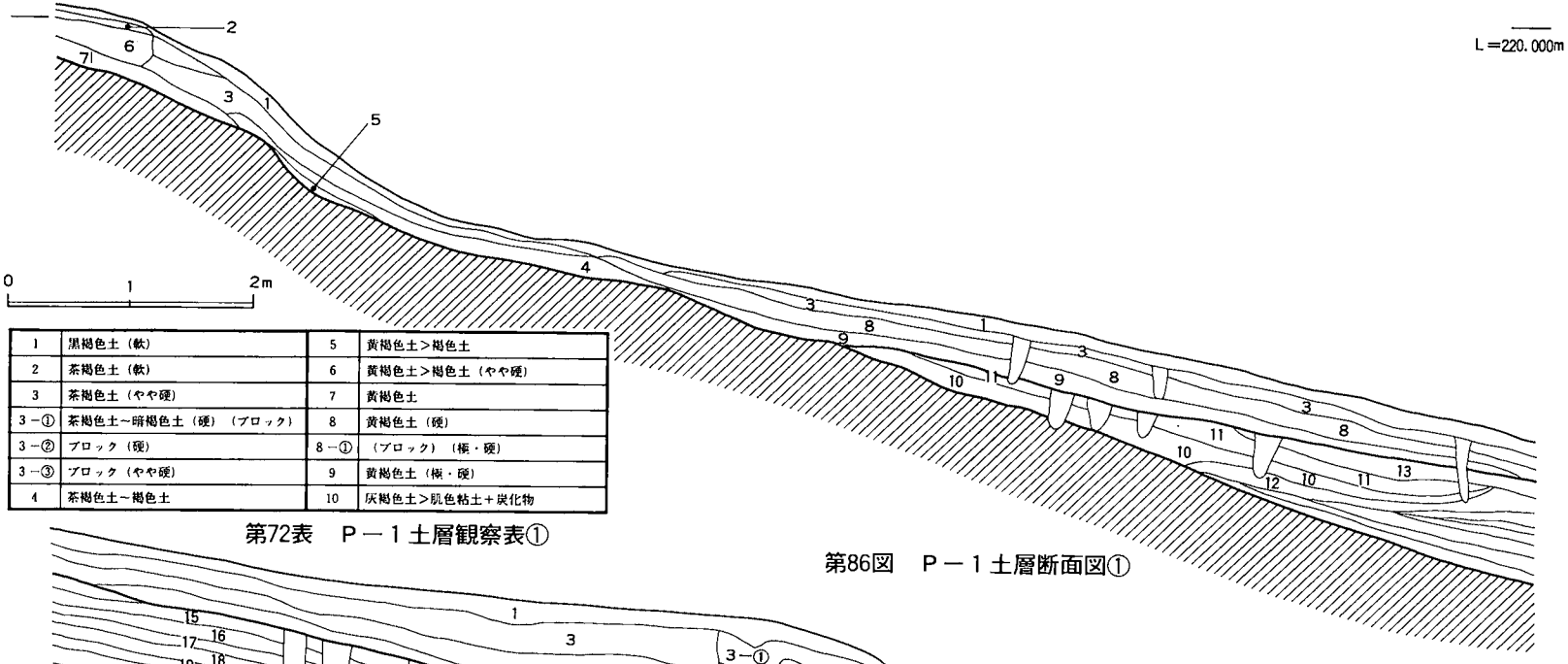
（東・西尾根，南東側張り出し尾根）

第84図　第Ⅱ期土層断面位置図




第85図　第Ⅲ期土層断面位置図

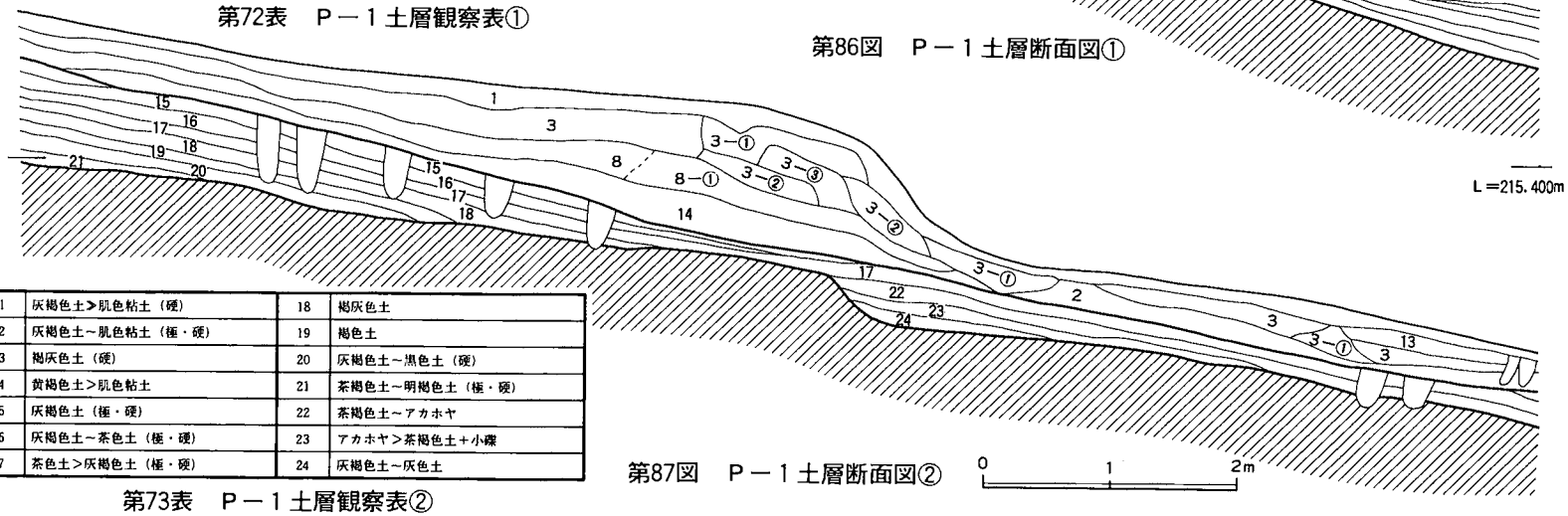





| | | | |
|---|---|---|---|
| 1 | 黒褐色土（軟） | 5 | 黄褐色土＞褐色土 |
| 2 | 茶褐色土（軟） | 6 | 黄褐色土＞褐色土（やや硬） |
| 3 | 茶褐色土（やや硬） | 7 | 黄褐色土 |
| 3－① | 茶褐色土～暗褐色土（硬）（ブロック） | 8 | 黄褐色土（硬） |
| 3－② | ブロック（硬） | 8－① | （ブロック）（極・硬） |
| 3－③ | ブロック（やや硬） | 9 | 黄褐色土（極・硬） |
| 4 | 茶褐色土～褐色土 | 10 | 灰褐色土＞肌色粘土＋炭化物 |

第72表　Ｐ－１土層観察表①

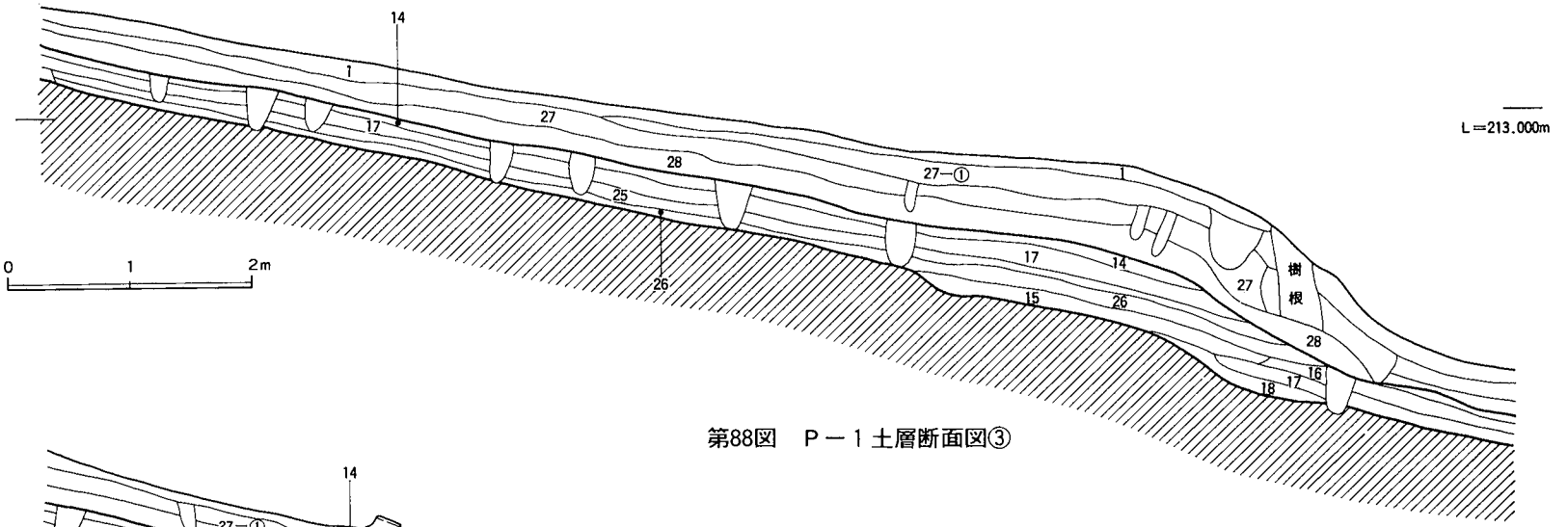
第86図　Ｐ－１土層断面図①



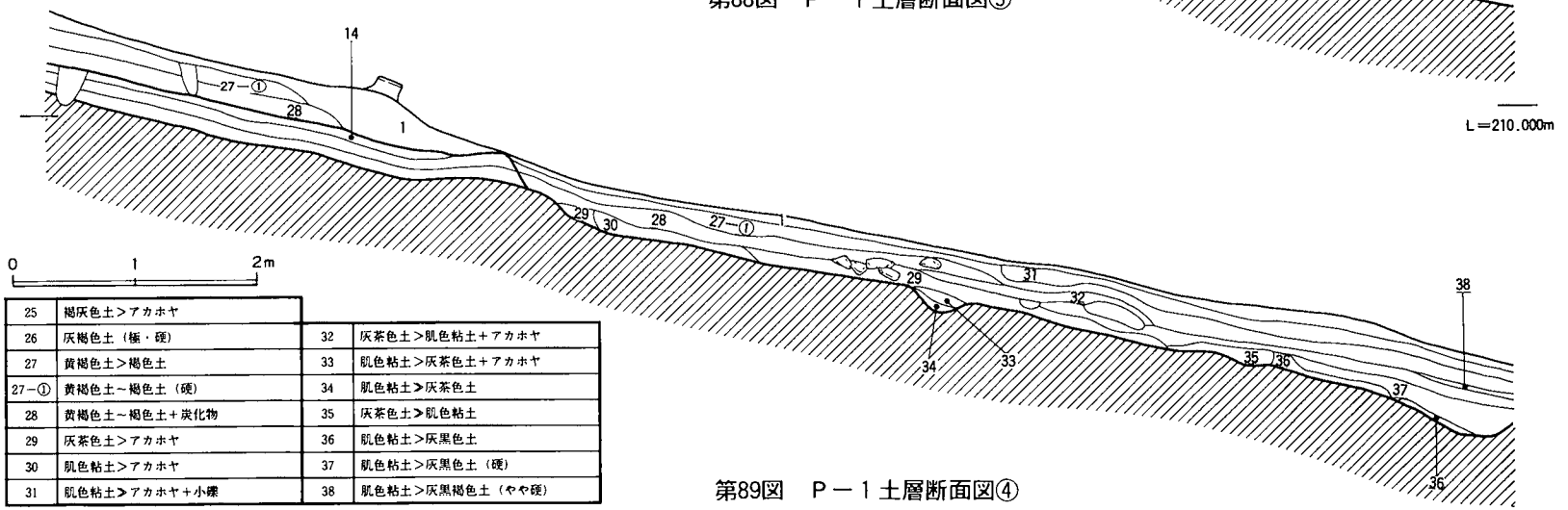

| | | | |
|---|---|---|---|
| 11 | 灰褐色土＞肌色粘土（硬） | 18 | 褐灰色土 |
| 12 | 灰褐色土～肌色粘土（極・硬） | 19 | 褐色土 |
| 13 | 褐灰色土（硬） | 20 | 灰褐色土～黒色土（硬） |
| 14 | 黄褐色土＞肌色粘土 | 21 | 茶褐色土～明褐色土（極・硬） |
| 15 | 灰褐色土（極・硬） | 22 | 茶褐色土～アカホヤ |
| 16 | 灰褐色土～茶色土（極・硬） | 23 | アカホヤ＞茶褐色土＋小礫 |
| 17 | 茶色土＞灰褐色土（極・硬） | 24 | 灰褐色土～灰色土 |

第73表　Ｐ－１土層観察表②

第87図　Ｐ－１土層断面図②



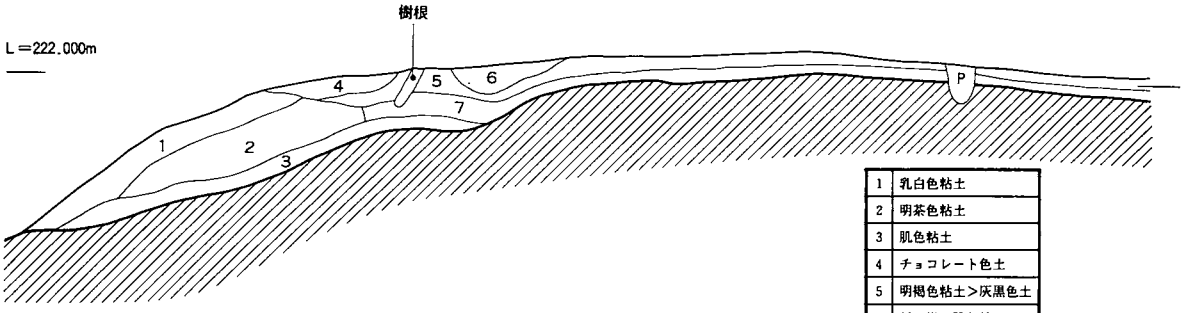

第88図　Ｐ－１土層断面図③




第89図　Ｐ－１土層断面図④

| | | | |
|---|---|---|---|
| 25 | 褐灰色土＞アカホヤ | | |
| 26 | 灰褐色土（極・硬） | 32 | 灰茶色土＞肌色粘土＋アカホヤ |
| 27 | 黄褐色土＞褐色土 | 33 | 肌色粘土＞灰茶色土＋アカホヤ |
| 27－① | 黄褐色土～褐色土（硬） | 34 | 肌色粘土＞灰茶色土 |
| 28 | 黄褐色土～褐色土＋炭化物 | 35 | 灰茶色土＞肌色粘土 |
| 29 | 灰茶色土＞アカホヤ | 36 | 肌色粘土＞灰黒色土 |
| 30 | 肌色粘土＞アカホヤ | 37 | 肌色粘土＞灰黒色土（硬） |
| 31 | 肌色粘土＞アカホヤ＋小礫 | 38 | 肌色粘土＞灰黒褐色土（やや硬） |

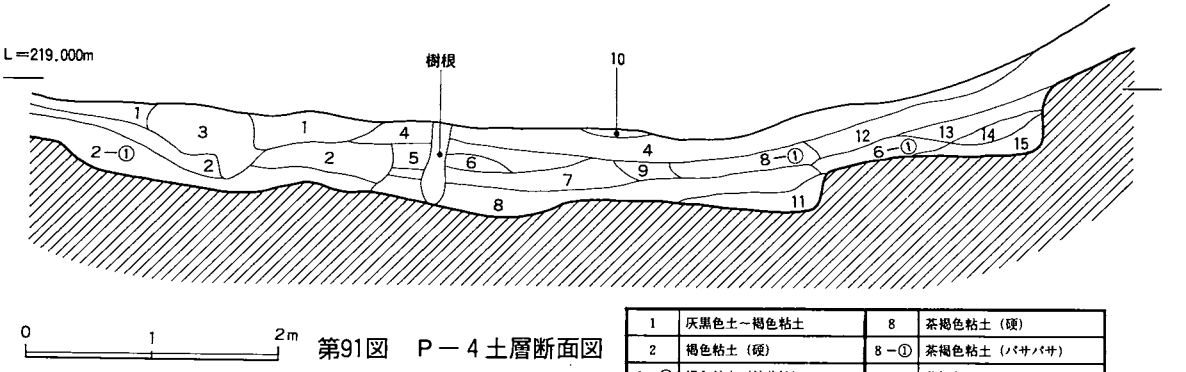
第74表　Ｐ－１土層観察表③




第90図　P－3 土層断面図

| | |
|---|---|
| 1 | 乳白色粘土 |
| 2 | 明茶色粘土 |
| 3 | 肌色粘土 |
| 4 | チョコレート色土 |
| 5 | 明褐色粘土＞灰黒色土 |
| 6 | 凝灰岩～肌色粘土 |
| 7 | 灰黒色土＞肌色粘土 |

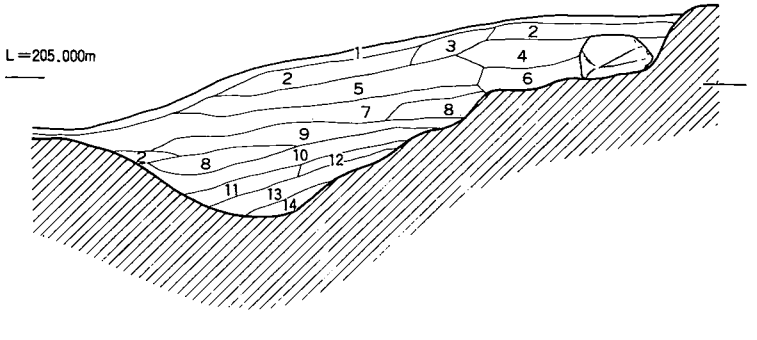
第75表　P－3 土層観察表




第91図　P－4 土層断面図

| | | | |
|---|---|---|---|
| 1 | 灰黒色土～褐色粘土 | 8 | 茶褐色粘土（硬） |
| 2 | 褐色粘土（硬） | 8－① | 茶褐色粘土（パサパサ） |
| 2－① | 褐色粘土（粘着性） | 9 | 茶褐色土＞灰色土（硬） |
| 3 | 凝灰岩 | 10 | 黒色土 |
| 4 | 黒色土＞灰褐色土 | 11 | 褐色粘土～チョコレート色土 |
| 5 | 黒褐色土（軟） | 12 | 灰黒褐色土（パサパサ） |
| 6 | 褐色土（軟） | 13 | 茶色土 |
| 6－① | 褐色土（硬） | 14 | 肌色粘土 |
| 7 | 茶褐色粘土～灰色砂土 | 15 | 白褐色粘土 |

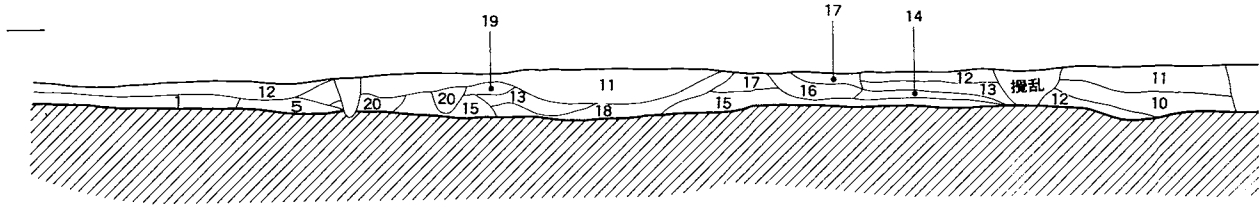
第76表　P－4 土層観察表



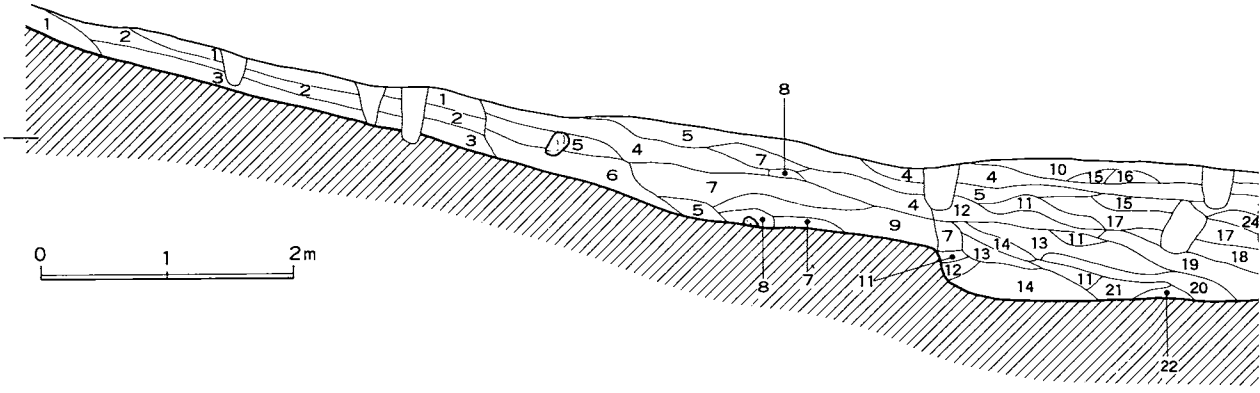

第92図　P－5 土層断面図

| | |
|---|---|
| 1 | 褐色土 |
| 2 | 黄灰色砂土 |
| 3 | 礫層① |
| 4 | 暗灰色土～黄灰色砂土 |
| 5 | 黄灰色砂土　礫層② |
| 6 | 灰色砂土 |
| 7 | 礫層③（こぶし大） |
| 8 | 礫層④（小礫） |
| 9 | 礫層⑤（礫＋砂） |
| 10 | 礫層⑥ |
| 11 | 礫層⑦ |
| 12 | 礫層⑧ |
| 13 | 黄褐色土 |
| 14 | 明黄褐色土 |

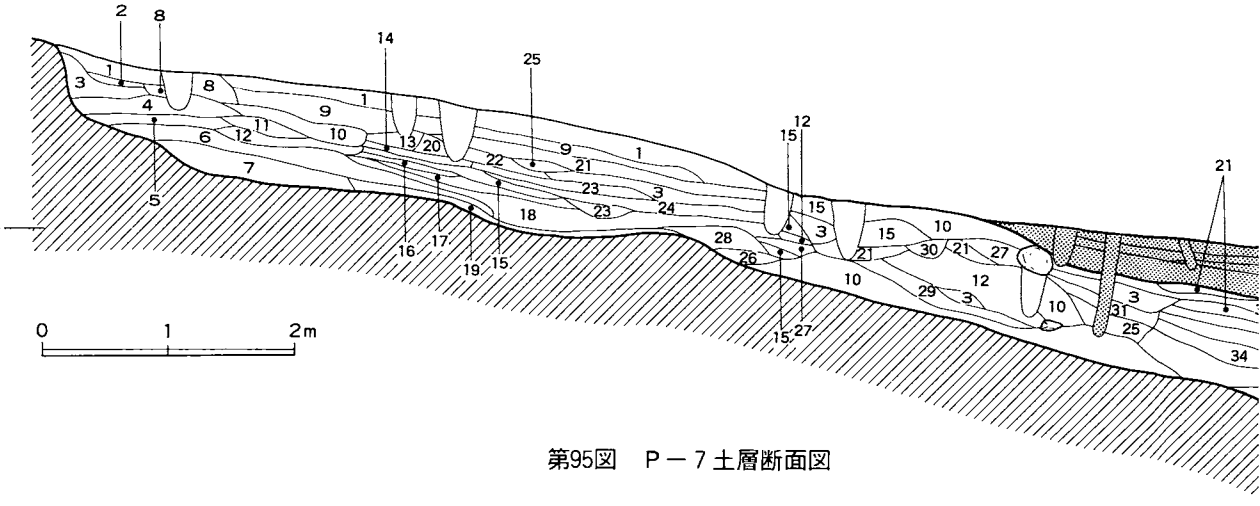
第77表　P－5 土層観察表




第93図　P－2土層断面図

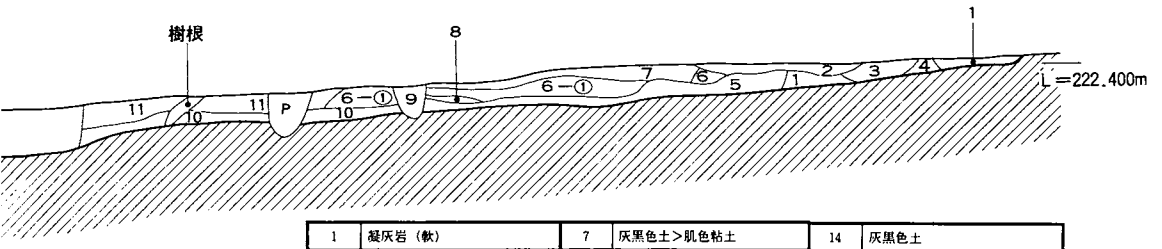



第94図　P－6土層断面図




第95図　P－7土層断面図

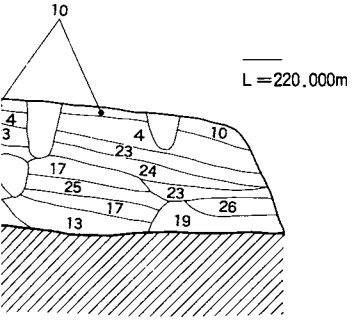
●スクリーン・トーン部分は
第1期整地層を表わす




| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 凝灰岩（軟） | 7 | 灰黒色土＞肌色粘土 | 14 | 灰黒色土 |
| 2 | 灰黒色土＞肌色粘土 | 8 | 灰黒色土＞明褐色粘土 | 15 | 凝灰岩～肌色粘土 |
| 3 | 灰色土＞肌色粘土 | 9 | 凝灰岩＞灰黒色土 | 16 | 灰黒色土＞肌色粘土 |
| 4 | 肌色粘土＞灰色土 | 10 | 明褐色粘土＞凝灰岩 | 17 | 明褐色粘土＞灰黒色土 |
| 5 | 凝灰岩＞肌色粘土 | 11 | 灰褐色粘土（フカフカ） | 18 | 明褐色粘土＞チョコレート色土 |
| 6 | 明褐色粘土 | 12 | 乳白色粘土 | 19 | 明褐色粘土＞白色砂土（硬） |
| 6－① | 明褐色粘土（硬） | 13 | 白色砂土＞明褐色粘土 | 20 | 明褐色粘土＞灰黒色土（粘） |

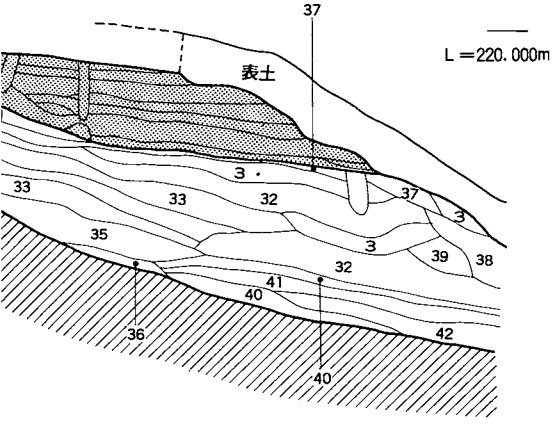
＊　東側尾根の北側部分は、粘土層の堆積。南側部分は凝灰岩が露頭。

第78表　Ｐ－２土層観察表




| | | | |
|---|---|---|---|
| 1 | 肌色粘土 | 14 | 肌色粘土（極・硬） |
| 2 | 肌色粘土～小礫 | 15 | アカホヤ＞茶褐色土 |
| 3 | 灰色オリーブ土～薄茶色土＋肌色粘土 | 16 | アカホヤ～褐灰色土 |
| 4 | 褐灰色土＞肌色粘土＋アカホヤ | 17 | 灰色土＞肌色粘土 |
| 5 | 灰色オリーブ土＞肌色粘土 | 18 | 灰色オリーブ土＞肌色粘土＋アカホヤ |
| 6 | 褐灰色土～チョコレート色土（極・硬） | 19 | 肌色粘土＞灰黒色土＋アカホヤ |
| 7 | 薄茶色土～チョコレート色土 | 20 | 灰黒色土＞肌色粘土（小ブロック）＋小礫 |
| 8 | 肌色粘土＞灰色オリーブ土 | 21 | 肌色粘土（ブロック） |
| 9 | 肌色粘土＞小礫 | 22 | 肌色粘土＞小礫＋炭化物 |
| 10 | 肌色粘土～炭化物 | 23 | 肌色粘土＞茶褐色土 |
| 11 | 肌色粘土＞灰色オリーブ土＋炭化物 | 24 | 褐色土～肌色粘土 |
| 12 | 肌色粘土～灰色オリーブ土 | 25 | 茶褐色土＞灰黒色土 |
| 13 | 肌色粘土＞炭化物 | 26 | 茶褐色土＞アカホヤ |

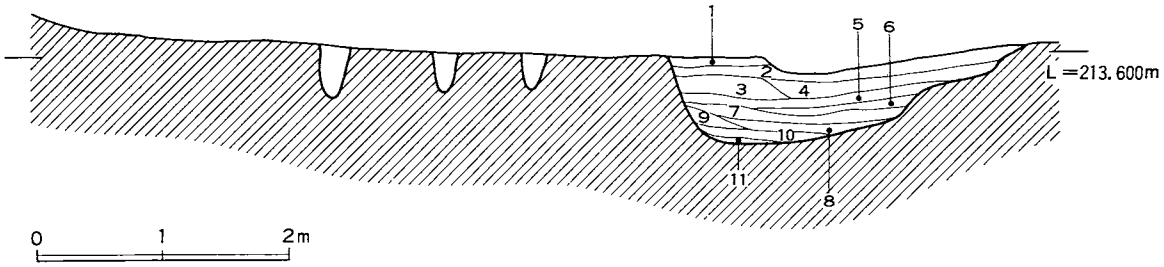
第79表　Ｐ－６土層観察表



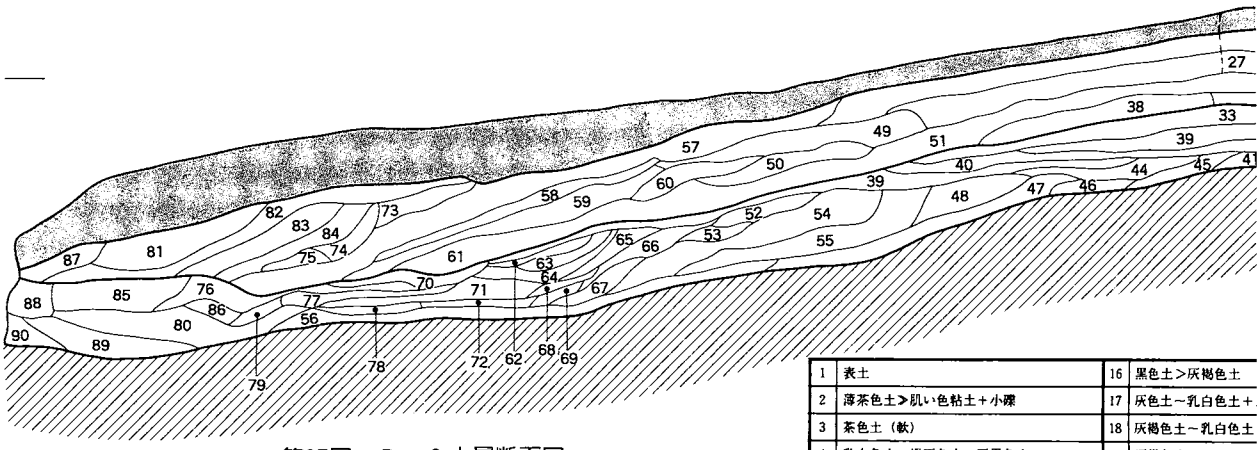

| | | | |
|---|---|---|---|
| 1 | 肌色粘土～薄茶色土（硬） | 22 | 灰色オリーブ土～茶褐色土 |
| 2 | 肌色粘土＞薄茶色土 | 23 | 薄茶色土＞灰色オリーブ土 |
| 3 | 灰色オリーブ土＞肌色粘土 | 24 | 灰色オリーブ土＞薄茶色土 |
| 4 | 肌色粘土～赤褐色鉄分土 | 25 | 灰色オリーブ土～肌色粘土 |
| 5 | 灰白色土～肌色粘土 | 26 | 灰黒色土＞褐色土 |
| 6 | 茶褐色土～肌色粘土 | 27 | 灰色オリーブ土＞肌色粘土（しま模様）＋炭化物 |
| 7 | 薄茶色土～肌色粘土 | 28 | 灰色オリーブ土～薄茶色土（ブロック） |
| 8 | 薄茶色土≧肌色粘土（まだら模様）（硬） | 29 | 肌色粘土～薄茶色土＋小礫 |
| 9 | 肌色粘土＞薄茶色土 | 30 | 灰色オリーブ土＞灰白色土 |
| 10 | 肌色粘土（ブロック）＞薄茶色土 | 31 | 灰色オリーブ土＞肌色粘土＋小礫 |
| 11 | 肌色粘土＞薄茶色土＋灰色オリーブ土 | 32 | 肌色粘土＞薄茶色土（硬）＋小礫 |
| 12 | 灰色オリーブ土＞肌色粘土 | 33 | 肌色粘土＞薄茶色土＋灰黒色土 |
| 13 | 肌色粘土＞灰色オリーブ色 | 34 | 肌色粘土～灰黒色土 |
| 14 | 肌色粘土＞薄茶色土＋赤褐色鉄分土 | 35 | 肌色粘土＞灰白色土 |
| 15 | 灰色土～肌色粘土 | 36 | 褐色土＞灰黒色土 |
| 16 | 肌色粘土＞茶褐色土 | 37 | 茶褐色土 |
| 17 | 茶褐色土＞赤褐色鉄分土 | 38 | 茶褐色土＞灰黒色土 |
| 18 | 灰色オリーブ土＞赤褐色鉄分土＋薄茶色土 | 39 | 灰色オリーブ土＞肌色粘土＋茶褐色土 |
| 19 | 灰白黄色土＞灰色オリーブ土＋薄茶色土 | 40 | 薄チョコレート色土 |
| 20 | 肌色粘土＞灰色オリーブ土 | 41 | 灰褐色土～灰黒色土 |
| 21 | 灰色オリーブ土＞薄茶色土 | 42 | 肌色粘土＞灰黒色土 |



第80表　Ｐ－７土層観察表



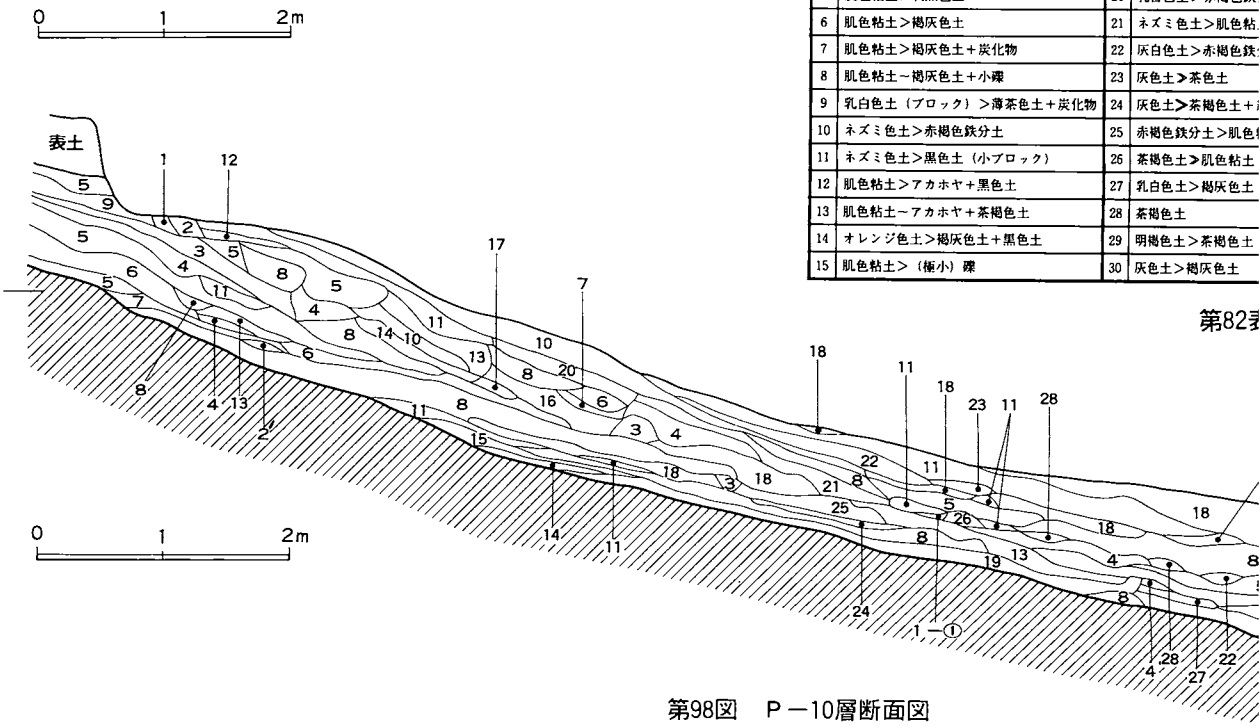

第96図　P－8 土層断面図



第97図　P－9 土層断面図

| | | | |
|---|---|---|---|
| 1 | 表土 | 16 | 黒色土＞灰褐色土 |
| 2 | 薄茶色土≫肌い色粘土＋小礫 | 17 | 灰色土～乳白色土＋ |
| 3 | 茶色土（軟） | 18 | 灰褐色土～乳白色土 |
| 4 | 乳白色土～褐灰色土＋灰黒色土 | 19 | 灰黒色土＞アカホヤ |
| 5 | 肌色粘土＞灰黒色土 | 20 | 乳白色土＞赤褐色鉄 |
| 6 | 肌色粘土＞褐灰色土 | 21 | ネズミ色土＞肌色粘 |
| 7 | 肌色粘土＞褐灰色土＋炭化物 | 22 | 灰白色土＞赤褐色鉄 |
| 8 | 肌色粘土～褐灰色土＋小礫 | 23 | 灰色土≫茶色土 |
| 9 | 乳白色土（ブロック）＞薄茶色土＋炭化物 | 24 | 灰色土≫茶褐色土＋ |
| 10 | ネズミ色土＞赤褐色鉄分土 | 25 | 赤褐色鉄分土＞肌色 |
| 11 | ネズミ色土＞黒色土（小ブロック） | 26 | 茶褐色土≫肌色粘土 |
| 12 | 肌色粘土＞アカホヤ＋黒色土 | 27 | 乳白色土＞褐灰色土 |
| 13 | 肌色粘土～アカホヤ＋茶褐色土 | 28 | 茶褐色土 |
| 14 | オレンジ色土＞褐灰色土＋黒色土 | 29 | 明褐色土＞茶褐色土 |
| 15 | 肌色粘土＞（極小）礫 | 30 | 灰色土＞褐灰色土 |

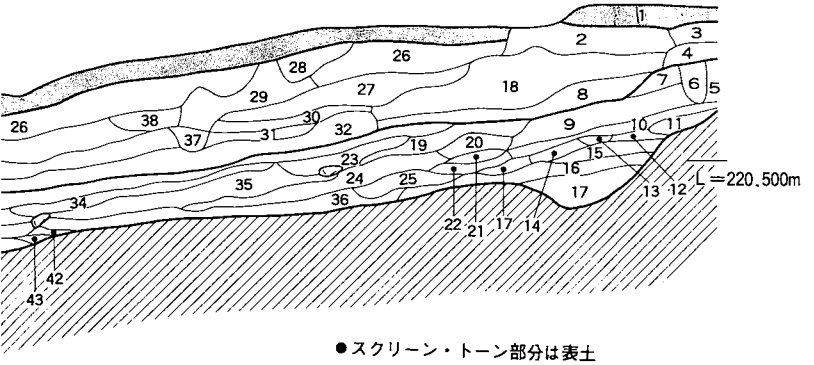
第82表




第98図　P－10層断面図

| | | | |
|---|---|---|---|
| 1 | 灰褐色土＞灰色オリーブ土（硬） | 7 | 灰色オリーブ土＞灰褐色土＋小礫（硬） |
| 2 | 灰褐色土＞灰色オリーブ土＋赤褐色鉄分土 | 8 | 灰色オリーブ土～灰褐色土＋褐色土（まだら） |
| 3 | 灰褐色土～灰色オリーブ土（硬） | 9 | チョコレート色土～灰色オリーブ土＋灰色土（まだら） |
| 4 | 灰色オリーブ土＞灰褐色土 | 10 | チョコレート色土＞灰色土（ブロック） |
| 5 | 灰色オリーブ土＞灰褐色土＋赤褐色鉄分土 | 11 | 灰色オリーブ土＞茶褐色土 |
| 6 | 灰色オリーブ土＞褐色土＋小礫 | | |

第81表　Ｐ－８土層観察表

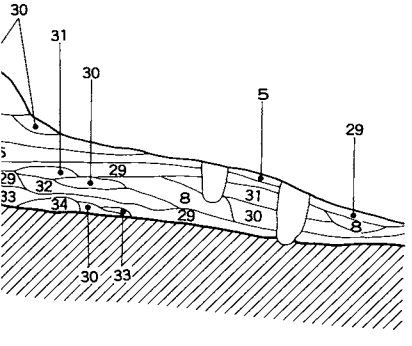



●スクリーン・トーン部分は表土を表わす

| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 31 | 灰色土＞茶褐色土 | 46 | 灰黒色土 | 61 | 褐灰色土～明褐色土 | 76 | ネズミ色土＞赤褐色鉄分土 |
| 炭化物 | 32 | 褐色土＞茶褐色土 | 47 | 灰色土＞灰黒色土 | 62 | ネズミ色土＞赤褐色鉄分土 | 77 | 茶褐色土＞灰色土 |
| ＋炭化物 | 33 | 茶褐色土＞褐色土 | 48 | 薄茶色土～灰色土＋炭化物 | 63 | 灰白色土＞灰褐色土＋赤褐色鉄分土 | 78 | 灰白色土～灰色オリーブ土 |
| ＋赤褐色鉄分土 | 34 | 灰黒色土＞灰色土 | 49 | 乳白色土＞明褐色土 | 64 | 灰白色土＞灰褐色土 | 79 | 茶褐色土＞褐灰色土 |
| 分土 | 35 | 灰色土＞褐色土 | 50 | 灰褐色土＞灰黒色土 | 65 | 褐灰色土＞灰褐色土 | 80 | 灰茶色土＞灰黒色土 |
| 土 | 36 | 明褐色土～茶褐色土 | 51 | 灰褐色土 | 66 | 乳白色土＞灰褐色土 | 81 | 乳白色土＞凝灰岩（ブロック） |
| 分土 | 37 | 薄茶色土＞灰色土＋乳白色土 | 52 | 乳白色土（ブロック）～褐灰色土 | 67 | 灰褐色土＞灰黒色土＋肌色粘土 | 82 | 褐灰色土＞乳白色土＋小礫 |
| | 38 | 灰白色土＞茶色土＋褐色土 | 53 | 乳白色土～灰黒色土 | 68 | ネズミ色土 | 83 | 乳白色土＞褐灰色土 |
| 炭化物 | 39 | 灰色土＞薄茶色土 | 54 | 褐灰色土＞灰黒色土 | 69 | 肌色粘土＞褐灰色土＋茶褐色土 | 84 | 明褐色土～乳白色土 |
| 粘土＋小礫 | 40 | 明褐色土＞灰色土 | 55 | ネズミ色土＞灰黒色土 | 70 | 薄茶色土＞乳白色土 | 85 | 薄茶色土＞灰黒色土 |
| | 41 | 褐灰色土＞茶褐色土 | 56 | 灰色土＞灰白黄色土 | 71 | 茶褐色土＞灰色土 | 86 | 茶褐色土＞灰褐色土 |
| | 42 | 褐色土＞アカホヤ＋茶褐色土 | 57 | 乳白色土＞薄茶色土 | 72 | ネズミ色土＞灰褐色土 | 87 | 乳白色土～灰褐色土＋ネズミ色土 |
| | 43 | 灰黒色土＞灰褐色土 | 58 | 薄茶色土＞乳白色土 | 73 | 乳白色土＞茶褐色土 | 88 | 茶褐色土＞灰黒褐色土 |
| | 44 | 褐灰色土＞灰黒色土 | 59 | 乳白色土（ブロック） | 74 | 褐灰色土＞灰白色土 | 89 | 灰茶色土＞灰色土 |
| | 45 | 灰褐色土＞茶褐色土 | 60 | 褐色土＞薄茶色土 | 75 | 乳白色土～灰色土 | 90 | 褐灰色土＞乳白色土 |

表　Ｐ－９土層観察表

L＝218.500m



| | | | |
|---|---|---|---|
| 1 | 肌色粘土（硬） | 18 | 肌色粘土＞灰色オリーブ土 |
| 1－① | 肌色粘土（ブロック） | 19 | 灰青黒砂土 |
| 2 | 肌色粘土～小礫 | 20 | 肌色粘土＞アカホヤ＋灰色オリーブ土 |
| 3 | 灰色オリーブ土～肌色粘土＋茶色粘土 | 21 | 肌色粘土＞灰色オリーブ土＋小礫 |
| 4 | 肌色粘土＞灰色オリーブ土 | 22 | 明褐色粘土～小礫 |
| 5 | 灰色オリーブ土＞肌色粘土 | 23 | 灰色オリーブ土～灰色砂土 |
| 6 | 灰色オリーブ土＞肌色粘土＋灰黒色土 | 24 | 肌色粘土＞灰色オリーブ土＋灰白色粘土 |
| 7 | 灰白色粘土＞赤褐色鉄分土 | 25 | 灰色オリーブ土～肌色粘土＋赤褐色鉄分土 |
| 8 | 灰色オリーブ土～肌色粘土 | 26 | 灰白色粘土＞肌色粘土＋赤褐色鉄分土 |
| 9 | 肌色粘土＞アカホヤ | 27 | 肌色粘土＞小礫 |
| 10 | 肌色粘土＞灰色オリーブ土＋灰褐色土 | 28 | 灰色オリーブ土 |
| 11 | 肌色粘土＞灰色オリーブ土＋小礫 | 29 | 灰色オリーブ土＞肌色粘土＋灰色砂土 |
| 12 | ネズミ色土～灰色オリーブ土 | 30 | 灰白色粘土＞灰色オリーブ土 |
| 13 | 肌色粘土＞灰色オリーブ土＋茶色粘土 | 31 | 灰白色粘土～肌色粘土 |
| 14 | 肌色粘土＞ネズミ色砂土 | 32 | 肌色粘土＞灰色オリーブ土＋炭化物 |
| 15 | 肌色粘土～薄茶色土＋凝灰岩（小礫） | 33 | （黒）灰色オリーブ土 |
| 16 | 灰色オリーブ土＞肌色粘土＋小礫 | 34 | チョコレート色土～肌色粘土 |
| 17 | 肌色粘土～凝灰岩（ブロック） | | |



第83表　Ｐ－10土層観察表

# 第Ⅳ章　出　土　遺　物

## 第１節　第Ⅰ期整地層出土の遺物

１～43は青磁である。１は碗で、復元口径15.7cm・器高6.9cm・復元底径5.2cmを測る。内器面の口縁直下に２条の界線と、中位に幾何学文様があり、釉色はくすんだ感じの灰緑色を呈する。

２は皿で、底部は肥厚し（厚さ1.4cm）、底径4.8cmを測る。内底面に幾何学模様があり、釉色は灰緑色であるが、外底面は無釉で、露胎部分は薄茶色の色調を呈する。胎土は極めて精良で、上質の青磁である。

３は碗の一部で、内器面の口縁直下に界線状の沈線（３条）と、中位に曲線文様があり、外器面には極薄い右上がりの斜線（櫛描文と思われる）が平列する。釉色はくすんだ感じの灰緑色である。体部は薄壁で口縁直口を呈する。

４は碗の一部で、残存体部は肥厚し、厚さ0.9cmを測る。灰オリーブ色の釉がかかり、内器面に４条の斜線と１条の横線がある。外器面には、大きな貫入が走る。

５は碗の底部で、底径6.0cmを測る。底部は肥厚し、中央部で最大の厚さ1.4cmとなる。高台は0.3～0.4cmで低く、畳付きは扁平である。内底面に曲線の幾何学文様があり、体部との境には、界線状の沈線が巡る。釉色はオリーブ灰色で、高台の外側まで施釉されている。非常に上質な青磁である。

６は碗で、復元口径15.7cmを測る。体部は直線的に伸び、口縁でわずかに外弯する。内器面の上位に界線が巡り、中途から下位にかけて花弁文様が描かれている。釉色は内器面がやや明るい灰緑色で、外器面は口縁直下の白灰色を除いて、灰緑色を呈する。体部は薄壁である。

７は皿で、底部は肥厚する（厚さ1.4cm）。内底面に花弁状の文様があり、釉色はくすんだ感じのオリーブ灰色であるが、外底面の大部分は露胎となる。

８は高台を欠き底部のみの残存である。内器面に、魚が陽刻されている。釉色は内器面が青白色、外器面が白青色を呈する。

９～28・37・38は、24を除き、外器面に削り出しによる花弁文様（蓮弁文様の一部）が描かれている。その中で特に削り出しの度合が強いものは12・13・18・21・23で、これらは鮮明な花弁文様を呈すると伴に、19・21・23については、花弁の中央を下る縦線が稜線気味となり、花弁全体が、より立体感を帯びる。花弁の形状については、先端部が、やや丸味を帯びるもの〔10・20・21〕、幅広のもの〔27〕、鋭角のもの〔12・19・23〕とに分類される。釉色は、９・13・14・22・25・26・37がオリーブ灰色、10・12・18・19が薄灰緑色、11・17が薄緑青色、15・20・21・38が緑白灰色、16がオリーブ灰白色、23が緑灰青色、27が緑青色、28がオリーブ黄灰

色を呈する。この中で、11は口縁が直口気味で、17は復元口径16.5cmの碗である。12・20は胎土が完全に磁器化しておらず、25は残存体部が薄壁（厚さ3㎜）である。27は復元底径4.5cmの碗で、外器面は蓮弁文様に加えて、上位に3条の沈線が巡り、内器面には幾何学文様が器面全体に描かれている。28・37の内外器面には大きな貫入が走り、37の釉中には細かなトチが混じる。なお、24は外器面に2本の稜線があり、内器面には釉溜まりと浅い沈線による鋭角三角形が形造られている。釉色は灰白緑色である。

29～36・39～44は無文である。釉色は29が灰緑色、30が緑灰青色、31が緑黄色、32がオリーブ灰色、33・39が白灰緑色、34・41が薄緑青色、35が青白緑色、36が薄黄緑色、40が淡灰緑色、42が緑青色、43薄青白緑色を呈する。この中で、29・33・43は内底面と体部の境が界線状の沈線となり、31・32・35は外器面の口縁下に稜線や沈線状のものが巡る。

33は碗の底部で、底径5.0cmを測る。極めて上質な青磁で、高台は低く中央部の高さは2㎜足らずである。畳付きは扁平で幅6～8㎜と幅広である。

34・35・36はいずれも碗で、復元口径は34が13.6cm、35が12.0cm、36は12.7cmを測る。34・36・39・41は、口唇部に使用痕が目立ち、釉の剝落が目立つ。29の外器面と、31・35～37・42の内外器面には貫入が走る。

40は碗の底部で復元底径6.3cmを測り、底部は肥厚（厚さ1.7cm）する。高台の高さは0.5cm弱である。高台の外側まで全面に施釉されているが、高台内の外底面は周縁のみに限定される。

39・41・43は残存体部が口縁近くで外弯しており、42はその傾向が著しい。器壁は42が特に薄壁（2㎜弱）で、口唇部は扁平（幅1㎜弱）に近い。

43は碗の底部で、復元底径5.0cm、高台の高さは5～6㎜を測る。

44～64・67は白磁である。45～52は非常に上質の白磁で、体部は概して肉太（厚さ1.0cm）である。外器面には曲線と横線文様の沈線が描かれている。内器面は、いずれも押さえの加わった強い横ナデ調整が行われている。釉色は、45・46・50が白灰色で、48・49・51が白灰（黄）色、46は外器面が白褐色、内器面は灰白色、52は外器面が白灰色、内器面が灰白色を呈する。この中で47・52の内器面と、49の内外器面に細かな貫入が走る。

53は口縁が玉縁状を呈する（やや簡略化）碗で、復元口径14.6cmを測る。体部は、やや内弯気味に大きく開き、内外器面に薄い横線（沈線）が巡る。釉色は白（黄）色である。

44・54・56は口禿げ白磁である。54は口縁が薄壁（厚さ2.5㎜）で、釉色は淡白緑色である。56の口縁は内器面が半月状に漸次、薄くなる。口唇部は扁平で幅0.1cmを測り、釉色は白（黄）色である。

55は口縁でやや外弯し、体部は薄壁（厚さ2.5㎜）である。器面は非常に汚れており、本来の釉色は不明である。

57・58は、外器面に針の穴程の気泡痕が散在する。58の釉色は白灰（黄）色である。

59は小壺の類と思われる。復元の残存胴部最大径は16.5cmを測るが、器面は55と同様に非常に汚れている。

60・61・63は平底の小皿である。60・63は内底面と体部の境に界線状の沈線が巡る。61は外底面と体部の境が鮮明な稜線となっている。63は底径5.7cmを測る。60の釉色は白灰黄色であるが、外底面の施釉にムラがある。61は灰白色で光沢があるが、外底面は露胎である。63は灰白（黄）色で、外底面まで施釉されているが、重ね焼きにより、外底面の釉が板目圧痕状に一部、薄くなっている。64は高台付きの小皿である。極めて上質のもので復元底径3.2cmを測る。

62・67は碗の底部で、復元底径は62が9.8cmを測る。外底面は肥厚し（厚さ2.0～2.2cm）、端部は削り取られて尻上がりとなる。畳付きは扁平（幅７～９㎜）で、器面には右斜めに下る刻み目が並ぶ。62は内底面と体部の境に界線状の白色稜線が巡る。釉色は白灰色である。

65は陶器で胴部につまみが付く。釉色は黒茶色である。

66・69・70は瀬戸である。釉色は66が緑色で、69は黄緑色、70は外器面が白褐色、内器面は白灰色である。66は内器面にヘラ状工具による横ナデ調整が行われている。69は外器面に４条の横線（沈線）が巡る。71は外器面に横ナデ調整により、肉太の稜線が生じている。

68は中世雑器で、外器面に小豆色と濃緑色の縦縞文様が交互に入る。胎土は非常に粗く、焼成不良である。器面にはトチが付着している。

71・72は天目碗の破片である。73は須恵系土器で、多少いびつな器形である。内器面に多くの不純物が付着する。74は陶器で、復元底径3.8cmを測る。体部は薄壁（厚さ２～３㎜）で、外底は平底である。外底面に糸切り痕が残る。胎土の色調は茶色である。

75～89は扁平な小石で、形状からして、オハジキに利用したものと思われる。全部で15個出土しているが、75が幅1.3×1.0cm・厚さ0.25cm・重さ0.58ｇで最小であり、89が幅1.9×1.6cm・厚さ0.6cm・重さ2.95ｇで最大値を示した。総数の平均値は幅1.57×1.34cm・厚さ1.50cm・重さ1.52ｇである。小石の調整は、周縁を若干研磨したものが大半〔73～81・85～89〕であったが、中には全面に丁寧な研磨が行われているもの〔76〕と、雑な研磨で器面の凹凸をそろえる程度のもの〔84〕とがあった。色調は大方が暗灰色であったが、83は灰褐色、84は灰黒褐色、85は緑白色、87は灰白黒色、86・88は暗灰色、89は黒色であった。

90～113は土師器である。この中で底径の大きさから、4.7～6.1cmで小型のもの〔92・93・102・107・112〕と、7.2～8.5cmで中型のもの〔90・96・98・100〕、9.0～10.8cmで大型のもの〔91・94・95・101〕とに大別されるが、いずれも破損品で形状等の把握に困難を極める。

小型のものは、92の様に体部が直線的に伸びて、ラッパ状に開くタイプと思われる。92は口径7.9cm・器高1.7cm・底径5.1cmを測る。102・107は糸切り痕が観察出来ない。この場合、器面がやや風化しているため、これがヘラ切りによるものか、糸切り痕が後のナデで消されたものかは判断できない。

中型のものは船型タイプと思われる。外底面にいずれも糸切り痕を残し、90は復元口径12.5cm・器高4.7cm・底径7.6cmを測る。体部は肉太で、やや内弯気味に伸びる。90・100は糸切り後、ナデが加えられている。

大型のものは船型のタイプで、体部は大きく外側へ開く。この中で91は外底が上げ底である。95はやや焼き締めの効いた土器で、質量感がある。図示した4点はいずれも外底面に糸切り痕を残すが、95は糸切り後、軽い指押えが加えられている。

その他の破片については、97・102で、外底面に糸切り痕が観察出来ない。110は糸切り後、ナデが加えられている事が明らかである。105は二次焼成のため胎土の色調が灰白黒色に変色している。

114から137までは擂鉢である。器質は大方のものが瓦質であるが、118は土師系の中世雑器で、137は備前焼きが利用されている。条線の一単位が判明するものは114が10本、118が9本、127が10本、129が6本、131が7本、135が12本である。体部は中途から口縁にかけて漸次、肥厚するもの〔114・115・116・121・136・137〕と、下位から同一の厚さで口縁に至るもの〔117〕がある。同じく体部に関して、内弯気味に伸びるもの〔115・116・117・118〕と、直線的に伸びるもの〔120・126・128・134〕とがあり、口唇部は扁平のもの〔114・117・124・125・137〕と、窪むもの〔116・121・126・136〕と、直口気味なもの〔120〕とに大別される。さらに118・122は体部が肉太で、厚さ1.6～1.8cmを測る。器面の調整は、内器面で刷け目調整のものが多いが、調整方向は、横及び斜め方向のもの〔114・119・120〕と、斜め方向のもの〔116・118・124・125・126・129・136〕、横方向のもの〔115・131・133・135〕、縦方向のもの〔127〕とがある。いずれも条線を掻く前の調整である。この中で131は、器面に残る条線の形状から掻き目に使用した工具は先端が四角形を呈するものである事がわかる。130・134は器面が軟質で、胎土が手に付着する。121は復元口径27.6cm、135は復元底径11.6cmを測る。

138から145までは須恵器である。外器面の調整は138が横ナデ、139が丁寧なナデ、他は、格子目叩き〔140・141・144〕と波状の叩き〔142・143〕が施されている。139は内器面の一部にススが付着する。

146・147・156～159・162は常滑である。口縁部は貼り付けで、内器面の接合箇所は沈線を呈する〔146・147・158〕。器面の調整は、いずれも刷け状工具が用いられており、横及び斜め方向のナデが施されている。158は肩部（外器面）に窯印が残る。

148～155・161・163は備前である。口縁肥厚部は、粘土帯を外側へ折り返して作られている〔149～153〕が、149については、折り返しの度合が非常に強く、口縁肥厚部の外器面に2条の沈線が巡る。内外器面の調整は、横ナデが施されている。153の肩部（外器面）は粗いナデで、鮮明な指押え痕が残っている。154は外底面に不整方向の刷け目がある。161は外底端が大きく肥厚し、厚さ2.8cmを測る。内器面は金属製と思われる工具で非常に粗い削りが施されている。

163は外底が上げ底で、土器の成形は巻き上げ技法ではなく、粘土紐、又は粘土帯の積み上げによるものと思われる。外器面の調整は斜め方向の刷け目が施されている。

164は滑石製石鍋である。体部は肉太で厚さ1.3～1.5cmを測り、外器面に1条の突帯を削り出している。内器面の上位に斜め方向へ削った痕があり、中位は斜め及び横方向に削られている。破損後に再利用されたのか、石鍋の断面に、外器面から内器面側に向けて、縦方向に削った痕が残る。

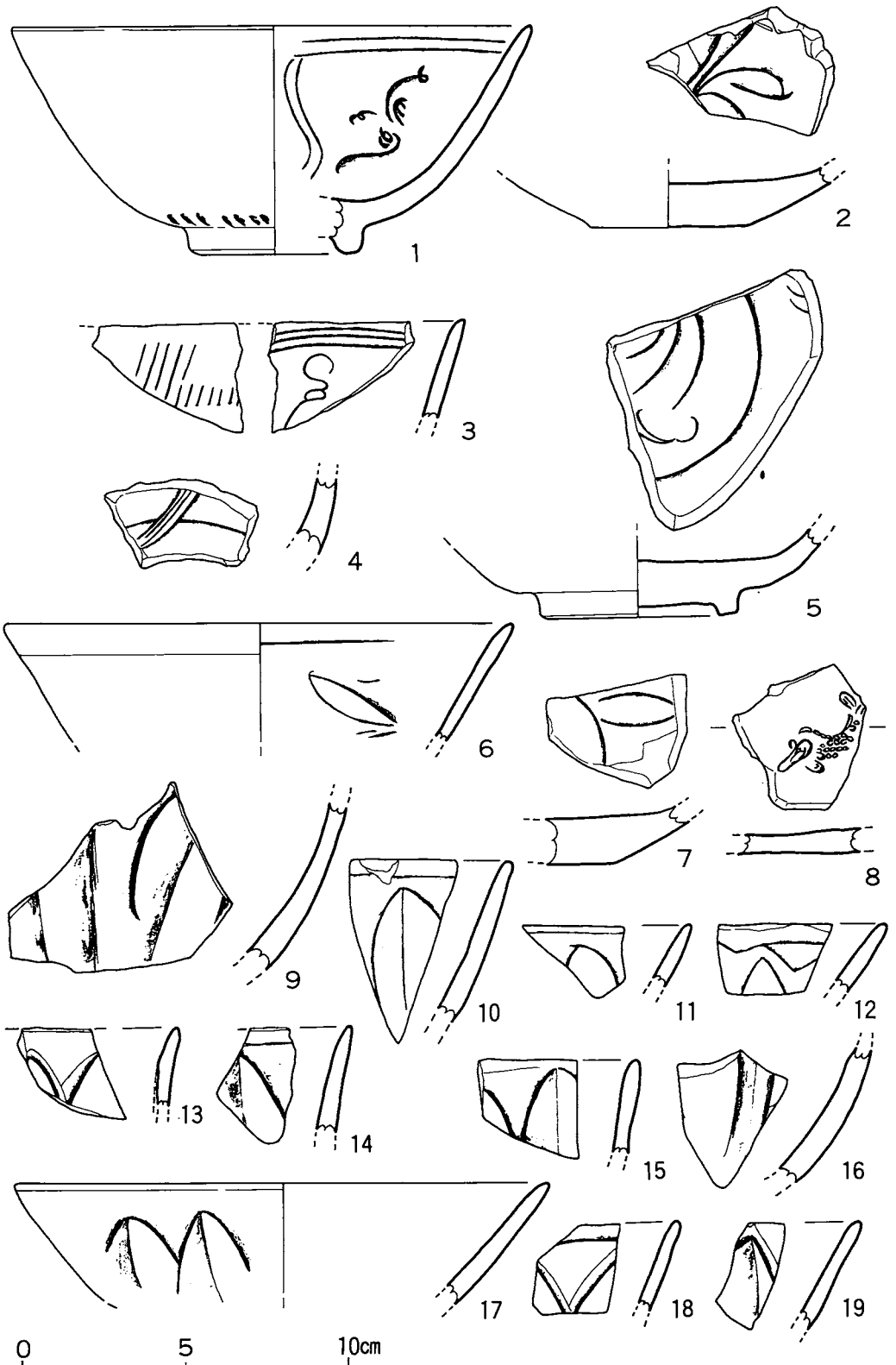
165は常滑で復元口径43.0cmを測る。器面の調整は外器面が横ナデで、内器面は成形時の指押え痕を残すが、それを消す様に横ナデが加えられている。166は備前で、復元底径33.0cmを測る。外底は中央部より端部にかけて尻上がりとなる。内外器面及び外底面は刷け状工具によるナデが施されている。内底面は未調整である。167は常滑で、復元口径46.4cmを測る。内外器面は横ナデが施されているが、内器面は、後に指押えが加えられている。

168は土師系土器である。外器面の一部に縦方向の刷け目と、内器面にヘラ状工具による粗い調整が施されている。

169～171は滑石製石鍋を転用した垂製品である。一定の粗い整形を行った後に、上下両面から突を穿ち、研磨によって仕上げされている。

172～174・176～187は砥石である。石材は粘板岩製が、172・176～178・180～182・184で、天草砥石は173・174・179・183・185・186、砂岩製は187である。使用法は、186が固定して用いられたと思われ、172～174・176・179・180・183は手に持って使用されたものと思われる。器面の使用については、片面使用が178・181・182・186で、2面使用が172・176・184・187、3面使用が173・174・179、4面使用が177・180・183・185である。この中で、181・182は石質が硬度であるため、器面は凹とならず丸味を帯びた形状となっている。176の下面は、欠損後も再利用され、刀の先端部を研いだものと思われる。185は器面に細かな面取りが、いくつも見える。磨き出しが行われた結果と考えられる。186は上面に刃止まりが見える事から、物は砥石に対して斜め方向に磨かれていたと推察される。187は刃幅の広いものを研いだものであろう。

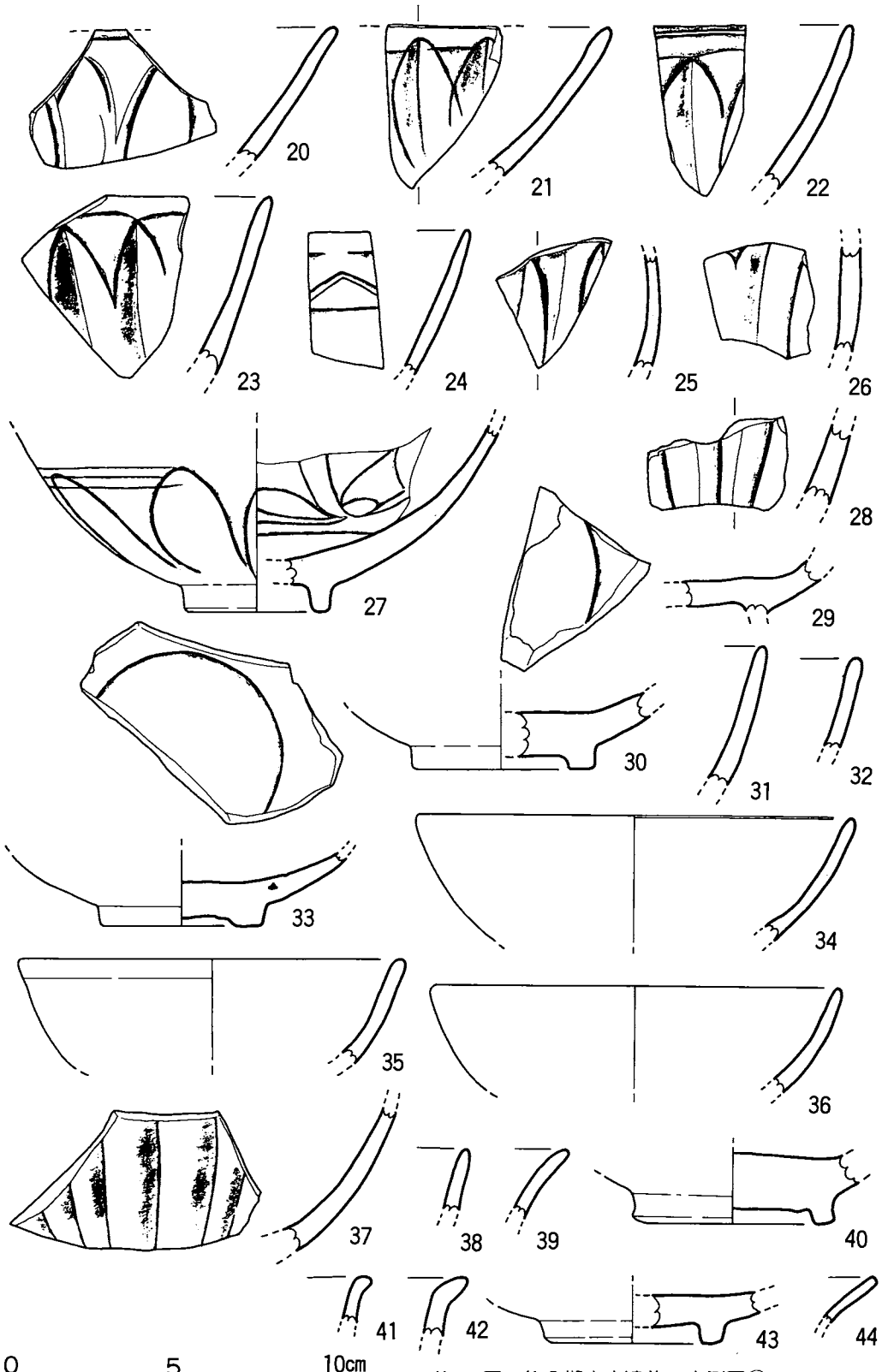
188～215は鉄器である。大方のものは（角）釘であるが、202は小刀で213・215は楔の可能性がある。




第99図　第Ⅰ期出土遺物の実測図①

| NO. | 形態の特徴 | 手法・調整・文様 | 備考 |
|---|---|---|---|
| 1<br>青磁碗 | 復元口径 15.7cm<br>器高 6.9cm<br>復元底径 5.2cm<br>口縁は直口気味。<br>体部は、やや内弯気味に伸びる。<br>高台の畳付きは、端部が削り取られて尻上がりとなる。 | 内器面：口縁直下に2条の界線。<br>総曲線の幾何学文様。<br>丁寧な調整で、器面は滑らか。<br>外器面：最下部に短斜線が並列。 | 釉色：くすんだ感じの灰緑色。<br>高台の内側まで施釉。<br>胎土：精良で灰白色。高台のみ白黄色を呈する。 |
| 2<br>青磁皿 | 底部は肥厚（厚さ 1.4cm）。<br>外底面は中央部から端部にかけて、ごくわずかに上げ底気味となる。<br>底径 4.8cm | 外底面と体部の境に鮮明な稜線。<br>内外器面：細かな稜線が入る。<br>内底面：幾何学文様。 | 釉色：灰緑色。<br>外底面は無釉（色調は薄茶色）。<br>胎土は極めて精良。 |
| 3<br>青磁 | 体部は直線的に伸びる。 | 内器面：口縁直下に、界線状の沈線（3条）。<br>中位に曲線文様。<br>外器面：ごく薄い右上がりの斜線が平列。 | 釉色：非常にくすんだ感じの灰緑色。 |
| 4<br>青磁 | 体部は肥厚（厚さ 0.9cm）。 | 内器面：4条の斜線と1条の横線。 | 釉色：灰オリーブ色。<br>外器面に大きな貫入、内器面には少しの貫入。 |
| 5<br>青磁 | 底部は肥厚（中央部で最大、厚さ 1.4cm）。<br>底径 6.0cm<br>高台の畳付きは扁平（幅 0.6cm）。<br>高台高 0.3～0.4cm | 外器面：稜線。<br>内底面：見込みに幾何学文様。<br>内底面と体部の境に、界線状の沈線（釉溜まりとなっている）。 | 釉色：オリーブ灰色。<br>体部から高台の外側まで、全面に施釉<br>高台の畳付きから外底面にかけて、部分的に施釉。<br>胎土は極めて精良。<br>非常に上質な青磁。 |
| 6<br>青磁 | 体部は、直線的に伸び口縁でわずかに外弯。<br>復元口径 15.7cm | 内器面：上位には界線が巡り、中途から下位にかけて花弁文様（文様部分は釉溜りとなっている）。 | 釉色：内器面はやや明るい灰緑色。<br>外器面の口縁直下は、幅 0.9cmで白灰色、それより下位は灰緑色。 |
| 7<br>青磁皿 | 底部は肥厚（厚さ 1.4cm）。<br>外底は平底。 | 外底面と体部の境に、鮮明な稜線。<br>内底面：花弁文様。 | 釉色：くすんだ感じのオリーブ灰色。<br>外底は周縁部にわずかな釉がかかるのみで、大部分は露胎（色調は褐灰色）<br>内外器面に貫入。 |
| 8<br>青磁 | 底部（高台を欠く）。 | 内器面：魚を陽刻。<br>外底面：極めて丁寧なナデ。 | 釉色：内器面は青白色。<br>外器面は白青色。 |
| 9<br>青磁 | ―――― | 外器面：削り出しによる薄い蓮弁文様。 | 釉色：オリーブ灰色。 |
| 10<br>青磁 | 体部は、やや肥厚し（厚さ0.6cm）、わずかに内弯気味に伸びる。 | 外器面：削り出しによる薄い花弁文様（蓮弁文様の一部）。<br>花弁の先端は、やや丸味を帯びる。 | 釉色：薄灰緑色。 |
| 11<br>青磁 | 口縁は直口気味。 | 外器面：削り出しによるごく薄い花弁文様（蓮弁文様の一部）。 | 釉色：薄緑青色で光沢あり。 |
| 12<br>青磁 | ―――― | 外器面：上位に削り出しによる鮮明な花弁文様（蓮弁文様の一部で、花弁の先端は鋭角）。 | 釉色：くすんだ感じの薄緑灰色。<br>胎土は完全に磁器化していない。<br>器面に、かなりの使用痕が残る。<br>内外器面に、針穴程の気泡痕が点在する。 |
| 13<br>青磁 | 体部は、口縁でわずかに外弯。 | 外器面：削り出しによる蓮弁文様。 | 釉色：オリーブ灰色。 |

第84表　第Ⅰ期出土遺物の観察表①




第100図　第Ⅰ期出土遺物の実測図②

| NO. | 形態の特徴 | 手法・調整・文様 | 備考 |
|---|---|---|---|
| 14<br>青磁 | ―――― | 外器面：削り出しによる薄い花弁文様（蓮弁文様の一部）。 | 釉色：オリーブ色。 |
| 15<br>青磁 | ―――― | 外器面：削り出しによる薄い蓮弁文様。 | 釉色：緑白灰色。 |
| 16<br>青磁 | ―――― | 内器面：丁寧なナデで、滑らかな器面。<br>外器面：削り出しによる蓮弁文様の下位部分が残る。 | 釉色：オリーブ灰白色。 |
| 17<br>青磁 | 体部は直線的に大きく開く。<br>復元口径　16.5cm | 外器面：削り出しによる薄い蓮弁文様。 | 釉色：薄青緑色。<br>使用痕の為、全体的にくすんでいる。 |
| 18<br>青磁 | 体部は直線的に伸びる。 | 外器面：削り出しによる鮮明な蓮弁文様。（文様部分は釉溜まりとなっている）。 | 釉色：薄灰緑色。 |
| 19<br>青磁 | 体部は直線的に伸びる。 | 外器面：削り出しによる花弁文様（蓮弁文様の一部）。花弁の中央を下る縦線は、鮮明な稜線となる。花弁の先端は、やや鋭角。 | 釉色：薄灰緑色、全体的にくすんだ感じ。 |
| 20<br>青磁 | 体部は直線的に伸びる。 | 外器面：削り出しによる蓮弁文様。花弁の先端は丸味を帯びる。 | 釉色：緑白灰色であるが、器面全体に白黄色の不純物が付着。<br>胎土は完全に磁器化していない。 |
| 21<br>青磁 | 体部は、やや内弯気味に伸びる。<br>口縁は、わずかに肥厚。 | 外器面：削り出しによる蓮弁文様。花弁の中央を下る縦線は鮮明な稜線となる。<br>花弁の先端は丸みを帯びる。 | 釉色：淡い緑灰白色。 |
| 22<br>青磁 | 体部は、やや内弯。<br>口縁は、わずかに玉縁状を呈する。 | 外器面：削り出しによる薄い蓮弁文様。花弁の中央を下る縦線はやや、稜線気味となる。 | 釉色：オリーブ灰色。 |
| 23<br>青磁 | 体部は直線的に伸びる。<br>口縁は、ごくわずかに外弯。 | 外器面：削り出しによる鮮明な蓮弁文様、花弁の先端は鋭角、花弁の中央を下る縦線は稜線を呈する。 | 釉色：緑灰青色。<br>外器面はやや光沢あり。<br>上質な青磁。 |
| 24<br>青磁 | 体部は直線的に伸びる。 | 内器面：上位から中途にかけて釉溜りと、浅い沈線により鋭角三角形が形造られている。<br>外器面：上位から中途にかけて２本の稜線。 | 釉色：灰白緑色。 |
| 25<br>青磁 | 体部は薄壁（厚さ 0.3cm）。 | 外器面：削り出しによる蓮弁文様の下部が残る。花弁の中央を下る縦線はやや稜線を呈する。 | 釉色：くすんだ感じの灰オリーブ色。<br>内外器面とも釉の剝落が目立つ。<br>やや焼成不良。 |
| 26<br>青磁 | ―――― | 外器面：削り出しによる蓮弁文様の下位部分が残る。 | 釉色：くすんだ感じのオリーブ灰色。<br>非常に上質な青磁。 |
| 27<br>青磁 | 復元底径　4.5cm<br>体部は、大きく開きながら若干、内弯する。<br>高台の畳付きは、両端が削り取られている。 | 内器面：幾何学文様。<br>外器面：削り出しによるやや弱い蓮弁文様。花弁は、やや幅広い（幅 2.7cm）。上位を３条の沈線が巡る。 | 釉色：緑青色。<br>高台の両端部のみ露胎（露胎部は茶色を呈する）。 |
| 28<br>青磁 | ―――― | 外器面：削り出しによるやや弱い蓮弁文様の下位部分が残る。花弁の中央を下る縦線は、弱い稜線（白色化）となる。 | 釉色：オリーブ黄灰色。<br>内外器面に大きな貫入。 |

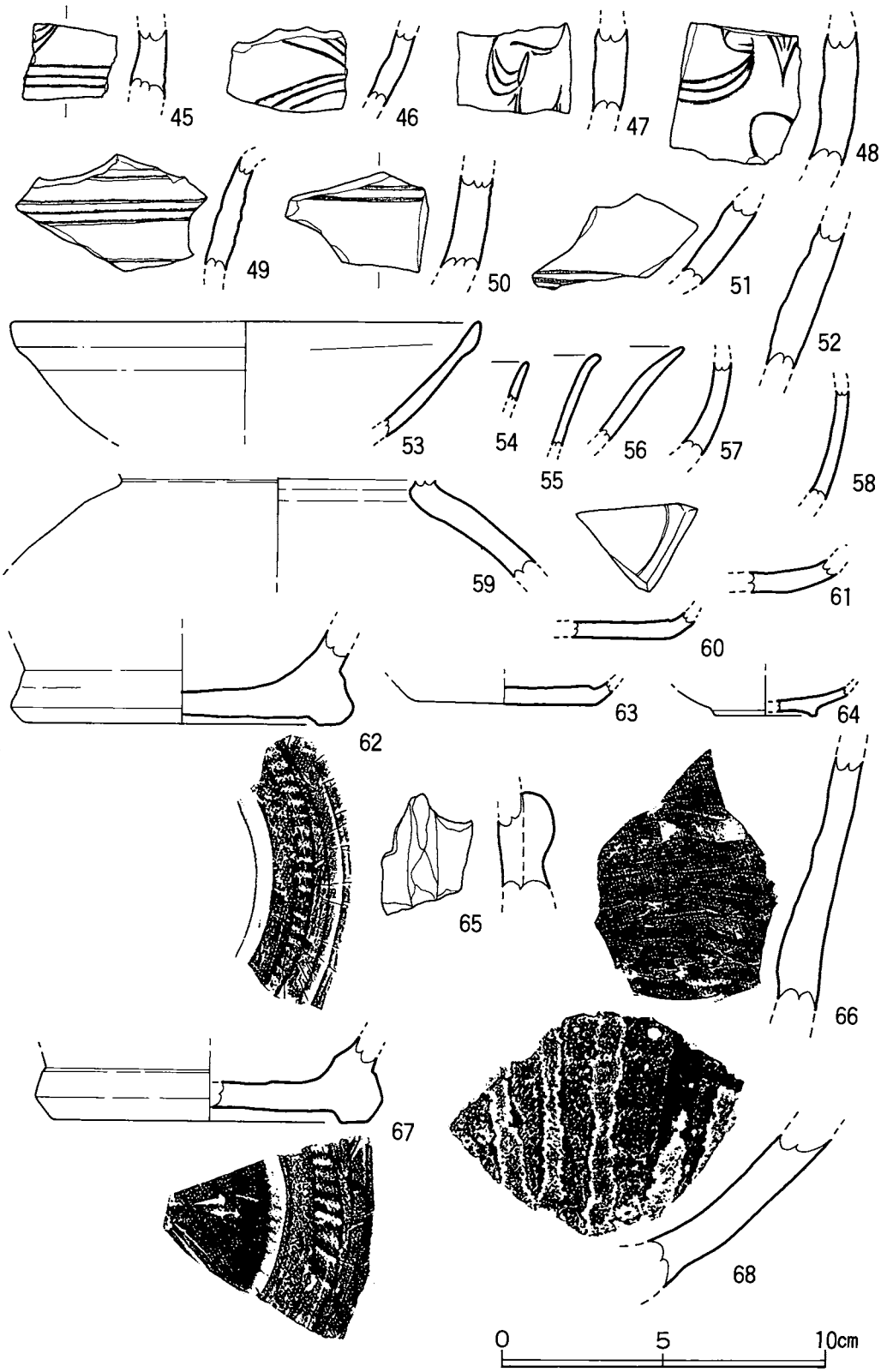
第85表　第Ⅰ期出土遺物の観察表②

| NO. | 形態の特徴 | 手法・調整・文様 | 備考 |
|---|---|---|---|
| 29<br>青磁 | ―――― | 内底面と体部の境に界線状の沈線。 | 釉色：灰緑色。<br>内底面はくすんだ感じ。<br>外器面に大きな貫入。 |
| 30<br>青磁 | 底部は肉太（厚さ 1.4cm）。<br>高台：高さは 0.4cm、畳付きは扁平で幅 0.6cm。<br>内底面の中央に、棒でつついた様な円形状の窪み（直径 0.6cm、色調は灰褐色）。 | 内底面と体部の境に界線状の薄い沈線。 | 釉色：緑灰青色。<br>高台の畳付きから、外底面にかけて露胎。<br>高台の外側は不完全な施釉。<br>上質の青磁。 |
| 31<br>青磁 | 体部は、わずかに内弯。 | 外器面：口縁直下に横線。 | 釉色：明るい感じの緑黄色。<br>胎土は極めて精良。<br>内外器面に、ヒビ割れかと思われる様な大きい貫入。 |
| 32<br>青磁 | ―――― | 外器面：口縁下に薄い沈線。 | 釉色：オリーブ灰色。 |
| 33<br>青磁 | 高台：中央部の高さ 0.2cm、畳付きは扁平（幅 0.6～0.8cm）、端部は一部が削り取られ、尻上がりとなる。<br>体部は漸次、薄壁となる。<br>底径 5.0cm | 内底面と体部の境に界線状の鮮明な沈線。 | 釉色：白灰緑色、光沢がある。<br>高台の外縁から外底面にかけて露胎。<br>極めて上質な青磁。 |
| 34<br>青磁 | 体部は、やや内弯。<br>復元口径 13.6cm | ―――― | 釉色：薄緑青色。内外器面の下位は、いささか色あせて、灰オリーブ色めく。<br>口縁は、内側において使用痕が目立つ<br>器面は、わずかながら凹凸の感あり。<br>外器面の下位に小さな切裂がある。<br>外器面に大きな貫入、内器面には細かな貫入。 |
| 35<br>青磁 | 体部は、やや内弯。<br>復元口径 12.0cm | 内器面：丁寧なナデで、滑らかな器面。<br>外器面：口縁下はやや窪み、境目は白色の稜線を呈する。<br>横ナデによるごく弱い稜線。 | 釉色：青白緑色。 |
| 36<br>青磁 | 体部は、やや内弯。口縁直下で、わずかに窪む。<br>復元口径 12.7cm | ―――― | 釉色：全体的にくすんだ感じの薄黄緑色。<br>口唇部は使用痕が目立つ。<br>内外器面に細かな貫入。 |
| 37<br>青磁 | ―――― | 外器面：削り出しによる蓮弁文様。花弁の中央を下る縦線は弱い稜線となる。 | 釉色：くすんだ感じのオリーブ灰色。<br>内外器面に大きな貫入、釉中に細かなトチが混じる。 |
| 38<br>青磁 | ―――― | 外器面：図化していないが、蓮弁文様のごく一部が残る。 | 釉色：緑白灰色。<br>外器面から口唇部にかけて、白黄色の付着物。 |
| 39<br>青磁 | 口縁は比較的、大きく外弯。 | 内器面：薄い斜線。 | 釉色：薄白灰緑色。<br>口唇部に使用痕が目立つ。 |
| 40<br>青磁 | 底部は肥厚（厚さ 1.7cm）。<br>高台は低く（高さ 0.5cm弱）、畳付きの端部は削り取られて尻上がりとなる。復元底径 6.3cm | ―――― | 釉色：くすんだ感じの淡灰緑色。<br>内底面には、黄灰色の釉がひろがる。<br>高台の外側まで全面に施釉。<br>高台内の外底面は周縁のみ施釉。 |
| 41<br>青磁 | 口縁の外面は大きく外弯。 | ―――― | 釉色：薄緑青色。<br>口唇部に使用痕が目立つ。 |

第86表　第Ⅰ期出土遺物の観察表③

| NO. | 形態の特徴 | 手法・調整・文様 | 備考 |
|---|---|---|---|
| 42<br>青磁 | 口縁は、大きく外弯。 | ―――――― | 釉色：緑青色。<br>内外器面は貫入に加えて、灰褐色の不純物が付着。 |
| 43<br>青磁 | 復元底径　5.0cm<br>高台の高さ 0.5～0.6cm | 内底面と体部の境に、ごく薄い界線状の沈線。 | 釉色：薄青白緑色。<br>高台は外側まで施釉。<br>畳付きは部分的に釉がかかる。<br>外側と畳付きの釉に、薄茶褐色状のものが混じる。 |
| 44<br>白磁 | 体部は薄壁（厚さ0.25cm）で、やや外弯。<br>口縁の内側（幅0.2cm）と、外側（幅0.2cm）と口唇部（扁平で幅0.2cm）は露胎。口禿げ白磁。 | ―――――― | 釉色：淡白緑色<br>若干、細粒の黒点が混じる。 |
| 45<br>白磁 | 体部は肉太（厚さ 1.0cm）。 | 内器面：弱い横ナデ。<br>外器面：３条の横線と曲線文様の沈線。 | 釉色：白灰色。 |
| 46<br>白磁 | ―――――― | 内器面：強い横ナデで、押えが加わる。<br>外器面：曲線文様の沈線。 | 釉色：白灰色。 |
| 47<br>白磁 | ―――――― | 内器面：横ナデ。<br>外器面：沈線の曲線文様。 | 釉色：外器面は白褐色、内器面は灰白色で、細かな貫入。 |
| 48<br>白磁 | ―――――― | 内器面：強い横ナデで、押えが加わる。<br>外器面：沈線の曲線文様。 | 釉色：白灰（黄）色。 |
| 49<br>白磁 | 体部は肉太（厚さ 1.0cm）。 | 内器面：強い横ナデで、押えが加わる。<br>外器面：薄い稜線が重なる。 | 釉色：外器面は白灰（黄）色。<br>内器面は、ほとんど剝落しているが、一部、白灰（黄）色。<br>内外器面に細かな貫入。 |
| 50<br>白磁 | 体部は肉太（厚さ 1.0cm）。 | 外器面：２条の横線（沈線）。 | 釉色：白灰色。 |
| 51<br>白磁 | ―――――― | 内器面：強い横ナデで、押えが加わる。<br>外器面：薄い稜線。 | 釉色：白灰（黄）色。 |
| 52<br>白磁 | 体部は肉太（厚さ 1.0cm）。 | 内器面：強い横ナデで、押えが加わる。 | 釉色：内器面は灰白色。<br>外器面は白灰色。<br>内器面に細かな貫入が、びっしりと入る。 |
| 53<br>白磁 | 体部はやや内弯気味に大きく開く。<br>口縁は玉縁状を呈するが、やや簡略化されている。<br>復元口径　14.6cm | 内外器面：薄い横線（沈線）。 | 釉色：白（黄）色。 |
| 54<br>白磁 | 口縁は薄壁（厚さ0.25cm）。<br>口唇部は口禿げを呈する。 | ―――――― | 釉色：淡白緑色。 |
| 55<br>白磁 | 口縁で、やや外弯。<br>体部は薄壁（厚さ0.25cm）。 | ―――――― | 土中における埋没状態により、器面全体に汚れが付着。 |
| 56<br>白磁 | 口縁は、内器面が半月状に漸次、薄くなる。口唇部は扁平で（幅0.1cm）口縁はやや外弯。<br>口唇部の内側と外側は、ヘラ削りで露胎、内側は幅0.45cm、外側は0.15cm。口禿げ白磁。 | ―――――― | 釉色：白（黄）色。 |

第87表　第Ⅰ期出土遺物の観察表④



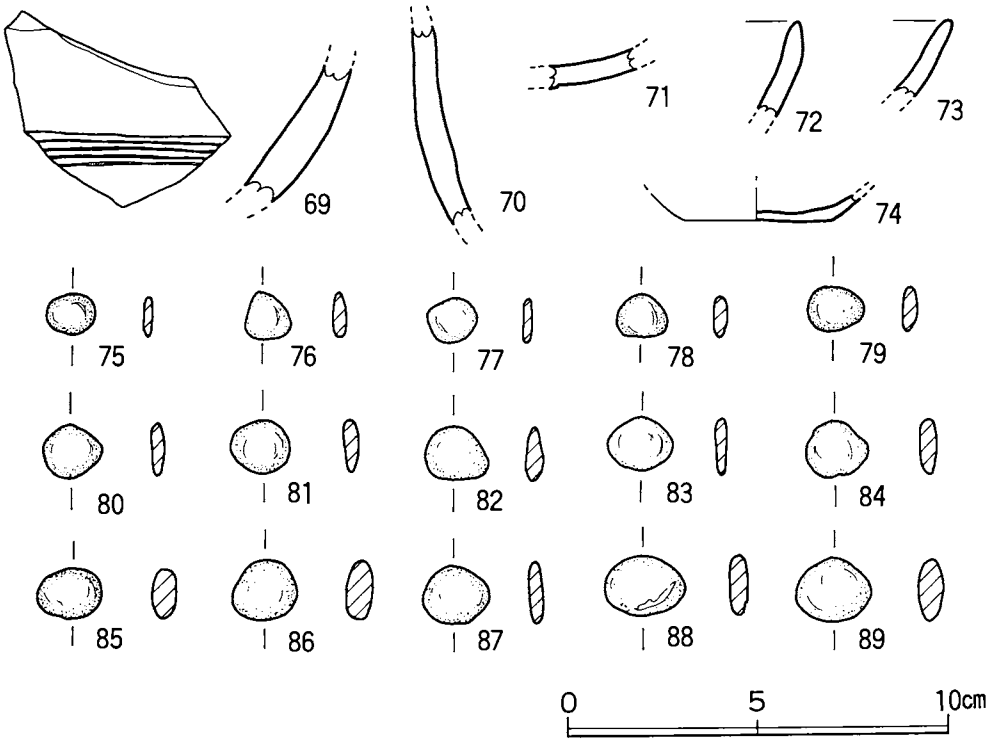

第101図　第Ⅰ期出土遺物の実測図③

| NO. | 形態の特徴 | 手法・調整・文様 | 備考 |
|---|---|---|---|
| 57<br>陶器 | ―――― | 外器面：縦の沈線。 | 釉色：外器面は灰黒（褐）色。<br>内器面は灰褐（黒）色。<br>外器面に、針の穴程の気泡痕。 |
| 58<br>白磁 | ―――― | ―――― | 釉色：白灰（黄）色。<br>外器面には、針穴程の気泡痕が散在。 |
| 59<br>白磁 | 壺の類と思われる。<br>復元の残存胴部最大径 16.5cm | 内器面：横ナデ。<br>外器面：丁寧な調整で、滑らかな器面。 | 器面は、非常に汚れている。 |
| 60<br>白磁 | 平底の小皿で底部は薄壁（厚さ 0.5cm）。 | 内底面と体部との境に、界線状の沈線。 | 釉色：白灰黄色。<br>外器面の施釉に、ムラがある。<br>上質の白磁。 |
| 61<br>白磁 | 平底の小皿。<br>底部の厚さ 0.65cm | 外底面と体部との境に鮮明な稜線。 | 釉色：灰白色、光沢あり。<br>外底面は露胎。<br>上質の白磁。 |
| 62<br>白磁 | 高台：端部は削り取られて、尻上がりとなる（幅 0.6cm）。<br>畳付きは扁平（幅 0.7cm）。<br>高台の高さ 0.15cm<br>復元底径 9.8 cm | 内底面と体部の境に、界線状の白色稜線。 | 釉色：白灰色。 |
| 63<br>白磁 | 外底は平底で、ごくわずか上げ底。<br>底径 5.7cm | 内底面と体部との境に、界線状の鮮明な沈線。 | 釉色：灰白（黄）色。<br>外底面まで施釉。重ね焼きにより、外底面の釉が、板目圧痕状を呈し、一部薄色となっている。 |
| 64<br>白磁 | 高台付きの小皿で、体部は極めて薄壁（底部で厚さ 0.3cm、体部で 0.2cm）。<br>復元底径 3.2 cm<br>高台の高さ 0.15cm | ―――― | 釉色：白灰色。<br>高台内の外底面を含めて全面に施釉。<br>上質の白磁。 |
| 65<br>陶器 | 胴部につまみが付く。 | ―――― | 釉色：黒茶色。<br>内器面は一部、露胎で白色。 |
| 66<br>瀬戸系陶器 | 底部付近と思われる。 | 内器面：ヘラ状工具による横ナデ。 | 釉色：緑色。<br>外器面に施釉。 |
| 67<br>白磁 | 高台：端部は、大きく削り取られて（幅1.0cm）尻上がりとなり、器面には左斜めの刻み目が並ぶ。<br>畳付きは扁平（幅0.9cm）。<br>復元底径 9.6cm | 内底面と高台の内側（外底面）は極めて丁寧なナデで、滑らかな器面。 | 釉色：白灰色（釉中に細かいトチが混じる）。<br>胎土：白黄色。<br>高台の周辺部は、やや小豆色を帯びる。 |
| 68<br>中世雑器 | ―――― | 外器面：ほとんど剝落の状態であるが、小豆色と濃緑色の縦縞文様が交互に入る。 | トチが器面に付着する。最大のものは長さ 1.5cm、幅 1 cm、高さ 0.5cmを測る。粗い器面を呈する。<br>胎土：粗い。色調は灰色で、やや小豆色を帯びる。<br>焼成不良。 |
| 69<br>瀬戸 | ―――― | 内器面：横ナデ後、指押え。<br>外器面：4 条の横線（沈線）。 | 釉色：黄緑色。<br>胎土：白灰（黄）色。 |
| 70<br>瀬戸系陶器 | ―――― | 外器面：横ナデで、肉太の稜線が生じている。 | 釉色：外器面は白褐色。<br>内器面は白灰色。<br>内器面に細かな貫入。 |

第88表　第Ⅰ期出土遺物の観察表⑤

| NO. | 形　態　の　特　徴 | 手法・調整・文様 | 備　　考 |
|---|---|---|---|
| 71<br>天　目 | ―――― | ―――― | 釉色：外器面は茶色、一部で黒色。<br>内器面は黒色～茶色。<br>外器面の下位は露胎（色調は白緑色）。 |
| 72<br>天　目 | 口縁はやや内弯し、直口となる。 | ―――― | 釉色：茶色、黒色の斑点が混じる。 |
| 73<br>須恵系<br>土　器 | 多少、いびつな器形。 | 外器面：丁寧な横ナデ。 | 内器面に多くの不純物が付着。 |
| 74<br>陶　器 | 体部は薄壁（厚さ 0.2～0.3cm）。<br>外底は平底。<br>復元底径　3.8cm | 内器面：横ナデ。<br>外器面：丁寧なナデで、滑らかな器面。<br>外底面：糸切り痕。 | 胎土の色調は茶色。 |
| 75<br>オハジキ | 幅　1.3 × 1.0cm<br>厚さ　0.25cm<br>重さ　0.58g | ―――― | 暗灰色の扁平な小石。 |
| 76<br>オハジキ | 幅　1.2 × 1.2cm<br>厚さ（上端）　0.2cm<br>（端部）　0.4cm<br>重さ　0.88g | 全面に丁寧な研磨が行われている。<br>平面形は、見た目に三角形に近い。 | 暗灰色の扁平な小石。 |
| 77<br>オハジキ | 幅　1.35× 1.1cm<br>厚さ　0.25cm<br>重さ　0.80g | 断面形は、片方がやや窪む。 | 暗灰色の扁平な小石。 |
| 78<br>オハジキ | 幅　1.35× 1.1cm<br>厚さ　0.4 cm<br>重さ　0.90g | 平面形は、見た目にやや三角形を呈する。調整は、小石の周縁を若干、研磨。 | 暗灰色の扁平な小石。 |
| 79<br>オハジキ | 幅　1.4 × 1.1cm<br>厚さ　0.25cm<br>重さ　1.0 g | 平面形は、見た目にやや長円形を呈する。<br>調整は78に同じ。 | 暗灰色の扁平な小石。 |
| 80<br>オハジキ | 幅　1.5 × 1.4cm<br>厚さ（最大）　0.3cm<br>重さ　1.0 g | 断面形は片方がやや窪む。<br>調整は78に同じ。 | 暗灰色の扁平な小石。 |
| 81<br>オハジキ | 幅　1.55× 1.4cm<br>厚さ（上端）　0.35cm<br>（端部）　0.3cm<br>重さ　1.28g | 断面形は上端が端部よりも、わずかに肥厚。<br>調整は78に同じ。 | 暗灰色の扁平な小石。 |
| 82<br>オハジキ | 幅　1.7 × 1.4cm<br>厚さ（上端）　0.2cm<br>（端部）　0.45cm<br>重さ　1.65g | 平面形は、片方が尻つぼみになる。<br>断面形は、端部が下脹れとなる。 | 暗灰色の扁平な小石。 |
| 83<br>オハジキ | 幅　1.75×1.45cm<br>厚さ　0.3cm<br>重さ　1.10g | ―――― | 非常に多孔質な石材で色調は灰褐色。 |
| 84<br>オハジキ | 幅　1.65×1.45cm<br>厚さ　0.5cm<br>重さ　1.82g | 平面形は片方が、やや尻つぼみになる。<br>研磨は丁寧に行われておらず、器面の凹凸をそろえる程度である。 | 多孔質な石材で、色調は灰黒褐色。 |
| 85<br>オハジキ | 幅　1.65× 1.3cm<br>厚さ　0.6cm<br>重さ　2.01g | 断面形は「ずんどう」を呈する。<br>調整は78に同じ。 | 緑白色の扁平な小石。 |

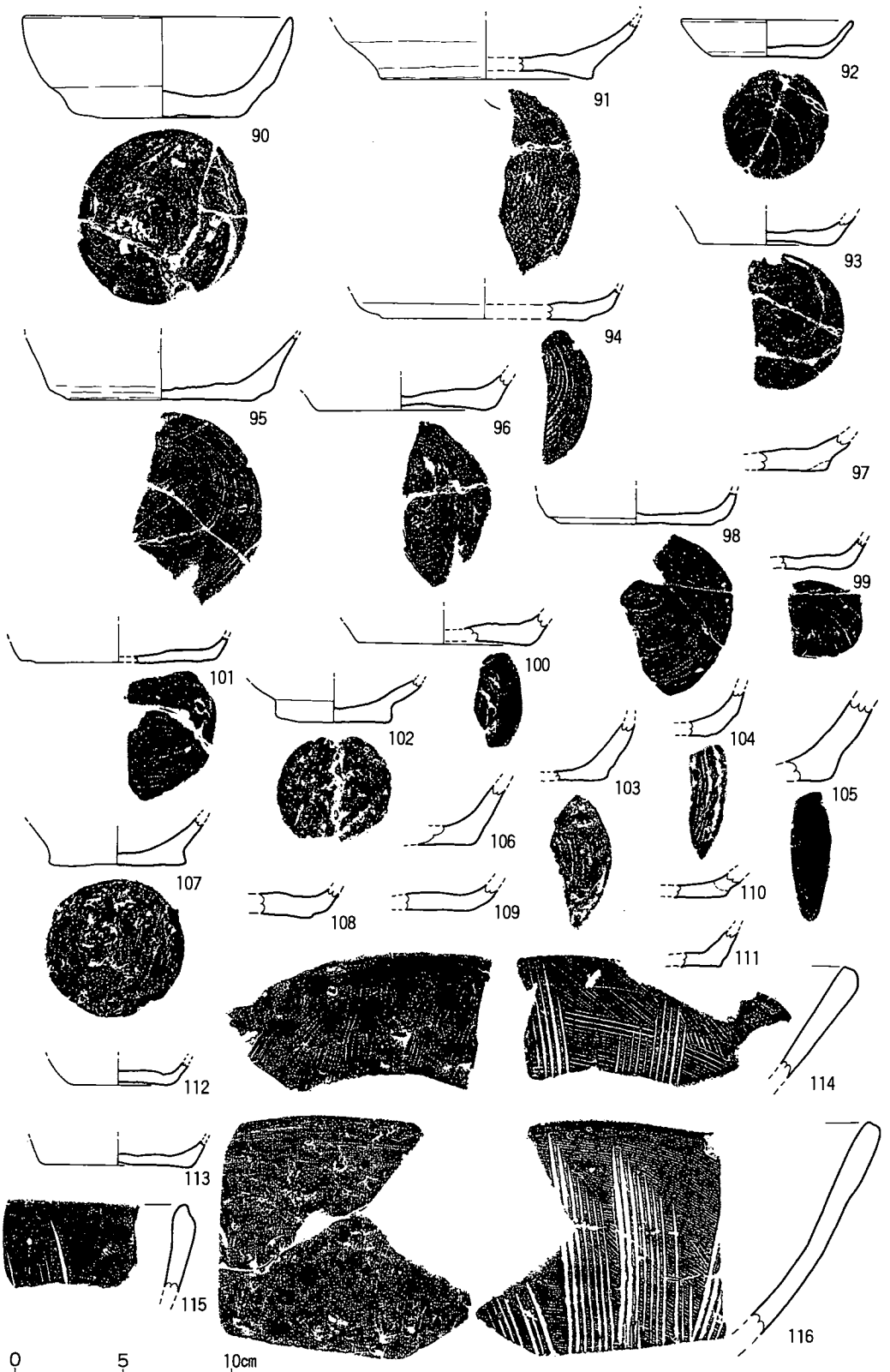
第89表　第Ⅰ期出土遺物の観察表⑥




第102図　第Ⅰ期出土遺物の実測図④

| NO. | 形態の特徴 | 手法・調整・文様 | 備考 |
|---|---|---|---|
| 86<br>オハジキ | 幅　1.55×1.65cm<br>厚さ　0.7cm<br>重さ　2.81g | 断面形は「ずんどう」を呈する。<br>調整は78に同じ。 | 暗灰色の扁平な小石。 |
| 87<br>オハジキ | 幅　1.75×1.5cm<br>厚さ（上端）0.3cm<br>（端部）0.4cm<br>重さ　1.55g | 断面形は片方がわずかに窪む。<br>調整は78に同じ。 | 石質には白色の微粒子が含まれる。<br>色調は灰白黒色。 |
| 88<br>オハジキ | 幅　2.0×1.6cm<br>厚さ　0.45cm<br>重さ　2.51g | 調整は78に同じ。 | 釉色：暗灰色。<br>暗灰色の扁平な小石で、器面に若干の自然面を残す。 |
| 89<br>オハジキ | 幅　1.9×1.6cm<br>厚さ（最大）0.6cm<br>重さ　2.95g | 調整は78に同じ。 | 黒色の扁平な小石。 |
| 90<br>土師器 | 船型の形状。<br>体部は肉太（底部の厚さ1.0cm、体部の中途の厚さ0.9cm）で、やや内弯気味に伸びる。<br>口縁直口。<br>復元口径　12.5cm<br>器高　4.7cm　底径　7.6cm<br>外底は平底。器形は、やや歪。 | 外底と体部の境は、大きく窪む。<br>内外器面：横ナデ。<br>内底面：丁寧な横ナデ。<br>外底面：糸切り後にナデが加わる。 | 色調：鈍い橙色。 |
| 91<br>土師器 | 外底は上げ底。<br>底径　9.8cm | 外底と体部の境は、大きく窪む。<br>内器面：器壁の風化が目立つ。<br>外器面：横ナデ、弱い稜線。稜線間は浅い沈線。<br>外底面：薄い糸切り痕。 | 色調：くすんだ感じの褐灰色。 |

第90表　第Ⅰ期出土遺物の観察表⑦



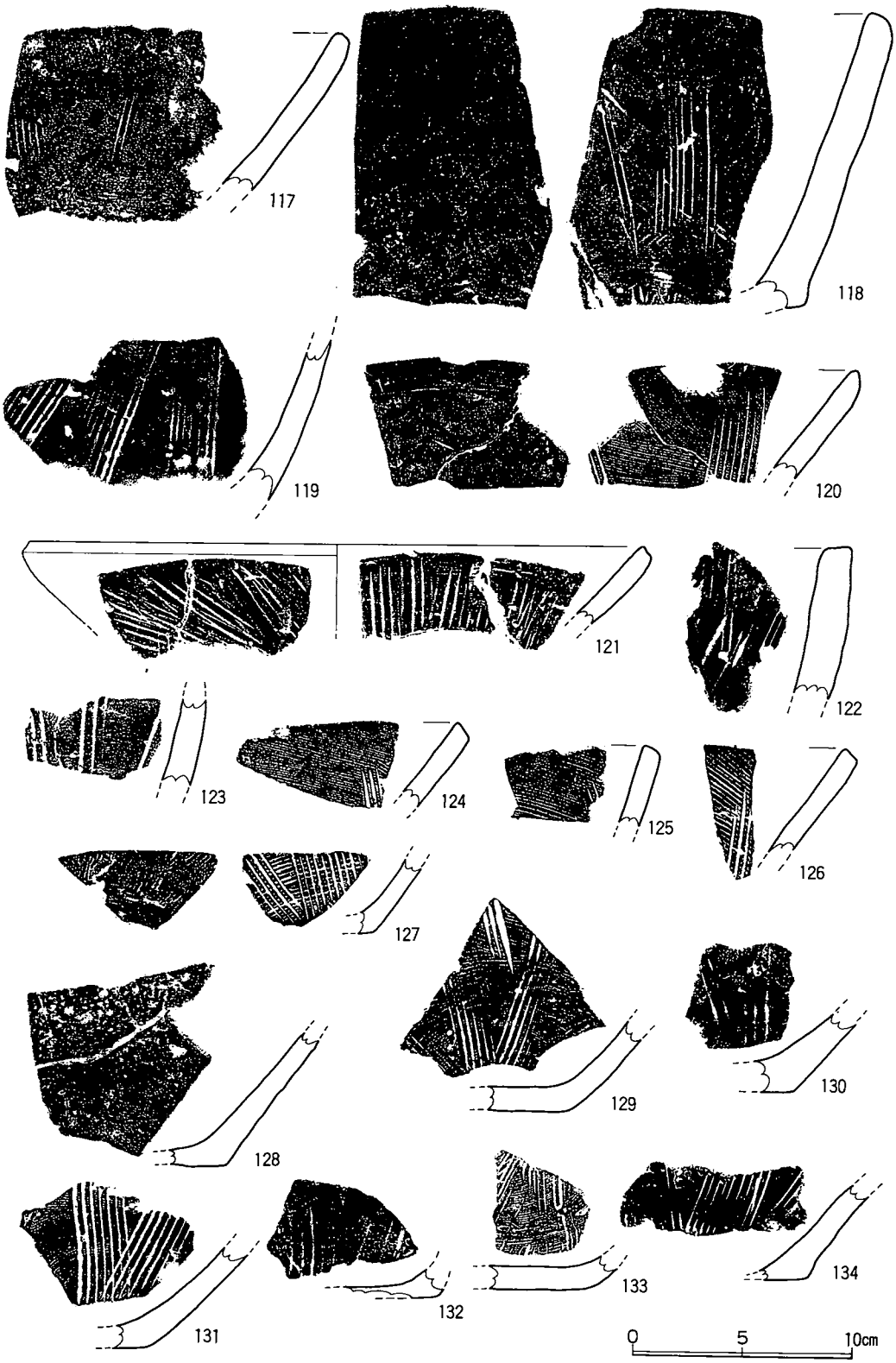

第103図　第Ⅰ期出土遺物の実測図⑤

| NO. | 形態の特徴 | 手法・調整・文様 | 備考 |
|---|---|---|---|
| 92<br>土師器 | 体部は直線的に伸びて、ラッパ状に開く。<br>口径 7.9cm<br>器高 1.7cm 底径 5.1cm | 内底面：強いナデで、中央部は指押え。<br>外底面：糸切り後に強いナデが加わる。 | 色調：明白褐色。 |
| 93<br>土師器 | 外底は上げ底、中央部は薄壁で、端部は肥厚。<br>底径 6.0cm | 外底と体部の境に弱い稜線。<br>内底面：ナデ後指押え。<br>外底面：糸切り痕は観察出来ず（強いナデの為か）。 | 色調：褐灰色。 |
| 94<br>土師器 | 器形は多少いびつ。<br>復元底径 9.6cm | 内底面と体部の境は、やや窪む。<br>外器面：弱い稜線。外底と体部の境に沈線。<br>外底面：糸切り痕。 | 色調：褐灰色。<br>外器面に灰黒色の不純物が付着。 |
| 95<br>土師器 | 外底は平底。<br>外底端は焼成前の器圧で、少々しゃげた状態。<br>体部は下位から上位にかけて、端的に薄壁となる。<br>底径 8.5cm | 内器面：多少、粗く、強い円周方向のナデ、中央部は指押え。器面はザラつく。<br>外器面：丁寧な横ナデで、稜線がつく。<br>外底面：糸切り後、軽い指押え。 | 色調：鈍い橙色。<br>やや、焼き締めの効いた土器。<br>質量感のある土器。 |
| 96<br>土師器 | 外底は上げ底、中央部で薄壁（厚さ 0.3cm）、端部で肥厚。<br>底径 8.2cm | 内底面：中央は指押えで、大きく凹む。円心円方向のナデ。鮮明な稜線。<br>外底面：糸切り痕。 | 色調：くすんだ感じの鈍い橙色。 |
| 97<br>土師器 | 外底は平底。<br>底部は肥厚（厚さ 1.0cm）。 | 内底面・外器面：横ナデ。<br>外底面：糸切り痕は観察出来ず（強いナデの為か）。 | 色調：褐灰色。 |
| 98<br>土師器 | 内底面の中央部に、小突起。<br>復元底径 7.2cm | 外底と体部の境に大きな沈線。<br>内底面：極く薄い円周方向のナデ。<br>外底面：糸切り痕。 | 色調：褐白灰色。<br>やや、焼き締めが効いている。 |
| 99<br>土師器 | 復元底径 10.8cm | 外底と体部の境に沈線。<br>外底面：粗い調整の糸切り痕。 | 色調：褐白灰色。<br>器壁の風化が目立つ。 |
| 100<br>土師器 | 底部はやや肥厚（厚さ 0.8～0.9cm）<br>外底は、やや上げ底。<br>復元底径 8.0cm | 内器面：横ナデ。<br>外器面：糸切り後、ナデ。 | 色調：褐白灰色。 |
| 101<br>土師器 | 底部は、多少、いびつ。<br>復元底径 9.0cm | 内底面：指押えにより薄壁（厚さ 2.5cm）。<br>外底面：薄い糸切り痕。 | 色調：褐白灰色。<br>器壁の風化が目立つ。 |
| 102<br>土師器 | 外底は平底。<br>底部は端部で肥厚（厚さ 1.1cm）。<br>底径 5.3cm | 外底と体部の境は大きく窪む。<br>外底面：糸切り痕は観察出来ず（強いナデの為か）。 | 色調：鈍い橙色。<br>器面の風化が目立つ。 |
| 103<br>土師器 | 底部は薄壁（厚さ 0.4cm）。<br>底部と比較し、体部は肥厚（厚さ 0.8cm）。 | 内外器面：横ナデ。<br>外底面：糸切り後、ナデ。 | 色調：汚れた感じの褐白灰色。 |
| 104<br>土師器 | ―――― | 内器面：横ナデ。 | 色調：褐白灰色。<br>やや焼成不良。 |
| 105<br>土師器 | 外底は平底（？）。 | 外底と体部の境に弱い稜線。<br>体部の立ち上がりは、やや窪む。<br>内器面：ナデ。 | 色調：二次焼成で、灰白黒色。 |
| 106<br>土師器 | 外底端は、肥厚（厚さ 1.2cm）。 | 内器面：横ナデ。 | 色調：褐白灰色。 |

第91表　第Ⅰ期出土遺物の観察表⑧

| NO. | 形態の特徴 | 手法・調整・文様 | 備考 |
|---|---|---|---|
| 107<br>土師器 | 外底は平底。<br>底径 6.1cm | 外底と体部の境は大きく窪む。 | 色調：鈍い橙色。 |
| 108<br>土師器 | 内底面は全体的に盛り上がる。<br>外底は上げ底。 | 外底面：糸切り後、ナデ消しが加わる。 | 色調：鈍い橙色。 |
| 109<br>土師器 | 内底面は全体的に盛り上がる。 | 内外器面：横ナデ。<br>外底面：糸切り痕。 | 色調：褐灰色。 |
| 110<br>土師器 | 底部は平底。 | 外底と体部の境はやや窪む。<br>外底面：糸切り後、ナデ。 | 色調：褐白灰色。 |
| 111<br>土師器 | 内底面と体部の境は沈線状に窪む。 | 内外器面：横ナデ。<br>外底面：鮮明な糸切り痕。 | 色調：鈍い橙色。 |
| 112<br>土師器 | 外底は上げ底。<br>底部は肥厚（厚さ 0.5cm）。<br>体部は薄壁（厚さ 0.3cm）。<br>底径 4.7cm | 内底面と体部の境は窪む。<br>外器面：横ナデ。<br>外底面：糸切り痕。 | 色調：鈍い橙色。 |
| 113<br>土師器 | 外底端は肥厚（厚さ 0.7cm）。<br>底径 7.0cm | 外底面：糸切り痕。 | 色調：鈍い橙色。 |
| 114<br>瓦質擂鉢 | 体部は、中途から口縁にかけて、漸次、肥厚。<br>口唇部は扁平（幅 0.6cm）。 | 内器面：条線の一単位は10本。<br>斜めと横方向の刷け目、上位はナデ消し（ヘラ状工具使用）が加わる。<br>外器面：叩きの後、やや斜め方向の刷け目。上位は、ナデ消しが加わる。 | 色調：外器面は灰白黒色。<br>内器面は灰白褐色。 |
| 115<br>瓦質擂鉢 | 体部はやや内弯し、中途から口縁にかけて漸次、肥厚。 | 内器面：条線の一単位は８本と思われる。横方向の刷け目調整の後にナデ消し。<br>外器面：叩きの後にナデが加わる。 | ―――― |
| 116<br>瓦質擂鉢 | 体部はやや内弯し、中途から口縁にかけて肥厚（厚さ 0.8～1.2cm）。<br>口唇部は幅 0.7cmで全体的に窪む。 | 内器面：条線の一単位は８本。<br>全体に斜め方向（左上→右下）の刷け目、上位は後に横ナデが加えられている。<br>外器面：成形時の凹凸を鮮明に残すが、上位には、横ナデが加えられている。 | 焼き締めが効いている。 |
| 117<br>瓦質擂鉢 | 体部はわずかに内弯し、下位から、同一の厚さで口縁に至る。<br>口唇部は扁平（幅 0.6cm）。 | 内器面：条線の一単位は不明（５本まで認められる）。 | 色調：灰黒色。<br>器面全体に、黄灰色の不純物が付着。<br>器面の風化が著しい。 |
| 118<br>土師系擂鉢<br>（中世雑器） | 体部はやや内弯する。<br>厚さ 1.6～1.8cm | 内器面：条線の一単位は、９本と思われる。斜め方向の刷け目。<br>外器面：上位は横ナデ、中途より指押え痕が鮮明に残る。 | 色調：乳白色。<br>器面は軟質で、胎土が手に付着。<br>器面の風化が著しい。 |
| 119<br>土師系擂鉢<br>（中世雑器） | ―――― | 内器面：条線の一単位は７本。<br>かすかな刷け目（横及び斜め方向）。 | 器面は軟質で、胎土が手に付着。 |
| 120<br>瓦質擂鉢 | 体部は直線的に伸びる。 | 内器面：条線の一単位は不明（７本まで認められる）。<br>上位は横ナデ、以下は横及び斜め方向の刷け目。<br>外器面：上位は横ナデ、以下は不整方向のナデ。 | 色調：白灰黄色。<br>やや焼き締めが効いている。 |

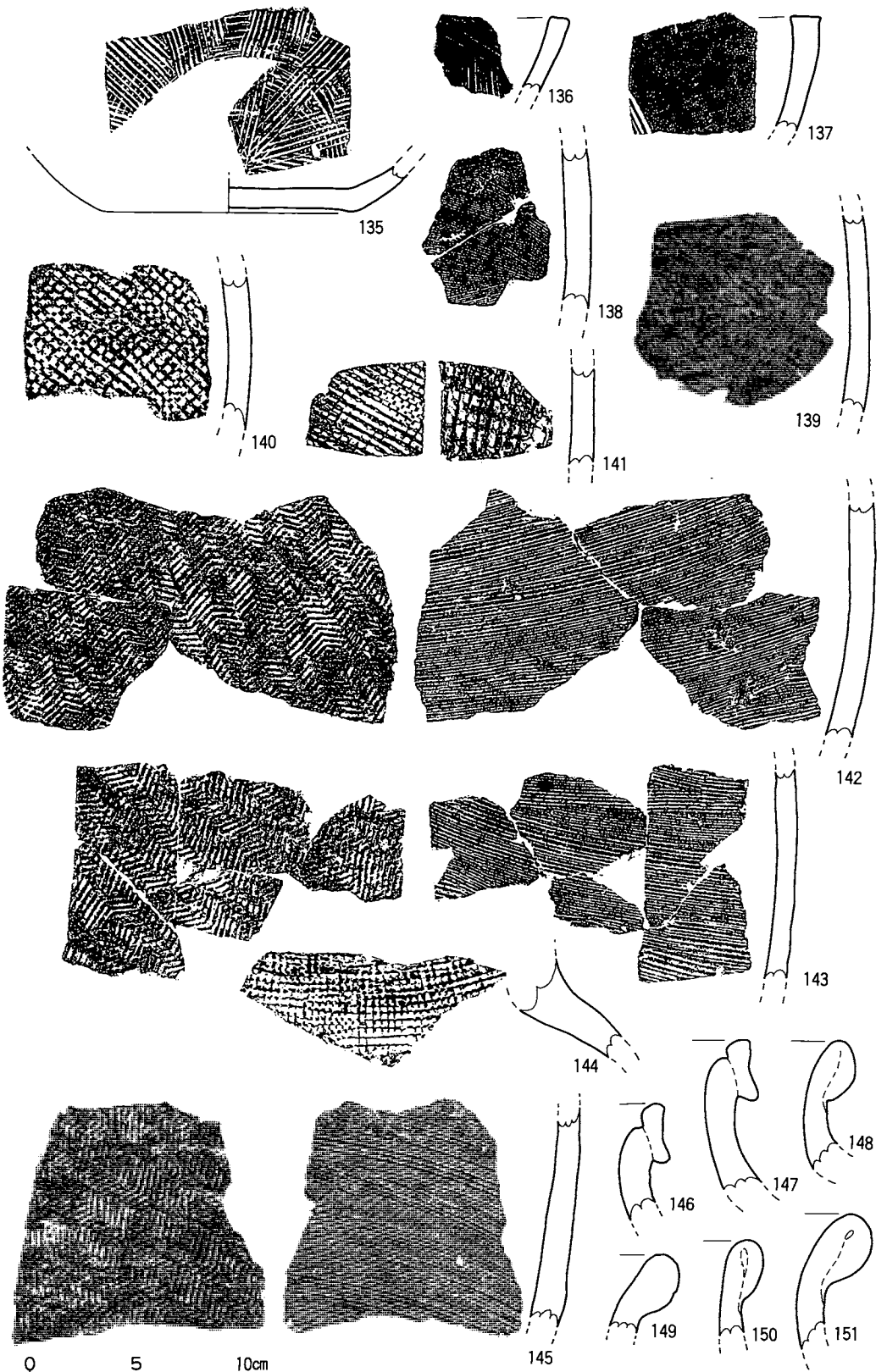
第92表　第Ⅰ期出土遺物の観察表⑨




第104図　第Ⅰ期出土遺物の実測図⑥

| NO. | 形　態　の　特　徴 | 手法・調整・文様 | 備　　考 |
|---|---|---|---|
| 121<br>瓦質擂鉢 | 体部は、中途から口縁にかけて、漸次、肥厚。<br>口唇部は幅 0.8cmで全体的に窪む。<br>復元口径　27.6cm | 内器面：斜め方向に、幅 0.1～0.3cmの非常に粗い沈線が、無数に掻かれている。沈線の幅と間隔は不定。<br>口唇部：横ナデ。<br>外器面：横ナデ後、縦方向の非常に粗い刷け目。 | 色調：灰黒色。 |
| 122<br>瓦質擂鉢 | 体部は中途で肥厚（厚さ 1.8cm）。 | 内器面：条線の一単位は不明（5本まで認められる）。 | 器面の風化が著しい。 |
| 123<br>瓦質擂鉢 | ―――― | 内器面：条線の一単位は不明（3本まで認められる）。横ナデ。 | 色調：外器面は灰黒褐色。<br>内器面は灰白褐色。<br>器面の風化が著しい。<br>胎土は砂粒を多く混入。 |
| 124<br>瓦質擂鉢 | 口唇部は扁平（幅 0.9cm）。 | 内器面：条線の一単位は不明（3本まで認められる）。<br>全体に斜め方向（左上→右下）の刷け目。 | 褐灰色の不純物が器面の全体に付着。<br>焼き締めが効いている。 |
| 125<br>瓦質擂鉢 | 口唇部は扁平（幅 0.9cm）。 | 内器面：条線の一単位は不明（6本まで認められる）。<br>斜め方向の刷け目。 | 焼き締めが効いている。 |
| 126<br>瓦質擂鉢 | 体部は直線的に伸びる。<br>口唇部は幅 0.8cmで、全体的にやや窪む。 | 内器面：条線の一単位は不明（6本まで認められる）。<br>横ナデを施した後に、刷け目調整（左上→右下）を行っている。<br>外器面：叩きの後、横ナデが加えられている。 | 焼き締めが効いている。 |
| 127<br>瓦質擂鉢 | ―――― | 内器面：条線の一単位は10本。<br>横方向の刷け目。<br>外器面：縦方向の刷け目調整を断続的に行った後、部分的にナデ消している。 | 色調：灰黒色。 |
| 128<br>瓦質擂鉢 | 体部は直線的に伸びる。<br>外底端は肥厚（厚さ 1.5cm）。 | 内器面：条線の一単位は不明。 | 色調：灰黒褐色。<br>器面の風化が著しい。 |
| 129<br>瓦質擂鉢 | 外底は平底。 | 内器面：条線の一単位は6本。やや弱い掻き目。<br>斜め方向の刷け目。<br>外器面：縦方向の粗い刷け目。調整後横ナデが加えられている。<br>下位に2条の沈線。<br>内底面：横方向の刷け目。<br>外底面：指押え後、ナデ。 | 色調：灰白色。<br>器面全体に、灰黄色の不純物が付着。<br>焼き締めが効いている。 |
| 130<br>瓦質擂鉢 | 外底面は肥厚（厚さ 1.8cm）。 | 内器面：条線の一単位は不明（5本まで認められる）。 | 色調：くすんだ感じの褐灰色。<br>器面は軟質で、胎土が手に付着。<br>器面の風化が著しい。 |
| 131<br>瓦質擂鉢 | ―――― | 内器面：条線の一単位は7本。<br>掻き目に使用した工具は、先端が四角形である。横方向の刷け目（ほとんど消えかけている）。<br>外底面：軽い指押え。 | 色調：外器面は白灰色。<br>内器面は灰白黒色。 |
| 132<br>瓦質擂鉢 | ―――― | 内器面：条線の一単位は不明（5本まで認められる）。 | 器面の風化が著しい。 |

第93表　第Ⅰ期出土遺物の観察表⑩



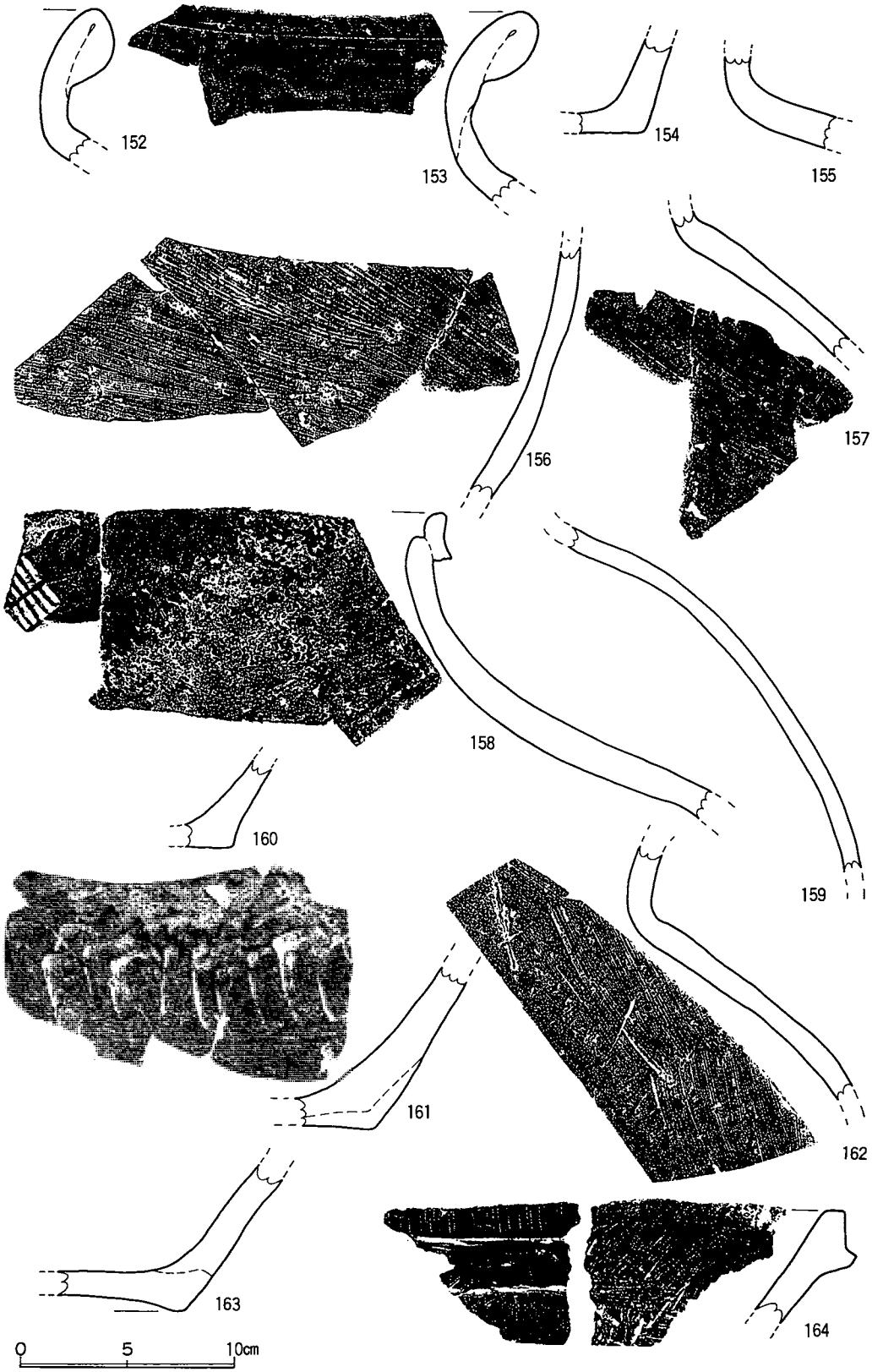

第105図　第Ⅰ期出土遺物の実測図⑦

| NO. | 形態の特徴 | 手法・調整・文様 | 備考 |
|---|---|---|---|
| 133<br>瓦質擂鉢 | ―――――― | 内器面：条線の一単位は不明。<br>横方向の刷け目。<br>外器面：ナデ。 | 焼き締めが効いている。 |
| 134<br>瓦質擂鉢 | 底部は非常に薄壁（厚さ0.4cm)で、端部は肥厚（厚さ 1.5cm）。<br>体部は直線的に伸びる。 | ―――――― | 色調：灰白褐色。<br>器面は軟質で、胎土が手に付着。<br>器面の風化が著しい。 |
| 135<br>瓦質擂鉢 | 復元底径 11.6cm | 内器面：条線の一単位は12本。<br>全面に横方向の刷け目。<br>内底面の全体に条線が掻かれている。<br>外器面：外底面も含め、未調整。<br>下位はヘラ状工具による横ナデ。 | 焼き締めが効いている。 |
| 136<br>瓦質擂鉢 | 体部は中途より口縁にかけて肥厚。<br>口唇部は幅1cmで、全体的に窪む。 | 内器面：条線の一単位は不明（8本まで認められる）。<br>強い斜め方向（左上→右下の刷け目。<br>外器面：ロクロ未使用の横ナデ。 | 焼き締めが効いている。 |
| 137<br>備 前 | 体部は中途より口縁にかけて漸次、肥厚。<br>口唇部は扁平（幅 1.5cm）。 | 内器面：条線の一単位は不明（3本まで認められる）。条線幅は0.3cmで、深く掻かれている<br>内外器面：横ナデ。 | ―――――― |
| 138<br>須恵器 | ―――――― | 外器面：横ナデ。<br>内器面：横及び斜め方向（左上→右下）の刷け目。 | 色調：灰白色。<br>焼き締めが効いている。 |
| 139<br>須恵器 | ―――――― | 外器面：丁寧なナデ。<br>内器面：横及び斜め方向（左上→右下）の刷け目。 | 色調：灰白黄色。<br>内器面の一部にススが付着。<br>焼き締めが効いている。 |
| 140<br>須恵器 | ―――――― | 外器面：格子目叩き。<br>内器面：ナデ。 | 色調：灰黄色、外器面の一部は灰色。<br>器面は、やや軟質。 |
| 141<br>須恵器 | 体部はやや肉太（厚さ 1.1cm）。 | 内外器面：格子目叩き。但し、内外器面では異なる施文具が用いられている。内器面の叩き目は外器面よりも大きい | 色調：外器面は小豆色。<br>内器面は灰白黒色。<br>非常に焼き締めが効いている。 |
| 142<br>須恵器 | ―――――― | 外器面：波状の叩き。<br>内器面：横ナデ。 | ―――――― |
| 143<br>須恵器 | ―――――― | 外器面：波状の叩き。<br>内器面：横及び斜め方向（左上→右下）の刷け目。 | ―――――― |
| 144<br>須恵器 | 残存の肩部は肉太（厚さ 1.1～ 2.7cm）。 | 外器面：格子目叩き。<br>内器面：丁寧なナデ。 | ―――――― |
| 145<br>須恵器 | 体部はやや肉太（厚さ 1.0～1.4cm) | 外器面：横押え後、波状の叩き。<br>内器面：横方向の刷け目。 | ―――――― |
| 146<br>常 滑 | ―――――― | 口縁の折り返し面に沈線。<br>内外器面：横ナデ。 | ―――――― |
| 147<br>常 滑 | ―――――― | 口縁の折り返し面に沈線。<br>内外器面：横ナデ。 | 胎土は細砂粒（0.1cm以下）を多量に含む。 |
| 148<br>備 前 | やや小型の壺。 | 成形：口縁肥厚部は、粘土帯を外側へ折り返して作られている。<br>内外器面：横ナデ。 | 外器面にかすかな自然釉（灰白黄色）がかかる。 |

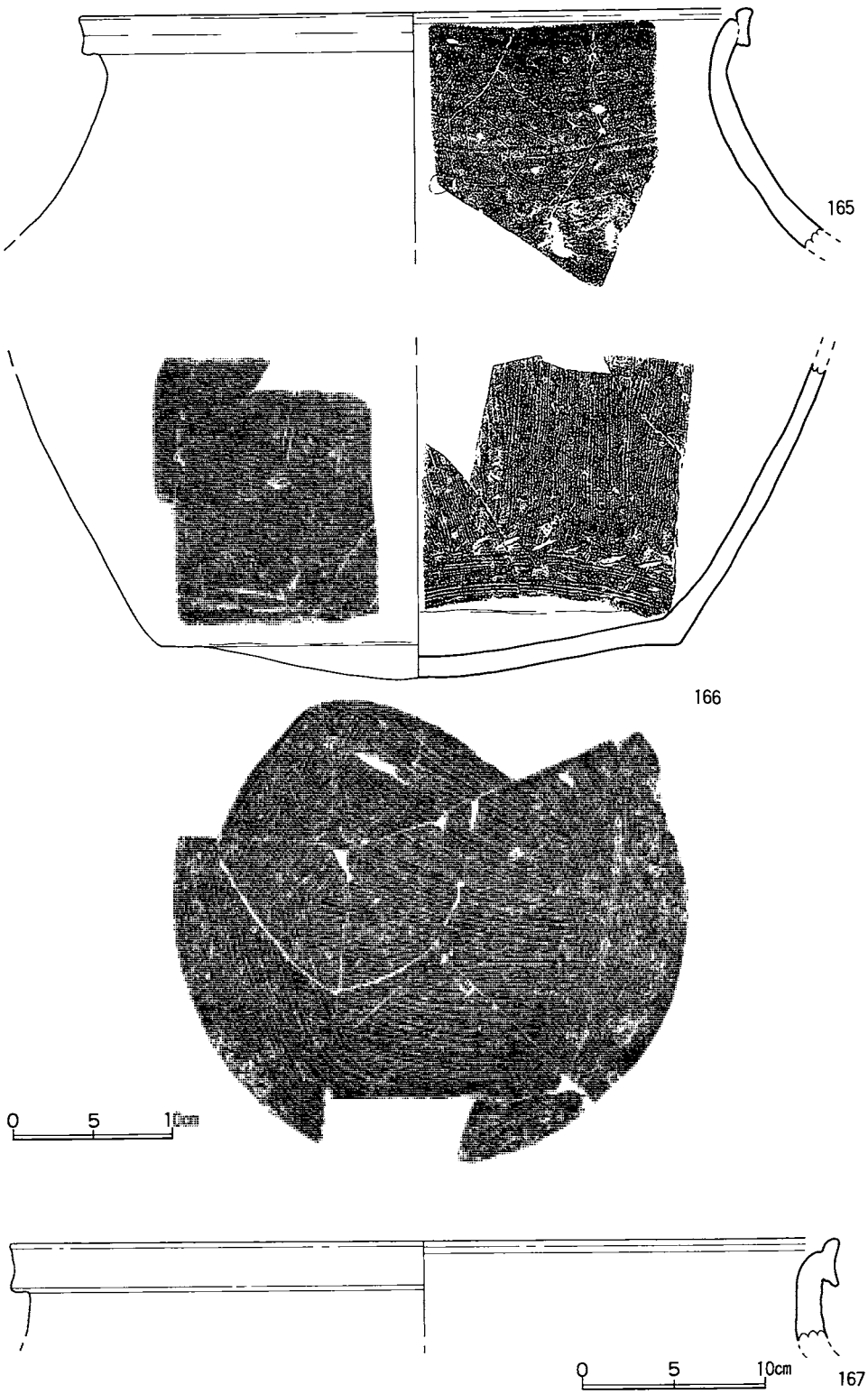
第94表 第Ⅰ期出土遺物の観察表⑪

| NO. | 形態の特徴 | 手法・調整・文様 | 備考 |
|---|---|---|---|
| 149<br>備前 | ―――― | 成形：148と同じ。<br>粘土帯の折り返しは非常に強い。口縁肥厚部の外器面に2条の沈線。 | ―――― |
| 150<br>備前 | ―――― | 成形：148と同じ。<br>内外器面：横ナデ。 | 外器面に黄緑色の釉がかかる。 |
| 151<br>備前 | ―――― | 成形：148と同じ。<br>内外器面：横ナデ。 | 内器面の上位と外器面に、ごくわずかな自然釉（灰白黄色）がかかる。 |
| 152<br>備前 | ―――― | 成形：148と同じ。<br>内外器面：横ナデ。 | 外器面に、ごくわずかな自然釉（灰白黄色）がかかる。 |
| 153<br>備前 | ―――― | 成形：148と同じ。<br>内外器面：横ナデ。<br>外器面肩部：この箇所については粗いナデで、鮮明な指押え痕が残っている。 | ―――― |
| 154<br>備前 | 底部は薄壁（厚さ0.9cm）で、体部は肉太（厚さ1.4cm）。 | 内外器面：横ナデ。<br>外底面：不整方向の刷け目。 | 色調：明るい色の小豆色。<br>非常に焼き締めが効いている。 |
| 155<br>備前 | 頸部の部分。 | 内外器面：横ナデ。 | 釉色：灰黄色。<br>外器面の一部にかかる。 |
| 156<br>常滑 | ―――― | 内器面：ヘラ状工具による横方向の丁寧なナデ。<br>外器面：中途は指押えの後、ハケ状工具による横及び斜め方向の（左上→右下）調整痕。 | 外器面の全面に、灰白黄色の自然釉がかかる。<br>色調：内器面は、くすんだ感じの小豆色。 |
| 157<br>常滑 | 壺の肩部。 | 内器面：ヘラ状工具による横方向の丁寧なナデ。<br>外器面：中途はハケ状工具による横方向の調整痕、上位は後にナデ消しが加えられている。 | ―――― |
| 158<br>常滑 | ―――― | 口縁の折り返し面に沈線。<br>内器面：叩き後、横ナデが加わる。<br>外器面：横ナデ、肩部に窯印。 | 外器面の頸部以下には、全面に自然釉（緑色）がかかる。<br>但し、上位は釉の剝落が目立つ。 |
| 159<br>常滑 | ―――― | 内外器面：刷け状工具による横ナデ | ―――― |
| 160<br>常滑 | 体部は、やや外弯気味に伸びる。<br>外底面は肥厚（厚さ1.9cm）。 | 内器面：横ナデ。 | 釉色：茶緑色。<br>内器面の全面と外器面の一部に施釉。 |
| 161<br>備前 | 外底面は大きく肥厚（厚さ2.8cm）。 | 内器面：金属製と思われる工具による非常に粗い削り。上位は後に横ナデが加えられている。<br>外器面：上位は、縦方向の刷け目（幅2.2cm程の工具を使用）が上から下へ施されている。下位は、横方向の刷け目が施されている。<br>外底面：横方向の刷け目。 | ―――― |
| 162<br>常滑 | ―――― | 外器面：屈曲部は、沈線状に大きく窪む。<br>内外器面：刷け状工具による横及び斜め方向の強いナデ。 | 外器面の全面に、灰白黄色の自然釉がかかる。<br>内器面は露胎で、小豆色。 |

第95表　第Ⅰ期出土遺物の観察表⑫




第106図　第Ⅰ期出土遺物の実測図⑧



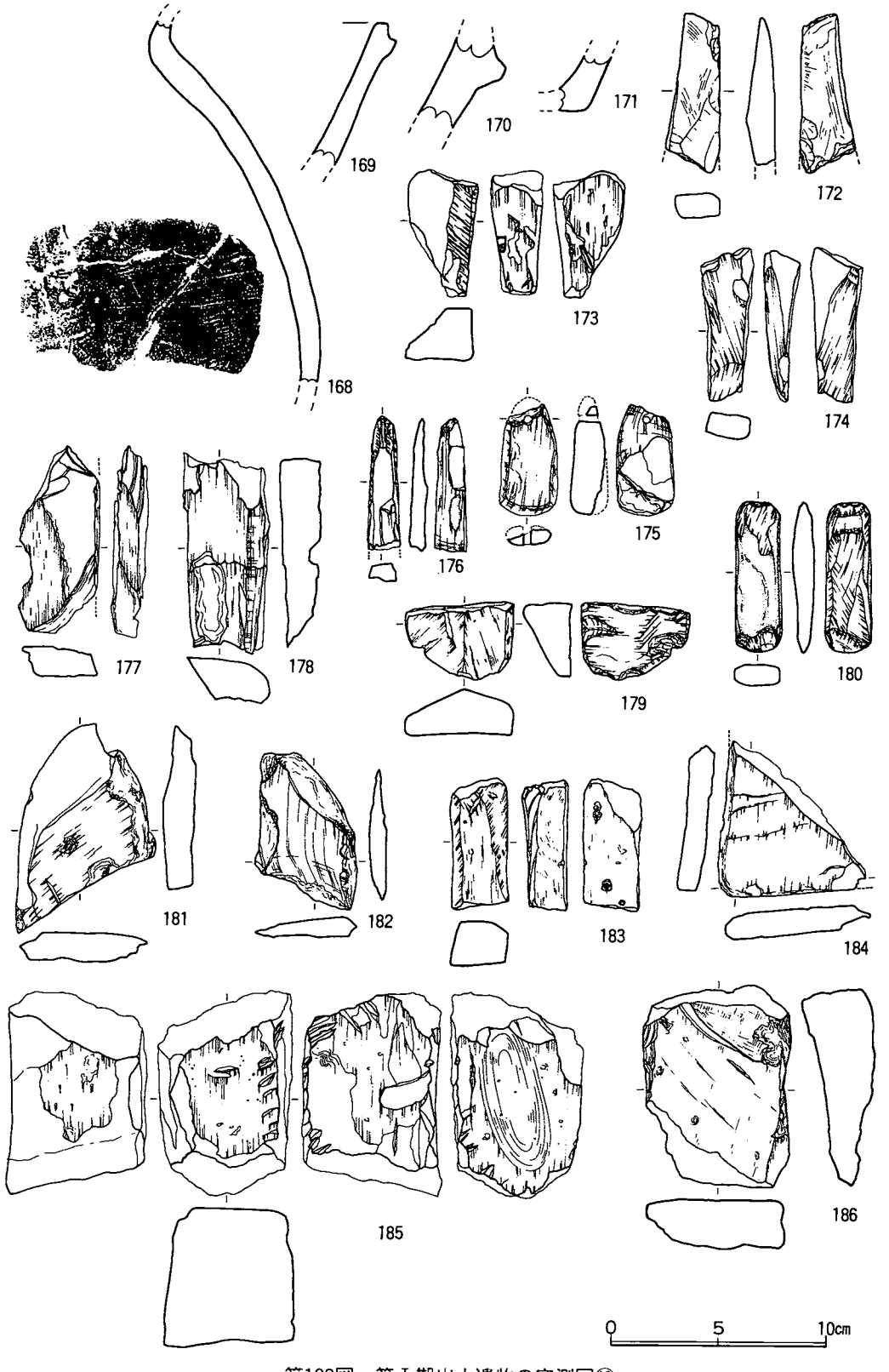

第107図　第Ⅰ期出土遺物の実測図⑨

| NO. | 形態の特徴 | 手法・調整・文様 | 備考 |
|---|---|---|---|
| 163<br>備前 | 外底は上げ底。 | 成形：巻上げ技法ではなく、粘土紐又は粘土帯の積み上げによる。<br>内器面・内底面：横ナデ。<br>外器面：斜め方向（左から右）の刷け目。外底との境は横ナデ。<br>外底面：不整方向の刷け目。 | ―――― |
| 164<br>滑石製石鍋 | 体部は肉太（厚さ 1.3～1.5cm）。<br>重さ 175.69ｇ | 外器面に1条の突帯を削り出している。<br>内器面：上位に、斜め方向へ削った痕。破損後に再利用したのか石鍋の断面には、外器面側から内器面側に向けて、縦方向に削った痕が残る。 | ―――― |
| 165<br>常滑 | 復元口径 43.0cm | 内器面：成形時の指押え痕を残すがそれを消すように横ナデが、加えられている。<br>外器面：横ナデ。 | ―――― |
| 166<br>備前 | 外底は、中央部より端部にかけて、尻上がりとなる。<br>復元底径 33.0cm | 内器面：刷け状工具による横ナデ。<br>外器面：刷け状工具による横方向のナデ。外底との境は、刷け状工具による横ナデ。<br>内底面：未調整。<br>外底面：刷け状工具による不整方向のナデ。 | ―――― |
| 167<br>常滑 | 復元口径 46.4cm | 内器面：横ナデ後、指押え。口縁部の内器面は横ナデ。<br>外器面：横ナデ。 | ―――― |
| 168<br>土師系土器 | 頸部の下位より胴部にかけて残存。 | 内器面：指及びヘラ状の工具で縦に粗い調整を施す。中位から下位にかけて、後に横方向の刷け目調整が加えられている。<br>外器面：一部、縦方向の刷け目。 | 色調：褐灰色。<br>外器面の風化が著しい。 |
| 169<br>滑石製石鍋 | 体部はかすかに内弯。<br>口唇部は扁平（幅 0.5cm）。<br>重さ 105.62ｇ | 口縁下の外器面に、1条の突帯を削り出している。 | 外器面の全体にススが付着しており、使用状況がうかがわれる。 |
| 170<br>滑石製石鍋 | 体部は肉太（厚さ 1.7～1.9cm）。<br>重さ 84.12 ｇ | 外器面に1条の突帯を削り出している。<br>内外器面：非常に丁寧な研磨。 | ―――― |
| 171<br>滑石製石鍋 | 重さ 46.15 ｇ | 内器面：横方向の研磨痕。<br>外器面：縦方向の削り痕。 | ―――― |
| 172<br>砥石 | 長さ 7.2cm<br>（断面・長方形）厚さ 1.1cm<br>幅 2.1cm<br>重さ 30.76 ｇ | 使用痕：上面は、長さ 4.2cm。<br>下面は、長さ 5.2cm。<br>側面は、高さ 0.7cm。<br>使用痕は下面に多く観察される。側面に縦方向の擦痕が認められるが、これは成形によるものと思われる。 | 粘板岩製。 |
| 173<br>砥石 | 残存長さ 5.6 cm<br>厚さ 2.3 cm<br>残存幅 3.2 cm<br>重さ 45.49ｇ | 上下両面と、図中の左側面の三面使用である。<br>左側面：階段状を呈する刃潰し痕が残る。 | 天草砥石。<br>手に持って使用された為に、砥石面にねじれが見られる。 |
| 174<br>砥石 | 断面は長方形を呈する。<br>残存長さ 6.8 cm<br>厚さ 1.1 cm<br>幅 2.0 cm<br>重さ 30.75ｇ | 上下両面と図中、左側面の三面使用である。 | 天草砥石。<br>手に持って使用された為に、砥石面にねじれが見られる。 |

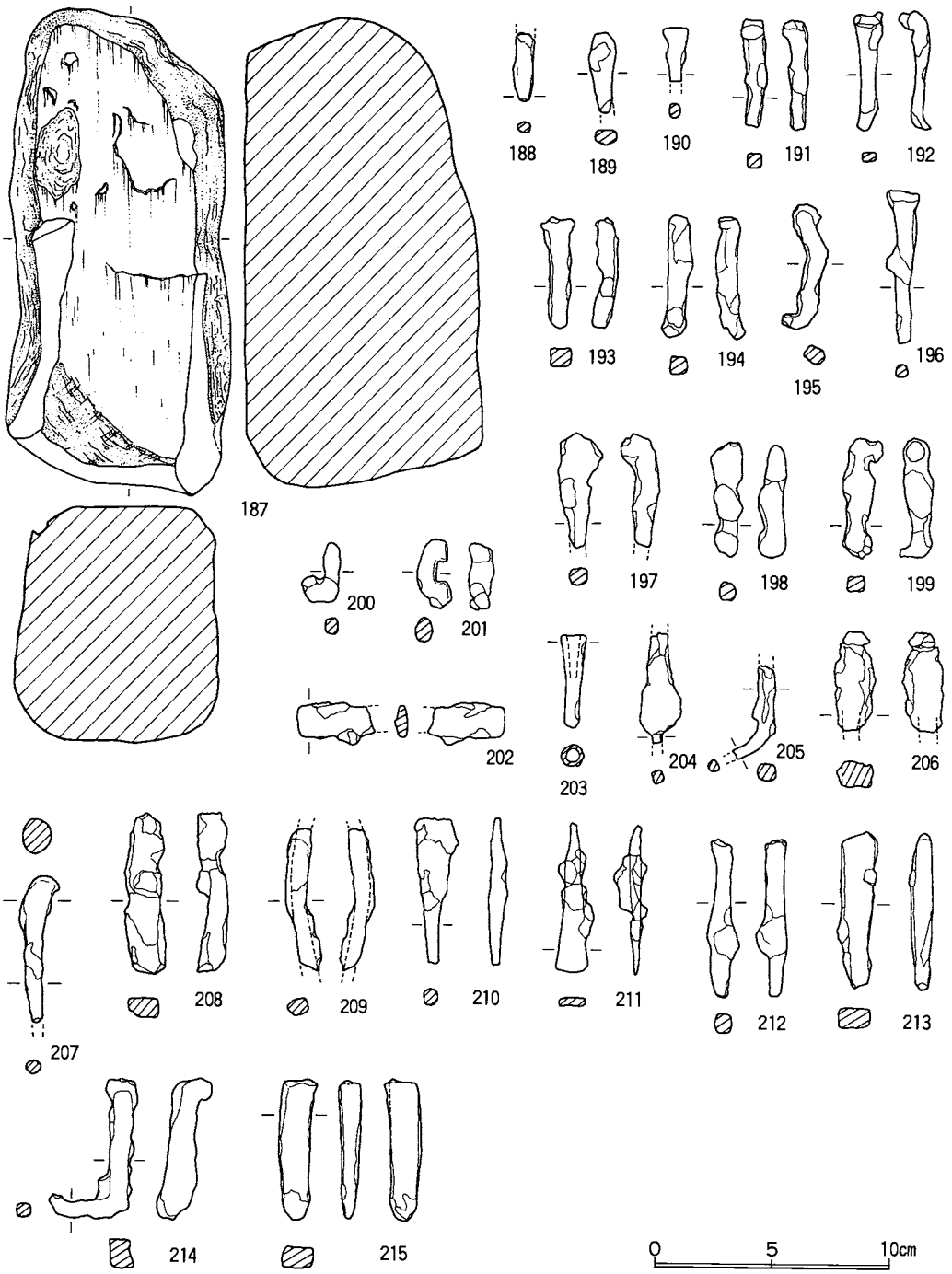
第96表　第Ⅰ期出土遺物の観察表⑬

| NO. | 形態の特徴 | 手法・調整・文様 | 備考 |
|---|---|---|---|
| 175<br>滑石製<br>垂飾品 | 残存長さ 5.1 cm<br>残存厚さ 0.7 cm<br>最大幅 2.7 cm<br>有孔径 0.45cm<br>重さ 35.44 g | 一定の粗い整形を行った後に、上下両面から穴を穿ち、研磨によって仕上げされている。 | 滑石製石鍋の転用。 |
| 176<br>砥石 | 残存長さ 6.0 cm<br>残存厚さ 0.8 cm<br>残存幅 1.3 cm<br>重さ 11.27 g | 石材に細かな面取りが、いくつも見られる。多方面への磨き出しが考えられる。 | 粘板岩製。<br>手に持って、使用されたものと思われる。 |
| 177<br>砥石 | 残存長さ 8.5 cm<br>残存厚さ 1.3 cm<br>残存幅 3.5 cm<br>重さ 52.5 g | 残存部を見る限り、平面的な使用である。刃幅の広いものを仕上げるのに使用したものと思われる。 | 粘板岩製。 |
| 178<br>砥石 | 残存長さ 8.5 cm<br>厚さ 1.7 cm<br>残存幅 3.8 cm<br>重さ 87.67 g | 主に片面使用であるが、図中の右肩部にも若干の使用痕が残っている。 | 粘板岩製。 |
| 179<br>砥石 | 残存長さ 5.1 cm<br>厚さ 2.0 cm（最大）<br>重さ 45.5 g | 図中の上面を除いた三面が使用されている。 | 天草砥石。<br>手に持って使用された為に、砥石面にねじれが見られる。 |
| 180<br>砥石 | 長さ 6.7 cm<br>厚さ 0.9 cm<br>幅 2.1 cm<br>重さ 25.13 g | 自然礫を使用したもので、上下両面及び、両端部に、かなりの使用痕が残る。 | 粘板岩製。<br>手に持って、使用されたものと思われる。 |
| 181<br>砥石 | 残存長さ 7.3 cm<br>残存厚さ 1.3 cm<br>残存幅 6.0 cm<br>重さ 88.65 g | 残存の上面（自然面）を使用しているが、石質が硬度であるため、器面は凹とならず、丸味を帯びた形状になっている。 | 粘板岩製。 |
| 182<br>砥石 | 残存長さ 5.9 cm<br>最大厚さ 0.8 cm<br>残存幅 4.8 cm<br>重さ 29.16 g | 残存の上面は 181と同じ。<br>かなりの使用がうかがわれる。 | 粘板岩製。 |
| 183<br>砥石 | 残存長さ 5.7 cm<br>厚さ 2.0 cm<br>幅 2.6 cm<br>重さ 50.38 g | 四面使用で、平面的に良く使い込まれている。 | 天草砥石。<br>手に持って使用された為に、砥石面にねじれが見られる。 |
| 184<br>砥石 | 残存長さ 6.8 cm<br>厚さ 1.1 cm<br>残存幅 6.7 cm<br>重さ 78.41 g | 上下両面に使用痕が残る。 | 粘板岩製。 |
| 185<br>砥石 | 断面は台形を呈する。<br>幅（上辺）5.1 cm<br>（下辺）6.0 cm<br>厚さ 6.1 cm<br>重さ 529.35 g | 四面使用であるが、左右側面は部分的使用に留まっており頻度は低い。<br>上面：長軸方向に、やや中央部が凹む。図中の右肩部には、砥石面の整形によると思われるツブシの痕が残る。<br>下面：中央部が凹む。欠損後に再利用され、刃の先端部を研いだものと思われる。 | 天草砥石。 |
| 186<br>砥石 | 残存長さ 6.3 cm<br>残存厚さ 2.2 cm<br>残存幅 6.3 cm<br>重さ 187.33 g | 上面のみの使用で、固定して使用されたものである。上部に刃止まりが見られ、長軸方向に中央部が凹む使用がなされている。<br>刃物は刃止から砥石に対して斜め方向に研がれていたものと思われる。 | 天草砥石。 |
| 187<br>砥石 | 長さ 19.7 cm<br>厚さ 9.8 cm<br>残存幅 8.8 cm<br>重さ 39.50 g | 上下二面使用で、水平的な使用がうかがわれる。<br>刃幅の広いものを研いだものと思われる。 | 砂岩製砥石。 |

第97表　第Ⅰ期出土遺物の観察表⑭




第108図　第Ⅰ期出土遺物の実測図⑩




第109図　第Ⅰ期出土遺物の実測図⑪

| NO. | 形　態　の　特　徴 |
|---|---|
| 188<br>角釘(?) | 残存長さ　2.9 cm<br>厚さ・幅　0.4 × 0.5cm<br>重さ　2.61 g |
| 189<br>釘 (?) | 残存長さ　3.4 cm<br>厚さ・幅　0.5 × 0.9cm<br>重さ　6.53 g |
| 190<br>角　釘 | 残存長さ　4.7 cm<br>厚さ・幅　0.45× 0.6cm<br>重さ　4.17 g |
| 191<br>角　釘 | 残存長さ　4.6 cm<br>厚さ・幅　0.4 × 0.6cm<br>重さ　7.97 g |
| 192<br>角　釘 | 残存長さ　5.1 cm<br>厚さ・幅　0.4 × 0.6cm<br>重さ　7.60 g |
| 193<br>角　釘 | 残存長さ　4.7 cm<br>厚さ・幅　0.7 × 0.9cm<br>重さ　11.28 g |
| 194<br>角　釘 | 残存長さ　6.2 cm<br>厚さ・幅　0.8 × 0.7cm<br>重さ　11.30 g |
| 195<br>釘 | 残存長さ　5.3 cm<br>厚さ・幅　0.7 × 0.9cm<br>重さ　11.26 g |
| 196<br>角　釘 | 残存長さ　6.5 cm<br>厚さ・幅　0.5 × 0.5cm<br>重さ　11.26 g |
| 197<br>釘 | 残存長さ　4.8 cm<br>厚さ・幅　0.7 × 0.8cm<br>重さ　11.54 g |
| 198<br>釘 | 残存長さ　4.7 cm<br>厚さ・幅　0.8 ×0.65cm<br>重さ　11.60 g |
| 199<br>角　釘 | 残存長さ　5.0 cm<br>厚さ・幅　0.6 × 0.8cm<br>重さ　12.20 g |
| 200<br>鉄　器 | 残存長さ　2.5 cm<br>厚さ・幅　0.5 × 0.7cm<br>重さ　7.06 g |
| 201<br>金具(?) | 残存長さ　2.9 cm<br>厚さ・幅　1.1 × 0.8cm<br>重さ　17.53 g |
| 202<br>小　刀 | (先端部) 残存長さ　3.2 cm<br>(端　部) 残存長さ　3.2 cm<br>厚さ　0.35～0.55cm<br>幅　1.3 cm<br>重さ　8.26 g |

| NO. | 形　態　の　特　徴 |
|---|---|
| 203<br>鉄　器 | 残存長さ　3.9 cm<br>断面形は楕円形<br>長形　1.0 cm<br>短径　0.9 cm<br>重さ　6.27 g |
| 204<br>角　釘 | 残存長さ　4.6 cm<br>厚さ・幅　0.5 × 0.5cm<br>重さ　11.78 g |
| 205<br>角　釘 | (中途) 厚さ・幅　0.7 × 0.8cm<br>(端部) 厚さ・幅　0.4 × 0.5cm<br>重さ　4.47 g |
| 206<br>鉄片(?) | 残存長さ　4.1 cm<br>厚さ・幅　1.1 × 1.5cm<br>重さ　14.11 g |
| 207<br>角　釘 | 残存長さ　7.3 cm<br>厚さ・幅　0.9 × 0.8cm<br>重さ　13.91 g |
| 208<br>鉄　器 | 残存長さ　2.8 cm<br>厚さ・幅　0.7 × 3.1cm<br>重さ　11.32 g |
| 209<br>釘 | 残存長さ　6.0 cm<br>厚さ・幅　0.8 × 0.9cm<br>重さ　7.42 g |
| 210<br>鉄　器 | 残存長さ　6.1 cm<br>厚さ　0.7 cm<br>幅 (最大) 1.8 cm<br>(最小) 0.5 cm<br>重さ　11.90 g |
| 211<br>鉄　器 | 残存長さ　6.2 cm<br>厚さ　0.3 cm<br>幅 (最大) 1.2 cm<br>(最小) 0.3 cm<br>重さ　11.30 g |
| 212<br>角　釘 | 残存長さ　6.6 cm<br>厚さ・幅　0.85× 0.9cm<br>重さ　17.50 g |
| 213<br>楔(?) | 残存長さ　6.7 cm<br>厚さ・幅　0.8 × 1.4cm<br>重さ　21.18 g |
| 214<br>鉄　器 | 残存長さ　6.0 cm<br>(中途) 厚さ・幅　1.2 × 0.9cm<br>(端部) 厚さ・幅　0.6 × 0.6cm |
| 215<br>楔(?) | 残存長さ　6.0 cm<br>厚さ・幅　1.0 × 1.4cm<br>重さ　19.25 g |

第98表　第Ⅰ期出土遺物の観察表⑮

## 第２節　第Ⅱ期整地層出土の遺物

216～236は青磁の碗である。216～227・233は器面に文様が描かれている。内外器面には216、内器面のみは217・219・220、外器面のみは218・221～224・227・233となる。228・229～232・234・236は無文である。釉色は灰緑色が216・224・236で、オリーブ黄灰色が217・222、オリーブ灰色が218・219・230、淡い緑黄色が220、緑青白色が221・233、緑黄灰色が223、青白色が227、緑白青色が228、緑白灰色が231・232、緑灰色が234、灰白緑色が235、灰緑色が236である。

器面に文様を有するものの中で、削り出しによる蓮弁（花弁）文様が描かれているのは、218と221～227・233である。この中で文様が鮮明なもの〔224〕と、薄いもの〔218・233〕とがあり、削り出しの度合いに差異がある。221・227は花弁の中央を下る縦線が弱い稜線となり、白色化している。222・223の花弁の先端は鋭角を呈する。

器面に貫入が走るのは224・231～233である。

その他、216は体部が直線的に伸びて口縁で大きく外弯する。復元口径15.5cmを測り、外器面の残存部に、左上から右下への斜線が５本と、右上から左下へ櫛描文が７本描かれている。内器面に、２枚の重なり合う花弁文様が描かれ、口縁下に横線が巡る。217は内器面の上位に薄い３条の沈線が巡り、中位に薄い３条の櫛描文が描かれている。

219・220は高台付きの底部である。219は復元底径7.4cm・高さ５mm、220は底径5.6cm・高さ２mmを測る。219は高台の畳付きが扁平で幅４mmを測り、内器面に曲線文様が描かれている。外器面は高台の畳付きを含めて全面に施釉されており、外底面にトチが付着する。同安窯系の青磁と思われる。

220は底部が肥厚し（厚さ1.6cm）高台の畳付きは扁平である（幅５mm）。内底面に幾何学文様が描かれており、外底面の大部分は露胎となっている。227は復元底径4.4cmを測り、高台の畳付きは扁平（幅３mm）である。高台の外側まで施釉されているが外底面は露胎である。

228・229～232・234・236の無文の青磁については、体部が外弯するものが229・231・232で、232は口縁直口気味である。230は体部が中途で腰折れとなり、内器面の屈曲部は釉溜まりの状況を呈する。

234は復元口径12.6cmを測り、体部はわずかに内弯する。非常に丁寧な造りの青磁である。235は復元底径5.9cmを測り、高台の畳付きは扁平（幅0.45cm）である。外器面に、ロクロ回転による薄い稜線と、内底面と体部の境に界線状の沈線が巡る。

237～263は白磁である。大半は碗であるが、他に合子〔237〕、皿〔238・241・243〕、小壺（推定）の類〔239・242・245～250〕がある。碗については、口縁が玉縁状を呈するもの〔251・257～259〕と、体部が薄壁で口縁直口気味のもの〔252～253・260～263〕とに分類出来る。

釉色は、白（青）色が237・241・252で、青白色が240、緑青白色が243、白灰色が239・244・246・258・260、灰白色が238・247・249・250・253、灰白黄色が248・251・259、白（黄）色が256・257、白色が261～263、緑青白色が243、灰白褐色が254、灰白緑色が255である。242は外器面が白褐色、内器面が灰（白）色を呈し、245は外器面が白灰青色、内器面が白灰色となる。

この中で、237は合子の身で、復元口径8.2cm・器高1.9cmを測る。口唇部は、上蓋の合わせのため、L字型に窪む。外器面は中途まで厚く施釉されている。

238・241・243は皿であるが、238は底径6.2cmで外底面は、やや上げ底となり、同面の釉下に糸切り痕が残る。非常に上質な白磁である。241は平底の小皿で、底部と体部は極めて薄壁（厚さ3mm）である。内器面に、周囲を二重に縁取られた薄い花弁文様が（花弁の横幅は5mm程度）が連続的に描かれている。243は、体部が口縁で大きく外弯し、屈曲部の内器面に鮮明な稜線が生じている。内器面に、花弁文様（単弁）が241と同様に、描かれている。

小壺の類〔239・242・245～250〕は、体部が肉太（246は厚さ0.9～1.3cm）の上質な白磁である。239・242は外器面に沈線の薄い曲線と横線が描かれている。内器面は、いずれも押さえの加わった極めて強い横ナデが施されており、247・248は調整箇所が沈線状を呈する。

251・257～259は口縁が玉縁状を呈するが、最も端的なものは257で、258・259・251の順にやや玉縁状の造り出しが後退する。251は復元口径17.6cmを測り、非常に丁寧な造りの白磁である。257は外器面に針穴状の気泡痕が残る。258は外器面の施釉にムラがあり、一部にトチが付着する。

260～263は体部が薄壁で口縁直口気味である。260は体部が直線的に伸びており、口唇部は扁平（幅1.5mm）で口禿げである。261は体部が若干、外弯気味に伸びる。262・263は体部が大きく外弯する。262は内器面の屈曲部に稜がつく。263は口禿げ白磁である。

その他、244は胴部につまみが付く。245は体部の途中に腰折れがあり、外器面に弱い稜線がつく。高台径は6.6cmを測る。252～254は口径が復元出来る。252は8.4cm、253は10.6cm、254は11.1cmを測り、いずれも口禿げ白磁である。体部はやや外弯する。

255・256は碗の底部である。復元の高台径は255が3.4cm、256が5.7cmを測る。

264・266～270・272は瀬戸である。釉色は264・269が黄緑色で、266が白緑黄色、267・268が淡オリーブ灰色、270が緑黄色、271は黒色である。264は瓶子（おろし皿）で、内底面に網目状の切り込みがあり、外底面の釉下に糸切り痕が残る。267・268は頸部のみの残存である。269は、頸部直下の外器面に6条の同心円状の沈線が刻まれている。内器面は横ナデ後、強い指押えが加えられ、器壁は凹凸の状態を呈する。270は瓶の一部と思われる。体部は直立気味に立ち上がり、復元底径は8.0cmを測る。外底面にトチが付着する。272は小壺の一部と思われる。外器面に4条の沈線が巡り、内器面には横ナデ後、非常に強い指押えが加えられている。

265は須恵器である。体部の屈曲部は、やや肥厚し、上位に幅1.5mmの沈線が巡る。

271は陶器である。体部と底部は肉太（厚さ1.0～1.1cm）で、復元底径は9.2cmを測る。内外器面に黒色の釉がかかる。

273～278・281・282は鉄器である。273は雁股で残存の長さ8.4cmを測る。274～276・281は刀子である。276は完形品で長さ22.8cmを測る。277・278は燭台の一部と考えられる。282は長刀であろうか、先端部をわずかに欠き、残存の長さは29.5cmを測る。横幅は先端寄りで1.9cm、中途で2.8cmである。

279は真鍮製の環である。外径2.5cm・内径1.4cm・断面径0.65×0.5cm・重さ14.91gを測る。280は銅製品で太刀の飾りと思われる。器高2.2cm・幅3.5cm・重さ13.30gである。

283～391は土師器である。283～301・311は坏で、器形はいずれも船型を呈するが、297～301・311はやや変形の船型となる。この中で、外底面に糸切り痕を残すのは284・286・288・289・291～295・297～301・311であるが、286・292～294・297・298・301は糸切り後、若干のナデが加えられているようである。283・285・287・296は、まったく糸切り痕を観察出来ない。当然の事ながらヘラ切りによる結果と思われるが、この場合は、強いナデにより糸切り痕が消滅した可能性もあり、判断には慎重を期したい。

口径が復元出来るのは283～287で、283は口径14.1cm・器高3.9cm・底径9.2cm、284は復元口径12.5cm・器高3.7cm・復元底径7.7cm、285は復元口径14.0cm・器高3.2cm・底径8.5cm、286は復元口径12.3cm・器高3.9cm・復元底径8.8cm、287は口径12.8cm・器高3.3cm・底径9.6cmを測る。この中で283は底部と体部が肉太で、外底と体部の境は大きく窪む。体部は外弯気味に伸びて、最終的に口縁は内弯し直口となる。やや、焼き締めの効いた土器で質量感がある。284は、体部が中途から同一の厚さで口縁に至る。内器面は強い横ナデにより鮮明な稜線が生じている。器面に灰褐色の不純物が付着する。

285は体部がやや薄壁で軽量土器である。286は体部が下位から上位にかけて漸次、薄壁となる。外底はやや上げ底となる。外底面は糸切り後、ナデに加えて多くの指押えが施されている。287は口縁直口気味である。器面の風化が著しい。

289は9.1cm、290は8.2cm、291・294は8.0cm、293は9.5cm、295は7.8cm、296は8.0cm、297は5.5cm、298は9.3cm、299は10.4cm、300は10.8cm、301は5.4cmを測る。288・290・292・295・301は外底面が上げ底を呈する。289・299・301は焼き締めの効いた土器である。298は底部が肥厚し、厚さ1.1cmを測る。299は内底面に、鮮明な円周方向のナデが残る。外底面は糸切り後、周縁部にヘラによるナデが加えられている。300は外底面と体部の境に沈線が巡る。外底面の糸切り調整は粗い。

297・301はやや変形の船型で、器形は第Ⅲ期文化層で出土した460の土師器坏に原形が求められる。底径に対する口径の比率が高く、体部は直線的に大きく開く。

302～310・312～319は土師器の小片である。この中で糸切り痕を残すのは、303・304・307

～310・316・319で、304・316は糸切り後、若干のナデが加えられている。306・312・313・317は外底面に糸切り痕を観察出来ない。外底面と体部の境が窪むものは、305・307・308・312・314・316である。307・310・315は焼き締めの効いた土器である。

302・305・308は体部が薄壁（厚さ２～３㎜）で、外弯気味に大きく開く。軽量土器である。303は外底が指押えにより上げ底となる。304は外底が平底である。306は底部の中央が薄壁（厚さ４㎜）である。307は底部が肥厚（厚さ1.0㎝）する。310は外底端が肥厚し、厚さ1.4㎝を測る。313は外底がやや上げ底で、内器面に灰色の不純物が付着する。314は外底端が肥厚（厚さ1.3㎝）し、体部は薄壁（厚さ３㎜）である。315は底部が丸底に近く、肥厚（厚さ1.4㎝）する。316は体部が外弯気味に直立状態で立ち上がる。317は底部が薄壁（厚さ４㎜）で、端部で肥厚（厚さ８㎜）する。

318は手ずくね土器の可能性がある。外底はやや丸底で肥厚（厚さ1.0㎝）し、内底面の中央は小突起を呈する。319の底部は、いびつで波状を呈する。軽量土器である。

320～338は瓦質の擂鉢である。条線の一単位は６本が335で、７本が334・337、10本が320・322・327、17本が331である。内器面の調整は、条線の下に斜め方向の刷け目が320～326・329・331・333で、斜め方向の刷け目に横方向の刷け目が加わっているのが327・337である。さらに横方向の刷け目が334・335で、横ナデが330である。

外器面は、粗い横ナデと縦方向の刷け目が320、叩きの後ナデ消され、一部、縦方向の刷け目が321、成形時の凹凸を鮮明に残し、粗い指押えの加わったものが331である。

体部は、内弯するものが320・322・323・325で、外弯は321である。328は片口部分の残存である。さらに体部が下位及び中途から漸次、肥厚するものは320～325で、322に限って均一の厚さで下位から口縁に至る。

口唇部が扁平、もしくはそれに近いものは、320・321・325で、幅は320が７㎜、321が６㎜、325が９㎜を測る。口唇部が窪むものは326・327・330で、幅は326が８㎜、327が９㎜、330が1.0㎝である。

329は体部が肉太で厚さ1.4㎝を測る。焼き締めの効いたものは、321・323・325～327・331・334・337であるが、328のように軟質で胎土が手に付着するものがある。328・332・338は器面の風化が著しい。

332～337は底部の残存であるが、332は外器面の調整が非常に粗く、強い肉太（幅１㎜）の条線が交差する。333は底部と比較して体部は肉太である。外器面は刷け目調整後にナデが加えられている。外底面は刷け目が施されている。334は内底面の全体に条線が描かれており、外底面に指押えが残る。335は内器面の全体に条線が掻かれている。336は、底部が薄壁で体部は肉太である。内底面と内器面に、灰褐色と褐色の不純物が付着する。337の外器面は斜め方向の刷け目で、後に軽い指押えが加えられている。非常に上質の擂鉢である。

339～360は須恵器である。339は、外底面の一部にススが付着する。340は、体部が薄壁（厚さ７～８㎜）で、内外器面は横ナデであるが、外器面の調整は粗い。極めて上質の須恵器である。

341・342は、内器面に刷け目が見られる。外器面はナデであるが、342はかすかに平行叩き目が残っている。

343～348は厚手の須恵器で大型の甕と思われる。343～347は同一系統の個体であろう。343・344は頸部で、「く」の字に大きく外弯し、最大の厚さは2.7㎝を測る。345～347は胴部で、器壁は肉太（厚さ1.5～1.9㎝）である。348は別固体の底部で器壁は1.5㎝を測り、体部はやや内弯気味に立ち上がる。器面の調整は外器面が格子目の叩きで、頸部は後に横ナデが加えられている。348は外器面が波状の叩きで外底面は未調整である。343～347の内器面と348の内底面はいずれも丁寧な横ナデであるが、348の内器面については、横及び斜め方向の刷け目が見える。いずれも焼き締めの効いた質量感のある須恵器である。

349～354・356～358は、体部が薄壁で外器面に格子目の叩きを残す。349・351～353・357は強い叩きが施されており、349の格子目の稜線は、やや丸味を帯びる。内器面の調整は349～351・353・357・358が横ナデで、352・356は刷け目調整後、丁寧な横ナデが加えられている。355の外器面に、灰黄色の不純物が付着する。

355・359・360は、上記と同じ薄壁の体部であるが、外器面に波状の叩きを残す。外器面の調整については、355の上位に斜め方向の刷け目調整と359にナデが加えられている。内器面の調整は、いずれも刷け目で、360は軽量土器である。

361・362・364・365・368・369は備前の頸部及び体部の上位部分である。大半は同一の器形を有する甕の破片であり、口縁は粘土帯が外側へ折り返されて玉縁状に肥厚するタイプである。力強く太い線が口縁に巻かれている。362・364・365・369の内外器面の調整は板状工具によるもので、非常に強く横ナデされている。364の頸部と体部の接合面は指押えの後にナデが施されている。365は外器面に２条の沈線が巡る。368は内外器面に横方向の刷け目があり、外器面にトチが付着する。

363・366・367・370・372は常滑である。366～367は頸部の破片で折端の口縁は363を除いて折り返しが著しく深く、強い力を感じさせる。内外器面の調整は板状工具による横ナデである。363は異形で口縁部が大きく弧状に外弯し、口縁直口となる。366は体部の全面が露胎を呈する。367の色調はやや黄色味を帯びる小豆色である。

370は内外器面に刷け目がみえる。刷け目の方向は、外器面が斜めで、内器面は横及び斜めである。372は外器面が縦方向で、内器面が横及び斜め方向の刷け目となる。色調は外器面がやや茶色を帯びる小豆色で、内器面はくすんだ感じの灰小豆色を呈する。

371は須恵系の中世雑器である。外器面は格子目状の叩き後、ナデが加えられおり、内器面

も粗い平行叩きが施されている。色調は外器面が灰黒黄色で、内器面は灰白黄色である。

373～377は、口径の復元が可能な備前甕の破片である。

373は復元口径27.3cm・胴部最大径37.2cm・残存器高38.5cmを測る。外器面は口縁肥厚部が横ナデで、以下は刷け状工具によるナデである。肩部に、櫛目の直線文様が2段に彫りつけられている。内器面は口縁肥厚部が横ナデ、肩部は刷け状工具によるナデの後、指押えが加えられている。肩部より以下は横ナデである。成形に際して、粘土帯を3～5段に積み上げて胴をつないでいる事がわかる。以下、374～377は同一成法をとる。色調は明るい感じの小豆色で、非常に焼き締めが効いている。肩部に灰白黄色の釉がかかる。

374は口径24.4cm、残存の胴部最大径43.8cmを測る。外器面は、全面に横ナデが施されているが、指押え痕が残る。肩部に、櫛目文様の直線文様が3段に彫りつけられている。内器面は丁寧なナデである。

375は復元口径40.8cm、胴部最大径66.4cmを測る。外器面に斜め・横・縦方向の刷け目があり、器面に指押え痕が目立つ。肩部に窯印がある。口縁肥厚部は非常に丁寧な横ナデである。内器面の上位はヘラ状工具による横ナデで、肩部から下位にかけて斜め方向の刷け目となる。376は復元口径41.6cm、胴部最大径62.6cm、残存器高30.6cmである。口縁肥厚部の内外器面は横ナデで、外器面は横・縦・斜め方向の刷け目である。内器面は横方向の薄い刷け目が施されている。377は胴部の復元最大径39.6cm、残存器高30cmを測る。外器面の上位は刷け状工具によるナデで、中位から下位にかけて、全面に不整方向のナデとなる。肩部に櫛目の直線文様が3段に彫り付けられている。内器面の上位はナデ後、指押えが施され、中位から下位は横ナデである。

378・380は常滑の胴部破片である。378は、外器面に縦方向の刷け目があり、内器面は非常に粗い横ナデで、器面に指押えの痕が鮮明に残る。380は、内外器面とも刷け状工具による横方向及び斜め方向の調整が施されている。379は備前の胴部破片で外器面に縦方向、内器面に横方向の刷け目がある。

381は常滑の大甕である。器形は突っ張り肩が特色で、胴部はこれより底部へ急速にくびれる。復元胴部の最大径62.0cm、残存の器高60cmで復元底径18.4cmを測る。外底径は著しく小さく砂底である。内器面の指頭圧痕により、基本的に幅5～6cmの太い紐造りで、帯状に延ばしながら連続的に輪積みされた成法である事がわかる。以下、383・387は同一成法をとる。調整は、外器面が縦方向の刷け目で、内器面の下位は横方向の刷け目となる。同じく内器面の中位から上位にかけて、よりきめの細かい横ナデが施されている。内器面の外縁部は円周に沿ったナデで、他は不整方向のナデとなる。

382は、甕の下位部分で外底端は肥厚（厚さ2.4cm）する。外器面は刷け目で、内器面は粗い横ナデである。

383は常滑の大甕で、復元口径45.0cm・器高69.6cm・復元底径19.4cm・胴部最大径70.8cmを測る。外器面の上位は丁寧な横ナデで、肩部にナデが施されているが、叩き目がわずかに残る。中位は縦及び斜め方向の粗い刷け目で、器面に凹凸が残る。内器面に、成形時の凹凸と指押え痕が残るが、刷け状工具による調整が施されている。上位は横ナデ、肩部から下位にかけて非常に粗い横方向の調整となる。

384は常滑甕の下位部分で、外底面は肥厚（厚さ2.5cm）し、体部は直線的に開く。外器面は刷け状工具による縦方向の粗いナデで、下位は後に横ナデが加わる。内器面はヘラ状工具と思われるもので横ナデされている。

385は備前の大甕で、体部はやや内弯気味に伸びる。復元底径24.4cm、残存器高27.2cmを測る。外底は平底で薄壁（厚さ８～９㎜）である。内外器面は主に横ナデであるが、外器面は一部に縦方向の薄い刷け目があり、内器面の下位は刷け状工具による縦方向のナデとなる。外底面は刷け状工具による縦及び横方向のナデである。色調は明るい感じの小豆色で、非常に焼き締めが効いている。

386は備前甕の胴部破片で、内外器面に横方向の刷け目が施されている。

387は常滑の甕で、復元底径14.2cmを測り、体部はやや内弯気味に立ち上がる。外底と体部の境はやや窪む。外器面の下端部に縦方向の削り痕があり、内器面については、粘土帯の接合面と思われる部分に、鮮明な指押え痕が残る。器面調整は粗い横ナデである。

388は、備前の大甕で復元底径44.0cmを測る。出土遺物の中で最大の甕である。外底は中央部から端部へ尻上がりとなる。外器面はヘラ状工具による縦方向のナデで、外底との境は強い横ナデが施されている。外底面は直交する様な刷け目が施されており、内器面と内底面は横ナデである。

389は備前の大甕で底径32.4cmを測る。焼成前における器圧の為か底部は歪む。外器面は主に縦方向のナデで、一部は刷け目である。外底との境は強目の横ナデとなる。内底面は不整方向の丁寧なナデで、外底面は刷け目状のナデである。内器面に釉の塊と外底端にトチが付着する。

390は備前の胴部破片である。内器面は横方向の刷け目であるが、成形時の凹凸や指押え痕が器面全体に残っている。

391は備前の大甕である。復元底径26.8cmを測り、外底は平底である。体部は直線的に立ち上がる。外器面の下位はヘラ状工具による横ナデである。色調は灰色で、二次焼成による変色と思われる。

392は常滑甕の肩部片である。外器面の上位は横ナデで、内器面はほとんど未調整である。成形時の指押え痕や体部の接合痕（３段）が、そのままの状態で残っている。

393は須恵器である。体部は薄壁（厚さ９㎜）で、外器面は非常に丁寧なナデである。内器

面は横及び斜め方向の刷け目が施されている。

394は陶器系の中世雑器で底径14.9cmを測り、体部は外弯気味に大きく開く。内外器面は粗い横ナデである。釉色は緑色で、外底面は露胎である。

395・396は滑石製石鍋である。口縁下に1条の突帯を削り出し、口唇部は扁平である。器面にススが付着する。395は体部がやや肉太（厚さ1.1cm）で、396は体部がわずかに内弯する。

397～399・401～406・408～410・413～419は鉄器であるが、398・405・406・408・409・410・413・419を除いて、大方のものが角釘である。内、5点〔403・404・414・418〕が完形品である。これらの長さは402が6.9cmで、厚さ・幅0.55×0.55cmを測る。403は7.1cmで0.55×0.65cm、404は7.1cmで0.5×0.55cm、414は7.3cmで0.8×0.9cm、418が12.4cmで0.45×0.5cmを測る。

400・407・411・412は砥石である。400・407は天草砥石で、411・412は粘板岩製砥石である。

400は側面に鑿を研いだ様な抉れ痕がある。上面は面取りに使用されたものと思われる。下面に、刃潰し痕が残る。手に持って使用したものであろう。

407は、両側面で刃幅の狭いものを研いだものであろう。上面は一部、欠損後も強く使用されたものと思われ、面的にねじれた様になっている。下面は丸い物の面取りに使用されたものと考えられる。

411は片面使用であるが、器面の状況からして使用の頻度は低いと思われる。母岩から叩打によって割り出され、面取りされた砥石である。

412は411と同様に片面使用であるが、器面に刃潰し的な痕が残る。

420～424は野鍛冶跡と、その周辺から出土したものである。420は瓦質擂鉢である。ほぼ完形品で片口を有し、口径24.9cm・器高10.0cm・底径12.0cmを測る。体部はやや内弯し、中途で薄壁となり、口縁部で肥厚する。条線の一単位は8本で、内器面に横及び斜め方向の刷け目がある。外器面は未調整で、器面に成形時の凹凸と縦方向の平行叩き痕が残るが、上位に限り粗い横ナデが加えられている。野鍛冶跡の炭化物と焼土中から破損の状態で出土した。

421～423は鞴の羽口で土製である。421は残存外径12.5cmで内芯径は上位で4.8cm、下位で2.7cmを測る。体部の下端に鉄滓が付着する。器面はザラザラである。422は外径8.5cmを測る。色調は褐灰色であるが、内部は桃色に熱変色している。器面はザラザラであるが図示した3点の羽口の中では、焼き締めが効いている方である。423は外径9.0cmで内芯径は2.4×2.1cmを測る。体部の下端に鉄滓が付着し、色調は褐灰（黄）色であるが、内部は乳褐色に熱変色している。422と同様に器面はザラザラの状態である。

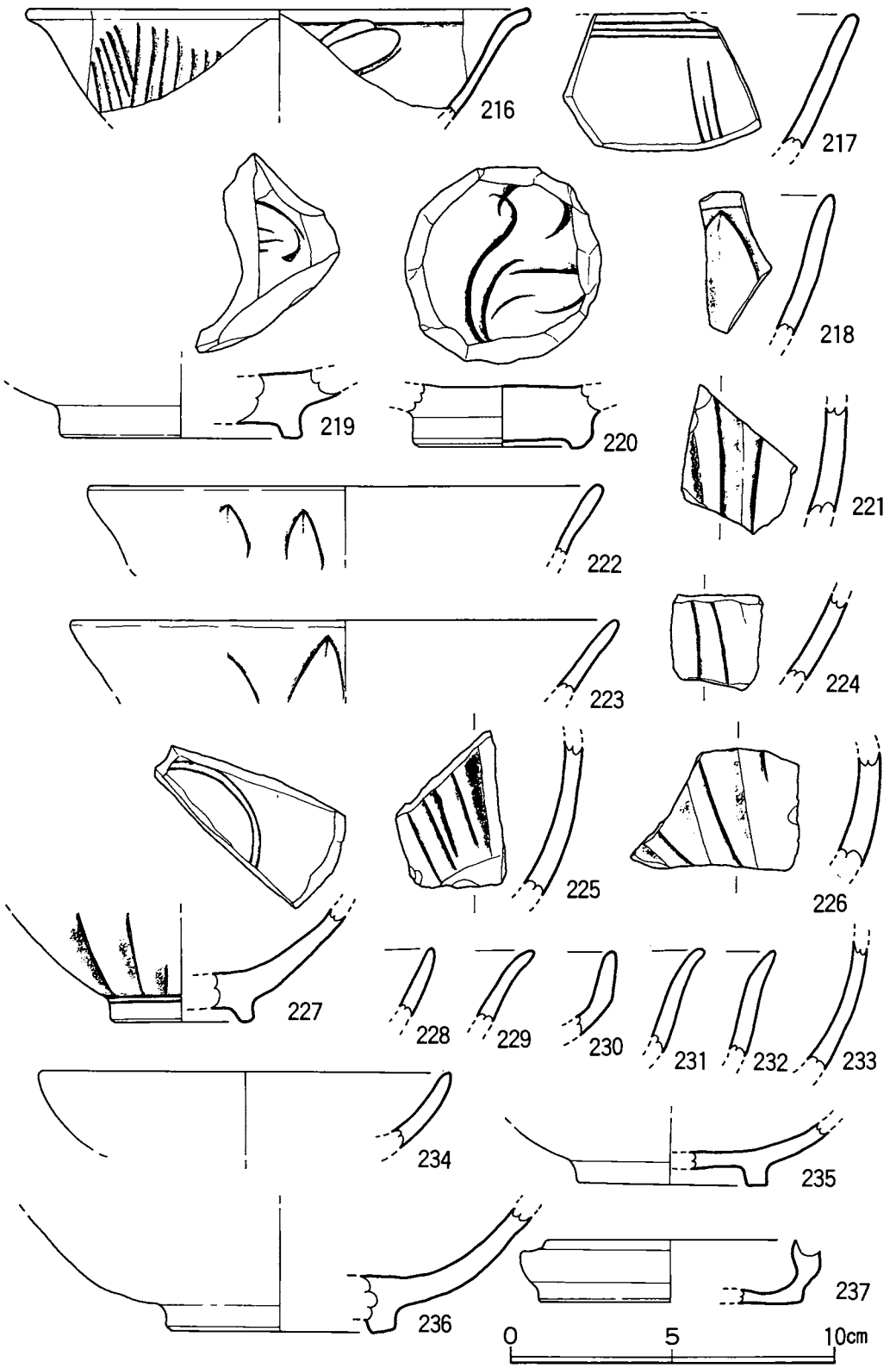
424は白磁で、口縁は玉縁状を呈する。内外器面とも丁寧なナデで、釉色は灰白色である。野鍛冶跡縁の柱穴（P－a）から出土した。

（注）第Ⅱ期整地層の出土遺物は、量的にも、まとまりを有し、山田城跡における最盛期の様子を伝えているものと思われる。特に、水甕に使用されたと思われる備前と常滑の大甕片が大量に出土した事は、山城において水の確保が、いかに重要な課題であるかを再認識させるものである。山田城跡の場合、多分に籠城に備えて備蓄用水甕であった可能性が大きい。

さらに、多くの鉄器の出土は、野鍛冶跡の遺構検出と伴に山城内における生産施設の存在が伺われて興味深い。

| NO. | 形態の特徴 | 手法・調整・文様 | 備考 |
|---|---|---|---|
| 216<br>青磁 | 体部は直線的に伸び、口縁で大きく外弯する。体部は下位より均一の厚さで口縁に至る。<br>復元口径 15.5cm | 内器面：２枚の重なり合う花弁文様<br>口縁下に横線。<br>外器面：斜線（左上→右下）５本、<br>（右上→左下）７本。 | 釉色：灰緑色。 |
| 217<br>青磁 | 体部は直線的に伸びる。 | 内器面：上位に薄い沈線（３条）、<br>中位にヘラ掻きによる薄い斜線（３条）。 | 釉色：オリーブ黄灰色。<br>釉に濁りが感じられる。 |
| 218<br>青磁 | 体部はわずかに内弯。 | 外器面：削り出しによる薄い花弁文様（蓮弁文様の一部）。 | 釉色：オリーブ灰色。 |
| 219<br>青磁 | 同安窯系青磁。<br>高台：端部はヘラ削りにより、若干尻上がりとなる。畳付きは扁平で幅 0.4cm。<br>復元底径 7.4cm　高さ 0.5cm | 内器面：曲線文様。 | 釉色：オリーブ灰色。<br>外器面は、高台の畳付きを含めて全面に施釉。<br>高台内の外底面にトチが付着。<br>非常に上質な青磁。 |
| 220<br>青磁 | 底部は肥厚（厚さ 1.6cm）。<br>高台：高さ 0.2cm、畳付きは扁平（幅 0.5cm弱）、端部は大きく削り取られ（幅 0.5cm）尻上がりとなる。<br>底径 5.6cm | 内器面：曲線文様。 | 釉色：淡い緑黄色。<br>高台の外側から、外底面にかけての施釉にムラがある。<br>外底面の大部分は露胎 |
| 221<br>青磁 | ―――― | 内器面：丁寧で滑らかな調整。<br>外器面：削り出しによる薄い蓮弁文様の一部。花弁の中央を下る縦線は弱い稜線（白色化、幅 0.3～0.5cm）となっている。 | 釉色：緑青白色。<br>内外器面に大きな貫入。 |
| 222<br>青磁 | 口縁はやや外弯し、肥厚。<br>復元口径 15.8cm | 内器面：丁寧なナデで、器面は滑らか。<br>外器面：削り出しによる蓮弁文様。<br>花弁の先端は鋭角。 | 釉色：オリーブ黄灰色。 |
| 223<br>青磁 | 体部は直線的に伸びる。<br>復元口径 16.8cm | 外器面：削り出しによる蓮弁文様。<br>花弁の先端は鋭角。 | 釉色：緑黄灰色。<br>口唇部の釉は、大方、剥落している。<br>胎土は極めて精良。 |
| 224<br>青磁 | ―――― | 外器面：削り出しによる鮮明な蓮弁文様。 | 釉色：やや、くすんだ感じの灰緑色。<br>内外器面に大きな貫入。 |
| 225<br>青磁 | ―――― | 内器面：丁寧な調整で、滑らかな器面。<br>外器面：削り出しによる蓮弁文様。<br>花弁の中央を下る縦線は、弱い稜線となっている。 | 釉色：緑灰白色。 |

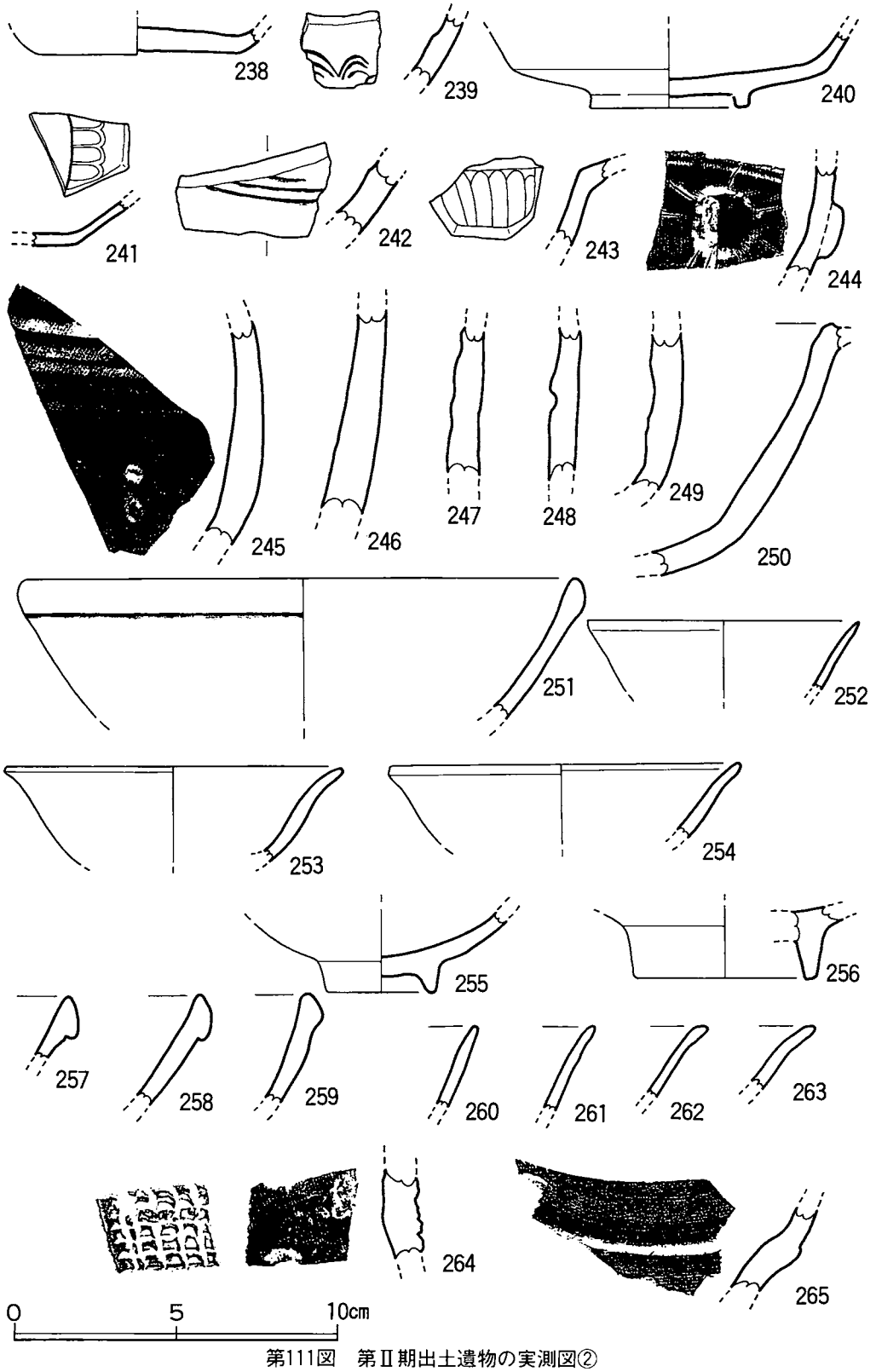
第99表　第Ⅱ期出土遺物の観察表①




第110図　第Ⅱ期出土遺物の実測図①

| NO. | 形態の特徴 | 手法・調整・文様 | 備考 |
|---|---|---|---|
| 226<br>青磁 | ―――― | 外器面：削り出しによる蓮弁文様。花弁の中央を下る縦線は、稜線を呈する。但し、削り出しの度合はやや低い。 | 釉色：外器面はオリーブ黄灰色。内器面はオリーブ灰色。<br>胎土は極めて精良で、灰白色。 |
| 227<br>青磁 | 高台：畳付きは扁平（幅0.3cm）。端部は削り取られて（幅 1.5 cm）尻上がりとなる。<br>復元底径 4.4cm | 外器面：削り出しによる蓮弁文様の下部が残る。花弁の中央を縦に下る稜線は白色化。<br>内底面：界線状の沈線。 | 釉色：明るい感じの青白色。<br>高台の外側まで施釉、畳付きは部分的な施釉、外底面は露胎。 |
| 228<br>青磁 | ―――― | ―――― | 釉色：緑白青色。<br>器面全体に白黄色の不純物が付着。<br>内外器面に細かな貫入。 |
| 229<br>青磁 | 口縁は外弯。 | ―――― | 釉色：くすんだ感じのオリーブ灰色。 |
| 230<br>青磁 | 体部は中途で腰折れとなり、内器面の屈曲部は釉溜りの状況を呈する。 | ―――― | 釉色：オリーブ灰色。 |
| 231<br>青磁 | 口縁は外弯。 | ―――― | 釉色：緑白灰色。<br>内外器面に大きな貫入。 |
| 232<br>青磁 | 口縁は、やや外弯し、直口気味。 | ―――― | 釉色：緑白灰色。<br>内外器面に大きな貫入。 |
| 233<br>青磁 | ―――― | 外器面：蓮弁文様が薄く残る。 | 釉色：緑青白色。<br>内外器面に大きな貫入。<br>外器面に細かな貫入。 |
| 234<br>青磁 | 体部は、わずかに内弯。<br>復元口径 12.6cm | 外器面：ごく浅い沈線。 | 釉色：透明感のある緑灰色。<br>非常に丁寧な造りの青磁。 |
| 235<br>青磁 | 高台：内外両側は、非常に端的な削り。畳付きは扁平（幅0.45cm）。<br>復元底径 5.9cm | ―――― | 釉色：灰白緑色。<br>高台内側まで施釉（但し、外底面の一部は露胎）。 |
| 236<br>青磁 | 高台の畳付きは、きわめて扁平（幅0.6cm）。端部は削り取られて、尻上がりとなる。 | 内器面：内底面と体部の境に界線状の沈線が巡る。<br>外器面：ロクロ回転による薄い稜線が巡る。 | 釉色：灰緑色。<br>内外器面に、灰褐色の不純物が粉をまいた様に付着する。 |
| 237<br>白磁 | 合子の下半分。<br>口唇部は、上蓋の合わせのためし字型に窪む。<br>復元口径 8.2cm<br>器高 1.9cm | 外底と体部の境に沈線。 | 釉色：白（青）色。<br>口唇部と口縁の内側直下を除き、内器面に施釉、露胎部分は、白（褐）色。<br>外器面は中途まで厚く施釉。<br>露胎部分は乳白色で、施釉との境は薄茶色を呈する。 |
| 238<br>白磁 | 白磁皿。<br>外底面は、やや上げ底。<br>内底面の中央は凸（厚さ 0.7cm）となり、端部で 0.6cm。<br>底径 6.2cm | 外底と体部の境に薄い稜線。<br>外底面：釉下に糸切り痕が残る。内底面と体部の境に界線状の沈線（釉溜りを呈する）。 | 釉色：灰白色。 |
| 239<br>白磁 | ―――― | 内器面：強い横ナデ。<br>外器面：薄い横線（沈線）。 | 釉色：白灰色。 |
| 240<br>白磁 | 高台：高さ 0.4cm、やや外側へ張り出す。<br>体部は薄壁（厚さ 0.3～0.6cm）。<br>内底面の中央部は、わずかに窪む。<br>復元底径 4.8cm | 外底と外器面の境に鮮明な稜線。 | 釉色：青白色、施釉は全体的に薄い。<br>内底面には、砂粒状のものが器面に付着しており、ザラザラしている。<br>器面は、やや光沢あり。<br>高台の畳付きから外底面にかけて、露胎。 |

第100表　第Ⅱ期出土遺物の観察表②



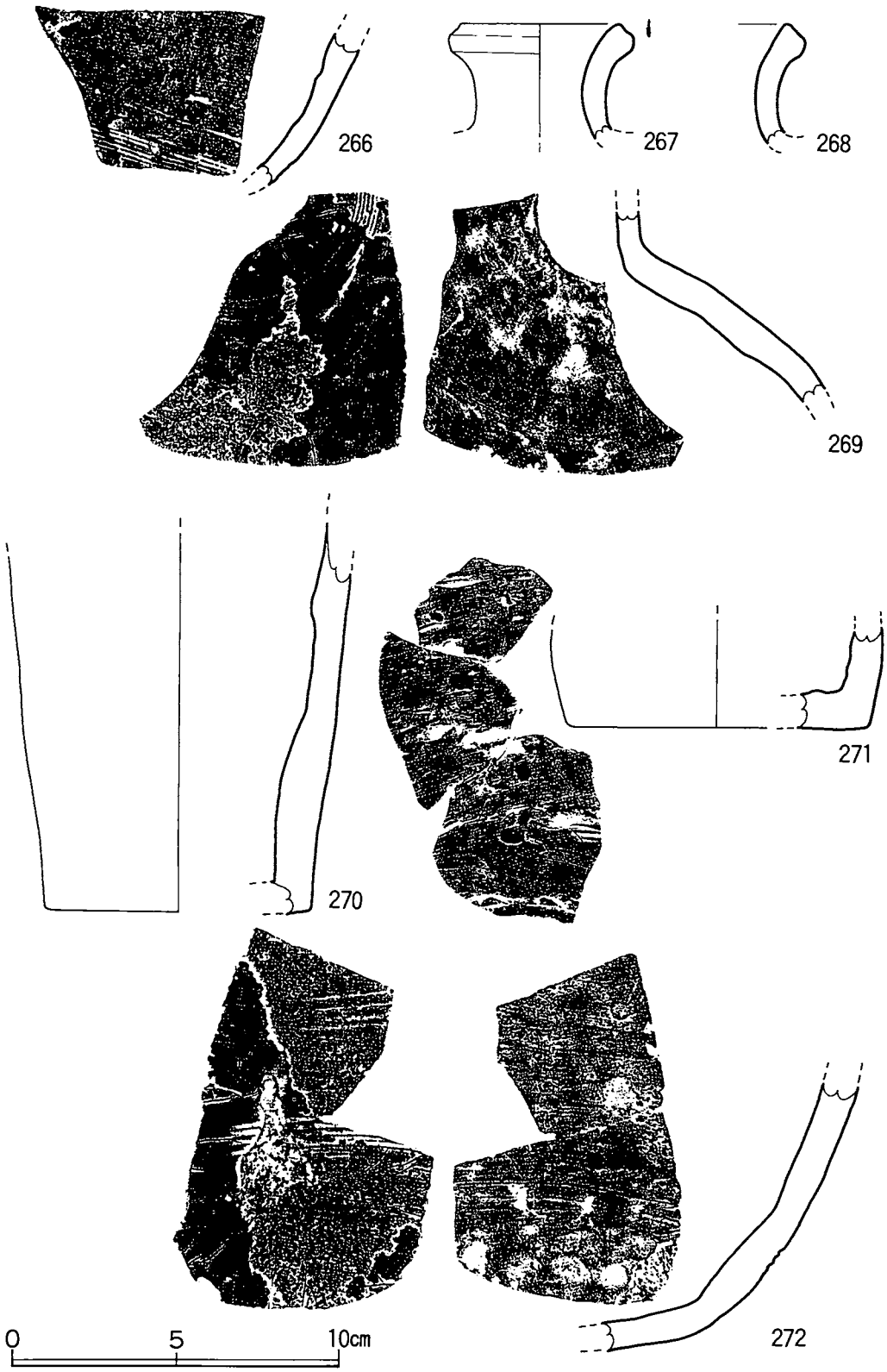

第111図　第Ⅱ期出土遺物の実測図②

| NO. | 形態の特徴 | 手法・調整・文様 | 備考 |
|---|---|---|---|
| 241<br>白磁 | 平底の小皿で、底部と体部は極めて薄壁（厚さ 0.3cm）。 | 外底と体部の境に鮮明な稜線。<br>内器面：薄い花弁文様（花弁の横幅は 0.5cm程度）。 | 釉色：白（青）色。<br>内外器面の全面に施釉。<br>上質の白磁。 |
| 242<br>白磁 | ―――― | 外器面：薄い横線（沈線）。 | 釉色：外器面は白褐色。<br>内器面は灰（白）色。<br>内器面に細かな貫入。 |
| 243<br>白磁 | 体部は口縁で大きく外弯する。屈曲部の内器面に鮮明な稜線（白色）。 | 内器面：花弁文様（花弁の横幅は 0.5～0.6cm)。 | 釉色：緑青白色。 |
| 244<br>白磁 | 胴部につまみが貼り付く。 | 内器面：強い横ナデに、押えが加わる。<br>外器面：体部の上位に２条の沈線。 | 釉色：白灰色。<br>内器面の一部に露胎部分あり、細かな貫入が入る。<br>非常に上質な白磁。 |
| 245<br>白磁 | 体部の中途に、腰折れがあり、弱い稜線が付く。<br>高台径 6.6cm | 内器面：強い横ナデに、押えが加わる。 | 釉色：内器面は白灰色。<br>外器面は白灰青色。 |
| 246<br>白磁 | 体部は肉太（厚さ 0.9～1.3cm)。 | 内器面：強い横ナデに、押えが加わる。 | 釉色：白灰色。<br>内外器面に大きな貫入。 |
| 247<br>白磁 | ―――― | 内器面：強い横ナデで生じた３条の沈線（幅 0.3～0.5cm)。 | 釉色：灰白色、外器面の下部は露胎。<br>内外器面に細かく白っぽい貫入。 |
| 248<br>白磁 | ―――― | 内器面：中途に幅 0.7cm、深さ0.15cmの沈線（強い横ナデに押えが加わったもの）。<br>外器面：２条の薄い沈線（幅は 2.1cm）。 | 釉色：灰白黄色。 |
| 249<br>白磁 | ―――― | 内器面：強い横ナデに、押えが加わる。<br>外器面：中途に２条の稜線（白色）<br>稜線の幅は 0.9cm。 | 釉色：灰白色。<br>外器面に細かな貫入（白色）。 |
| 250<br>白磁 | ―――― | 内器面：弱い横ナデ。<br>外器面：下位に弱い稜線。 | 釉色：内器面は、くすんだ感じの灰白色、外器面は灰白色。 |
| 251<br>白磁 | 体部は、わずかに内弯。<br>口縁は、不完全ながら玉縁状を呈する。<br>復元口径 17.6cm | ―――― | 釉色：ややくすんだ感じの灰白黄色。<br>非常に丁寧な造りの白磁。 |
| 252<br>白磁 | 口禿げ白磁。<br>体部の上位はわずかに外弯。<br>口縁直口。<br>口縁の内外両器面は、各々、0.25cm幅で露胎（色調は薄茶色）。<br>復元口径 8.4cm | 内器面：丁寧なナデで、滑らかな器面。<br>外器面：薄い横ナデ。 | 釉色：白（青）色。 |
| 253<br>白磁 | 口禿げ白磁。<br>体部は口縁近くで、やや外弯。<br>口縁の内側は0.35cm、外側は0.15cmの幅で削り取られている。<br>復元口径 10.6cm | 外器面：上位に、ごく薄い沈線。 | 釉色：灰白色。<br>非常に上質な白磁。 |
| 254<br>白磁 | 口禿げ白磁。<br>口縁は内側に幅0.25cm、外側に 0.2cmの露胎部分（色調は薄茶色）がある。<br>内器面は施釉と露胎の間に、帯状の白色釉（幅 0.2cm）。<br>復元口径 11.1cm | 内器面：丁寧なナデで、滑らかな器面。 | 釉色：灰白褐色。<br>外器面に少し貫入が入る。 |

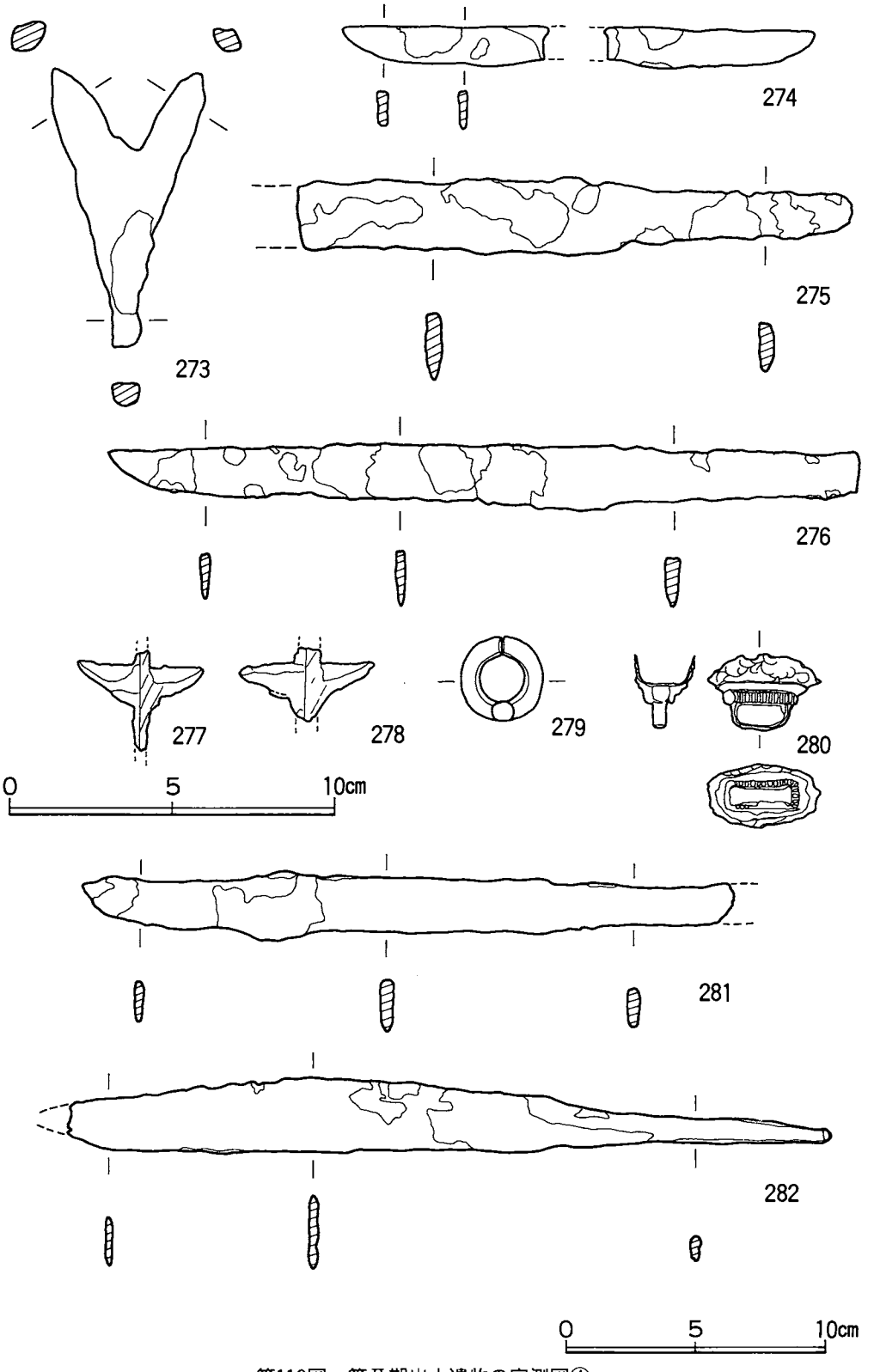
第101表　第Ⅱ期出土遺物の観察表③

| NO. | 形態の特徴 | 手法・調整・文様 | 備考 |
|---|---|---|---|
| 255<br>白磁 | 復元底径　3.4cm<br>高台の高さ　0.5cm | 外器面：かすかに、蓮弁文様の下部が残る。 | 釉色：くすんだ感じの灰白緑色。<br>高台の畳付きから内側にかけて露胎。<br>外底面には施釉。<br>内器面の釉中に不純物が混入。<br>胎土は極めて精良。 |
| 256<br>白磁 | 高台：高さ 1.1cm、畳付きは扁平で幅0.35cm。<br>復元底径　5.7cm | 高台：外側から内側にかけて、非常に丁寧な横ナデ。 | 釉色：白（黄）色、光沢あり。<br>高台の外側から内側にかけて露胎。 |
| 257<br>白磁 | 口縁は、端的な玉縁状を呈する。 | 体部は、やや内弯。 | 釉色：白（黄）色。<br>器面の一部に釉が垂れている。<br>外器面に針穴状の気泡の痕がある。 |
| 258<br>白磁 | 口縁は玉縁状を呈する。 | 内器面：丁寧なナデで、滑らかな器面。 | 釉色：白灰色。<br>外器面は、やや施釉にムラがあり、一部にトチが付着。 |
| 259<br>白磁 | 体部は、やや内弯。<br>口縁は玉縁状を呈する。 | ―――― | 釉色：灰白黄色。<br>光沢あり。外器面の２ケ所に釉が厚く垂れた跡がある。 |
| 260<br>白磁 | 体部は直線的に伸びる。<br>口唇部は扁平（幅0.15cm）で露胎。 | ―――― | 釉色：白灰色。 |
| 261<br>白磁 | 体部は直線的であるが、若干、外弯気味に伸びる。 | ―――― | 釉色：白色。 |
| 262<br>白磁 | 体部は非常に薄壁（厚さ 0.2～0.3cm）で、下位より上位にかけて、漸次、肥厚。<br>口縁は大きく外弯、内器面の屈曲部に稜がつく。 | ―――― | 釉色：白色。 |
| 263<br>白磁 | 口禿げ白磁。<br>口縁は外弯。<br>口縁の内側で幅 0.4cm、外側で幅 0.2cmが露胎（色調は白褐色）。 | ―――― | 釉色：白色。<br>内器面にやや、大きい貫入。 |
| 264<br>瀬戸擂鉢 | ―――― | 内底面：網目状の切り込み。<br>外底面：釉下に糸切り痕が残る。 | 釉色：黄緑色。<br>内底面の施釉に斑がある。<br>外底面の一部にトチが付着。 |
| 265<br>須恵器 | 体部の屈曲部は、やや肥厚し、上位に幅0.15cmの沈線。 | 内外器面：丁寧な横ナデ。 | ―――― |
| 266<br>瀬戸系陶器 | ―――― | 内器面：横ナデ。 | 釉色：白緑黄色。<br>外器面の釉はほとんど剝落している。 |
| 267<br>瀬　戸 | 頸部は「く」の字に外弯。<br>268と同一固体の可能性あり。 | 口唇部直下と体部の境に端的なアクセント。 | 釉色：淡オリーブ灰色。<br>内器面に自然釉が流れ込んでいる。 |
| 268<br>瀬　戸 | 頸部は「く」の字に外弯。 | 口唇部は、若干窪む（釉溜りが出来ている）。 | 釉色：淡オリーブ灰色。<br>外器面に自然釉がまだらにかかる。 |
| 269<br>瀬　戸 | ―――― | 内器面：横ナデ後、強い指押え。器壁は凹凸の状態。下位は横ナデ。頸部の内器面は、丁寧な横ナデ。<br>外器面：頸部直下に同心円状の沈線（６条）。 | 釉色：黄緑色。<br>頸部の内器面に、一部、釉が垂れている。 |

第102表　第Ⅱ期出土遺物の観察表④




第112図　第Ⅱ期出土遺物の実測図③




第113図　第Ⅱ期出土遺物の実測図④

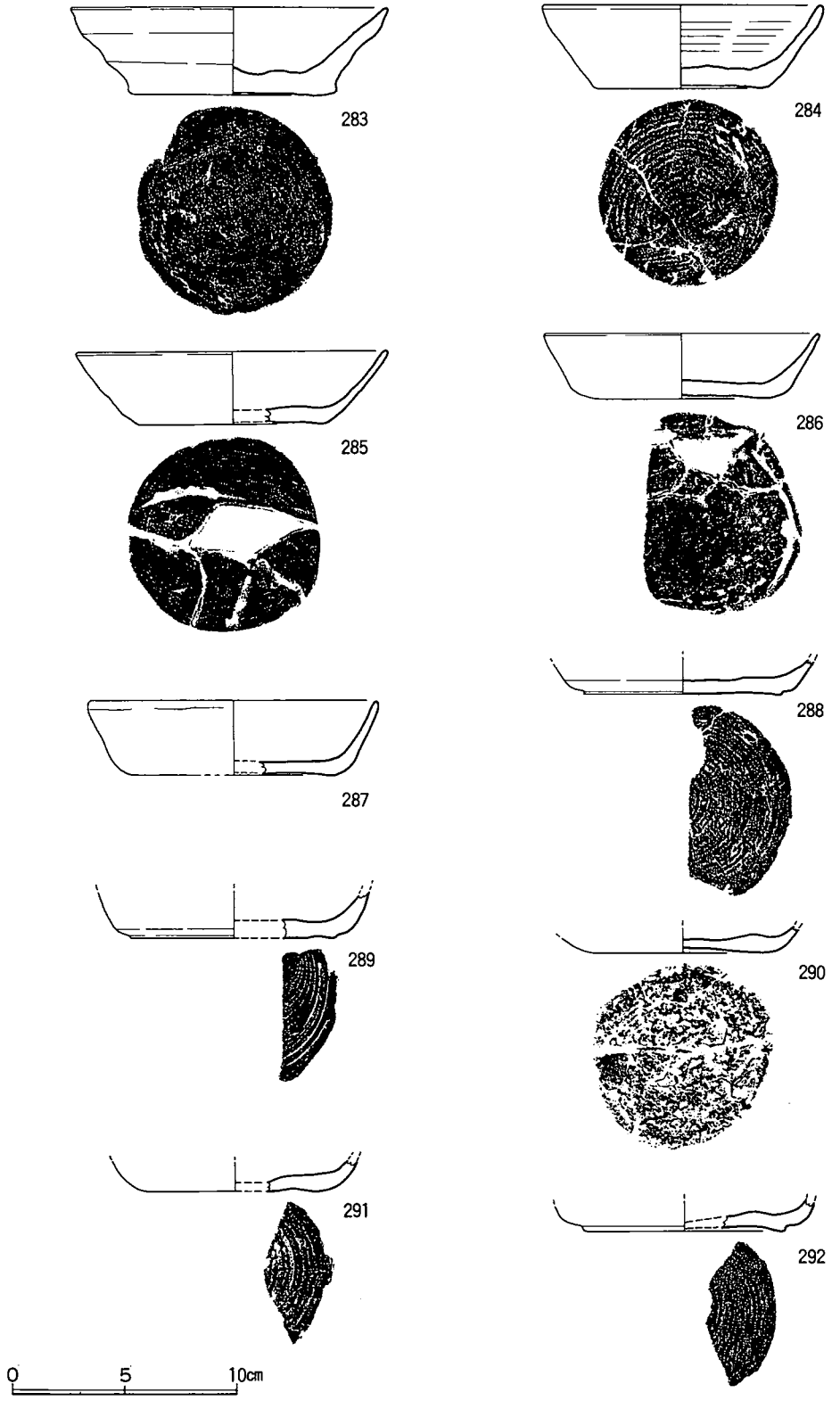
| NO. | 形　態　の　特　徴 | 手法・調整・文様 | 備　　考 |
|---|---|---|---|
| 270<br>瀬　戸 | 瓶の一部。<br>体部は、直立気味に立ち上がる。<br>復元底径　8.0cm | 内器面：横及び斜め方向のナデ、上位は後に、軽い指押えが加えられている。<br>外器面：丁寧な横ナデ。 | 胎土：白褐色。<br>釉色：緑黄色。<br>器面の一部に、緑黄色の釉が帯状に垂れている。外底面にトチが付着。 |
| 271<br>瀬　戸 | 体部と底部は肉太（体部の厚さ 1.0cm、底部は 1.1cm）。<br>外底は平底と思われる。<br>復元底径　9.2cm | 内器面：横ナデ。 | 釉色：黒色（若干黒褐色が混じる）。<br>内外器面に施釉。 |
| 272<br>瀬　戸 | 壺の一部。 | 内器面：上位は横ナデ後、非常に強い指押え。中途に丁寧な横ナデ。下位は、横ナデ後に軽い指押え。<br>外器面：上位は丁寧な横ナデ。中途に4条の沈線。下位に非常に弱い4条の沈線。 | 施釉：外器面に淡い緑黄色。 |

| NO. | 形　態　の　特　徴 |
|---|---|
| 273<br>雁　股 | 鉄器<br>残存長さ　8.4 cm<br>厚さ・幅　0.7 × 0.9cm<br>重さ　64.30 g |
| 274<br>刀　子 | 先端～中途　残存長さ　6.4 cm<br>厚さ　0.2 ～0.3cm<br>幅　1.1 cm<br>中途～端部　残存長さ　6.3 cm<br>重さ　7.54 g |
| 275<br>刀　子 | 残存長さ　16.9 cm<br>厚さ（中途）　0.5 cm<br>（端部）　0.45cm<br>幅　（中途）　2.0 cm<br>（端部）　1.5 cm<br>重さ　49.38 g |
| 276<br>刀　子 | 長さ　22.8 cm<br>厚さ（先端）　0.3 cm<br>（中途）　0.3 cm<br>（端部）　0.45cm<br>幅　（先端）　0.85cm<br>（中途）　1.7 cm<br>（端部）　1.45cm<br>重さ　36.60 g |
| 277<br>燭台(?) | 鉄器<br>残存長さ　3.0 cm<br>横幅　3.9 cm<br>重さ　12.51 g |

| NO. | 形　態　の　特　徴 |
|---|---|
| 278<br>燭台(?) | 残存長さ　2.2 cm<br>横幅　4.2 cm<br>重さ　14.53 g |
| 279<br>環 | 外径　2.5 cm<br>内径　1.4 cm<br>断面径　0.65× 0.5cm<br>重さ　14.91 g |
| 280<br>太刀飾り<br>(?) | 器高　2.2 cm<br>幅　3.5 cm<br>重さ　13.30 g |
| 281<br>刀　子 | 残存長さ　25.2 cm<br>厚さ（先端）　0.35cm<br>（中途）　0.5 cm<br>（端部）　0.5 cm<br>幅　（先端）　1.6 cm<br>（中途）　2.0 cm<br>（端部）　1.5 cm<br>重さ　127.86 g |
| 282<br>長刀(?) | 残存長さ　29.5 cm<br>厚さ（先端）　0.3 cm<br>（中途）　0.4 cm<br>（端部）　0.4 cm<br>幅　（先端）　1.9 cm<br>（中途）　2.8 cm<br>（端部）　0.9 cm<br>重さ　42.148 g |

| NO. | 形　態　の　特　徴 | 手法・調整・文様 | 備　　考 |
|---|---|---|---|
| 283<br>土師器 | 器形は船型の変形、外底は平底。<br>体部は肉太（底部の厚さ 1.0cm、体部の中途の厚さ 0.6cm）で、外弯気味に伸びているが、最終的に口縁は内弯及び直口となる。<br>口径　14.1 cm<br>器高　3.9 cm<br>底径　9.2 cm | 外底と体部の境は、大きく窪む。<br>内器面：丁寧な横ナデ。<br>外器面：強い横ナデで、幅2cm程の沈線。<br>内底面：円周方向のナデで、鮮明な稜線。中央部は凸。<br>外底面：糸切り痕は観察出来ず。 | 釉色：乳白色。<br>やや、焼き締めが効いている。<br>質量感のある土器。 |

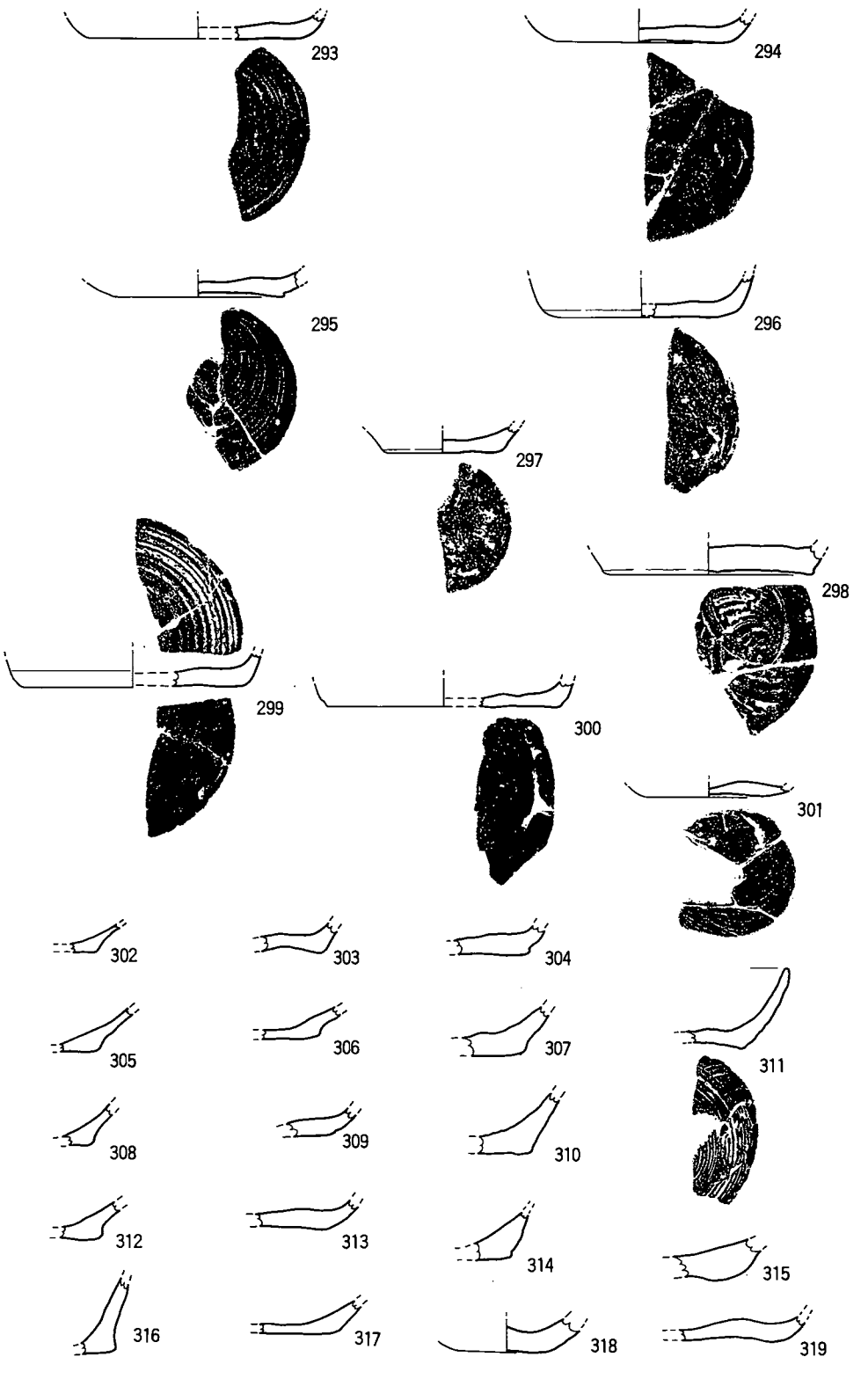
第103表　第Ⅱ期出土遺物の観察表⑤




第114図　第Ⅱ期出土遺物の実測図⑤

| NO. | 形　態　の　特　徴 | 手法・調整・文様 | 備　　考 |
|---|---|---|---|
| 284<br>土師器 | 器形は船型。体部は直線的に開き、中途から同一の厚さで口縁に至る。<br>外底端は焼成前の器圧で、わずかにしゃげた状態。<br>外底は、少々上げ底。<br>復元底径　12.5cm<br>器高　　3.7cm<br>復元底径　7.7cm | 内器面：強い横ナデ、鮮明な稜線。<br>外器面：横ナデ。<br>内底面：円周方向のナデ、中央は軽い指押え。<br>外底面：糸切り痕に板目圧痕が加わる。 | 色調：鈍い灰橙色。<br>非常に汚れた器面である。器面の風化が重なって、灰褐色の不純物が水洗いしても落ちない状況を呈する。 |
| 285<br>土師器 | 器形は船型であるが、やや歪。<br>体部は直線的に開き、中途から同一の厚さで口縁に至る。<br>外底は、やや上げ底。<br>復元口径　14.0cm<br>器高　　3.2cm<br>底径　　8.5cm | 外底と体部の境に、わずかな窪み。<br>内器面・内底面：強いナデ。<br>外器面：強いが、やや雑な横ナデ。<br>外底面：糸切り痕は観察出来ず。 | 色調：灰褐色、口唇部と内器面の一部が灰黒色化。<br>軽量土器。 |
| 286<br>土師器 | 器形は船型、体部は下位から上位にかけて漸次、薄壁となる。<br>復元口径　12.3cm<br>器高　　3.9cm<br>復元底径　8.8cm | 内器面：ナデ。<br>外器面：丁寧なナデ。<br>内底面：ナデ後、軽い指押え。<br>外底面：ナデ後、多くの指押え。<br>但し、器面は粗い感じ。 | 色調：橙色。 |
| 287<br>土師器 | 器形は船型。<br>口縁は直口気味。<br>口径　12.8cm<br>器高　3.3cm<br>底径　9.6cm | 外底面：糸切り痕は観察出来ず。 | 色調：鈍い橙色。<br>器面の風化が著しい。 |
| 288<br>土師器 | 外底はわずかに上げ底。<br>外底端は焼成前の器圧で、しゃげた状態。<br>底径　8.8cm | 内器面：円周方向のナデ。<br>外底面：糸切り痕。 | 色調：褐灰色。 |
| 289<br>土師器 | 外底端は焼成前の器圧で、しゃげた状態。<br>底径　9.1cm | 内器面：ナデ。<br>外器面：横ナデ。<br>外底面：鮮明な糸切り痕。 | 色調：鈍い橙色。<br>やや、焼き締めが効いている。 |
| 290<br>土師器 | 底部は端部寄りで肥厚（厚さ0.8cm）<br>外底は上げ底、中央部で薄壁（厚さ0.3cm）。<br>底径　8.2cm | ―――――― | 色調：乳白色。<br>器面の風化が著しい。 |
| 291<br>土師器 | 底径　8.0cm | 外底と体部の境に浅い沈線。<br>内底面：ナデ。<br>外底面：糸切り痕。 | 色調：褐灰色。<br>やや焼成不良。 |
| 292<br>土師器 | 外底は上げ底。<br>外底端は焼成前の器圧で、しゃげている。<br>底径　8.8cm | 外底と体部の境に沈線。<br>内底面：器面全体が盛り上がり、体部との境は、やや窪む。<br>外底面：糸切り後、ナデが加わる。 | 色調：鈍い橙色。 |
| 293<br>土師器 | 底径　9.5cm | 内底面：ナデ。<br>外底面：糸切り後、ナデが加わる。 | 色調：褐灰色。 |
| 294<br>土師器 | 底径　8.0cm | 内底面：強いナデ、薄い稜線。<br>外底面：糸切り後、強いナデが加わる。 | 色調：乳白色。<br>精良な胎土。 |
| 295<br>土師器 | 外底は上げ底。<br>内底面はドーナツ状に盛り上がる。<br>底径　7.8cm | 内底面：横ナデ。<br>外底面：糸切り痕の周縁に、糸切りによる沈線。 | 色調：乳白色。 |
| 296<br>土師器 | 底径　8.0cm | 内底面：横ナデ後、軽い指押え。<br>外底面：糸切り痕は観察出来ず。 | 色調：橙色。<br>胎土に小豆粒大の小礫を含む。 |

第104表　第Ⅱ期出土遺物の観察表⑥



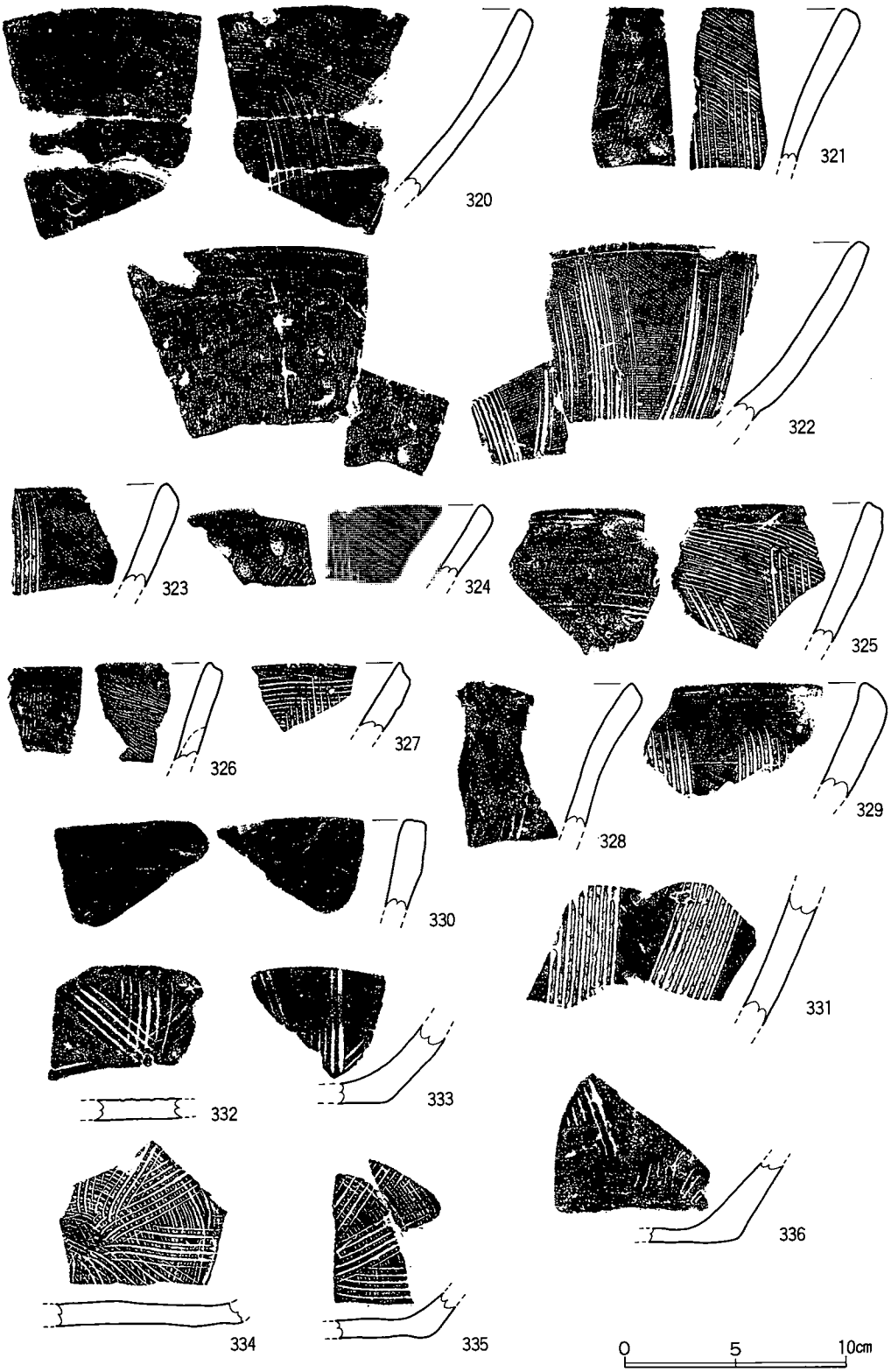

第115図　第Ⅱ期出土遺物の実測図⑥

| NO. | 形態の特徴 | 手法・調整・文様 | 備考 |
|---|---|---|---|
| 297<br>土師器 | 復元底径　5.5cm | 内底面：多少、雑なナデ。<br>外底面：糸切り後、強いナデ。 | 色調：明褐色。<br>やや焼成不良。<br>内器面に灰褐色の不純物が付着。 |
| 298<br>土師器 | 底径　9.3cm<br>底部は肥厚（厚さ 1.1cm）。 | 外器面：横ナデ。<br>内底面：円周方向のナデ。<br>外底面：糸切り痕。周縁は、後にナデが加えられている。 | 色調：鈍い橙色。 |
| 299<br>土師器 | 復元底径　10.4cm | 内底面：鮮明な円周方向のナデ。<br>外底面：糸切り後、周縁部はヘラによるナデ。 | 色調：褐白桃色。<br>やや、焼き締めがきいている。 |
| 300<br>土師器 | 復元底径　10.8cm | 外底と体部の境に沈線。<br>外底面：粗い調整の糸切り痕。 | 色調：褐白灰色。<br>器面の風化が著しい。 |
| 301<br>土師器 | 外底は上げ底。<br>底部の中央部は薄壁（厚さ0.3cm）。<br>底径　5.4cm | 内底面：中央部は指押え、全体的に盛り上がる。<br>外底面：糸切り後、ナデが加えられている。 | 色調：鈍い橙色。<br>焼き締めの効いた土器。 |
| 302<br>土師器 | 外底端は肥厚（厚さ 0.7cm）。<br>体部は薄壁（厚さ 0.2cm）。<br>体部は外弯気味に大きく開く。 | ―――――― | 色調：鈍い橙色。<br>軽量土器。 |
| 303<br>土師器 | 外底は、指押さえにより上げ底。<br>歪な器形。 | 外器面：強い横ナデ。<br>外底面：糸切り後、ナデが加えられている。 | 色調：灰褐色。 |
| 304<br>土師器 | 外底は平底、端部はやや肥厚（厚さ 1.0cm）。 | 外底と体部の境に沈線。<br>内底面：強い横ナデ。<br>外底面：薄い糸切り痕。 | 色調：灰褐色。 |
| 305<br>土師器 | 外底端は肥厚し体部は大きく開く。<br>体部は薄壁（厚さ 0.2cm）。 | 外底と体部の間は窪む。 | 色調：鈍い橙色。<br>やや焼成不良。 |
| 306<br>土師器 | 底部の中央部は薄壁（厚さ 0.4cm、端部は肥厚）。 | 外底面：糸切り痕は観察出来ず。 | 色調：鈍い橙色。 |
| 307<br>土師器 | 外底は肥厚（厚さ 1.0cm）。 | 外底と体部の間は大きく窪み、幅 1.2cmの沈線となる。<br>外底面：薄い糸切り痕。 | 色調：灰褐色。<br>灰色の不純物が器面に付着。<br>焼き締めの効いた土器。 |
| 308<br>土師器 | 外底端は肥厚（厚さ 1.0cm）。<br>体部は薄壁（厚さ 0.3cm）。 | 外底面：糸切り痕。 | 色調：鈍い橙色。 |
| 309<br>土師器 | ―――――― | 外底と体部の境に沈線。<br>外底面：薄い糸切り痕。 | 色調：白褐色。 |
| 310<br>土師器 | 外底は平底。底端部は肥厚（厚さ 1.4cm）。 | 内底面：横ナデ。<br>外底面：かすかな糸切り痕。 | 色調：灰褐色。<br>焼き締めの効いた土器。 |
| 311<br>土師器 | 外底は上げ底。 | 外底と体部の境に弱い稜線。<br>内器面：上位は、丁寧なナデ。中位から下位にかけては、ナデのため極く薄い稜線。<br>外器面：ロクロ回転による稜線。<br>外底面：鮮明な極く薄い糸切り痕（やや雑な調整）。 | 色調：くすんだ感じの、鈍い橙色。<br>器面全体を灰色土が覆う。特に内器面が著しい。焼き締めが効いている。 |
| 312<br>土師器 | 外底端は肥厚（厚さ 1.0cm）。 | 外底と体部の境は大きく窪む。<br>外底面：糸切り痕は観察出来ず。 | 色調：白褐色。 |
| 313<br>土師器 | 外底はやや上げ底、中央部は薄壁。 | 外底面：糸切り痕は観察出来ず。 | 色調：鈍い橙色。<br>内器面に灰色の不純物が付着。 |

第105表　第Ⅱ期出土遺物の観察表⑦

| NO. | 形態の特徴 | 手法・調整・文様 | 備考 |
|---|---|---|---|
| 314<br>土師器 | 外底端は肥厚（厚さ 1.3cm）。<br>体部は薄壁（厚さ 0.3cm）。 | 外底と体部の境は若干、窪む。 | 色調：鈍い橙色。 |
| 315<br>土師器 | 底部は丸底に近い。<br>底部肥厚（厚さ 1.4cm）。 | ―――― | 色調：内器面は黒褐色。<br>外器面は汚れた感じの白褐色。<br>焼き締めの効いた土器。 |
| 316<br>土師器 | 外底端は肥厚（厚さ 1.0cm）。<br>体部は、外弯気味に直立する。 | 内器面：丁寧な横ナデ。<br>外器面：横ナデ薄い稜線。<br>外底面：糸切り後、ナデ。 | 色調：褐灰色。 |
| 317<br>土師器 | 底部は薄壁（厚さ 0.4cm）で、端部で肥厚（厚さ 0.8cm）。<br>体部は大きく開くと思われる。 | 外底面：糸切り痕は観察出来ず。 | 色調：鈍い橙色。<br>質量感のある土器。 |
| 318<br>土師器 | 外底は、やや丸底で肥厚（厚さ 1.0cm）。 | 内器面：軽い指押え。<br>外器面：やや粗いナデ。<br>内底面：中央に小突起。 | 色調：白褐色。 |
| 319<br>土師器 | 底部は波状を呈し、歪。 | 外底面：薄い糸切り痕。 | 色調：鈍い橙色。軽量土器。 |
| 320<br>瓦質擂鉢 | 体部はやや内弯し、下位から口縁にかけて漸次、肥厚。<br>口唇部は扁平（厚さ 0.7cm）。 | 内器面：条線の一単位は10本。<br>上位は横ナデ、以下は縦方向の刷け目。 | 色調：やや、くすんだ感じの白黄色。 |
| 321<br>瓦質擂鉢 | 体部はわずかに外弯し、上位から口縁にかけて漸次、肥厚。<br>口唇部は扁平（厚さ 0.6cm）。 | 内器面：条線の一単位は不明（10本まで認められる）。斜め方向（左上→右下）の刷け目。<br>外器面：叩きの後、ナデ消し。一部に縦方向の刷け目。 | 色調：灰白色。<br>非常に焼き締めが効いている。 |
| 322<br>瓦質擂鉢 | 体部はやや内弯し、下位から同一の厚さで口縁に至る。 | 内器面：条線の一単位は10本。<br>斜め方向（左上→右下）の刷け目。<br>外器面：成形時の凹凸を鮮明に残す調整については、弱い縦方向の平行叩きの痕が残る。上位は後に、横ナデが加えられている。 | ―――― |
| 323<br>瓦質擂鉢 | 体部はわずかに内弯し、中途から口縁にかけて漸次、肥厚。 | 内器面：条線の一単位は不明（4本まで認められる）。斜め方向（左上→右下）に刷け目調整後、横方向のナデ消し。<br>外器面：叩きの後、ナデが加えられている。<br>口唇部：強い横ナデ。 | 非常に焼き締めが効いている。 |
| 324<br>瓦質擂鉢 | 体部は中途から口縁にかけて漸次、肥厚。 | 内器面：条線の一単位は不明（4本まで認められる）。<br>斜め方向（左上→右下）に刷け目。<br>外器面：叩きの後、ナデが加えられている。 | ―――― |
| 325<br>瓦質擂鉢 | 体部はわずかに内弯し、下位から口縁にかけて漸次、肥厚。<br>残存体部は片口周辺。<br>口唇部は幅 0.9cmで扁平に近い。 | 内器面：条線の一単位は不明（7本まで認められる）。<br>斜め方向（左上→右下）に刷け目調整、上位は後にヘラ状工具で横方向にナデが加えられている。<br>外器面：叩きの調整は粗く、後に横方向のナデ消しが加えられている。 | 色調：灰白色。<br>非常に焼き締めが効いている。 |

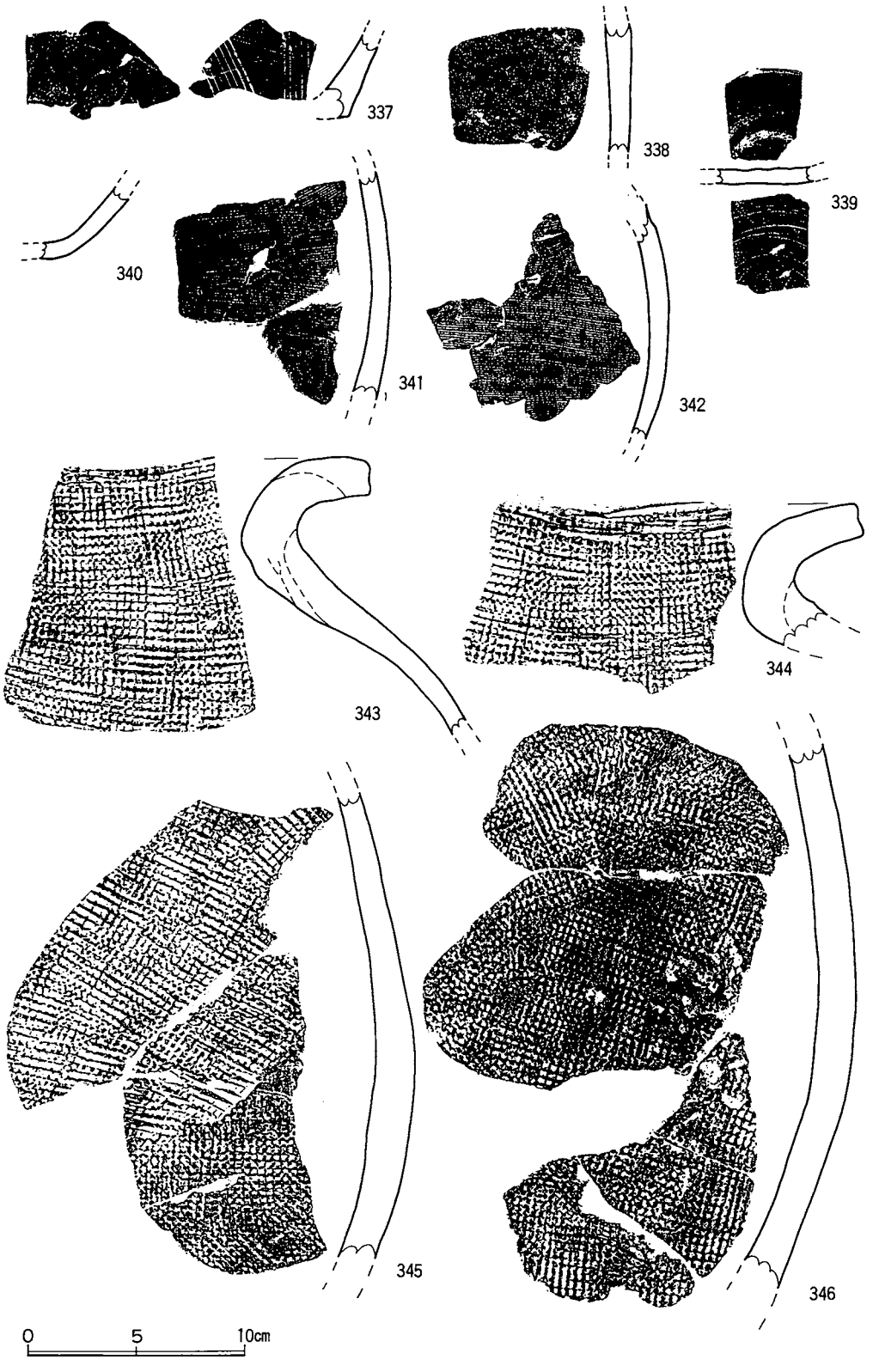
第106表　第Ⅱ期出土遺物の観察表⑧



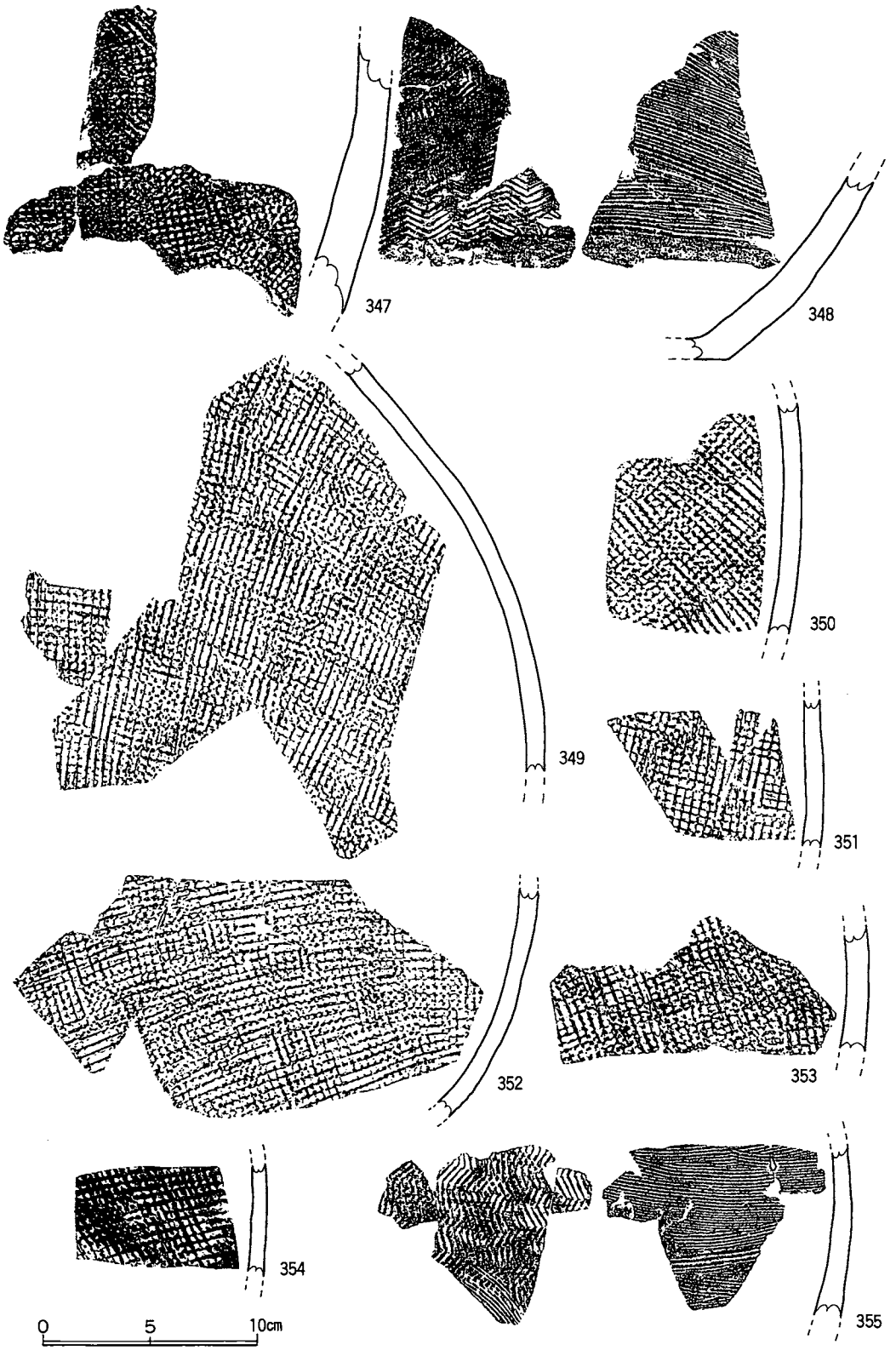

第116図　第Ⅱ期出土遺物の実測図⑦

| NO. | 形態の特徴 | 手法・調整・文様 | 備考 |
|---|---|---|---|
| 326<br>瓦質擂鉢 | 口唇部は（幅 0.8cm）、全体的に若干窪む。 | 内器面：条線の一単位は不明。<br>斜め方向（左上→右下）に刷け目、口縁の内側は後に横ナデが加えられている。 | 色調：灰白色。<br>非常に焼き締めが効いている。 |
| 327<br>瓦質擂鉢 | 口唇部は（幅 0.9cm）、全体的に窪む。 | 内器面：条線の一単位は10本。<br>斜め方向の刷け目、後に鮮明な横方向の刷け目が加えられている。<br>外器面：横ナデ。 | 焼き締めが効いている。 |
| 328<br>瓦質擂鉢 | 残存体部は片口周辺。 | 内器面：条線の一単位は不明。 | 色調：白褐色。<br>器面は軟質で、胎土が手に付着。<br>器面の風化が著しい。 |
| 329<br>瓦質擂鉢 | 体部は肉太（厚さ 1.4cm）。<br>口唇部は肥厚。 | 内器面：条線の一単位は不明（8本まで認められる）。<br>横ナデ、下位は斜め方向（左下がり）のナデ。<br>外器面：横ナデ。 | 色調：灰白色。 |
| 330<br>瓦質擂鉢 | 口唇部は（幅 1.0cm）、全体的に窪む。 | 口唇部：粗い横ナデ。<br>内外器面：横ナデ。 | 色調：灰黒色。 |
| 331<br>瓦質擂鉢 | ―――― | 内器面：条線の一単位は17本（条線は非常に鮮明）。<br>斜め方向（左上→右下）のナデ。<br>外器面：粗い指押え。 | 色調：灰白色。<br>焼き締めが効いている。<br>上質の擂鉢。 |
| 332<br>瓦質擂鉢 | ―――― | 内器面：条線の一単位は不明（8本まで認められる）。<br>外器面：非常に粗く、強い肉太（幅 0.1cm）の条線が器面に交差する。 | 色調：灰黒色。<br>器面の風化が著しい。 |
| 333<br>瓦質擂鉢 | 底部（厚さ 0.9cm）と比較して、体部は肉太（厚さ 1.2cm）。 | 内器面：条線の一単位は不明（6本まで認められる）。<br>外器面：刷け目調整の後に、指頭でナデが加えられている。<br>外底面：刷け目調整。 | ―――― |
| 334<br>瓦質擂鉢 | ―――― | 内器面：条線の一単位は6～7本。器面の全体に条線が掻かれている。<br>横方向の刷け目。<br>外底面：指押え。 | 色調：内底面は灰白色。<br>外底面は灰黒色。<br>焼き締めが効いている。 |
| 335<br>瓦質擂鉢 | ―――― | 内器面：条線の一単位は6本。器面の全体に、条線が掻かれている。横方向の刷け目。<br>外底面：指押え。 | 色調：外器面は灰黒色。<br>内器面は灰白褐色。 |
| 336<br>瓦質擂鉢 | 底部は薄壁（厚さ 0.6～0.7cm）で、体部は肉太（厚さ 0.9～1.3cm）。<br>外底は平底。 | 内底面と体部の境は、沈線状にやや窪む。<br>内器面：条線の一単位は不明。 | 色調：内底面と内器面は白褐色。<br>褐色の不純物が付着。<br>内底面と体部の境は灰黒色。<br>外器面と外底面は乳白色。<br>但し、外底面の一部は灰黒色 |
| 337<br>瓦質擂鉢 | ―――― | 内器面：条線の一単位は7本。横、斜め方向の掻き目。<br>外器面：斜め方向（左下→右上）の刷け目、後に軽い指押えが加えられている。 | 色調：灰白黄色。<br>焼き締めが効いている。<br>非常に上質の擂鉢。 |

第107表　第Ⅱ期出土遺物の観察表⑨



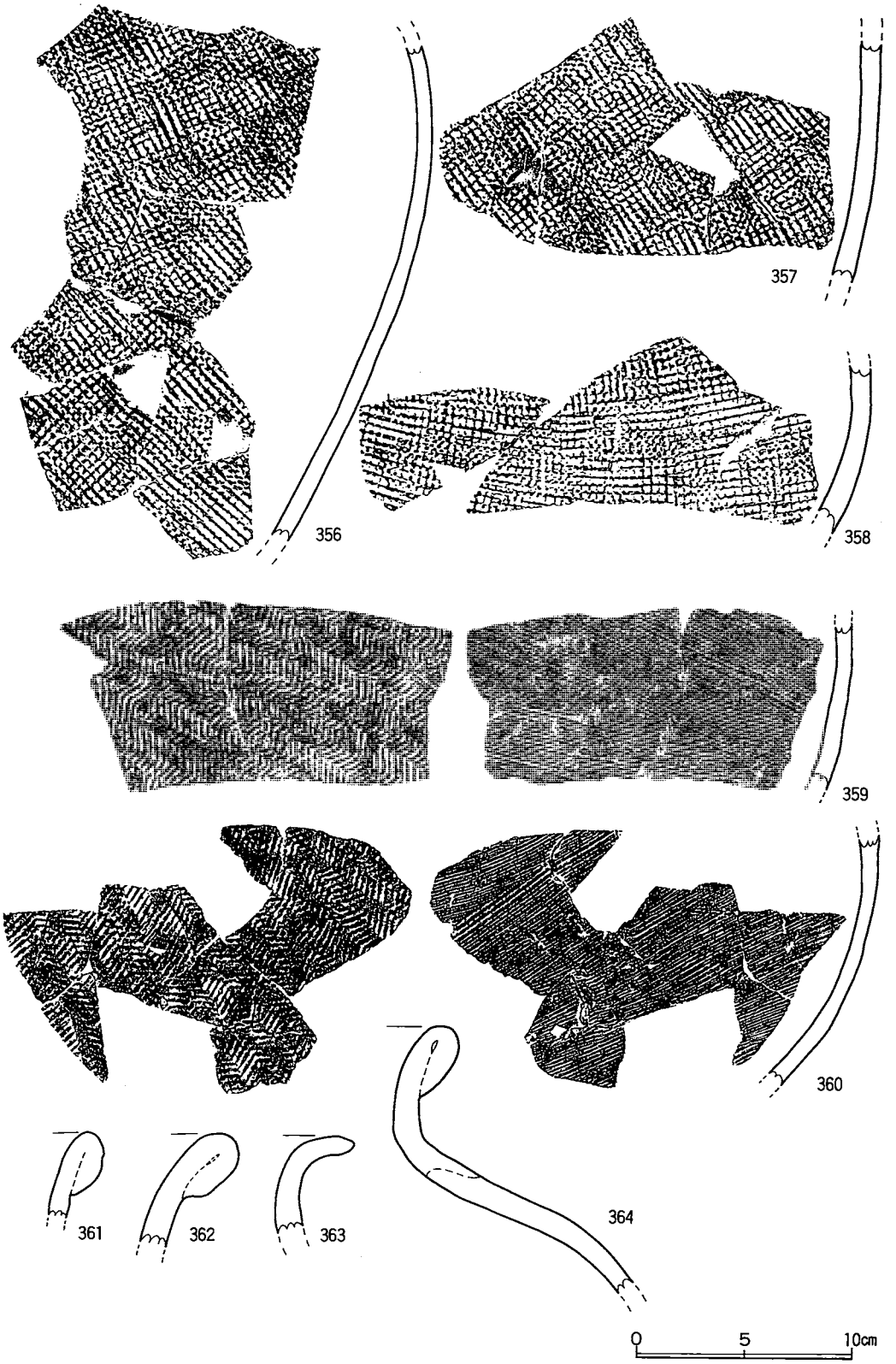

第117図　第Ⅱ期出土遺物の実測図⑧




第118図　第Ⅱ期出土遺物の実測図⑨

| NO. | 形態の特徴 | 手法・調整・文様 | 備考 |
|---|---|---|---|
| 338<br>瓦質擂鉢 | ―――― | 内器面：ナデ。 | 色調：灰白褐色。<br>器面の風化が著しい。 |
| 339<br>須恵器 | ―――― | 内底面：横ナデ。 | 外底面の一部にススが付着。 |
| 340<br>須恵質土器 | 体部は薄壁（厚さ 0.7～0.8cm）。 | 内器面：やや丁寧な横ナデ。<br>外器面：粗い横ナデ。 | 色調：白灰色。<br>極めて上質の須恵器。 |
| 341<br>須恵器 | 体部は薄壁（厚さ 0.9cm）。 | 内器面：横及び斜め方向の刷け目。<br>外器面：丁寧なナデ。 | 色調：くすんだ感じの灰白黄色。<br>上質の須恵器。 |
| 342<br>須恵器 | ―――― | 内器面：横方向の刷け目、一部にナデが加えられている。<br>外器面：ナデが施され、滑らかな器面であるが、かすかな平行叩き目が残る。 | 色調：外器面は灰白黒色。<br>内器面は灰白黄色。<br>焼き締めが効いている。 |
| 343<br>須恵器 | 体部は上位で肥厚（最大厚さ2.7cm）口縁は、「く」の字に大きく外弯。 | 内器面・口唇部：横ナデ。<br>頸部外器面：格子目の叩き、後に横方向のナデが加えられている。<br>他の外器面：格子目の叩き。 | 非常に焼き締めが効いている。<br>質量感のある土器。 |
| 344<br>須恵器 | 343と同一固体と思われる。 | ―――― | ―――― |
| 345<br>須恵器 | 体部は、胴部の中途で肥厚（厚さ 1.9cm）。 | 内器面：丁寧な横ナデ。<br>外器面：格子目の叩き。 | ―――― |
| 346<br>須恵器 | 体部は肉太（厚さ 1.6～1.7cm）。 | 内器面：非常に丁寧な横ナデ。<br>外器面：格子目の叩き。 | ―――― |
| 347<br>須恵器 | 体部は肉太（厚さ 1.9～1.5cm）。 | 内器面：丁寧な横ナデ。<br>外器面：格子目の叩き。 | ―――― |
| 348<br>須恵器 | 体部は肉太（厚さ 1.5cm）で、底部より、やや内弯気味に立ち上がる。 | 内器面：横及び斜め方向（左上→右下）の刷け目。<br>外器面：波状の叩き。<br>内底面：丁寧なナデ。<br>外底面：未調整。 | ―――― |
| 349<br>須恵器 | 体部は薄壁（厚さ 0.8cm）。 | 内器面：丁寧な横ナデ。<br>外器面：強い格子目の叩き。格子目の稜線はやや丸味を帯びる。 | ―――― |
| 350<br>須恵器 | ―――― | 内器面：横ナデ。<br>外器面：格子目の叩き。 | ―――― |
| 351<br>須恵器 | ―――― | 内器面：丁寧な横ナデ。<br>外器面：強い格子目の叩き。 | ―――― |
| 352<br>須恵器 | ―――― | 内器面：刷け目調整後、丁寧な横ナデが加えられている。<br>外器面：非常に強い格子目の叩き。 | ―――― |
| 353<br>須恵器 | ―――― | 内器面：横ナデ。<br>外器面：強い格子目の叩き。 | ―――― |
| 354<br>須恵器 | ―――― | 内器面：未調整で、成形時の指押え痕をそのまま残す。<br>外器面：格子目の叩き。 | ―――― |

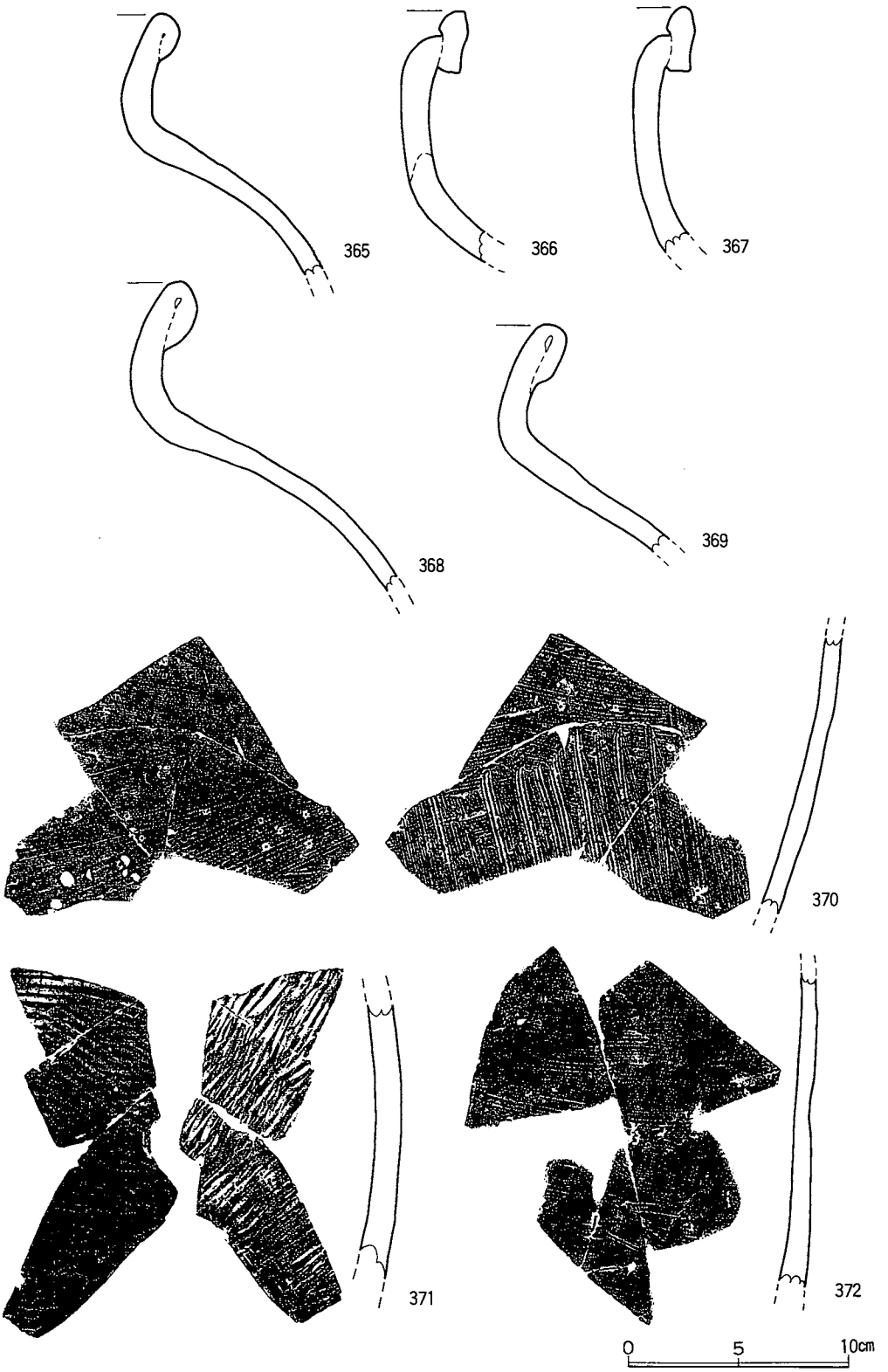
第108表　第Ⅱ期出土遺物の観察表⑩



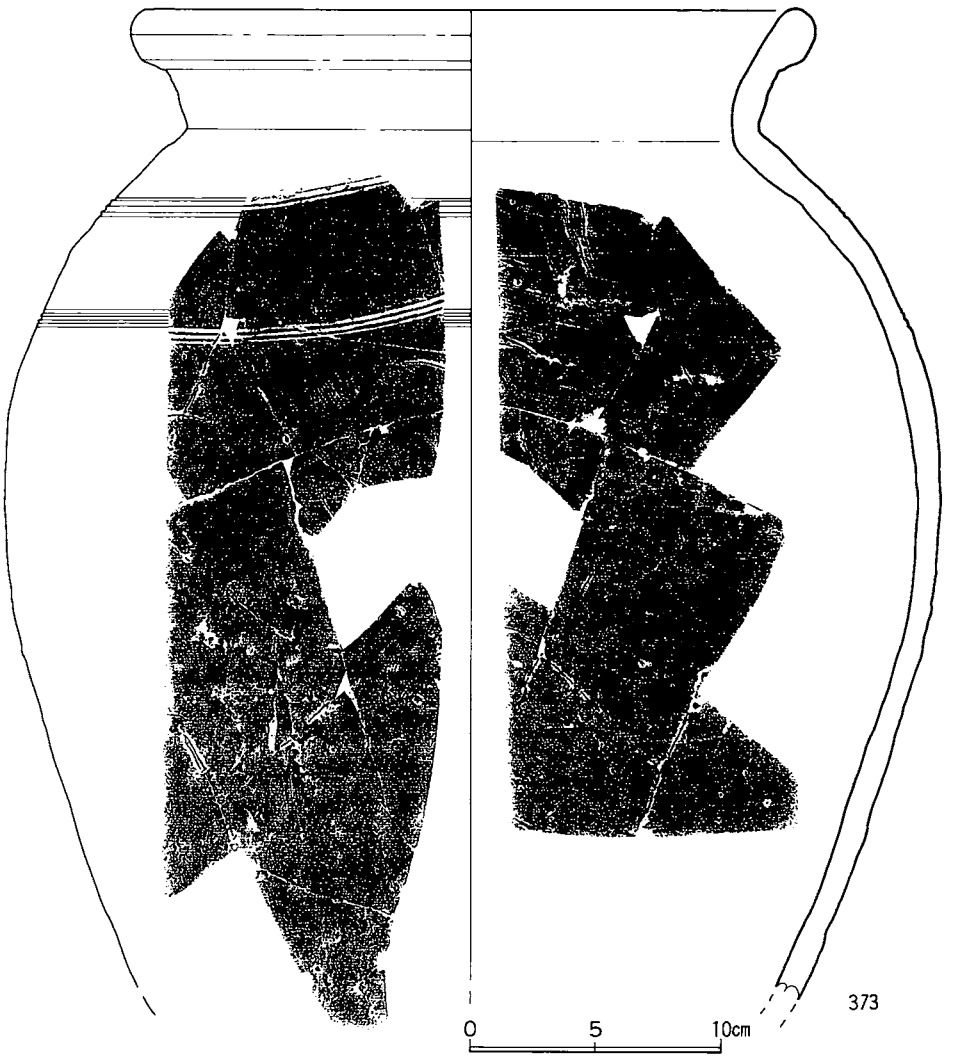

第119図　第Ⅱ期出土遺物の実測図⑩

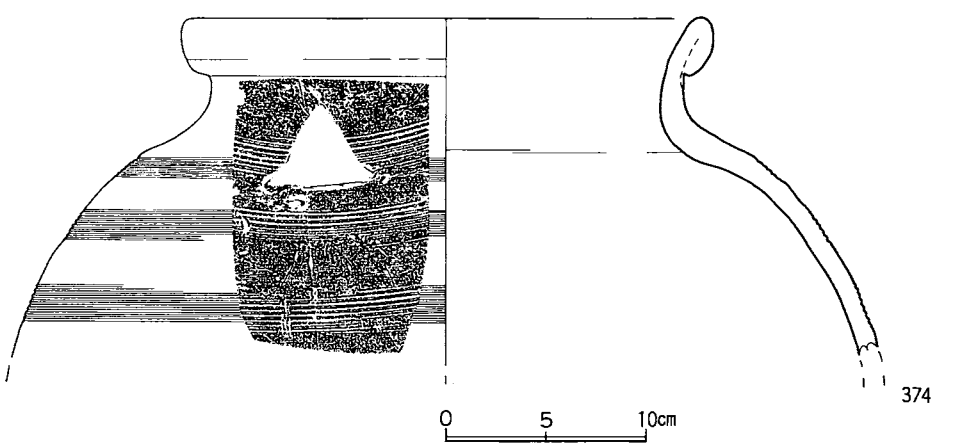
| NO. | 形態の特徴 | 手法・調整・文様 | 備考 |
|---|---|---|---|
| 355<br>須恵器 | ―――― | 外器面：波状の叩き。上位は後に斜め方向（左上→右下）の刷け目が加えられている。 | 色調：内器面は灰色。外器面は、灰黄色の不純物が器面に付着。 |
| 356<br>須恵器 | 体部は薄壁（厚さ 0.75cm)。 | 内器面：横及び斜め方向の刷け目、後に、横ナデが加えられている。<br>外器面：格子目の叩き。 | ―――― |
| 357<br>須恵器 | 体部は薄壁（厚さ 0.8cm）。 | 内器面：丁寧な横ナデ。<br>外器面：強い格子目の叩き。 | ―――― |
| 358<br>須恵器 | ―――― | 内器面：丁寧な横ナデ。<br>外器面：格子目の叩き。 | ―――― |
| 359<br>須恵器 | ―――― | 内器面：斜め方向の刷け目（左上→右下）。<br>外器面：波状の叩き、後にナデが加えられている。 | ―――― |
| 360<br>須恵器 | ―――― | 内器面：横方向の刷け目。<br>外器面：波状の叩き。 | 軽量土器。 |
| 361<br>備前 | やや小型の壺。 | 成形：口縁肥厚部は、粘土帯を外側へ折り返している。外器面の接合箇所は条線を呈する。<br>口縁肥厚部の外器面に１条の沈線。 | ―――― |
| 362<br>備前 | ―――― | 成形： 361に同じ。<br>内外器面：板状工具と思われるもので、非常に強く横ナデされている。 | ―――― |
| 363<br>常滑 | 小型の壺。<br>口縁部は大きく弧状に外弯。<br>口縁直口。 | 内外器面：横ナデ。 | 色調：小豆色。<br>内器面に、黄灰色の自然釉がかかり、2.0 × 2.4cm、高さ 0.7cmのトチが付着。 |
| 364<br>備前 | ―――― | 成形：口縁肥厚部は、粘土帯を外側へ折り返して作られている。<br>頸部と体部の接合面は、指頭で押えた後に、ナデが加えられている。<br>内器面：板状工具と思われるものによる横ナデ。 | 内器面の上位と外器面の全体に自然釉（灰白黄色）がかかる。 |
| 365<br>備前 | ―――― | 成形： 364と同じ。<br>内外器面：横ナデ。<br>外器面：２ケ所に沈線。 | 外器面にかなりの自然釉がかかる。 |
| 366<br>常滑 | ―――― | 内外器面：板状工具と思われるものによる横ナデ。 | 体部は全面、露胎。 |
| 367<br>常滑 | ―――― | 内外器面：横ナデ。 | 色調：やや黄色味を帯びる小豆色。 |
| 368<br>備前 | ―――― | 成形： 364と同じ。<br>内外器面：横方向の刷け目。 | 外器面の頸部から肩部にかけて、自然釉がかかる。<br>外器面に小豆粒大のトチが付着。 |
| 369<br>備前 | ―――― | 成形： 364と同じ。<br>外器面の肩部以外は横ナデ。 | 内器面の上位と外器面の頸部に自然釉がかかる。<br>外器面の肩部は風化が著しい。 |

第109表　第Ⅱ期出土遺物の観察表⑪




第120図　第Ⅱ期出土遺物の実測図⑪

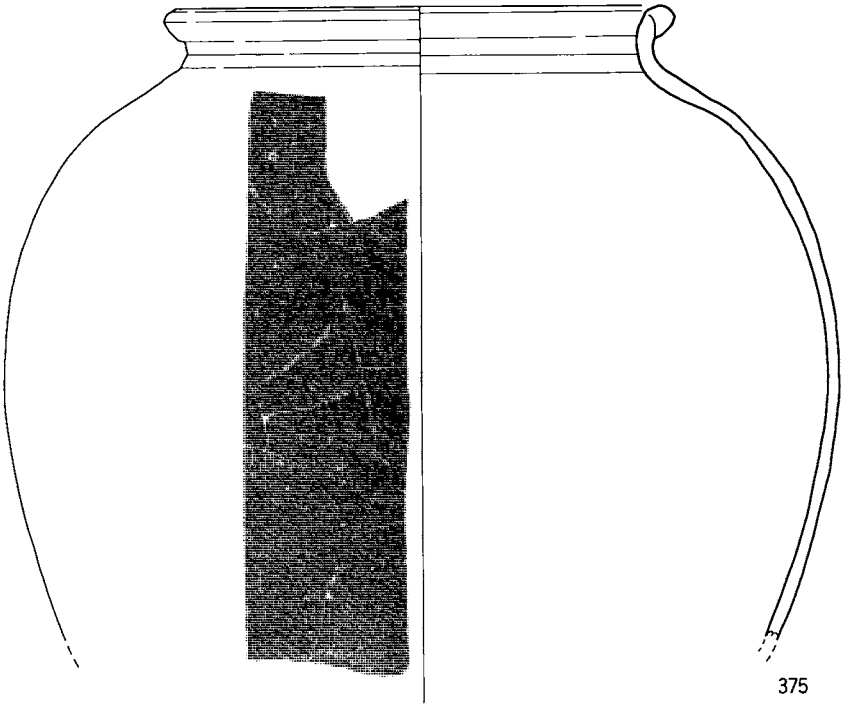


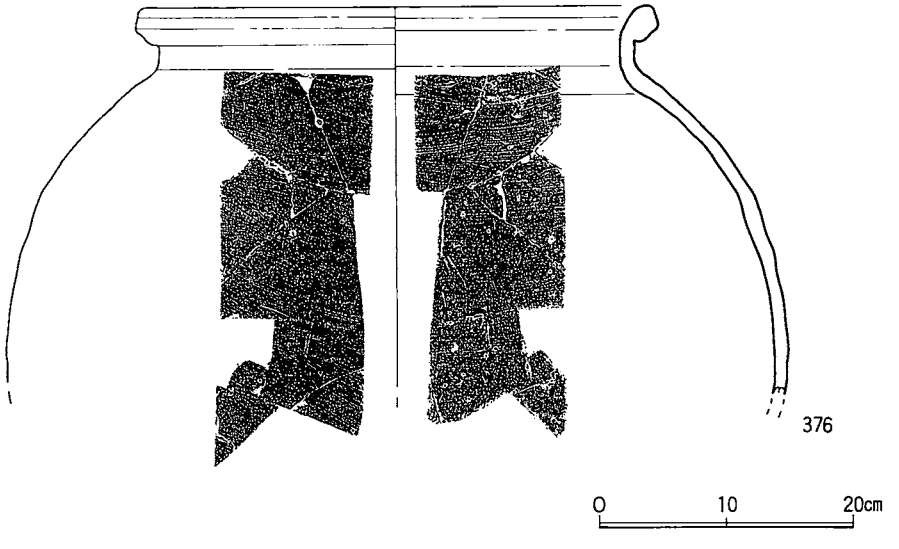




第121図　第Ⅱ期出土遺物の実測図⑫

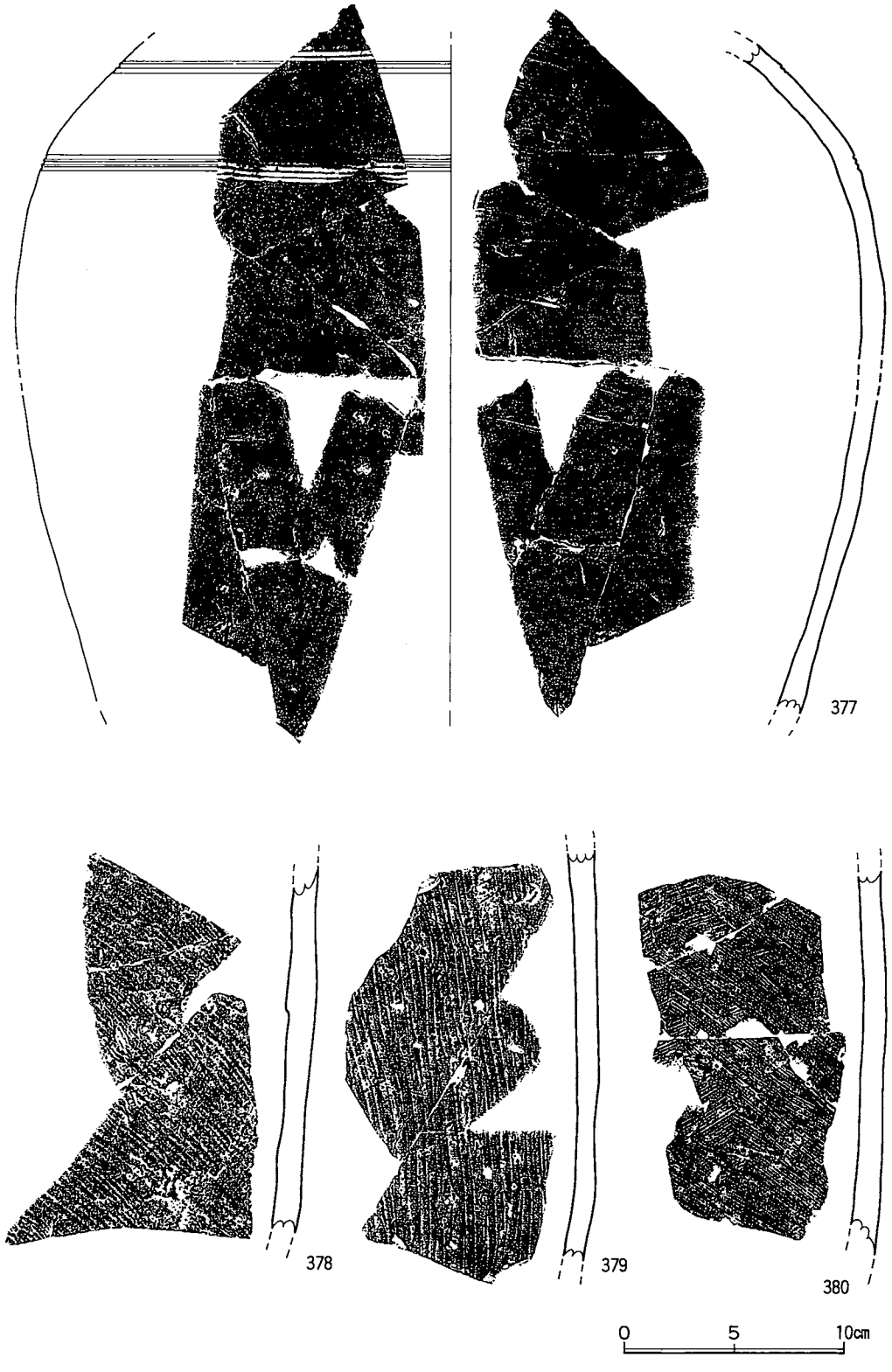
| NO. | 形態の特徴 | 手法・調整・文様 | 備考 |
|---|---|---|---|
| 370<br>常滑 | ―――― | 内器面：横及び斜め方向の刷け目。<br>外器面：斜め方向（左上→右下）の刷け目。上位は、後に縦方向の刷け目が加えられている。 | ―――― |
| 371<br>中世雑器 | ―――― | 内器面：粗い平行叩き。<br>外器面：格子目の叩き後、ナデが加えられている。 | 色調：外器面は灰黒黄色。<br>内器面は灰白黄色。 |
| 372<br>常滑 | ―――― | 内器面：横及び斜め方向の刷け目。<br>外器面：縦方向の刷け目。 | 色調：外器面は小豆色で、やや茶色を帯びる。<br>内器面は、くすんだ感じの灰小豆色。 |
| 373<br>備前 | 復元口径　27.3cm<br>残存器高　38.5cm<br>胴部最大径　37.2cm | 成形：364と同じ。<br>内器面：口縁肥厚部は横ナデ、肩部は、刷け状工具によるナデ後指押えが加えられている。<br>肩部以下は横ナデ。<br>外器面：全面に刷け状工具によるナデ、口縁肥厚部は横ナデ。<br>肩部の２ケ所に４条単位の横方向の沈線文。 | 色調：明るい感じの小豆色。<br>非常に焼き締めが効いている。 |
| 374<br>備前 | 口径　24.4cm<br>残存の胴部最大径　43.8cm | 成形：364と同じ。<br>内器面：丁寧な横ナデ。<br>外器面：肩部には、指押え痕を残すものの、全面に横ナデが施されている。<br>肩部から胴部の上位にかけて、横方向の沈線文（８本単位）。 | ―――― |
| 375<br>備前 | 復元口径　40.8cm<br>胴部最大径　66.4cm | 成形：364と同じ。<br>内器面：上位はヘラ状工具による横ナデ。<br>肩部から下位にかけて斜め方向の刷け目。<br>外器面：斜め、横、縦方向の刷け目で、器面に指押えの痕が目立つ。肩部に窯印あり。<br>口縁肥厚部の外器面：板状工具の使用（推察）による非常に丁寧な横ナデ。 | 外器面の上位に自然釉がかかる。 |
| 376<br>備前 | 復元口径　41.6cm<br>胴部最大径　62.6cm<br>残存器高　30.6cm | 成形：364と同じ。<br>口縁肥厚部：内外器面は横ナデ。<br>内器面：横方向の薄い刷け目。<br>外器面：横、縦、斜め方向の刷け目 | 外器面に自然釉がかかる。 |
| 377<br>備前 | 復元胴部の最大径　39.6cm<br>残存器高　30cm | 内器面：上位はナデ後、指押え。<br>以下、横ナデ。<br>外器面：上位は刷け状工具によるナデ。以上、全面に不整方向のナデ。<br>肩部に３本単位の横方向の沈線文。 | 色調：明るい感じの小豆色。 |
| 378<br>常滑 | ―――― | 内器面：非常に粗い横ナデ。指押えの痕が鮮明に残る。<br>外器面：縦方向の刷け目。 | 外器面に自然釉が残る。 |
| 379<br>備前 | ―――― | 内器面：横方向の刷け目。<br>外器面：縦方向の刷け目。 | 色調：小豆色。 |

第110表　第Ⅱ期出土遺物の観察表⑫



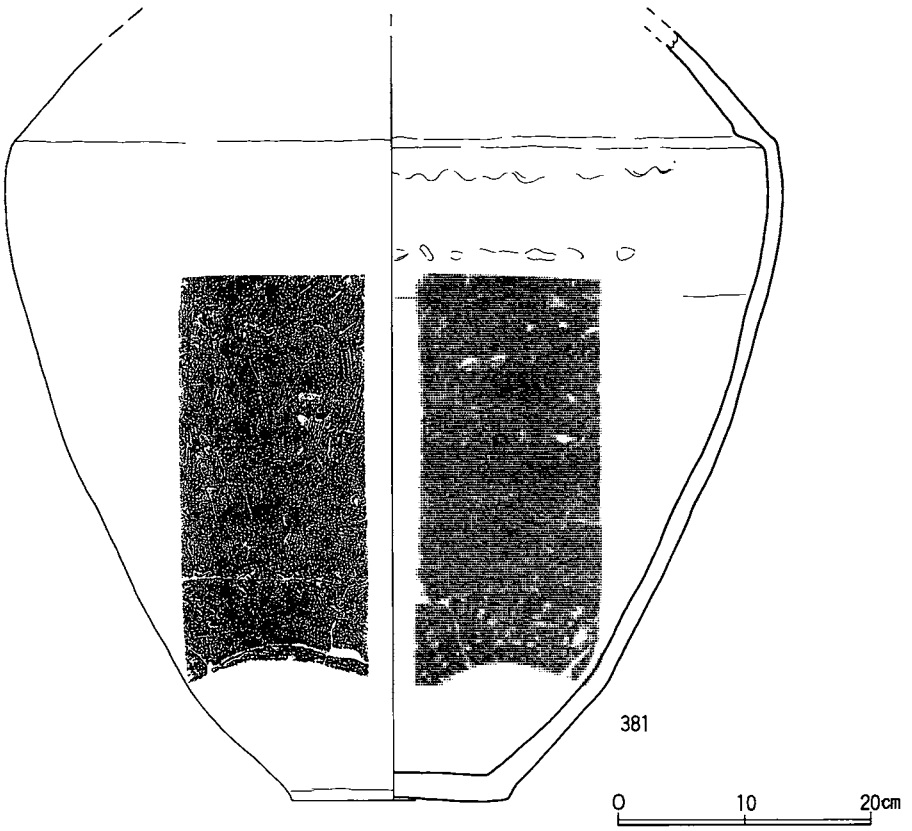

第122図　第Ⅱ期出土遺物の実測図(13)

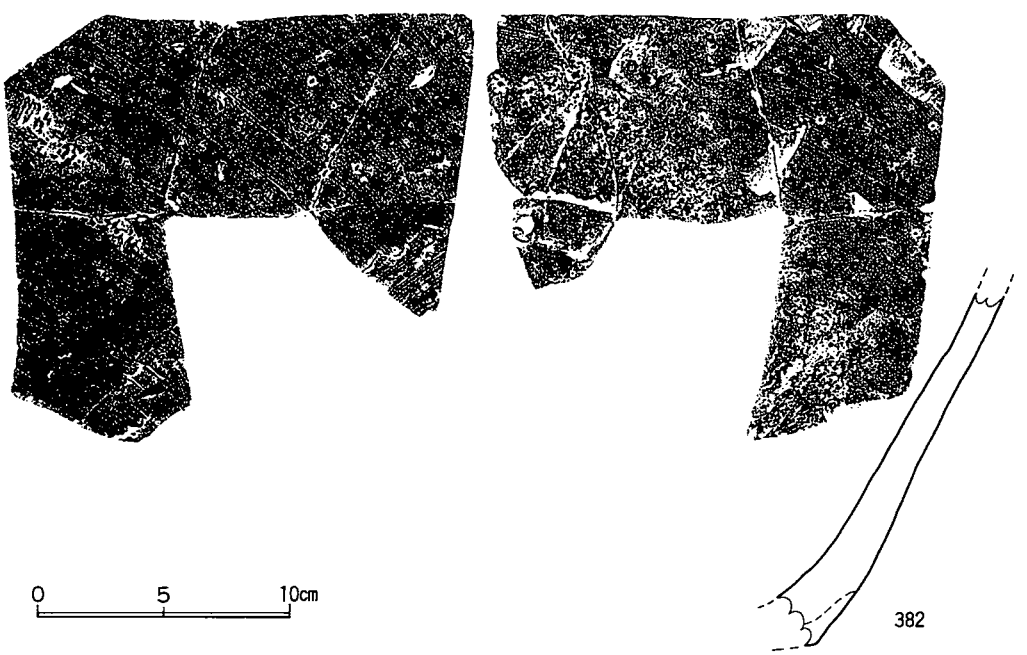



第123図　第Ⅱ期出土遺物の実測図⑭

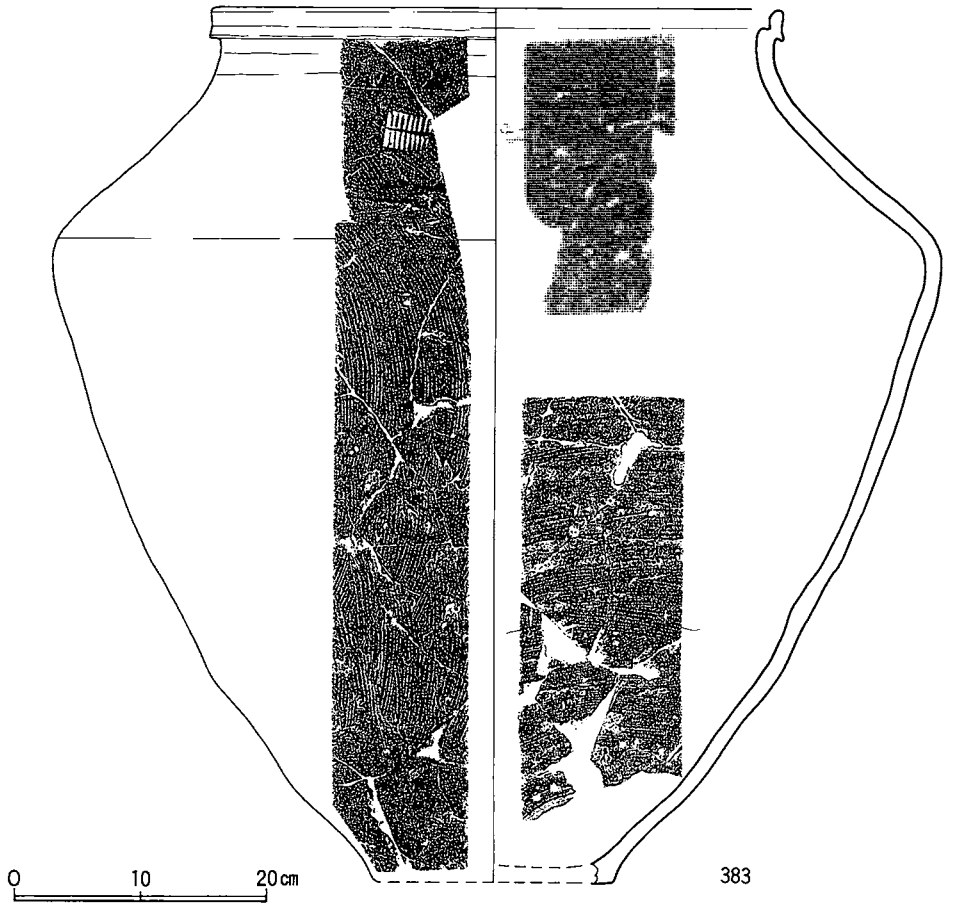
| NO. | 形態の特徴 | 手法・調整・文様 | 備考 |
|---|---|---|---|
| 380<br>常滑 | ―――――― | 内器面：刷け状工具による横及び若干、斜め方向の調整。<br>外器面：刷け状工具による調整で、横方向に施した後、斜め方向（左上→右下）に施す。 | ―――――― |
| 381<br>常滑 | 復元胴部の最大径　62.0cm<br>復元底径　18.4cm<br>残存器高　60.0cm | 成形：内器面に残る指頭痕から、基本的に幅5～6cmの輪積み成形である事がわかる。但し、輪積みについては、一本の粘土紐を全周させたものか、付け足したものかは不明。<br>内器面：下位は横方向の刷け目。中位から上位にかけては、より木目の細かい横ナデ。<br>外器面：縦方向の刷け目。<br>内底面：外縁部は円周に沿ったナデで、他は不整方向のナデ。<br>外底面：未調整。 | ―――――― |
| 382<br>常滑 | 外底端は肥厚（厚さ2.4cm）。 | 内器面：粗い横ナデ。<br>外器面：縦方向の刷け目。下位は横方向の刷け目。 | ―――――― |
| 383<br>常滑 | 口縁部は、貼り付け。<br>復元口径　45.0cm<br>器高　69.6cm<br>復元底径　19.4cm<br>胴部最大径　70.8cm | 内器面：上位は、ヘラ状工具による横ナデ。肩部から下位にかけて、刷け状工具による非常に粗い横方向の調整。但し器面に、成形時の凹凸と指押え痕が残る。<br>外器面：上位は丁寧な横ナデ。肩部はナデが施されているが、叩き目をわずかに残す。中位は縦および斜め方向の刷け目が施されているが（但し間隔は雑）、器面にかなりの凹凸を残しており、調整は丁寧なものではない。下位は未調整。 | ―――――― |
| 384<br>常滑 | 体部は直線的に開く。<br>外底端は肥厚（厚さ2.5cm）。 | 内器面：ヘラ状工具と思われるもので横ナデ。<br>外器面：刷け状工具による縦方向（下から上）の粗いナデ。下位は後に横ナデが加わる。 | 色調：明るい感じの小豆色。<br>非常に焼き締めが効いている。 |
| 385<br>備前 | 体部は、やや内弯気味に伸びる。<br>外底は平底で薄壁（厚さ0.8～0.9cm）。<br>復元底径　24.4cm<br>残存器高　27.2cm | 内器面：横ナデ、下位は刷け状工具による縦方向のナデ。<br>外器面：横ナデ、一部に縦方向の薄い刷け目。<br>外底面：刷け状工具による縦及び横方向のナデ。 | 色調：明るい感じの小豆色。<br>非常に焼き締めが効いている。 |
| 386<br>備前 | ―――――― | 内器面：横方向の刷け目。外器面に比べて丁寧。<br>外器面：横方向の刷け目。 | 外器面の下位に灰白黄色の自然釉。 |
| 387<br>常滑 | 体部はやや内弯気味に立ち上がる。<br>復元底径　14.2cm | 外底と体部の境は、やや窪む。<br>内器面：粘土帯の接合面と思われる部分に、かなり鮮明な指押え痕が残る。上から粗い横ナデが加えられている。<br>外器面：下端部に縦方向の削り痕。<br>外底面：未調整、非常に粗い器面。 | 色調：乳灰褐色（二次焼成？）。<br>外器面の下位は、やや桃色化。 |

第111表　第Ⅱ期出土遺物の観察表⑬

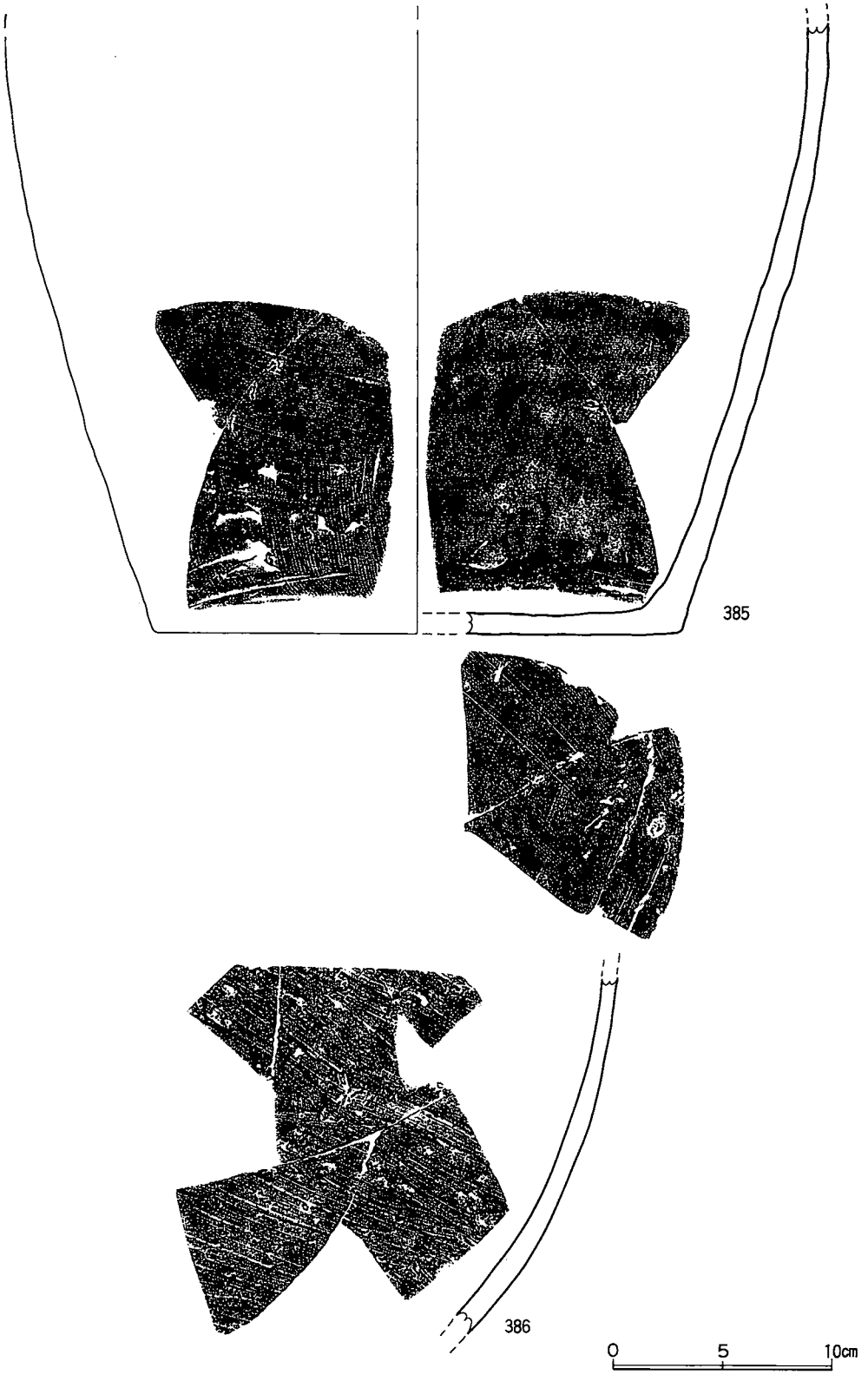


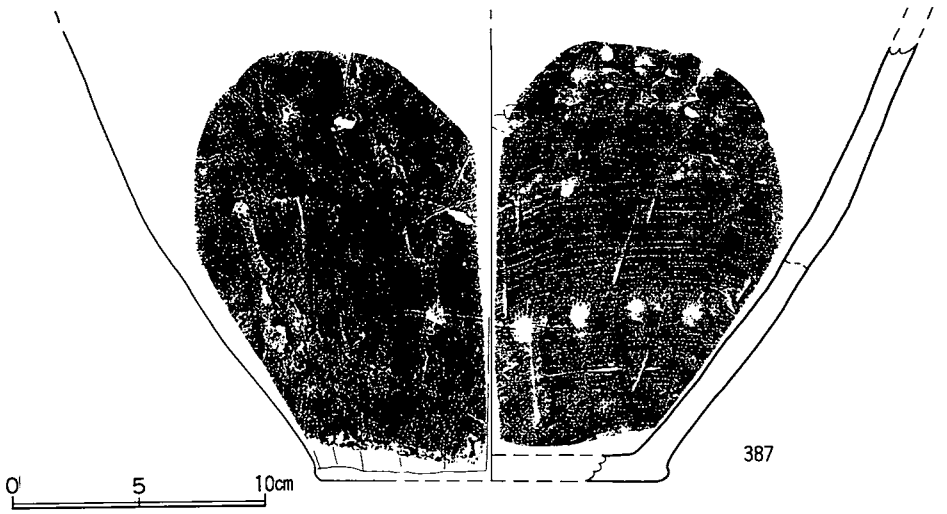

第124図　第Ⅱ期出土遺物の実測図⑮

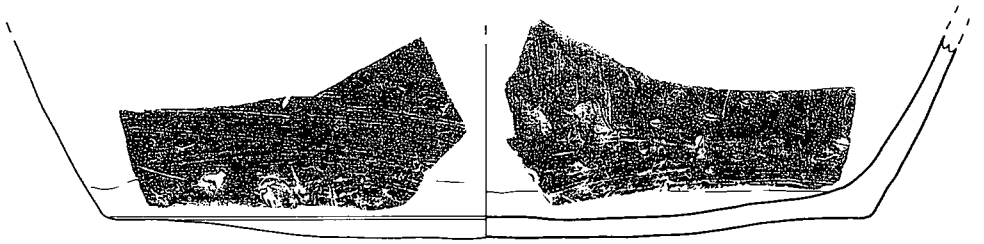


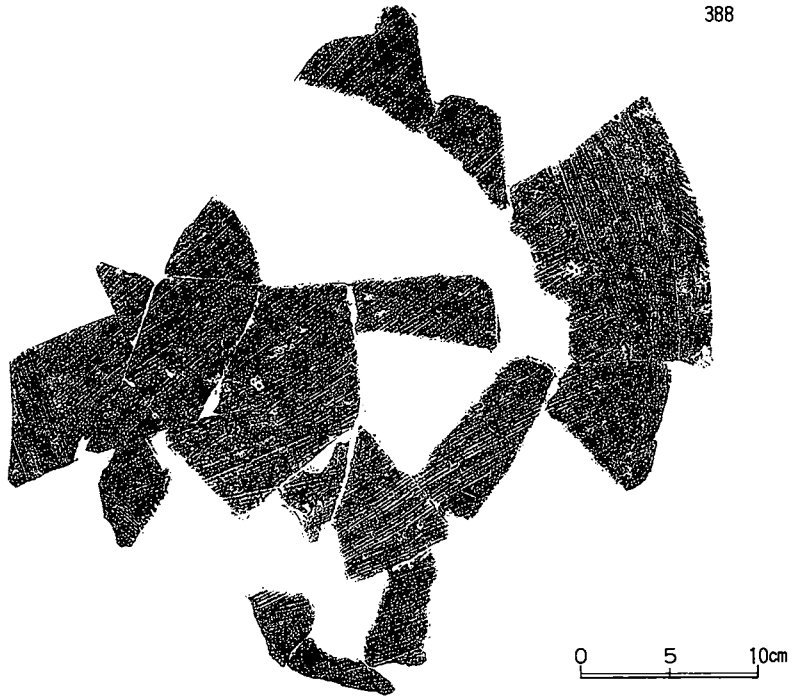

第125図　第Ⅱ期出土遺物の実測図⑯



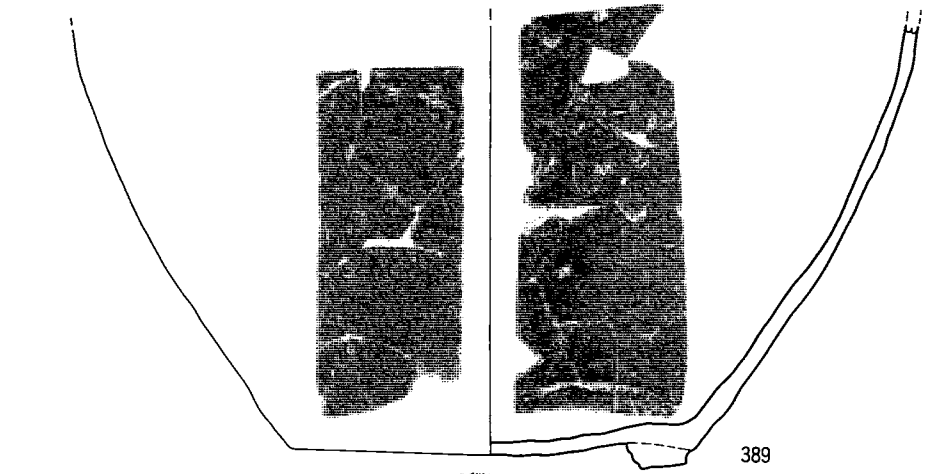

第126図　第Ⅱ期出土遺物の実測図⑰

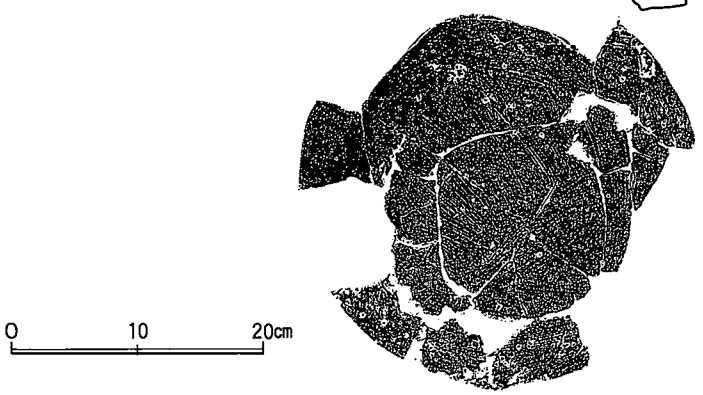


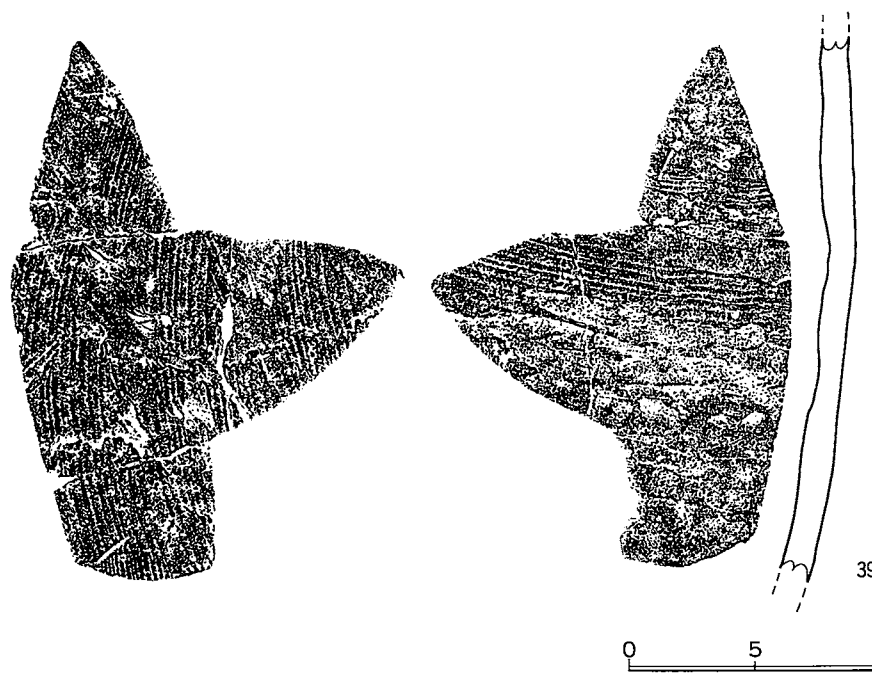



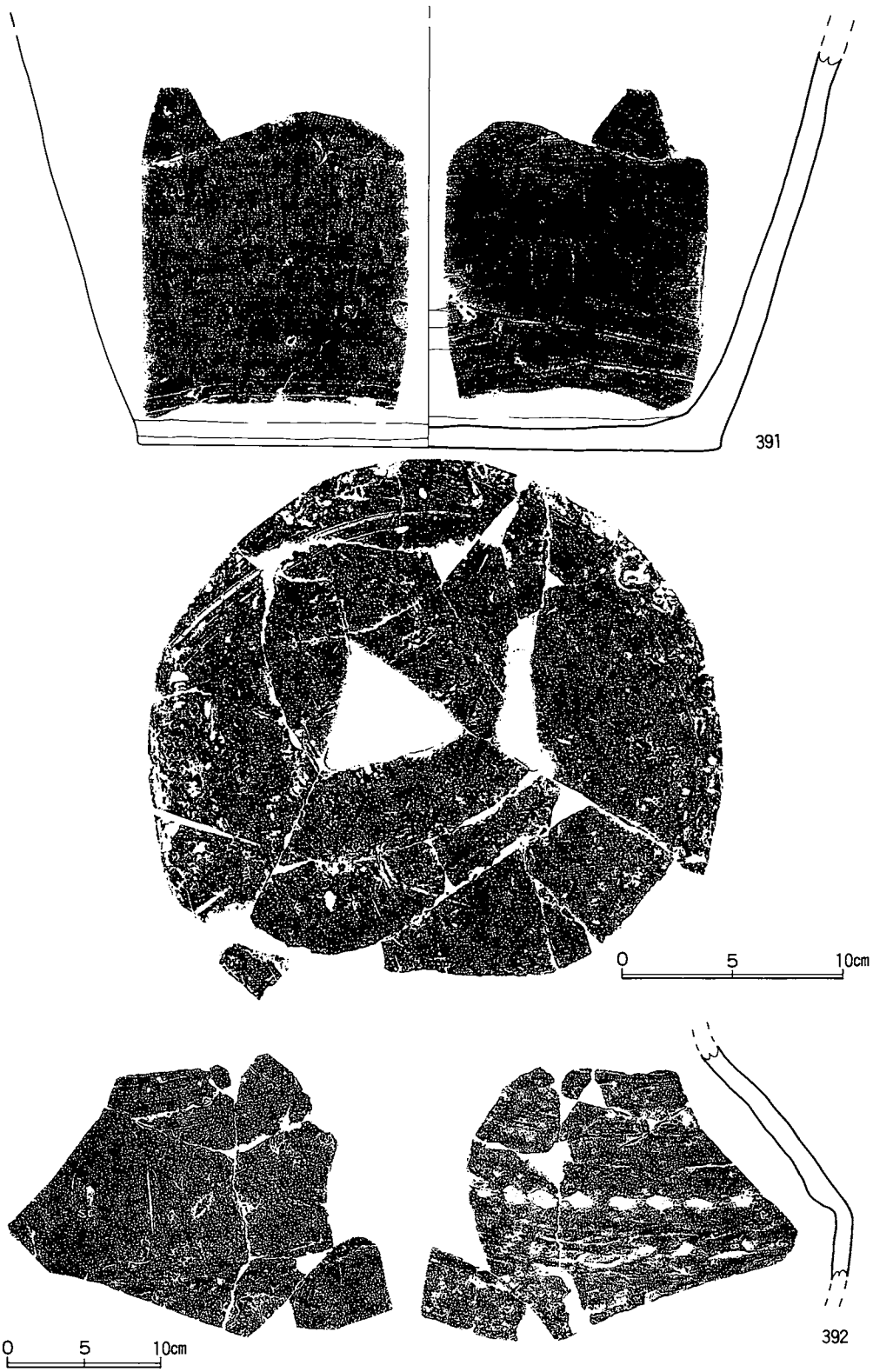

第127図　第Ⅱ期出土遺物の実測図⑱



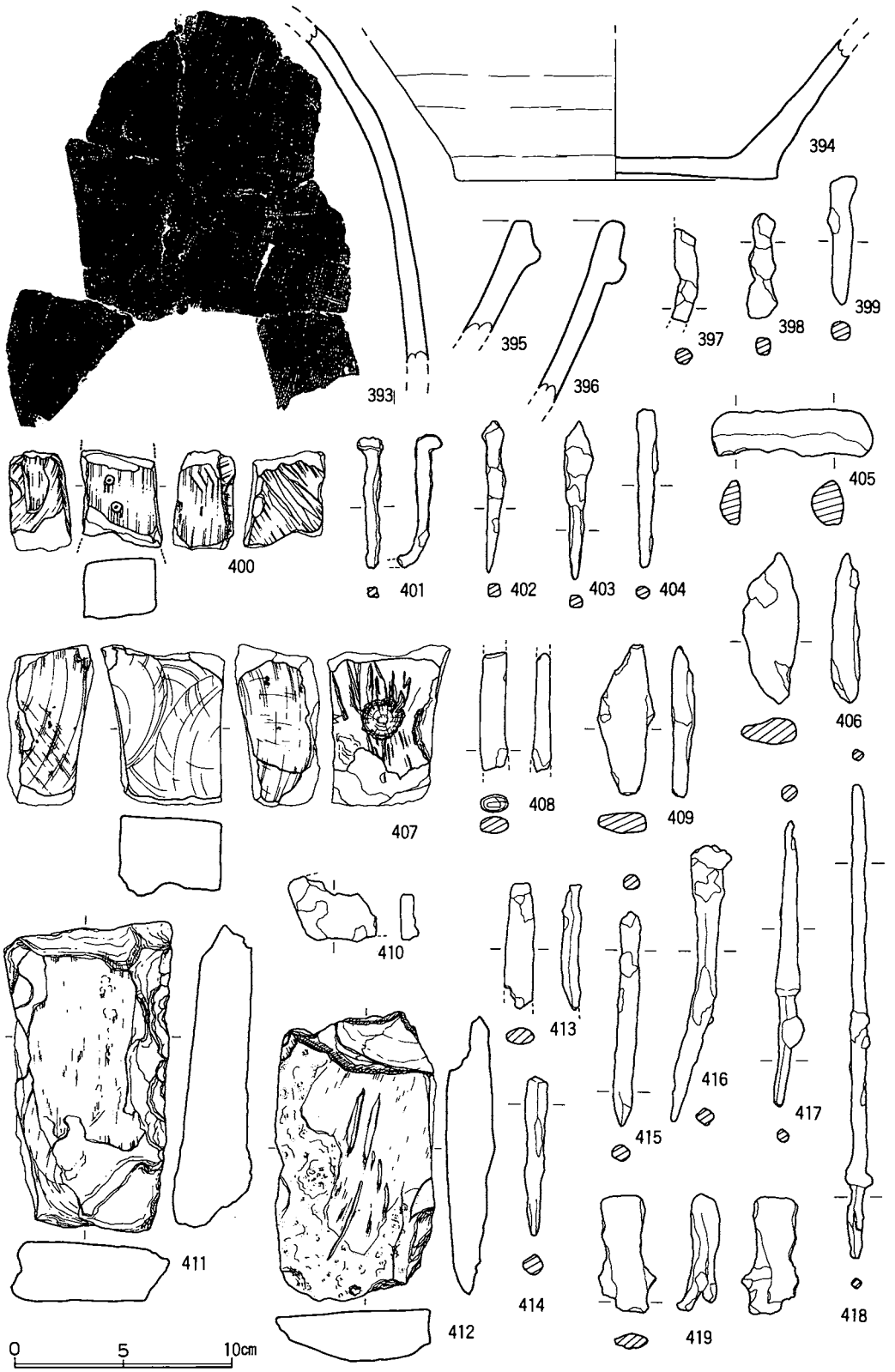

第128図　第Ⅱ期出土遺物の実測図⑲




第129図　第Ⅱ期出土遺物の実測図⑳

| NO | 形態の特徴 | 手法・調整・文様 | 備考 |
|---|---|---|---|
| 388<br>常滑 | 外底は、中央部から端部へ尻上がりの状況を呈する。<br>復元底径 44.0cm | 内器面・内底面：横ナデ。<br>外器面：ヘラ状工具による縦方向のナデ。外底との境は、ヘラ状工具による強い横ナデ（削りに近い）。<br>外底面：互いに直交する様な刷け目が施されている。 | ―――― |
| 389<br>備前 | 外底は端部へ尻上がりの状況を呈する。<br>器圧の為か、底部は歪む。<br>底径 32.4cm | 内器面：横方向の薄い刷け目。<br>外器面：鮮明な縦方向のナデ、一部は刷け目。外底との境は強めの横ナデ。<br>内底面：不整方向の丁寧なナデ。<br>外底面：鮮明な刷け目状のナデ（不整方向）。 | 外器面の一部に自然釉がかかる。<br>内器面に直径2cm大の釉の塊が付着。<br>外底端にトチが付着。 |
| 390<br>備前 | ―――― | 内器面：残存体部の中途と下位には横方向の刷け目。但し、成形時の凹凸や指押え痕が、器面全体に残っている。<br>外器面：粗い縦方向の刷け目。 | ―――― |
| 391<br>常滑 | 体部は直線的に立ち上がる。<br>外底は平底。<br>復元底径 26.8cm | 内器面：ヘラ状工具による横ナデ。特に、下位に痕跡が著しい。<br>外器面：上位は調整不明。下位は、ヘラ状工具による縦方向の削り。外底との境には、後に、横方向の削りが加えられている。 | 色調：灰色（二次焼成）。<br>内器面は灰（黄）色。 |
| 392<br>常滑 | ―――― | 内器面：調整はほとんど行なわれておらず、成形時の指押え痕や体部の接合痕（3箇所に認められる）が、そのままの状態で残っている。<br>外器面：上位に横ナデ。 | 色調：外器面は薄茶色。<br>内器面は、くすんだ感じの灰茶色。 |
| 393<br>須恵器 | 体部は薄壁（厚さ 0.9cm）。 | 内器面：横及び斜め方向（左上→右下）の刷け目。<br>外器面：非常に丁寧なナデ。 | 色調：外器面は灰白黒色。<br>内器面は灰白黄色。 |
| 394<br>中世雑器<br>（陶器系） | 体部は外弯気味に大きく開く。<br>底部の中央部は薄壁（厚さ 0.7cm）で上げ底、端部は肥厚（厚さ2.0cm）<br>底径 14.9cm | 内外器面：粗い横ナデ。 | 釉色：緑色。<br>外底面を除く、両器面に施釉。<br>特に、内器面の施釉は丁寧。 |
| 395<br>滑石製石鍋 | 体部は、やや肉太（厚さ 1.1cm）。<br>口唇部は扁平（幅 0.7cm）。<br>重さ 75.4g | 口縁下の外器面に、一条の突帯を削り出す。 | 外器面の一部に、若干のススが付着。<br>内器面に 3.5×4.0cm 、深さ 0.3cmの凹地箇所がある。 |
| 396<br>滑石製石鍋 | 体部はかすかに内弯。<br>口唇部は扁平（幅 0.5cm）。<br>重さ 136.71g | 口縁下に一条の突帯を削り出す。 | 外器面の器面全体に、ススが付着しており、長期間の使用が考えられる。 |
| 400<br>砥石 | 残存長さ 4.4 cm<br>残存厚さ 2.6 cm<br>残存幅 2.4 ～ 2.7cm<br>重さ 64.75g | 図中の左側面に鑿で研いだような抉れ痕がある。<br>上面：面取りに使用したと思われる丸い凹みが2ケ所に残る。<br>下面：斜め方向の刃潰し痕がある。 | 天草砥石。<br>手に持って使用したと思われ、砥石にねじれが見られる。 |

第112表　第Ⅱ期出土遺物の観察表⑭



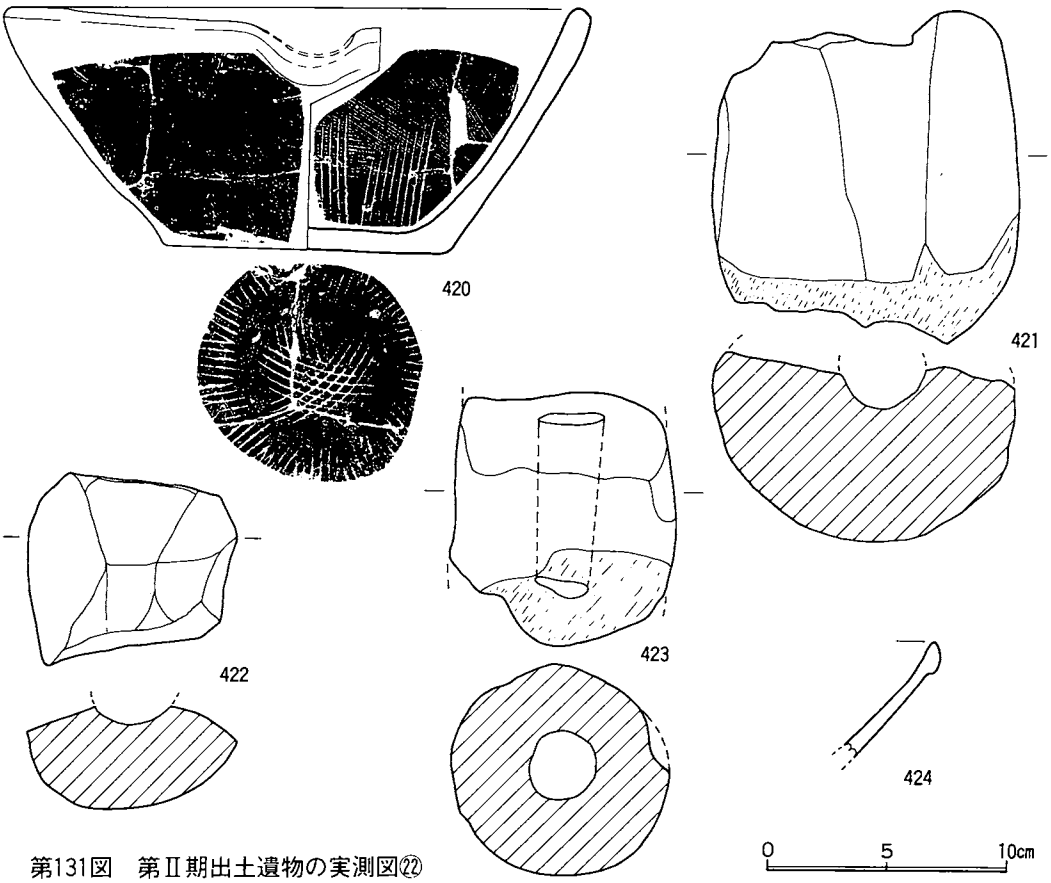

第130図　第Ⅱ期出土遺物の実測図㉑

| NO. | 形態の特徴 | 手法・調整・文様 | 備考 |
|---|---|---|---|
| 407<br>砥石 | 残存長さ 7.3 cm<br>最大厚さ 3.6 cm<br>幅 4.6 cm<br>重さ 208.71 g | 四面使用である。<br>図中（両側面）長軸方向に中央部がわずかに凹む。刃幅の狭いものを研いだものと思われる。<br>上面：欠損後に強く使用されたものと思われ、面的にねじれた様になっている。多方向への使用が考えられる。<br>下面：中央に刃潰しの凹があり、丸い物の面取りとして使用されたものと考えられる。 | 天草砥石。 |
| 411<br>砥石 | 長さ 14.2 cm<br>厚さ 2.4 ～ 2.7cm<br>幅（上位）7.6 cm<br>（下位）5.3 cm<br>重さ 512.6 g | 片面使用であるが、器面の状況から使用の頻度は少ないと思われる。母岩叩打により、使い易い大きさに割られ、面取りされたものである。 | 粘板岩製砥石。 |
| 412<br>砥石 | 長さ 12.9 cm<br>最大厚さ 2.3 cm<br>幅 7.3 cm<br>重さ 305.91 g | 片面使用である。<br>自然面を利用した砥石で、器面に刃潰し的な痕が残っている。 | 粘板岩製砥石。 |

| NO. | 形態の特徴 |
|---|---|
| 397<br>鉄器 | 残存長さ 4.3cm<br>厚さ・幅 0.7×1.0cm<br>重さ 6.73 g |
| 398<br>鉄器 | 残存長さ 4.7cm<br>厚さ・幅 0.7×0.8cm<br>重さ 7.53 g |
| 399<br>釘 | 残存長さ 5.8cm<br>厚さ・幅 0.8×0.9cm<br>重さ 17.31 g |
| 401<br>角釘 | 長さ 5.9cm<br>厚さ・幅 0.4×0.45cm<br>重さ 11.54 g |
| 402<br>角釘 | 長さ 6.9cm<br>厚さ・幅 0.55×0.55cm<br>重さ 14.37 g |
| 403<br>角釘 | 長さ 7.1cm<br>厚さ・幅 0.55×0.65cm<br>重さ 12.55 g |
| 404<br>角釘 | 長さ 7.1cm<br>厚さ・幅 0.5×0.55cm<br>重さ 11.12 g |
| 405<br>鉄器 | 残存長さ 7.2cm<br>厚さ・幅 1.4×1.8cm<br>重さ 30.31 g |
| 406<br>鉄器 | 残存長さ 6.8cm<br>厚さ・幅 1.1×2.5cm<br>重さ 30.75 g |
| 408<br>鉄器 | 残存長さ 5.1cm<br>厚さ・幅 0.75×1.3cm<br>重さ 14.30 g |

| NO. | 形態の特徴 |
|---|---|
| 409<br>鉄器 | 残存長さ 6.9 cm<br>厚さ・幅 0.5 ～0.8 × 2.2cm |
| 410<br>鉄器 | 残存長さ 4.1 cm<br>厚さ・幅 0.6 × 3.0cm<br>重さ 13.70 g |
| 413<br>鉄器 | 残存長さ 5.6 cm<br>厚さ・幅 0.7 × 1.3cm<br>重さ 10.88 g |
| 414<br>角釘 | 長さ 7.3 cm<br>厚さ・幅 0.8 × 0.9cm<br>重さ 13.91 g |
| 415<br>角釘 | 残存長さ 9.7 cm<br>厚さ・幅 0.7 × 0.9cm<br>重さ 15.98 g |
| 416<br>角釘<br>（大型） | 残存長さ 12.5cm<br>厚さ・幅 0.65× 0.7cm<br>重さ 33.49 g |
| 417<br>鉄器 | 残存長さ 13.0cm<br>厚さ・幅 0.45× 0.5cm<br>重さ 26.95 g |
| 418<br>鉄器 | 長さ 12.4 cm<br>厚さ・幅（先端）0.45× 0.5cm<br>（端部）0.35× 0.4cm<br>重さ 26.37 g |
| 419<br>鉄器 | 残存長さ 5.3 cm<br>厚さ・幅 0.65× 1.5cm<br>重さ 26.28 g |

第113表　第Ⅱ期出土遺物の観察表⑮




第131図　第Ⅱ期出土遺物の実測図㉒

| NO. | 形　態　の　特　徴 | 手法・調整・文様 | 備　　考 |
|---|---|---|---|
| 420<br>瓦質擂鉢 | 体部はやや内弯し、中途で薄壁（厚さ 0.8cm）となり、口縁部で肥厚（厚さ 1.2cm）。<br>外底は平底。片口を有する。<br>口径　24.9cm<br>器高　10.0cm<br>底径　12.0cm | 内器面：条線の一単位は8本、全面に、横及び斜め方向（左上→右下）の刷け目。<br>外器面：未調整で、全面に成形時の凹凸や縦方向の平行叩きの痕が残る。上位に限り、後に粗い横ナデが加えられている。 | 色調：外器面は乳白色で、部分的に、桃色と灰黒色に変色した箇所がある。<br>内器面は灰白黄色。 |
| 421<br>鞴 | 羽口。<br>残存直径（外径）　12.5cm<br>内芯は上位で直径 4.8cm、下位で 2.7cm。 | ―――――― | 色調：ややくすんだ感じの褐灰（黄）色。<br>体部の下端に鉄滓が不着。<br>器面はザラザラ、胎土が手に付着。<br>質量感のある土器。 |
| 422<br>鞴 | 羽口。<br>残存径（外径）　8.5cm<br>内径は計測不能。 | 内外器面：丁寧なナデ。 | 色調：褐灰色。<br>内器面は桃色に熱変。<br>器面はザラザラしているが、城跡出土の3個の鞴の中では、最も焼き締めが効いている。 |
| 423<br>鞴 | 羽口。<br>直径（外径）　9.0cm<br>内芯は上位で径 2.4cm、下位で 2.1cm。 | ―――――― | 色調：体部は褐灰（黄）色。<br>内部は乳褐色に熱変。<br>器面はザラザラ、胎土が手に付着。<br>体部の下端に鉄滓が付着。 |
| 424<br>白　磁 | 口縁は玉縁状。<br>体部はやや内弯。 | 内外器面：丁寧なナデ。 | 釉色：灰白色。<br>外器面の下位は露胎。 |

第114表　第Ⅱ期出土遺物の観察表⑯

## 第３節　第Ⅲ期文化層出土の遺物

425～433は青磁である。425・428は碗の底部で、復元底径は425が5.9cm、428が7.0cmを測る。425は底部が肥厚（厚さ1.3cm）し、内底面に幾何学文様が描かれている。釉色は外器面が青白色で、内器面は青灰緑色を呈する。高台の畳付きまで施釉されている。428は高台の内側が極めて端的にヘラ削りされて直立する。内底面に界線と直線状の沈線があり、釉色は緑灰色である。

426・427・429・430は碗の体部破片で、器面に文様が描かれている。426は内器面に曲線文様があり、非常に上質な青磁である。427は外器面の口縁直下に３条の横線と３本の斜線が掻かれている。429・430は削り出しによる鮮明な蓮弁文様がある。429は体部がやや内弯する。内器面に貫入が走り、外器面に針穴程の気泡痕が残る。430は体部が薄壁(厚さ３㎜)で胎土は極めて精良である。釉色は426・429が灰緑色で、427がオリーブ灰色、430は緑灰白色を呈する。

431～433は無文である。431は体部が内弯気味に伸びて、口縁でわずかに外弯する。432は、口縁が「く」の字に大きく外弯し、内器面の屈曲部は白色の稜線を呈する。433は高台の畳付きが扁平で幅６㎜を測る。釉色は431が薄緑白色で、432がオリーブ（黄）灰色、433が緑白色である。432・433は器面に貫入が走る。

434～440は白磁である。434は体部が薄壁（厚さ４㎜）で、外器面に針穴程の気泡痕が残る。435～437・439は、体部が肉太で上質の白磁である。いずれも外器面に沈線状の横線や曲線が描かれており、内器面に押さえの加わった強い横ナデが施されている。釉色は白灰色である。

438は復元底径6.5cmを測り、釉色は白灰黄色を呈する。440は釉色が緑青白色である。

441～443は瀬戸である。441は外器面に花印を有し、釉色は黒色及び茶褐色を呈する。442は、外器面の下位に薄い３条の稜線が巡る。443は瀬戸で外器面に、放射状にひろがる花弁文様があり、黄緑色の釉がかかっている。

444・445は陶器である。444は体部が「く」の字を呈しており、屈曲部に粘土紐状のものが貼り付けられている。釉色は主に黒色であるが、一部、黄緑色を呈する。445は黒褐色の釉色を呈する。

446は天目である。体部は薄壁（厚さ４㎜）で、黒茶色の釉がかかる。

447は体部のみの残存である。体部はやや内弯し、復元口径15.3cmを測る。軽量土器で、やや焼成不良である。448～450・452は外底に糸切り痕があり、453・454・457・458・463は、糸切り痕を観察出来ない。底径は454が5.6cmで、457が5.3cm、458が4.8cm、463が5.9cmを測る。

器形は船型（448～450・452）とラッパ状型（453・454・456～458・463）と、その中間型がある。

中間型は460を代表例に、455・459がある。460は基本的に船型を呈するが、口径に対する底

径の比率がやや低く、体部は直線的に伸びてラッパ状に開く。復元口径9.9cm・器高2.5cm・底径5.8cmを測る。455は底径6.1cmで、焼き締めが効いており、器面に褐灰色の不純物が付着する。459は底径5.2cmで、外底面に糸切り痕がある。460と455は外底面に糸切り痕を観察出来ない。

その他、461は唯一、高台付きの土師器である。底径6.8cmで、内器面に、ごく薄い円周方向のナデが施されて、やや焼き締めが効いている。451は小破片であるが、外底端は肥厚（厚さ1.3cm）し、外底面に鮮明な糸切り痕が残る。

462は瓦器の坏で、復元口径8.2cmを測る。器面は軟質で、色調は乳褐色を呈する。

464～475は擂鉢である。大半が瓦質のものであるが、466は土師系の中世雑器が利用されている。条線の一単位は、７本が467で、８本が465、９本が474、10本が475、13本が472である。内器面は466・469・475を除いて、刷け目が施されている。466・475は器面の風化が進み調整不明である。469は内外器面とも丁寧な横ナデである。外器面は464が、主に縦方向の刷け目後、ナデが加えられており、465は丁寧な横ナデである。468・470は主にナデ消しが施されている。467・469・471～474はほとんど未調整であるが、一部分に限り471は下位にヘラ状工具によるナデ、472は上位が横ナデ、下位に横方向の削り、473は上位に横ナデ、474は上位が横ナデ、下位に横方向の削りがそれぞれ加えられている。464・465・470～473は焼き締めの効いた擂鉢である。

465は片口周辺の残存である。色調は二次焼成により外器面がオレンジ色、内器面はくすんだ感じの小豆色を呈する。

471は、内器面の全体に条線が掻かれている。472・474は器形が復元出来る。472は口径24.4cm・器高8.6cm・底径12.2cmを測り、外底は上げ底である。474は復元口径26.8cm・器高9.8cm・復元底径13.4cmを測る。

476～482は須恵器である。外器面の調整は476がヘラ削り、477・478が横ナデで、479・482が波状の叩き、480・481は、丁寧なナデが施されている。内器面は、476・477・478が横ナデで、479～482が刷け目である。477・478は焼き締めが効いている。

477・478は頸部が「く」の字に外弯する。478は口縁部が内外両面から貼り合わされ、口唇部は窪む。

483～486・488は備前の口縁部である。内外器とも板状工具によるもので、横ナデが施されている。487は常滑甕の下位部分である。外底端は肥厚し、体部は外弯気味に大きく開く。内器面と内底面は横ナデで、外器面は未調整である。内器面の全面に灰白黄色の斑点が付着する。外底面に大粒のトチも付着している。

489は瓦質の土器で、外器面に波状の叩きと、内器面に刷け目がある。

490は備前の大甕片である。内外器面とも刷け状工具による横ナデが施されている。色調は二次焼成により灰オリーブ褐色を呈する。

491は備前の口縁部で復元口径50.4cmを測る。492は須恵器甕の下位部である。体部は、やや内弯気味に伸びて下位で肥厚し、復元底径25.0cmを測る。外器面に波状の叩きと、内器面に、刷け目が施されている。内外底面については、内底面に若干のナデが加わる程度で、成形時の指押えがそのまま残っている。

493は備前甕の底部で、残存底径32.5cmを測る。底部は薄壁（厚さ1.3cm）で、端部は肥厚（厚さ2.5cm）する。外器面・外底面とも、刷け状工具による調整がなされており、外器面は縦方向のナデで、外底との境は横ナデである。外底面は不整方向のナデが施されている。

494は備前で、495は常滑の口縁部である。496は中世雑器で炉器の類と思われる。外底は平底で体部との境は稜がつき、わずかに窪む。内器面と内底面はナデであるが、内器面は刷け状工具、内底面はヘラ状工具が用いられている。外底面に板目圧痕が残る。

497は、備前の甕片である。外器面は縦方向の刷け目で、中途から下位にかけてナデ消しが加わる。内器面は刷け状工具による横方向の粗い調整で、成形時の指押え痕が鮮明に残る。

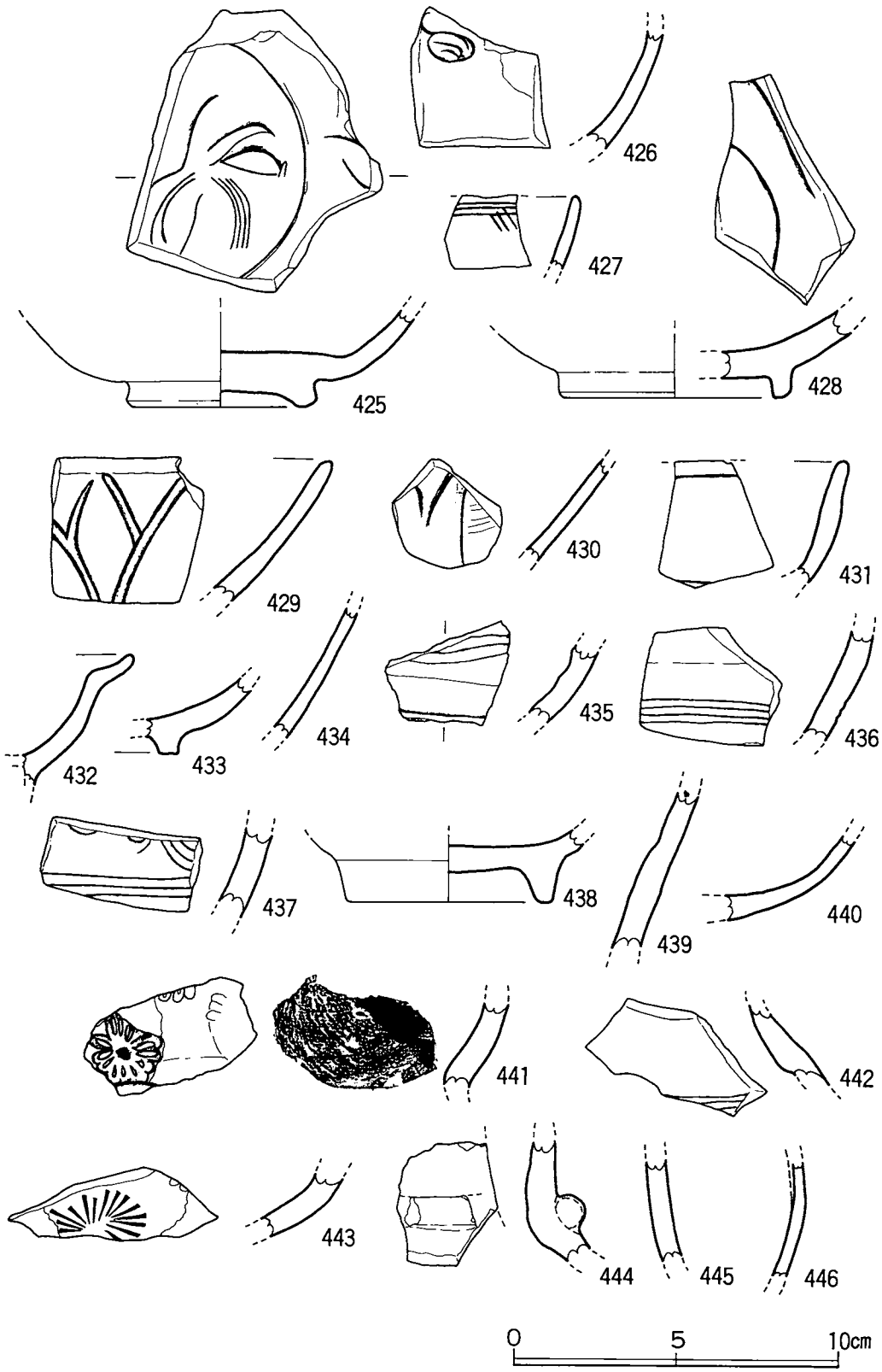
498・508は、常滑の甕片である。胴部の器形は、かなりいびつで内外器面とも刷け状工具による調整がなされている。外器面は縦方向のナデで、内器面は横方向のナデである。508は、外器面に、刷け状工具で、縦及び斜め方向の粗いナデが施されている。内器面は粗い横ナデで、成形時の凹凸が鮮明に残る。

499は滑石製垂飾品である。石鍋の転用であるが、未完成品で、先端部近くの器面に削り残し部分がある。長さ5.1cmを測る。

500・501は硯である。500は中国産の端渓硯と思われる。色調は赤紫褐色を呈する。501は、粘板岩製硯の周囲に石鑿を立て、区画割りを行っている。区画内は石鑿を使った平面的な、はつり加工が見られる。未完成品で、擦り面を加工中に欠損したものと思われる。

504は滑石製砥石である。石材からして砥石には柔かすぎると思われるが、あえて利用されているのを考えれば、艶出しあたりに使用されたものであろうか。真実、刀潰し痕や、細かな削り痕が数多く残っている。器面に、炭化物が付着する。

502・503・505～515は鉄器である。大方は角釘であるが、すべて欠損している。507は大方を失しているが、唯一、雁股の可能性がある。



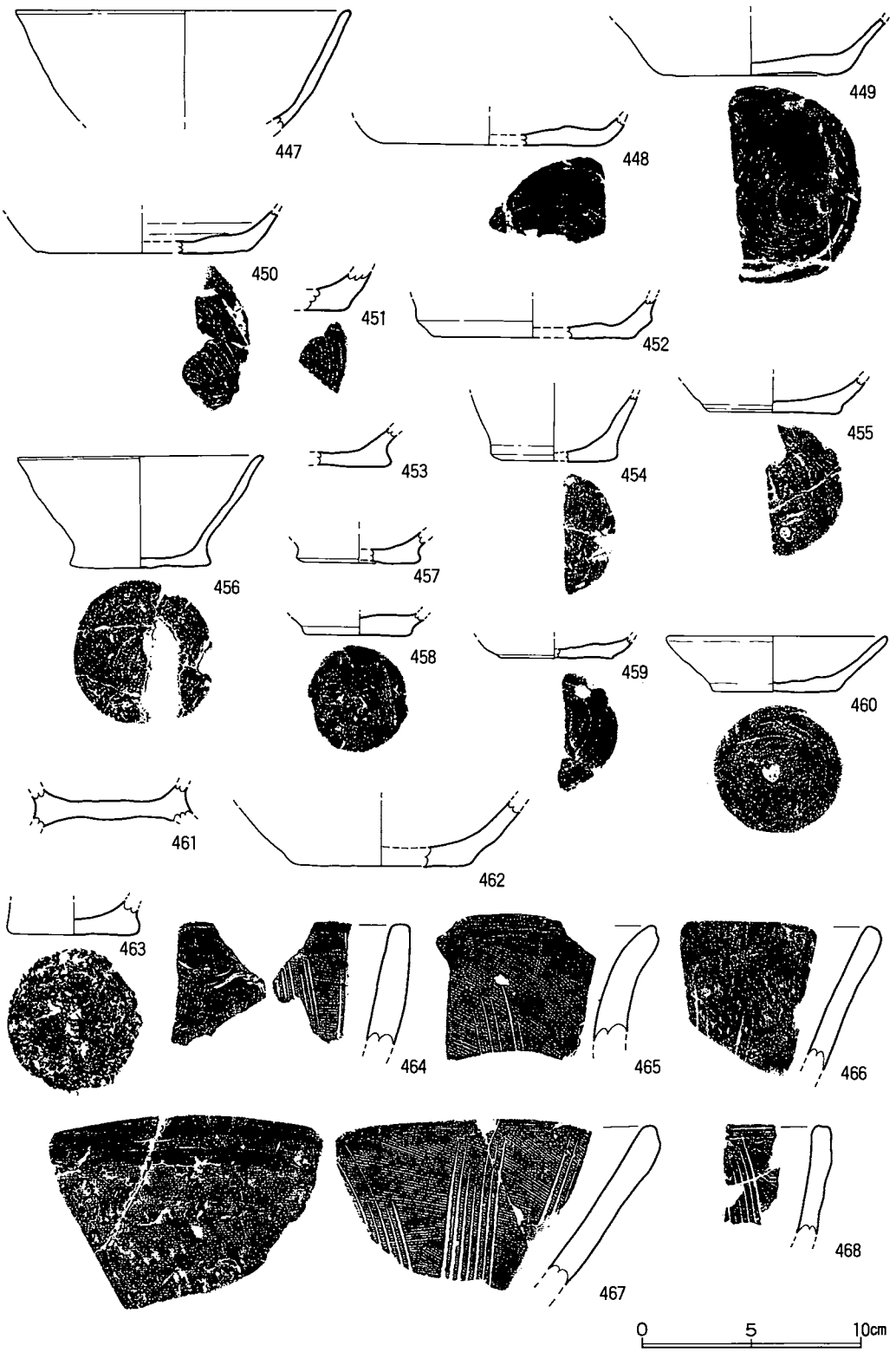

第132図　第Ⅲ期出土遺物の実測図①

| NO. | 形　態　の　特　徴 | 手法・調整・文様 | 備　　考 |
|---|---|---|---|
| 425<br>青　磁 | 底部は肥厚（厚さ 1.3cm）。<br>高台：端部は削り取られて、尻上がりとなっている。<br>端部と体部の境は大きく窪む。<br>復元底径　5.9cm | 内器面：薄い幾何学文様。<br>内器面の端部に界線状の沈線。 | 釉色：外器面は青白色。<br>内器面は、くすんだ感じの青灰緑色。<br>高台の畳付きまで施釉。<br>高台の内側から外底面にかけて露胎（露胎部分はベターッとした褐色）。<br>内外器面に大きな貫入。 |
| 426<br>青　磁 | ―――――― | 内器面：曲線文様。 | 釉色：灰緑色で光沢あり。<br>非常に上質な青磁。 |
| 427<br>青　磁 | 体部は、わずかに内弯。<br>口唇部の一部が窪む（但し、稜花皿の類ではないと思われる）。 | 外器面：口縁直下に薄い線（３本）と斜線（３本）。 | 釉色：くすんだ感じのオリーブ灰色。 |
| 428<br>青　磁 | 高台：畳付きは幅 0.3cmで、端部はやや丸味を帯びる。内側は極めて端的なヘラ削り。<br>復元底径　7.0cm | 内器面：界線状と直線状の沈線。 | 釉色：緑灰色。<br>高台の外側から畳付きにかけて、不完全な施釉。<br>内側から外底面にかけて、露胎（白褐色）。 |
| 429<br>青　磁 | 体部は、やや内弯。 | 外器面：削り出しによる鮮明な蓮弁文様。 | 釉色：灰緑色。外器面は、やや黄色味を帯びる。<br>内器面に大きな貫入。<br>外器面に針穴程の気泡痕。 |
| 430<br>青　磁 | 体部は薄壁（厚さ 0.3cm）。 | 内器面：丁寧なナデで器面は滑らか<br>外器面：削り出しによる鮮明な蓮弁文様。 | 釉色：緑灰白色。<br>胎土は極めて精良。 |
| 431<br>青　磁 | 体部は、内弯気味に伸びて、口縁でわずかに外弯。 | ―――――― | 釉色：薄緑白色。 |
| 432<br>青　磁 | 体部は内弯し、口縁は「く」の字に大きく外弯。内器面の屈曲部は白色の稜線を呈する。<br>高台付きの碗。 | ―――――― | 釉色：オリーブ（黄）灰色。外器面の下位のみオリーブ灰色<br>内器面に大きな貫入（少）。<br>外器面には細かな貫入。 |
| 433<br>青　磁 | 高台の畳付きは扁平（幅 0.6cm）。 | 内器面：丁寧なナデで、器面は滑らか。 | 釉色：淡い緑白色、光沢あり。<br>高台の外側まで施釉、畳付きに少量のトチが付着。<br>外器面に一部に貫入。 |
| 434<br>白　磁 | 体部は薄壁（厚さ 0.4cm）。 | ―――――― | 釉色：白灰色。<br>外器面に針穴程の気泡痕。 |
| 435<br>白　磁 | ―――――― | 内器面：強い横ナデに、押えが加わる。<br>外器面：横線（沈線）。 | 釉色：白（灰）色。<br>外器面の 2／3 は白褐色で、この部分に限り貫入なし。 |
| 436<br>白　磁 | ―――――― | 内器面：強い横ナデに、押えが加わる。<br>外器面：４条の沈線。 | 釉色：白灰色。<br>内外器面に細かな貫入（但し、外器面の貫入はやや太め）。 |
| 437<br>白　磁 | ―――――― | 内器面：強い横ナデに、押えが加わる。<br>外器面：３条の沈線と曲線。 | 釉色：白灰色。<br>内外器面に細かな貫入。 |
| 438<br>白　磁 | 底部は中央部で、やや肥厚。<br>高台：高さは中央部で 0.9cm、端部で１cm。畳付きは扁平（幅 0.4cm）。<br>外底面の中央部にロクロ切り離しによる小突起物。<br>復元底径　6.5cm | 高台の外側から内側にかけて、極めて丁寧な横ナデ。 | 釉色：白灰黄色、少量の不純物が混じる。<br>内底面に施釉、体部の外器面から高台内の外底面にかけて露胎。 |

第115表　第Ⅲ期出土遺物の観察表①

| NO. | 形　態　の　特　徴 | 手法・調整・文様 | 備　　考 |
|---|---|---|---|
| 439<br>白　磁 | ―――――― | 内器面：強い横ナデに、押えが加わる。<br>外器面：２条の稜線（白色）。 | 釉色：白灰色。<br>内外器面に細かな貫入。<br>内器面の一部に釉の塊が付着。 |
| 440<br>白　磁 | ―――――― | 内器面：丁寧なナデで、器面は滑らか、体部との境に沈線。<br>外器面：ごく弱い稜線。 | 釉色：緑青白色。 |
| 441<br>瀬　戸 | ―――――― | 外器面：花印。 | 釉色：黒色及び茶褐色。<br>内器面の一部にも釉が垂れている。 |
| 442<br>瀬　戸 | ―――――― | 内器面：上位は横ナデ、下位は押えが加わる。<br>外器面：下位に薄い３条の稜線。 | 釉色：緑黄色。<br>内器面の一部に釉がかかる。 |
| 443<br>瀬　戸 | ―――――― | 内器面：横ナデ後、強い指押え。<br>外器面：放射状にひろがる花弁文様。 | 釉色：黄緑色。 |
| 444<br>陶　器 | 瓶の頸部。<br>体部は「く」の字を呈しており、屈曲部に、直径 0.9cm程の粘土紐状のものが貼り付けられている。 | ―――――― | 釉色：黒色。（一部、黄緑色）。 |
| 445<br>陶　器 | ―――――― | ―――――― | 釉色：黒褐色。<br>内器面に釉が垂れている。 |
| 446<br>天　目 | 体部は薄壁（厚さ 0.4cm）。 | ―――――― | 釉色：黒茶色。<br>内器面は釉がほとんど剝落している。 |
| 447<br>土師器坏 | 坏で、体部はやや内弯。<br>復元口径　15.3cm | 内器面：丁寧なナデ（但し、ザラザラの器面）。<br>外器面：器壁は、ボロボロで風化が目立つ。 | 色調：外器面は橙色。<br>内器面は灰白黒色。<br>軽量土器。<br>やや焼成不良。 |
| 448<br>土師器 | 底部は、多少いびつ。<br>復元底径　10.0cm | 内底面：中央部にかけて、指押えにより窪む。 | 色調：褐白灰色。 |
| 449<br>土師器 | 外底は上げ底、内底面は中央部で窪む。<br>外底と体部の境はやや窪み、体部は薄壁（厚さ 0.3cm）。<br>復元底径　8.0cm | 内器面：丁寧なナデ。<br>外底面：糸切り痕。 | 色調：褐白灰色。 |
| 450<br>土師器 | 復元底径　8.2cm | 内底面：中央は指押えにより、やや窪む。<br>内外器面の調整は粗い。<br>外底面：鮮明な糸切り痕。 | 色調：褐白灰色。<br>器面に灰色の不純物が付着。 |
| 451<br>土師器 | 外底端は肥厚（厚さ 1.3cm）。 | 内外器面：横ナデ。<br>外底面：鮮明な糸切り痕。 | 色調：鈍い橙色。 |
| 452<br>土師器坏 | 外底は、焼成前の器圧でしゃげている。<br>底径　9.2cm | 体部の下位は、やや張り出す格好となり、器面に稜がつく。<br>内底面：指押え。<br>外底面：糸切り痕。 | 色調：鈍い橙色。 |
| 453<br>土師器 | 外底部は外側へ張り出す。 | 外底と体部の境は大きく窪む。<br>外底面：糸切り痕は不明。 | 色調：鈍い橙色。 |
| 454<br>土師器 | 体部はラッパ状に開くものと思われる。<br>外底は平底。<br>復元底径　5.6cm | 外底と体部の境は大きく窪む。<br>内器面：多少、雑なナデ。<br>外器面：横ナデ。<br>内底面：円周方向のナデに指押えが加わる。<br>外底面：糸切り痕を観察出来ず。 | 色調：褐灰色。<br>やや焼成不良。 |

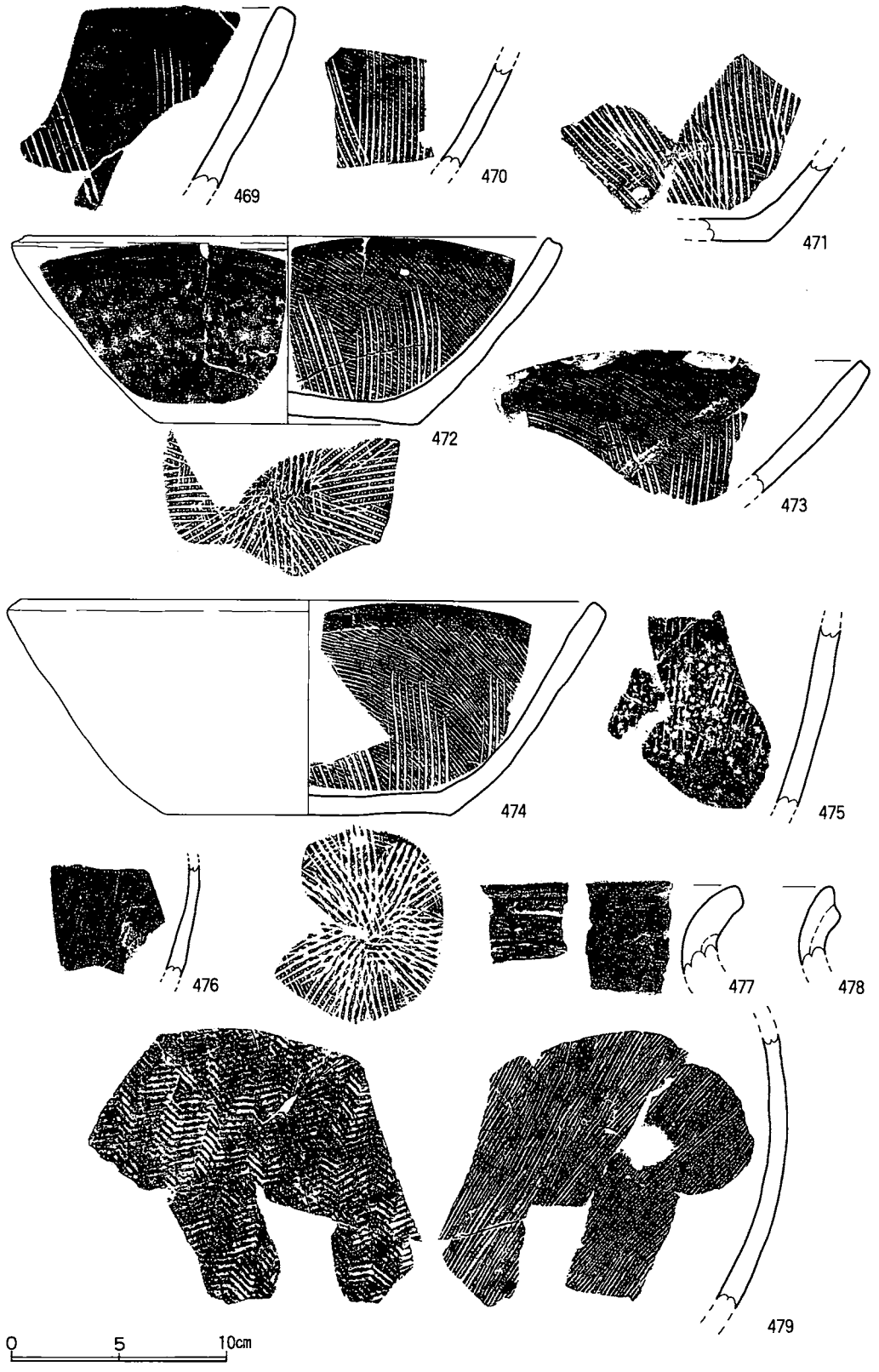
第116表　第Ⅲ期出土遺物の観察表②




第133図　第Ⅲ期出土遺物の実測図②

| NO. | 形態の特徴 | 手法・調整・文様 | 備考 |
|---|---|---|---|
| 455<br>土師器 | 底径　6.1cm<br>外底は、いびつな形状。<br>外底端は、焼成前の器圧で、少々しゃげている。 | 外底と体部の境は窪む。<br>内底面：ナデ後、軽い指押え。<br>外底面：糸切り痕を観察出来ず。 | 色調：乳灰色。<br>褐灰色の不純物が付着。<br>焼き締めが効いている。 |
| 456<br>土師器坏 | 外底端は肥厚（厚さ 1.0cm）し、体部はラッパ状に大きく開く。<br>復元口径　11.2cm　器高　6.0cm<br>復元底径　6.4cm | 外底面：糸切り痕を観察出来ず。 | 色調：鈍い橙色。<br>軽量土器。<br>器面の風化が著しい。 |
| 457<br>土師器 | 外底は平底で、中央部が、やや上げ底気味。<br>外底端は肥厚（厚さ 1.1cm）。<br>底径　5.3cm | 外底面：糸切り痕を観察出来ず。 | 色調：褐灰色。 |
| 458<br>土師器 | 底部は肉太（厚さ 1.0cm）。<br>底径　4.8cm | 外底と体部の境は窪む。<br>内底面：ナデで中央部は指押え。<br>外底面：糸切り痕を観察出来ず。<br>板目圧痕が残る。 | 色調：褐白色。<br>やや焼成不良。 |
| 459<br>土師器 | 復元底径　5.2cm | 外底と体部の境に沈線。<br>外底面：粗い調整の糸切り痕。 | 色調：褐白灰色。<br>器壁の風化が目立つ。 |
| 460<br>土師器 | 体部は直線的に伸びて、ラッパ状に大きく開く。<br>体部は、中途から同一の厚さで口縁に至る。<br>復元口径　9.9cm<br>器高　2.5cm　底径　5.8cm | 内外器面：横ナデ。 | 色調：褐白色。 |
| 461<br>土師器 | 高台付きの土師器（高台欠損）。<br>底径　6.8cm | 内器面：ごく薄い円周方向のナデ。 | 色調：灰白褐色。<br>やや、焼き締めがきいている。 |
| 462<br>瓦　器 | 復元底径　8.2cm | 外底と体部の境は、やや窪む。<br>内器面：丁寧なナデ。<br>外器面：指押え。 | 色調：乳褐色。<br>器面は軟質で、胎土が手に付着。 |
| 463<br>土師器 | 外底は平底、端部は肥厚（厚さ 1.5cm）。<br>底径　5.9cm | 内底面：指押えで全体的に、大きく窪む。<br>外底面：糸切り痕を観察出来ず。 | 色調：白褐桃色。<br>器面に不純物が付着。<br>焼成不良。 |
| 464<br>瓦質擂鉢 | 体部は、中途でやや肥厚（厚さ 1.4cm）。 | 内器面：条線の一単位は不明（8本まで認められる）。<br>上位は、斜め方向の刷け目調整の後、横ナデ。中位は横方向の鮮明な刷け目。<br>外器面：上位は横ナデ、中途は縦方向の刷け目調整の後、ナデ。 | 焼き締めが効いている。 |
| 465<br>硬質擂鉢 | 残存体部は片口周辺。<br>体部は肉太（厚さ 1.2～1.4cm）。 | 内器面：条線の一単位は8本。<br>斜め方向の刷け目。<br>外器面・内器面の口縁直下：丁寧な横ナデ。<br>外器面の下位：非常に強いナデ消し | 色調：外器面は橙色。<br>内器面は、くすんだ感じの小豆色。<br>上質の擂鉢。 |
| 466<br>土師系擂鉢<br>（中世雑器） | 体部は、わずかに外弯。 | 内器面：条線の一単位は不明。 | 色調：乳褐色。<br>器面は軟質で胎土が手に付着。<br>器面の風化が著しい。 |
| 467<br>瓦質擂鉢 | 体部は直線的に伸び、口縁でやや肥厚。 | 内器面：条線の一単位は7本。<br>横及び斜め方向の刷け目。<br>上位は後に、横ナデが加えられている。<br>外器面：未調整で、成形時の凹凸をそのまま残す。 | 焼き締めが効いている。 |

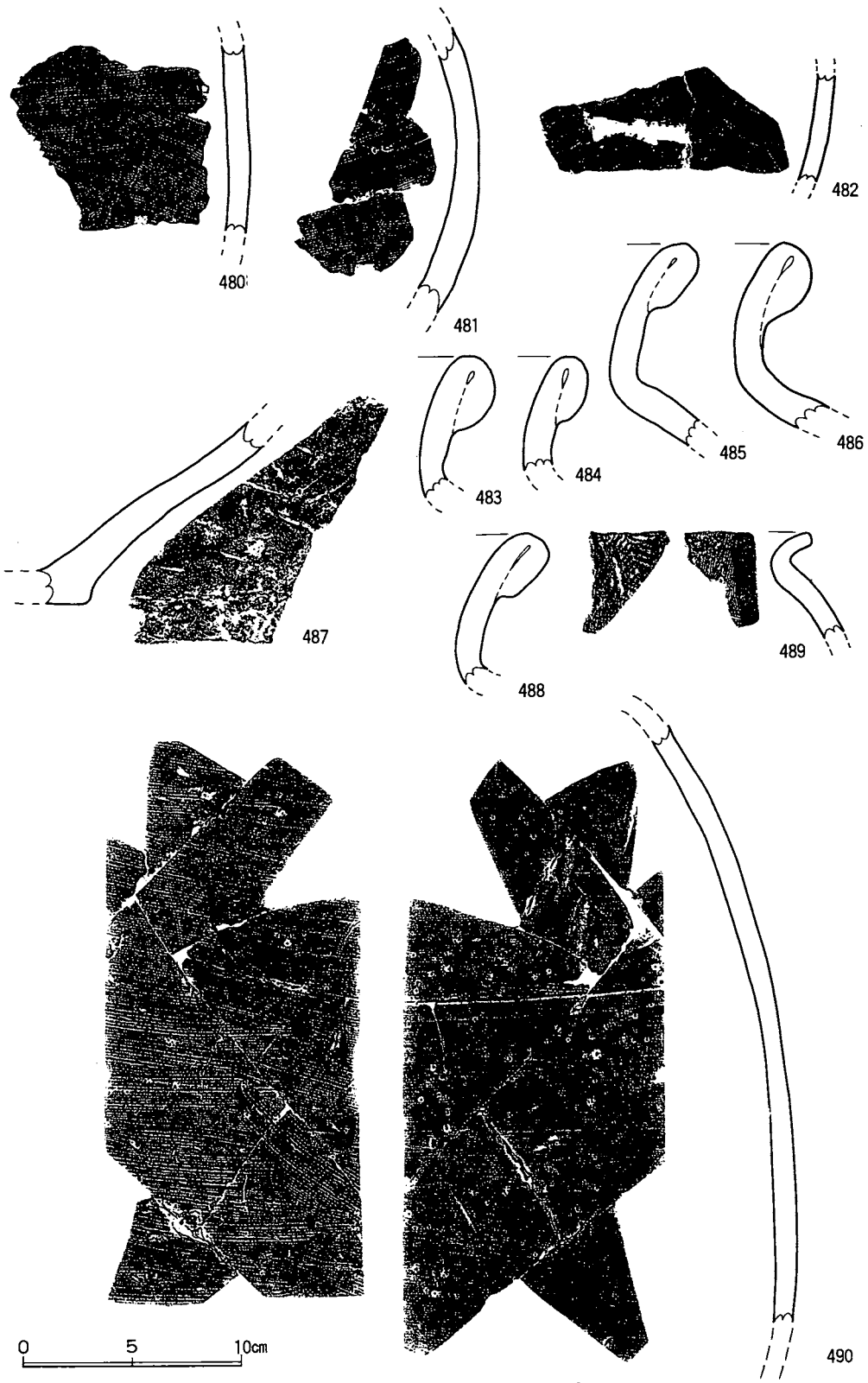
第117表　第Ⅲ期出土遺物の観察表③




第134図　第Ⅲ期出土遺物の実測図③

| NO. | 形　態　の　特　徴 | 手法・調整・文様 | 備　　考 |
|---|---|---|---|
| 468<br>硬質瓦器 | 体部は、わずかに内弯。<br>口唇部は扁平（幅 0.8cm）。 | 内器面：条線の一単位は不明（6本まで認められる）。<br>横ナデ後、縦、横、斜め方向の刷け目（横、斜め方向の刷け目は浅く、縦方向のものは、やや強い）。上位は強い横ナデ。<br>外器面：叩き目や強い指押えをナデ消す。上位は強い横ナデ。 | 色調：灰白褐色。 |
| 469<br>硬質瓦器 | 体部はわずかに内弯し、中途から口縁にかけて、漸次、肥厚。 | 内器面：条線の一単位は不明（7本まで認められる）。<br>内外器面：丁寧な横ナデ。<br>外器面：中途と下位に軽い指押え。 | 色調：外器面は白褐色。<br>内器面は乳褐色～灰黒色。 |
| 470<br>瓦質擂鉢 | ―――― | 内器面：条線の一単位は不明（12本まで認められる）。<br>斜め方向（左上→右下）の刷け目。<br>外器面：叩きの後、ナデ消しが加えられている。下位部分のナデは非常に丁寧。 | 非常に焼き締めが効いている。 |
| 471<br>瓦質擂鉢 | ―――― | 外底と体部の境に稜線。<br>内器面：条線の一単位は不明。<br>内底面も含め、全面に斜め方向（左上→右下）及び横方向の刷け目。全面に条線が掻かれている。<br>外器面：外底面も含め、未調整。下位はヘラ状工具によるナデ。 | 色調：灰白黒色。<br>非常に焼き締めが効いている。 |
| 472<br>瓦質擂鉢 | 体部はやや内弯し、中途から口縁にかけて、やや肥厚。<br>口唇部は幅 0.8cmで全体的に窪む。<br>外底は上げ底。<br>口径　24.4cm<br>底径　12.2cm<br>器高　 8.6cm | 内器面：条線の一単位は13本。<br>全面に斜め方向の刷け目。上位は後に、横ナデが加えられている。<br>外器面：成形時のナデ痕をそのまま残すが、上位は横ナデ。下位には、横方向の削りが加えられている。<br>外底面：ナデ。 | 色調：灰白色。<br>非常に焼き締めが効いている。 |
| 473<br>瓦質擂鉢 | 体部はやや内弯し、下位から口縁にかけて、若干、肥厚。<br>口唇部（幅0.6cm)は全体的に窪む。 | 内器面：条線の一単位は不明（10本まで認められる）。<br>斜め方向（左上→右下）の刷け目。上位は後に、横ナデが加えられている。<br>外器面：ほとんど未調整。成形時の凹凸を残す。上位に限り、横ナデが加えられている。 | 焼き締めが効いている。 |
| 474<br>瓦質擂鉢 | 体部はやや内弯し、中途から口縁にかけて、やや肥厚。<br>口唇部は扁平（幅 0.8cm）。<br>外底は、わずかに上げ底。<br>復元口径　26.8cm<br>器高　　9.8cm<br>復元底径　13.4cm | 外底と体部の境に稜が付く。<br>内器面：条線の一単位は9本。<br>斜め方向（左上→右下）の刷け目。上位は後に、横ナデが加えられている。<br>外器面：成形時の凹凸が、鮮明に残る。縦方向の弱い平行叩きの痕跡。上位は後に横ナデ、下位は横方向の削りが加えられている。<br>外底面：ナデ。 | ―――― |
| 475<br>瓦質擂鉢 | ―――― | 内器面：条線の一単位は10本（幅 0.2cm）。 | 胎土は砂粒で、白色鉱物の混入が目立つ。器面の風化が著しい。 |

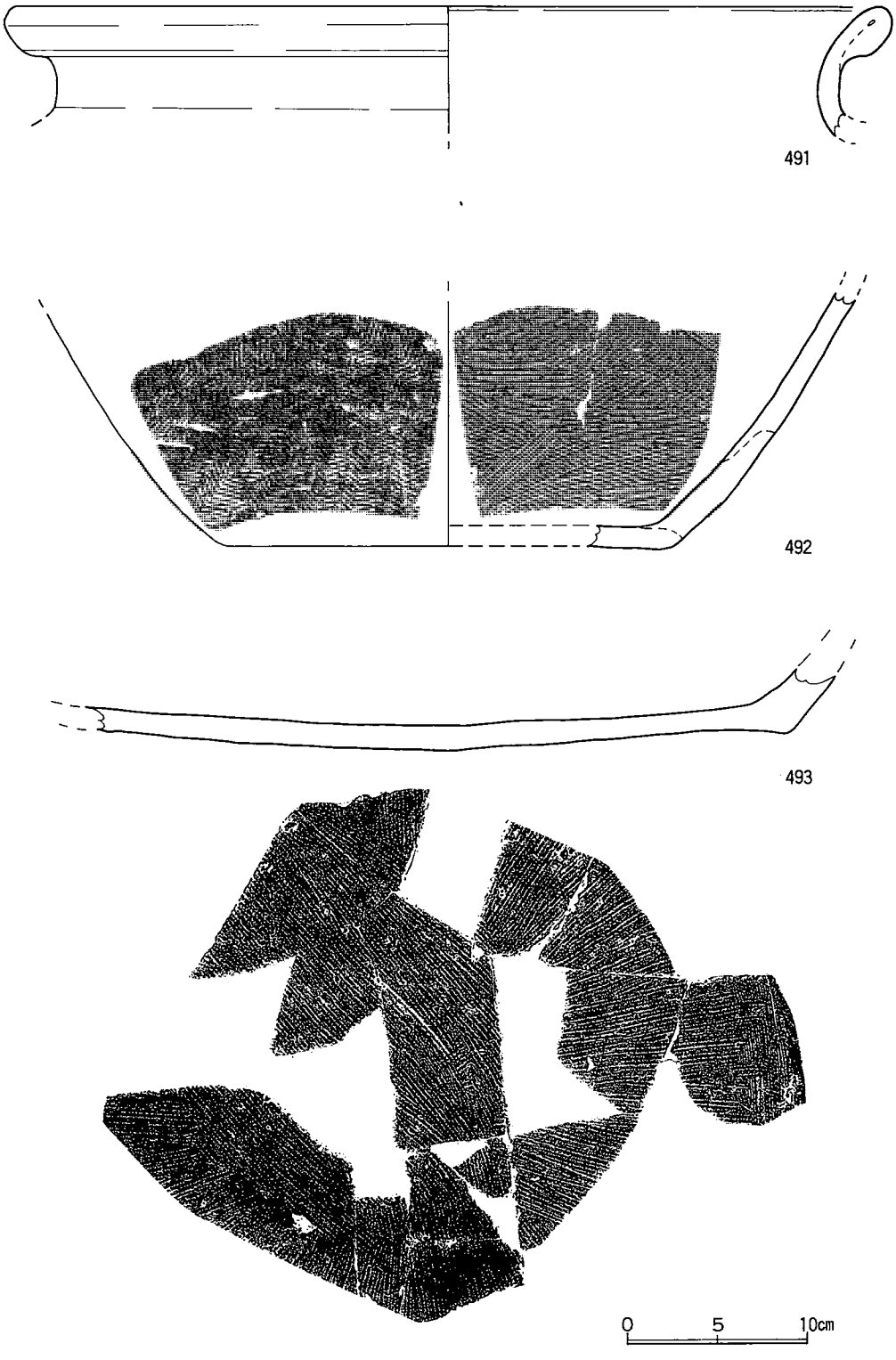
第118表　第Ⅲ期出土遺物の観察表④



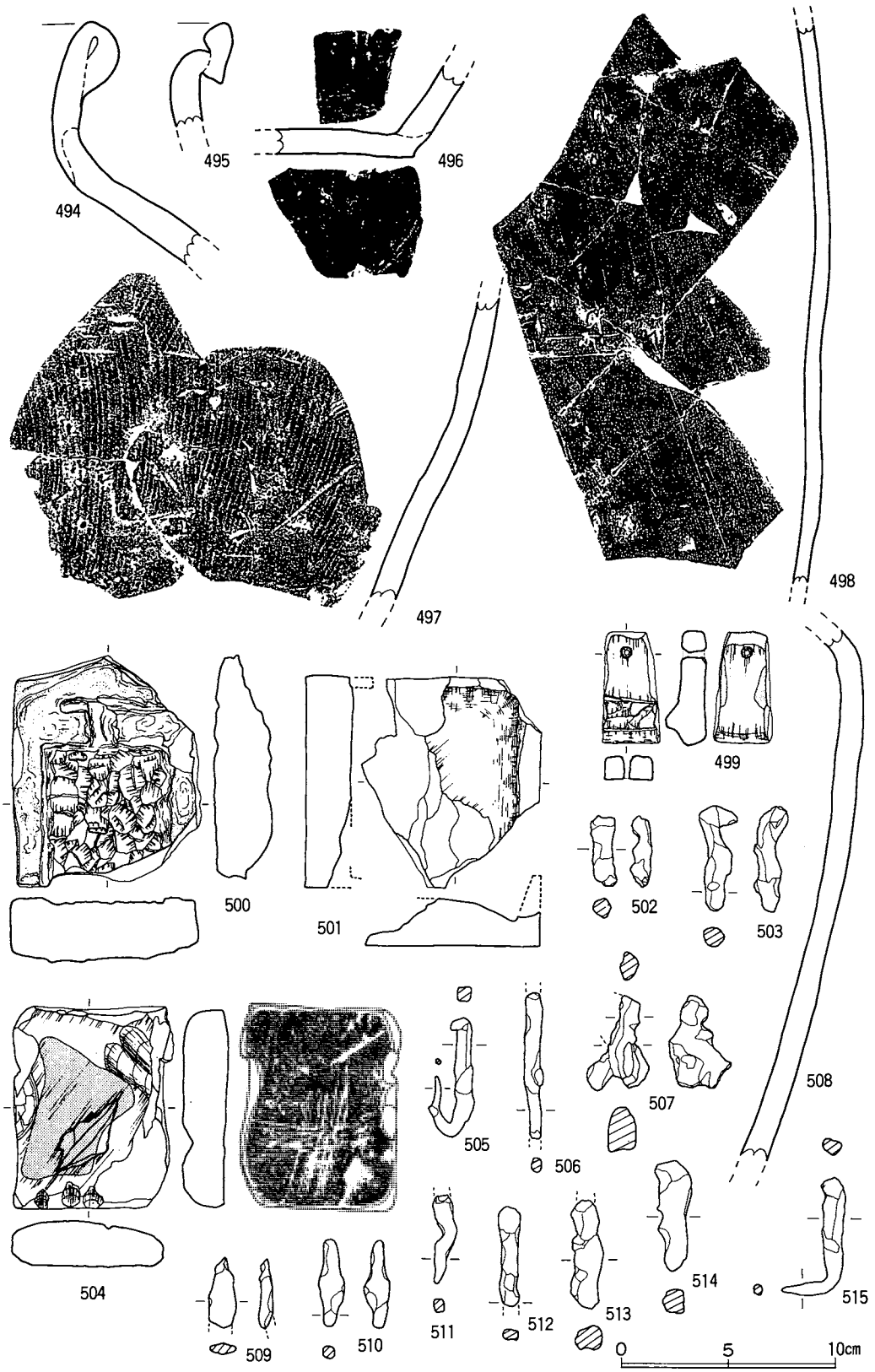

第135図　第Ⅲ期出土遺物の実測図④

| NO. | 形　態　の　特　徴 | 手法・調整・文様 | 備　　考 |
|---|---|---|---|
| 476<br>須恵器 | ―――――― | 内器面：丁寧な横ナデ。<br>外器面：ヘラ削り。 | ―――――― |
| 477<br>須恵器 | 頸部は「く」の字に外弯。 | 内器面：丁寧な横ナデ。<br>外器面：粗い横ナデ。 | 非常に焼き締めが効いている。 |
| 478<br>須恵系土器 | 口唇部は、全体的に窪む。 | 口縁部は内外両面から貼り合わされている。<br>内外器面：横ナデ。 | 焼き締めが効いている。 |
| 479<br>須恵器 | ―――――― | 内器面：横及び斜め方向（左上→右下）の刷け目。<br>外器面：波状の叩き。 | ―――――― |
| 480<br>須恵器 | ―――――― | 内器面：横及び斜め方向（左上→右下）の刷け目。<br>外器面：丁寧なナデ。 | 色調：灰白黄色。<br>上質の須恵器。 |
| 481<br>須恵器 | ―――――― | 内器面：横及び斜め方向（左上→右下）の刷け目。<br>外器面：非常に丁寧なナデ。 | 色調：灰白黄色。<br>上質な土器。<br>胎土は精良。 |
| 482<br>須恵器 | ―――――― | 内器面：横及び斜め方向（左上→右下）の刷け目。<br>外器面：波状の叩き。 | ―――――― |
| 483<br>備　前 | ―――――― | 成形：口縁肥厚部は、粘土帯を外側に折返して作られている。<br>内外器面：板状工具と思われるものによる横ナデ。 | 内器面の上位と外器面に、ごくわずかな自然釉（灰白黄色）がかかる。 |
| 484<br>備　前 | ―――――― | 成形：483に同じ。<br>内外器面：強い横ナデ。 | 釉のかかり具合は 483に同じ。 |
| 485<br>備　前 | ―――――― | 成形：483に同じ。<br>内外器面：板状工具と思われるものによる横ナデ。 | 口縁の周辺部は、ごくわずかの自然釉がかかる。 |
| 486<br>備　前 | ―――――― | 成形：483に同じ。<br>内外器面：横ナデ。 | 外器面に、ごくわずかの自然釉がかかる。 |
| 487<br>常　滑 | 体部は、外弯気味に大きく開く。<br>外底端は肥厚（厚さ 2.3cm）。 | 内器面：下位は横ナデ。<br>外器面：未調整。<br>内底面：弱い横ナデ。 | 色調：外器面は、くすんだ感じの小豆色。<br>内器面は、全面に灰白黄色の斑点が付着。<br>外底面に大粒のトチが付着。 |
| 488<br>備　前 | ―――――― | 成形：483に同じ。<br>内外器面：板状工具と思われるものによる横ナデ。 | 釉のかかり具合は 483に同じ。 |
| 489<br>瓦質土器 | ―――――― | 内器面：横方向の刷け目、上位は後に横ナデが加えられている。<br>外器面：波状の叩き、上位は後に、横ナデが加えられている。 | 色調：外器面は、くすんだ感じの灰褐色。<br>内器面は灰白色。 |
| 490<br>備　前 | ―――――― | 内器面：刷け状工具による非常に丁寧な横ナデ。<br>外器面：刷け状工具による横ナデ。 | 色調：二次焼成により、灰オリーブ褐色に変色。 |
| 491<br>備　前 | 復元口径　50.4cm | 成形：483に同じ。<br>内外器面：横ナデ。 | 外器面の口縁肥厚部より下位部分に自然釉がかかる。 |

第119表　第Ⅲ期出土遺物の観察表⑤




第136図　第Ⅲ期出土遺物の実測図⑤




第137図　第Ⅲ期出土遺物の実測図⑥

| NO. | 形態の特徴 | 手法・調整・文様 | 備考 |
|---|---|---|---|
| 492<br>須恵器 | 体部はやや内弯気味に伸びる。<br>体部は下位で肥厚（厚さ 1.6cm）。<br>復元底径 25.0cm | 内器面：横及び斜め方向の刷け目。<br>外器面：波状の叩き痕。<br>内底面：若干のナデ、成形時の指押えが残る。<br>外底面：指押えのみ。 | ―――― |
| 493<br>備前 | 底部は薄壁（厚さ 1.3cm）で、端部は肥厚（厚さ 2.5cm）。<br>残存底径 32.5cm | 外器面：刷け状工具による縦方向のナデ。外底との境は刷け状工具による横ナデ。<br>外底面：刷け状工具による不整方向のナデ。 | ―――― |
| 494<br>備前 | ―――― | 成形： 483に同じ。<br>内外器面：横ナデ。 | 内器面の上位と外器面に、ごくわずかな自然釉がかかる。 |
| 495<br>常滑 | ―――― | 内外器面：刷け状工具と思われるものによる横ナデ。 | 色調：外器面の上位は、くすんだ感じの小豆色。中途は、やや黄色味を帯びた小豆色。 |
| 496<br>中世雑器<br>（炉器） | 外底は平底。 | 外底と体部の境は稜が付き窪む。<br>内器面：刷け状工具によるナデ。<br>内底面：指押えの後に、ヘラ状工具によるナデ。<br>外底面：強い横ナデ。 | 外底に板目圧痕。<br>上質の中世雑器。 |
| 497<br>備前 | ―――― | 内器面：刷け状工具による横方向の粗い調整。成形時の指押え痕が、鮮明に残る。<br>外器面：全面に縦方向の刷け目。残存体部の中途から下位にかけて、後にナデ消しが加わる。 | 色調：外器面は小豆色であるが、ややくすんだ感じの黄色味を帯びている。 |
| 498<br>常滑 | 胴部の器形は、かなりいびつ。 | 内器面：上位は、刷け状工具による横方向の調整痕。他は、後に横ナデが加わる。<br>外器面：刷け状工具による縦方向の調整痕。 | ―――― |
| 499<br>滑石製<br>垂飾品 | 長さ 5.1 cm<br>厚さ（最大）1.9 cm（最小）1.1 cm<br>幅 （最大）2.8 cm（最小）1.9 cm<br>有孔径 0.5 cm 重さ 41.29 g | 未完成品で、先端部近くの器面に削り残し部分がある。 | 滑石製鍋の転用。 |
| 500<br>硯 | 長さ 9.8 cm<br>残存最大厚さ 2.2 cm<br>残存最大幅 8.1 cm<br>重さ 405.50 g | 墨溜まりの部分は、正確な長方形を呈するものと思われる。 | 色調：赤紫褐色。<br>中国産の端渓硯と思われる。 |
| 501<br>硯 | 残存長さ 10.1 cm<br>厚さ 3.0 cm<br>擦り面の深さ 0.3 cm<br>幅 8.8 cm<br>擦り面の幅 5.7 cm<br>重さ 194.91 g | 周囲は、石鑿を立てて区画割りを行っている。<br>区画内は、石鑿を使った平面的な、はつり加工が見られる。 | 粘板岩製。<br>未完成品。擦り面を加工中に欠損したものと思われる。 |
| 504<br>砥石 | 長さ 9.1 cm<br>最大厚さ 2.1 cm<br>幅 7.0 cm<br>重さ 292.37 g | 砥石には柔かすぎると思われるが、刀潰し痕や、細かな削り痕が数多く残っている所から、艶出しに使用された物と思われる。 | 滑石製砥石。<br>器面に炭化物が付着する。 |
| 508<br>常滑 | ―――― | 内器面：粗い横ナデ、成形時の凹が鮮明に残る。<br>外器面：刷け状工具により、縦及び斜め方向の粗いナデ。 | ―――― |

第120表　第Ⅲ期出土遺物の観察表⑥

| NO. | 形態の特徴 |
|---|---|
| 502<br>鉄器 | 残存長さ 3.2 cm<br>厚さ・幅 0.8 × 0.8cm<br>重さ 4.27g |
| 503<br>鉄器 | 残存長さ 4.9 cm<br>厚さ・幅 0.9 × 1.0cm<br>重さ 11.42g |
| 505<br>鉄器 | 角針。<br>残存長さ 5.4 cm<br>(先端) 0.65×0.65cm<br>(端部) 0.2 ×0.25cm<br>重さ 10.42g |
| 506<br>角釘 | 残存長さ 6.7 cm<br>厚さ・幅 0.7 × 0.5cm<br>重さ 10.32g |
| 507<br>雁股(?) | 残存長さ 4.3 cm<br>厚さ・幅 1.9 × 1.2cm<br>重さ 27.81g |
| 509<br>鉄器 | 残存長さ 3.3 cm<br>厚さ・幅 0.5 × 1.2cm<br>重さ 6.37g |

| NO. | 形態の特徴 |
|---|---|
| 510<br>鉄釘 | 残存長さ 4.0 cm<br>厚さ・幅 0.6 × 0.6cm<br>重さ 6.88g |
| 511<br>角釘 | 残存長さ 4.2 cm<br>厚さ・幅 0.6 × 0.5cm<br>重さ 4.66g |
| 512<br>角釘 | 残存長さ 4.7 cm<br>厚さ・幅 0.45×0.75cm<br>重さ 5.60g |
| 513<br>鉄器 | 残存長さ 5.1 cm<br>厚さ・幅 1.1 × 1.3cm<br>重さ 11.53g |
| 514<br>鉄器 | 残存長さ 5.2 cm<br>厚さ・幅 1.1 × 1.0cm<br>重さ 17.94g |
| 515<br>鉄器 | 残存長さ 5.6 cm<br>厚さ・幅<br>(先端) 0.8 ×0.65cm<br>(端部) 0.4 × 0.5cm<br>重さ 10.27g |

第121表　第Ⅲ期出土遺物の観察表⑦

## 第4節　東側尾根及び西側尾根の出土遺物

516～519・524は青磁である。516～518・524は碗の破片で、外器面に削り出しによる蓮弁文様がある。517は花弁の先端が鋭角で、中央を下る縦線は強い稜線となる。釉色は516が薄色コバルトで、517が緑灰色、518は緑灰白色である。516は口縁直口で、わずかに外弯する。517・518は、体部の上位が直線的に伸びる。

519は皿で、復元底径4.6cmを測る。底部は肥厚（厚さ1.2cm）し、外底は平底である。内底面にヘラ描きによる花弁文様がある。ややコバルトががった薄青緑色の釉がかかり、外底面は露胎である。非常に上質の青磁である。

520は土師系土器の底部である。外底は上げ底で端部は肥厚する（厚さ2.5cm）。

521・522は土師器の破片である。521は外底端が肥厚（厚さ1.2cm）し、522は底部の中央部寄りで薄壁（厚さ4mm）となる。

523は瓦質擂鉢である。条線の一単位は不明であるが、7本まで認められる。内外器面に横方向の刷け目が施されているが、調整方向は内器面が横方向で、外器面は縦方向である。

## 第5節　南東側張り出し尾根出土の遺物

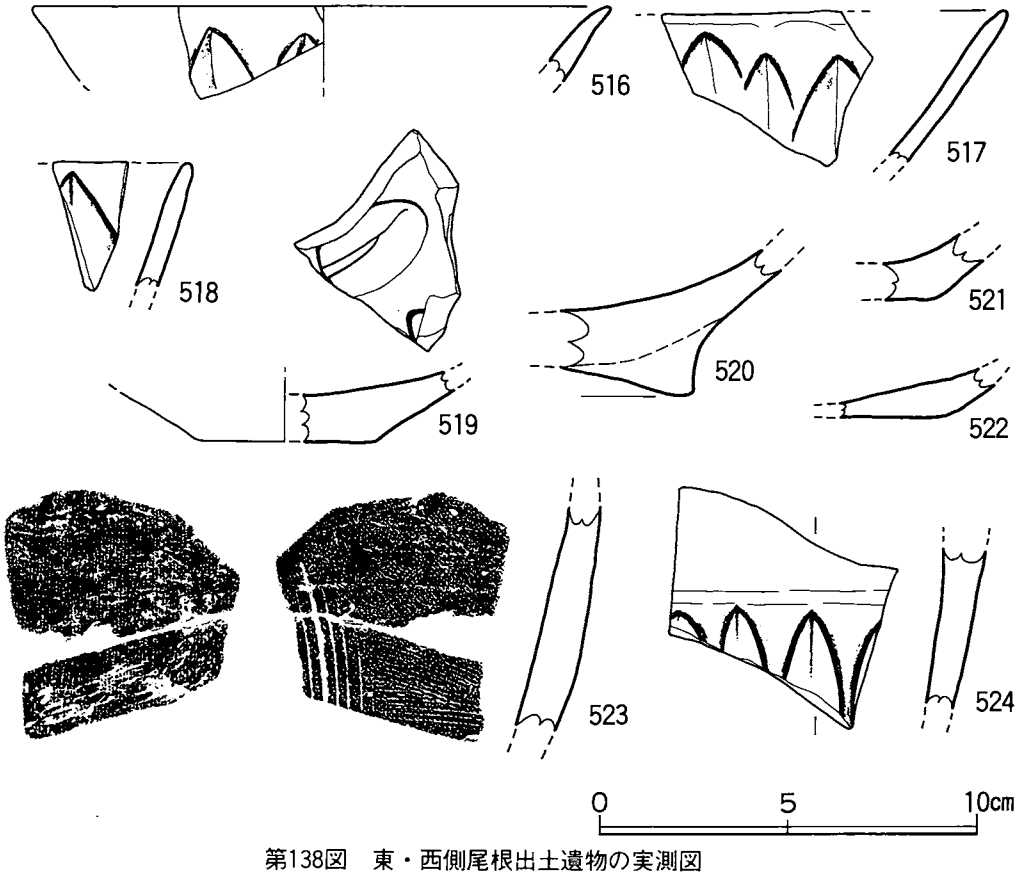
525～536・539・540は土師器である。器形は525・529～530・535が船型で、526がラッパ状を呈する。船型については、いずれも外底面に糸切り痕を残す大型の坏である。525は口径

13.1cm・器高3.9cm・底径8.3cmで、527は口径12.6cm・器高3.6cm・底径8.3cm、528は口径12.8cm・器高3.5cm・底径8.0cm、530は口径12.2cm・器高3.3cm・底径8.7cm、529は底径7.9cm、535は底径7.5cmを測る。これらのものは、529・535を除いて体部がやや外弯し、口縁が肥厚する共通の形態がある。525・529・530・535の外底面には板目圧痕が加わる。528・535は焼き締めが効いている。

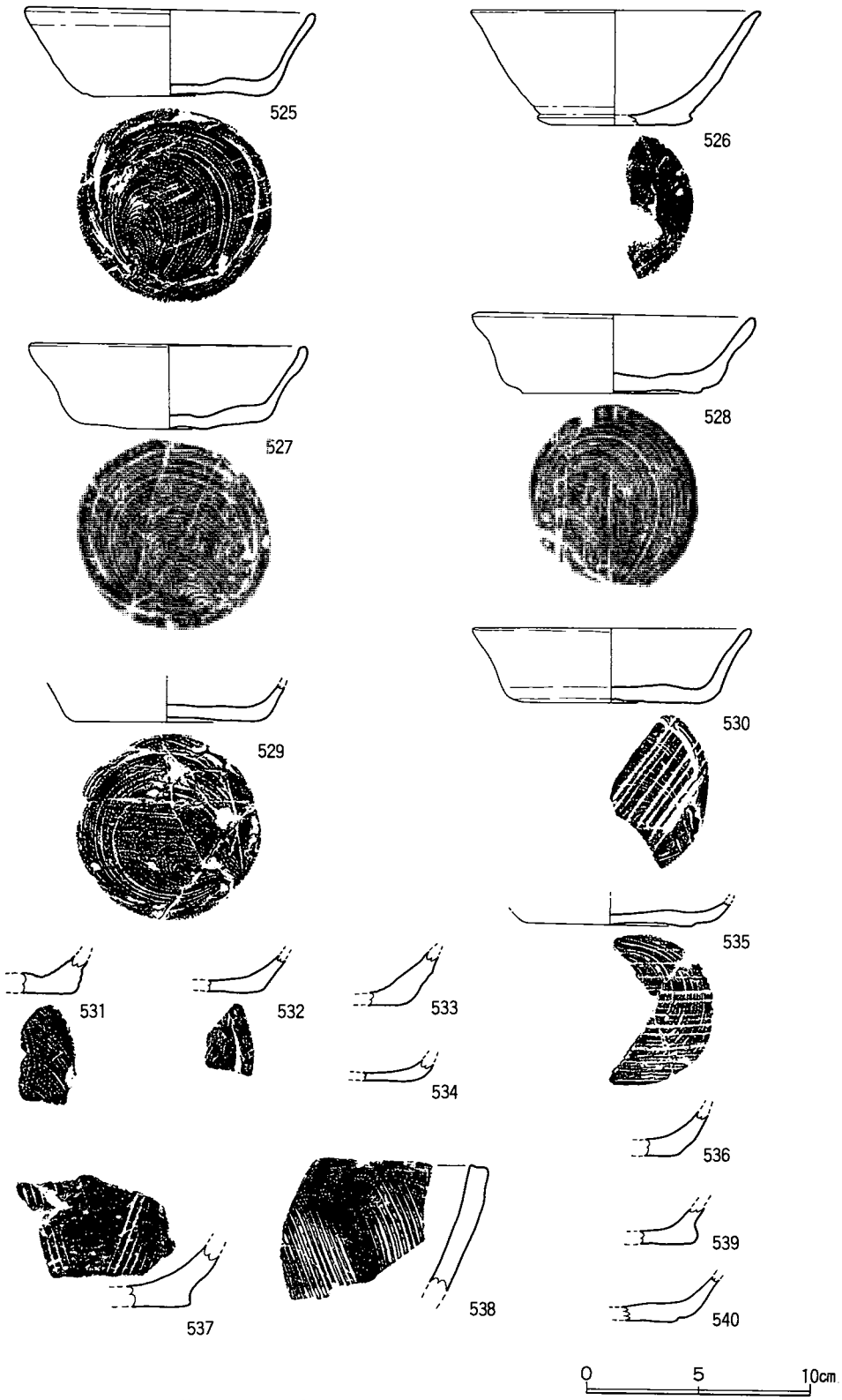
526はラッパ状を呈し、口径12.7cm・器高5.1cm・底径6.8cmを測る。外底は平底で端部はやや肥厚し、体部との境に沈線が巡る。外底面の糸切り痕は観察出来ない。

531～534・536～540は破片である。531は内外器面に横ナデが施されているが、調整に際して内器面はヘラ状工具、外器面は幅広のヘラ工具が用いられている。外底面は糸切り後、刷け目が施されている。532～534の外底面は糸切り後、ナデが加えられている。533は外底端が肥厚し、内底面に強い円周方向のナデが残る。536～540の外底面には糸切り痕が残る。

537・538は瓦質擂鉢である。537は条線が8本まで認められるが、一単位の数は不明である。外器面は縦方向にヘラ削り後、同方向に刷け目が加わる。538は片口周辺の残存で、条線の単位は不明であるが11本まで認められる。内外器面とも横ナデが施され、焼き締めが効いている。




第138図　東・西側尾根出土遺物の実測図




第139図　南東側張り出し尾根出土遺物の実測図

| NO. | 形　態　の　特　徴 | 手法・調整・文様 | 備　　考 |
|---|---|---|---|
| 516<br>青　磁 | 口縁直口で、体部はわずかに外弯。<br>復元口径　15.0cm | 外器面：削り出しによる蓮弁文様。 | 釉色：薄色コバルト。 |
| 517<br>青　磁 | 体部は直線的に伸びて、口縁部でかすかに外弯。 | 外器面：削り出しによる鮮明な蓮弁文様。花弁の先端は鋭角で、中央を下る縦線は強い稜線となる。 | 釉色：淡い緑灰色。<br>口唇部は使用の為か釉がはげている。<br>内外器面に貫入が走る。 |
| 518<br>青　磁 | 体部は直線的に伸びる。 | 内器面：丁寧なナデで、器面は滑らか。<br>外器面：削り出しによる蓮弁文様。 | 釉色：緑灰白色。 |
| 519<br>青　磁 | 底部は肥厚（厚さ 1.2cm）。<br>外底は平底。<br>復元底径　4.6cm | 内底面：ヘラ描きによる花弁文様。 | 釉色：やや、コバルトがかった薄青緑色。<br>外底面は無釉。<br>非常に上質の青磁。 |
| 520<br>土師系土器 | 外底は上げ底、外底端は極端に肥厚（厚さ 2.5cm）。<br>体部の立ち上がりは大きく窪む。 | ―――――― | 色調：褐灰色。 |
| 521<br>土師器 | 外底端は肥厚（厚さ 1.2cm）。 | 内外器面：横ナデ。<br>外底面：糸切り痕を観察出来ず。 | 色調：褐灰色。 |
| 522<br>土師器 | 底部の中央は薄壁（厚さ 0.4cm）。<br>外底端は肥厚（厚さ 1cm）。 | 内外器面：横ナデ。<br>外底面：糸切り痕を観察出来ず。 | 色調：乳白色。 |
| 523<br>瓦質擂鉢 | ―――――― | 内器面：条線の一単位は不明（7本まで認められる）。<br>横方向の刷け目。<br>外器面：縦方向の刷け目。一部では後に横ナデ。 | 色調：灰白褐色、灰白色の不純物が付着。<br>器面の風化が著しい。 |
| 524<br>青　磁 | ―――――― | 外器面：削り出しによる蓮弁文様。 | 釉色：緑青色。<br>内器面に大きな貫入。<br>外器面は少し。 |

第122表　東・西側尾根出土遺物の観察表

| NO. | 形　態　の　特　徴 | 手法・調整・文様 | 備　　考 |
|---|---|---|---|
| 525<br>土師器 | 器形は船型。体部は外弯し、口縁肥厚。<br>外底は上げ底。<br>口径　13.1cm<br>器高　3.9cm<br>底径　8.3cm | 内外器面：横ナデ。<br>内底面：ナデ。<br>外底面：糸切り痕に板目圧痕が加わる。 | 色調：鈍い橙色。 |
| 526<br>土師器 | 体部はやや内弯しラッパ状に開く。<br>外底は平底、端部はやや肥厚（厚さ 1.0cm）。<br>外底端は焼成前の器圧で、しゃげた状態になっている。<br>口径　12.7cm<br>器高　5.1cm<br>底径　6.8cm | 外底と体部の境に沈線。<br>外器面：強い横ナデ。<br>内底面：横ナデ。<br>外底面：ヘラ削り。 | 色調：灰褐色。 |
| 527<br>土師器 | 器形は船型。体部は外弯し、口縁肥厚。<br>外底はいびつ。<br>口径　12.6cm<br>器高　3.6cm<br>底径　8.3cm | 内外器面：横ナデ。<br>内底面：ナデ。<br>外底面：糸切り痕。 | 色調：灰褐色。 |

第123表　南東側張り出し尾根出土遺物の観察表①

| NO. | 形態の特徴 | 手法・調整・文様 | 備考 |
|---|---|---|---|
| 528<br>土師器 | 器形は船型、体部は外弯し、口縁肥厚。<br>口唇部は扁平（幅 0.3cm）に近い。<br>外底端は焼成前の器圧で、少々、しゃげた状態。<br>口径 12.8cm<br>器高 3.5cm<br>底径 8.0cm | 内器面：丁寧なナデ。<br>外器面：非常に丁寧な横ナデ。<br>内底面：中央部は、やや凸の状態で周縁に沈線が巡り、一部に、軽い指押え。<br>外底面：鮮明な糸切り痕。 | 色調：乳白色。<br>焼き締めの効いた土器。 |
| 529<br>土師器 | 底径 7.9cm<br>外底は、上げ底。 | 内器面：ナデ。<br>外底面：糸切り後、板目圧痕が加わる。 | 色調：灰褐色。 |
| 530<br>土師器 | 器形は船型、体部はやや内弯する。<br>外底は、若干、上げ底。<br>口径 12.2cm<br>器高 3.3cm<br>底径 8.7cm | 内外器面：横ナデ。<br>内底面：ナデ後、指押え。中央部はやや凸。<br>外底面：糸切り痕に鮮明な板目圧痕が加わる。 | 色調：内外器面は灰黒褐色。<br>内外底面は明白褐色。 |
| 531<br>土師器 | 底部端は肥厚（厚さ 1.3cm）。 | 内底面と体部の境に沈線。<br>内器面：ヘラ状工具（幅 0.3cm）を用いた横ナデ、鮮明な稜線。<br>外器面：幅広の工具を用いた横ナデ<br>外底面：糸切り後、刷け目調整。 | 色調：褐灰色。 |
| 532<br>土師器 | ―――― | 内器面：横ナデ。<br>外器面：横ナデ、ヘラ状工具（幅 0.3cm）が用いられている様である。<br>外底面：糸切り後、ナデが加えられている。 | 色調：乳白色。 |
| 533<br>土師器 | 底部端は肥厚（厚さ 1.2cm）。 | 内器面：下位に、強い円周方向のナデ、鮮明な稜線。<br>外底面：糸切り後、ナデが加えられている。 | 色調：褐灰色。 |
| 534<br>土師器 | 底部は薄壁（厚さ 0.4cm）。 | 内外器面：横ナデ。<br>外底面：糸切り痕は観察出来ず。 | 色調：乳白色。 |
| 535<br>土師器 | 外底は、やや上げ底。<br>復元底径 7.5cm | 内底面：中央部は、指押えでわずかに窪む、横ナデ。<br>外底面：周縁に糸切りによる沈線。糸切り痕に板目圧痕が加わる。 | 色調：乳褐色。<br>焼き締めの効いた土器。 |
| 536<br>土師器 | ―――― | 内器面：横ナデ。<br>外底面：糸切り痕。 | 色調：乳白色。<br>胎土は精良。 |
| 537<br>擂鉢 | 外底は平底。 | 外底と体部の境は、やや窪む。<br>内器面：条線の一単位は不明（8本まで認められる）。<br>外器面：縦方向にヘラ削り後、同じく縦方向に刷け目調整。 | ―――― |
| 538<br>擂鉢 | 残存体部は片口周辺。<br>口唇部は幅 0.9cmで全体的に窪む。 | 内器面：条線の一単位は不明（11本まで認められる）。<br>横ナデ。<br>外器面：粗いナデ。 | 焼き締めが効いている。 |
| 539<br>土師器 | ―――― | 外底と体部の境は大きく窪む。<br>外器面：横ナデ。<br>外底面：糸切り痕。 | ―――― |
| 540<br>土師器 | ―――― | 外底と体部の境に沈線。<br>外底面：粗い糸切り痕。 | 色調：白褐色。 |

第124表　南東側張り出し尾根出土遺物の観察表②

# 第6節　縄文時代遺物

541～546はチャート製の石鏃である。形状から541・544は凹茎形、542・543は三角形、545・546は長二等辺形に分けられる。

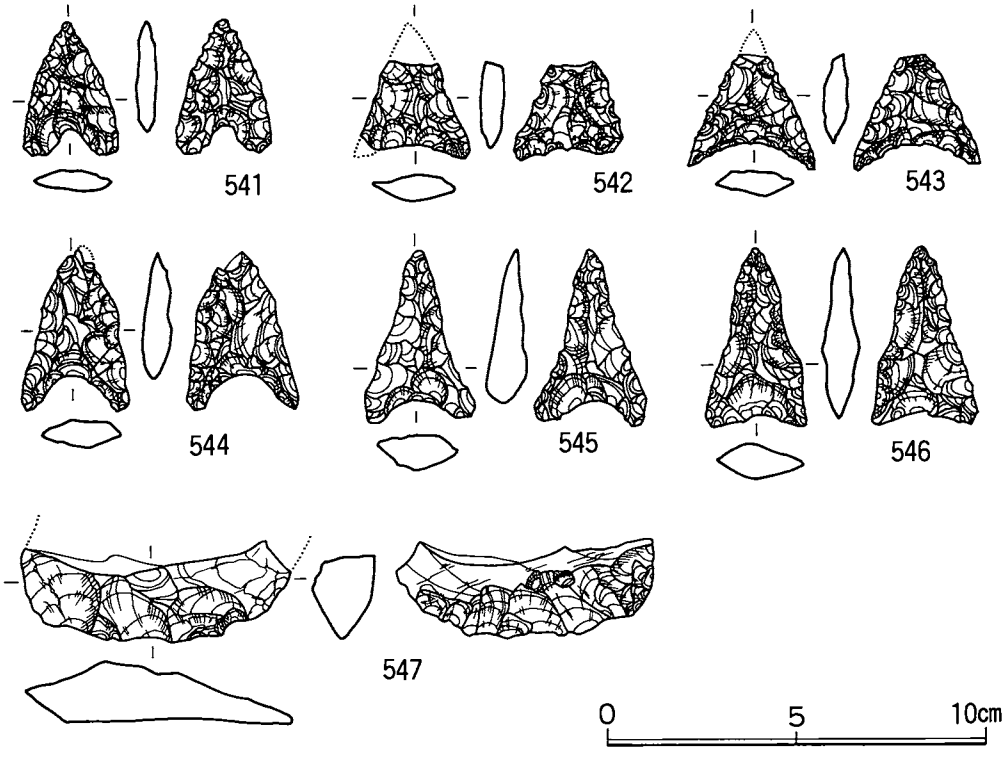
547はチャート製のスクレイパーで、長さ3.6cm・幅1.0cm・厚さ0.8cm・重さ2.76ｇを測る。

548は砂岩製の打製石斧で、残存の長さ16.3cm・幅17.0cm・厚さ3.9cm・重さ1484.20gを測り大型である。

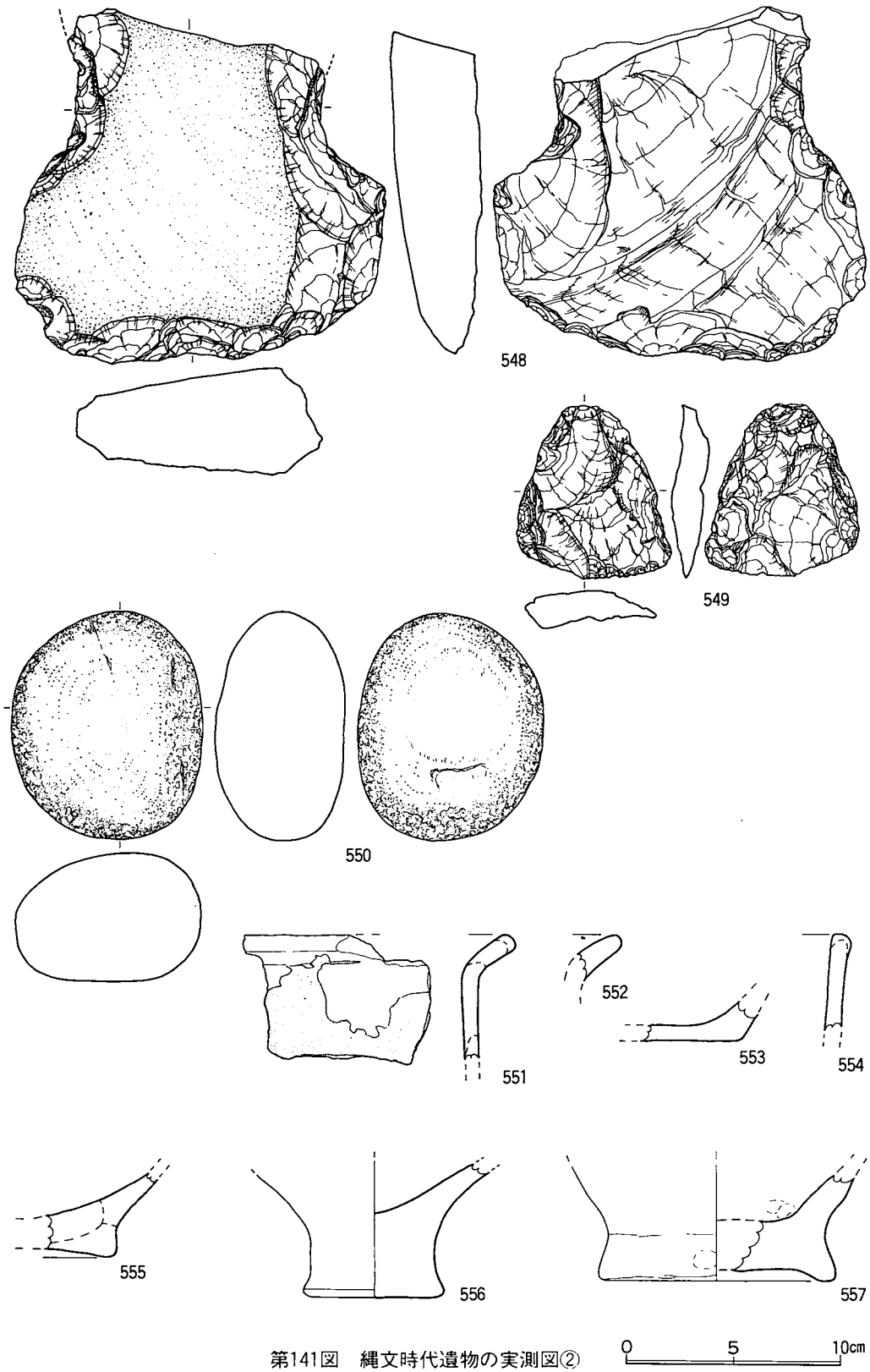
549はチャート製のスクレイパーである。長さ7.7cm・幅6.9cm・厚さ1.5cm・重さ93.20gを測る。

550は砂岩製の叩き石で、長さ10.6cm・幅8.8cm・厚さ5.9cm・重さ826.91gを測り、片面に研磨の痕が残る。

551・557は縄文晩期の深鉢形土器である。553は内器面に３条の沈線がある。555は内器面と内底面に丁寧なナデが施されているが、外器面と外底面は無調整である。556～557は底部で復元底径は556が6.7cm、557が11.0cmを測る。556は外底が平底で、器壁は極めて肉太（厚さ4.0cm）である。557は外底が上げ底で、端部は外側へ張り出す。内底面に成形時の指頭圧痕が残るが、大部分は横方向にナデ消されている。




第140図　縄文時代遺物の実測図①




第141図　縄文時代遺物の実測図②

| NO. | 器　種 | 石　材 | 長さ（cm） | 幅（cm） | 厚さ（cm） | 重さ（g） | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 541 | 石　鏃 | チャート | 1.7 | 1.3 | 0.2 | 0.62 | 凹基形 |
| 542 | 石　鏃 | チャート | 1.25 | 1.6 | 0.35 | 0.55 | 三角形 |
| 543 | 石　鏃 | チャート | 1.5 | 1.8 | 0.3 | 0.54 | 三角形 |
| 544 | 石　鏃 | チャート | 2.1 | 1.4 | 0.4 | 0.80 | 凹基形 |
| 545 | 石　鏃 | チャート | 2.2 | 1.5 | 0.45 | 0.98 | 長二等辺三角形 |
| 546 | 石　鏃 | チャート | 2.3 | 1.35 | 0.45 | 1.08 | 長二等辺三角形 |
| 547 | スクレーパー | チャート | 3.6 | 1.0 | 0.8 | 2.76 | ―――― |
| 548 | 打製石斧 | 砂　岩 | 16.3 | 17.0 | 3.9 | 1,484.20 | ―――― |
| 549 | スクレーパー | チャート | 7.7 | 6.9 | 1.5 | 93.20 | ―――― |
| 550 | 敲　石 | 砂　岩 | 10.6 | 8.8 | 5.9 | 826.91 | 片面に研磨の痕が残る。 |

第125表　縄文時代石器計測表

| NO. | 形　態　の　特　徴 | 手法・調整・文様 | 備　考 |
|---|---|---|---|
| 551<br>縄文土器<br>深鉢形土器 | 口縁は大きく外弯。 | 内外器面：丁寧な横ナデ。 | 胎土は硬質で緻密。<br>外器面に多量のススが付着。 |
| 552<br>縄文土器<br>深鉢形土器 | ―――― | 内外器面：横ナデ。 | 胎土は軟質、混入物は無し。<br>焼成不良。 |
| 553<br>縄文土器<br>深鉢形土器 | 底部は薄壁（厚さ 0.7cm）、外底端で肥厚（厚さ 1.5cm）。 | 内底面：横ナデ。3条の沈線があるが、いずれも浅く、内底面を巡るようには思えない。<br>外底面：無調整。 | 胎土は、やや軟質で多硬質。細砂粒を多く含む。<br>焼成、やや不良。 |
| 554<br>縄文土器<br>深鉢形土器 | ―――― | 内外器面：ローリングが激しく詳細な調整については不明。但し、現状からして、余り丁寧な調整は施されていなかったように思われる。 | 胎土は、かなり硬質であるが多孔質。細砂粒をごく、わずか含む。<br>焼成良好。 |
| 555<br>縄文土器<br>深鉢形土器 | 外底は上げ底、外底端で肥厚（厚さ 2.6cm）。 | 内器面・内底面：丁寧なナデ。（ヘラ状工具によるものか？）<br>外器面・外底面：無調整。 | 胎土は、やや硬質で比較的緻密、金雲母をわずかに含む。<br>焼成、やや良。 |
| 556<br>縄文土器<br>深鉢形土器 | 底部は極めて肉太（厚さ 4.0cm）。<br>外底は平底。<br>復元底径　6.7cm | 内外器面：ローリングが激しく詳細な調整は不明、ナデか？。 | 色調：外器面は赤褐色。<br>内器面は暗茶褐色。<br>胎土は、細砂粒を多く含む。<br>焼成、やや不良。 |
| 557<br>縄文土器<br>深鉢形土器 | 底部は肉太（厚さ 2.2cm）で外底は上げ底。<br>体部の立ち上がりは、大きく窪み、外底端は外側へ張り出す。<br>復元底径　11.0cm | 内底面：成形時の指頭圧痕が一部に残るが、大部分は横方向にナデ消されている。 | 胎土は、軟質、多孔質で、締まりが悪い。大きめの黒色鉱物を少量含む。<br>砂粒は多量に含まれる。<br>焼成不良。 |

第126表　縄文時代遺物観察表

# 第Ⅴ章　路線外城域および周辺の調査

## 第１節　路線外の城域について

山田城跡は、発掘区域の北側に延びる路線外の本体尾根筋に、多くの遺構が残っている。基本的な縄張りは尾根筋が４条の大規模堀切で断切られたもので、計４つの郭から構成される連郭式の山城である。ここでは、第142図～第145図に示した城跡の地形測量図を元に城跡の遺構について述べる。

〔１〕　Ⅰ　郭

主軸方向はＮ17°Ｅで、長軸20ｍ、短軸は北側で12.2ｍ、南側で最大21.4ｍを測る。平場の北側寄りに最高所があり標高232.432ｍを測る。

平場は、北方向から南方向への緩傾斜地で、両端で約0.5ｍの比高差があるが、北端に土塁①があり、西側下にⅠ－①郭と南側下にⅠ－②郭が付随する。

〔土　塁　①〕　上面の長さ3.0ｍ、最大幅1.4ｍを測る。土塁はこれより南側と西南西側・北西側の３方向へゆるやかに下り、平面的に、三角形状のプランを呈する。土塁の最高所と南側下のⅠ郭平場との比高差は1.074ｍである。裾部まで含めた全体的な規模は長さ14.0ｍ、最大幅7.2ｍである。堀切１の造営時に排土を積んだものと思われる。

〔Ⅰ－①郭〕　主軸方向は西方向にある。舌状形を呈し、長軸28.0ｍ、東側の基底部で幅26.0ｍを測る。Ⅰ郭平場との比高差は約１ｍで、両郭間の崖面は削り落とされている。

〔Ⅰ－②郭〕　主軸方向は南方向にある。やや隅丸方形の平場で、長径は東西26ｍ、短径は南北15ｍを測る。Ⅰ郭平場との比高差は約0.8ｍである。

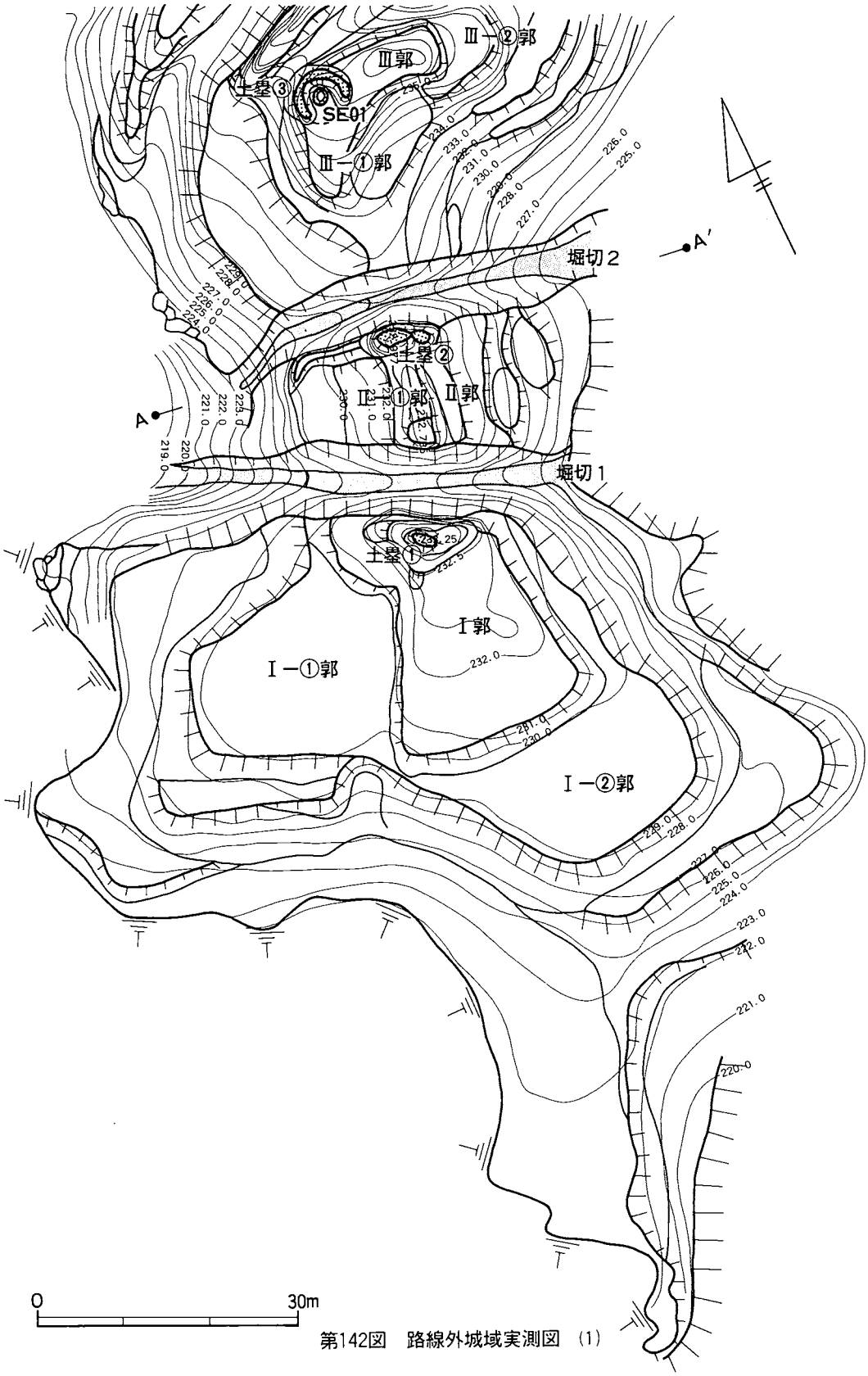
なお、Ⅰ－①郭とⅠ－②郭の周縁斜面部には、上面を削平された帯曲輪状の平場が巡っている。

〔堀　切　１〕　Ⅰ郭とⅡ郭を仕切る堀切で、主軸方向はＮ80°Ｗを示す。Ⅰ郭とⅡ郭間の上場幅は9.5ｍで、底幅は1.6ｍ～2.3ｍである。長さは直線距離で46ｍを測る。東端から西方向へ17ｍの所に堀底の最高所があり、標高は229.195ｍである。この地点とⅠ郭の土塁①との比高は４ｍで、Ⅱ郭南側とは3.5ｍを測る。

堀底は、この最高所を変化点とし、東西両側へ下って竪堀状を呈する。堀底の傾斜状態は変化点より東側へ直線距離で、７ｍ下った所との比高が1.6ｍで、西側は12ｍ下った所との比高が2.0ｍである。

〔２〕　Ⅱ　郭

主軸方向はⅠ郭と同じＮ17°Ｅで、長軸11.0ｍ、短軸は北側で7.0ｍ、南側で最大8.4ｍを測る。平場の南側寄りに最高所があり標高232.735ｍを測る。Ⅱ郭はⅠ郭と逆に南側から北側への緩




第142図　路線外城域実測図（1）

傾斜地で、両端で約0.4ｍの比高差がある。平場面積は狭く、長軸10ｍ、短軸2.2ｍの範囲に留まる。全体的に見て、馬の背の様な形状で、地表面のほとんどは東西両側への緩傾斜地となっている。北端に土塁②があり、Ⅱ郭の西側下にⅡ－①郭が付随する。

〔土 塁 ②〕　上面は長さ5.2ｍであるが、東側より2.2ｍの所で括れて２つに分かれている。幅は東側で1.4ｍ、西側で1.6ｍを測る。土塁の最高所は西側上面にあり、南側下のⅡ郭との比高差は0.635ｍである。平面的にはひょうたん型のプランを呈しており、全体的な規模は長さ9.6ｍ、最大幅3.4ｍである。堀切２の造営時に排土を積んだものと思われる。

〔Ⅱ－①郭〕　Ⅱ郭の西側下にある小平場で、長径は南北8.6ｍ、短径5.2ｍを測る。Ⅱ郭との比高差は2.7ｍである。

〔堀 切 2〕　Ⅱ郭とⅢ郭を仕切る堀切で、主軸方位はＮ83°Ｗであるが、西側部分は折れ曲がってＮ60°Ｅを示す。Ⅱ郭とⅢ郭の間の上場幅は７ｍで、底幅は１～２ｍである。長さは、直線距離で、主軸方位のＮ83°Ｗ分が30ｍ、Ｎ60°Ｗ分が８ｍを測る。東端から西方向へ21ｍの所に堀底の最高所があり、標高は229.950ｍである。この地点とⅡ郭の土塁②との比高は3.0ｍで、Ⅲ郭南側とは2.0ｍである。

堀底は、この最高所を変化点とし、東西両側へ下って竪堀状を呈する。堀底の傾斜状態は、変化点より東側へ8.5ｍ下った所との比高が2.0ｍで、西側では8.5ｍ下った所との比高が1.8ｍである。堀切の南側には、Ⅱ郭の土塁②から西下する土塁の延長部（高さ0.3～0.5ｍ）が、山腹に積まれている。

〔3〕　Ⅲ　郭

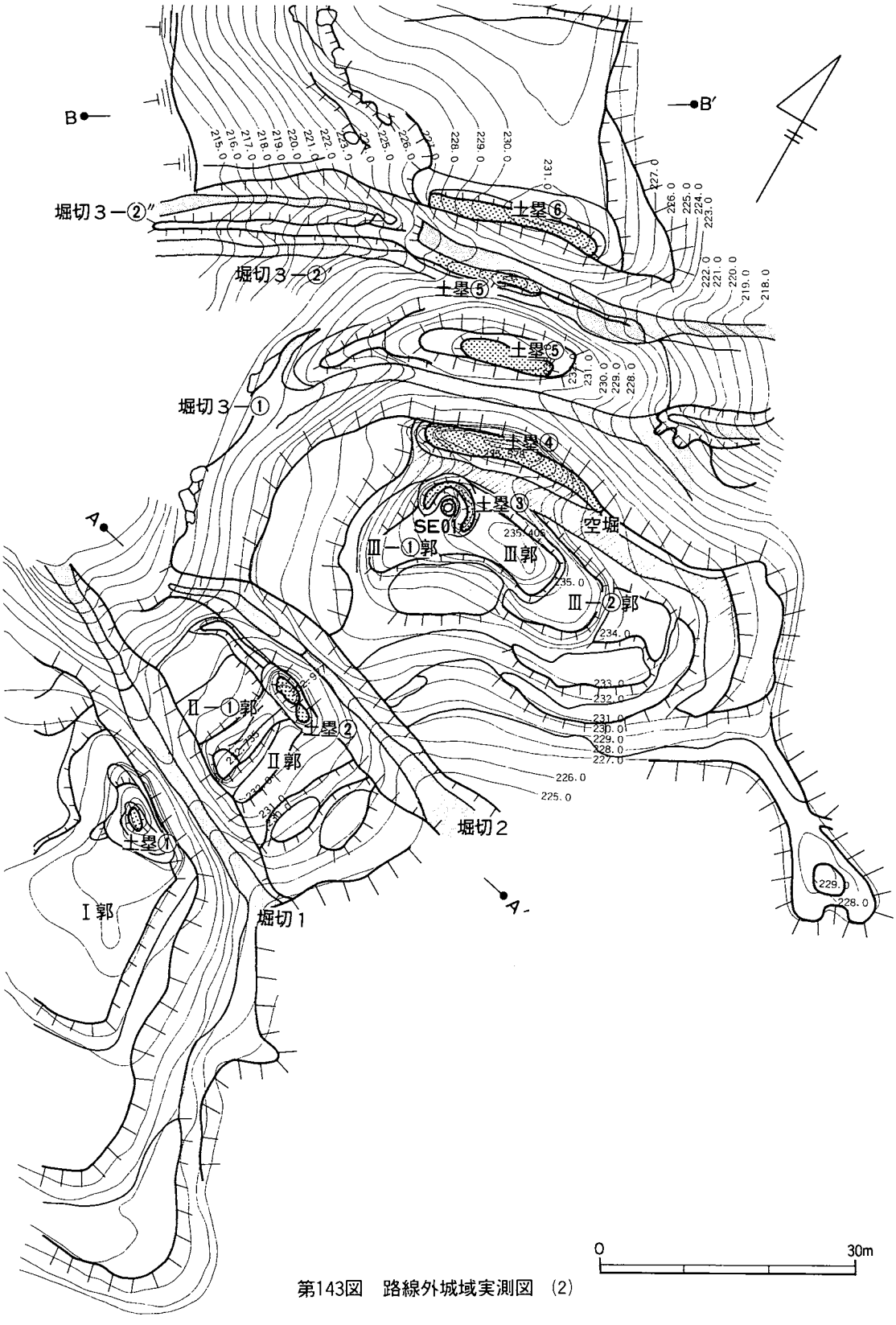
主軸方位はＮ82°Ｗの平場で、長軸11.6ｍ、短軸は5.8ｍであるが、中途にやや括れがあり、この箇所については4.6ｍ幅となる。平場のやや東側寄りが最高所で標高235.406ｍを測る。西側に馬蹄形の土塁③で囲まれた円形状の窪地（ＳＥ０１）があり、Ⅲ郭には、これより南西側へ派生するⅢ－①郭と、Ⅲ郭東側下にⅢ－②郭、Ⅲ－③郭が付随する。

一方、Ⅲ郭自体は北側へ張り出しており、この箇所には空堀と土塁④が、東西方向に走行している。

〔Ⅲ－①郭〕　主軸方位はＮ21°Ｅで、長軸８ｍ、短軸は北側で6.4ｍ、南側寄りで3.8ｍを測り、最高所の標高は234.825ｍを測る。北側から南側への緩傾斜地で、両端では0.6ｍの比高差がある。

〔土塁③及びＳＥ０１〕　土塁は直径6.8ｍ、高さ0.2～0.3ｍで、ＳＥ０１（直径1.8ｍ・深さ0.4ｍ）を三方から（南側を除く）取り囲む格好となっている。ＳＥ０１は掘り抜き井戸及び煙し穴の類と思われるが、未発掘で推論の域を出ない。

〔Ⅲ－②郭〕　Ⅲ郭の東側下にある郭で、Ⅲ郭との比高差は1.3ｍである。主軸方位はＳ75°Ｗで、長軸7.2ｍ、短軸は東側で5.6ｍ、西側で6.8ｍを測るが、東側寄りに地形の括れ部があり、




第143図　路線外城域実測図　(2)

ここでは幅4.2ｍに減じる。

Ⅲ－②郭の東側と南側斜面には、上面を削平された帯曲輪状の平場が階段状に巡っている。

東側斜面部の下位に、N46°Wの方位に本体尾根筋から分かれた支脈尾根筋が派生しているが、尾根をほどなく下ると、中途は小山状の高まりを見せ、この箇所は、独立した小規模な城跡となる。(九州縦貫自動車道建設に伴い昭和60年に発掘調査、報告書・平成元年度)

〔空　堀〕　Ⅲ郭の北縁を走行する空堀で、主軸方位はN77°Wである。長さ35ｍで、幅2.8～3.6ｍ、深さは0.5ｍを測る。地形に沿って東西両側へ、極めてゆるやかに傾斜する。

〔土 塁 ④〕　上面の長さ9.5ｍ、幅1.5ｍを測る。裾部まで含めた主軸ラインの規模は、長さ18.2ｍ、幅５ｍで、主軸方向はN87°Wである。上面の標高は235.578ｍで、Ⅲ郭との比高差は0.172ｍ、空堀の堀底とは0.701ｍの高低差がある。なお土塁の東端は、N67°Wの方位にカーブを描いて8.5ｍ程延びている。

〔堀 切 3〕　二重の堀切で、間に土塁⑤を挟んで南側の堀切３－①と北側の堀切３－②があり、堀切３－②はさらに土塁⑤′を挟んで堀切３－②′と堀切３－②″とに細分される。

堀切３は極めて大規模な造りで、Ⅲ郭とⅣ郭間の上場幅は23.5ｍにも及ぶ。他の遺構と比較にならない造りであり、堀切３が山田城跡における極めて重要な防御ラインであった事は明白である。

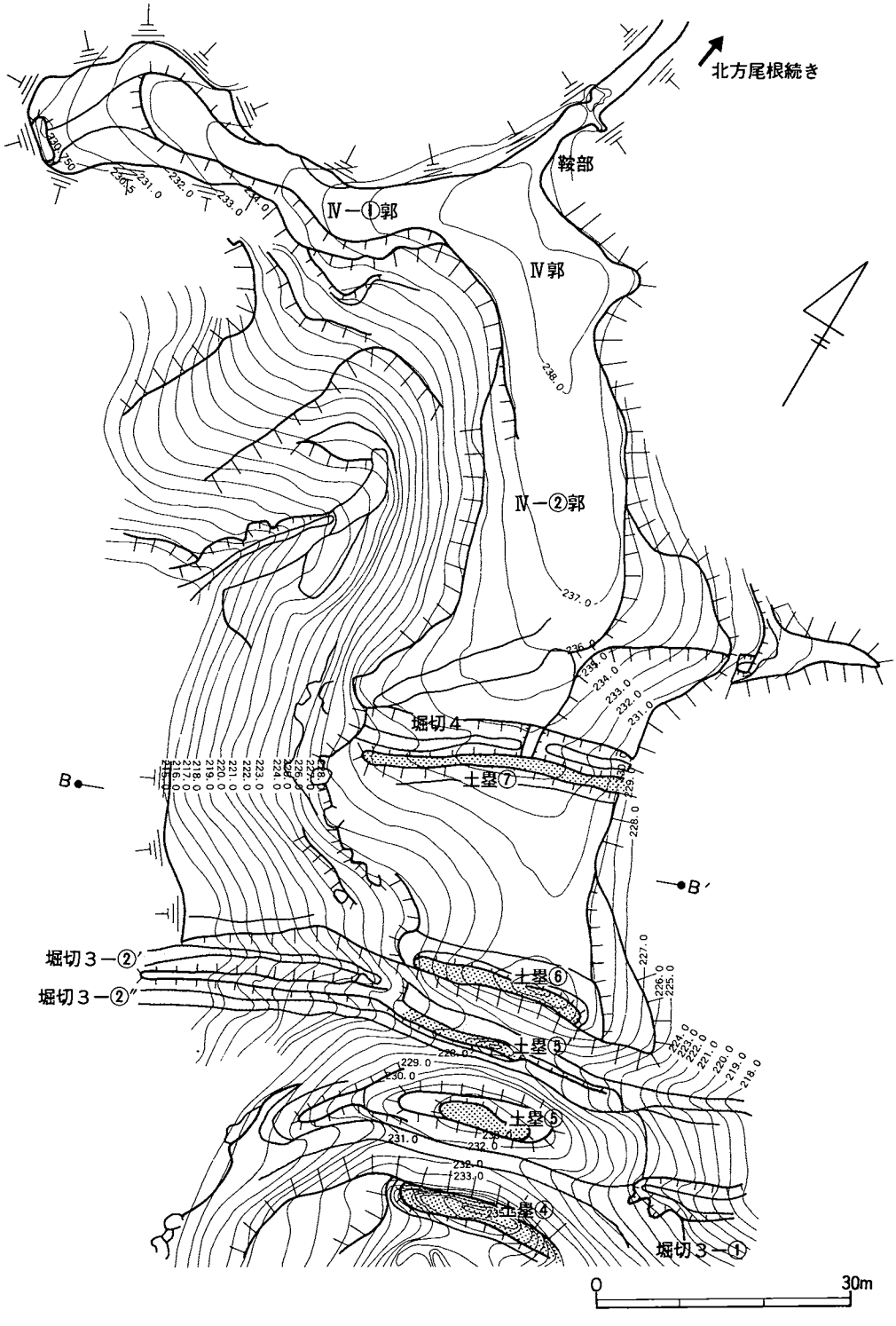
〔堀切３－①〕　主軸方向はN86°Wであるが、西側部分は大きく折れ曲がって、N57°Ｓを示す。東側部分は、端部において一部が崩壊している。直線距離の長さは、主軸方位のN86°Wが45ｍ、N57°Ｓが15ｍを測る。Ⅲ郭と土塁⑤の上場幅は8.5ｍで、底幅は1.5～2.0ｍである。

堀底の最高所は、尾根筋の主軸ライン上にあり、標高231.742ｍを測る。この地点とⅢ郭の土塁④との比高差は4.25ｍで、間の堀壁は削り落としの痕跡が明白である。

〔土 塁 ⑤〕　自然地形を利用した土塁で、二つの堀切で仕切られた残丘の斜面部に手を加えて、大規模な土塁に仕上げている。上面の長さ10.8ｍ、幅1.5～2.8ｍを測り、主軸方向はＳ87°Wである。主軸ラインの全体的な規模は長さ40ｍで、裾部を含めた下場の幅は10.5ｍである。上面の標高は233.673ｍで、南側・堀切３－①の底部最高所との比高差は1.9ｍにすぎないが、北側・堀切③－２とは 5.4ｍの高低差がある。

〔堀切３－②′及び堀切３－②″〕　二つの堀切は並列し、堀底の最高所はいずれも尾根筋の主軸ライン上にあるが、堀切の走行はやや異なり、東側堀切３－②′でＳ80°W、西側堀切３－②″でN87°Wを示す。

間に高さ0.3ｍ・幅1.5ｍの小土塁⑤′を挟んでいるが、土塁⑤′は尾根筋の主軸ライン上で明確な土塁としての形状を呈し、長さ５ｍ、幅1.8ｍを測るものの、それ以外は見た目に両堀切を仕切る築山状のものにすぎず、漸次、東西両側へ高さを減じて下っていく。最終的に土塁⑤′は、尾根筋の主軸ライン上から13ｍの地点で消滅し、両堀切は一本にまとまっている。




第144図　路線外城域実測図（3）

両堀切の南北対岸となる南側・土塁⑤と北側・土塁⑥との上場幅は13.5ｍで、個々の底幅は堀切３－②′で１ｍ、３－②″で1.4～2.2ｍである。

〔土 塁 ⑥〕　堀切３－②′・②″に付随するもので、北側対岸のⅣ郭南側斜面の尾根筋に積まれている。全体の長さは20.5ｍ、幅1.5～5.0ｍで主軸方向はＳ74°Ｗを示す。

主軸ラインの土塁は台形状の小山を呈し、北側の長さは５ｍ、南側の長さ10ｍを測り、最大幅５ｍである。上面の長さは３ｍで、幅１ｍを測り、標高231.835ｍを測る。北側裾部との比高差は0.8ｍで、土塁は西側へ延長されている。

〔堀切４及び土塁⑦〕　Ⅳ郭の南側に、小規模な堀切と土塁が残っている。堀切と土塁の主軸方位はＳ79°Ｗで、土塁の高さは0.2～0.3ｍ足らずであるが、長さは30ｍを測る。ただし、前記の堀切１～３や土塁①～⑥とは、見た目に規模や造営の点で大きな差異がある。

**〔４〕　Ⅳ　郭**

城跡の北限にあたる郭で、平面的に、「く」の字を反転した形をしている。尾根中央の屈曲部に城跡地の最高所があり、標高238.394ｍを測る。尾根筋は、ここを基点に、城跡内部へＮ35°Ｗの方位で延びるⅣ－①郭と、Ｎ26°Ｗの方位で城跡外部に延びるⅣ－②郭とに分かれている。

さらに尾根筋の屈曲部より西方向へ20ｍの所には、本体尾根筋の鞍部があり、尾根筋はここから極端に馬の背の様にくびれて北方向の低山稜主脈に連なっていく。

〔Ⅳ 郭 平 場〕　主軸方位はほぼ東西方向にある。平面プランはひょうたん型で、中途がやや括れている。長軸22ｍ、短軸は東側で12ｍ、西側で10ｍ、中途の括れ部で５ｍ前後を測る。東西両端の尾根の上面は、若干の高まりを有する。

〔Ⅳ －① 郭〕　長軸33ｍ、短軸６ｍを測り、東側から西側への緩傾斜地となる。両端の比高差は1.5ｍである。尾根筋の斜面はいずれも急峻であるが、南西側斜面のみが緩傾斜となり、Ｎ46°Ｅの方位でゆるやかに下っている。

〔Ⅳ －② 郭〕　長軸24ｍ、短軸は東側で５ｍ、西側で７ｍを測る。郭は東側から西側への傾斜地で両端との比高差は７ｍである。

**〔５〕　城跡の北端・鞍部**

これより尾根筋は、上面幅２ｍ程にくびれて凝灰岩の岩場尾根となるが、ここも近年に至る石切り場の跡で山腹の旧地形は大きく変化している。但し、現況からして、従来も馬の背の様な岩場尾根であった事は確かである。この尾根は北方向へ連続的に延びて、一部は谷向いの字「城山」（中世城跡）の山と繋がる。

**〔６〕　堀切６と土塁⑧（南東側張り出し尾根下）**

南東側尾根の東端より、Ｓ20°Ｅの方位で、直線距離にして95ｍ先の山腹中に、堀切６と土塁⑧がある。

この間の山腹には、６段から成る階段状地形が刻まれているが、顕著な造りの人工的地形で城跡に関連した遺構と思われる。

〔堀 切 6〕　観察し得る長さは15ｍで、上面7.5ｍ、底幅2.2ｍ、深さ0.5ｍ程で、方位はほぼ東西方向にある。堀底は全体的に西から東への緩傾斜地である。堀切の西端は、山腹に吸収されて、漸次、不明確なものとなるが、東端は、空堀の形状を呈し、山腹の標高ラインと並走する事となる。この部分の長さは21ｍで、底幅は0.5～2.0ｍである。

〔土 塁 ⑧〕　堀切の南側斜面に積み上げられたもので、長さ14ｍ、上面幅2.5ｍ、高さ１ｍ前後を測る。

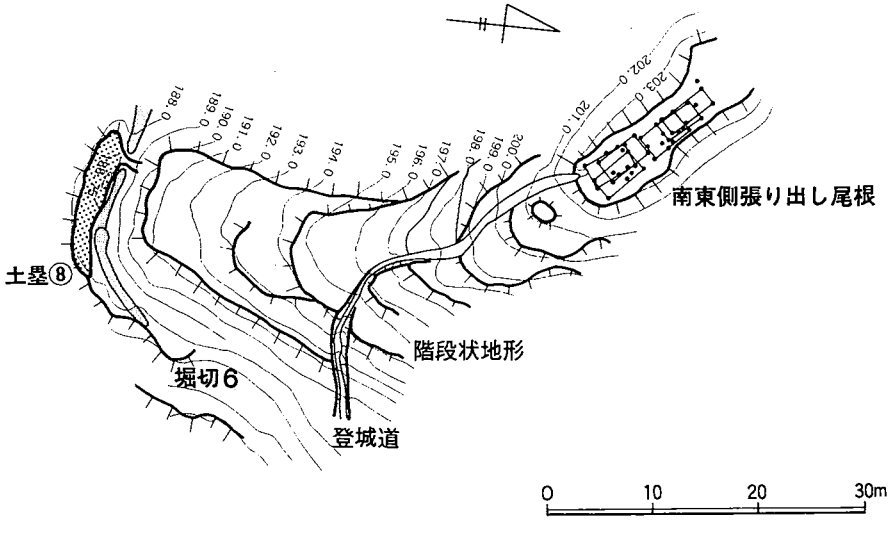
これらの遺構は、その位置からして、明らかに南東側張り出し尾根に関連する防御施設であるとの見方が出来る。

なお、階段状地形の１～４段を縦走する凹道があり、寺下集落からの登り道となっているが、踏査の段階では、凹道の新旧を判断出来ない。

〔7〕小　結

城跡は、比高110ｍの山稜に築かれた大規模造りの山城で、遺構の残存状況は極めて良好である。大方の山腹は急峻で、要害ともいえる自然地形を積極的に縄張りの中へ取り入れている事が明らかである。

縄張りの特徴として、主軸尾根を鋭く断ち切る３条の大規模な造りの堀切と、尾根背面の平場面積が狭く、山腹に階段状地形が極めて少ない事があげられる。これらが城跡の時期的な特色を伝えるものか否かは今後の研究課題であろう。




第145図　路線外城域実測図 (4)

# 第２節　山田城跡周辺の社寺堂宇について

**はじめに**

山田城跡の所在する球磨郡山田村山田は、村落景観がよく保たれ、寺院・神社（跡）や金石文などが数多く残っている。

ここでは山田城跡の位置付けや、歴史的背景を明らかにするための補助資料として、城跡に隣接する井手口・寺下・下城子・石原・城子・味園・辻集落の社寺堂宇の悉皆調査を行った。調査に際しては、廃絶しているものもその対象とし、同時に地名（四股名など）の採集もおこなった。なお下記の神社の所在地については、江戸時代の地名であり、現在の字名は（　）で示している。

**１．高寺院毘沙門堂（字寺山）**

高寺院は真言宗に属し、寺下集落にある。毘沙門堂は464段の石段を登りつめた所にあるが、昭和59年に毘沙門天立像は山を降りて、今日、院内の新たな毘沙門堂に安置されている。

『南藤蔓綿録』に、「応永十五戊子山田毘沙門堂御再興、八月九日入仏、伝記ニ曰此本尊ハ平朝臣小松内府重盛卿御菩提也、治承年中草創ノ由山田金剛山高寺院毘沙門天是也」とある。

毘沙門天立像二軀のうち、一軀は江戸時代の初期に原田真福寺から移されたもので、二軀とも国の重要文化財で、平安時代後期の作とされている。また同寺所蔵の木造勢至菩薩立像（県指定文化財）は、石原集落の平山ミエ子氏宅に伝えられていたもので、これも江戸時代に他から持ち込まれたものと言われている。胎内に墨書で「奉造立大勢至菩薩御像　承久二年庚辰六月十二日庚午仏師源覚　右為惟宗聿高尊往生極楽也」と記されている。

**２．諏訪大明神　山田石原（字下城子）**

石原集落の西側、山付きにあり、広義的には山田城跡の西方麓にあたる。

『麻郡神社私考』によれば「文明六年甲午草創、或ハ曰ク再興ト、弘治二年丙辰修復、文禄二年癸巳拝殿造営」とある。祭りは旧暦の12月10日で、“刀物の神様”として信仰を集めている。

**３．天満天神　山田三園山（字味園）**

山江村総合運動公園の東側高台の一隅に神社がある。

『麻郡神社私考』によれば「草創年紀未考、永享中再興」とある。祭りは旧暦の３月４日で、山田地区において年初めの祭りで「山田祭り一番」と称されている。

**４．山王権現　山田領左右村（字板野）**

東浦川流域の板野集落にあったと伝えられているが、今日、所在地については不明である。

『麻郡神社私考』によれば、「鎮座年紀未考、長禄二年戊寅再興、厥初別當有リ長圓寺ト号ス」とある。なお、同書にいう長圓寺跡の比定地には、五輪塔群が残っているが、銘文はない。

**5．大王神社　山田領里（字味園）**

味園集落内にあり、後方に山田城跡（大王谷）の山がある。

大王神社は永吉庄地頭平河氏を祀る霊社の一つで、『南藤蔓綿録』によれば「（平河右衛門義高）二男山田次郎藤高、今ノ山田大王是也」とあり、『麻郡神社私考』には「平河右衛門三郎義高ノ二男次郎藤高之霊社也、社家傳ニ云ク永富左近将監長滋建立蒼時ハ山田本社今宮ト同檀ニ崇ム、應永十一年甲申始テ別檀ヲ築ク同二月廿三日新殿遷座」と記されている。

この記述は、応永十一年（1404）に大王神社が、平河氏館比定地の味園より現在地へ移ったことを伝えている。さらに「天文十五年丙午相良弾正忠長兄修造、天正八年庚辰藤原義陽公同亀千代君御息裁延命并庄内泰平三郡和合ノ祈願ト藤原長智同長豊再興」という記述がある。

神社の神殿裏には、「正平廿三年甲戌　諸衆一結衆」と刻んだ南北朝時代の自然石が建っている。今日、この正平二十三年（1368）銘の石碑と大王神社とは密接な関係にあるとされ、『麻郡神社私考』にいう応永十一年の大王神社遷座説はまったく無視された格好となっている。

祭りは旧暦10月４日におこなわれ、山田の氏神として崇められている。

**6．今宮神社跡　山田里大王東（字味園）**

従来は大王神社の東脇にあったが、今日、大王神社に合祀されている。

『麻郡神社私考』によれば「草創年紀未考、延文二年再興、天文中修造古老ノ傳ニ云ク昔日山田地主平河家以前、霊社也」とある。

この記述は、今宮神社が平河家以前の霊社で南北朝時代の延文二年（1357）に再興されたことがわかる。この記述を正しいとするならば、前述の正平二十二年銘の自然石は神社再興の11年後に建立されたことになり、応年十一年に現在地へ移ってきたと伝えられる大王神社とは無関係となる。むしろ今宮神社との関連を考える必要があろう。

**7．若宮神社跡　山田里　今宮神社同宮（字味園）**

神社は、大王神社の左側（岡田　要氏宅）にあったが、現在は大王神社に合祀されている。

『麻郡神社私考』によれば「社家ノ傳ニ云ク山田地頭之祖也、一二曰ク藤原長續（相良左近将監）公之霊社ニ説本拠不明、厥初ハ大王社南三町許ニ在社壇廢後此所ニ迁座」とある。

この記述から、若宮神社は、古くは南三町の場所にあったことが窺える。この場合、現在の山江村中央公民館辺りが比定地と考えられる。このように神社の多くが（辻・味園の微高地）地頭館比定地とその周辺に集中し、「山田地主または地頭」の霊社と伝えられている点は注目すべきである。

**8．大王神社　小山田（字宮屋敷）**

小山田集落の公民館敷地が神社跡である。

『麻郡神社私考』に「里大王社同體、應永年中地頭秋山常陸建立」という記述がある。

祭りは旧暦の11月中卯日におこなわれている。

### ９．井手口地蔵堂（字井手口）

西川内川と東浦川が合流して、山田川となる下流右岸に、井手口集落がある。

集落の下手山中に小さな地蔵堂があり、『山田村地誌』によれば「井手之口　地蔵堂　堂宇一坪　堂敷六歩」と記されている。境内に数十基の五輪塔が残っているが、銘文は刻まれていない。

### １０．下城子阿弥陀堂（字下城子）

大王神社から東へ100ｍ行った所の、下城子集落の村道端に阿弥陀堂がある。

『山田村地誌』に「下城子阿弥陀堂　堂宇二坪二合五勺　堂敷九歩」と記されている。

堂内に安置されている阿弥陀如来立像は、室町期の作風を残しており、境内に３基の五輪塔がある。

### １１．瑞光寺跡観音堂（字下城子）

石原集落の高台に観音堂があり、堂内には薬師如来立像と住持等の位牌が多数安置されている。中世の位牌には、墨書で「圓寂　茂山永昌公上坐覚位、干時天文六年丁酉三月十一日」・「當寺中興石窓元金公庵主尊霊位、天正十一年癸未五月二十一日」・「當寺中興吉州元和尚禅師」・「山田村清源山瑞光禅寺」等と記されている。

吉州和尚については、『南藤蔓綿録』に「寛永四年丁卯五月十日柳江院中興吉州和尚寂、是ハ長毎公別シテ入魂の僧也、其前曹洞未葉山田瑞光寺ヨリ出ル、父ハ和泉、母ハ西氏也、入落ノ後済門ニ入、其後駿州清見寺説心老和尚ノ門下ニ有ル事数年、己ニ帰程ニ及ヒ半途ニシテ洛西妙心智勝現住大光普眼大禅師法脈ヲ相続キ吉州ト号ス」と見え、球磨の三禅傑の一人として有名である。

また、堂宇に掛かっている鰐口に、「奉寄進　清源山瑞光寺阿弥陀如来　願主高橋藤島鬼塚

干時天文十二年癸卯八月十五日敬白」という銘文がある。この他、境内に２基の無縫塔と18基の五輪塔が現存している。

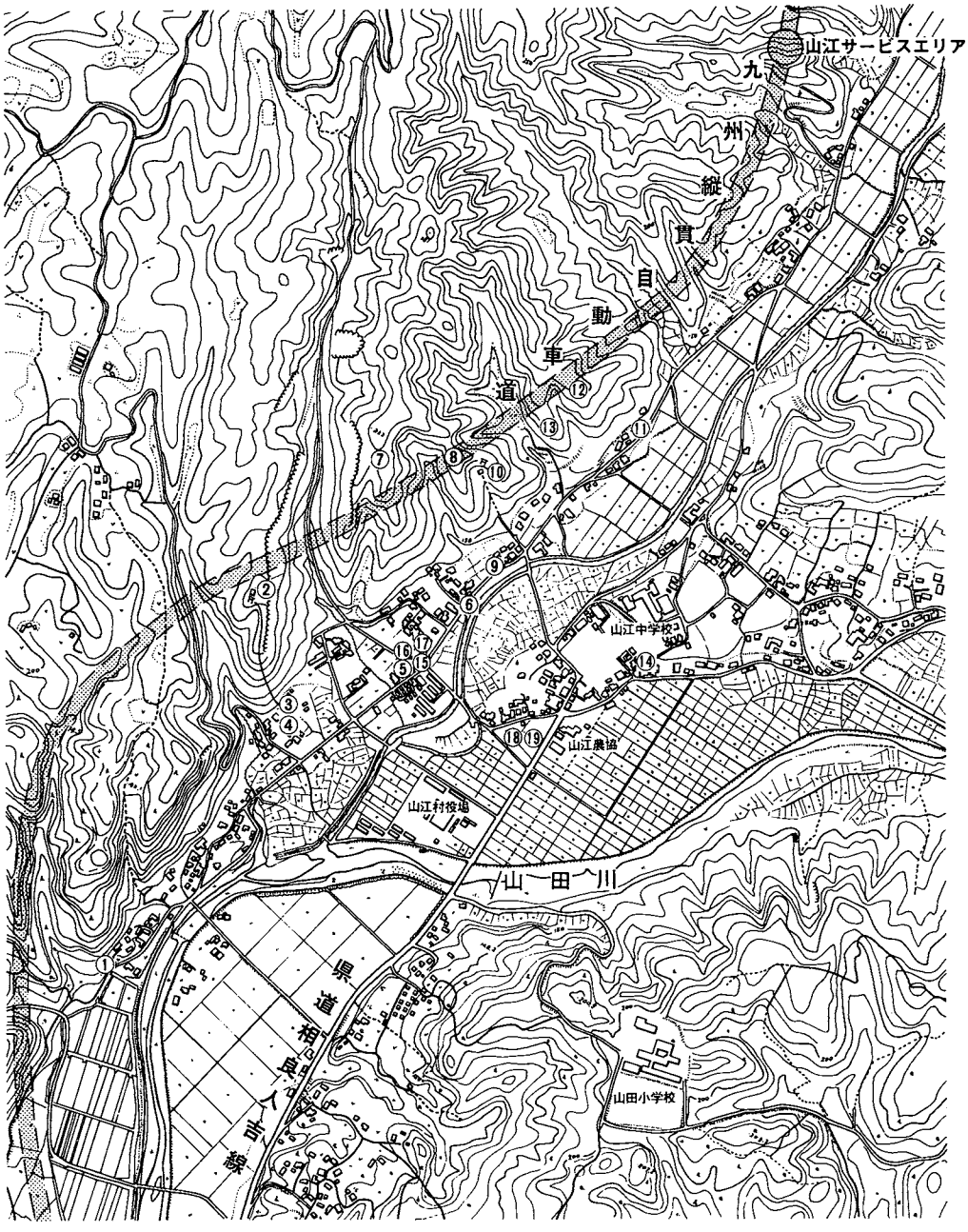
### １２．城子観音堂（字城子）

石原集落から東へ50ｍ行くと、城子集落があり、道路傍に観音堂がある。

『山田村地誌』によれば「城子　観音堂　堂宇二坪二号五勺　堂敷九歩」と記されている。

堂宇には十一面観音菩薩立像が安置され、台座背面には墨書で、

「奉造立十一面観音自在菩薩之像一躰厥作□□□者相良能長續□□□有御堂尓依□本□□年戊子六月吉日朔奉□□□白□下方□至聖霊現當之悉也殊者大檀那山田太山酒掃所願成辨子孫繁昌富□英雄□者過去□現在満未来□成佛得道□□□□□也□應仁三年己丑八月六日佛師」と記されている。この他、境内に数十基の五輪塔の残欠を見るが銘文はない。




第146図　山田城跡周辺の社寺堂宇・地名分布図

| NO | 社寺堂宇・地名 | 村 | NO | 社寺堂宇・地名 | 村 |
|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 観音堂 | 井手ノ口 | 10 | 諏訪社 | 石原 |
| 2 | 寺山・毘沙門堂 | 寺下 | 11 | 城子観音堂 | 城子 |
| 3 | 寺下・高寺院 | 〃 | 12 | 山田城跡（城山） | 〃 |
| 4 | 門前 | 〃 | 13 | 陣ノ丘 | 〃 |
| 5 | 今宮神社跡 | 〃 | 14 | 天満天神 | 味園・辻 |
| 6 | 阿弥陀堂 | 下城子 | 15 | 大王社 | 〃 |
| 7 | 山田城跡（大王谷） | 〃 | 16 | 正平23年銘 | 〃 |
| 8 | 山田城跡（下城子） | 〃 | 17 | 若宮神社跡 | 〃 |
| 9 | 瑞光寺跡観音寺 | 石原 | 18 | 前田 | 〃 |
| | | | 19 | 門田 | 〃 |

第127表　山田城跡周辺の社寺堂宇・地名一覧表

# 第Ⅵ章　総　　括

## 第１節　出土遺物について

### ①　第Ⅰ期整地層出土遺物

〔割花文青磁碗〕

１（碗）は、内器面に総曲線を入れ、間に割花文状の片切彫を小さく入れるタイプのものと思われる。

釉色はくすんだ感じの灰緑色で厚くかかっている。外器面は、最下部に短斜線が並列する以外は無文で、器肉も厚手である。

北宋後半から南宋前半の青磁と考えられる。

〔同安窯系の櫛描文青磁碗〕

３（碗）の外器面に櫛描文の斜線が掻かれており、５・６（碗）と２・７（皿）・４は内器面に花文や曲線による幾何学文様が描かれている。釉色は１・２・６が灰緑色で、４は灰オリーブ色、５・７はオリーブ灰色を呈する。

割花文碗と櫛描文碗は、いずれも13世紀中葉以前のものと思われ、14世紀前半では、すでに残存形態として伝えられていくとされる。

〔蓮弁文青磁碗〕

外器面に削り出しによる蓮弁文様を有する碗〔９～23・25～28・37・38〕である。釉色は主に、オリーブ灰色・薄灰緑色・緑白灰色を呈する。花弁の形状は弁先がやや丸味を帯びるものや、幅広のもの〔10・20・21・27〕と、鋭角のもの〔12・19・23〕とがある。

これらは、神奈川県鎌倉市・鎌倉光明寺裏遺跡の出土遺物を標識とし、14世紀前半に位置付けられているが、花弁の形状の相異により亀井明徳氏は、後者を13世紀中葉前後に先行すると推論されている。

〔玉縁状白磁碗〕

53（碗）は口縁を玉縁状に肥厚させている。この形態は、12世紀から13世紀の白磁に見られる。

〔口禿げ白磁〕

44・54・56で、皿の類と思われる。体部は薄壁である。釉色は44・54が淡白緑色で、56は白（黄）色である。これらは従来、南宋～元のものと考えられているが、太宰府史跡の例からすれば、13世紀中葉から14世紀前半に集中するようである。

〔厚手の白磁〕

45～52の白磁で、器壁が肉太で外器面に沈線による曲線と横線文様が描かれ、内器面には押

さえの加わった強い横ナデ調整が行われているのが特色である。器形は不明であるが残存体部の状況から碗の類でない事は明らかである。第Ⅱ期整地層から追加資料が出土している。

〔土師器〕

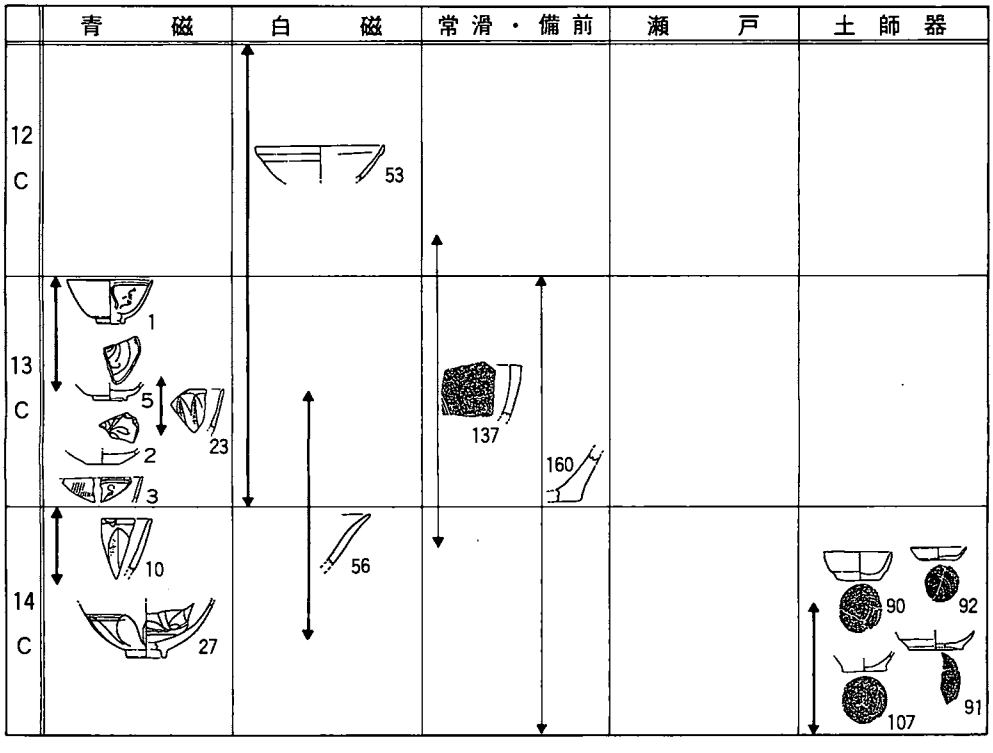
いずれも欠損品で形状等の把握が困難であるが、大方のものは外底が糸切りで、底径の大きさから、小型(4.7～6.1cm)・中型(7.2～8.5cm)・大型(9.0～10.8cm)に大別される。

この中で、外底と体部の境が大きく括れ、体部がラッパ状に立ち上がる小型の部類は、外底に糸切り痕を観察出来ない。多分にヘラ切りによるものと思われ（糸切り後、ナデ消しのケースも考える必要があろう)、ラッパ状の器形と合わせて、古いタイプの土師器碗と考えられる。今回の調査では糸切り土師器坏と共件しており、土師器におけるヘラ切り技法のものから、糸切り離しの技法への変遷を考える上で参考資料となろう。一般にその転換期は、大宰府政庁の廃絶期と同一視され、12世紀と目されている。

〔擂　鉢〕

137の備前のものを除き他はすべて瓦質であった。隣接の高城跡（15世紀末から16世紀初頭の遺跡）で見られた、いわゆる非常に焼き締めのきいた硬質瓦器の類は１片も出土しなかった。よく使い込まれており、条線の磨耗が目立った。

137の備前擂鉢は体部と直交する口縁端部が若干、上下に拡張するもので、12世紀～14世紀




第128表　第Ⅰ期整地層遺物一覧表

前半まで遡り得るものである。同類のものが大分県玖珠町の伐株山城跡から出土している。

〔須恵器〕

第Ⅱ期整地層出土のものと比較した場合、量的に多くない。外器面に波状と格子目の叩きを残す。器壁は144が厚手である外は、薄手のものであった。

〔備前・常滑〕

少量であるが、第Ⅰ期整地層から出土している。多分に、第Ⅱ期整地層からの出土物が第Ⅰ期整地層に紛れ込んだ可能性がある。166(備前）の外底は中央部より端部にかけて、尻上がりとなり安定感に欠ける。当初から甕の下部を土中に埋めて使用する事を前提として作られたものと考えられる。復元底径は33.0cmを測る。

160(常滑）は肩部に古常滑特有の押印が見える。備前・常滑の時代性などについては第Ⅱ期整地層の出土遺物の項で取り上げ、ここでは特色あるものの説明に留める。

〔その他の出土遺物〕

第Ⅰ期整地層から、その他、瀬戸〔66・69・70〕、天目〔71・72〕、滑石製石鍋〔164・169～171〕、砥石〔172～174・176～187〕、角釘・小刀〔188～215〕や、特異なものとして、オハジキに利用したと思われる扁平な小石〔75～89〕や、石鍋転用の滑石製垂飾品〔175〕が出土している。

**② 第Ⅱ期整地層出土遺物**

〔同安窯系青磁碗〕

216・217・219（碗）である。釉色は216が灰緑色、217がオリーブ黄灰色、219がオリーブ灰色を呈する。時期は第129表参照。

〔蓮弁文青磁碗〕

削り出しによる蓮弁文様が描かれているのは218～226・233である。222・233は、花弁の先端が鋭角を呈する。時期は第129表参照。

〔(青）白磁合子〕

237は平型合子で蓋天井部（甲）を欠くが、身には実測図を見る限り、静岡県香貫山経塚出土品に類似する。白（青）色の透明釉（影青）がかけられている。時期は、12世紀末ないし13世紀初頭頃と推察される。

〔肉太の白磁〕

239・242は、第Ⅰ期整地層でも出土を見た。しかし、これらを含め、Ⅰ期出土分も、総て細片で器形の復元には至っていない。

245～250は上記に関する追加資料である。残存体部の外器面は無文で異なるものの、内器面は強い横ナデ（指押えのナデが加わる）が施されており、239・242と同一調整法である。同形のものと考えられ、器形は、250の残存体部から小型の壺の類と思われる。おそらく文様部分

は上位で、無文部分は中位から下位のものであろう。上質の白磁である。

〔玉縁状白磁〕

251・257～259で257が最も端的な形状を呈する。時期は第129表参照。

〔口禿げ白磁〕

252・253・260・263である。時期は第129表参照。

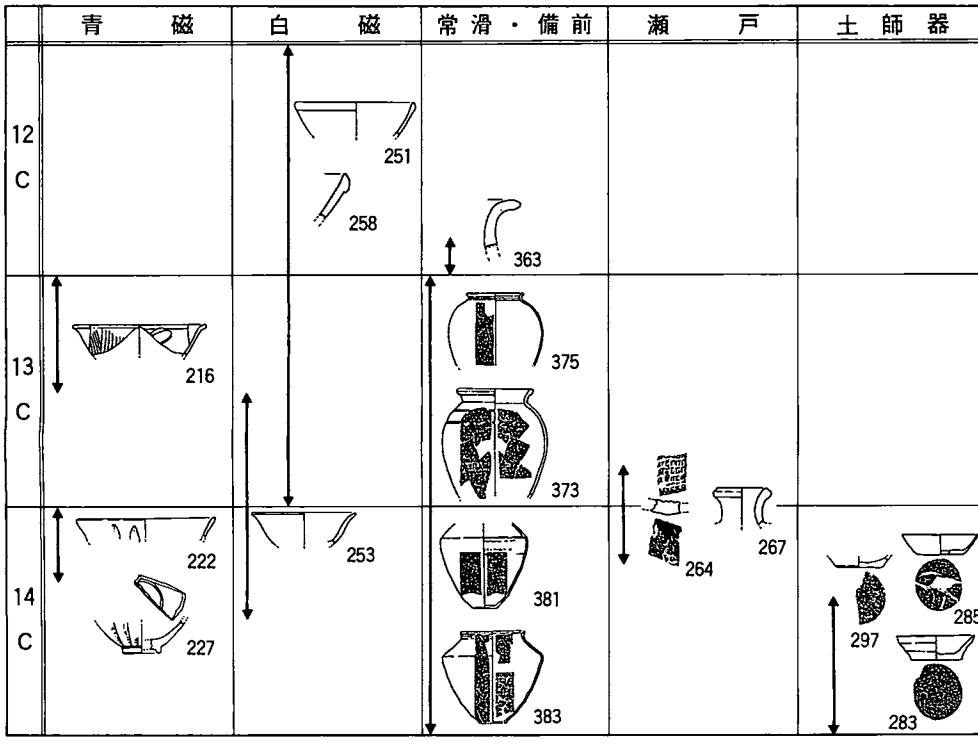
〔瀬　戸〕

264・266～270・272である。この中で264は擂鉢（おろし皿）で267・268は瓶子の頸部である。これらは、神奈川県鎌倉市材木座の長勝寺遺跡出土品に、ほぼ同一のものがある。長勝寺遺跡の出土遺物は、13世紀末から14世紀前半のものとされている。

〔土師器〕

Ⅰ期出土分と比較すれば器形の復元可能な資料が多いが、それでも、やはり破損のものが目につく。復元出来るものに限れば、船型のみが確認され、ラッパ状型（この場合は、底部に糸切り痕を観察出来ないタイプである）は見出せない。

船型の297と301は、Ⅱ期出土分の中で、例外的に小型で(302～319の破片にも小型のものがあると思われるが、いずれも小片で器形を推察出来ない)、第Ⅲ期文化層出土の460に原形が認められる。これらについては、第Ⅲ期文化層からの紛れ込みの可能性がある。




第129表　第Ⅱ期整地層遺物一覧表

Ⅱ期出土分の船型は285と286に見るように、体部の立ち上がりが基本的に直線的で、大きく開く所に特徴がある。

隣接の高城跡から出土した船型タイプの土師器は、体部がやや内弯気味に立ち上がり、285や286に比較してやや直に伸びる点で異なっている。さらに283と284は、ややラッパ状を呈する（この場合は底部が糸切りである）船型であるが、高城跡よりの出土遺物ではこのタイプを見ない。

なお、318は出土遺物の中で唯一、手づくね土器の可能性がある。

〔擂　鉢〕

Ⅰ期出土分と同様に、すべて瓦質のもので、形態等において同一である。

〔須恵器〕

器壁が厚手のもの〔343～348〕と薄手のものとに大別される。厚手のものは、器壁の厚さが1.5～1.9cmで、質量感があり、焼き締めの効いた大甕である。384を除いて外器面に格子目の叩きを有しているが、この類のものは、第Ⅲ期文化層から出土していない。第Ⅱ期整地層に限られた出土遺物と思われる。第Ⅰ期整地層から同形態の 144が出土しているが、小片で第Ⅱ期整地層からの紛れ込みによるものと考えられる。

348は唯一、波状の叩きで、Ⅲ期出土分に同形態のもの〔392〕がある。

〔備　前〕

口縁部を残すものは、すべて粘土帯が外側へ折り返されて玉縁状に肥厚するタイプである。力強く太い線が口端に巻かれている。胎土の色調は小豆色を基調とし、外器面に灰白黄色の釉がかかる。

373～377・385・388・389は個々に口径・胴部径・底径の復元が可能である。これにより器形は大小２つのタイプに分かれる。大型のものは、375・376・388・389で参考例をあげれば、375が口径40.8cm・最大胴径66.4cm・残存器高54.6cmで、388が底径44.2cmを測る。小型のものは373・374・377・385で、同じく事例をあげれば、373が口径27.3cm、最大胴径37.2cm・残存器高42.5cmで、385が底径22.4cmを測る。

器形は、大小２つのタイプとも、器高の割には口径と底径がやや幅広で、肩部が大きく膨らむ所に特色がある。水甕として使用されたものであろう。

373・374・377は肩部に櫛目の直線文様が２段〔373・377〕・３段〔374〕に彫りつけられている。

これらの備前は内器面を見るに成形に際し、粘土帯を３～５段に積み上げて胴をつなぐ方法がとられている事が明白である。

これらは熊山窯の特色をよく示しており、時期的に13世紀頃から14世紀頃のものと思われる。第Ⅰ期整地層より出土した備前の擂鉢片〔137〕とも、ほぼ時期が一致する。

〔常　滑〕

口縁部を残すものは、363を除いて折端の口縁の折り返しが著しく深く、強い力を感じさせる。さらに381と383の外底径は口径に対して著しく小さく、器形は突っ張り肩が特色で、胴部は、これより底部へ急速にくびれている。

これらは古常滑の特徴で、13世紀頃のものと思われる。

なお、異形の363は、口縁部が大きく弧状に外弯し、口縁直口となる。これも壺の口縁部で12世紀の末まで遡る可能性がある。

〔野鍛冶跡出土品〕

白磁〔424〕は口縁が玉縁状を呈し、12世紀頃のものと思われる。共伴遺物に瓦質擂鉢〔420〕と土製の鞴口〔421・422・423〕がある。

〔その他〕

陶器系の中世雑器〔394〕、滑石製石鍋〔395・396〕、鉄器〔397～399・401～406・408～410・413～419〕、砥石〔400・407・411・412〕などが出土している。鉄器は大半が角釘で、砥石は天草砥石〔400・407〕と粘板岩製砥石〔411・412〕とがある。

**③　第Ⅲ期文化層出土遺物**

〔同安窯系青磁碗〕

426・427でいずれも細片である。時期は第130表参照。

〔蓮弁文様青磁碗〕

429・430は外器面に削り出しによる鮮明な蓮弁文様を有し、430は体部が極めて薄壁（厚さ3㎜）である。時期は第130表参照。

〔肉太の白磁〕

435・～437・439である。第Ⅱ期整地層から同種のものが数多く出土している。

〔(古) 瀬戸〕

441・442である。441は外器面に菊花文があり、黒色と茶褐色の鉄釉がかかる。細片で即断し難いが、13世紀中頃の瓶子の類ではないかと思われる。

〔土師器〕

器形から船型〔448～450・452・463〕とラッパ状型〔453・454・456～458・463〕と、その中間型〔460・455・459〕とに分類できる。

Ⅲ期出土分のラッパ状型のものは、いずれも外底面に糸切り痕を観察できない。この事について、Ⅱ期出土分は糸切り後のナデ消しの可能性を残したが、Ⅲ期出土分には、共伴遺物の船型の糸切り痕にナデの加わった痕跡がまったくない所から、ヘラ切りによる結果との見方ができる。

さらに、これら中間型の器形を有するものが、糸切りとヘラ切りとに分かれる事は、土師器

の変遷を考える上で、興味深い資料となろう。

なお、461は、今回出土した土師器の中で唯一、高台付きのものである。

〔擂　鉢〕

466が土師系の中世雑器である他は、瓦質である。472と474は器形を復元できるが、Ⅱ期出土分の420と比較した場合、体部は外側に開き気味で、口径に対する器高の比率が低い所に相異点がある。

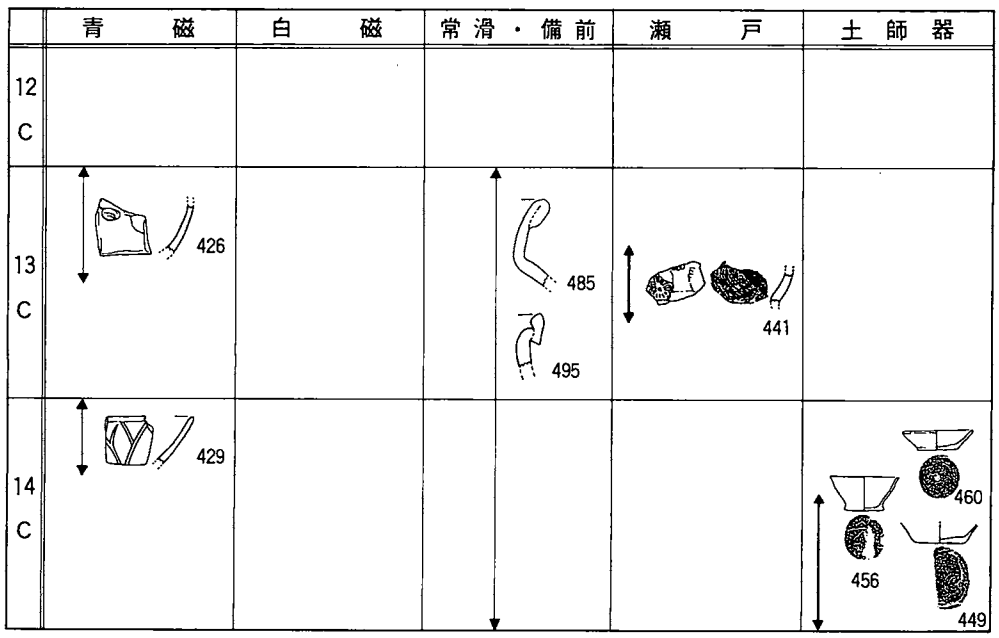
〔須恵器〕

476～482・492である。外器面の調整は476がヘラ削り、477・478が横ナデで、479・482・492が波状の叩き、480・481にはナデが施されている。器面の調整はⅠ～Ⅱ期出土分と比較した場合、やや多種である。体部はいずれも薄壁となる。492は甕の下位部で復元底径25.0cmを測る。

〔備　前〕

483～486・488は口縁部である。Ⅰ～Ⅱ期出土分と同様に粘土帯が外側へ折り返されて玉縁状に肥厚する。490は二次焼成により灰オリーブ褐色を呈する。

491は復元口径50.4cmで、493は残存底径32.5cmを測る。




第130表　第Ⅲ期文化層遺物一覧表

〔常　滑〕

口縁部〔495〕と、少量の甕片〔487・498・508〕が出土している。折端の口縁部は折り返しが著しく深く、Ⅰ期～Ⅱ期出土分と同一形態を呈する。

〔その他〕

陶器〔444・445〕、天目〔446〕、滑石製垂飾品〔499〕、硯〔550・501〕、滑石製砥石〔504〕、鉄器〔502・503・505～515〕などが出土している。

硯は中国産の端渓硯〔500〕と粘板岩製硯〔501〕とがある。鉄器は大方が角釘であるが、すべて欠損している。507は唯一、雁股の可能性がある。

**④　東側尾根及び西側尾根の出土遺物**

両尾根とも出土遺物は極めて少なく建築址の柱穴より出土したものに限られる。

〔同安窯系青磁〕

519は第Ⅰ期整地層出土遺物の2と同一系の青磁皿である。

内器面にヘラ描きによる花弁文様がある。

〔蓮弁文青磁碗〕

516～518・524は削り出しによる鮮明な蓮弁文様がある。その中で517・524は花弁の先端が鋭角である。

**⑤　南東側張り出し尾根出土の遺物**

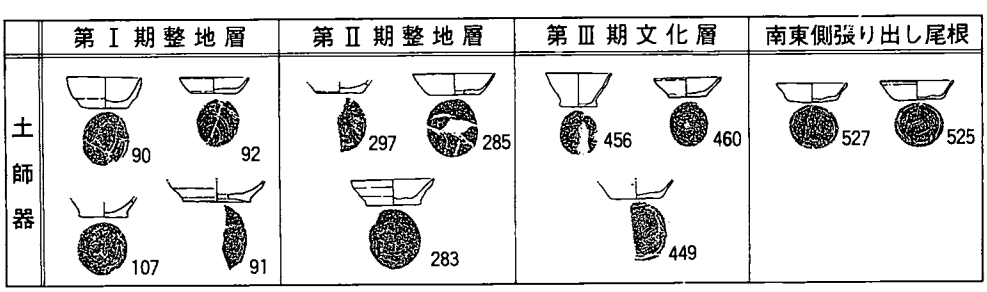
〔土師器〕

525・527～530は大型の船型タイプの坏で、外器面に鮮明な糸切り痕を残すが、特筆すべき点として体部はいずれも、やや外弯し、口唇部は肥厚する。第Ⅰ期～第Ⅱ期整地層及び第Ⅲ期文化層出土のものとはタイプが異なる。526はラッパ状型の土師器坏で外底面はヘラ切りである。

**⑥　その他の出土遺物**

迫地の調査区から、縄文晩期の深鉢形土器片が出土し、これに伴なうと思われる石鏃・スクレーパー・打製石斧・敲石が出土した。

いずれも、持ち込みによるものと考えられる。




第131表　山田城跡出土の土師器一覧表

## 第2節　遺　　構

### （１）建　築　址

#### ①　第Ⅰ期整地層検出分

整地層は南北の長さ56ｍ、東西幅11～18ｍの範囲で、大きく４段に分かれる。上段から下段までの高低差は15.5ｍで、ここから15棟（ＳＢ０１～ＳＢ１５）が検出された。

規模はＳＢ０７が最大で、ＳＢ０８が最小であった。ＳＢ０７は3.6ｍ（12尺）×2.3ｍ（８尺）・面積8.3㎡（2.5坪）を測った。15棟の総面積は181.6㎡（55坪）で、１棟あたりの平均面積は12.1㎡（3.7坪）である。

規格は２間×２間が９棟で最も多く、次いで２間×１間が３棟で、３間×１間、３間×２間、３間×３間が１棟づつであった。

桁行方向は、10棟までが基本的に東西方向を主軸とする向きにあり、迫地と直交する横長の建築址であった。

４段の整地層の内、Ⅰ－①を除いて、１回の建て替えが行われている事が明らかである。

建築址と出土遺物の関連は次の通りである。ＳＢ０２からは鉄器〔207〕、ＳＢ０３からは青磁〔19〕、ＳＢ０４からは土師器坏〔95〕、ＳＢ０６からは瓦質擂鉢〔131〕、ＳＢ０７からは青磁〔15〕、ＳＢ０９からは土師器坏〔98〕、ＳＢ１０からは白磁〔56〕、ＳＢ１４からは備前〔152〕が出土している。

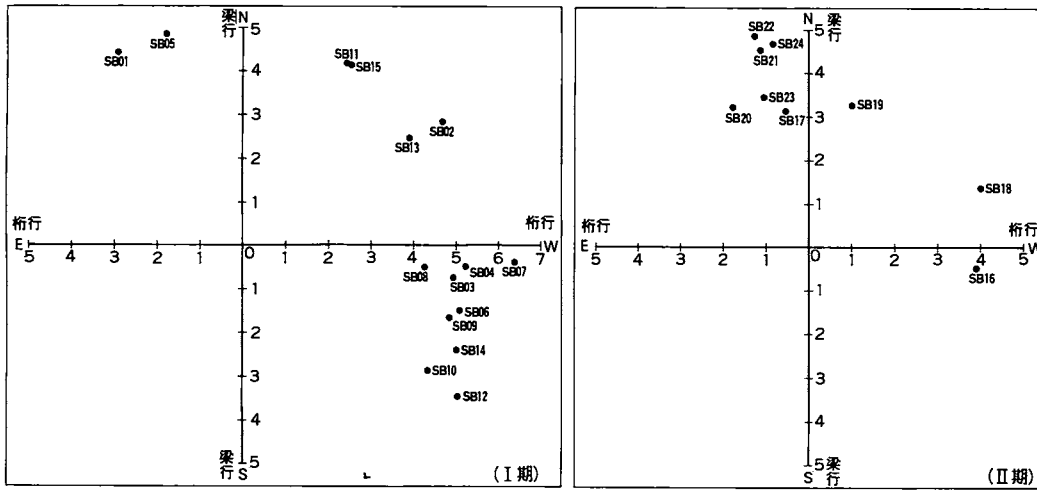
#### ②　第Ⅱ期整地層検出分

整地層は南北の長さ35ｍ、東西幅11ｍの範囲で、大きく７段に分かれる。上段から下段までの高低差は11ｍで、ここから９棟（ＳＢ１６～ＳＢ２４）が検出された。

規模はＳＢ２４が最大で、ＳＢ１７が最小であった。ＳＢ２４は桁行4.0ｍ（13尺）×梁行妻2.6ｍ（９尺）・面積10.4㎡(3.2坪)で、ＳＢ１７は2.6ｍ（９尺）×1.9ｍ（６尺）・面積4.9㎡(1.5坪）を測った。９棟の総面積は65.7㎡（20坪）で、１棟あたりの平均面積は7.3㎡(2.2坪)となる。概して、第Ⅰ期整地層検出分と比べた場合、全体的に小規模な造りである。中でも５棟（ＳＢ１６・１７・１９・２０・２３）は著しく小規模で、残り４棟とは建物の性格が異なるものと思われる。

桁行方向は７棟が基本的に南北方向を主軸とする向きにあり、迫地に沿った縦長の建築址であった。建て替えはなく、同時期に並列したものと思われる。

建築址と出土遺物の関連は次の通りである。ＳＢ１６からは青磁〔218〕、ＳＢ１８からは小刀〔274〕、ＳＢ２０からは青磁〔222〕、ＳＢ２２からは角釘〔402〕・土師器坏〔292〕、ＳＢ２３からは白磁〔251〕、ＳＢ２４からは瓦質擂鉢〔325〕が出土している。




第132表　建築址桁行方向一覧表

### ③　第Ⅲ期文化層検出分

文化層は南北の長さ11ｍ、東西幅６～14ｍの範囲で大きく３段に分かれる。上段から下段までの高低差は６ｍで、ここから６棟（ＳＢ２５～ＳＢ３０）が検出された。

規模はＳＢ２９が最大で、ＳＢ２８が最小であった。ＳＢ２９は桁行4.2ｍ（14尺）×梁行妻2.4ｍ（８尺）・面積10.1㎡(3.1坪）で、ＳＢ２８は3.2ｍ（11尺）×2.0ｍ（７尺）・面積6.4㎡(1.9坪）を測った。６棟の総面積は51.5㎡（15.6坪）で、１棟あたりの平均面積は、8.6㎡(2.6坪）である。

桁行方向は３棟（ＳＢ２５・２７・２８）が、Ｎ83°Ｗ～Ｎ88°Ｗで一つのまとまりを見せ、ＳＢ２６とＳＢ３０はＮ66°Ｗ～Ｎ67°Ｗで、ほぼ同一の方向にあった。これらは、いずれも横長の建築址であるが、ＳＢ２９は唯一、Ｎ19°Ｅで迫地と直行する縦長のものであった。

規格は２間×１間が４棟で、２間×２間が２棟である。１回の建て替えが行われている。

建築址と出土遺物の関連は次の通りである。ＳＢ２５からは土師器坏〔475〕、ＳＢ２６からは土師器坏〔484〕、ＳＢ２７からは角釘〔506〕、ＳＢ２９からは青磁〔427〕、ＳＢ３０からは青磁〔426〕が出土している。

### ④　東側尾根

南北の長さ78ｍ、東西幅５～19ｍの範囲から18棟が検出された。建築址は桁行方向から尾根

筋に沿って横長に並ぶもの（19棟）と、縦長の直交するもの（９棟）とがあり、大きく２時期に分かれるものと思われる。

* 横長のもの（ＳＢ３２・３３・３５・３８・４１・４３・４４・４６・４７）

規模はＳＢ４６が最大で、ＳＢ３５が最小である。ＳＢ４６は桁行3.7ｍ（12尺）×梁行妻2.8ｍ（９尺）・面積10.4㎡（3.2坪）、ＳＢ３５は桁行3.4ｍ（11尺）×梁行妻2.1ｍ（7尺）・面積7.1㎡（2.2坪）を測った。９棟の総面積は78.5㎡（23.8坪）で、１棟あたりの平均面積は8.7㎡（2.6坪）である。

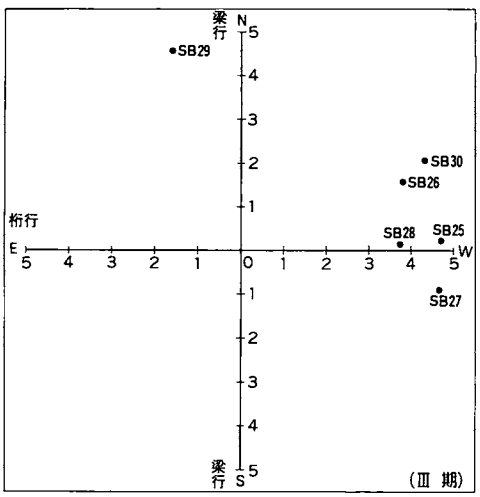
規格は２間×１間が５棟で最も多く、次いで２間×２間が３棟で、３間×１間が１棟であった。一部、建築址が重なり合っており、１回の建て替えが行われている。

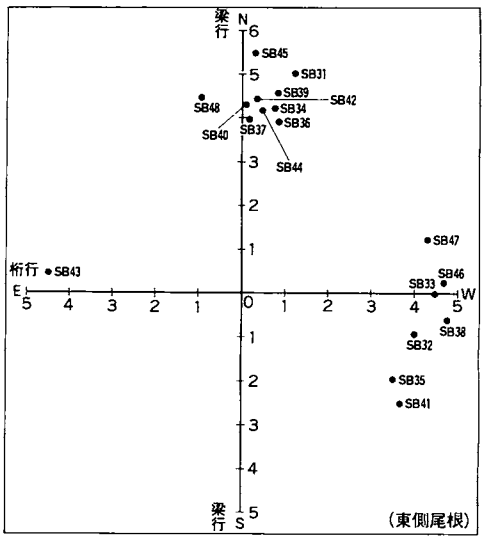
ＳＢ３２・３３からは青磁（ＳＢ３２は516、ＳＢ３３は518）が出土している。

* 縦長のもの（ＳＢ３１・３４・３６・３７・３９・４０・４２・４５・４７）

規模はＳＢ４５が最大で、ＳＢ３６・３７が最小である。ＳＢ４５は桁行4.6ｍ（15尺）×梁行妻3.0ｍ（10尺）・面積13.8㎡（4.2坪）、ＳＢ３６・３７は桁行3.4ｍ（11尺）×梁行妻2.1ｍ（７尺）・面積7.1㎡（2.2坪）を測った。９棟の総面積は83.3㎡（25.2坪）で、１棟あたりの平均面積は9.6㎡（2.9坪）である。

規格は２間×１間が５棟で最も多く、次いで３間×２間が２棟で、以下、２間×２間、１間×１間が１棟ずつであった。ＳＢ３１から青磁〔517〕が出土している。




第133表　建築址桁行方向一覧表

### ⑤ 西側尾根

採石工事により西側部分を大きく削除されている。残存部分の南北の長さ60ｍ、東西幅10ｍ

の範囲から５棟（ＳＢ４９～ＳＢ５３）が検出された。内、ＳＢ５１は桁行の一部が消滅している。

規模はＳＢ５０が最大で、ＳＢ４９・５３が最小である。ＳＢ５０は桁行3.9ｍ（13尺）×梁行妻2.8ｍ（９尺）・面積10.9㎡（3.3坪）、ＳＢ４９・５３は桁行2.8ｍ（９尺）×梁行妻2.6ｍ（8.7尺）・面積7.3㎡（2.2坪）を測った。

建築址は桁行方向から、尾根筋に沿って横長に直行するもの（ＳＢ５１・５２）と、縦長に沿うもの（ＳＢ４９・５０・５３）とに分けられる。

ＳＢ５３から青磁〔524〕が出土している。

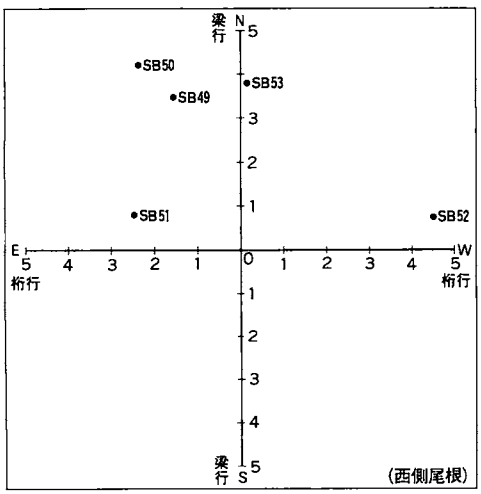
**⑥ 南東側張り出し尾根**

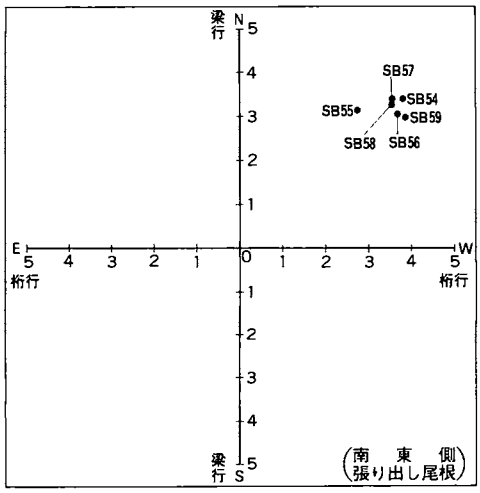
長軸18.9ｍ、短軸5.3ｍの標高204ｍラインで６棟が検出された。

規模はＳＢ５９が最大で、ＳＢ５５が最小である。ＳＢ５９は桁行4.2ｍ（14尺）×梁行妻2.4ｍ（８尺）・面積10.1㎡（3.1坪）、ＳＢ５５は桁行3.7ｍ（12尺）×梁行妻1.9ｍ（６尺）、・面積７㎡（2.1坪）を測った。６棟の総面積は54.5㎡（16.6坪）で、１棟あたりの平均面積は9.1㎡（2.8坪）である。

建築址は桁行方向において、すべて尾根筋に沿う縦長のものである。２回の建て替えが行われており、ＳＢ５４とＳＢ５７、ＳＢ５５とＳＢ５８、ＳＢ５６とＳＢ５９は各々、セット関係にあると思われる。

建築址から遺物は出土していない。




第134表　建築址桁行方向一覧表

### （２） 野鍛冶跡

第Ⅱ期整地層の最上段から検出された。中心部における粘土塊の堆積と、周縁部から柱穴が検出された事により、覆屋をもった粘土壁を有する簡易な野鍛冶施設の存在が伺われる。

第Ⅱ期整地層からは、多くの鉄器とスラッグが出土しており、土製の鞴羽口の出土もみた。恐らく、鉄器類の簡易な補修作業等が、ここで行われたものと思われる。

戦闘色の極めて濃い山城の山田城跡から、いわば日常的な施設ともいえる生産的遺構が検出された事は、城郭研究史の上で貴重な資料である。

### （３） 集　石

第Ⅰ期整地層から集石が検出された。集石は検出状況からして、野積み石塁のものとは考えにくい。恐らく中世文書にいう「投げ石」の類であろう。

しかし中には、一抱え以上もある川原石が無造作に積まれており、判断に迷う。かような大石は、隣接地の高城跡からも出土しているが、この場合は土坑と空堀からの検出であった。

問題の解明には今後の発掘事例をまたねばならないが、多分に、投げ石に関連した戦闘用のものとの見方はできる。高い所から、攻め登る敵に対して転がり落とせば、大石は有力な武器となり得る。

### （４） 整地層

迫地からⅡ期にわたる整地層が検出された。この整地によって迫地はⅠ期が４段、Ⅱ期が７段の階段状地形を呈する。

二段の尾根に挟まれた迫地は、高所特有の風害からも大きく免れ、外敵に対しては目隠しの場となる利点がある。敢て、迫地に困難とも思える整地作業が行われたのは、このような大きいメリットのためであろう。

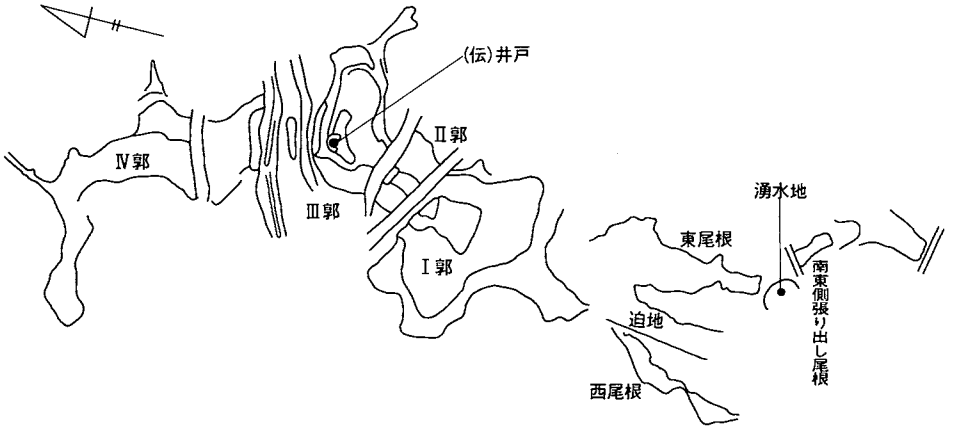
ただ整地作業に際しては、比高100ｍの山中という地形からして、本体尾根筋における防御施設工事の排土あたりが有効に使用されたものと思われる。整地用の土が、すべて地域からの持ち込みによるものとは考えにくい。

### （５） その他（水の手）

迫地の南端部・東寄り（東尾根の南下）に岩清水の湧く所があり、調査時にも水の枯れる事はなかった。地元で古くから水源地として知られ、麓の民家ではこれよりパイプを引いて今日に至るまで飲料等に使用していた。

さらに、本体尾根筋のⅢ郭に城跡の掘り抜き井戸跡と伝えられる窪地がある。

城の水源としては、この２ケ所で十分であったと思われる。今回の調査で多量の備前と常滑の大甕が出土したが、これらは主として水甕に使用されたものと考えられる。




第147図　山田城跡と水の手位置図

## 第３節　城跡の縄張りについて

城跡は盆地平野の若干、奥まった北側山付きに築かれており、城跡地のあり方として、戦国時代以前の要素を呈する。

（周辺地形の状況にもよるが、一般に山と平野部の兼ね備わった所では、南北朝時代まで山付きでの築城が多く、平野部への積極的な進出は、戦国時代になってからのこととされる。）

城の築かれた下城子・大王谷の山は、盆地北方の八代郡から南下する山稜地帯の一隅で、同時に山田地区における谷底平野の西壁山稜の一部をなす所でもある。

城跡地の本体尾根筋は、ほぼ南北方向（Ｎ10°Ｗ）の主軸ラインを有しており、地図上での平面的な地形は帯状形を呈する。

本体尾根筋の南北幅は約214ｍで、麓集落よりの比高は110ｍである。南側寄りの尾根筋に城跡の主郭部分があり、鞍部は反対方向の北側にある。

基本的な縄張りは、本体尾根筋に４条の大規模堀切（内、１つは二重堀）が刻まれ、これらの堀切によって仕切られた４つの郭から成っている。

さらに、本体尾根筋の南端部で、東西二段に分かれた岩場の派生尾根と、その間に挟まれた迫地をも積極的に縄張りに取り入れる事により、山田城跡を大規模山城に仕上げている。派生尾根の長さは東側が90ｍ、西側が70ｍで、迫地は70ｍを測る。加えて東尾根の南東下には長さ25ｍの張り出し尾根があり、この地からも建築址や堀切等の遺構が検出されている。

城跡地は本体尾根筋と派生尾根を軸とし、これらに種々の人手が加えられているが、本体の山もまさに天然の要害で、急峻な山の斜面は周辺を圧する。

城主の館跡地は今日、不明であるが、現況から推察し得るに、高寺院の敷地及び大王神社の敷地あたりが、比定地として挙げられよう。

## 第4節　文献史学からのアプローチ

山田城跡の所在する山田村が、歴史に登場するのは建久二年（1191）五月三日良峯師高所領譲状案である。これによると山田村は永吉庄に含まれ「師高希代相伝之私領」であった事がわかる。永吉庄は平家逆乱のとき、右大将家（源頼朝）から一旦勘気を蒙り没収されたが、文治三年（1187）六月十六日には所領安堵の御下文が下され、「球磨御領」と記されている。

また建久八年（1197）八月日肥後國球磨郡図田帳断簡には「鎌倉殿御領五百丁　預所因幡大夫判官（大江広元）、永吉三百丁　地頭良峯師高子息字平　紀平次」と見え、球磨御領＝鎌倉殿御領の成立を知ることができる。

永吉庄地頭は平河氏であり、『平河文書』や先祖書によると惣領は「平河」姓を名乗り、一族の分立を見ている。その中で平河師高の兄（山田次郎東高）を山田村地頭と伝える記述があるが、確証はない。ただ山田村には、山田次郎東高を祭神とする大王社が存在しており、まったく根拠のないことではあるまい。

この頃の地頭館は、おそらく旧大王社跡の辻・味園あたりと思われる。この地は西川内川と東浦川の合流点で、古来から交通の要所であった。周辺の水田には、「前田」「門田」などの地名が残っており、地頭直轄地としての門田が推測される。さらに、平安末期の毘沙門天立像を安置する高寺院などが周辺にある。

山田村が、前述の山田次郎東高の子孫あるいは平河氏惣領によって支配されたか否かは不明であるが、永吉庄全般から見た場合、

①建武五年（1338）八月日の相良定頼申状案に、山田村は「少府御領」と見える。

②康永四年（1344）十一月日の税所宗円申状案に、永吉庄の御代官は「新御領平六入道宗昌」とある。

③延文二年（1357）十二月十八日以降、作成された相良定頼併一族等所領注文に、相良定頼分として「肥後國球磨郡永吉庄半分百七五町、平河左近充（少弐）頼尚跡」と見える。

以上の事から、山田村もこの中に含まれており、平河左近充は平河一族の惣領であった可能性が強い。ただ、平河氏の所職が、地頭もしくは頼尚代官であったかは定かでないが、いずれにしても平河氏は、南北朝の内乱まで永吉庄の支配権を有しており、相良定頼分の中に山田村が含まれていた可能性は十分にある。

南北朝の内乱の中で、山田城は下相良氏が早くから守る所であったと思われる。この事は①の相良定頼申状案の中で、定頼が少勢ながら親類若党を二手に分け、山田城に楯籠らせ防戦していると記されている事から明らかである。

山田城の築城時期と築城者は不明であるが、築城時期は多良木の上相良氏と人吉の下相良氏が対立を深めた建武二・三年頃と思われる。また山田城は北朝方の本拠地として下相良氏の守

る所であったが、その後、下相良氏一族の相良縫殿充祐長が離反し、太宰少弐頼尚領山田城を奪取し楯籠る事件が起きた。これに対して頼尚の甥、筑後彦次郎経尚は下相良一族（相良孫次郎定長、税所八郎景宗、税所新兵衛入道宗円など）に軍勢催促状を出し、興国元年（1340）八月十日に山田城を攻め、二十日まで合戦を行っている。

この合戦で祐長方の親類若党が打死にしたり、疵を蒙ったことと、兵糧難儀のため上相良氏の一所城に引退したため、下相良氏方の勝利に終わった。下相良一族の軍忠状によれば山田城に押し寄せたのは九日で、祐長は十九日夜に追落したとされる。

筑後彦次郎経尚は「山田城落人相良縫殿充祐長已下凶徒」に対して、追捕の奉書を下相良一族に出している。また少弐頼尚は相良定長・相良八郎の功を褒し、上相良経頼の再出に備え「永吉庄木枝山田已下所々城郭警固」とあるように山田城の警固を下相良氏に命じている。

しかし合戦の舞台はその後、上球磨に移り、結果として「山田城」が歴史上から姿を消すことになる。

山田城について『相良家文書』などから整理すれば、

① 山田城は、建武三年（1336）に、下相良氏の守る所であった。

② 興国元年（1340）三年廿三日、下相良一族の相良縫殿充祐長が離反し、山田城を奪取し、立て籠もった。

③ 興国元年（1340）八月十日、筑後彦次郎経尚・下相良一族は山田城に押し寄せ、廿日まで合戦が行われた。結果として祐長方は兵糧難儀のため十九日夜に追落して、下相良氏が勝利を治めた。

④ 暦応三年（1340）十二月十日、太宰少弐頼尚は所領永吉木枝山田などの城郭警固を、下相良一族（相良定長・相良八郎宛）に命じた。

以上のことから、山田城と下相良氏との関係が窺い知れるが、永吉庄地頭平河氏とを結びつける史料は見出せない。これは南北朝期において平河氏の山田村からの後退を意味するものであろう。

かかる意味から球磨郡の南北朝内乱の中で、山田城は下球磨における武家方（北朝）の最拠点の一つと考えられ、村山城・原田城などともに、下相良氏によって築城されたのであろう。

## 第5節　ま　と　め

山田城跡は、本体尾根筋が路線外で、今日、未発掘である。したがって、ここでいう調査結果とは、道路建設予定地の派生尾根（二股尾根）と間の迫地に限ったものである。

しかし、結果として城跡の本体部分を発掘したのと同程度の成果をあげる事が出来た。

① 山田城跡は出土遺物から14世紀（南北朝時代）の山城と推察される。15世紀（戦国時代）以降の遺物がまったく出土していないので、城の存続期間を14世紀の南北朝時代に限定してよ

い。

② 迫地から南北朝時代の文化層（１枚）と２枚の整地層が検出されたが、出土遺物からは、層間の微細な時代差は見出せなかった。

③ 『相良家文書』によれば、山田城の初見は建武３年（1336）で、北朝方の下相良氏の守る所であり、興国元年（1340）の８月には城で合戦が行われている。

暦応３年（1340）12月10日、大宰小弐頼尚は山田城などの警固を下相良一族に命じ、これ以後、山田城は文献上から姿を消す事になる。

④ 山田城跡は、発掘調査の所見と文書記録が一致する極めて重要な南北朝時代の山城である。

## 第６節　山田城跡調査の問題点

① 今回、尾根や迫地から検出されて、復元を試みた建築址は、いかにも小規模で復元に疑問視する向きもあろうかと思われる。

現地で指導を受けた大三輪龍彦鶴見大学教授からは、「城は非常時のキャンプ地であるが故に、おおよそ、建物も臨時的な造りで形状は方形に限らず、台形などの不定形なものも想定してよい。」との御指摘を受けたが、今回の場合、そこまで踏み切れず、一応、方形復元を前提とした。

特に今回、凝灰岩の岩場から多数の確たる柱穴が検出されており、これを基点に現地で試行錯誤を繰り返し、最終的なプランを報告書に掲載した。

これまで他の城跡地からも、意味不明とされる小柱穴が数多く検出されている事もあり、山田城跡の事例を含めて建築址復元の試みは、今後の研究課題である。

② 山田城跡の縄張りが南北朝時代特有のものであるか否かは、今後、城跡の縄張りによる編年を考える上で極めて重要である。

③ 隣接地の高城跡（15Ｃから16Ｃ初頭の城）と同様に、山田城跡からも染付が１片たりとも出土しないのを、どう見るか。染付文化圏の欠落は大きな疑問点である。

④ 文献上からは、南北朝内乱の中で永吉庄地頭、平河氏の動向・消息が不明である。

さらに、山田城跡が内乱の初頭に登場し、中期以降まったく所見しなくなったのは、下相良氏の優勢で、中・上球磨に目が向けられたためであろうか。

参 考 文 献

## 第Ⅱ章　遺跡の概要の記述に関して


『高城』　熊本県文化財調査報告　第95集　昭和62年

『大丸・藤ノ迫遺跡』　熊本県文化財調査報告　第80集　昭和60年

『狸谷遺跡』　熊本県文化財調査報告　第90集　昭和61年

『鼓ケ峯遺跡』　熊本県文化財調査報告　第96集　昭和62年

『天道ケ尾遺跡』　熊本県文化財調査報告　第 103集　昭和63年

『九州相良の寺院資料』　上村重次　人吉市・金輝堂刊　昭和62年


## 第Ⅵ章考察（遺物）の記述に関して


『日本貿易陶磁器史の研究』　亀井明徳　昭和61年　同明舎出版

『日本陶磁全集』 8．常滑・渥美、9．瀬戸・美濃　中央公論社

『日本出土の中国陶磁』　東京国立博物館　昭和53年

『千葉地遺跡』　千葉地遺跡発掘調査団　昭和52年

『陶器大系』　6．古瀬戸、7．常滑・越前、10．備前　平凡社

『長勝寺遺跡』　長勝寺遺跡発掘調査団　かまくら春秋社　昭和53年

『草戸千軒町遺跡』　第32次発掘調査概要　広島県草戸千軒町遺跡調査研究所　昭和60年

『太宰府史跡・昭和53年度発掘調査概報』　九州歴史資料館　昭和54年

『一乗谷朝倉氏遺跡Ⅶ及びⅧ』　朝倉氏遺跡資料館　昭和51・52年

『伐株山城跡』　大分県玖珠町教育委員会　昭和59年

『太宰府史跡』・昭和52年発掘調査概報』　九州歴史資料館　昭和53年

『尻八館調査概要　第一次・第二次』　青森県立郷土館調査年報２・３　昭和52・53年

の間押領して候つる所〻の事ハ、此次ニあらためるへく候間、それも嶋津人〻參陳候て後、これにて堅申定へく候を、國にてとかく兩様(方)仰られ候ハんにハ、又事ミたりに成へく候、所詮參陳を待申候へと、此人〻ニ仰候へく候、おい四郎に委細申て候也、定可、申候歟、そのため二事書をもたせてまいらせ候也、

一久庵主、それの御事をあしさまニ申候ハん事、此興ニ〳〵しられぬ事にても候ハぬニ、かやうに申かける事、うたてしく候、此ついてに、けんもんよりして、から物まうけられ候ハんとせられ候なと、、此へんにもきこゑて候、あさましく候、嶋津かふるまいハ、此人の引級にハよるましく候かと存候、何さま嶋津參陳し候ハ、、毎事ミゑ候へく候間、一揆の人〻のさ、へ申され候事ハ、不可然候、いつれも天下の御大事ニあふまてたるへく候、忠の人〻を私の(意趣)いすにてわつらハしく候ハん事ハ、又かたく申付候へく候、

一御方の人〻の、一所懸命の地の本領ハし〳〵、此間氏久をさへて候事ハ、申遣候、此状をそれよりつかハさるへく候、

一小田此間連〻なけき申候へとも、それより御とり申候ハてハ、用ましきよし、申遣て候、定それへなけき申へく候歟、この一人めし出候ハても、不便ニ候へとも、多良木かたく申候之間、さしをきて候、多良木ニ能〻仰候て、いかなる起請文をもかゝせ、こんハうをさせられて、めしいたさるへく候、近江守(前越)にも多良木にもくハしく仰候へく候、此人〻とり申候ハ、彼めんし候へく候、

一きの人〻めん〳〵に申され候ほとに、ミな〳〵返事つかハし候、この名字しるされて候、着到をやかて京へ進候也、明後日長瀬の式アを上候ほとに、む禰とこの事を注進申候也、

一こなたの事ハ、明年正月十五日過候ハゝ、菊池せめ候へく候、年内ハミな人々つかれて候ほとに、さしをきて候、大内新介(義弘)明日目野(肥後)ニ立候へく候、

一久庵主又氏久・伊久方への状、同ニて候、御つけ候へく候、

一官途以下御申の條〻道やりて候へく候、恐〻謹言、

十一月十二日(永和三年カ)　了俊(今川)

兵アノ大輔(今川満範)殿

高木 修理亮久勝 ｜
永里 大和權守武綱 ｜
宮原 橘　公冬 ｜
野邊代 丹波守助國 ｜
和田 備前　正久 ｜
橋口 伴　鬼王丸 ｜
東郷 信乃守久道 ｜
敎二郷 沙彌　宗世 ｜
相良多良木 遠江守賴忠 ｜
牛屎山野 左衛門尉元詮 ｜
牛屎羽月 石見守元豐 ｜
高木 長門守久家 ｜
和泉杉 民了丞兼義 ｜
北原 備前權守賴兼 ｜
和泉 縫殿允村保 ｜
薩原光武 左衛門尉忠秀 ｜
野邊 薩摩守盛久
税所介祐義
大津保 沙彌　座功
敷福 左衛門尉親宗
左近將監
左衛門尉

## 五九、今川了俊書状案

○九州史料叢書「禰寝文書」(二) 所収

(前　欠)

の中ニ狀を一通したゝめてつかハし候也、この分にて尚よく〳〵仰候へく候、所詮此後氏久・伊久非儀をいたし候ハゝ、一揆の中より申候にまかせて、京都にも申入、又わたくしとしても、一揆の人〻をミつき候へく候、それニつきてハ、御分上洛候へきよし、御申候、返〻あるましき事にて候、その故ハ、氏久らふるまいちかひ候ハゝ、何時もやかてをしかけて、さたし候へく候間、此仁ら父の間ニ、在陳し候ハゝ、國にてハすへて〳〵、任雅意たる事、し候ましく候間、とりしつめ候て無爲ニ候ハんときこそ、御上洛も候ハんするにて候へ、そのほとハ、一揆人〻一所にて、これのさ右を御待候へく候、もし氏久無爲ニふるまひ候て、これニ在陳し候ハゝ、其時ハ一揆の人〻も、これへめしのほせ候へく候、その時ハ御同道あるへきにて候、とても此人々ニ我〻ハ、永く同心し候へく候間、身ハ代官ニ御下向候上ハ、それニ御わたりあるへく候、それニつき候てハ、御料所も候ハて、いたわしく存候へハ、一揆人〻の力をもて、扶持し申され候へと、申つかハし候、就是非氏久ハ父子の間ニまいりて候ハゝ、彌事々堅くこれにて申付て候、國にてミたりの事仕候ハしと存候、人〻本領事、かつて煩候ましく候、このたひの新恩預所ホ事ハ、闕所にて候ハんする所ハ、預狀に任せて、もた候(せ脱カ)へく候、嶋津か跡ともに給て候人〻ハ、替を京ニ注進申候て、はからひ候へく候、降參の法にて候之間、本領當御代の恩賞の地なとハ、可返付候、こ

衆儀調可然以時分各可致其沙汰候、一揆衆中お憑楚忽沙汰候時者、
一向不可有合力之儀候、如此申定候、公方訴訟事をも以理運之儀、
一同仁可歎申候、若此條〻令違變候者、
日本國中大小神祇、殊者、天照大神宮、八幡大菩薩、當國鎭守霧嶋權
現御罰お各可罷蒙候、仍契狀如件、

永和三年十月廿八日

久米代 大善亮爲賴　在判
水俣 蔵人大夫武宗
相良 參川權守右賴
平川 兵庫允師門
牛屋烏越 隼人佐義元
牛屋青木 沙彌　元生
奥野代 源　助景
牛屋牛野 備前守元英
牧 圖書助重親
和泉朝岳 刑了丞保種
佐敷代 備前權守國顯
曾木 大和守元義
和泉知色 左衛門尉兼光
田嶋 因幡守國家
相良 近江守前賴
牛屋太田 沙彌　元清

馬越 對馬守高意
坂窓 修理亮重宗
対角 豊前介公茂
恒松 石見權守定峯
肝付 出羽守兼家
肥後 豊前介高基
中野 出雲守幸重
平良代 縫殿助重秀
池化 右京亮久兼
岡本 越前守賴季
湯浦代 彈正忠俊宗
和田 土佐守久宗
和泉井口 左近將監保合
和泉上村 沙彌　道一
口永代 兵庫允國家
伊藤 左衛門尉祐一
梶所 但馬守祐平
津敷渠 左衛門尉武實
久多森木 左京亮國貞
盛谷 遠江守直重
大村代 平　前重
大溝 左近將監高岡
牛屋 河内守元息

（永和二年カ）六月七日　　沙彌尭覺（花押）

謹上　禰殿殿（久清）

## 五五、今川了俊（貞世）書狀

○九州史料叢書「禰寝文書」（三）所収

先日兵ア大輔（今川滿範）下向之時申候處、御請文六月二日到來候了、殊ニ目出候、就其重委細兵ア大輔方ニ申遣候、定可申候哉、其間事一向憑申候、殊更大隅・薩摩國事、愚身可拜領上者、別而御志候者、彌〻悦入候、將又此方躰、同兵ア大輔方ニ申遣候、可被聞食候哉、玖摩（マヽ）事一落居候者、定面〻爲合力可罷出候哉、毎事可有御談合候、恐〻謹言、

（永和二年）七月三日　　了俊（今川）（花押）

禰寝右馬助殿（久清）

## 五六、今川了俊（貞世）書狀

○『入来文書』所収

「――――」（沼裏切封）

先日兵ア大輔（今川滿範）下向之時御請文、今月二日到來、目出候、就其重兵ア大輔方ニ委申遣候、定可申候や、其方事一向憑存候、殊更大隅・薩广事、愚身可拜領上者、別而御志候ハ喜入候、御下文近日定可到來候、早〻可入見參候、將又玖广（肥後）合戰一途候者、定大將も面〻御同心ニ國中可打出候欤、毎事可有御談合候、恐〻謹言、

（永和二年）七月五日　　了俊（花押）

澁谷清敷帋五郎殿（永朝）

## 五七、今川滿範書狀

○九州史料叢書「禰寝文書」（二）所収

「肝付殿　　滿範」

「――――」

昨日自其大方慥便宜之由承候間、探題よりの内書、同事之不審委細申候了、前頼（相良）既眞幸（日向）まて罷着了、其方様之事、同者一揆之軍勢悉不打寄候以前に、一途御方便候者、公私可目出候、條〻此仁に申含候、定申候哉、恐〻謹言

（永和二年）七月廿八日　　滿範（今川）（花押）

肝付殿（兼氏）

## 五八、一揆契状神水案文

○九州史料叢書「禰寝文書」（二）所収

「一揆契約狀神水案文」（沼裏書）

一揆契約條〻」

右天下同事者、爲將軍家御方、一味同心可致忠節候

一嶋津伊久・氏久事、降參治定上者、向後彼退治事者、重公方御意お請可廻壽策候、雖然彼兩人乍お御方候、此一揆人〻知行分に競望お成、及合戰候時者、公方御意をも不相待、其在所に馳寄可致防戰候、

一於此契約衆中、所領相論以下煩敷事、出來候日者、各加談合仰上裁、以多分之儀、任理運、可致口入候、被背其儀候人者、被破此一揆可相當候之間、不可有閣（隔カ）心之儀候、

一或者本領再住、或者就恩地に入了事、公方御意お請、能〻加談合、

ゝ御中被進候状案文進候、隨御左右正文をバ可進候、子細承候ハ、頼存、候、恐ゝ謹言

（永和二年）六月二日　（朱書）「今川兵部大輔事カ」満範

伊集院（久氏）殿

## 五二、相良前頼書狀

○九州史料叢書「禰寝文書」（一）所収

其後連ゝ可令申由乍存候、路次不輙候之間、無其儀候、背本意候、抑三ケ國御事共、多分御方御志之由、依被聞食候歟、爲大將今河兵了（透絵）大輔殿御下候、仍一昨日ニ當所ニ先御下着候キ、就其候て、被遣使者候、今時節就于公私可然樣御計候者、可目出候、（今川了俊）探題一事以上其國ニハたのミ存候よしを被申候て候、西方事者、委細此御使者被申候歟、兼又此境之事、此間者無指事候、彼方之躰何樣ニ候哉、承度候、尚ゝ一途思食立候者、爲　公私可爲大慶候、恐ゝ謹言、

（永和二年）六月四日　（相良）近江守前頼（花押）

謹上　（久連）禰寝殿

## 五三、野邊盛久書狀寫

○九州史料叢書「禰寝文書」（一）所収

（朱書）「正文荘家蔵」去月下旬之由、御陣ニ御座候由を存候て、捧愚札候處、既依御歸、使者加治木殿之御方ニ進置候き、可進之由御返事ニ達候間、今者定參着候哉、其時此邊之不審ホ令申候間、不能重言候、抑去月之比（今川了俊）探題へ進候飛脚、今日五日ニ到來候、隨而身ニ宛て御内書給候、此文章者面ゝ樣可懸御目歟と存候間、案文を進候、宜可寄御了見候歟、兼又先札ニ副進候し御内書、定御披見候哉、無相違御請文候者、給候て近日管領へ進飛脚候、可付進候、不然候者委細御返事ニ示承候て、可令注進候、將又大將（今川満範）者去二日ニ、求摩に御着陣候、自是使者それまて御共申候了、御名字者今河新野（マヽ）殿と申候由承候、依大將御下向、近日前頼（相良）庄内へ御共申候て、可打出由申遣候、爲御不審令申候、次ニ求摩之上郡之人ゝ陣をもちかね候て、既はつすへき由承候、小田者我城ニ罷歸候て城誘仕候由承候、求摩上郡人ゝ自兼日大將御下向候者、陣をはつすへき由、申候けると承候、今ハゝや前頼之案ニ入候ぬと候、尚ゝ大將御下向之刻能樣ニ御計も候者、公私可目出候、如比之事ホ樣ゝ其憚多ゝ候へ共、自公方貴方樣面ゝ同心之御旁、此旨を申候て、其さ右を注進申せと、被仰下候間、不顧憚令申候、又西方之不審者定被聞食及候哉、御方御勝利由承候間、目出度候、心事難盡愚狀候間令省略候、恐ゝ謹言、

（永和二年）六月五日　（野邊）薩摩守盛久（花押影）

謹上　（久連）禰寝殿

## 五四、沙彌堯覺幷書狀

○九州史料叢書「禰寝文書」（一）所収

此間者、依路次難儀、不申通候條、背本意候、兼又去二日、大將今河兵部少輔殿、求摩に御着候、仍彼御使大合良勘解由左衛門尉殿、去五日此堺ニ被越候、御教書幷大將御狀被進候、依此御左右、御陣へ可有御注進候、尚ゝ御返事兼給候者可然候、恐ゝ謹言、

なり、
しよせん一そくのわつらひになり候ハんするともからにおいては、
親子兄弟をいはず、なかをたかふへく候、
一一そくのなかに、ふりよのくわうせついてきたり候時ハ、志んしやくの儀なく、あひたかひに申ひらくへく候、
一庄内において、所務以下のさうろんにおよふ事候時ハ、一そくおの〳〵申たんし候て、りうんにまうせてさいそく申へく候、かやうに(様々)てう〳〵申さため候うへは、きやうこういよ〳〵一味同心のおもひをなすへく候、もしこのてう〳〵偽申候はゝ、
八まん大ほさつの御はつをまかりかうふるへく候、仍契状如件、

正平廿三年八月五日　　藤原(相良)氏頼（花押）
近江守前頼(相良)（花押）

なかとミとの

## 四八、大王神殿裏自然石銘文

○山江村山田、大王社神殿裏

ゑ正平二十三年戊甲　一結所衆

## 四九、平河師頼軍忠状

○『熊本縣史料』中世篇（三）「永池文書」一号

平河三郎左衛門尉師頼申軍忠事
右、鎭西御下向最前ニ惣領近江(相良)守前頼同心致忠節之段、度〻彼仁言上畢、就中去八月十二日馳參肥後國水嶋(菊池郡)御陣、於菊池近陣(ママ)目野嶽以下所〻抽忠節、水嶋御陣御開之時、爲御諸勢(ママ)致散〻合戰之段御見知畢、次於肥前國所〻御陣、致宿直、自横大路小城御移之時、是又於後陣致合戰、至于當所塚崎在陣仕之条、爲御前上者、早賜　御證判、爲備向後亀鏡、言上如件、

永和元年十月十六日
「承了（花押）(今川了俊)」

## 五〇、今川滿範書狀

○九州史料叢書「禰寝文書」（二）所収

三ケ國人〻、多分於御方御志候之由、度〻依承候、罷下可申談之由、被仰候間、今日二日球摩郡人吉ニ下着候了、就其一向憑存候、一途急速御張行候者、可目出候、依御返事合戰次第、重可申談候、兼又面〻御中被進候状案文進候、隨御左右正文をハ可進候、委細使者可申候、恐〻謹言、

六月二日(永和二年)　　滿範(今川)（花押）
禰寝右馬助(久清)殿

## 五一、今川滿範書狀

○「鹿児島県史料」「薩藩旧記雑録前編」（二）所収

「藤野(秉尹)氏文書」

三ケ國人〻多分於御方御志候之由、度〻依被承候、罷下可申談之由被仰候(朱書)「相良近江守前頼領内也」□、今日二日、球磨郡人吉ニ下着候了、就其一向憑存候、一途急速御張行候ハ、可目出候、依御返事合戰之次第、重可申談候、兼又面

一所　同國球磨郡永里村　同跡
牧伯耆左衛門四郎分
一所　同國球磨郡久米郷西方下村田地拾町　三池兵庫助跡
一所　日向國三俣院南方内田地貳拾淶町肥後國高橋郷内早瀬小中嶋田地參町
野口平次入道分
一所　日向國嶋津庄北郷内田地貳拾町同國眞幸院西郷内田地淶拾五町
齋藤十郎分
一所　肥後國隈庄内有安名田地伍町　佐伯六郎左衛門尉跡
一所　肥前國佐賀郡内田地伍町　安徳古河小太郎跡　同郡田地伍町　安徳庸丸跡　同國大田庄内田地伍町　牟田部眞如房跡
一所　筑前國穂波郡内大豆田村地貳拾伍町　武藤大豆田小五郎跡　同郡内河津村田地貳拾伍町　河津三郎太郎跡
（湯）温浦四郎次郎分
一所　肥後國葦北庄内湯浦田地貳拾町
山田左衛門次郎分
一所　肥後國八王寺庄内大崎太郎跡田地參拾町同國六箇庄内福富上野彦三郎入道跡田地五町同國上嶋彦八跡田地五町同國鹿子木東庄内弘生又三郎跡亀井田地五町筑前國長淵庄内秋山源八跡田地五町
一所　同國江田村田地貳拾町　江田太郎跡
平河小三郎分
一所　日向國三俣院南方内田地拾五町
税所孫兵衛尉分
一所　同國三俣院南方内田地拾五町
蕁田了仙房分
一所　同國眞幸院西郷吉田村田地拾町　畠地山野可依田數
右、任正文之旨、注文注進如件

## 四六、斯波氏經軍勢催促狀

○『鹿児島県史料』「薩藩旧記雑録前編」（二）所収

「寫在椛山源三郎久清」
（菊池）武光以下凶徒退治事、一族相共ニ、自肥後國球麻郡、令發向菊池陣、可致忠節之狀如件、
（朱書）「南朝正平十六年」「辛丑」
康安元年十月十六日　（朱書）「斯波氏經」
左京太夫判
（朱書）「資久」
嶋津三郎右衛門尉殿
「此書、樺山家元祖資久譜中ニ在リ」

## 四七、相良前頼同氏頼連署契狀

○大日本古文書家わけ第五『相良家文書』（一）一七〇号

契狀
右、（定頼）おやにて候もの丶時も、一そくたちにむけたてまつり候て、（疎義）そきを存せられず候し程ニ、めん〳〵御志よそんもとうへんよ候き、前頼又そのむねを存へく候あいた、けい狀までもあるましく候へとも、いまの世上のてい、昨日にけふハかはるさほうに候、庄内においても、ふりよのたくみをなす仁もあるへく候あいた、如此かたく申さため候

相良遠江(定頼)守分

一所　肥後國球磨郡永吉庄半分百七十五町五百石　三百貫　□(平)河左近允賴尚跡

一所　日向國嶋津庄北郷百六十町三百石　加弁分定　上杉左馬助殿跡

一所　肥後國球磨郡人吉庄北方半分田數土貫同前

一所　日向國眞幸院内田地淖拾五町百五十石　上杉左馬助殿跡

一所　肥後國球磨郡久米郷西方上村三十五町八十石　三池兵庫助妻女跡

一所　日向國飫肥北郷弁分同國嶋津庄北郷弁分

同六郎分今者出家

一所　肥後國球磨郡久米郷西方下村田地拾町三十石三池兵庫助跡

一所　日向國三俣院内南方田地肆拾町

同孫次郎分

一所　肥後國球磨郡久米郷西方下村内田地拾五町　三池兵庫助跡

一所　日向國三俣院南方内田地肆拾町

同孫四郎分今者出家

一所　肥後國球磨郡久米郷西方下村内田地拾町　同跡

一所　日向國北郷南方内田地拾五町　上杉香松丸跡　除先給

一所　同國三俣院南方内田地貳拾町

同左京亮分

一所　日向國三俣院南方内田地伍拾町

同彦三郎分

一所　同國同院田地參拾町

同彦四郎分

一所　同國同院田地拾五町

同一族等討死分

同式部丞跡

一所　肥後國球磨郡久米郷東方橘遠江入道跡田地貳拾町

一所　日向國三俣院南方内田地參拾町

同木公左衛門尉跡

一所　肥後國球磨郡久米郷東方橘遠江入道跡田地貳拾五町

一所　日向國財部郷田地貳拾五町

同中務丞跡

一所　肥後國球磨郡久米郷東方橘遠江入道跡田地拾五町

一所　日向國三俣院南方内田地貳拾五町

同新三郎跡

一所　肥後國球磨郡久米郷東方橘遠江入道跡田地拾五町

一所　日向國財部郷田地拾五町

須惠彦四郎跡

一所　肥後國球磨郡須惠庄三分壹田地肆拾五町

平河又三郎分

一所　日向國眞幸院引田貳拾町賴尚跡

一所　同國三俣院南方内田地伍拾町

木野太郎左衛門尉分今者出家

一所　肥後國球磨郡久米郷西方下村田地拾町　三池兵庫助跡

一所　日向國三俣院南方内田地拾五町

岡本又次郎分

一所　肥後國合志郡内高永田地拾五町　永里彦次郎跡加庶子

之間、致散々合戦、追歸御敵、令警固神嶽要害、同十一月十二日椿忠隈御合戦之時、被疵右足甲失目、同廿四日宰府合戦之時、自峯藥師堂追籠浦城之刻、於竹曲御目前左小手失目其後浦城連日致合戦忠節畢、將又今年正月廿二日合戦之時、抽戦功、同二月二日菊池後攻合戦之時、致忠勤畢、然早預御證判、爲備後代亀鏡、粗言上如件、

文和二年二月　日

「承了（花押）」

## 四三、島津氏久軍忠状

○「鹿児島県史料」「薩藩旧記雑録前編」（一）所収

「氏久公御譜中」（朱書）『』

「写有之」

「朱カキ」「愛甲関屋両人御脚力持上、大隅殿御注進」

畠山修理亮直顯以下、爲佐殿方亂入大隅國之段幷國不審事、先日度々言上仕候訖、爰球磨郡凶徒須惠多良木以下輩、引合肥後國凶徒等、對于一色少輔孫三郎殿、致合戦候之間、爲合力馳參候之刻、畠山（直顯）匠作得此折、可寄來當城東福寺幷隅州下大隅城・眞幸院之由、自方々依告申、致用意最中候、合戦之後重可令言上、以此旨、可有御披露候、恐惶謹言、

（朱書）「当正平九年」「甲午」

文和三年九月十八日　　左衛門尉氏久上

進上　御奉行所

## 四四、島津師久軍忠状

○「鹿児島県史料」「薩藩旧雑録前編」（一）所収

「載于南山巡狩録追加」

薩摩國凶徒和泉庄名主知色彦三郎入道行覺之城塀於追落、入替御方軍勢、於彼城踏之候段、以去六月十三日、令注進言上候訖、定令參着候哉、仍賊徒等寄來當所之城之由、承及候之間、去月廿二日師久騒越、令在城候、將又、當庄合戦之時分、同國宮方凶徒等、以之外蜂起之間、舍弟三郎左衛門尉令、鹿兒島郡東福寺城向合彼御敵等、致忠節候、且委細之旨、氏久令言上候訖、爰肥後國救（マヽ）摩郡凶徒須惠・多良木（柱帰）仁、同國凶徒菊池・内河以下致合力、一色少輔孫三郎殿、所被楯籠城塀寄來、合戦最中之由申候之間、薩州凶徒蜂起雖難時分候、先差進軍勢候訖、合戦之次第、定孫三郎殿可有注進候哉、以此旨、可有御披露候、恐惶謹言、

文和三年九月十八日　　左衛門尉（少脱カ）師久上

進上　御奉行所

「此文書、師久公御譜中案文在閉本トアリ」

「愛甲（朱書）殿関屋殿脚力持上□文和三年十八到　判官殿和泉知色城披落御注進」

## 四五、相良定頼幷一族等所領注文

○大日本古文書家わけ第五「相良家文書」（一）一六一号

「一色（治裏書）殿御下文目録」

相良遠江守定頼同庶□等爲一色殿御配分令拝領所領等注文

相良六郎三郎（良氏）入道分　定頼之祖父、今者死去、　此所者本領内之、而先代之時被收公當御代申賜畢、

一所　肥後國球磨郡人吉庄北方半分五十町百石　此所者、定頼相續御配分狀之間、一円可拝領仕候

肥後國球磨郡人吉庄一分地頭稅所新兵衛入道宗円謹言上

欲早軍忠抜群上者被經御注進浴恩賞弥成弓箭勇子細事

副進

二通　宰府(少貳賴尚)御感御奉書　曆應三年正月十七日　康永元年十月六日

一通　御教書案　曆應三年十二月六日

二通　筑後彦次郎經尚一見狀　曆應三年八月廿八日　康永元年九月廿九日

二通　一色(範氏)殿御教書　曆應三年七月十一日　康永元年十月十六日

右宗圓、任御施行之旨、宜前馳參御方、建武三年正月六日押寄于菊池武重代官荒木左衛門次郎住宅、則追落後、同十日馳越日向國眞幸院、押寄肝付八郎兼重与黨城、致合戰之忠、追落彼城以來、令致數ケ度軍忠之条、御感御教書以下御覆勘狀明白也　大將軍(足利尊氏)家御下向之時者、諸軍勢等多以雖挿二心、於宗円者、爲御方致忠勤之間、此等子細永吉庄御代官新御領平六入道宗昌依令注進、忝下給　將軍家御判於彼狀之裏畢、次御上路(洛)之時、爲供奉、橋(橘)佐渡弥八公好相共、同年四月廿日打立球磨郡、同廿二日、於八代庄、對于内河彦三郎(飛驒)致合戰之刻自身、被疵之間、則公好令注進畢、就中、相良孫三郎(多良木)經賴、須惠、岡本、奥野、橋(橘)佐渡八郎以下凶徒等、令同心武敏、兼重、祐廣、内河等、打取當郡、構城塀、引入鎭西凶徒等、擬相從近國之間、**宗円一族相共楯籠山田城、致防戰之忠畢**、是併爲奉上、幷爲令全宰府御領也、軍忠爭可被順(准)余人哉凡至當郡者、爲無雙城塀之間、凶徒等令打取之者、輒依難被退治、如此捨身命、抽每度軍忠者也、爰曆應三年以來、相良縫殿允祐長罷成朝敵之後、於所々致合戰之忠、自身被疵之条、御教書幷御一見狀歷然也、仍郡内靜謐之条、偏宗円可謂無二之軍忠者歟(敷カ)、然早急速被經御沙汰(注進)浴恩賞、弥爲致忠勤、言上如件、

康永四年十一月　日

## 四一、平河貞家軍忠狀

○【熊本縣史料】中世篇（三）「平河文書」六号

目安

平河八郎貞家申軍忠事

右、去年十一月十二日筑前國椿忠隈合戰之日、捨(舍)兄平河三郎貞世討死畢、貞家被疵(右足甲被射)、且爲御目前戰上、同所合戰之仁等數輩見知之畢、加之同廿四日宰符(府)合戰之日、貞家追落峯藥師堂城、追懸凶徒等於竹曲、致無貳忠之間、被射左小手畢、是亦御前之戰也、其後浦城攻之間、及日夜合戰之上、正月廿二日合戰之時、亦抽戰功、同二月二日菊池後攻合戰之日致忠節畢、就中六月九日豐前國赤庄笠松凶徒退治之時、致忠節者也、將又八月七日宰符(府)凶徒等打入吉野之間馳向、及種々合戰、追歸御敵、令警固神嶽訖、抑貞家度々忠節之次第、几異于他者哉、尤預御證判、且被任御注進、爲浴恩賞、粗目安言上如件、

文和二年二月　日

「承了（花押）」

## 四二、平河貞家軍忠狀

○【熊本縣史料】中世篇（三）「平河文書」七号

平河八郎貞家申軍忠事

去年六月九日豐前國赤笠松凶徒御退治、同八月七日打入宰符(府)凶徒吉野

一所　肥後國球广人吉庄郡北方百二十町
一所　同庄南方經得常樂名十一町
一所　同方松延名十二町
一所　豊前國上毛郡成恒名十八町
右注文如件、

## 三七、牛屎元貞請文

○『大日本史料』第六編第六巻「新田神社文書」所収

就薩摩國新田宮（高城郡）執印友雄掠申、去二月廿九日御教書案文、六月五日御催促狀、七月廿日到來、拜見仕候了、抑世上動亂以後、元貞㝡前爲御方、京都天王寺御合戰之時、致軍忠之處、可下向鎭西之由被仰下之間、對于菊池・八代・内河幷求磨・多良木（經頼）以下輩、數ケ度合戰之刻、依薩州南郡凶徒蜂起事、守護人嶋津上總入道々（貞久）鑑被成御教書、下向以後、自去年八月合戰㝡中也、爲御敵退治、令相向之族沙汰事、合戰落居之程者、可閣之由、當時御沙汰定法之旨所承及也、仍元貞一族牛屎恩賞訴訟事、敵方申狀可被閣之由、爲治部兵衛大夫奉行人所有其沙汰也、所詮元貞雖相向合戰、蒙御免者、企上洛、彼干女訴之趣可申披候歟、不然者、南郡合戰落居之間、可被閣件謀訴候哉、以此旨、可有御披露候、恐惶謹言、

曆應四年七月廿五日　左衛門尉（牛屎）元貞請文（裏花押）

進上　御奉行所

## 三八、少貳頼尚奉書案

○大日本古文書家わけ第五『相良家文書』（一）一一五号

參御方被致軍忠者、本領事不可有相違、且子細可令注進京都候、仍執達如件、

康永二年七月廿日　大宰少貳（頼尚）在判

多良木因幡權守（經頼）殿

## 三九、相良經頼書狀

○大日本古文書家わけ第五『相良家文書』（一）一一六号

依忩劇、無音送年月候之条、實非本意候、

抑、少府（少貳頼尚）御狀、自河尻到來候之間、木上ニ自是雖可進候、不知案内之間無其儀候、自其早々可被進候、又向自分御奉書到來候、爲御心得、案文を寫進候、當城寄宿一族他人等面々ニ可賜少府御奉書之由申候、此樣木上ニ可被申候欤、此等之子細、尤以代官雖可申候、不知案内之間、御方申候之、

一橘遠江禪門去六月之比下着候、其も違儀あるましくに候、内々承候、委細定自彼方令申候欤其旨可有御意得候、毎事期後信候、恐々謹言、

八月三日　經頼（相良）（花押）

（切封ウハ書）　―　―

「到來康（異筆）（マヽ）二八四」

兵庫允（定頼）殿　經頼

## 四十、税所宗円申狀案

○大日本古文書家わけ第五『相良家文書』（一）一二〇号

「京都（湘夷書）注進狀案　そうゑんのふん」

税所新兵衛入道殿

## 三四、少貳賴尚施行狀

○大日本古文書家わけ第五『相良家文書』（一）一〇六号

肥後國球磨郡凶徒相良孫三郎經賴等退治事、去年十二月六日御教書如此、任被仰下之旨、可被存知此趣候、仍執達如件、

曆應四年正月十七日　　大宰少貳（賴尚）（花押）

相良孫次郎殿

## 三五、少貳賴尚施行狀

○大日本古文書家わけ第五『相良家文書』（一）一〇七号

肥後國球磨郡凶徒相良孫三郎經賴等退治事、去年十二月六日御教書如此任被仰下之旨、可被存知此趣候、仍執達如件、

曆應四年正月十七日　　大宰少貳（賴尚）（花押）

相良八郎殿

## 三六、相良祐長軍忠狀案

○大日本古文書家わけ第五『相良家文書』（一）一〇八号

目安

肥後國球磨郡相良縫殿允祐長軍忠次第

一祐長一族家督相良因幡權守（多良本）經賴（家）前參于御方、致連々軍忠者也、爰、祐長經賴令同心、以去年（興國元）三月廿三日、**太宰小（少）貳賴尚領永吉庄内山田城（賴尚代楯籠之）凶徒等追落、則楯籠祐長之處、賴尚甥筑後彦（經尚）次郎以下軍勢等差下、自同八月十日迄于廿日、致散々合戰之刻、祐長親類若黨、或討死、或被疵了、雖然、依爲兵粮難儀、引退後城、經賴一所城楯籠了、是等之次第、經賴相共抽忠勤之間、被存知者也**

一以同年六月十四日、當郡人吉庄村山、於爲用害、經賴子息大學允（賴直）以下若黨、祐長愚息木（差遣）工左衛門尉（賴藤）三郎兵衛尉（賴房）以下軍勢差遣、致度々合戰畢、

一以同廿日、原田城大宰小貳賴尚若黨以下凶徒等楯籠之間、押寄、致合戰、焼拂了、

一以同年十一月廿六日、經賴幷小田六郎二郎眞成祐長令同心、西村東方城押寄、追落同所、楯籠小牧城之處、以翌年正月廿二日、當郡区徒等寄來、致合戰之刻、御敵植田又次郎子息增房丸若黨九郎三郎孫九郎、植田孫二郎入道代大炊介二郎、相良兵庫允定賴若黨税所彦四郎、小田二郎種成若黨松垣孫六、小田新三郎若黨野里弥四郎以下數十人討留了、

一御方軍勢、祐長扶持人數十人、或被疵或被討畢、其外御手負死人雖有之、面々注進之間、不及委細、仍如此致連々軍忠之段、經賴存知之上者、不可有其隱者也、祐長本領等者、爲御敵兵庫允定賴（祐長甥）悉被押領了、然早任注文、對祐長被成下安堵　綸旨、爲奉待憲政之御代、恐惶言上如件、

興國二年壬四月廿八日

祐長本領注文

一所　肥後國球广人吉庄北方百二十町

曆應三年九月廿日　　藤原（筑後權尚）（花押）

相良孫次郎殿

## 二九、相良定長軍忠狀

○大日本古文書家わけ第五『相良家文書』（一）一〇二号

肥後國球磨郡人吉庄一分地頭相良孫次郎定長申軍忠事

□（二）多良木經賴幷祐長已下凶徒等爲誅伐、大將御發向之間、八月六日馳參荒猪（マヽ）倉城、迄木枝城令供奉訖、同日馳向村山城、所追落凶徒畢矣、

**一祐長已下凶徒楯籠山田城之間、自同九日押寄彼城、日別致合戰、同十九日夜追落賊徒畢、**

一同廿五日多良木村御發向之時、令供奉、自廿五日迄廿六日、抽忠節畢矣

右度々軍忠郡（脱）之上者、預御一見狀、爲備後證、言上如件、

曆應三年九月廿八日

「承了（證判）」（筑後權尚）藤原（花押）

## 三〇、相良景宗軍忠狀

○大日本古文書家わけ第五『相良家文書』（一）一〇三号

大隅國御家人相良八郎景宗申軍悟事

一多良木經賴幷祐長已下凶徒爲誅伐、大將御發向之間、八月六日馳參荒狩倉城、迄木枝城令供奉訖、同日馳向村山城、所追落凶徒畢、

**一祐長已下凶徒楯籠山田城之間、自同九日押寄彼城、日別致合戰、同十九日夜追落賊徒畢、**

一同廿五日多良木村御發向之時、令供奉、自廿五日迄廿六日、抽忠節畢、

右度々軍忠抜郡（脱）之上者、預御一見狀、爲備後證、言上如件、

曆應三年九月日　　藤原景宗

「承了（證判）」（筑後權尚）藤原（花押）

## 三一、少貳賴尚奉書

○大日本古文書家わけ第五『相良家文書』（一）一〇四号

肥後國球磨郡**永吉庄木枝山田已下所々城墎警固事**、殊所感存也、多良木經賴祐長等重可打出之由、有其聞、可被抽軍忠候、仍執達如件、

曆應三年十二月十日　　大宰少貳（賴尚）（花押）

相良孫二郎殿

## 三二、少貳賴尚奉書

○大日本古文書家わけ第五『相良家文書』（一）一〇五号

肥後國球磨郡**永吉庄木枝山田已下所々城墎警固事**、殊所感存也、多良木經賴祐長等重可打出之由、有其聞、早可被抽軍忠候、仍執達如件、

曆應三年十二月十日　　大宰少貳（賴尚）（花押）

相良八郎殿

## 三三、少貳賴尚施行狀

○大日本古文書家わけ第五『相良家文書』（一）九三号

肥後國球磨郡凶徒相良孫三郎經賴等退治事、去年十二月六日御教書如此、任被仰下之旨、可被存知此趣候、仍執達如件、

曆應四年正月十七日　　大宰少貳（賴尚）在判

相良縫殿允祐長事、令同意多良木孫三郎經賴已下凶徒、**楯籠肥後國永吉内山田城之由**、相良兵庫允定賴所注進也、一族相共、不日馳向彼所、可被致軍忠、仍執達如件、

曆應三年六月廿四日　　沙弥（花押）（一色範氏）

相良六郎三郎殿（長氏）

## 二四、一色範氏軍勢催促状

○大日本古文書家わけ第五『相良家文書』（一）一六二号

同
相良縫殿允祐長事、令同意多良木經賴以下凶徒、**楯籠肥後國永吉内山田城由**、相良兵庫允定賴所注進也、一族相共、不日馳向彼所、可被致軍忠、仍執達如件、

曆應三年六月廿四日　　沙弥御判

相良孫次郎殿

## 二五、筑後經尚遵行状

○大日本古文書家わけ第五『相良家文書』（一）九四号

多良木經賴幷祐長已下凶徒等誅伐事、任御奉書之旨、可被致軍忠候仍執達如件、

曆應三年八月六日　　藤原（花押）（筑後經尚）

相良八郎殿（孫次）

## 二六、税所宗円軍忠状

○大日本古文書家わけ第五『相良家文書』（一）九九号

肥後國球磨郡人吉一分地頭税所新兵衛入道宗円申軍忠事

一多良木經賴幷祐長已下凶徒爲誅伐、大將御發向之間、八月六日馳參荒狩倉城、迄木枝城令供奉訖、同日馳向村山城、所追落凶徒也、

**一祐長已下凶徒楯籠山田城之間、自同九日押寄彼城、日別致合戰、同十九日夜追落賊徒畢矣、**

一同廿五日多良木村御發向之時、令供奉、自廿五日迄廿六日、抽忠節畢矣右度々軍忠抜郡（群）之上者、預御一見状、爲備後證、言上如件、

曆應三年八月廿八日　　沙弥宗円

「承了（證判）」藤原（花押）（筑後經尚）

## 二七、筑後經尚奉書

○大日本古文書家わけ第五『相良家文書』（一）一〇〇号

肥後國球磨郡**永吉庄山田城落人相良縫殿允祐長已下凶徒等事**、令散在郡内之由、有其聞、早隨于見合、可被誅伐候、仍執達如件、

曆應三年九月廿日　　藤原（花押）（筑後經尚）

相良兵庫允殿

## 二八、筑後經尚奉書

○大日本古文書家わけ第五『相良家文書』（一）一〇一号

肥後國球磨郡**永吉庄山田城落人相良縫殿允祐長已下凶徒等事**、令散在郡内之由、有其聞、早隨見合、可被誅伐候、仍執達如件、

打取當郡、構城槨(郭)於郡内、引入鎭西凶徒等、相從近國、疑(擬)令蜂起之間、定賴自㝡前毎度致軍忠之上者、捨命存(今更難不能言上)御方之条勿論也爰(凡)凶徒者大勢也、**定賴僅雖爲小勢、相分于二手、籠置親類若黨等於山田城、致散々防戰、**定賴者則押寄于後巻、如元追籠凶賊於木枝城畢、是併云奉爲上方、依爲少府御領也、軍忠爭可被順于余人哉、凡至于當郡者、爲無雙城槨之間、爲凶徒等於被打取者、輙依難被退治、如此所令致度々忠勤也、仍郡内靜謐之条、偏可謂鎭西第(無二)一軍忠者哉、此等次第依達于上聞、連々非啻預御感御教書、自一色(範氏)殿返給本領北方半分地頭職畢、御分國闕所事、雖爲御計、且依無二忠功、且任由緒之旨、預御注進之条、併可爲御芳志、將又爲御分國平均法之上者、爲恩賞不足分、一族經賴幷庶子等跡預給之、弥抽忠節、爲成向後之勇、粗言上如件、

建武五年八月　日

## 二〇、相良蓮道長氏讓狀

○大日本古文書家わけ第五『相良家文書』(一)八七号

讓与　嫡孫兵庫允定賴所

肥後國球磨郡人吉庄北方田地在家幷山河野狩倉等地頭職事

右所領者、蓮道重代ゑんりうやうたるうゑ、恩賞としてあて給畢、しうるあいた、先日子孫等ニはいふんせしむるところに、子息縫殿允祐長凶徒相良三郎經賴同心之たん露顯之間、きせ(義絶)つせしむるによて、**去三月廿二日當城をとりいて、永吉庄山田城ニたてこもる上者、**野心之たん子細なきあいた、先日讓与ところの田地在家をくいかへ(悔返)して、嫡孫定賴に讓与ところなり、子息与三以下庶子等の分をのそきて可知行也、もし又すけなか御方をいたさハ、定賴うはうらひとして、先日のゆつりの内、はふん(半分)を祐長にさるへし、仍爲後日、讓狀如件、

曆應三年卯月廿五日　沙弥蓮道（花押）

## 二一、少貳賴尚軍勢催促狀

○大日本古文書家わけ第五『相良家文書』(一)八八号

相良孫三郎經賴内河彦三郎義眞已下凶徒等、打出肥後國球磨郡永吉庄、及合戰之由、今日十九日所馳申也、早相催一族等、可被致軍忠候、仍執達如件、

曆應三年六月十九日　大宰少貳(賴尚)（花押）

相良孫次(定長)郎殿

## 二二、少貳賴尚軍勢催促狀

○大日本古文書家わけ第五『相良家文書』(一)八九号

相良孫三郎經賴内河彦三郎義眞已下凶徒等、打出肥後國球摩郡永吉庄、及合戰之由、今日十九日所馳申也、早相催一族、可被致軍忠候、仍執達如件、

曆應三年六月十九日　大宰少貳(賴尚)（花押）

税所(景宗)八郎殿

## 二三、一色範氏軍勢催促狀

○大日本古文書家わけ第五『相良家文書』(一)九〇号

里・岡本以下輩退治事、今月十七日御教書如此、不日相催一族、屬今河藏人大夫(助時)殿御手、可被致軍忠候、仍執達如件、

建武三 十一月十八日　　宣隆（花押影）

榊源二郎殿

「さかきのちやうせんさいそくしやう」(奥端書)

## 一七、一色範氏感状案

○大日本古文書家わけ第五『相良家文書』（一）一六二号

度々軍忠、尤神妙恩賞事、急速可有其沙汰也、仍執達如件、

建武四年七月十八日　　沙弥御判

相良孫次郎殿

## 一八、一色範氏軍勢催促状

○大日本古文書家わけ第五『相良家文書』（一）一六二号

肥後國球磨郡多良木孫三郎經頼以下凶徒蜂起、既及合戰云々、早令下國、可加誅伐、仍執達如件、

建武四年七月廿六日　　沙弥御判

相良孫次郎殿

## 一九、相良定頼申状案

○大日本古文書家わけ第五『相良家文書』（一）八二号

六郎[redacted]謹言上(三郎入道遠道カ)

肥後國球磨郡人吉庄地頭相良兵庫允定頼謹言上

欲早參㝡御方致且依抽度々軍忠上者預御注進且令拜領將軍家御下文備將來亀鏡弥成弓箭勇本領當庄北方半分地頭職事

副進

二通　將軍家御教書　建武二年十一月二日　催一族可參御方由事

一通　宰府御施行　同年十二月廿二日(マヽ)

一通　同御覆勘狀　同三年二月七日

一通　生虜飯尾五郎兵衛入道請取　同年二月十日

一巻　着到　同年三月八日

三通　一色殿御感御教書

一通　御感御教書　建武四年正月廿日

一通　小府御感御教書

一通　一色殿御下文　建武四年二月七日

一通　人吉庄本御下文案　元久二年七月廿五日

右、定頼任御教書幷御施行之旨、㝡前參于御方、以去々年建武三正月六日追落(押寄子)菊池肥後守代官荒木左衛門次郎住宅、則追落之訖、同十日馳越眞幸院致合戰刻、生虜肘(肘)付八郎兼重親類飯尾五郎兵衛入道、以來度々令致軍忠之條、御感御教書以下覆勘狀等明白也、次將軍(足利尊氏)鎭西御下向之時、軍勢等大略雖揺二心、於定頼者、爲御方致、忠勤之間、依永吉平六入道宗昌注進、忝下賜　將軍家御判於着到之裏畢、次御上洛之時、爲供奉、橘佐渡弥八公好同心仁、以建武三年四月廿日罷立球磨郡、同廿二日於八代庄、對于内河彦(義眞)三郎致合戰之刻、親類若黨等數輩、或被討或被疵間、公好則令注進畢、就中相良孫三郎經頼(多良木)、須惠、永里、岡本、奥野、橘佐渡八郎以下凶徒等、令同心于武敏(菊池)、兼重、祐廣、内河等、

田帳、承久・暦仁目錄雖有地頭所見、文永相論之時不進覽云々、是又彼圖田帳等地頭所見、御沙汰御(マヽ)及汰了、而披帳(被カ)等者非私狀、依被置國衙可被召之由、就申之、當越訴之刻、長田左衛門尉奉行之時、仰鎭西被召正校案畢、仍長田左衛門尉跡見在之上者、被召渡彼狀等、欲蒙御成敗、是三、○次貞應御下文幷字事、觀蓮非地頭之上者枝葉云々、此条觀蓮地頭所見分明時者、不及子細、且道照所進地頭證跡之狀頼通也、隨而如載先段、建久等圖田帳、承久等目祿、雖有地頭文、所見無正文之間、不審之由、郡連(マヽ)非勘之間、被奇(棄)破弘安御下知之上者、彼狀等正文進覽之時者、宜依此一段之間、尤欲被召出之、加之右大將家御下文御敎書・遠景施行・大番勤仕御敎書・年貢所濟返抄・次第手繼讓狀等、皆以地頭之支證前也、凡幷字有無事者、爲弘安御下知以前御沙汰之間、旁(劣)以其違目被載彼御下知、觀蓮等所給上之者、所詮弘安御下知与郡連(マヽ)非據御下相並兩通、被經御沙汰之上、理非可爲雲泥懸隔之間、偏仰賢裁、所詮、云行性所給非勘御下知、云行連非據、兩條被覆勘依違之篇、任法光寺殿代不易御下知、蒙御成敗爲散多年愁訴、恐々越訴言上如件、

## 一三、平河観覚書状

○大日本古文書家わけ第五『相良家文書』(一)五〇号

なりとミ(成富)名のてつき狀三通内
一通正應六年三月廿三日よりすゑ狀
一通嘉元三年三月廿三日藤原氏狀
一通徳治三年二月十九日ふちワらのうちの女狀

そちん(訴隨)三問三答狀幷つい志んの狀二通うけとり候ぬ〳〵、一日物かく物候ハて申ゟ候し、ふさと申たうりなく候、又この文書あつらへ申候人ハ、廿九日とゝれ候、御たいめん候て、おほセとんセさセ給候へき事候ハ、御こゑ候て、御物かとりあるへく候、あゝ事も〳〵又〳〵申へく候、恐々

九月廿五日　　觀覺(花押)

(異筆)「嘉暦二」

すミ殿

## 一四、左衛門尉源某知行充状

○大日本古文書家わけ第五『相良家文書』(一)六五号

肥後國人吉庄南方内永富(大王丸)刁岡(國貞)以上四ケ名、當年甲(成)一作所被宛行沙弥修善也、可存其旨之狀如件、

建武元年二月十五日　　左衛門尉源(花押)

## 一五、一色範氏軍勢催促状

○大日本古文書家わけ第五『相良家文書』(一)七四号

相(同)良孫三郎經頼以下凶徒、楯籠肥後國球磨郡内之間、所差遣橘佐渡弥八(公好)也、早相催一族、馳向彼所、廻誅伐計、致軍忠者、可有恩賞、仍執達如件、

建武三年九月十日　　沙弥(一色範氏)(花押)

相良孫二郎殿

## 一六、宣隆施行状写

○『大日本史料』第六編第三巻「榊文書」所収

肥後國八代庄(八代郡)幷球摩郡凶徒内河彦三郎(義眞)多良木孫三郎(相良經頼)・須惠入道・永

弘安六年御下知奥段畢、仍敵方所進地頭連暑(マヽ)狀四人名字分明之上者、限二人御下知之由、行連返答之條、希代珍事也、抑於被載某跡土御下文者、雖爲何十人、付于餘字、面々令知行所帶之條、古今通例也、何限道照理訴、及用捨御沙汰、可被奇損之哉、不便次第也、早一類六十余人烈訴御下知分明之上者、任不違期年記見文、欲被究理非淵底、

一、依郡連(マヽ)非勘、近衛中將實春朝臣与觀蓮(平河)于時良貞等相論之時、以良貞以下所給法光寺殿御代弘安不易御下知、就掠申侖前々司入道殿御代官行性、被奇破參差事

一、右永吉地頭名主職者、道照等先祖開發私領也、然間平河三郎師隆(高)平家逆亂之時、右大將家御代一旦雖蒙御勘氣、無苦之子細被聞食披、文治三年六月十六日安堵御下文云、早可令安堵之由可令下知云々、同年十二月三日遠景施行云、早任御敎書可被安堵云々子息平次郎師貞給京都大番御判御敎書令上洛、勤仕畢、自爾以來、至于觀蓮・道照以下、知行九十餘歲無相違、於當庄預所職者、大膳大夫廣元朝臣法名覺阿建久三年拜領之後、元仁二年讓与外孫近衛中將實春朝臣、給嘉祿元年安堵御下文、自建久至于建長年中、彼是六十餘歲被知行地頭預所各別畢、爰羽林實春、經知行年序二十八年之捧貞應御下文、永吉地頭職与西村爲一所之由、建長三年始致濫訴之間、觀蓮等番訴陳之刻、文永二年依被成非分御下知於羽林方、觀蓮以下之輩、屬越訴依申子細、羽林方所給文永御下知相違之篇、被經御沙汰、弘安六年七月三日預不易御下知畢、弘(巨細見)下知(安脫)、其後預所職者同年十月豐前々司景資給之、又地頭預所相並所務無相違、而景資滅亡之後、備前司入道殿御拜領畢、如彼弘安九年御下文者、肥後國球摩(マヽ)郡西村事、任先例可令領掌云々、而以彼御下文令押領永吉地頭職給之間、爲郡連(マヽ)奉行、良貞等一族六十餘人令合力、地頭預所各別之條、弘安六年御下知分明之由言上之處、郡連(マヽ)与行性引級結構之餘、不及弘安御下知文言、御沙汰理下書(盡)合御評定、如郡連返答者、當庄者平家沒收之地、建久三年廣元朝臣一円拜預畢、觀蓮曾祖父師隆地頭之由雖申也、平家以前者不可有地頭之号、師隆所給文治三年幷遠景施行之御下文、師隆其身御免許也、大番勤仕御敎書者、爲望所領掠給之歟、建久・建保圖田帳、承久・曆仁目祿等者、雖有地頭所見、不審之上、文永二年相論之時、不進覽之、次貞應御下文幷字有無事、雖引賀來又次郎入道念阿与羽林相論之例、非觀蓮地頭之上者、幷字有無枝葉歟、爲沒收之地、覺阿知行之條無子細、弘安六年被付于觀蓮等之條、相違云々、此條御沙汰參差見在也、其故者、先廣元朝臣建久三年地頭預所職於令一圓拜領者、爭經廿余歲、建保國御衙惣圖田帳仁、被載地頭・預所各別名字已後、承久・曆仁目録、地頭連暑(マヽ)狀各可令加判哉、且又地頭(裏脫力)所各別之條、補任御下文等明鏡也、是一次郎師隆所給文治御下文者、限其身暇非所領安堵之儀云々、是又不限　右大將御下文、於安堵二字者、非所領者安堵所詮何事哉、所領安堵之條、古今之法也、隨而如遠景副下于御下文施行狀者、如元可令安堵(マヽ)首御下文幷施行狀久新(マヽ)同前、且同五年下給京都大番御敎書、子息平次師貞令勤仕畢、不安堵本領者、以何所可令大番上洛哉、爲望所領掠給御敎書之由、郡(マヽ)連申沙汰之條、非勘之至也、忝右大將家嚴重御判御敎書御下文、依郡連之浮言被奇(參)破之條、希代珍事也、是二次建久・建保圖

相神浦次郎入道妙蓮豊前國阿彌陀佛寺大通新開田地神實決院佛性田同前
倉上彌藤次兵衛入道豊前國賀テ入道正行跡青木別符田戸數

## 一二、平河道照申状案

○【熊本縣史料】中世篇（三）「平河文書」五号

肥後國御家人□(平)河彌五郎入道ミ照謹申
欲早爲明石民部大夫行蓮奉行被奇(寄)置理致越訴、且被召渡記□(録カ)依違篇□□(法カ)(ニ)光(ヲ脱カ)御代弘安六年不易御下知、且被直前奉行越中次郎郡(マヽ)(連脱カ)前ミ司入道殿御代官竹井二良右衛門入道行性引級非御裁(裁脱カ)許、依文治三年　右大將家御下文幷伊豆藤内民(天野)部大夫遠景施行、建久・建保・承久・暦仁圖田帳目祿各別相傳地頭所見状、幷蒙御成敗同國球磨郡永吉庄内中神・播瀬(磨カ)兩村地頭名主職越訴廿條之事、

副進

一通　右大將家御下文文治三年六月十六日師降可令安堵本領事、
一通　遠景施行状同年十二月三日
一通　同御代御判御教書同五年七月十七日爲京都大番可令上洛由事
二通　當國圖田帳要祿状建久八年建保四年
二通　承久・暦仁目祿預所代幷地頭加判由事
一通　貞永元年九月十一日(マヽ)領家方所進師長等良署状案
一通　御下知状弘案六年七月三日法光寺殿御代被成一門六十餘人中畢、(マヽ)
一巻　領家返抄状　年貢所濟事
一通　觀蓮陳状本名良氏、於幸符弘安八年番之、
一巻　次第證文及道照所帶譲状等
一通　御書下案御内越訴之時、被立道照等越訴、被遣當一番御引付畢、
一通　掃部入道幷備中牛王(マヽ)兵衛尉彼尋越訴相續篇状案、文保元六四、
一通　系圖

一、爲行連(二階堂)奉行被奇(寄)置理運越訴參差事、右子細去正應二年備前ミ司入道御殿代官行性与平河三郎入道觀蓮俗名良貞等、當庄内地頭名主職相論之時、郡連与行性引級之餘、被成非勘(行カ)御下知之間、去永仁年中屬于洒掃禪門道雄幷二階堂羽州方、道照等致越訴畢、其後惣越訴事、皆以被与奪御内之時、爲諏方(マヽ)左衛門入道直性于時在俗奉行執沙汰處、依爲理運越訴、被出御引付、當(行カ)御手、行連奉行之間、相待御裁(裁)之處、去年元亨(元)五月、如行連返答者、彼越訴不及理非御沙汰、其故者、如道照所進弘安六年御下知者、良貞・師時兩人名字之間、自余庶子等無烈訴所見、仍自文永二年近衛中將實春朝臣相論、至于弘安八年已廿一ケ年也、与御下知以前道照等無其沙汰、令違期年記之間、同月廿三日御評定之時、被奇(寄)置之云ミ、此條旁御沙汰令參差訖、先如弘安御下知端造(マヽ)者、良貞・師時等云ミ、如同御下知中段者、乍帶御下文、一類六十餘人令佗傺交山野、永削御家人名字事、生涯愁歎云ミ、良貞・師時兩人之下被置等字、且被書載一類六十餘人御家人佗傺之子細之上者、不漏六十餘(マヽ)軍之條、御下知炳焉也、凡任彼御下知状、六十餘人名可避与之處、良貞一向押領之間、庶子等又於幸符方面ミ番訴陳畢、備右□(下カ)弘安御下知以前烈訴之條、炳焉也、爭限良貞・師時之由、可及御沙汰哉、且如領家所進貞永元年九月師良連暑(マヽ)状者、中神村地頭良峯良高・目良生村地頭良峯師頼・平野村地頭良峯師久・地頭良峯師良云ミ、然者、彼状還爲地頭各別證文之由、被裁(裁カ)同

嶋津大隅大炊助長久法師肥後國相良領少卿入道跡

戸次二郎右衛門尉重秀法師□□人行地死去アノ重通跡

武藤五郎左衛門尉經平法師肥前國那久野村地頭職豊前ゝ司景資跡

竹井五郎入道豊後國岩手彦太郎跡

河邊次郎肥後國梁瀬宮提矢上孫三郎繼跡

次同勲功者

臼木七郎兵衛尉氏家子息ホ薩摩國庄嶋郷同職内十分一矢上孫三郎跡

米生又三郎種盛子息同前十分一

田尻次郎種宗子息同前十分一

同　三郎子息同前十分一

同　四郎種繼跡同前十分一

米生九郎種有子息同前十分一

矢俣兵衛尉跡信成子息同前十分一

野中左衛門三郎宗通法師同前十分一

香西又太郎定度跡同前十分一

田尻輔房親賀子息河邊孫二郎配分跡十丁

斑嶋又太郎跡神崎庄(肥前國)配分残十丁

此外薩摩守護人跡御敎書一通

去年岩門合戰勲功人事

武藤四郎右衛門尉盛資筑後國竹井庄領家職

薩摩太郎左衛門尉盛房壹岐瀬戸浦預所職

筑前國御家人野介次郎右衛門入道ゝ蓮筑前國(御笠郡)水城村水城左衛門尉跡

江戸民了六郎景忠豊前國安吉ゝ久ゝ光三ケ所兵庫次郎兵衛尉跡

白石美野又次郎通繼肥前國松浦庄内甘木村兵庫馬三郎能範跡

土ゝ呂木又六家直肥前國松浦庄内石垣村同跡

小濱彌藤三郎幸爲筑前國下座郡内燈油田畠武藤四郎左衛門尉跡

神田五郎糺筑前國乙犬丸三分一筥崎執行職成直跡

綾部左(右)衛門三郎重幸同三分一同前

土ゝ呂木四郎左衛門入道爲能同三分一同前

同七郎家基筑前國蒲田別符倉永名

相神兵衛六郎家弘筑前國那珂東郷岩門十分一金田六郎左衛門尉跡

住吉神主佐伯政秀同前

多比良五郎入道尊聖同前

斑嶋左衛門三郎同前

塞永井(水)源三郎同前

青木九郎頼—平字有憚同前

三原八郎種能同前

八樂彌藤次郎重俊同前

打橋平内左衛門尉泰幸同前

古飯三郎兵衛入道同前

松浦次郎延肥前國松浦庄内加ゝ良嶋田在家兵庫馬二郎跡

古飯次郎資景筑後國三毛庄北郷内田在家永利二郎見衛尉重時跡

打橋越前法橋能賢筑前國大垣小本入道種阿光利買地等　後家明藤次

會禰崎經彌(淡路)法橋慶增豊前國佐野次郎丸兵庫馬二郎兵衛入道跡

宇良金崎次郎入道ゝ眼豊前國東濱田地同前

田中七郎入道善光豊前國時紀名田地同前

肥後國球磨郡内永吉西村地頭職事、任外祖父沙彌覺阿讓狀、可爲近衞侍從御沙汰云〻、取詮、如同所帶貞永元年九月師良等連署起請文案者、領家方年貢爲請所、不可致未進對捍云〻、取詮、如同所帶建長五年十二月(平河)良貞狀案者、領家年貢任承(久脫力)目祿帳之旨、無懈怠可致沙汰云〻、取詮、以和字模漢字、者、件永吉者、師高爲相傳私領知行之處、平家逆乱之時、聊雖蒙御勘氣、文治三年給御免狀、如元令安堵之後、子息師貞爲大番上洛之由、同五年給御狀御判在畢、知行永吉之条、無異儀歟、是一、次如良貞所進建保四年當國惣圖田帳案者、永吉地頭師貞、西村地頭須惠小太郎家基云〻、師貞地頭之条明鏡也、是二、次如同所進承久・曆仁檢注目祿帳等者、良貞親父師良爲地頭所御代相共加判形畢、而彼目祿帳等、或切繼年号之在所、或位署墨付錯亂申事、封繼目裏上位署墨付、非指入筆之間、不能其難歟、仍預所地頭各別顯然也、是三、次文永御沙汰之時、預所代帶師良良貞不可敵對預所之由雖申之、如彼狀者、爲請所(マヽ)預家歟、年貢不可有懈怠之旨載之依請所狀、何憚敵對哉、其上可任承久目祿帳之由書載之間、還爲地頭各別之證文歟、仍預所地頭各別知行之条、無異儀歟、而就貞應・嘉祿(マヽ)御下文等、預所代雖申子細、加覺阿給建久三年本御下文者、非地頭職之、且貞應御下文知者、依須惠後家事、被成下之間、爲永吉内西村事歟、嘉祿御下文者、就覺阿之讓被成下畢、如彼讓狀者別讓、建久三年預所職御下文歟、無永吉地頭職所見之間、同爲西村地頭職事之条、無異儀歟、隨嘉祿於被給永吉地頭職者、爭曆仁目祿帳師良爲地頭可加連判哉、旦永吉下仁無幷字之間、貞應嘉(祿脫)御下文共以非永吉地頭事之条顯然也、如良貞所帶文治五年御狀者、今安堵本領之条、無異儀歟、隨良貞代〻爲地頭事、目祿帳等分明也、如覺阿所給御下文者、被除永吉地頭職之由所見也、仍先御沙汰之趣令依違之由、良貞等所申旁非無其謂、然者於永吉地頭幷名主職者、宛給替於當給人、如元可被返付于良貞等也者、依鎌倉殿仰、下知如件、

弘安六年七月三日

駿河守平朝臣(北條貞時)在御判(マヽ)在御判

## 一一、恩賞配分注文

○九州史料叢書「薩摩比志嶋文書」所収

(前欠)

關(東)□要(須力)□之仁者、可□(下力)遣子息親類、其外者、自身下(可脫力)向之由□(被)定了、而未下向之輩有之云〻、可令注申之由、同可相觸守護人

弘安九年潤十二月廿八日

一　守護人

遠江前司時定(北條)肥前國高木西鄉山田庄(高來郡)領家惣地頭兩職

大宰少貳入道淨惠(經資)筑前國三宅小鄉(北力)預所職

大友兵庫入道〻忍(頼泰)筑前怡土庄志摩方三百町惣地頭職

一　爲宗人〻

武藤四郎右衞門尉盛資筑前國療病寺幷同國極楽寺地頭職

薩摩前司入道尊覺豐前國上毛鄉内原井村・阿久封村、筑前國小山田村、金□(田)六郎左衞門尉時通跡

草野次郎繼永筑前國久重樂万地頭職、景資跡

白石六郎左衞門尉通武筑前國佐野次郎丸

渋谷河内權守重鄉法師木工助三郎入道々念跡筑前國今原號今井手地頭職

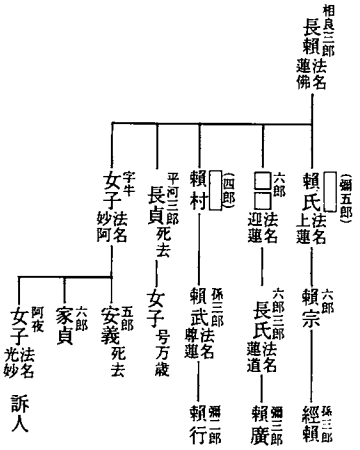
詫磨別當次郎時秀豐前〻司景資跡筑前國志土地頭職

八代相傳開發之地也、而曾祖父平河三郎師高右(源頼朝)大將家御時、文治三年給安堵御下文、伊豆藤内(天野)遠景令成施行畢、加之祖父師貞字有憚可勤仕京都大番之由、給御判御教書以來、親父師良相繼彼跡致奉公、前武州(北條泰時)禪門幷極楽寺(北條泰時)禪門御時、給數通御書畢、而師良彼所於建長二年讓与于良貞等畢、爰於彼所預所職者、大膳大夫(大江)廣元朝臣建久三年被拜領以後、至于嘉祿元年、地頭(領脱カ)所各別知行無相違、而近衞中將實春朝臣相繼廣元跡、自嘉祿元年至建長三年知行無相違之處、建長三年實春朝臣始依被押領地頭職、良貞致訴訟處、文永二年又被混領名主之間、迷是非者也、凡如廣元朝臣所帶建久御下文者、永吉于時三善幷西村可爲預(マヽ)預職云々、取詮、就幷字云、被知行兩所預職畢、而今實春朝臣所被出帶貞應・嘉祿御下文者、永吉内被宛西村御文下也、件西村者雖爲永吉内、給主各別地頭須惠尼令知行者也、依彼尼狼籍之咎、被召上西村畢、以件御下文被混領永吉之条、無道之由良貞等致訴訟之刻、實春朝臣被召上彼西村、賀來又二郎入道念阿拜領畢、件御下文云、肥後國永吉西村地頭職事、念阿以彼状、令知行永吉幷西村兩所之間、實春朝臣被申云、永吉西(内)村在之別之地也、仍永吉下仁幷字不被置、然者念阿拜領者西村計也、以彼御下文爭可令混領兩所哉云ミ、仍於永吉者、不能念阿知行之由、被仰下畢、然者念阿所令拝領之御下文与、被帶實春朝臣貞應・嘉祿御下文以同前也、何可有差別哉、實春朝臣日來非分押領、爲自稱者也、我欲令押領之時者、永吉与西村者稱爲一所之由、念阿仁被改補之今者、又兩所各別之由、以文治本御下文言上之条、變々申狀、仰御賢察、彼兩所地頭・預所知行各別之条、建久御下文分明也、其上廣元(大江)朝臣讓狀仁、爲預所職旨之明也、次付知行年紀、令安堵本所之例不可勝計、就中當所西村名主者、雖不帶御下文、依申披知行年序、令還住當所畢、不及尋例於他所者也、依實春朝臣之押領、良貞乍帶御下文等、一類六十餘人令佗傺、交山野、永削御家人名字事、生涯愁歎也、但難(難カ)無以(前)歩所帶、遣子息宰府、勸宿直事、著到無其隱、是隨分忠節也、可然者、任右大將家御下文幷相傳知行八十餘年々紀、返給彼永吉、欲令勤仕重代御家人役云々、爰如良貞等所進遣于遠景(天野)・盛時(平)六月十六日付文治三年奉書案者、平河三郎師高謀反勝他人由有其聞、然而冤罪程、給暇天所下遣也、早可安堵之由可下知也云々、取詮、如同所進遠景同年十二月狀案者、下球磨御領、可早任御教書、被安堵平河三郎(良貞)身事、右去六月十六日御教書今月三日到來、子細云々者、早任狀如本可令安堵云々、取詮、如同所進遣于遠景・盛時七月十七日付文治五年奉書御在判者、平河次郎師貞爲勤京大番所令上洛也云々、取詮、如同所進當國惣圖田帳建保四年条者、鎌倉殿御領五百町、預所大膳(大江廣元)大夫、永吉三百五十町、地頭良峯師高子息平河平二(師貞)、西村百五十町、須惠小太郎家基領云々、如同所進承久二年・暦仁二年永吉檢(注)濟目祿帳等者、地頭良峯師良云々、取詮、如同所進元暦二年・建永二年・建長二年代々手繼讓狀等者、職爲先祖相傳私領所讓與也云々、取詮、如同(前脱カ)御進年々預返抄等者、地頭爲年貢等弁濟之由所見也、如同進預所所帶建久三年八月御下文案者、肥後國球磨庄安富領内三善幷西村預所職事云々、取詮、如同所帶貞應三年正月御下文知案者、肥後國球磨郡内須惠莊是永依地頭須惠後家狼籍之咎被召其職畢、於將軍御領永吉西村者、假名千世松多年地頭知行各別地也、更不可有違亂云々、取詮、如同所帶元仁二年二月沙彌覺阿讓狀案者、別鎌倉殿御下文二通内、一通故大將(右脱カ)殿御時、給永吉西村云々、取詮、如同所帶嘉祿元年十一月御下文案者、

納所代藤井延重（裏花押）
政所平守員（花押）
沙弥蓮佛（相良水頼）（花押）

## 八、人吉庄刁岡名地頭職相傳系図　○【熊本縣史料】中世篇（三）「平河文書」二号

肥後國球摩（マヽ）群人吉庄南方刀（官）岡名地頭職支




建長四年三月廿五日

## 九、人吉願成寺檜皮用途日記　○【熊本縣史料】中世篇（三）「願成寺文書」五号

「人よし（裏書）の願成寺檜皮用途日記」

ちうしん、文永八年かのとの（ひつし）人よし（マヽ）のくわん上しのひわたようとうの日記の事

合

一　けいとく（経徳）上らく（京楽）　三十六丁五反
一　まつのふ（松延）　十九丁七反二、
一　つねつき（恒次）　十七丁四反
一　いなとミ（稲富）　十五丁四反二、
一　なりとミ（永富）　十七丁三、
一　とらをか（寅岡）　七丁二反二、
一　いぬとう（犬童）丸　七丁三反一、
一　いぬわう（犬王）丸　三丁五反
一　をとます（乙益）　六丁五反
一　たかハし（高橋）　丁八反
一　上むら　二十丁

以上百五十二丁五反　田別ニせ（段）に六文あて

以上せに九貫百五十文

右、ちうしん如件、

文永八かのとの（ひつし）年六月　日

そうくもん（惣公文）

上村田代二十丁八反四丈内（一脱カ）本（田）四十丁
私田十丁八反四丈　万眞房
寺田丁

## 十、関東下知状案　○【熊本縣史料】中世篇（三）「平河文書」四号

肥後國御家人平河三郎良貞・同四郎師時當國（中脱カ）球磨郡永吉地頭幷名主職事、

右越訴之趣、子細雖多、所詮如良貞等申者、件永吉地頭幷名主職者、

願成寺さうち（掃治）のために、みこゝろ（箕意原）のはらならひに
なしのき（梨原）はらのくわうやの事、
右、くたんのくわうやハ、寺さうちのため、かつハしや
う〳〵くわうやなり、地頭領家のまうさ（マヽ）うくうしをちや
うしして、かのてらのかいほつにしたかふへし、仍後々
しやうらいの證文のために、きしんするところくたんの
ことし、

仁治元年庚子壬十月廿一日

地頭沙彌蓮佛（永朝）

## 七、人吉庄起請田以下中分注進状

○大日本文書家わけ第五『相良家文書』（一）六号

（端裏書）「南方」

球磨郡人吉御庄

注進　本庄起請田出田新田地頭給田并在家苧乗山野江河狩倉等中
分事
合
兩方中立折堺、一方者南一方者北始自辰巳角、自南河毛大道行心房之垣根新山之
寺薗西大路下藤三郎前角（巳出田）打傍示竹野道下吉宗西水道之西角在傍示
長藤三之南垣實泉田道下前河之落合打上打傍示青井大宮司之北垣
根木佐木之綱手南角在傍示木落上綱手之北未（マヽ）在傍示貧鶴山之道上柿
木尾下萩尾西西端目在傍示小目代野道下赤坂之口在傍示安行溝上南
角打傍示同溝上限横大路石原町之頭在傍示比伊羅木之綱手中打傍示
奈良町之頭溝端在傍示棄原田尻在傍示下前河之端在傍示間村蓑毛者
北方也、但自打堅堺目南方内水田七丁四反一丈之公田并新田町二反
一丈有之而中分之間、依爲北方之田數減、所立入北方内也、件田坪
坪有之、常樂四反二丈　永富三反二丈　經徳三反三、　又經徳二反二、　恒行二反
三丈　得永丁二丈　綿丸四反二丈　恒行四反四丈　一万一丁三丈　石王丸
三反　永富二反　石王丸五反　得光七反三丈　有所所　是名寄坪付等調度之文
稲富四反　石丸六反　又新田丁二反一丈
抄、雖有別紙、依爲堺目、爲向後所立注彼田坪坪明白也、仍色色目
録事、

（中　略）

一　松延名貳拾玖町伍反肆丈内
起請田二十丁五反四丈
出田九丁
一　氏延名伍反貳丈巳起請田
一　豊永名肆反巳出田
一　永富名捌反貳丈内
起請田七丁九反四丈
出田八反三丈

（中　略）

右件田畠苧来在家并山野江河狩倉等中分間事、以五月十五日、當給人
之御代官調所七郎忠康共令見知、始自當所領東端、限西端他領永吉之
堺下前河、一方者南方、一方者北方、其兩方中立折、四至堺、所令打
三十一本之傍示之狀如件、

寛元貳年五月十五日　惣公文藤原眞憲（花押）
田所草部高元（花押）

## 四、肥後國球磨郡図田帳写

○大日本古文書家わけ第五『相良家文書』（一）二号

球摩郡（樹）二千丁
蓮花王院人吉庄六百丁
領家八條女院
預所對馬前司　清業
下司藤原友永　字人吉次良
政所藤原高家　字須惠小太良
地頭藤原季高　字合志九良
藤原茂綱
藤原眞宗　字久米三良
戸西妙
鎌倉殿御領五百丁
預所因幡大夫判官
永吉三百丁
地頭良峯師高子息字平
紀平次（不知實名）
須惠小太良家基領百五十丁
公田九百丁
豊富五百丁
地頭藤原眞家　字久米三良
豊永四百丁
地頭
藤原家基三百丁字須惠小太良
多良木村百丁没官領
伊勢弥次良（不知實名）
建久八年潤六月日

## 五、沙彌蓮佛寄進状

○『熊本縣史料』中世篇（三）「願成寺文書」三号

「くわうやのきしんしやう」（端裏書）（花押）（相良永頼）

（裏帖紙）十三通之内　蓮二通

寄進
願成寺爲掃治、箕意之原幷梨原荒野事
右、件荒野、爲寺掃治、且常〻荒野也、停止地頭領家万雜公事、可隨彼寺開發、仍爲後〻生來之證文、所寄進文如件、
仁治元年庚子壬十月廿一日
地頭沙彌蓮佛

## 六、沙彌蓮佛寄進状案

○『熊本縣史料』中世篇（三）「願成寺文書」四号

「みこゝろはらならひになしきはらきしんのあん」（端裏書）

（裏帖紙）十三通之内　蓮二通

寄進

## 一、良峯姓先祖書

○【熊本縣史料】中世篇（三）「平河文書」一二号

平城天王御子大納言正三位良峯朝臣安世任武藏守
桓武天王ノ孫長岡ノ御子良峯藏人頭宗貞四位兩少將宗貞
トモ云、御子兩九郎義方、御母七郎
荒田寺別當依高、御子四人、
深田太郎盛高　有智山寺建立之叓
**山田次郎東高**　仁平元辛未十月十八日卯時柱立三年
平河（懇）□領三郎師高　久壽元年移ル、師高建立也、
横瀬四郎高實
以上

良峯（花押）

## 二、良峯師高所領譲状写

○【熊本縣史料】中世篇（三）「平河文書」一号

平川三郎師高重代所領田數　注文
一所　肥後國求麻郡永吉庄之内横瀬十二町三十六石
一所　同郡永吉庄之内青山之村田地廿六町八十四石三十貫
一所　同郡同庄之内目田之村十四町五反三十九石十貫
**一所　同郡同庄之内山田之村田地四十町一反百十石五十貫**
一所　同郡同庄之内黑田之村田地三十九町五反百石四十貫
一所　同郡同庄之内原田之村田地廿七町四反四十九石三十貫
一所　同郡同庄之内深水六町三十九石
一所　同郡同庄之内をうかき田地八町二反□五石十貫
一所　同郡同庄之内平野之村田地十三町二反四十七石十二貫
一所　同郡同庄之内永池之村田地八町五反三十五石十三貫
一所　同郡同庄之内中神之村田地十九町五十六石二斗三十貫
一所　同郡同庄之内渡之村田地五町十九石九貫
一所　同郡同庄之内目良生之村田地四十町七反三百三十石六十貫
一所　同郡同庄之内深田之村之内田地五十町三百石五十貫
一所　同郡同庄之内河邊之村田地八町五十九石いた三百三十貫
一所　同郡同庄之内尾瀬之村さつし十束くす五升、いた五十
一所　同郡同庄之内高野瀬之村さつし廿束、あつかミ三帖、いた百、くす五升、
一所　同郡同庄之内五木之村さつし三百束、いた千五百、うるし三百、
一所　同郡同庄之内田代之村鹿かハ三枚、いた千、茶五十斤うるしつ、百五十、
一所　同郡同庄之内はしかミ之村鹿かハ三まい、いた五百九十、うるし二百五十、茶五十斤、
右於此村者（ミ脱カ）、師高希代相傳之私領也、然於譲嫡子師貞等訖、於子〻孫〻、無他嫡子（マヽ）可爲領知、自然沙汰之時者、此目録以（マヽ）可致沙汰之狀如件、
于時建久二年五月三日
永吉地頭良峯（平河）師高在判

## 三、高寺院弘法大師版木銘文

○山江村山田、高寺院所蔵

建久二年

前頼が弟氏頼と連署して、庶子「ながとみとの」宛に出した契状である。契状が、惣領から庶子宛にだされたものとして特色がある。

そして、この契状でこれまで一貫して北朝（武家）方であった下相良氏が南朝年号をはじめて使用している。宛名の「ながとみとの」は、後の山田城主永留氏と思われるが確証するには至っていない。

**四八**は山田・大王社神殿裏に建つ自然石の銘文である。年号は四七と同じで南朝年号が使用されており、興味がもたれる。大王社は地頭平河氏の霊社で、山田城の大手口に位置している。**四九**の平河師頼軍忠状では「惣領（相良）近江守前頼同心致忠節之段」と見え、同一行動をとっていることがわかる。

**五〇・五一**は今川了俊の末子満範が相良前頼を頼んで球磨郡人吉に下着したことを薩摩国の祢寝・伊集院氏へ報じている。同じく**五二・五三・五四・五五・五六**は、今川満範の下着を伝え「玖摩事一落居候」と球磨郡一揆が成立したことを禰寝氏に報じている。

**五七**はすでに相良前頼が日向国真幸院に到着し「一揆之軍勢悉不打寄候」と見えることから、一揆の存在が窺える。**五八**は日薩隅肥四ケ国の国人六一人が参加して成立した一揆契状神水案文である。球磨郡からは最も多い一〇人が参加している。

**五九**は今川了俊書状案で、これによると球磨郡国人小田氏の一揆参加には、上・下相良氏の了承が必要だとしている。

## 凡例

一、本書は「山田城跡」史料篇として建久二年（一一九八）より永和三年（一五八三）に至る文書・史料・金石文など五九点を収めたものである。

一、文書名は、原則として正文・案文・写などの別を示し、記録や後世の編纂物から採録したものは写しとした。

一、文書または年号が欠けた史料・金石文で年代が比定可能なものはその年代の箇所に挿入した。

一、原文には句点・並列点を加えられている、異体字・俗字・真仮名・変体仮名は、原則として正字・現行仮名に改めてある。

一、原文の摩滅虫損などは、字数を推定して□または［　］を以て示し、文書の首缺には「、尾缺には　」を以て示した。また原文の墨抹は■、その文字が読み得るものは、文字の左側にマを加えて、右側に書き改めた文字が加えられてある。

一、文字の缺落、誤字の場合は、推定可能の時は（　）内に編者の案を示し、当字などを元のまま示す必要がある場合は、（マヽ）と、また、本文中の人名・地名・社寺名などの説明、傍註の場合は（　）内に註を加えてある。

一、文書・史料・金石文の下に、それぞれ出典（刊本名）を〇で示し、所収番号・巻数を加えている。

一、史料篇の中で、編者が新たに加えた文字や文章には、その頭に必ず※を附して、本文と区別している。

いる。

文治三年六月十六日には、所領安堵の御下文が下され「下球磨御領」と記されている。この時点から鎌倉幕府の関東御領に組入れられたものと思われる。**十一**は、岩門合戦後の勲功人事についてである。

**十五・十七・十八**は、多良木の上相良孫三郎經頼以下凶徒が峰起したので、誅伐するように一色範氏が相良孫次郎宛に出した軍勢催促状とその感状案である。

**十九**は人吉の相良定頼申状案で、山田城が歴史に初めて登場する。これによると山田城のある山田村は「少府御領」で、定頼は少勢ながら山田城を死守していることがわかる。

**二十**は相良定頼宛の相良長氏譲状で、子息縫殿充祐長が上相良氏に同心し、永吉庄山田城に楯籠もったことなどが詳しく書かれている。

**二一・二二**は相良孫次郎定長、税所八郎景宗宛の少貳賴尚軍勢催促状である。**二三・二四**は相良六郎三郎長氏、相良孫次郎定長宛の一色範氏軍勢催促状である。**二五・二七・二八**は税所八郎景宗、相良兵庫充定頼、相良孫次郎定長宛の筑後経尚奉書で、これ以後、下相良氏宛の文書は定頼となっている。

**二六・二九・三〇**は税所新兵衛入道宗円、相良孫次郎定長、相良八郎景宗の軍忠状で、筑後經尚の証判を受けている。三通とも同一文面であるが月日が違っている。

**三一・三二**は相良孫二郎（定長か）、税所八郎景宗宛の少貳賴尚奉書である。**三三・三四・三五**は税所新兵衛入道宗円、相良孫次郎定長、税所八郎景宗宛の少貳賴尚施行状である。

**三六**は相良縫殿充祐長軍忠状案である。これによると祐長は下相良一族であるのにもかかわらず、家督は多良木の「相良因幡権守經頼」といっている。興国元年三月廿三日に、祐長は少貳賴尚代が楯籠もる山田城を奪取したが、賴尚の甥筑後彦次郎經尚などが八月十日に来攻し、廿日まで合戦、兵糧難儀のため引退したという。また相良定頼が祐長の本領を押領したともいっている。

**三七**は薩摩国牛屎院の地頭、牛屎元貞の請文である。**三八**は多良木の上相良因幡権守經頼を招く少貳賴尚奉書案で、**三九**は、三八の奉書を受け取ったことを人吉の相良定頼に報じたものである。

**四十**は人吉庄一分地頭税所新兵衛入道宗円の申状案で、これによると永吉庄御代官は「新御領兵六入道宗昌」であり、宗円一族は山田城に楯籠もって、南朝方を防ぎ、相良縫殿充祐長と所々で戦ったという。

**四一・四二**は直接は関係ないが、平河氏の動向を知る文として上げてみた。

**四四**は薩摩国の島津氏久軍忠状寫で、「肥後國球磨郡凶徒須恵・多良木」と見える。**四五**は一色殿（道猶か）から相良遠江守定頼同庶子等に宛行われた恩賞地のの所領注文である。この中に相良定頼分として「肥後國球磨郡永吉庄半分百七五町、平河左近充、賴尚跡」が見え、山田村が含まれていた可能性が強い。いずれにしても所領の多くは日向国水俣院・島津庄などといった広大な地を得ている。この文書は定頼が延文二年（一三五七）十二月十八日に遠江守に任ぜられているので、それ以降ということになる。

**四六**は島津資久あての斯波氏經軍催促状である。**四七**は人吉の相良

# 「山田城跡」史料篇

**解説**

この史料篇は中世城跡「山田城」と永吉庄山田村の支配に関する文書・史料・金石文などを編集したものである。収載範囲は鎌倉から南北朝時代までとし、主に山田城の位置付けとその歴史的背景を明らかにするものである。

史料集の作成に当たっては、大日本古文書家わけ第五『相良家文書』（東京大学出版会刊）・熊本県篇『熊本縣史料』中世篇（熊本県刊）・川添昭二編『祢寝文書』（九州史料刊行会刊）・平田　寛編『九州の中世美術―熊本・球磨地方美術調査概報―』（九州大学九州文化史研究施設刊）・瀬野精一郎編『九州地方中世編年文書目録』鎌倉・南北朝時代篇（吉川弘文館刊）・菖蒲和弘編『球磨郡中世編年文書目録』鎌倉・南北朝時代篇（私家版）・竹内理三編『鎌倉遺文』（東京堂出版刊）・瀬野精一郎編『南北朝遺文』九州篇（東京堂出版刊）・鹿児島県史料編纂所編『鹿児島県史料　旧記雑録前編（一・二）』（鹿児島県刊）・川添昭二編『今川了俊関係史料』（私家版）・上村重次編著『九州相良の寺院資料』（金輝堂書店刊）の恩恵に負うところが多く、必要に応じて人吉市に笹淵　格氏所蔵の相良家編纂物を参照し、現地踏査を行った。

なお、『祢寝文書』・『今川了俊関係史料』については、川添昭二九州大学教授に史料集の貸与の便宜を取り計らっていただいた。記して感謝申し上げたい。

**解題**

「山田村」が歴史上に登場するのは、鎌倉時代に入ってからであるが、球磨郡がどの所領に含まれ、誰が領主であったかを知る文書として番号（以下これを略す）一・二・四がある。

**二**によると山田村は「永吉庄」に含まれ、所領は「師高希代相傳私領」で、地頭職が良峯（平河）師高から、嫡子師貞に譲られている。

**四**は建久図田帳写で、永吉庄は鎌倉殿御領となり、地頭は「良峯師高子息字平　紀平次」とあり、師貞のことであろう。**一**は良峯姓先祖書で、これによると惣領は「平河」姓を名乗り、一族が分立している。先祖書に見える山田次郎東高とは、後に山田村地頭と伝えられる人物である。

**三**は山田・高寺院に所蔵されている弘法大師版木銘文である。

**五・六**は沙弥蓮佛（相良永頼）が、氏寺の人吉願成寺に箕意之原と梨原の荒野を寺掃治のため寄進したものである。箕意之原は「蓑原」と言われ今日、人吉市と山江村山田をまたぐ所にある。

**七・八・九・十三・十四**は人吉庄永留名に関する文書である。永留名は山田城主と伝えられる永留氏との関連が求められ、同時に平河氏も係わりあっている。人吉市鬼木町が比定地に考えられている。

**七**は沙弥蓮佛の所領であった人吉庄の半分が没収され、北条得宗領に組み入れられたとき、作製された南方半分の得分注進状である。文中の「永吉之堺下前河」とは、今日の万江川のことを示す。

**十・十二**は永吉庄の地頭名主職に関する関東下知状案、申状案である。これによると永吉庄は師高先祖の開発私領であったが、平家逆乱のとき、右大将家（源頼朝）から一旦勘気を蒙り永吉庄が没収されて

# 『山田城跡』 史料篇

割を果たした人物中、もっとも代表的なものは子息の今川満範である。『征西将軍宮』は了俊の末子とするけれども、拠る所を知らない」と疑問を投じられている。

## 注

（1）『熊本縣史料』中世篇三、「平河文書」所収、昭和40年・熊本県刊。以下、文書番号を（平一）と略す。

（2）昭和63年度　熊本中世史研究会例会報告。その後「肥後球磨郡の荘園公領制建久図田帳体制の成立――」、田村圓澄博士古稀記念『東アジアと日本　歴史編』所収、「肥後国人吉荘の成立と特質――服部英雄氏の批判に応えて――」、熊本大学『文学部論叢　史学編』二五号所収で言及しておられる。

（3）『大日本古文書家わけ第五　相良家文書』第一巻所収、大正6年3月・東京大学史料編纂所刊。以下、文書番号を（相一）と略す。

（4）『五木村学術調査　人文編（歴史）』八頁、昭和62年・五木村総合学術調査団刊

（5）平河氏に視点をおいた論文として池田公一「鎌倉幕府権力の浸透と九州球磨地方の対応――御家人平河氏の対預所相論を中心に――」、『東洋大学大学院紀要』十五別輯所収、昭和50年・同大学刊、がある。

（6）「九州諸国における北条氏所領の研究」三六一頁、竹内理三博士還暦記念会編『荘園制と武家社会』所収、昭和44年・吉川弘文館刊。

（7）「軍忠状の彼方に」三五頁、『史学雑誌』第八九編第七号所収、昭和五五年・史学会刊。

（8）（7）同論文の三六頁

（9）「相良氏と南九州国人一揆」二二頁、『歴史学研究』第五一四号所収、昭和58年歴史学研究会刊。

（10）球磨郡国人七人のうち姓不明の但馬守頼重・義武の二人について不明である。ただ、関連資料として「但馬守頼重」と刻んだ五輪塔が、球磨郡深田村の荒茂・勝福寺跡にある。また、梁瀬領十嶋山にある十嶋天満天神の「棟札ニ曰ク正平廿六年丁未再興、願主平ノ頼重」（『麻郡神社私考』所収）と見える。二人とも同時代の人物であることに注目し、同じ人物かそれとも平河・平氏のいずれかであった可能性が強い。もう一人の義武については不明である。

（11）（8）に先行する論文として川添昭二「今川了俊の南九州経営と国人層」、『九州史学』十号所収、昭和33年・九州史学会刊。

（12）球磨郡国人十人のうち、相良右頼・久米代為頼の所領・本貫地は不明である。ただ、右頼については上村氏が推測され、為頼については不明である。

## 参考文献


球磨郡教育支会編『球磨郡誌』、昭和六年・同支会刊。

川添昭二著『今川了俊』、昭和五九年・吉川弘文館刊。

杉本尚雄著『菊池氏三代』、昭和四一年・吉川弘文館刊。

瀬野精一郎編『九州地方中世編年文書目録』鎌倉時代篇、昭和五六年・吉川弘文館刊。

瀬野精一郎編『九州地方中世編年文書目録』南北朝時代篇、昭和五九年・吉川弘文館刊。

人吉市史編纂協議会編『人吉市史』第一巻、昭和五六年・人吉市教育委員会刊。

竹内理三編『鎌倉遺文』第一～三十八巻、昭和五六年以降継続・東京堂出版刊。

川添昭二著『中世九州の政治と生活』、昭和五六年・文献出版刊。

山口隼正著『中世九州の政治社会構造』、昭和五六年・吉川弘文館刊。

『一揆』全五巻、昭和五六年～五七年・東京大学出版会刊。

瀬野精一郎編『南北朝遺文』九州篇第一～三巻、昭和六〇年以降継続・東京堂出版刊。

池田公一編著『中世九州相良氏関係文書集』、昭和六二年・文献出版刊。

永原慶二著『大系日本の歴史』第六巻、昭和六三年・小学館刊。

少弐・宗体制懇話会編『少弐氏と宗氏』第一～十号、昭和五八年以降継続・同懇話会刊。

鎌倉末期に「少府御領」、南北朝時代には「太宰少貳賴尚領永吉庄内山田城」と見えることから、この時期の山田村は、少貳氏の所領で代官が現地に赴き、依然として地頭は平河氏であった可能性が強い。

さらに平河氏は北朝方であったと思われるが、そのことを裏付ける史料は何ら残されていない。しかし、永吉庄内が内乱の主な舞台であったことは注目する必要があろう。

球磨郡での南北朝の内乱を、大きく分けると

① 建武三年（一三三六）南朝方の上相良氏と球磨郡国人らの挙兵～興国元年（一三四〇）の筑後經尚の球磨郡下着まで。

② 興国元年（一三四〇）筑後經尚を大将にした北朝方の大攻勢により、山田城の落城と筑地原・木原合戦での勝利～康永二年（一三四三）の上相良氏・球磨郡国人らの北朝方帰順まで。

③ 観応元年（一三五〇）下相良氏の北朝方離反により、上相良氏の南朝方帰順～永和二年（一三七六）の今川満範の球磨郡下着まで。

④ 永和二年（一三七六）今川満範の下着により「一同之儀」（一揆）の成立。南朝方の嶋津氏久に対する神水契状に球磨郡から十人が参加～弘和三年（一三八三）下相良氏の南朝方帰順まで。

⑤ 弘和三年（一三八三）下相良氏の南朝帰順により一揆の解体。

これによって再び上相良氏・国人らとの対立激化。

以上、五段階に分けられ、上・下相良氏の対立に他の国人たちが加わる形で内乱が展開している。球磨郡では、南北朝の合一後も内乱に終止符が打たれず、室町時代へと持ち越された。

内乱の中で、「山田城」は北朝方の重要拠点の一つに考えられ、城を舞台に合戦が行われている。下相良氏が主に北朝方として戦っていることから、山田城が同氏の本拠地であった可能性は大きい。

その後も、下相良氏は一独立した国人として行動し、一族の所領拡大に務め、優越することに成功している。このことは後に戦国大名として相良氏が成長する上での基盤になったものと思われる。

以上のように、鎌倉期の山田村は永吉庄地頭平河氏と密接な関係にあり、南北朝期には、平河氏と結びつける文書は見出せない。むしろ人吉庄地頭・下相良氏の進出と同氏の山田城との関係が窺い知れる。これはとりもなおさず、永吉庄地頭平河氏の後退を示唆するものであろう。

（追記）成稿後、工藤敬一氏の「相良氏の肥後球磨郡支配――その始源を考える――」（安田元久先生退任記念論集刊行委員会編『中世日本の諸相』下巻所収、昭和63年・吉川弘文館刊）。川添昭二氏の「南九州経営における九州探題・今川了俊の代官」（『舊記雜録月報』10所収、昭和63年・鹿児島県歴史資料センター黎明館刊）が発表されたが、本稿では触れることはできなかった。

なお、工藤氏は論文の中で、「鎌倉幕府の成立にともない、球磨御領は全体として没官領とされ、郡内の中枢に鎌倉殿御領が旧平家得分を継承する形で設定され、それにともない球磨御領は、建久三年の半ばに人吉荘・鎌倉殿御領・公田の三つの所領に片寄せ再編成された」としている。

また、川添氏は「今川了俊の南九州経営に当たって代官としての役

近江守前頼　③相良参川権守右頼　④平川兵庫充師門　⑤須恵修理亮重宗　⑥岡本越前守頼季　⑦永里大和権守武綱　⑧宮原橘公冬　⑨久米代大膳亮為頼⑩奥野代源助景らで、一揆を結んだ国人六十一人の中では最も多い十人である。[12]

一揆の存続期間は不明であるが、南朝方は弘和三年（一三八三）四月十四日付けで征西将軍宮令旨（相一七六）を下だし、相良前頼の南朝方帰順を褒して、「玖麻郡内幷葦北庄」の領掌を安堵した。同日付けで菊池武朝施行状（相一七七）も下されたことで、下相良氏の、一揆からの離反・南朝方帰順が決定的となった。その後、嶋津・禰寝氏も南朝方に転じ、永和三年の一揆は崩壊寸前となる。

## 十六、下相良氏の南朝帰順と一揆解体

至徳元年（一三八四）の年末には「嶋津両人相良近江守八代加凶徒、去十一日二見陣軍勢等、悉可失」（禰五八八）とあるように、嶋津氏も南朝方に転じ、永和三年の一揆は崩壊した。

この間、球磨郡内の情勢は不明であるが、下相良氏は南朝方として肥後国隈庄の隈牟田城と天草の上津浦氏の城を攻めている。一揆解体後は、再び上・下相良氏の対立を激化させ、緊迫した状況を作り出した。このような中で下相良氏の前頼は元中八年（一三九一）二月十八日に

契約申候、右之意趣者、於多良木競望之事、不可有候、此旨偽申候者、奉仰候、阿蘇十二宮大明神之御罰ヲ、至子々孫々可罷蒙候也

という内容の契状（相一八六）を上相良氏の孫五郎宛に出している。このことにより下相良氏が、上相良氏に優越したことが窺え、他の国人に対しても優位に立つことができたものと思われる。

しかし、この時期の征西府・南朝方は各地で劣勢に立ち、衰退の途を辿っており、明徳二年（一三九一）八代の古麓城で合戦が行われた。七月には古麓も落城し、八代に在った良成親王は八代郡の高田、さらには矢部に御在所を移された。

元中九年（一三九二）十月廿五日、南朝の御亀山天皇が北朝の後小松天皇に神器を譲り、六十五年にわたる南北両朝の内乱に終止符が打たれた。しかし、球磨郡の内乱は、南北合一後も収らず、室町時代を迎えることになる。

## むすび

鎌倉時代の山田村は、文書から明らかなように「球磨庄安富領内三善」に含まれ、その後「永吉庄」と庄名を変えたことがわかる。

永吉庄は、平河氏の「先祖開発私領」で、鎌倉幕府の政権下では、「永吉地頭幷名主職」が安堵されている。一方、預所職は幕府の大江廣元から外孫の近衛中将實春に譲られ、その後、豊前々景資、備前々司入道と代わり、代官行性に至っては名主職まで混領してしまい地頭・平河氏と越訴中であったことが知られる。

その後は、徐々に北条得宗領へと組み入れられたものと考えられるが、現地の支配は、地頭平河氏（あるいは先祖書にいう山田次郎東高）によって行われていたものと思われる。

相良前頼が南朝年号を用いたのは正平廿三年（一三六八）八月五日（相良前頼・氏頼連署契状）で、前述した年欠く書状七通は、恐らく正平廿三年かそれ以後に作成されたものと考えられる。

相良前頼の南朝方帰順で、球磨郡内の内乱は静まり、国人たちの行動は「当郡人々各申談」「一同之儀」と呼ばれ、合同軍事力は日向国真幸院・嶋津庄の嶋津氏久に向けられた。

## 十四、下相良氏の北朝方帰順

文中二年（一三七三）十一月、宮方が中心とも頼む菊池武光が逝去した。

球磨郡では、下相良一族と考えられる相良左近将監が北朝の了俊方に当参し、了俊から感状（相一七一）を得ている。このことは、正平廿三年（一三六八）に成立した「当郡人々各申談」「一同之儀」体制が、下相良氏の離反で崩壊したことを意味するものと思われる。

文中三年（一三七四）五月廿六日には武光の子、次郎武政も急死した。このような状況の中で、今川了俊は菊池氏の本拠地である隈府の攻略に着手し、守護の嶋津氏久・大友親世・少弐冬資らに書状を送り来援を催促した。

しかし、了俊はこれに応じた少弐冬資を水嶋（菊池郡七城町）の陣中で謀殺したため、嶋津氏久は宮方に下り、九州の諸将の多くも続いて離反した。これで、了俊の応安四年（一三七一）以来、五年にわたる宮方制圧は挫折し孤立状態となった。南朝方は再び勢力を盛り返し、天授元年（一三七五）五月には、菊池の隈府にいた懐良親王が若年の良成親王に征西将軍を譲位した。

同年六月廿二日には、今川了俊の弟・仲秋から相良美作守宛に感状（相一七二）が下され「於玖磨被致忠節候条」について軍忠が褒された。相良長時軍忠状案（相一七三）には「惣領近江守前頼同心」とあり、水嶋の陣にも馳参し、合戦したことが知られる。

これらのことから相良前頼を惣領とする下相良一族は、了俊の北朝方として、球磨郡をはじめ菊池郡まで参陣していることがわかる。前頼が敵対した相手とは、上相良氏を中心とする球磨郡の国人たちであったと思われる。

## 十五、今川満範の球磨郡下向

嶋津氏久の宮方帰順で今川了俊の南九州支配は困難を極めた。しかし、その後、了俊・満範の反嶋津氏勢力とが合致し、永和二年（一三七六）六月二日、満範は嶋津攻略のため、球磨郡人吉に下着した。

このことにより、郡内の対立は（小田氏を除いて）解消され、正平廿三年と同じく、「当郡人々各申談」「一同之儀」体制が再現した。

同年七月に、球磨郡国人らは日向国真幸院に到着し、嶋津氏の本拠地まであとわずかと迫った。満範は彼らの軍事行動を「一揆」（禰四三〇）と呼んでいる。

永和三年（一三七七）十月廿八日、南九州の肥後南郡・薩摩・大隅・日向の四ケ国の国人六一人が一揆を結び、神水契状[11]に署名して、嶋津氏久に対抗することとなった。これには従来、対立関係にあった球磨郡国人の大半が参加した。顔ぶれは①相良多良木遠江守頼忠　②相良

## 十二、下相良氏の庶子宛契状

今川了俊が太宰府を奪回した頃、球磨郡では北朝方であった下相良氏の惣領定頼が逝去した。このような状況の中で、一族間では動揺が続き、惣領前頼側から庶子に宛てて契状（相一七〇）が作成された。

この契状は、正平廿三年（一三六八）八月五日付で新しく惣領となった前頼と弟、氏頼が連署して、一族の「ながとみとの」宛てたもので、北朝方であった下相良氏がはじめて南朝年号を使用している。

宛名の「ながとみとの」とは、永富氏のことと推測され、前文・二ケ条々文・後文から成り、「今の世上の体、昨日に今日は代わる作法に候」のため契状が出したと言っている。

条文①は一族内に不和が生じた時は、相互に申し開きをする。同じく②は庄内における所務以下の相論の際は、一族各々と申談し、理運に任せて解決する――、と約束している。服部英雄氏は宛名の「永富氏こそ〝庶子の独立〟を代表する存在であろう」[7]と指摘されている。

しかし、契状からは反惣領一族の存在も窺えることから、同一契状が他の一族に出された可能性がないではなく、庶子の代表とまでは言えないのではあるまいか。むしろ独立した庶子の一人として現れたこの方がより重要であろうと思われる。

下相良氏が、一族の弱体化にもつながり得ない〝わだかまり〟を抱え、北朝方の上相良氏・国人たちと戦うことは困難で、それがピークに達したのがいわゆる正平廿三年の前年であり、対立関係にあった南朝方に帰順したのもそのためであろう。

その上で下相良氏は、一族結束に向けて〝一族合議〟を中心とする契状を惣領から庶子宛に提唱したのである。これと同じくして山田城の南西側麓にある大王社神殿裏に、「ぎ（バン）　正平廿三戊甲　一結諸衆」と刻まれた自然石が建てられた。

服部英雄氏は「一結諸衆」の語から、「永富氏のもとに結集した反惣領的性格をもつ庶子連合（一揆と表現してもよかろう）」[8]と推定しておられる。しかし「永留どんの墓」という伝承自体は、信憑性がなく断定はできないと思われる。むしろ正平廿三年前後の球磨郡は南朝方一色で、平和であったことを考えれば、反庶子連合はあり得ないことになる。

## 十三、「球磨郡一同之儀」の成立

服部英雄氏は、『禰寝文書』中の、年欠く八月廿一・廿二日付けの書状七通について分析を行い、書状の発給者は球磨郡の国人七人で、「球磨郡一同之儀」の存在を明らかにされた[9]。

球磨郡の国人七人[10]とは、①多良木前上総介頼仲　②（相良）近江守前頼　③永里周防介隆能　④（橘）前佐渡守公頼　⑤（小田）加賀守房成　⑥（平か）但馬守頼重　⑦（姓は不明）義武である。

同じ内容の書状が七通作成され、大隅国の禰寝久清に送られたことについて「畠山三郎殿、以肥州内儀下向候間、当郡人々各申談」（禰三六三）とあるように、畠山氏が、肥州（菊池氏か）の命で球磨郡に下向したことで、球磨郡の国人の間で合議がなり、同一行動となったものと思われる。

相良一族の）相良孫次郎・孫五郎に充行している。その後も、探題方と直冬方は九月十一日から十五日まで球磨郡内所々で合戦を繰り返している。

文和元年（一三五二）二月、足利直義が鎌倉で逝去すると、直冬は一変して宮方に下り、探題方の一色氏と戦うことになった。そのような状況のなかで、五月六日に、一色範氏は相良定頼を大隅守に転任した。

翌年五月十九日、下相良一族は、一色範親に従って葦北庄の湯浦太郎秀基城を攻め落とし、一方では、日向国真幸院の宮方に対して牽制に努めている。しかし、十二月十三日に、球磨郡の宮方が、久米郷目田河原で蜂起し、合戦となったため、下相良一族の中では相良彦五郎・式部丞・中務丞などが討死した。この三人には、一色範親の所進により、一色範氏感状（相一五一～三）が下され、所領が宛行された。

球磨郡では、宮方勢力に、小田六郎次郎が加わり、意気盛んであった。菊池武光らは、これら肥後南郡の宮方を支援するため、文和三年（一三五四）十一月一日に球磨郡へ押し寄せ、永里村と深田城で、合戦を行った（相一六二）。

文和四年（一三五五）十月に、懐良親王の勢力が日々益々と増え、勢いに乗って筑前国博多へ入ると、探題方の一色範氏・直氏・範光ら一族は、戦意を失い長門国へ敗走した。こうして三者鼎立の時代は崩れ去った。残ったのは懐良親王の宮方で、その矛先が次に向けられたのは、一色一族で球磨郡に留まった一色範親と、相良定頼、筑前の少弐頼尚・薩摩の嶋津氏久・大隅の嶋津師久・日向の畠山直顕ら幕府方の守護たちであった。

## 十一、鎮西探題今川了俊の下向

延文三年（一三五八）四月三十日、足利尊氏が五十四歳で逝去した。これにより、幕府の九州討伐軍の西下は絶望的となり、九州は征西府懐良親王ら宮方勢力に入ることになる。

同五年（一三六〇）、幕府は斯波氏經を管領として下向させた。その頃、球磨郡にいた一色範親の権勢も衰えはじめ、十一月十三日には日向国国富庄加納郷の地頭職（相一六六）を相良孫五郎に預けた。康安二年（一三六二）、同じく日向国飫肥郷内の地頭職を相良孫五郎・相良豊前々司（相一六七・一六八）に預けて、相良一族の機嫌をとり繕い、勢力の保持に苦心していることが窺える。

貞治元年（一三六二）九月廿一日、筑後国の長者原合戦で、斯波氏經は菊池武光に敗れ、翌年、何らなすことなく九州から去っていった。

そこで菊池武光らは、太宰府に入って征西府を置き、その権勢は九州各国に及んだ。これを期に大友・嶋津・畠山氏らの勢力は衰え、全く逼塞状態となり、宮方を悩まし続けた少貳頼尚ら一族も、太宰府から追われた。

建徳元年（一三七〇）九月、新たに鎮西探題に補任された今川貞世（法名了俊）が、九州西下についたのは翌年の二月廿日で、十二月十九日に九州門司に第一歩を示した。文中元年（一三七二）八月十一日、今川了俊は宝満山腹の有智山城を落城させ、太宰府を奪回した。このことにより正平十六年（一三六一）八月以来、十二年間にわたった太宰府の征西府時代は終わりを告げた。

## 九、上相良氏の北朝方帰順と征西府

興国二年（一三四一）五月、征西将軍宮懐良親王は六年の歳月をかけて薩摩国の津に上陸し、国人谷山隆信のいる谷山城へ入った。このとき肥後の南朝方は、中心となるべき菊地武重・武敏を失い、唯一人、阿蘇大宮司家の庶子・惠良惟澄の活躍だけが、士気を支えていた。

九州探題の一色範氏・肥後国守護の少貳賴尚は、懐良親王の肥後入国を防ぐため、菊地・阿蘇氏の本拠地に先制攻撃を行った。

球磨郡では、南朝方の相良經頼が九月廿六日に、久米郷木原へ打ち出した。合戦は北朝方の勝利に終わり、筑後經尚は参戦した諸将の軍忠状に証判を加え、一色範氏は十月十六日に感状（相一一三）を与えている。

康永二年（一三四三）七月廿日、少貳賴尚は川尻から相良經頼に書状（相一一五）を送り、「本領安堵」「京都注進」を条件に味方に誘った。經頼はこれを期に、国人たちと共に北朝方へ下っている。八月三日に、相良定頼へ書状（相一一六）を送り、味方になったその旨を伝えている。以後、上・下相良氏は、共に北朝方として八代・葦北郡へ打ち出て合戦を行う。

貞和三年（一三四七）九月十二日、少貳賴尚は萩原城料所として八代庄内の田地百余町を相良定頼に預け、所領の確保を行った。一方、中院定平は相良定頼を南朝方に招くため、正平二年十一月十二日付の御教書を以て、本領安堵を約束し、一族などの義兵を求めたが、定頼は北朝方に留まったままの状態であった。

貞和四年（一三四八）一月二日、征西将軍懐良親王は肥後国宇土の住吉港に着き、十四日には御船を通り菊池郡隈府へ到着した。四月には、新しく征西府を置き、九州の南朝方に足利一党の討伐令旨を下した。親王の参謀・五條賴元は、肥後南部の押えとして八代の内河義真を配備し、球磨郡の下相良氏に対しては、中院義定が八代へ下向して警戒に当たることになった。

七月十一日、一色直氏は上相良氏へ（姓名不明）少輔四郎を遣すから、彼に属し軍忠に抽むよう軍勢を催促（相一三〇）している。

## 十、観応の擾乱と足利直冬の西下

貞和五年（一三四九）閏六月、足利幕府の中で足利尊氏の弟直義と執事高師直・師泰兄弟とが対立し、一触即発の状態にあった。

これが「観応の擾乱」の発端で、九月には直義の養子、直冬が九州へ下り、探題の一色範氏方（尊氏方）、足利直冬方（佐殿方）、宮方（征西宮）の三者鼎立の状態になった。

観応元年（一三五〇）四月廿日、少貳賴尚は相良定頼へ「郡内事、一向憑存候、太田方ニも有談合、相構々可有警固候」（相一三一）と依頼している。恐らく郡内の離反を警戒したもので、上相良氏らが蜂起したのは六月頃であった（相一六二）。

観応二年（一三五一）三月、足利直冬方の少弐賴尚は慶壽寺僧了監寺を永吉庄へ下向させ、足利直冬に汲した上相良氏は、橘遠江入道道公らと四月廿五日・五月一・四日に、探題方の下相良氏と合戦を行った。これに対し、一色範氏は三池兵庫助跡地頭職を勲功の賞として（下

たと思われる。

翌年一月十七日、少貳賴尚は相良孫次郎・八郎、税所宗円宛に「球磨郡凶徒相良孫三郎經賴等退治事」について施行状（相一〇六・一〇七）を出したが、その勢力は退治されず、經尚は正月廿二日に相良定賴・植田又次郎・小田二郎種成などをして、南朝方の楯籠る小牧城を攻めさせた。この戦いは双方に負傷者を出し、祐長側も十人が負傷するなどの激戦であった。

相良祐長は、四月廿八日に六条から成る軍忠状（相一〇八）を作成した。これには下相良氏から離反した理由は述べず、「一族家督相良因幡権守經賴」「經賴令同心」と言っている。

下相良一族は、惣領定賴を中心に行動してきただけに、庶子祐長の離反は以外なものであった。しかし、南北朝の内乱の中で、一族が二つに分かれて戦うことは、決して珍しいことではなく、事実、球磨郡でも、平河・須恵・岡本・小田氏などの一族も、二つに分かれて対立している。南北朝の内乱が庶子の自立制を誘引したともいえよう。

## 八、太宰少貳賴尚領永吉庄山田について

南北朝内乱の中で、山田村がいかに伝領されたかは不明である。鎌倉末期の永吉庄について、年月日欠（元亨三年ヵ一三二三）の平河道照申状案から、地頭は平河氏で、預所職は北条氏一門の「備前々入道」であったことがわかる。

永吉地頭幷名主職については、平河氏が越訴中で、その後の経過は不明である。この空白期間をおいて、文書に見える山田村を順に挙げると、

①建武五年（一三三八）八月日の相良定賴申状案（相八二）に、山田村は「少府御領」とある。

②興国二年（一三四一）壬四年廿八日の相良祐長軍忠状（相一〇八）に、「太宰少貳賴尚領永吉庄内山田城、賴尚代楯籠之」とある。

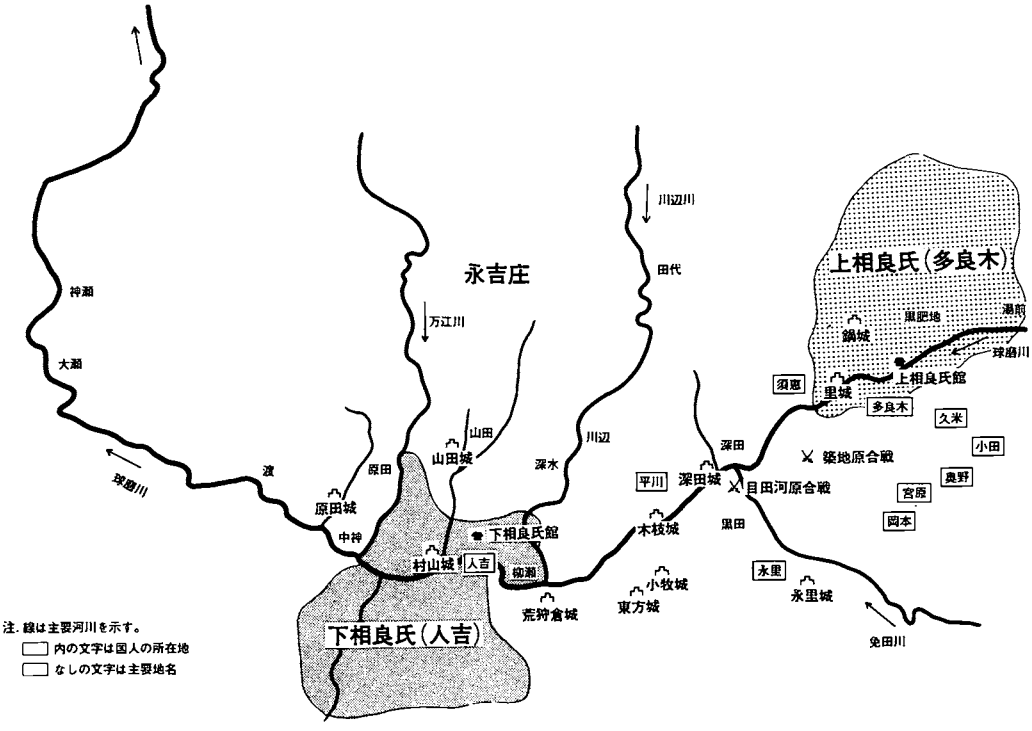
③康永四年（一三四四）十一月日の税所宗円申状案（相一一〇）に、「永吉庄御代官新御領平六入道宗昌」とあり、前述の賴尚代のことと思われる。

④年月日を欠く相良定賴幷一族等所領注文（相一六一）の中に、相良定賴分として「肥後國球磨郡永吉庄半分百十五町、平河左近充（少貳）賴尚跡」とある。

以上のことから、永吉庄山田村は太宰少貳賴尚領で、賴尚代の永吉庄御代官が現地にいたことが明らかである。

それでは、平河氏が永吉庄地頭職を全て失っていたかといえば、そうではなく、④の相良定賴幷一族等所領注文の中に、「肥後國球磨郡永吉庄半分百十五町、平河左近充」と見える。

平河左近充は平河惣領もしくはその一族と思われ、地頭・賴尚代であった可能性が大きい。一方、北朝方の拠点である山田城は、平河氏から永吉庄御代官新御領平六入道宗昌へ支配権が委ねられ、少貳賴尚の命で下相良一族が城を警固している。恐らくこの時期から山田城は下相良氏の支配下に入ったものと思われる。




第２図　南北朝期に登場する国人と城館分布図

山田城の攻防戦は、夏場の中で十日間にも及んだ。これは、南北朝時代の城攻めの例からして通常考えられないことで、山田城がいかに頑強な山城であったことが窺える。

## 七、山田落城と落人相良祐長の消息

山田城の落城を見届けた筑後經尚は、廿五日には上相良氏の多良木村へ向けて発向し、廿六日まで合戦を行ったが勝敗は決しなかった。經尚は八月廿八日に、税所宗円軍忠状（相九九）へ証判を加え、さらに九月廿日に相良定頼・定長に対して、山田城の落人相良祐長以下凶徒が散在しているから、見当たり次第誅伐せよと命じた（相一〇〇・一〇一）。

その間、南朝方は体制を整えるため、暫く動かなかったが、小田六郎次郎真成が經頼・祐長などに同心したため、十一月廿六日には西村の東方城に押寄せ、追落させて同所の小牧城に楯籠った。

このような南朝方の再蜂起に対して、經尚は十二月十日相良孫次郎・八郎（相一〇四・一〇五）宛に

肥後國球磨郡永吉庄木枝山田已下所々城塁警固事、殊所感存也、多良木經頼祐長等重可打出之由、有是聞、可被抽軍忠候、仍執達如件、

という奉書を以て、「永吉庄木枝山田已下所々城塁」の警固についての軍功を賞し、多良木經頼・相良祐長等の再出の風聞を聞くから軍忠に抽むように言っている。

これ以後、山田城は文献上から姿を消し、北朝方の警固する所であっ

河彦三郎以下凶徒蜂起事殊驚存候」と述べ、祐長の叛は不思議であり上相良の多良木經頼の蜂起に、ことのほか驚いている。

この蜂起は、建武五年（一三三八）に次ぐ三度目のもので、南朝方の勢力は優勢であった。妙雲はさらに相良兵庫充定頼に

少府發向肥州、来月八日治定候、其間、木上城已下事も、たかいゑ被付聞召候、又御預城をも固御持候者、

とあり、少貳頼尚が肥後に発向するまでの間、木上城以下御預城（山田城も含むか）を固く持ちこたえるよう指示している。

相良縫殿充祐長軍忠状（相一〇八）から、山田城をはじめとする諸城の合戦が窺われる。

目安

肥後國球ノ郡相良縫殿充祐長軍忠次第

一祐長一族家督相良因幡権守經頼宿参干御方、致連々軍忠者也、

爰祐長經頼令同心、以去年興國元三月廿三日、太宰小貳頼尚領永吉庄内山田城頼尚代楯籠之凶徒等追落、則楯籠祐長之處、頼尚甥筑後彦次郎以下軍勢等差下、自同八月十日迄廿日、致散々合戦之刻、祐長親類若黨、或討死、或被疵了、雖然、依爲兵粮難儀、引退彼城、經頼一所城楯籠了、不是等之次第、經爲相共抽忠勤之間、被存知者也

興国元年（一三四〇）三月廿二日、祐長は挙兵し太宰少貳頼尚領永吉庄山田城に楯籠る代官を追落させ、自ら楯籠った。六月十六日には祐長と經頼子息などの軍勢が、人吉庄の村山城に押し寄せて合戦、廿日には少貳氏の若党が楯籠る原田城に押寄せて城を焼き払っている。

廿日の原田城合戦は「相良孫三郎經頼内河彦三郎義眞以下凶徒等、打出肥後國球磨郡永吉庄、及合戦之由」（相八八・八九）とあるように、上相良氏が、八代の内河氏と連絡をとりながらの包囲作戦であった。

これに対し、少貳頼尚は相良孫次郎定長・税所八郎景宗宛に、一色範氏は相良六郎三郎長氏宛にそれぞれ軍勢催促状を出して、經頼・義眞・祐長を討とうとした。しかし、その勢力は悔りがたく、少貳氏は自ら赴こうとしたが果せず、代わりに甥の筑後彦次郎經尚を下向させている。

筑後經尚の球磨郡下着によって、劣勢の北朝方は一挙に攻勢へ出た。まず手始めに八月六日に、荒猪倉城・木上城・村山城を攻め、九日に祐長などが楯籠る山田城へ押寄せた。

この頃、下球磨郡（木上・山田・原田・人吉を含む地域）が北朝方の勢力範囲に入り、山田城は孤立した状況にあった。そこで上相良氏は祐長の支援のため、十日に伊藤八郎と共に築地原に打って出ることになる。

迎え打つ筑後經尚は兵を二手に分けて、相良六郎左衛門尉長坊・相良十郎三郎助廣などは築地原へ、税所新兵衛入道宗円・相良孫次郎定長・相良八郎景宗などには山田城を攻めさせた。

築地原合戦は北朝方の勝利に終わり、上相良氏は本拠地の多良木村へ退いた。一方、祐長は多良木勢の敗北にもめげず、山田城を持ちこたえたが、「祐長親類若黨、或討死、或被疵了、雖然、依爲兵粮難儀、引退彼城、經頼一所城楯籠了」という状況の中で、廿日（北朝方は十九日夜という）には引退し、經頼と同じ城に楯籠らざるを得なかった。

に加担し、球磨郡や近隣の国人たちを誘い、下相良氏（定頼）に対立している。建武三年九月十日、一色範氏は下相良一族の相良孫二郎宛に「相良孫三郎經頼以下凶徒」が、球磨郡内に楯籠っているので、誅伐するように軍勢を催促（相七四）した。

こうして、球磨郡の南北朝時代は上相良氏（經頼）と下相良氏（定頼）の対立に、球磨郡の国人たちが加わり、両派に分かれて激しい争いになった。

このような状況の中で、建武五年（一三三八）尊氏方（北朝）の中心人物である相良定頼の申状案（相八二）に、はじめて「山田城」が登場する。以下、関係部分を引用する。

> 就中、相良孫三郎經頼、須恵、永里、岡本、奥野、橘佐渡八郎以下凶徒等、令同心干武敏、兼重、祐廣、内河等、打取當郡、構城槨於郡内、引入鎮西凶徒等、相従近國、疑令蜂起之間、定頼自宿前毎度致軍忠之上者、捨命存御方之条勿論也、爰凶徒者大勢也、定頼僅雖為少勢、相分干二手、籠置親類若黨等於山田城、致散々防戦、定頼者則押寄干後巻、如元追籠凶賊於木枝城畢、

すなわち「多良木の上相良孫三郎　須恵、永里、岡本、奥野、橘佐渡八郎などの凶徒が、菊地武敏、肝付兼重、伊東祐廣、内河頼眞などに同心して、郡内を打ち取り、城廓を構え、鎮西凶徒を引き入れ、近國を従え蜂起する疑がある。そこで定頼は、前々からの軍忠はいまさら言上するに及ばずとし、足利尊氏に味方して、自分は少勢ながら兵を二手に分け、山田城には親類若党を楯籠らせ、所々で防戦した」といった内容である。

ここで明らかなことは、相良定頼と対立した南朝方の勢力が、多良木の相良孫三郎を中心にした上球磨地方の国人たちで、彼らは須恵彦三郎・永里彦二郎・岡本・奥野・橘佐渡八郎・橘遠江入道道公らであり、郡内に城廓を構えたことがわかる。

このことは球磨郡内において、南北朝時代のこの時期に、いくつかの城廓が築城されたことを示しており、城郭研究の上で注目される。また、申状案には「軍功により、人吉庄北方半分地頭職を一色（範氏）殿から返給され賜わったが、軍忠の注進及び恩賞不足分として、〝一族經頼幷庶子等跡〟の追給を望む」と願い出ており、相良一族内の対立の深さを、如実に物語っている。

八月十三日に少貳頼尚は、守護代をして「人吉庄北方事」を「相良六郎三郎入道蓮道同兵庫充定頼」に交付せしめ、さらに一色範氏は暦応二年（一三三九）十二月十七日、勲功の賞として「相良孫三郎經頼跡」地頭職を相良兵庫充定頼と一族八郎殿に充行している。このようにして、下相良氏が上相良氏の所領を圧倒し、除々に支配領域を広げていったことがわかる。

## 六、相良縫殿充祐長の挙兵と山田城合戦

興国元年（一三四〇）三月廿二日、下相良一族の相良縫殿充祐長が、南朝方の相良因幡権守經頼に同心し、北朝方の山田城を奪取する事件が起きた。祐長は相良長氏の子息で、定頼の叔父にあたる人物である。

この事件について、六月廿五日付の妙雲書状（相九一）は「縫殿事不可有子細由存候處、成御敵候事、不思議覚候」「迎多良木孫三郎内

子息三郎良貞・四郎師時に手継文書が譲られている。譲られた所職は「永吉地頭幷名主職」であった。

一方、相論の相手となった預所（職）は、

彼所預所職者、大膳大夫廣元朝臣建久三年被拝領以後、至于嘉禄元年、地頭所各別知行無相違、而近衛中将實春朝臣相継廣元跡自嘉禄元年至建長三年知行無相違處、建長三年實春朝臣始依被押領地頭職、良貞致訴訟處、文永二年又被混領名主分之間、迷是非者也、凡如廣元朝臣所帯建久御下文者、永吉（千時三善）幷西村可為預預職云ゝ、取栓、就幷字云、被知行両所預職畢、

とあるように、建久三年（一一九二）に大江廣元が拝領し、嘉禄元年（一二二五）には外孫の近衛中将實春朝臣に譲られていることがわかる。これは「地頭所各別知行」、「自嘉禄元年至建長三年知行無相違處」であったにも関わらず、實春が永吉庄地頭職を押領したため、平河三郎入道観蓮（俗名は良貞）は訴訟を起こした。

しかし、文永二年（一二六五）に至っては、名主分までも混領してしまったため、再び鎌倉幕府へ越訴している。

幕府は、①の弘安六年（一二八三）七月三日付けで

依先御沙汰之趣令依違之由、良貞等所申旁非無其謂、然者於永吉地頭併名主職者、宛給替於當給人、如元可被返付于良貞等也者、

依鎌倉殿仰、下知如件、

という裁許を行ない、「永吉地頭幷名主職」を良貞に返付している。預所職は同年十月に「豊前々司景資」が給ったが、弘安八年（一二八五）の岩門合戦で滅亡したため、翌年に「備前々司入道」が拝領し、代官「行性」は「永吉地頭幷名主職」までも押領してしまった。

平河弥五郎入道道照は、①の関東下知状案が守られず押領されたとして、再び越訴を企てている。②の申状案を書いた当時も、越訴中であった。

石井進氏は「その後の経過は不明であるが、（中略）平河氏にとっては形勢は非であったとおもわれる。このように当御領は鎌倉殿御領から北条氏一門領へという経過をたどっていることに注目したい」[6]と述べている。

以上は、平河氏側から見た「永吉庄」（山田村を含めた）の伝領過程である。現地支配がどのようなものであったか、史料不足で明らかにできないが、地頭平河氏一族によって支配されていた可能性は大きいと見てよいだろう。

## 五、上・下相良氏の対立と山田城

**南北朝時代**　建武二年（一三三五）、足利尊氏が後醍醐天皇の政権に離叛の意を明らかにしたことにより、建武の新政はわずか二年余りで挫折した。翌年八月に、尊氏が「朝敵」の汚名を逃れるために持明院統（光明天皇・北朝）を擁立したことにより、国内は後醍醐天皇の大覚寺統（南朝）とに分かれ、南北朝の内乱を迎えることになる。

球磨郡では、人吉の下相良一族が足利尊氏から招かれてこれに応じていることが、少弐頼尚施行状（相七一）から明らかである。

しかし、多良木の上相良氏（經頼）は肥後の南朝方・菊地武敏など

復元を試みたのが第一表である。

これから、永吉庄は球磨川流域を中心にし、支流の免田川・川辺川・山田川・万江川流域に及び、その山間部に位置する散在庄園であることが推測される。周囲には人吉庄・須恵庄・公田などが隣接し、複雑な領有関係を示している。

庄園の中心は、目良生村（木上か）をはじめ深田村・山田村・黒田村など考えられ、水田の多い所であったと思われる。

このことは先祖書に見られる深田・山田氏や永池・目良生・平野氏などの庶氏が、その村々で分立していることから裏付けられよう。

## 四、永吉庄の伝領と支配体制

「永吉庄」の成立は、鎌倉幕府が球磨郡の支配体制をより確立した時期で、肥後國球磨郡図田帳写が作成された建久八年頃と考えられる。その後、永吉庄の地頭職・預所職が、どのように伝領されていったかを考える。(5)

『平河文書』中には、永吉庄地頭の平河氏と預所が「永吉地頭幷名主職」をめぐって相論した二通の文書がある

①弘安六年七月三日　関東下知状案（平四）

②年月日欠　平河道照申状案（平五）

ここでは②に至る経緯が複雑なので、必要な部分のみの紹介に留める。相論の対象となった「永吉地頭併名主職」について平河弥五郎入道道照は、

道照等先祖開発私領也、然間平河三郎師隆平家逆乱之時、右大将家御代一旦、蒙御勘気、無苦之子細被聞食披、文治三年六月十六日安堵御下文云、早可令安堵之由可令下知云、、同年十二月三日遠景施行云、早任御教書可被安堵云、、

と述べている。その後、建長二年（一二五〇）に地頭平河師良から

第一表　永吉庄の村落・地名の比定地一覧

| No | 永吉庄内の村名 | 田数 | 現市町村名 | 比定地 |
|---|---|---|---|---|
| 1 | 深田之村 | 五〇町 | 深田村 | 深田 |
| 2 | 目良生村 | 四〇町七反 | 錦町 | 木上字目郎 |
| 3 | 山田之村 | 四〇町一反 | 山江村 | 山田 |
| 4 | 黒田之村 | 三九町五反 | 免田町 | 黒田 |
| 5 | 原田之村 | 二七町四反 | 人吉市 | 上・下原田町 |
| 6 | 青山之村 | 二六町 | 不明 | 不明 |
| 7 | 中神之村 | 一九町 | 人吉市 | 中神町 |
| 8 | 目田之村 | 一四町 | 免田町 | 免田 |
| 9 | 平野之村 | 一三町二反 | 錦町 | 木上字平野 |
| 10 | 横瀬 | 一二町 | 多良木町 | 黒肥地字大園 |
| 11 | をうかき | 八町二反 | 人吉市 | 中神町大柿 |
| 12 | 永池之村 | 八町五反 | 免田町 | 字永池 |
| 13 | 河邊之村 | 八町 | 相良村 | 川辺 |
| 14 | 深水 | 六町 | 相良村 | 深水 |
| 15 | 渡之村 | 五町 | 球磨村 | 渡 |
| 16 | 尾瀬之村 | | 球磨村 | 大瀬 |
| 17 | 高野瀬之村 | | 球磨村 | 神瀬 |
| 18 | はしかみ之村 | | 相良村 | 四浦字初神 |
| 19 | 田代之村 | | 相良村 | 四浦字田代 |
| 20 | 五木之村 | | 五木村 | 五木 |

## 三、永吉庄の成立と庄域について

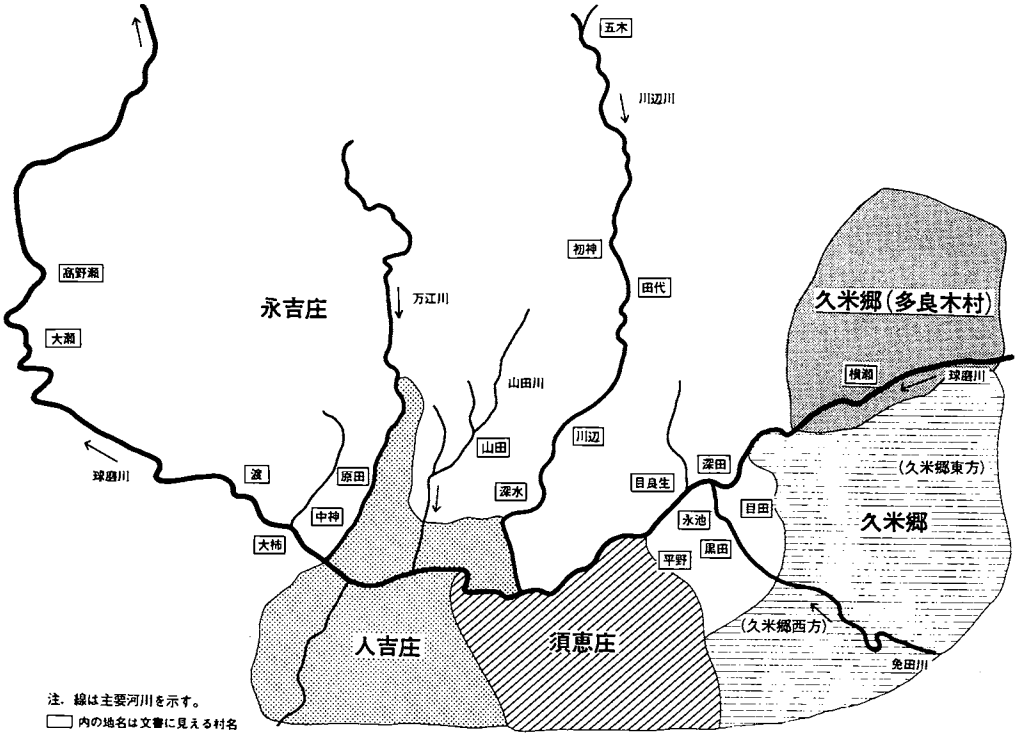
永吉庄の成立を考える上で、庄名が「肥後國球磨庄安富領内三善」から、永吉庄へと代わった時期が問題となる。

前述したように、文治三年に「球磨御領」とあり、建久三年は「球磨庄」と記されていることから、変換期はそれ以後と考えられる。恐らく建久八年（一一九七）潤六月日肥後國球磨郡図田帳写（相二）[3]に

鎌倉殿御領五百丁
　預所因幡大夫判官
永吉三百丁
地頭良峯師高子息字平
　　紀平次（不知實名）
須恵小太良家基領百五十丁

と所見するまでの期間と思われる。この時期について、村上豊喜氏は「球磨御領が人吉庄・鎌倉殿御領・公田に分けられた時期と同一である。その時期を具体化するなら、建久三年八月大江広元が鎌倉殿御領の預所職に任じられたところに求められよう。それはこの時期こそ幕府の力が没官領の球磨御領に本格的に及んだ」[4]と指摘している。

次に、永吉庄の所領・庄域について考えたい。まず平河氏の霊社と伝えられる大王社の所在地は、良峯姓先祖書（平一二）によれば庶氏の「苗字の地」であり、「平河師高譲状案」に見える村々と一致している。このことから、この譲状案はある時期の永吉庄の所領・庄域を表現していると思われる。そこで、現在の村名と地名にあてはめて、




第１図　鎌倉時代の球磨郡の所領分布図

平川三郎師高重代所領田数　注文

一所　肥後國求麻郡永吉庄之内横瀬（十二町）三十六石
一所　同郡永吉庄之内青山之村田地廿六町（八十四石）三十貫
一所　同郡同庄之内目田之村十四町五反（三十九石）十貫
一所　同郡同庄之内山田之村田地四十町一反（百十石）五十貫
一所　同郡同庄之内黒田之村田地三十九町五反（百石）四十貫
一所　同郡同庄之内原田之村田地廿七町四反（四十九石）三十貫
一所　同郡同庄之内深水六町（三十九石）
一所　同郡同庄之内をうかき田地八町二反（□）十貫　五石
一所　同郡同庄之内平野之村田地十三町二反（四十七石）十二貫
一所　同郡同庄之内永池之村田地八町五反（三十五石）十三貫
一所　同郡同庄之内中神之村田地十九町（五十六石二斗）三十貫
一所　同郡同庄之内渡之村田地五町（十九石）九貫
一所　同郡同庄之内目良生村田地四十町七反（三百三十石）六十貫
一所　同郡同庄之内深田之村内田地五十町（三百石）五十貫
一所　同郡同庄之内河邊之村田地八町（五十九石）いた三百　三十貫
一所　同郡同庄之内尾瀬之村（さつし十束）くす五升、いた五十
一所　同郡同庄之内高野瀬の村（さつし廿束、あつかミ三帖）いた百、くす五升
一所　同郡同庄之内五木之村（さつし三百束、いた千五百）うるし三百、
一所　同郡同庄之内田代之村（廃かハ三枚、いた千、茶五十斤）うるしつ、百五十、
一所　同郡同庄之内はしかミ之村（廃かハ三まい、いた五百九十、）うるし二百五十、茶五十斤、

右、於此村者（マヽ）師高希代相傳之私領也、然於譲嫡子師貞等訖、於子〻孫〻、無他嫡子（マヽ）可為領知、自然沙汰之時者、此目録以（マヽ）可致沙汰之状如件、

干時建久二年五月三日

永吉地頭良峰師高在判

この文書から、山田村は永吉庄に含まれ、領主は「永吉地頭良峯師高・師貞」であったことがわかる。しかし、工藤敬一氏は文書形式と記述の内容に疑問をもち、「当文書は訴訟に際し、それ以前の平河氏の所領内容を主張すべく、後年作られたものと思われる」[2]としている。なぜなら後年、地頭平河氏が預所と相論し、越訴した際の弘安六年（一二八三）七月三日関東下知状案（平四）と、年月日欠の平河道照申状案（平五）によると

①文治三年（一一八七）六月十六日、右大将家（源頼朝）から所領安堵御下文が下され、伊豆藤内（天野）遠景によって施行。伝達されたが、下文には「下球磨御領、可早任御教書、被安堵平河三郎身事」と書かれている。

②大膳大夫（大江）廣元が、建久三年（一一九二）に拝領した預所職は「肥後國球磨庄安富領内三善并西村預所職」であり、関東下知状に「永吉（干時三善）」という割書がある。

②の中の「西村」は須恵氏の所領である所から、平河氏の所領は「安富領内三善」ということになる。そうなると、平河師高譲状案に見える「永吉庄」はとうてい存在したとは考えられず、まして「肥後國求麻郡永吉庄之内横瀬」という記述はありえないことになる。

# 鎌倉・南北朝期の山田村

## ―南北朝内乱の中の「山田城」とその歴史的背景―

### はじめに

山田城跡は、熊本県球磨郡山江村大字山田にあり、中世には「球磨郡永吉庄」の山田村に含まれていた。

山田村に関する文書は『相良家文書』に十二点、『平河文書』に二点を数える。さらに、これらに金石文が加わる。

近世の編纂物では、『麻郡神社私考』や相良家史編纂物の『南藤蔓錦録』・『求麻外史』・『歴代参考』などがあるが、これらに関しては内容に錯誤・史料操作が見られる。

本稿では、永吉庄の成立を通して鎌倉時代における山田村の変遷を明らかにし、その上で南北朝内乱の中での「山田城」を位置付けたい。

なお、用いた文書・史料の一部は、史料篇に所収し、出典・文書名などは引用上、省略（例えば『相良家文書』之一、二号文書は以下、相二）している。註や参考文献は巻末に附した。

### 一、「中世の山田村」の素描

中世の山田村を語るには、文書が限られているため、近世の山田村を通して、村落を素描する。

山田村は東西両方から、東浦川と西河内川が南下しており、両河川が二つの谷を形成している。そして、これらの川は村の中心部寄りで合流して、本流の山田川になる。これら支流を含めた河川流域に谷底平野と低山、及び丘陵地沿いに村落が開け、山田村が形成される。

西河内川流域には、西河内・城子・石原・下城子などの集落があり、東浦川流域には番慶・板野・東浦集落がある。そして、谷底平野の微高地に一丸・辻・味園の集落がある。山田川流域には、右岸に寺下・井手口集落、左岸には手右方・堂園・長ケ峰・合戦峰の集落が展開する。

地元では、山田の中心地を「里」と称し、一帯に、「御園」「辻」の字名が残っている。同地は、村内における交通の要所で、地頭館の比定地でもある。近くに湧水地が多く、水田耕作に最適の場所である。

特に、水田に残る字名「前田」「久保田」「五反田」などは、中世特有の地名と思われ、地頭直轄地としての門田の可能性が推測される。

また、周辺に、「地主・地頭」の霊社と伝えられる神社や、平安末期の毘沙門天立像を安置する高寺院などが存在し、西側の山付きに、山田城跡が眺望される。

### 二、平河師高譲状案について

**鎌倉時代**

「山田村」が文書・史料の上で初めて登場するのは鎌倉時代に入ってからである。その所領と領主については、建久二年（一一九一）五月三日の平河師高譲状案[1]（『熊本縣史料』中世篇三　一号文書、以下、平一と略す）に詳しい。

# 目次

**鎌倉・南北朝期の山田村**
——南北朝内乱の中の「山田城」とその歴史的背景——……（1）
**『山田城跡』史料篇**
一、解　説……（19）
二、解　題……（19）
三、凡　例……（21）
四、本　文……（22）

**図版・図表目次**

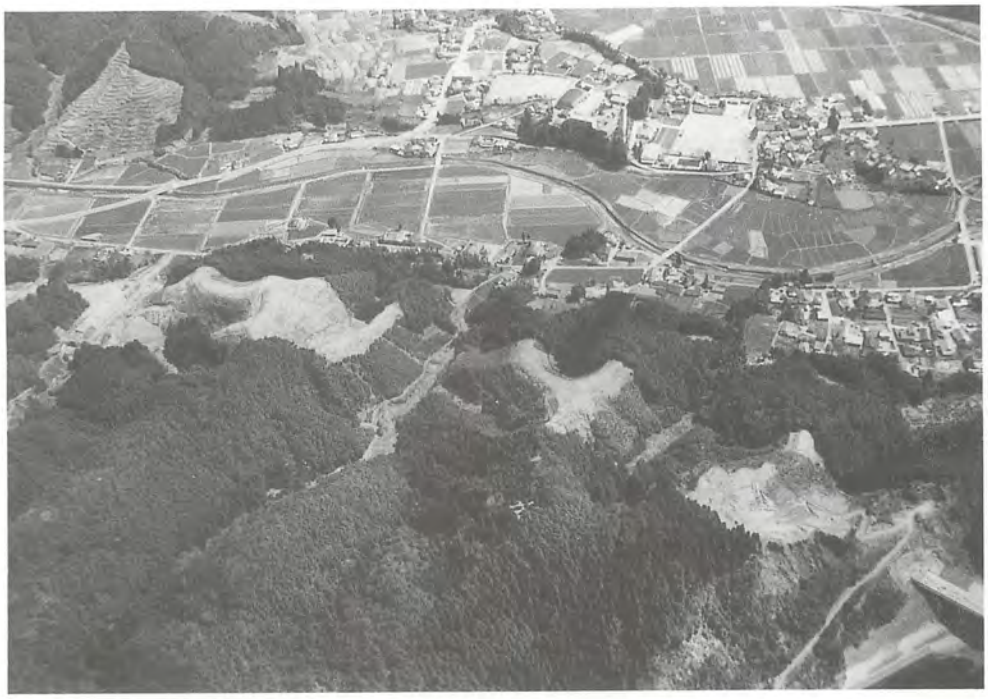
第1図　鎌倉時代の球磨郡の所領分布図……（3）
第2図　南北朝期に登場する国人と城館分布図……（8）
第1表　永吉庄の村落・地名の比定地一覧……（4）

# 鎌倉・南北朝期の山田村

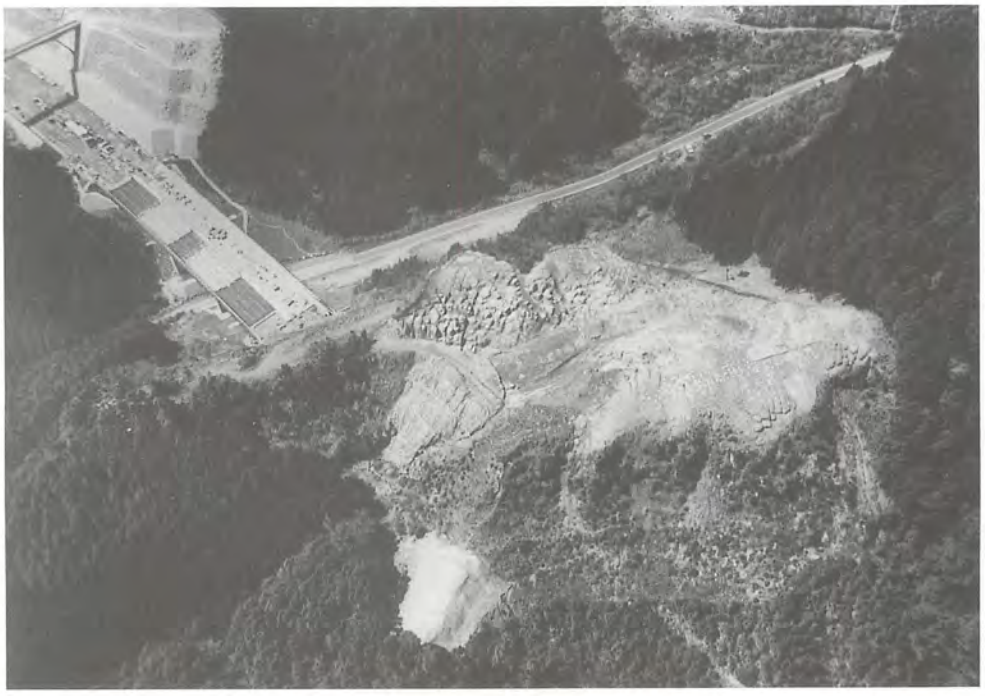
## ―南北朝内乱の中の「山田城」とその歴史的背景―

# 写　真　図　版

山田城跡航空写真(1)



山田城跡航空写真(2)



山田城跡航空写真(3)

山田城跡遠望
（南側麓の寺下より望む）

山田城跡迫地(1)
（草木伐栽後）

山田城跡迫地(2)
（発掘着手直前）

図版 4

山田城跡の迫地と東西尾根

山田城跡の東側尾根と
その西側斜面

山頂より南東側張り出し
尾根を眺む

山田城跡線外
（堀切１）

山田城跡路線外
（堀切２）

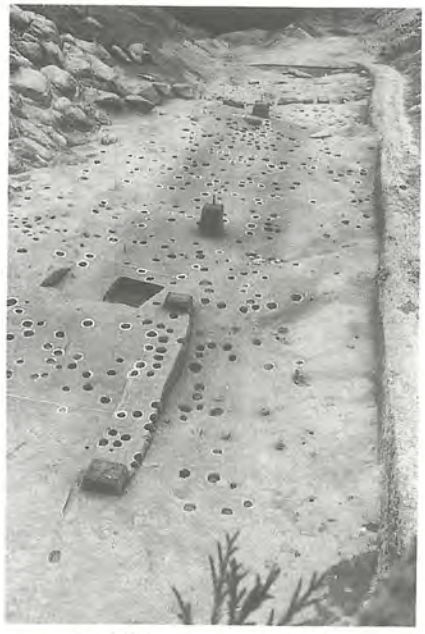
山田城跡路線外
（堀切３・二重堀）

図版 6

第Ⅰ期整地層検出状況(1)

第Ⅰ期整地層検出状況(2)

第Ⅰ期整地層検出状況(3)



第Ⅱ期整地層検出状況(1)

第Ⅱ期整地層検出状況(2)

第Ⅱ期整地層検出状況(3)

第Ⅱ期整地層より
出土の水甕片(1)

第Ⅱ期整地層より
出土の水甕片(2)

第Ⅱ期整地層より
出土の水甕片(3)

第Ⅱ期整地層検出の
野鍛冶跡(1)

第Ⅱ期整地層検出の
野鍛冶跡(2)

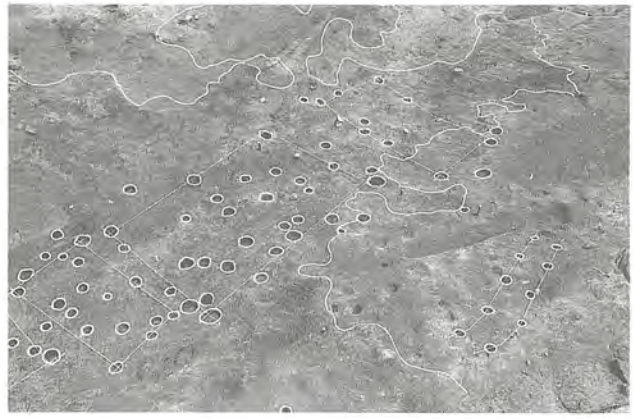
第Ⅱ期整地層検出の
野鍛冶跡(3)

第Ⅱ期整地層検出の
野鍛冶跡(4)

第Ⅱ期整地層検出の
野鍛冶跡(5)

第Ⅱ期整地層検出の
野鍛冶跡(6)

第Ⅲ期文化層の検出状況(1)



第Ⅲ期文化層の検出状況(2)

第Ⅲ期文化層の検出状況(3)

東側尾根の遺構検出状況(1)

東側尾根の遺構検出状況(2)

東側尾根の遺構検出状況(3)

西側尾根の遺構検出状況(1)

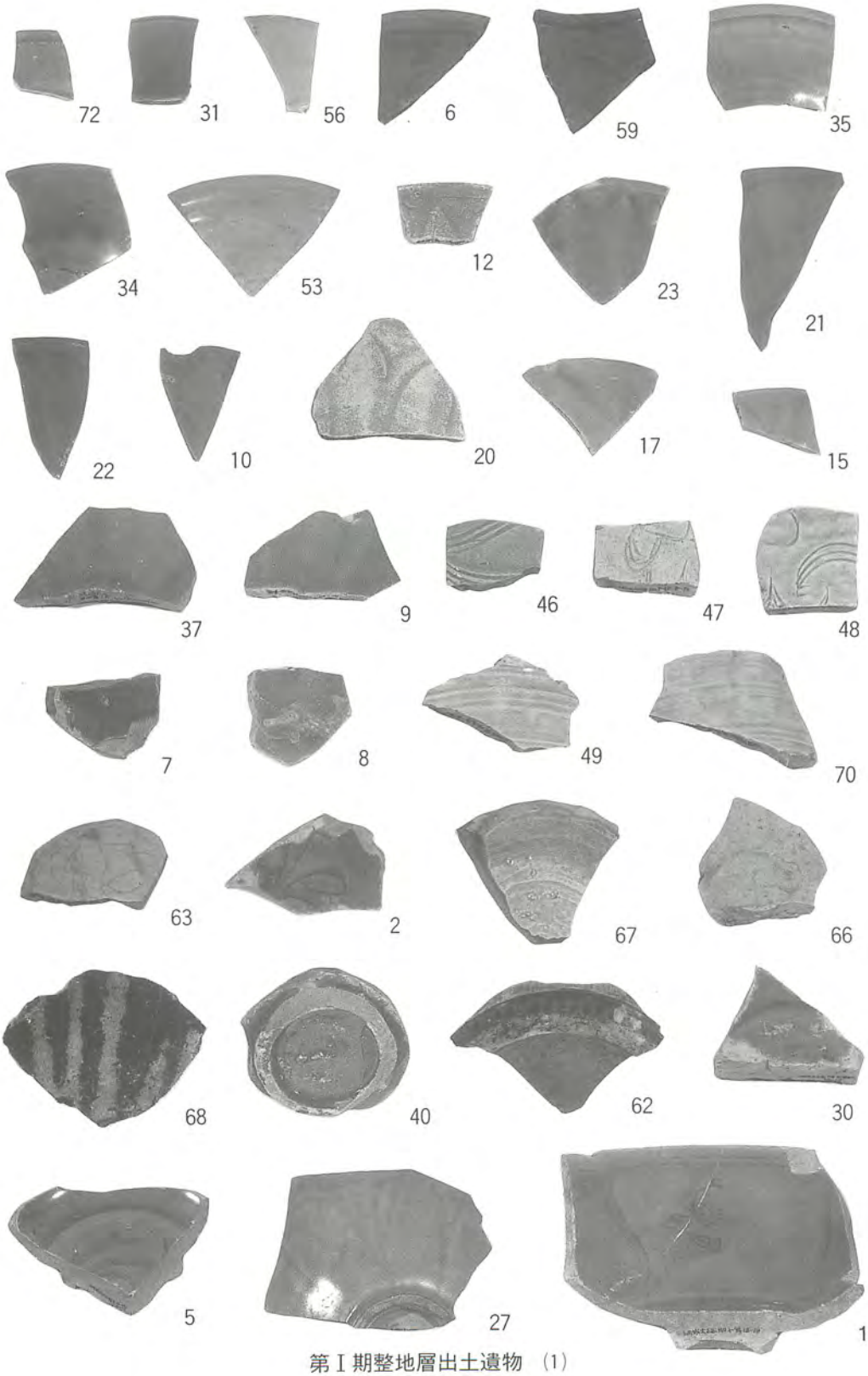
西側尾根の遺構検出状況(2)

西側尾根の遺構検出状況(3)

迫地上段における土層断面

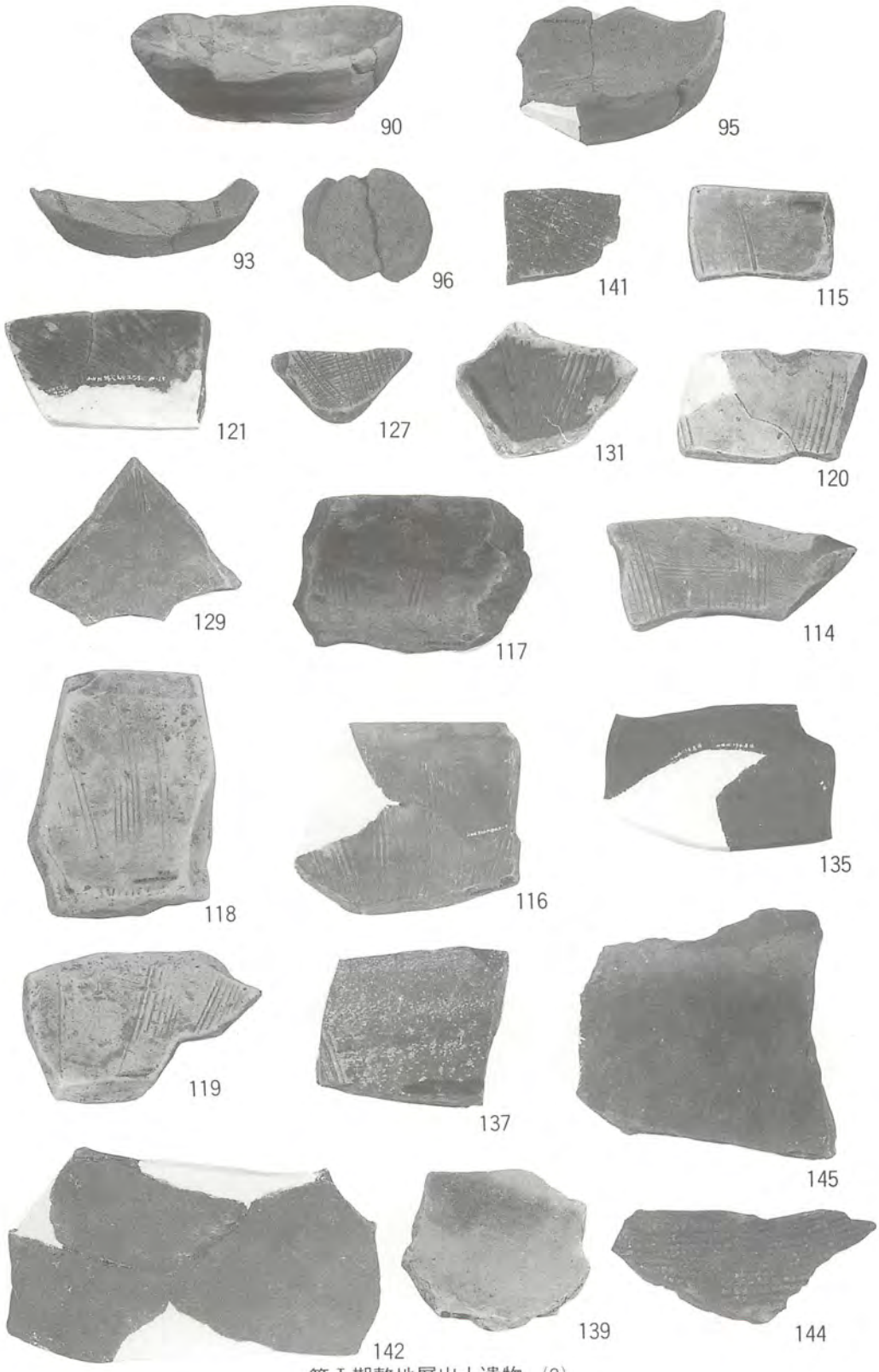
南東側張り出し尾根土層断面

第Ⅰ期整地層出土の集石遺構




第Ⅰ期整地層出土遺物 (1)

図版16

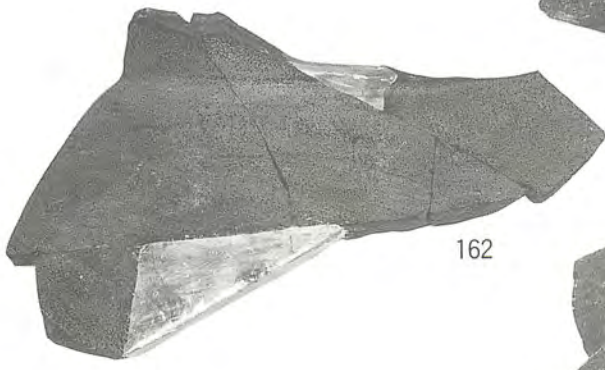



第Ⅰ期整地層出土遺物 (2)

143

153

152



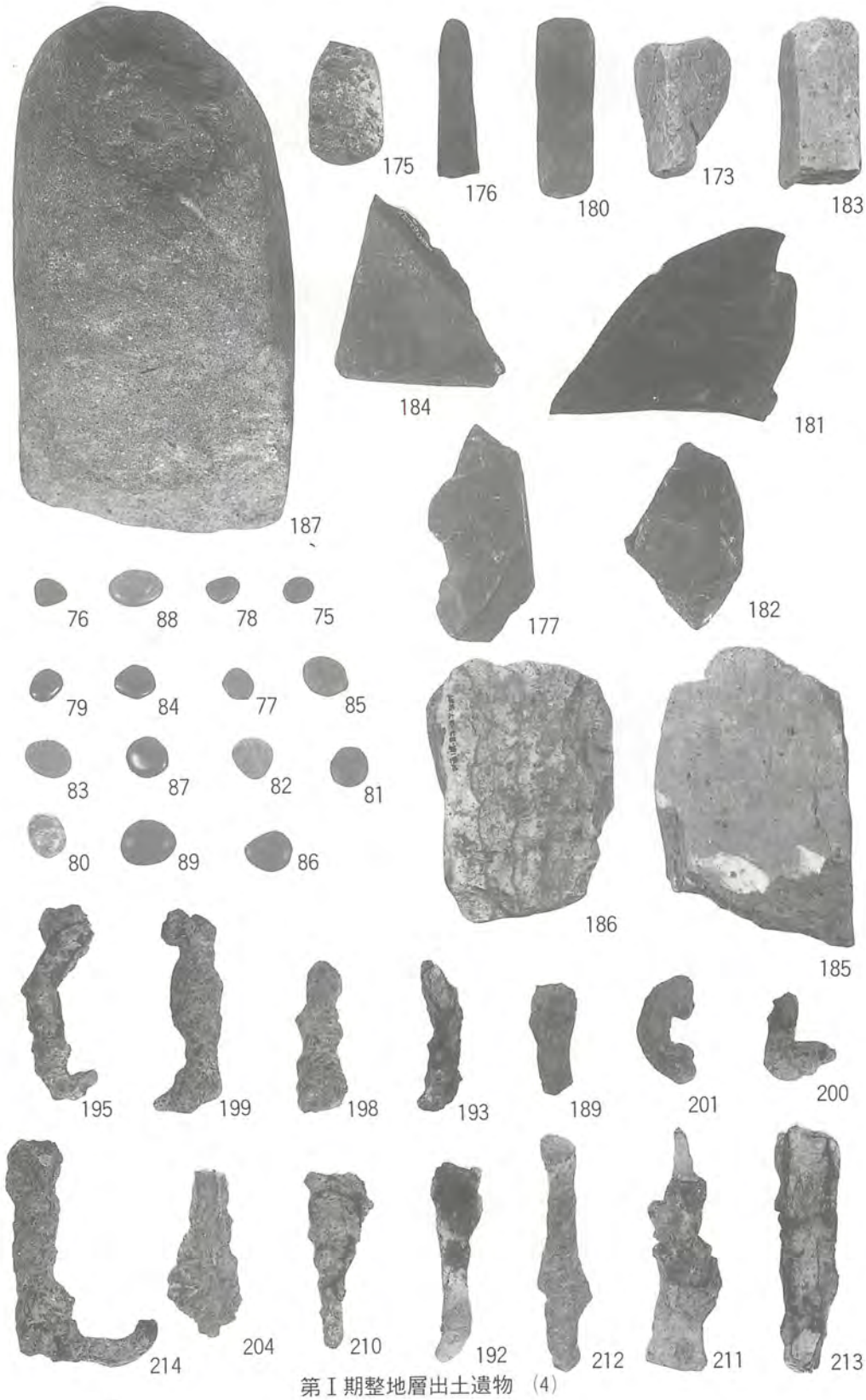
162

161

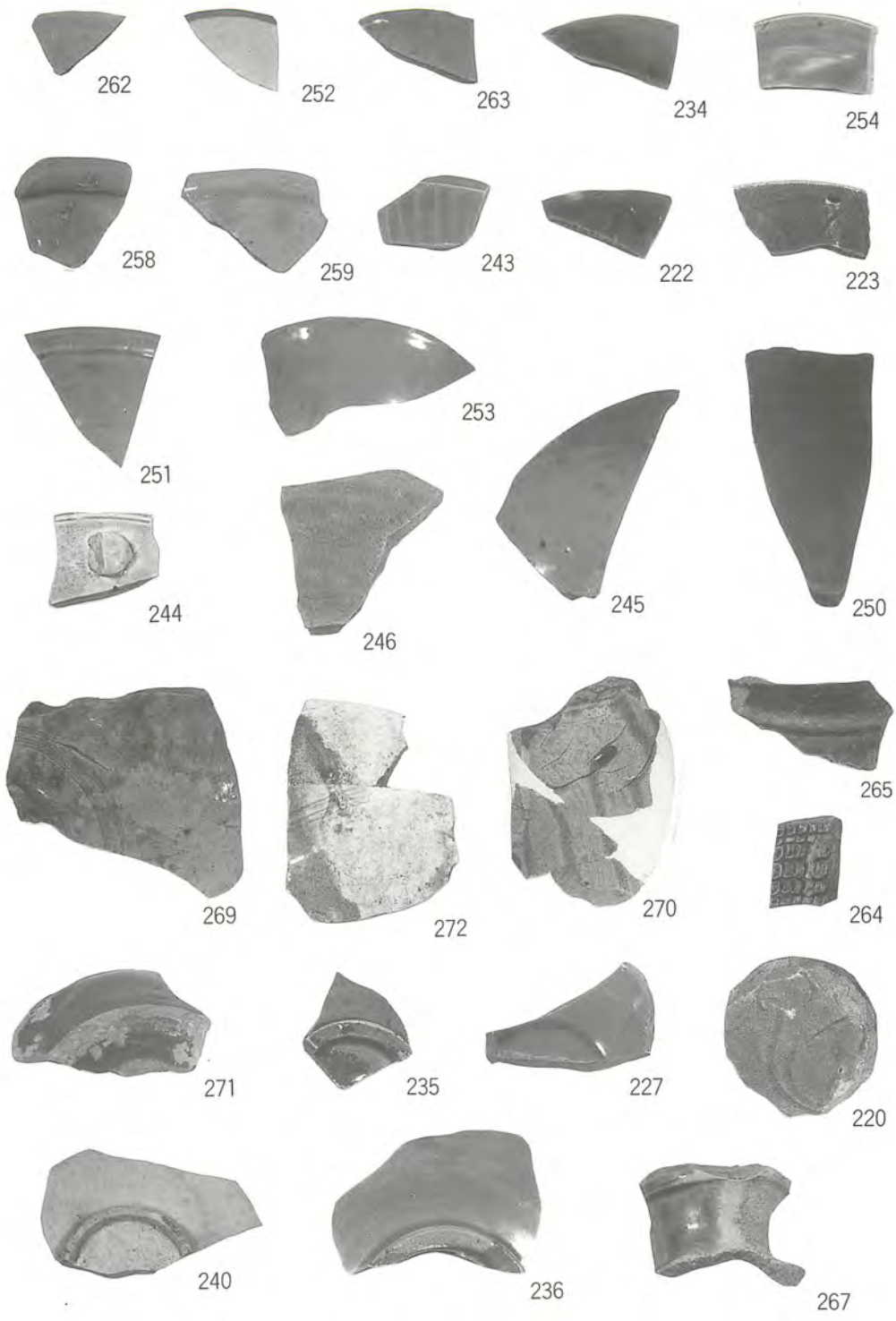
166

158

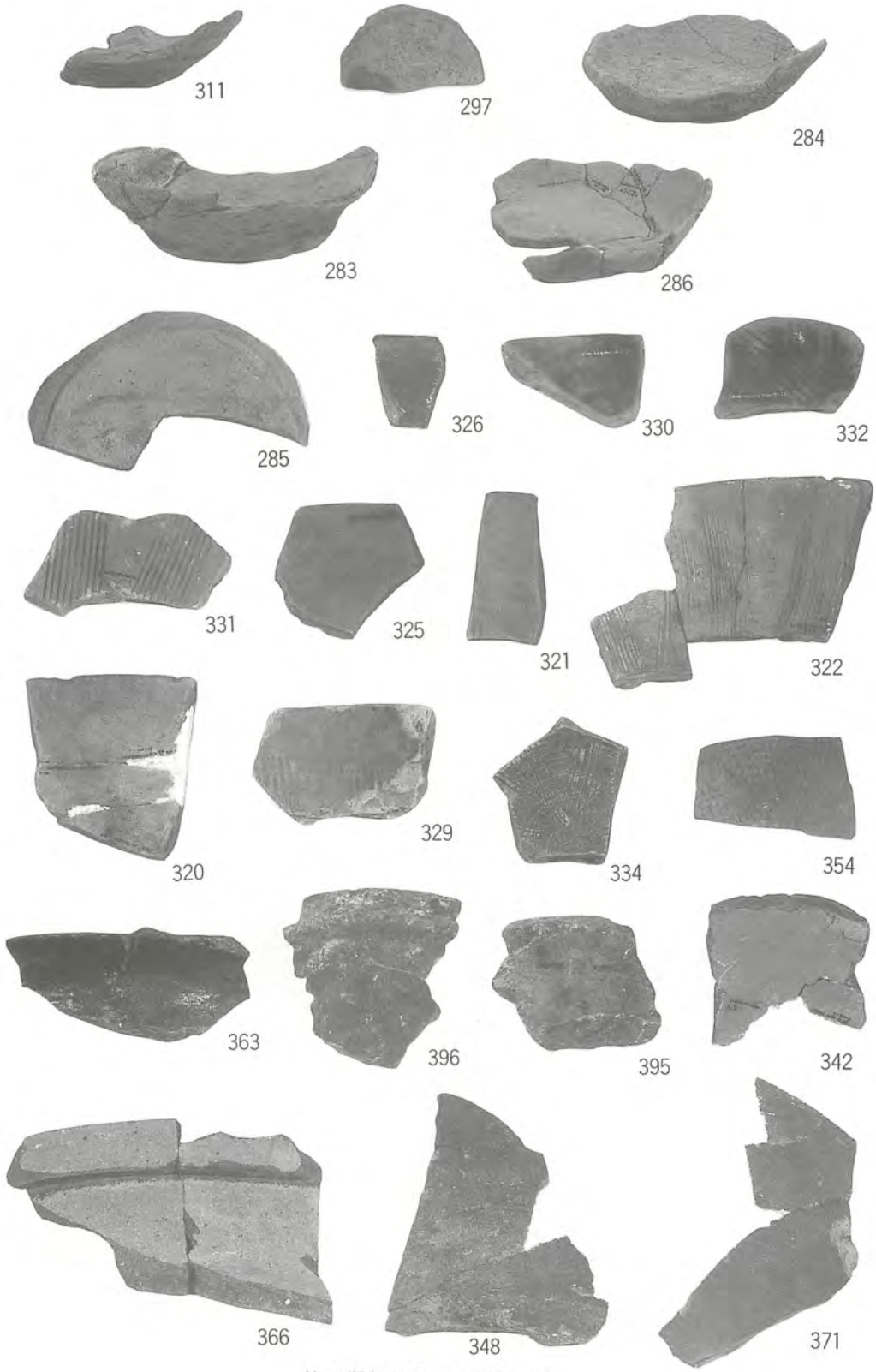
第Ⅰ期整地層出土遺物 (3)




第Ⅰ期整地層出土遺物 (4)




第Ⅱ期整地層出土遺物 (1)



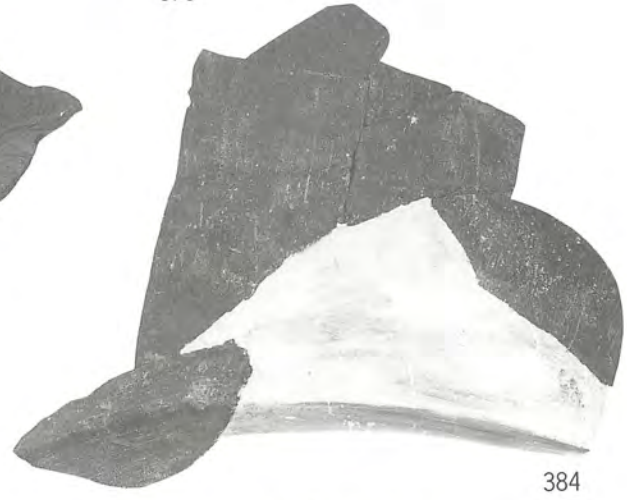

第Ⅱ期整地層出土遺物 (2)

379

378

382

345



384

349

346

第Ⅱ期整地層出土遺物 (3)

344

347

343

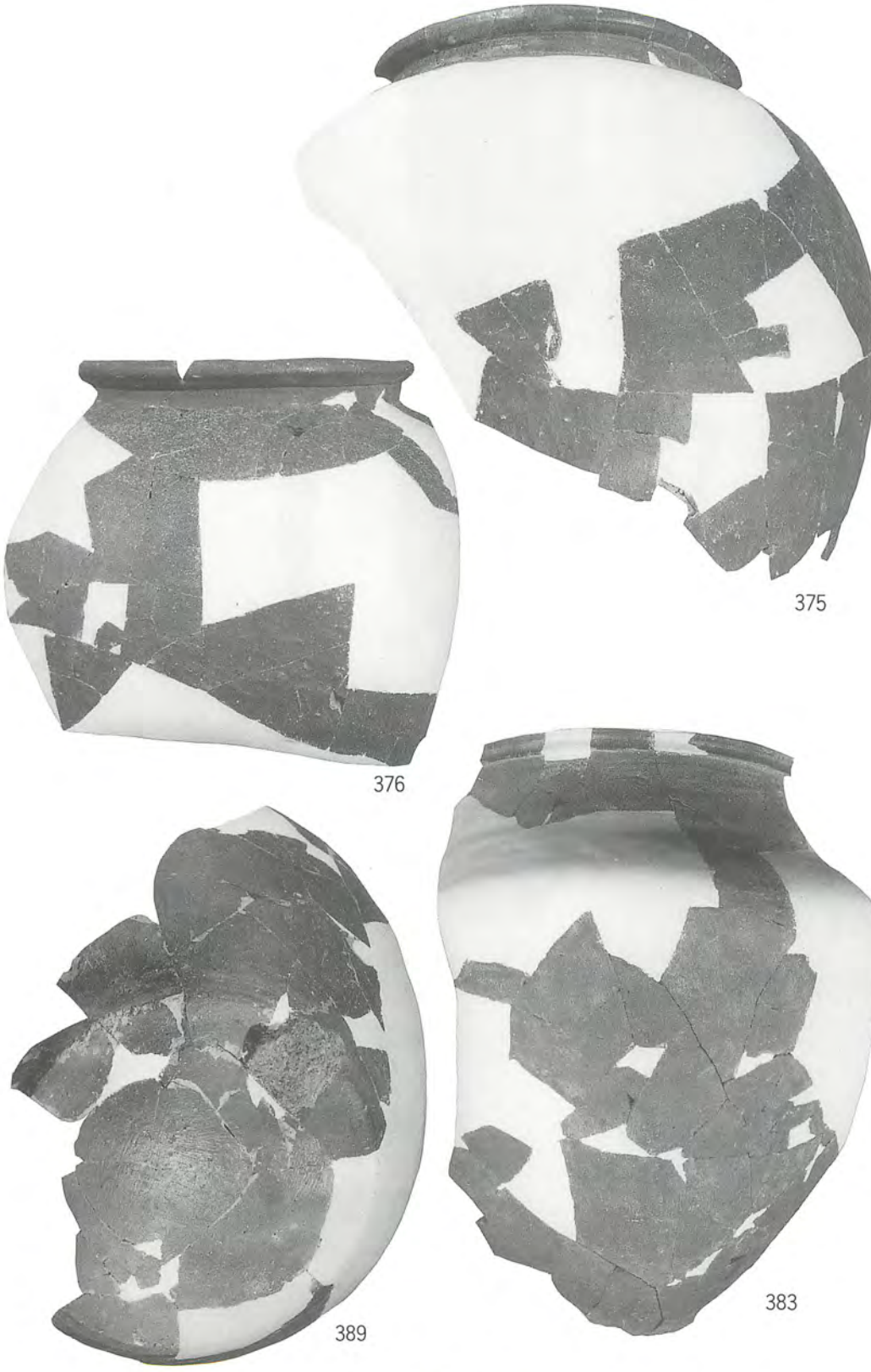
359

352

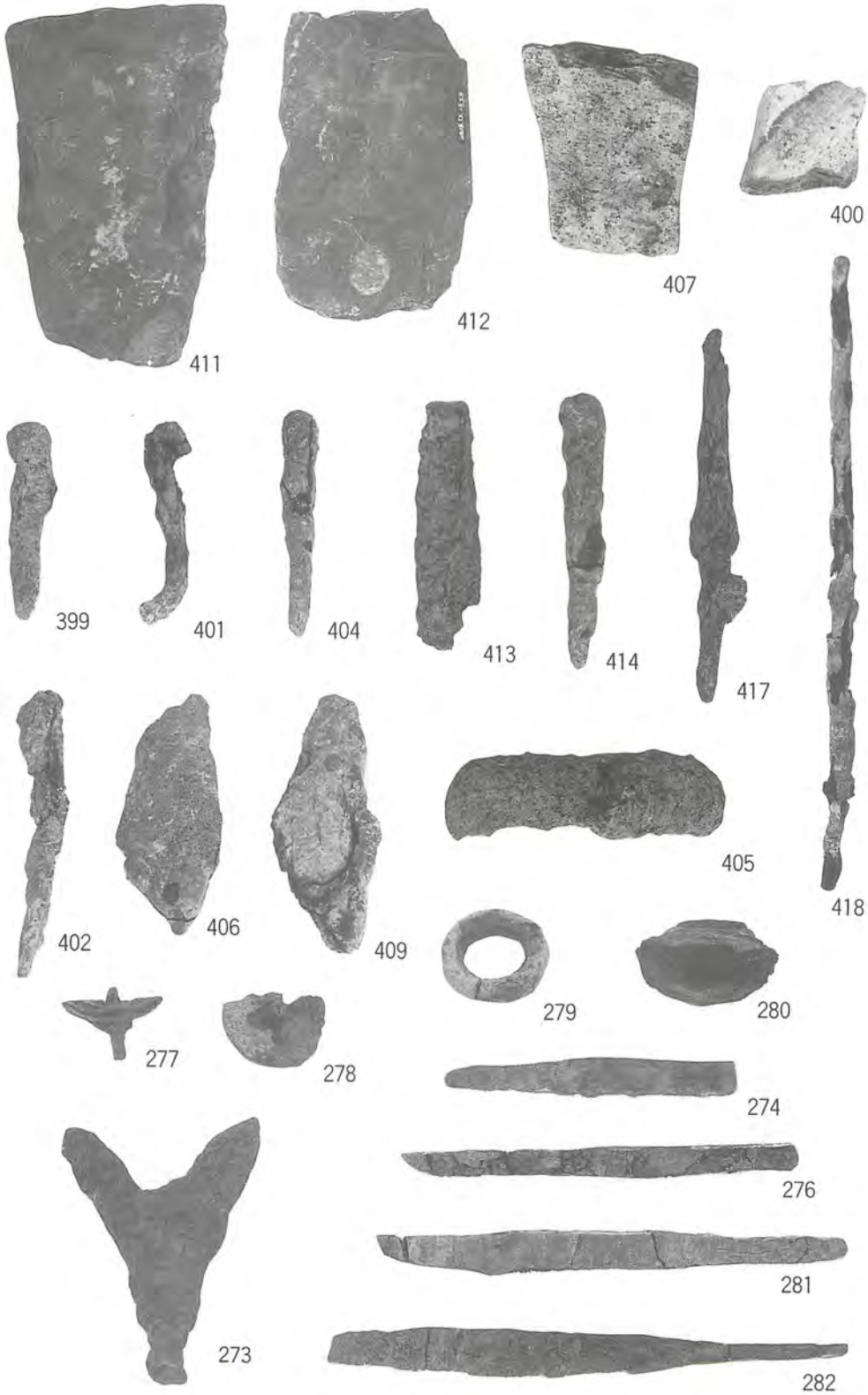
373

381

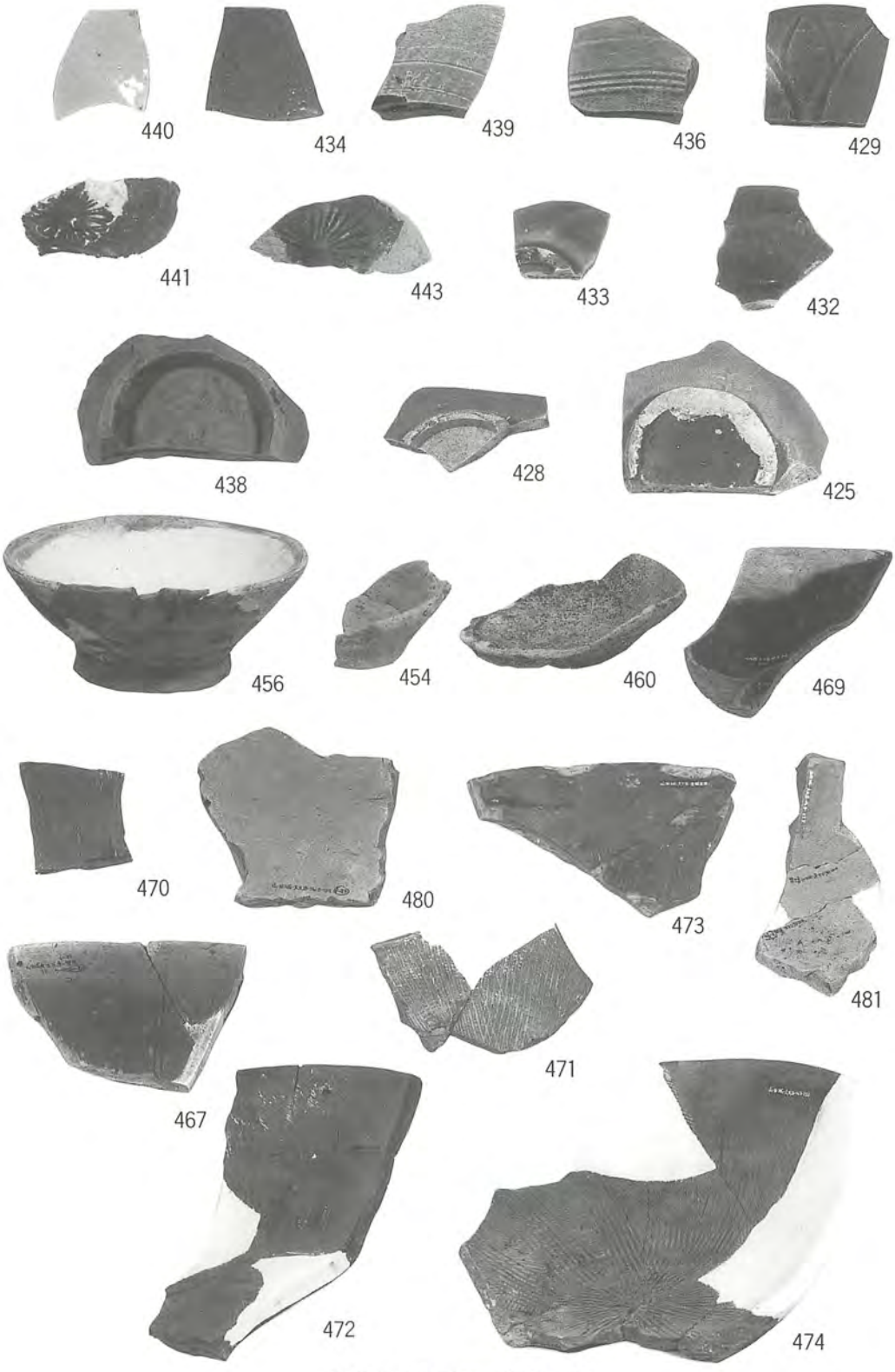
第Ⅱ期整地層出土遺物 (4)




第Ⅱ期整地層出土遺物 (5)

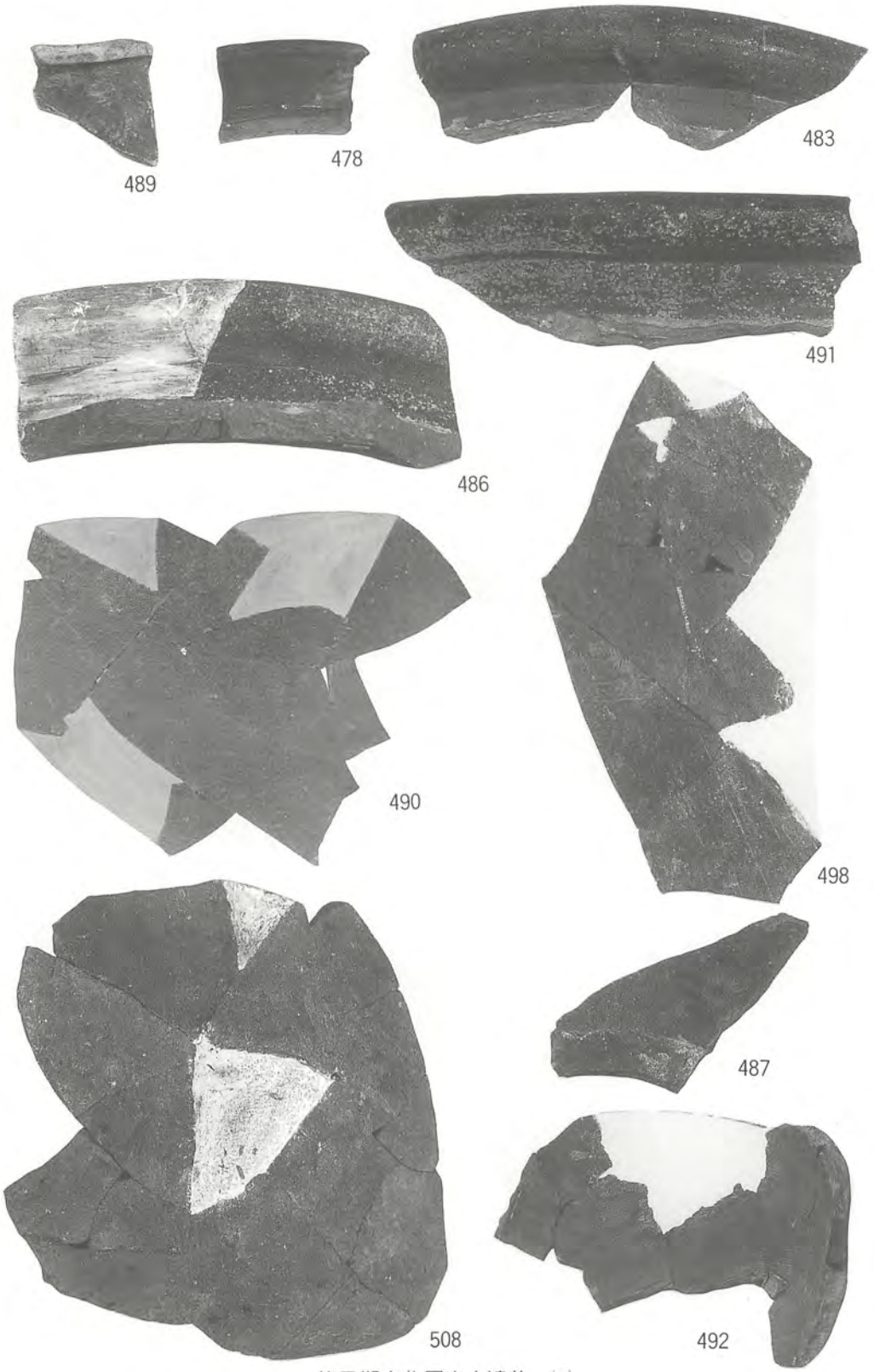



第Ⅱ期整地層出土遺物 (6)

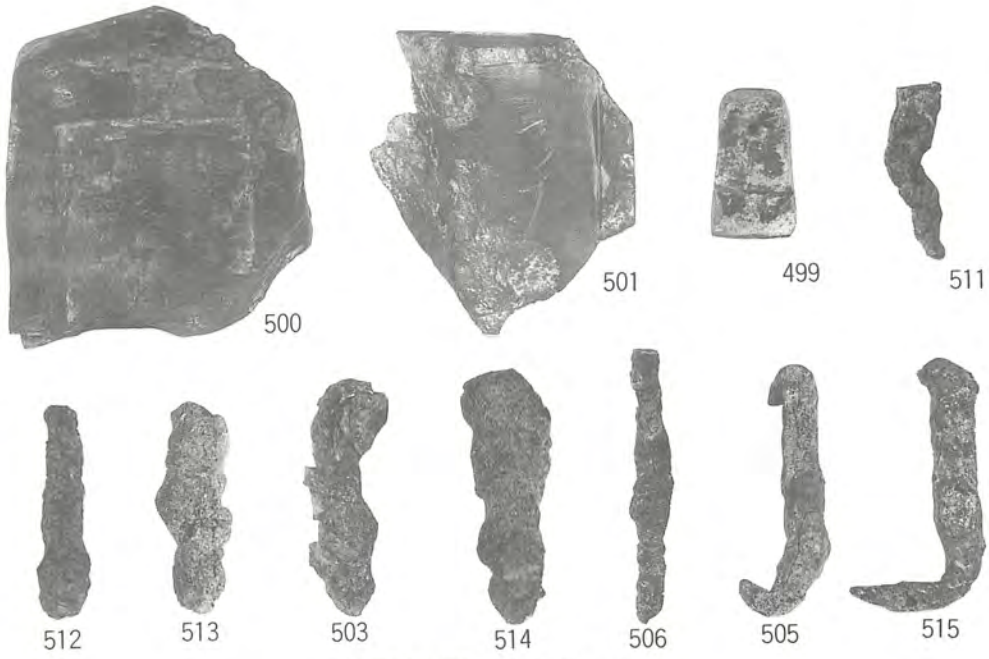



第Ⅲ期文化層出土遺物 (1)

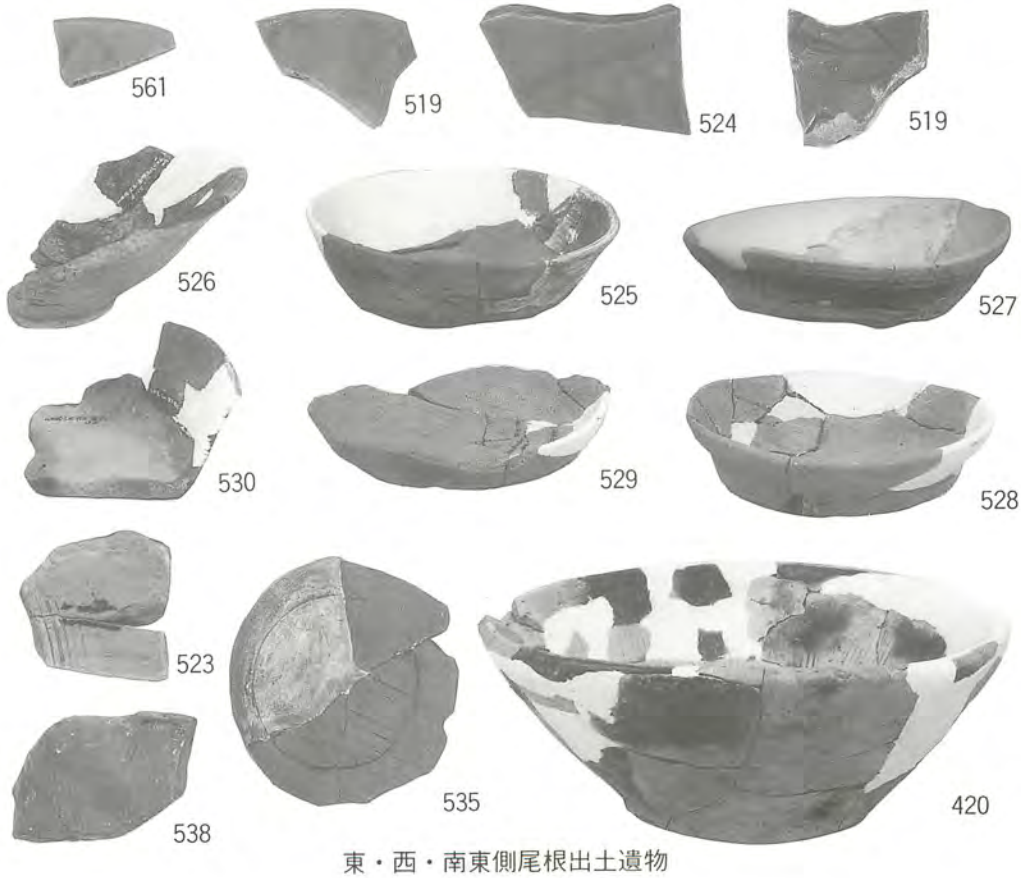
図版26




第Ⅲ期文化層出土遺物 (2)




第Ⅲ期生活面出土遺物 (3)

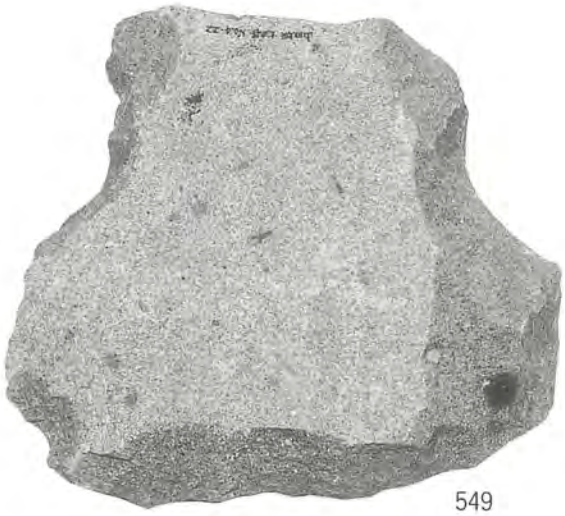



東・西・南東側尾根出土遺物

541

547

548


549

550

551 552 553 554

555 556 557

縄文時代遺物

# あ と が き

山田城跡の発掘調査と報告書作成に際しては、日本道路公団福岡建設局人吉工事事務所から多大な御配慮を賜りました。特に、村田文敏・古賀文雄・豊永盛喜・岩永一男・石丸　裕の各氏に対し、心から厚く御礼を申し上げます。

さらに、調査に従事した地元・作業員の方々や、山田城跡調査スタッフの諸氏（黒田・菖蒲・松舟・永田・石工・溝口・宮崎）及び同僚の西住欣一郎文化財保護主事に深く感謝の意を表します。

（大　田）

熊本県文化財調査報告　第102集

山　田　城　跡

平成元年３年31日

編集
発行　熊　本　県　教　育　委　員　会

〒860 熊本市水前寺６丁目18－１

☎熊本(096)383－1111

文化課文化財調査係㈹6715

印刷　中　央　印　刷　紙　工　株　式　会　社

〒860 熊本市田崎２丁目５－38

☎熊本(096)354－4191

FAX 096－354－4165

63 教委 教文
② 003

この電子書籍は、熊本県文化財調査報告第 102 集を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会と図書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名：山田城跡
発行：熊本県教育委員会
〒862-8609　熊本市中央区水前寺 6 丁目 18 番 1 号
電話：　096-383-1111
URL：http://www.pref.kumamoto.jp/
電子書籍制作日：2016 年 3 月 31 日